保加町遺跡

福岡県柳川市保加町所在遺跡の調査

福岡県文化財調査報告書第 270 集

2019

九州歴史資料館

序

九州歴史資料館では、沖端川激甚災害対策特別緊急事業に係る埋蔵文化財の発掘調査を、平成 26 年度から 29 年度にかけて実施しました。本報告書は、福岡県柳川市保加町に所在する保加町遺跡１～３次調査の記録です。

保加町遺跡は近世柳川城下町遺跡の北端部にあたり、間口の狭い建物跡や溝跡が街道に垂直に並んで発見され、陶磁器や銅銭など当時の暮らしぶりを物語る遺物が出土しました。柳川城下町は江戸時代の絵地図が多く残っており、現在の土地区画が江戸時代から大きくに変わっていないことがわかっていますが、保加町地区の絵地図は残っておらず、今回の調査成果は当地区の知られていない歴史の一端を解明する貴重な資料となりました。

本報告書が教育、学術研究とともに、文化財愛護思想の普及・定着の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査･報告書の作成にいたる間には、関係諸機関や地元をはじめ多くの方々にご協力・ご助言をいただきました。ここに、深く感謝いたします。

平成３１年３月３１日

九州歴史資料館

館長　杉光　誠

例　言

１．本書は、沖端川激甚災害対策特別緊急事業に伴って平成 26 年度から 29 年度にかけて発掘調査を実施した、福岡県柳川市保加町に所在する保加町遺跡 13 次調査の記録である。なお、Ⅳ－ 1･3 では、同事業で発掘調査を実施し、昨年度報告書を刊行した上町遺跡の動物遺体・植物遺体の分析結果を併せて掲載する。

２．発掘調査・整理報告は福岡県県土整備部河川開発課の執行委任を受けて、九州歴史資料館が実施した。

３．本書に掲載した遺構写真の撮影は、秦憲二・坂本真一が行い、遺物写真は北岡伸一が行った。空中写真の撮影は東亜航技研株式会社に委託し、ラジコンヘリコプターによる撮影を行った。

４．本書に掲載した遺構図の作成は秦・坂本と発掘作業員が行い、遺物実測図は木製品については秦・坂本のほか坂元雄紀・梶佐古幸謙が、その他は秦・坂本と整理作業員が作成した。

５．出土遺物の整理作業は九州歴史資料館において、小川泰樹の指導の下に実施した。

６．出土遺物及び図面・写真等の記録類は、九州歴史資料館において保管する。

７．本書に使用した第２図は、国土交通省国土地理院発行の１/25,000、「羽犬塚」「柳川」を改変したものである。本書で使用した座標は世界測地系により、方位は座標北である。

８．本書は、Ⅲ－４を坂本真一が、Ⅳ－１･４を株式会社パレオ・ラボが、Ⅳ－２をパリノ・サーヴェイ株式会社が、Ⅳ－３を古環境研究所が、その他の執筆と編集は秦が行った。

目　次

Ⅰ　はじめに……1
　1　調査に至る経緯……1
　2　調査の経過……1
　3　調査・整理の組織……2
Ⅱ　位置と環境……3
　1　地理的環境……3
　2　歴史的環境……3
Ⅲ　調査の内容……7
　1　遺跡の概要……7
　2　１次調査の遺構と遺物……8
　3　２次調査１～５区の遺構と遺物……32
　4　２次調査６～10 区の遺構と遺物……93
　5　３次調査の遺構と遺物……140
Ⅳ　自然科学系の分析……173
　1　上町遺跡と保加町遺跡から出土した動物遺体……173
　2　保加町遺跡出土の骨・貝類……179
　3　上町・保加町遺跡出土木製品樹種同定報告……183
　4　保加町遺跡から出土した大型植物遺体……195
Ⅴ　まとめ……197

図版目次

図版１　１　保加町全景(南上空から)　２　１次調査第１遺構面全景(南から)
　　３　同上1～3号礎石建物跡(東から)
図版２　１　１次調査4･5号礎石建物跡(南から)　２　同上１号礎石建物跡柱礎石１(南から)
　　３　同上１号土坑(北から)　４　同上２号土坑(西から)
　　５　同上３号土坑(南から)　６　同上１号溝状遺構(東から)
図版３　１　１次調査１号溝状遺構西端部(北東から)　２　同上西壁土層(東から)
　　３　同上２号溝状遺構東壁土層(西から)　４　同上１号埋甕(上面から)
　　５　保加町遺跡１次調査出土遺物１
図版４　保加町遺跡１次調査出土遺物２
図版５　保加町遺跡１次調査出土遺物３
図版６　保加町遺跡１次調査出土遺物４
図版７　１　２次調査１区全景(北から)　２　同上1･3号礎石建物跡、１号掘立柱建物跡(東から)
　　３　同上第２遺構面全景(北から)
図版８　１　２次調査１区１号溝状遺構(東から)　２　同左南端トレンチ(東から)
　　３　同上２号掘立柱建物跡(東から)　４　同上2･3号溝状遺構土層(東から)
図版９　保加町遺跡２次調査1区出土遺物１
図版10　保加町遺跡２次調査1区出土遺物2
図版11　１　２次調査２区第１遺構面(上空から)　２　同上1･2号礎石建物跡、1～3号土坑(上空から)
　　３　同上１号礎石建物跡北側・２号溝状遺構(東から)
図版12　１　２次調査２区１号溝状遺構(東から)　２　同上土層断面(東から)
　　３　同上礎石５下出土銅銭(上空から)
図版13　保加町遺跡２次調査２区出土遺物１
図版14　保加町遺跡２次調査２区出土遺物２
図版15　保加町遺跡２次調査２区出土遺物３
図版16　保加町遺跡２次調査２区出土遺物４
図版17　１　２次調査３区第２遺構面･１号礎石建物跡(北から)　２　同上第２遺構面、1号柵跡(北から)
　　３　同上１号土坑遺物出土状態(西から)
図版18　１　２次調査３区２号土坑遺物出土状態(北西から)　２　同上３号土坑(西から)
　　３　同左４号土坑(西から)　４　同上７号土坑遺物出土状態(南から)
　　５　同上５号土坑(南東から)　６　同上６号土坑遺物出土状態(南西から)
　　７　同上７号土坑掘り上がり状況(南から)
図版19　１　２次調査３区第２遺構面(北から)　２　同上２号杭列(東から)
　　３　同上東壁土層(西から)　４　同上南壁土層(北から)
図版20　保加町遺跡２次調査３区出土遺物１
図版21　保加町遺跡２次調査３区出土遺物２
図版22　保加町遺跡２次調査３区出土遺物３

図版23　1　２次調査４区第１遺構面全景・１号掘立柱建物跡（北から）
　　2　同上第１遺構整地面（北東から）
　　3　同上第２遺構面（南から）
図版24　1　２次調査４区１号土坑（西から）　2　同左南端東壁土層（西から）
　　3　同上北壁東部土層断面（南から）
図版25　保加町遺跡２次調査４区出土遺物１
図版26　1　２次調査５区第１遺構面（南から）　2　同上第２遺構面（北から）
　　3　同上第３遺構面（北から）
図版27　1　２次調査５区１号土坑遺構（東から）　2　同上２号溝状遺構（西から）
　　3　保加町遺跡２次調査５区出土遺物
図版28　1　６区①１面全景（東から）　2　６区①２面全景（東から）
　　3　６区①３面全景（北から）　4　６区①４面全景（東から）
図版29　1　６区②１面全景（東から）　2　６区②２面全景（東から）
　　3　６区②３面全景（東から）　4　６区②４面全景（東から）
図版30　1　７区①１面全景（北から）　2　７区①２面全景（北から）
　　3　７区①４面全景（北から）　4　７区②１面全景（南から）
図版31　1　７区②２面全景（南から）　2　７区②４面全景（南から）
　　3　７区③１面全景（東から）　4　７区③２面全景（北から）
図版32　1　７区③４面全景（東から）　2　７区④土層（東から）
　　3　７区④２面全景（南から）　2　７区④４面全景（南から）
図版33　1　８区１面全景（南から）　2　８区２面全景（南から）
　　3　８区３面全景（南から）
図版34　1　８区４面全景（南から）　2　８区１面石列検出状況（北西から）
　　3　８区１面遺物出土状況（南から）　4　８区３面14号溝（南から）
図版35　1　９区①１面全景（北から）　2　９区①２面全景（北から）
　　3　９区①３面全景（北から）　4　９区①４面全景（北から）
図版36　1　９区②１面全景（東から）　2　９区②１面２号石列検出状況（東から）
　　3　９区②２面全景（東から）　4　９区②２面３号石列検出状況（南東から）
　　5　９区②３面全景（東から）
図版37　1　９区②４面全景（東から）　2　９区②１面13号溝（東から）
　　3　９区②３面９号溝（東から）　4　９区②西壁土層（東から）
　　5　９区③１面全景（北から）
図版38　1　９区③２面全景（北から）　2　９区③３面全景（北から）
　　3　９区③４面全景（北から）
図版39　1　10区北１面全景（北から）　2　10区北２面全景（北から）
　　3　10区北３面全景（北から）　4　10区北４面全景（北から）
図版40　1　10区南１面全景（南から）　2　10区南２面全景（北から）
　　3　10区南３面全景（北から）　4　７区②２面８号柵列跡（南から）

5　６区②１面３・４号柵列跡(東から)
図版41　1　７区３面８号柵列跡(南から)　2(左)　６区南２面９号柵列跡(西から)
3(右)　６区南２面10号建物跡(西から)　4　６区１面３号溝(南から)
5　９区３面12号溝(北から)
図版42　1　７区１面１号土坑(東から)　2　6区２面2号土坑(北から)
3　６区２面３号土坑(北から)　4　６区２面５号土坑(東から)
5　７区２面６・７号土坑(南から)　6　６区２面８号土坑(東から)
7　８区１面９号土坑(東から)　8　９区２面10号土坑(北から)
9　９区２面11号土坑(南から)
図版43　1　９区２面13号土坑･11号溝(西から)　2　９区２面14号土坑土層(西から)
3　９区２面15号土坑(西から)　4　10区２面16号土坑(東から)
5　10区３面17号土坑(南から)　6　10区２面石材検出(南から)
7　８区１面(南から)　8　９区２面甕(北から)
9　９区２面甕(北から)
図版44　２次調査６～10区出土遺物１
図版45　２次調査６～10区出土遺物２
図版46　２次調査６～10区出土遺物３
図版47　２次調査６～10区出土遺物４
図版48　２次調査６～10区石塔･石臼
図版49　２次調査６～10区砥石･銅製品
図版50　２次調査６～10区銅･鉄製品･銅銭
図版51　２次調査６～10区銅銭
図版52　木製品
図版53　1　保加町遺跡３次調査遠景(北上空から)　2　同上第１遺構面(南西から)
3　同上第２遺構面(北から)　4　同上第３遺構面(北から)
図版54　1　保加町遺跡３次調査１号礎石建物跡遠景(上空から)
2　同上1号礎石建物跡礎石７(西から)　3　同上１号礎石建物跡礎石９(西から)
4　同上1号礎石建物跡礎石10(北から)　5　同上２号礎石建物跡礎石６(西から)
図版55　1　保加町遺跡３次調査１号礎石土坑遺物出土状態(北から)
2　同上掘り上がり出土状態(西から)　3　同上４号土坑(西から)
図版56　1　保加町遺跡３次調査５号土坑土層断面(西から)　2　同上11号土坑(西から)
3　同上遺物出土状態(西から)　4　同上土層断面(西から)
図版57　1　保加町遺跡３次調査12号土坑(北から)　2　同上14･15号土坑(西から)
3　同上南端段落ち(西から)　4　同上南端段落ち土層(東から)
図版58　1　保加町遺跡３次調査２号溝状遺構(南東から)　2　同上遺物出土状態(南から)
3　同上３号溝状遺構遺物出土状態(西から)
4　同上２号溝状遺構土層断面(西から)　5　同上１号胞衣壺(北から)
6　同上２号胞衣壺(西から)　7　同上銅銭出土状態(東から)

8　同上埋設土器(南から)
図版59　1　保加町遺跡３次調査１号窯跡(東から)　2　同上遺物出土状態(東から)
3　保加町遺跡３次調査２号窯跡(東から)　4　同上土層断面(北東から)
5　同上1号カマド遺構(北から)　6　ピット32(西から)
7　保加町遺跡３次調査５～９号カマド遺構(北から)　8　同上(西から)
図版60　1　保加町遺跡３次調査ピット24(北から)　2　同左ピット28(西から)
3　同上中位包含層遺物出土状態(南東から)　4　同左(東から)
5　東壁土層(西から)　6　保加町遺跡３次調査出土遺物１
図版61　保加町遺跡３次調査出土遺物２
図版62　保加町遺跡３次調査出土遺物３
図版63　保加町遺跡３次調査出土遺物４
図版64　保加町遺跡３次調査出土遺物５

挿図目次

第１図　柳川市位置図……1
第２図　周辺遺跡分布図(1/50,000)……5
第３図　保加町遺跡調査範囲図(1/1,000)……6
第４図　保加町遺跡遺構全体図１(1/300)……6－7①
第５図　保加町遺跡遺構全体図２(1/300)……6－7②
第６図　保加町遺跡遺構全体図３(1/300)……6－7③
第７図　保加町遺跡遺構全体図４(1/300)……6－7④
第８図　１次調査西壁土層断面実測図(1/40)……7
第９図　１次調査１～５号礎石建物跡実測図(1/60)……8－9①
第10図　１次調査１・２号掘立柱建物跡実測図(1/60)……8－9②
第11図　１次調査検出遺構実測図(1/60)……9
第12図　１次調査１～３号土坑出土遺物実測図(６は1/2、他は1/3)……10
第13図　１次調査１号溝状遺構上面出土遺物実測図(6～8は1/2、他は1/3)……11
第14図　１次調査１号溝状遺構出土遺物実測図１(1/3)……12
第15図　１次調査１号溝状遺構出土遺物実測図２(2･3･5･6は1/4、他は1/3)……13
第16図　１次調査１号溝状遺構出土遺物実測図３(5･6は1/4、7～10は1/2、他は1/3)……14
第17図　１次調査1a号溝状遺構･裏込め出土遺物実測図(１は1/4、他は1/3)……15
第18図　１次調査1b号溝状遺構･1号溝状裏込め出土遺物実測図(1/3)……16
第19図　１次調査２号溝状遺構出土遺物実測図１(20は1/4、他は1/3)……17
第20図　１次調査２号溝状遺構出土遺物実測図２(1/3)……18
第21図　１次調査２号溝状遺構出土遺物実測図３(10･11は1/4、他は1/3)……19
第22図　１次調査２号溝状遺構出土遺物実測図４(8･9は1/4、他は1/3)……20
第23図　１次調査２号溝状遺構出土遺物実測図５(1/3)……21

第24図　１次調査２号溝状遺構出土遺物実測図６(11～15は1/2､16～19は1/4､他は1/3) …… 22
第25図　１次調査２b･３号溝状遺構出土遺物実測図(６･８･12は1/4､２･13は1/2､他は1/3) …… 23
第26図　１次調査４号溝状遺構･ピット出土遺物実測図(15･16は1/4､他は1/3) …… 24
第27図　１次調査ピット出土遺物実測図(９～11は1/2､他は1/3) …… 25
第28図　１次調査上位包含層･貝混黒色土整地層出土遺物実測図(７･12～14は1/2､他は1/３) …… 26
第29図　１次調査中位包含層出土遺物実測図(17･18は1/2､他は1/3)…… 27
第30図　１次調査出土銅銭実測図(1/2) …… 28
第31図　１次調査出土金属･石･鹿角製品(19･22･24は1/4､他は1/3) …… 29
第32図　１次調査出土石臼実測図(1/6) …… 30
第33図　２次調査１区西壁土層断面実測図(1/40)…… 31
第34図　２次調査１区１～３号礎石建物跡実測図(1/60)…… 32
第35図　２次調査１区礎石出土遺物実測図(７は1/2､２･３･８は1/4､他は1/3) …… 33
第36図　２次調査１区１号掘立柱建物跡、１･２号溝状遺構実測図(1/60)…… 34
第37図　２次調査１区２号掘立柱建物跡実測図(1/60) …… 35
第38図　２次調査１区落ち込み出土遺物実測図(14･15は1/2､16･17は1/4､他は1/3) …… 36
第39図　２次調査１区１･２号溝状遺構出土遺物実測図(６～９･13は1/2､14･16･17は1/4､他は1/3)
…… 37
第40図　２次調査１区２号溝状遺構出土遺物実測図(１･２は1/4､13は1/2､他は1/3)…… 38
第41図　２次調査１区２号溝状遺構出土遺物実測図(６は1/4､他は1/3) …… 39
第42図　２次調査１区上位包含層出土遺物実測図(５～12は1/2､13は1/4､他は1/3) …… 40
第43図　２次調査１区第1遺構面整地層･第1遺構面下包含層
･第２遺構面出土遺物実測図(９は1/2､２は1/4､他は1/3)…… 41
第44図　２次調査１区出土銅銭拓影(1/2) …… 43
第45図　２次調査１区出土金属･石･ガラス製品(７･26～31は1/2､他は1/3) …… 44
第46図　２次調査１区出土木製品(1/4) ……44
第47図　２次調査２区西壁土層断面実測図(1/40)…… 45
第48図　２次調査２区１号礎石建物跡実測図(1/60)…… 46
第49図　２次調査２区２･３号礎石建物跡、２号溝状遺構実測図(1/60)･３号礎石建物柱５(1/15) 47
第50図　２次調査２区検出遺構実測図１(４～６は1/30､他は1/60) …… 48
第51図　２次調査２区検出遺構実測図２(３は1/15､他は1/60)…… 49
第52図　２次調査２区礎石･土坑･胞衣壺出土遺物実測図(９は1/2､14･15は1/4､他は1/3) …… 50
第53図　２次調査２区敷石遺構･１号溝状遺構出土遺物
実測図(５･11･12は1/2､1･13は1/4､他は1/3) …… 51
第54図　２次調査２区１号溝状遺構出土遺物実測図(２～４･15は1/3､16は1/4､他は1/2) …… 52
第55図　２次調査２区１号溝状遺構裏込め、１･２号溝状遺構出土遺物
実測図(７～14･21は1/2､他は1/3)…… 53
第56図　２次調査２区２号溝状遺構出土遺物実測図(７･８は1/2､他は1/3)…… 54
第57図　２次調査２区ピット出土遺物実測図(９･10は1/4､12～15は1/2､他は1/3)…… 55

第58図　２次調査２区上位包含層・第１遺構面整地層・第２遺構面上・北壁拡張部出土遺物
実測図（２・３・11は1/2、12は1/4、他は1/3）…… 56
第59図　２次調査２区出土銅銭拓影１（1/2）…… 57
第60図　２次調査２区出土銅銭拓影２（1/2）…… 58
第61図　２次調査２区出土金属・石製品実測図（13・14・17・27は1/4、10・25・26は1/2、他は1/3）…59
第62図　２次調査２区出土石臼実測図（1/6）…… 60
第63図　２次調査２区出土木製品実測図（1/8）…… 60
第64図　２次調査３区土層断面実測図（1/40）…… 61
第65図　２次調査３区１号礎石建物跡実測図（1/60）…… 62
第66図　２次調査３区検出遺構実測図（５は1/15、他は1/60）…… 63
第67図　２次調査３区礎石出土遺物実測図１（１・５・６は1/4、他は1/3）…… 64
第68図　２次調査３区１号土坑出土遺物実測図１（７・８は1/4、他は1/3）…… 65
第69図　２次調査３区１号土坑出土遺物実測図２（７は1/4、他は1/3）…… 66
第70図　２次調査３区２号土坑出土遺物実測図（４・６・７は1/4、他は1/3）…… 67
第71図　２次調査３区３号土坑出土遺物実測図（５・６は1/4、他は1/3）…… 68
第72図　２次調査３区４～６号土坑出土遺物実測図（10は1/2、３・12は1/4、他は1/3）…… 69
第73図　２次調査３区７号土坑出土遺物実測図（11は1/4、他は1/3）…… 70
第74図　２次調査３区１号溝状遺構出土遺物実測図１（４・５・10～13は1/4、他は1/3）…… 71
第75図　２次調査３区１号溝状遺構出土遺物実測図２（９・10は1/2、他は1/3）…… 72
第76図　２次調査３区２号溝状遺構出土遺物実測図（１は1/4、他は1/3）…… 73
第77図　２次調査３区第１遺構面トレンチ暗黒色粘土層出土遺物実測図（５は1/2、他は1/3）…… 74
第78図　２次調査３区下位包含層出土遺物実測図３（1/3）…… 75
第79図　２次調査３区下位黄色粘土層出土遺物実測図１（1/3）…… 76
第80図　２次調査３区出土銅銭拓影（1/2）…… 77
第81図　２次調査３区出土金属・石・ガラス製品実測図（17・18・24～29・30は1/2、他は1/3）…… 78
第82図　２次調査３区出土石臼実測図（1/6）…… 79
第83図　２次調査３区出土木製品実測図１（1/8）…… 80
第84図　２次調査３区出土木製品実測図２（1/8）…… 81
第85図　２次調査４区北壁土層断面実測図（1/40）…… 81
第86図　２次調査４区検出遺構実測図（1/60）…… 82
第87図　２次調査４区礎石・土坑出土遺物実測図（1/3）…… 83
第88図　２次調査４区１号溝状遺構出土遺物実測図（６は1/4、他は1/3）…… 84
第89図　２次調査４区１号溝状遺構・ピット出土・出土地不明遺物
実測図（２・５・６は1/2、１・７は1/4、他は1/3）…… 85
第90図　２次調査４区１号溝状遺構出土遺物実測図（１は1/4、17は1/2、他は1/3）…… 86
第91図　２次調査４区出土金属・石製品実測図（19～22は1/3、23は1/6、その他は1/2）…… 87
第92図　２次調査４区２号柵跡出土木製品実測図（1/8）…… 88
第93図　２次調査５区東壁土層断面実測図（1/40）…… 89

第94図　２次調査５区検出遺構実測図(1/60)…… 89
第95図　２次調査５区出土遺物実測図１(３･13･14は1/2、他は1/3) …… 90
第96図　２次調査５区出土遺物実測図２(1/3) …… 91
第97図　２次調査５区出土金属･石･鹿角製品実測図(７･26～31は1/2、他は1/3)…… 92
第98図　２次調査５区出土木製品実測図(1/8) …… 92
第99図　２次調査７区１号建物跡･８区２号建物跡実測図(1/50) …… 94
第100図　２次調査９区３～５号建物跡実測図(1/50) …… 95
第101図　２次調査10区６・７号建物跡実測図(1/50)…… 96
第102図　２次調査７区８号柵列跡･６区９･10号柵列跡実測図(1/50) …… 97
第103図　２次調査６～10区建物跡･P42出土遺物実測図(1/３) …… 98
第104図　２次調査９区11号柵列跡、８区１号･９区２・３号石列、９区９･13号･８区14号溝
実測図(1/50) …… 98－99
第105図　２次調査６～10区石列下出土遺物実測図(1/3)…… 99
第106図　２次調査６～10区１～６号土坑実測図(1/30) …… 101
第107図　２次調査６～10区７～11･13号土坑実測図(1/30)…… 102
第108図　２次調査６～10区３～６・９～12号土坑出土遺物実測図　(1/3) …… 103
第109図　２次調査６～10区14～17号土坑実測図(1/30) …… 105
第110図　２次調査６～10区13･14･16･17号土坑出土遺物実測図(1/3) …… 107
第111図　２次調査６～10区１～４・６～12･14号溝断面実測図(1/30) …… 108
第112図　２次調査６～10区１号溝出土遺物実測図(1/3･1/4)…… 109
第113図　２次調査６～10区１・２号溝出土遺物実測図(1/3) …… 111
第114図　２次調査６～10区３号溝出土遺物実測図１(1/3)…… 112
第115図　２次調査６～10区３号溝出土遺物実測図２(1/3)…… 113
第116図　２次調査６～10区３号溝出土遺物実測図３(1/3)…… 114
第117図　２次調査６～10区４・５号溝出土遺物実測図(1/3) …… 115
第118図　２次調査６～10区８・９号溝出土遺物実測図(1/3) …… 117
第119図　２次調査６～10区11･12号溝出土遺物実測図(1/3) …… 118
第120図　２次調査６～10区12号溝出土遺物実測図２(1/3)…… 119
第121図　２次調査６～10区12号溝出土遺物実測図３(1/3)…… 120
第122図　２次調査６～10区ピット出土遺物実測図(1/3)…… 121
第123図　２次調査６～10区遺構検出出土実測図(１・２は1/4、３～５は1/3) …… 123
第124図　２次調査６～10区瓦実測図１(６は1/4、他は1/3)…… 124
第125図　２次調査６～10区瓦実測図２(1/4)…… 125
第126図　２次調査６～10区磁器製品･土製品実測図(1/2) …… 126
第127図　２次調査６～10区土製品実測図２(1/2)…… 127
第128図　２次調査６～10区土製品実測図３(1/2)…… 128
第129図　２次調査６～10区石塔実測図(1/6)…… 129
第130図　２次調査６～10区石臼実測図１(1/3)…… 130

第131図　２次調査６～10区石臼実測図２(1/3)…… 131
第132図　２次調査６～10区石製品実測図１(1/2)…… 132
第133図　２次調査６～10区石製品実測図２(1/2)…… 133
第134図　２次調査６～10区銅製品実測図１(1/2)…… 134
第135図　２次調査６～10区銅製品２・鉄製品実測図２(1/2) …… 135
第136図　２次調査６～10区銅銭実測図(1/2)…… 137
第137図　２次調査６～10区木製品実測図(９は1/4、他は1/3)…… 138
第138図　３次調査１・２号礎石建物跡、１・４号土坑実測図(1/60)…… 141
第139図　３次調査礎石出土遺物実測図(４は1/4、他は1/3)…… 142
第140図　３次調査１号土坑出土遺物実測図１(３・８～13は1/4、他は1/3) …… 144
第141図　３次調査１号土坑出土遺物実測図２(1/4)…… 145
第142図　３次調査４号土坑出土遺物実測図１(２・９・10は1/4、他は1/3)…… 146
第143図　３次調査４号土坑出土遺物実測図２(12～15は1/2、他は1/3)…… 147
第144図　３次調査土坑実測図(1/60) …… 148
第145図　３次調査５号土坑出土遺物実測図(１は1/4、他は1/3)…… 149
第146図　３次調査６号土坑出土遺物実測図(７は1/4、他は1/3)…… 150
第147図　３次調査６・７号土坑出土遺物実測図(６は1/2、他は1/3) …… 152
第148図　３次調査９～13号土坑出土遺物実測図(９・14は1/4、他は1/3) …… 153
第149図　３次調査瓦溜まり・カマド・窯跡・落ち込み出土遺物
実測図(２～４・11は1/4、12・14は1/2、他は1/3) …… 155
第150図　３次調査カマド実測図(1/30) …… 156
第151図　３次調査胞衣壺・埋設土器・１号溝状遺構出土遺物
実測図(６・10は1/4、11～14は1/2、他は1/3) …… 157
第152図　３次調査２号溝状遺構出土遺物実測図(12は1/2、他は1/3)…… 158
第153図　３次調査２号溝状遺構出土遺物実測図１(12は1/2、他は1/3)…… 159
第154図　３次調査３号溝状遺構出土遺物実測図２(5・6・8は1/2、9～11は1/4、他は1/3) …… 160
第155図　３次調査その他の遺構実測図(３・４・５は1/15、その他は1/30)…… 161
第156図　３次調査ピット出土遺物実測図１(８・９は1/4、15～17は1/2、他は1/3) …… 162
第157図　３次調査東・西・南壁土層実測図(1/60) …… 163
第158図　３次調査東壁土層・整地層出土遺物実測図(７・17・18は1/4、他は1/3) …… 165
第159図　３次調査整地層出土遺物実測図(24・25は1/4、19～23は1/2、他は1/3) …… 166
第160図　３次調査出土銅銭拓影１(1/2)…… 167
第161図　３次調査出土銅銭拓影２(1/2)…… 168
第162図　３次調査出土石・鹿角・ガラス製品実測図(7・26～31は1/2、他は1/3)…… 169
第163図　３次調査出土金属製品実測図(７・26～31は1/2、他は1/3) …… 170
第164図　保加町関係古絵図 …… 198
第165図　上町遺跡・保加町遺跡出土の模鋳銭の可能性のある寛永通宝…… 199
写　　真　現在の井出橋付近 …… 139

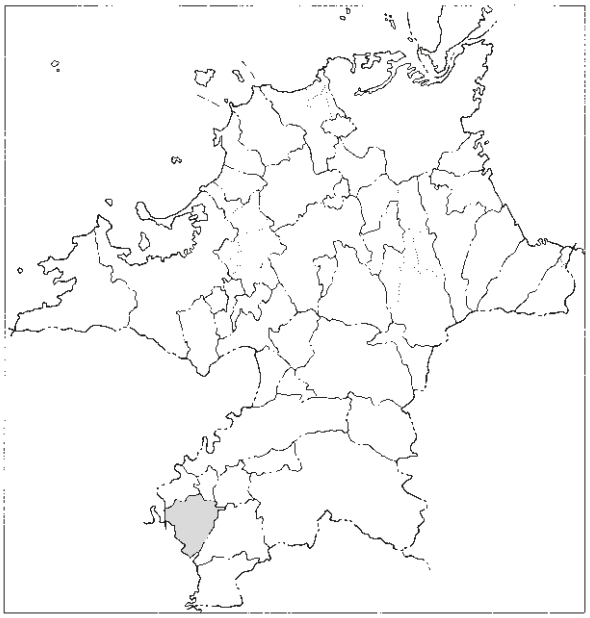
Ⅰ　はじめに

1　調査に至る経緯

平成24年7月14日の九州北部豪雨災害により、福岡県矢部川水系では甚大な浸水被害が発生した。柳川市では沖端川の堤防が決壊し、中山地区などに浸水被害を被った。この災害に当たり、平成24年11月27日に国土交通から河川激甚災害対策特別緊急事業の採択を受け、福岡県県土整備部河川開発課は、平成24年度から概ね5年間で事業費90億円をかけて集中的に河道の掘削、築堤などの河川工事を行う沖端川激甚災害対策特別緊急事業を計画した。事業を実施する南筑後県土整備事務所柳川支所から平成26年2月4日に柳川市教育委員会に埋蔵文化財の照会がなされ、事業地は近世柳川城下町遺跡内であったことから、平成26年5月柳川市教育委員会が確認調査を実施した。その結果、出の橋架け替え事業地内の上町遺跡と保加町遺跡の包蔵地に埋蔵文化財が残っていることが確認され、本調査が必要となった。工期が短く、柳川市教育委員会が業務繁多であったため、同年7月1日に柳川市教育委員会と福岡県文化財保護課が協議を持ち、上町遺跡の半分と保加町遺跡は九州歴史資料館が、残りを柳川市教育委員会が担当することになった。その後、南筑後県土整備事務所の執行委任を受け、工事工程や用地にかかる家屋の建て替えに配慮して調査行うことを確認した。

2　調査の経過

調査期間が長期にわたることが予測されたため、一部でも着手可能な部分から実施して欲しいという要望から、最も北側の50－1番地を平成26年12月15日に着手した。試掘で3面の遺構面があることがわかっていたが、礎石や石組溝が残っていたことは想定外で、年内で終了する予定だったが調査期間が延び、平成27年1月7日に終了した。2次調査は新年度の契約が整った平成27年4月15日から実施し、上町遺跡と併行して実施することになった。用地取得だけでなく、立ち退いた家屋の建て替えと、代替駐車場の確保のため、小刻みに調査区を変えることが余儀なくされた。そのため、調査効率は悪く、狭小な調査区であったため、遺構の把握も困難だった。上町遺跡の調査が終了したので、9月30日に秦が1～5区まで調査したところで、残りの調査を坂本が引き継ぎ、秦は伝習館高校の校舎建て替え事業に移った。橋の付け替え工事のための仮橋工事の施工までに、全面調査が終わらないことが明らかになったため、協議を行い、10区の東の1区画だけは、仮設道路撤去後に調査することにし、6～10区までの調査を平成28年2月3日に終了した。



第1図　柳川市の位置図

3次調査は、橋梁建て替えが終了し、仮設道路が撤去された平成29年10月6日に着手した。隣接する歩道設置工事と併行して調査を行い、12月

６日に撤収した。

調査面積は１次調査が 80㎡、２次調査 1,500㎡、３次調査 70㎡で、計 1,650㎡となった。

３　調査・整理の組織

平成 26・27・29（2014・2015・2017）年度の調査および平成 29・30（2017・2018）年度の報告に関わる関係者は次のとおりである。なお、発掘調査に当たっては、地元の方々、発掘調査に参加された方々、柳川市教教育委員会の関係者の皆様より御協力を賜った。記して感謝いたします。

	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 29 年度	平成 30 年度
九州歴史資料館	（発掘調査）	（発掘調査）	（発掘調査）	（整理報告）
総括				
館長	杉光　誠	杉光　誠	杉光　誠	杉光　誠
副館長	伊崎俊秋	伊崎俊秋	飛野博文	東　　良
参事（文化財調査室長）	飛野博文	飛野博文		
文化財調査室長		吉村靖徳	吉村靖徳	吉村靖徳 （企画主幹）
文化財調査室長補佐	吉村靖徳 （企画主幹）		伊崎俊秋	伊崎俊秋
庶務				
総務室長	塩塚孝憲	塩塚孝憲	田嶋朋子	
総務班長	山崎　彰	中村満喜子	中村満喜子	中村満喜子
事務主査	南里成子	宮崎奈巳	林田朋子	前原俊史
		西村知子		林田朋子
主任主事			原野貴生	原野貴生
			秦　健太	
主事		秦　健太		具志堅靖知
調査				
技術主査	秦　憲二	秦　憲二		
		坂本真一		
整理報告				
参事補佐（文化財調査班長）			秦　憲二	
参事補佐（広報普及班長）				秦　憲二
参事補佐			小川泰樹	小川泰樹
教育庁教育総務部文化財保護課				
技術主査				坂本真一

Ⅱ　位置と環境

１　地理的環境

筑後川と矢部川が有明海に注ぐ筑後平野南西部に位置する柳川市は柳川藩 11 万石の城下町であり、掘割が網目状に走る水郷都市である。現在の柳川市は、平成 17(2005) 年の平成の大合併で、旧柳川市と大和町・三橋町が合併しており、人口約 75,000 人、面積 76.9 平方キロメートルの県南部を代表する地方都市であり、筑後平野南西部の有明海沿岸に位置し、西を筑後川、東を矢部川に挟まれた三角州に立地する。沖積低地を構成するのは海成層である有明粘土層と非海成層の蓮池層である。市域の標高は１～６ｍ程度の平坦な低平地で、網目状に配置された掘割を伴う水田地帯が広がり、独特の景観を見せている。平成 27 年には「水郷柳河」として国の名勝に指定された。また、有明海は干満差が激しいため、国内有数の干潟が広がり、市域南部の沿岸部は鱗上に干拓地が展開している。

２　歴史的環境

柳川市域の遺跡は現在のところ、弥生時代中期初頭から確認されており、東蒲池蓮池遺跡（註１）で中期初頭から後半の遺跡が発見され、徳益八枝遺跡（註２）で弥生時代中期前半の遺跡が見つかっている。中期後半では磯鳥フケ遺跡（註３）、後期の蒲船津江頭遺跡（註４）が調査されており、礎板をもつ掘立柱建物跡が多数確認されている。また、東蒲池池淵遺跡（註７）では卜骨や鐸形土製品が発見された。（註５）

古墳時代では、東蒲池門前遺跡（註６）・東蒲池池淵遺跡で土器貝殻層中から６～８世紀の土器が多量に出土し、貴重な資料となっている。市域では古墳は発見されていないが、削平を受けた古墳が存在するかもしれない。

古代の遺跡は希薄だが、東蒲池榎町遺跡（註８）で８～10 世紀世紀の土坑が確認され、蒲船津水町遺跡（註９）では９世紀の墨書土器が発見されている。

中世の市域は、沖端川以西・以北は「三潴庄」に、それ以外は「瀬高庄」に属する。「和名抄」の郷としては、筑後国下妻郡の中に「鹿待郷」があり、これが「蒲池」に通ずるとされている。鎌倉後期の永仁４（1296）年の「玉垂宮並大善寺仏神事次第写」（御船文書）の三潴荘関係史料の中に「蒲池村」と「簗川村」が見え、このころには柳河地区にも集落が展開していたとわかる。

中世前期では遺跡数としては希薄だが、東蒲池池淵遺跡（註 10）でまとまった資料が出土している。

中世後期では、蒲池城を拠点とする蒲池氏が市域北部を、鷹の尾城を拠点とする田尻氏が市域南部を支配したが、史料に乏しく詳細は不明である。戦国時代後半には蒲池氏は２家に分かれ、蒲池鑑盛は柳川城を永禄年間 (1558 ～ 1569 年) に築き下蒲池を称した。天正９（1581）年に下蒲池氏の蒲池鎮並が龍造寺氏に謀殺されると、田尻鑑種が柳川城を攻め落として下蒲池氏は滅亡した。遺跡はこの時期に増加する。東蒲池門前遺跡（註 11）・蓮池遺跡（註 12）では、15 ～ 16 世紀の崇久寺に関連するものと見られる遺跡が発見され、東蒲池大内曲り遺跡（註 13）・矢加部南屋敷遺跡（註

14)・矢加部五反田遺跡（註 15）・蒲船津西ノ内遺跡（註 16）で中国製陶磁器が見られるほか、徳益八枝遺跡（註 17）で方形区画が発見されており、筑後の有力国人であった蒲池氏との関連が考えられる。

柳川は一時龍造寺氏の支配下に入ったが、豊臣秀吉の九州平定後の天正 15（1587）年に立花宗茂が入部した。慶長 5（1600）年の関ケ原の戦いで西側に与した立花宗茂は改易となり、西軍の将石田三成を捕らえた田中吉政が慶長 6 (1601) 年に筑後一国を与えられ、柳川城に入る。吉政は城郭や街道、農業基盤などの整備に力を尽くしたが、2 代忠政に継嗣がなく田中氏は改易となった。その後、立花宗茂が元和 6 (1620) 年に再封され、幕末まで立花家の治世となる。寛政 2 (1790) 年の城下町絵図に描かれた地割や道路・掘割は現在でも見られるもので、そのころには城下町の整備が完成していたようだ。

柳川市域の近世遺跡の調査は、城下町を中心として行われている。城下町全域が周知の埋蔵文化財包蔵地「柳川城郭跡」にあたり、現在の町名が近世の旧地名に由来していることから、「柳川城郭跡」内を町名ごとに細分して遺跡名をつけている。

本町袋町遺跡（註 18）では袋小路にあたり、水路の土塁が削平された痕跡らしい空閑地が見つかった。南長柄町遺跡（註 19）は南長柄小路にあたり、下級武士の屋敷地が発見された。京町遺跡（註 20）では『城下町絵図・瀬高町組（仮題)』に描かれた 2 軒ないし 3 軒の屋敷地を調査し、土管や瓦敷遺構、丸太基礎などが検出された。細工町遺跡（註 21）では筏地行遺構が発見された。上町遺跡（註 22）では 1 次調査で竹管を利用した上水道跡が発見され、2 次調査では仏具らしい金属製品や景徳鎮など希少な遺物や多量の銅銭が出土しており、川津の荷揚げ場としての賑わいを窺わせている。沖端川の対岸に位置する保加町遺跡では石組溝で区画された町屋跡が発見されるなど、面積は小さいながら、調査成果が蓄積されつつある。

註

1　九州歴史資料館 2012『下木佐木安堂遺跡　東蒲池蓮池遺跡　西蒲池池田遺跡』福岡県文化財調査報告書第 236 集

2　柳川市教育委員会 2008『徳益八枝遺跡』柳川市文化財調査報告書第 6 集

3　柳川市教育委員会 2006『磯鳥フケ遺跡』柳川市文化財調査報告書第 1 集

4　福岡県教育委員会 2009『蒲船津江頭遺跡Ⅰ』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第 6 集
福岡県教育委員会 2010『蒲船津江頭遺跡Ⅱ』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第 8 集
福岡県教育委員会 2011『蒲船津江頭遺跡Ⅲ』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第 10 集

5　九州歴史資料館 2013『東蒲池池淵遺跡Ⅰ』国道 385 号三橋大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第 2 集
九州歴史資料館 2014『東蒲池池淵遺跡Ⅱ』国道 385 号三橋大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第 4 集

6　九州歴史資料館 2013『東蒲池門前遺跡』国道 385 号三橋大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第 3 集

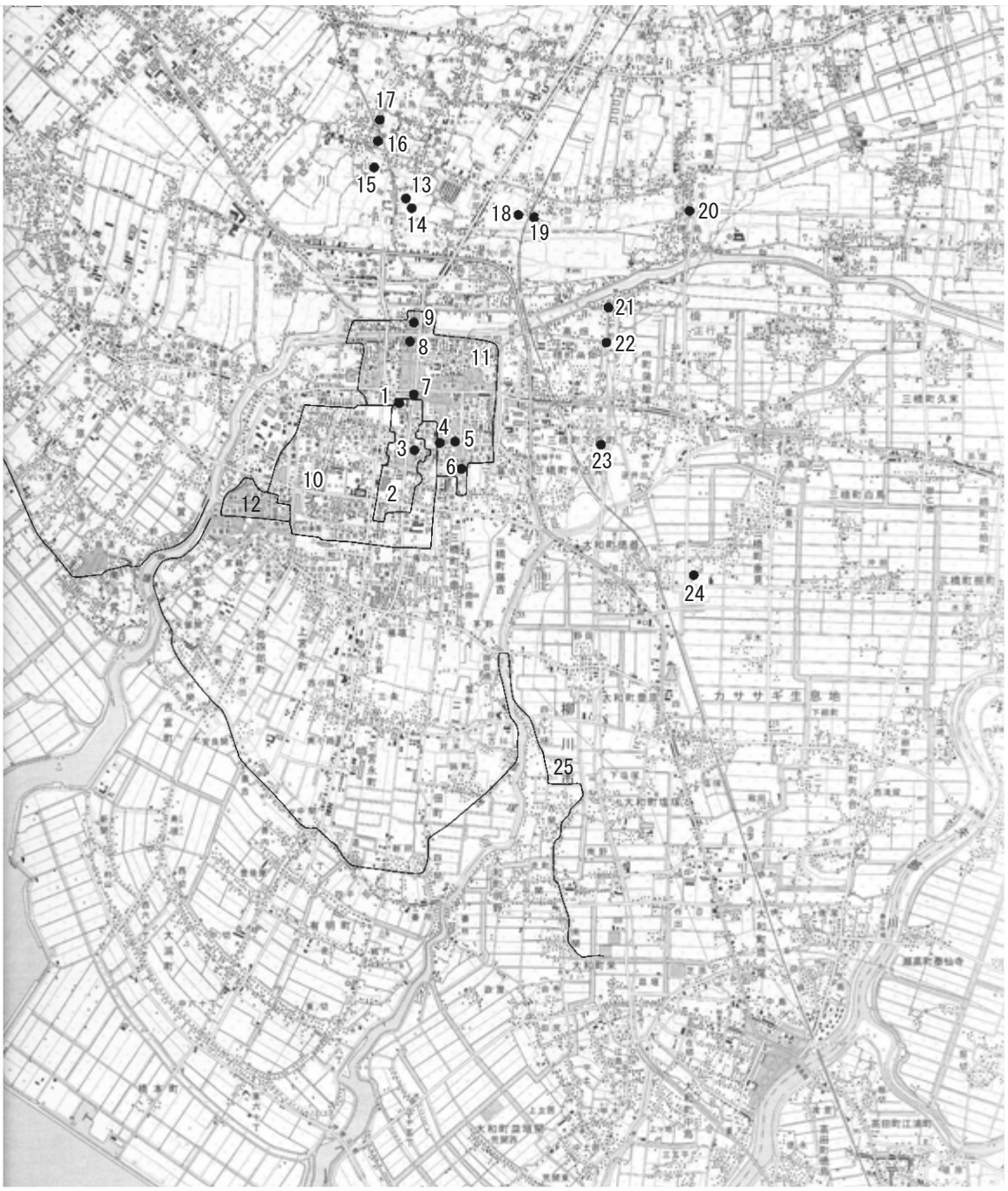
7　前掲註 5

8　福岡県教育委員会 2005『東蒲池榎町遺跡』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第 1 集

9　福岡県教育委員会 2012『矢加部町屋敷遺跡Ⅳ　蒲船津西ノ内遺跡　蒲船津水町遺跡』
有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第 12 集

10　前掲註 5

11　前掲註 5



1	本町遺跡１・２次調査	8	上町遺跡	15	東蒲池蓮池遺跡	22	蒲船津水町遺跡
2	本町遺跡	**9**	**保加町遺跡**	16	東蒲池門前遺跡	23	蒲船津西ノ内遺跡
3	本町袋町遺跡	10	御家中（城内）	17	西蒲池淵遺跡	24	徳益八枝遺跡
4	南長柄遺跡	11	城下町	18	矢加部五反田遺跡	25	慶長本土居
5	細工町遺跡	12	港町	19	矢加部南屋敷遺跡		
6	出来町遺跡	13	東蒲池大内曲り遺跡	20	磯鳥フケ遺跡		
7	京町遺跡	14	東蒲池榎町遺跡	21	蒲船津江頭遺跡		

第2図　周辺遺跡分布図（1/50,000）

11　前掲註６

12　柳川市教育委員会 2016『蓮池遺跡』柳川市文化財調査報告書第９集

13　福岡県教育委員会 2007『東蒲池大内曲り遺跡』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第２集

14　福岡県教育委員会 2009『矢加部南屋敷遺跡・矢加部五反田遺跡』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第５集

15　前掲註 14

16　前掲註９

17　前掲註１

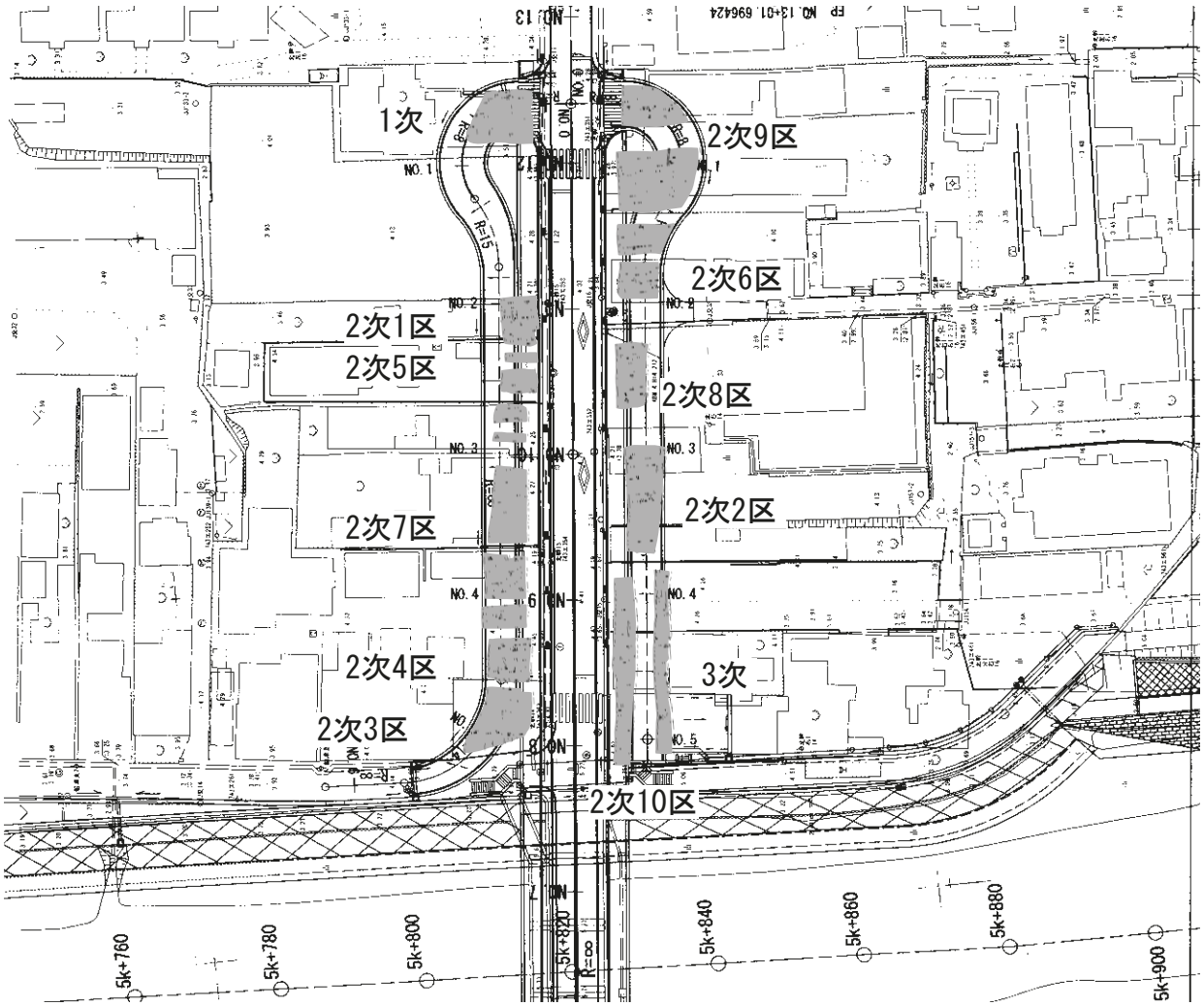
18　柳川市教育委員会 2008『本町袋町遺跡・南長柄町遺跡』柳川市文化財調査報告書第４集

19　前掲註 17

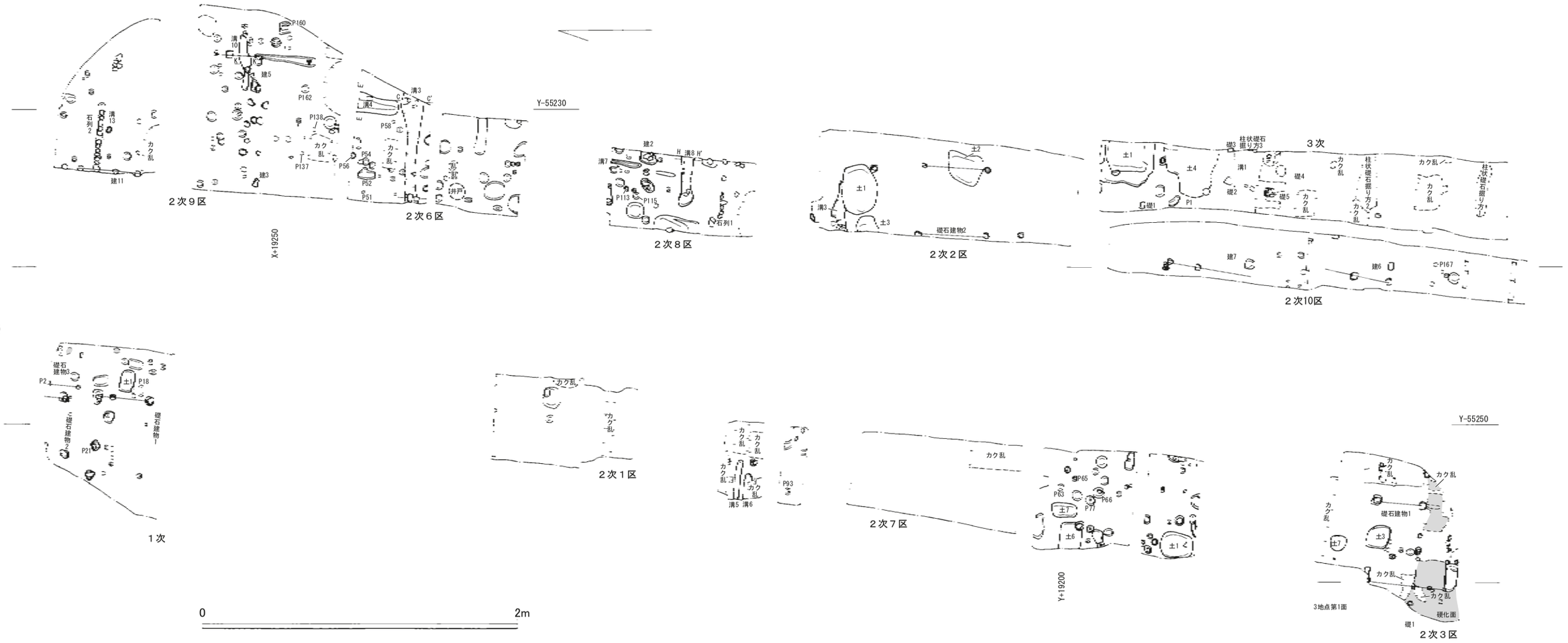
20　柳川市教育委員会 2009『京町遺跡』柳川市文化財調査報告書第７集

21　柳川市教育委員会 2008『細工町遺跡・新町遺跡』柳川市文化財調査報告書第５集

22　柳川市教育委員会 2016『上町遺跡』柳川市文化財調査報告書第 10 集

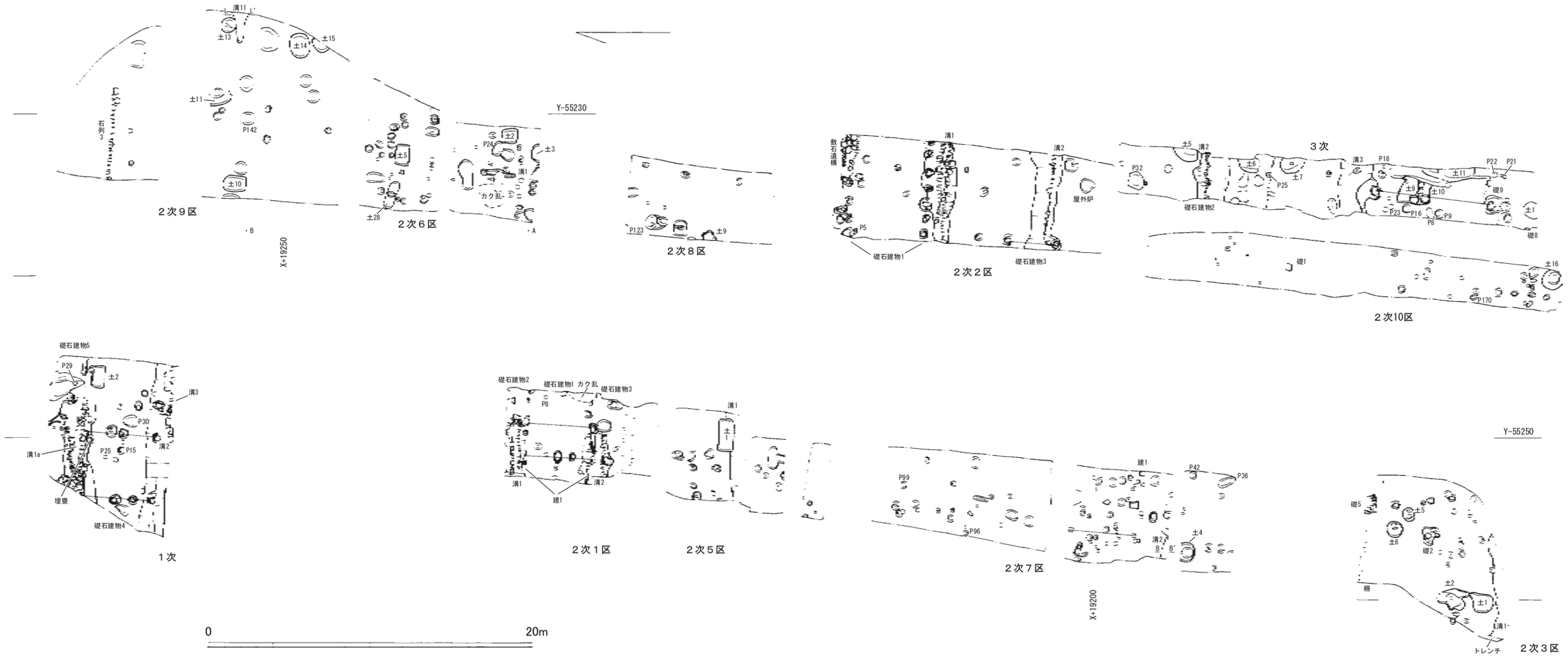


第3図　保加町遺跡調査範囲図（1/1,000）



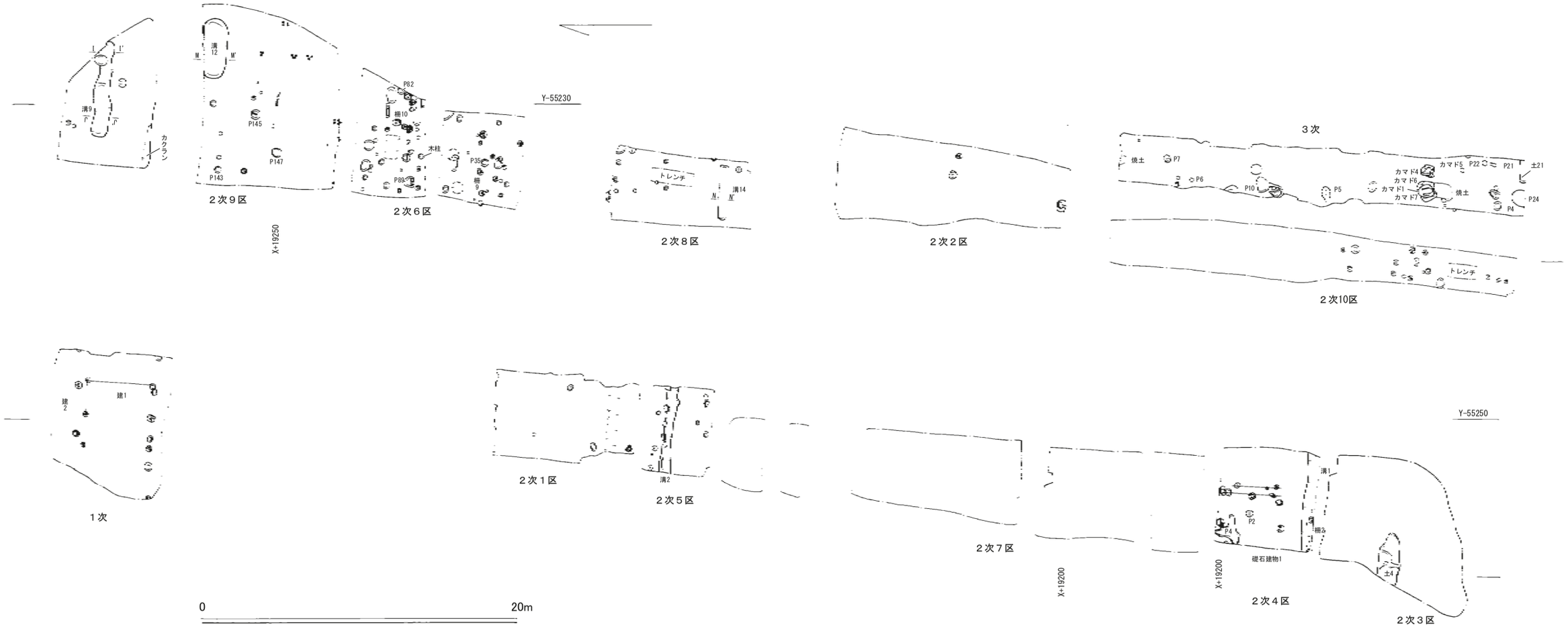
第1面

第4図　保加町遺跡遺構全体図1(1/300)



第2面

第5図　保加町遺跡遺構全体図2(1/300)



第3面

第6図　保加町遺跡遺構全体図3(1/300)

第4面

第7図　保加町遺跡遺構全体図4(1/300)

Ⅲ　調査の内容

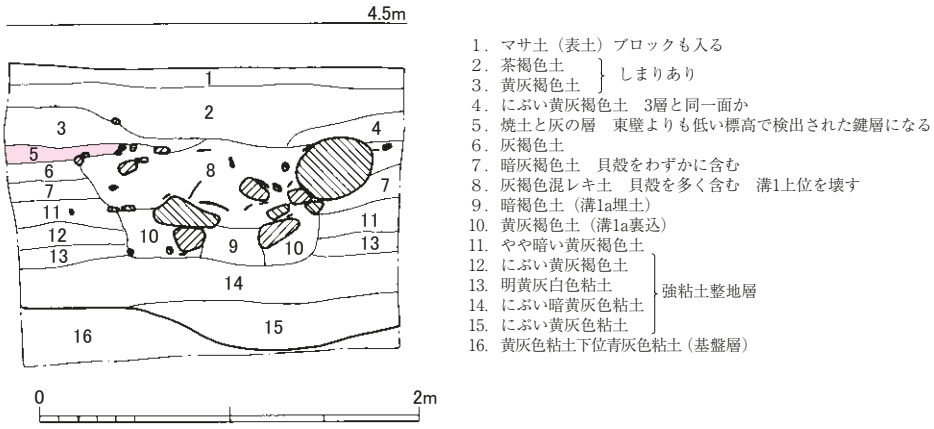
1　遺跡の概要

近世柳川城下町は、柳川城を中心として武家屋敷が広がる「城内」地区と、主に町人が居住した「沖端町」「柳河町」の地区に分かれていた。このうち、保加町遺跡は柳川市柳河町の北端部で、沖端川の北岸にあたり、古絵図には「外町」と記載されている。外町の中央には、柳川支所の東を南北に走る県道久留米柳川線が走っており、道路沿いに間口が狭い町屋の区画が現在も残っている。この県道は参勤交代にも使用される城内の幹線道路であり、外町の北端は城下町の出入りを取り締まる「外町口」が置かれていた。今回の調査範囲はこの幹線道路沿いで、現道の両側の幅約８ｍほどの範囲であり、街道沿いの町屋の出入口部分にあたる。

遺構面は残りの良いところで４面あった。調査地点により上位遺構面が失われている場合もあったが、基本的な遺構面の時期はほとんど同じである。整地層は細かい層の積み重ねであったため、同地点内でも堆積は異なっているので、２次調査で設定した共通層序は見られなかったが、１次調査の西壁土層を基本層序として第８図に示した。

表層は現代の表土層で、表土直下に幕末から明治の遺構面がある。現道東側の調査区ではその上の明治後期から昭和初期の面が残っていたので、現道西側は昭和前期以降に道路拡張が行われたと考えられる。幕末から明治の遺構面を共通第１面とするが。この面の整地層の下に焼土が広がる面があり、これを第２遺構面とする。焼土面は部分的で、すべての地点で見られるものではない。この焼土面の直下にも薄い遺構面が存在しているが、調査時に２つの面を判別できないので、１つ遺構面の切り合いとしている。これは18世紀前葉から19世紀前葉の生活面であり、第2遺構面とする。第３遺構面は面の硬化や変色がなく、把握しにくかったので、調査時には捉えられていないが、17世紀後葉から18世紀初頭の生活面であろう。最終面の第４面は基盤層だが、生活面自体は基盤層上の整地面と見られる。17世紀前葉から中葉の遺構面であり、前葉まで遡る遺物は存在せず、近世以前の遺物は散見されるものの、遺構は見られなかった。

調査の結果、礎石建物跡21棟、掘立柱建物跡５棟、土坑45基、溝状遺構31条、柵跡７条、カマド遺構５基などが検出された。



第8図　1次調査西壁土層断面実測図（1/ 40）

２　１次調査の遺構と遺物

調査対象地は調査対象範囲の北西端部で、保加町 59 － 1 番地である。用地引き渡しが早く、地権者が年明けには建て替えを予定しているということだったので、土木事務所から年内にも着手してほしいという申し入れがあったことから、先行して調査を行った。北側隣接地は狭小で本調査の成果で特に調査すべき遺構がなかったことから、調査不要とした。

平成 25 年 12 月 8 日機材搬入し、10 日に重機で掘削作業を始めた。コンクリート基礎が表土下に埋め込まれており、基礎の下の栗石は古い建物の礎石との区別がつかなかった。16 日に第一遺構面まで掘削して、ピットを掘り下げていくと、壁面に下層の遺構面が見えたことから直下に 2 面目が存在することがわかったので、第 1 遺構面を掘り下げて 2 面目を検出し、1 面と一緒に図化した。24 日に第一遺構面の全体写真を撮り、重機で掘り下げた。東側に田中道の側溝があるか、トレンチを入れて確認した。26 日に第 2 遺構面の全景写真を撮って、年内の作業を終了した。1 月 6 日に機材撤収、7 日にリース機器の完全撤収となった。

遺構と遺物

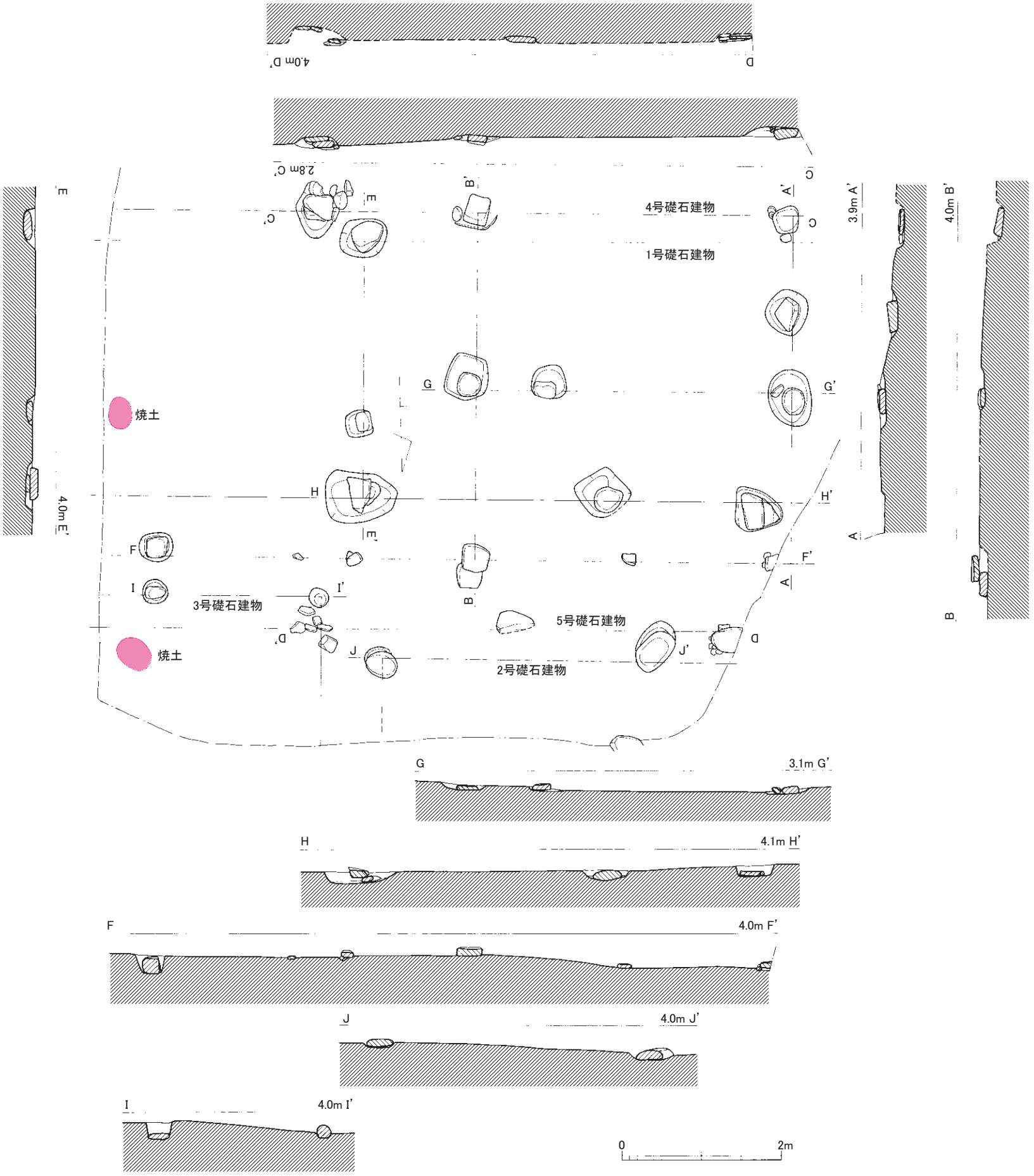
表土下に整地層があり、その下に焼土を多く混じる層がある。焼土層は全面に広がらないが、火事の片付け跡と見られ､この焼土面のレベルで礎石が確認された。これは共通第 1 面と見られるが、火事の片付け整地面のため、同一層が面的に広がらなかったことから、安定面まで掘り下げて、その下の石組溝の検出された面を第 1 遺構面とした。第 1 遺構面を共通第 2 面とした。そのため、共通 1 面の標高は東壁で 3.9 m、西壁では 3.7 mで、共通 2 面は東壁で 3.6 m、西壁で 3.5 mである。1 号溝状遺構の北側に遺物が集中して出土した場所があるが、遺構は検出されなかった。整地作業時に埋め込まれたものだろうか。

第 1 遺構面の調査後、重機で掘削し、基盤層上面の整地面にピットが並ぶ面を第 2 遺構面とした。このうち、掘立柱建物跡になる柱穴は検出面より上面から検出されていたので、これが共通 3 面で、第 2 遺構面が共通 4 面となる。共通 3 面は東壁で標高 3.4 m、西壁で標高 3.3 mで、共通 4 面は 3.2 mを測る。共通 3 面からは掘立柱建物跡 2 棟が、共通 4 面からは土坑 1 基・溝 1 条が検出された。以下、遺構数が少ないので、遺構面に関わらずに記述する。

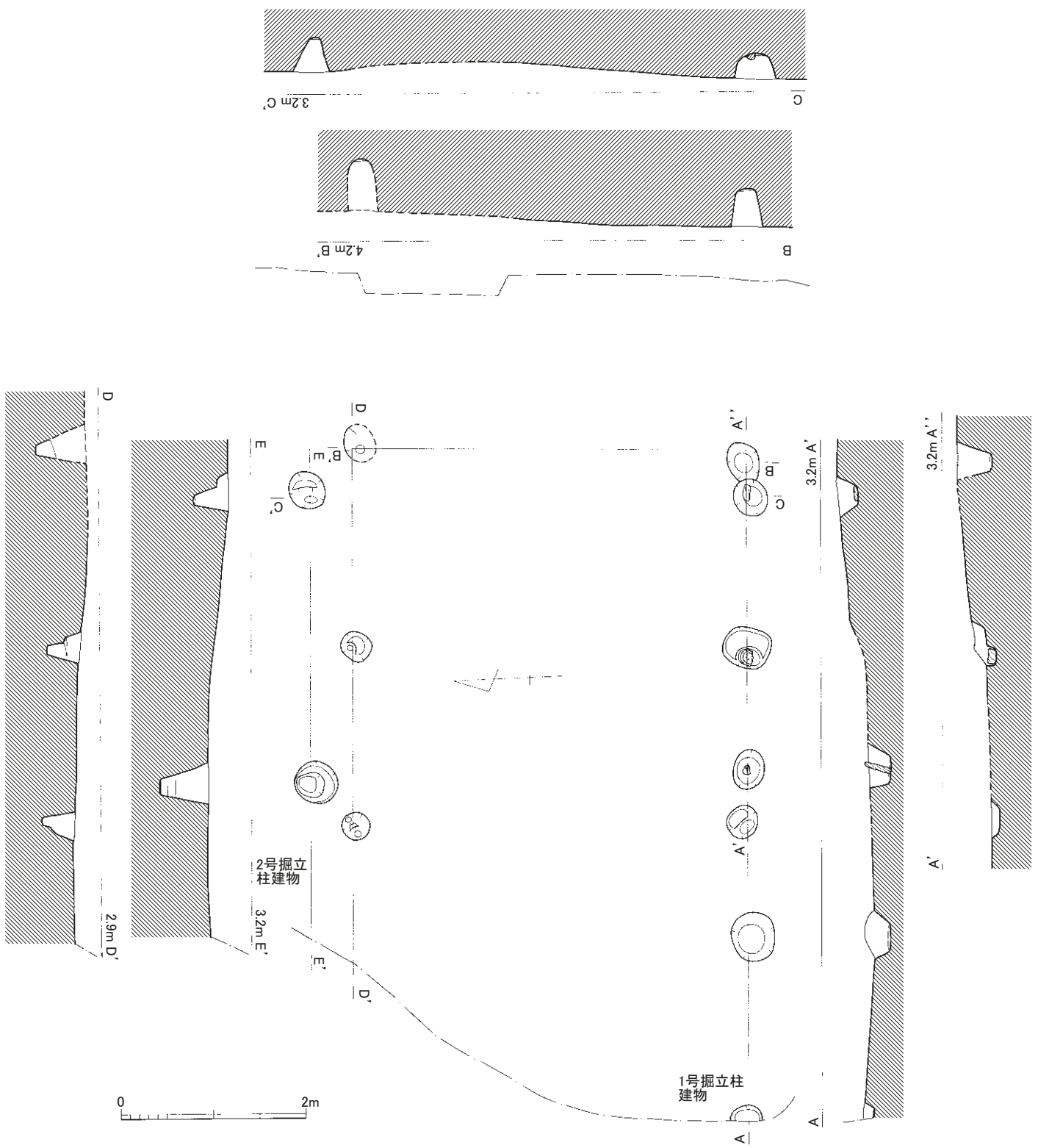
1 号礎石建物跡（図版 1 、第 9 図）

第 1 遺構面から検出された建物跡で、1・2 号溝状遺構の間に位置する。N － 87° 40′ － Wを主軸とする 1 間×3 間以上で、礎石の一部は失われている可能性が高い。短軸は 3.3 mで、長軸は 6 m以上を測る。この建物とほぼ同じ位置に 4 号礎石建物跡があり、柱穴の切り合いはないものの、検出面の差から 4 号礎石建物跡を建て替えたと考えられる。南東辺の礎石は 2 号溝状遺構の埋土上にあるので、2 号溝状遺構埋没後に建てられたことはわかる。東側に焼土があり、カマドの火床と見られる。このカマド跡の火床は 4 号礎石建物跡に伴う可能性もあるものの、4 号礎石建物跡の場合建物の中心軸線上に位置するので、カマドの配置としては考えにくい。

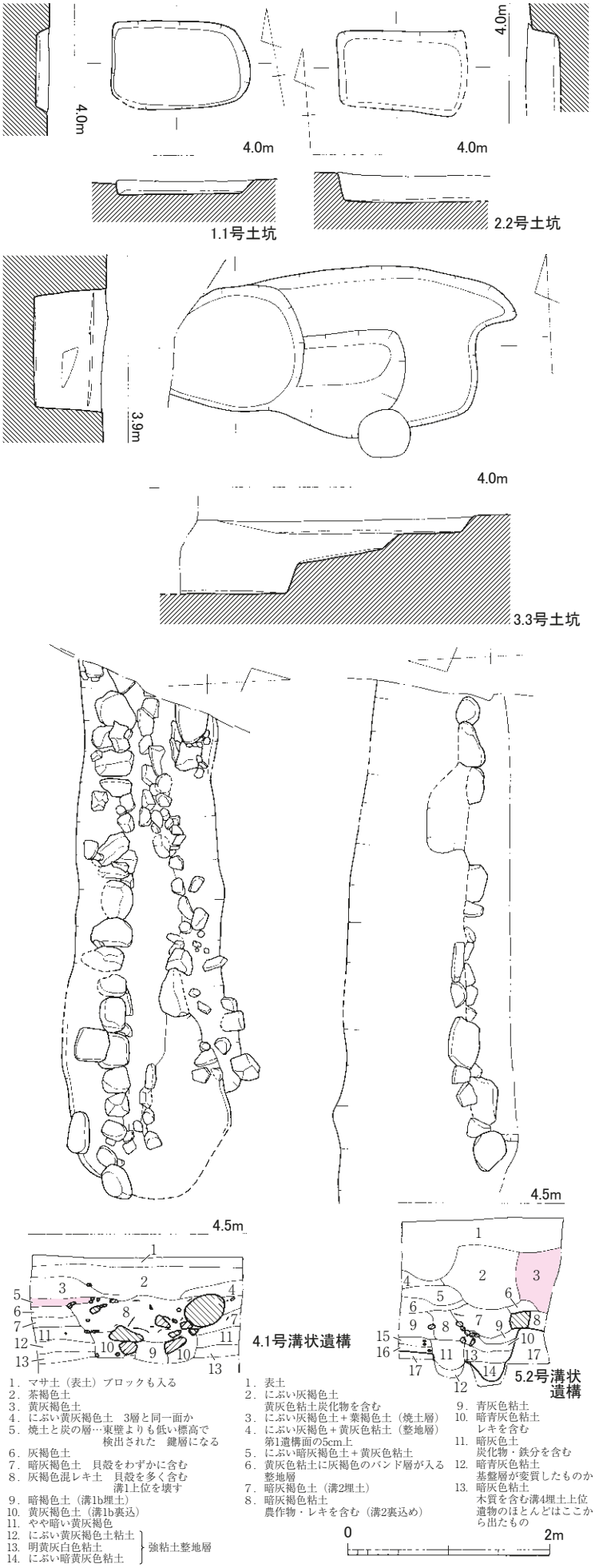
図化できる出土遺物がなく、時期を特定できない。



第9図　1次調査１～５号礎石建物跡実測図（1/60）



第 10 図　1次調査 1・2 号掘立柱建物跡実測図（1/60）



第11図　1次調査検出遺構実測図（1/60）

２号礎石建物跡（図版１、第９図）

第１遺構面から検出された建物跡で、１号溝状遺構の北に位置する。規模の等しい礎石３基から復元したので、確実性は低い。西端に明瞭な礎石があり、これは１号溝状遺構の石積の上に位置しているので、１号溝状遺構の石積み後に建てられている。中央の礎石は本来１号溝状遺構石積上に位置していたものが崩落している。東端の礎石は失われており、礎石の根締石だけが残っているとみられる。３号礎石建物跡とは重複し、柱穴の切り合い関係はないが、検出面の高さから本礎石建物跡が古い。N － 87° 40′ － Wを主軸とする２間以上で、５m以上を測る。東にカマドの火床があるが、礎石列を延長すると火床が近すぎるので、共存しない可能性が高い。

図化できる出土遺物はない。

３号礎石建物跡（図版１、第９図）

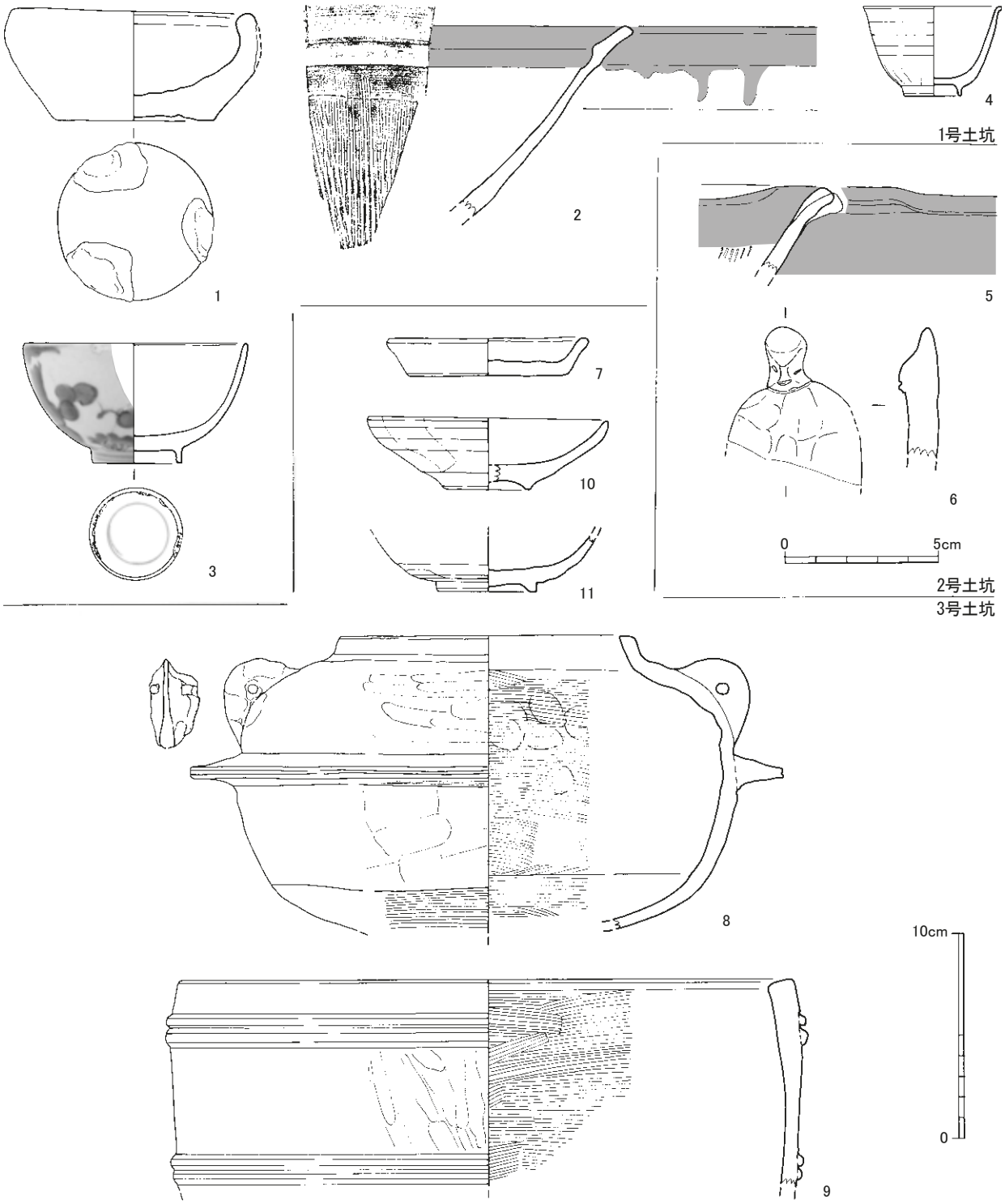
第１遺構面から検出された建物跡で、１号溝状遺構の北東に位置する。規模の等しい礎石２基から復元したので、確実性は低い。２号礎石建物跡とは重複し、柱穴の切り合い関係はないが、検出面の高さから３号礎石建物跡が新しい。N － 87° 40′ － Wを主軸とする１間以上で、2.6 m以上を測る。西に５号礎石建物跡があるので、主軸方向が異なるものの連結する１つの建物だった可能性が高い。東側に焼土があり、カマドの火床と見られる。

図化できる出土遺物はない。

４号礎石建物跡（図版２、第９図）

第１遺構面から検出された建物跡

で、1・2号溝状遺構の間に位置する。N － 87° 40′ － Wを主軸とする２×２間以上で、南辺の礎石は失われている可能性が高い。短軸は4.5ｍで、長軸は５ｍ以上を測る。この建物とほぼ同じ位置に１号礎石建物跡があり、柱穴の切り合いはないものの、検出面の差から１号礎石建物跡の前身であろう。礎石は１号礎石建物跡のものより小型で、１号溝状遺構の裏込め石積上にあるので、１号溝掘削後に建てられたことはわかる。東側に焼土があり、カマドの火床と見られる。4号礎石建物跡に伴う可能性もあるものの、4号礎石建物跡の場合建物の中心軸線上に位置するので、カマドの配置としては考えにくい。図化できる出土遺物はない。



第12図　1次調査１～３号土坑出土遺物実測図（6は1/2、他は1/3）

５号礎石建物跡（図版２、第９図）

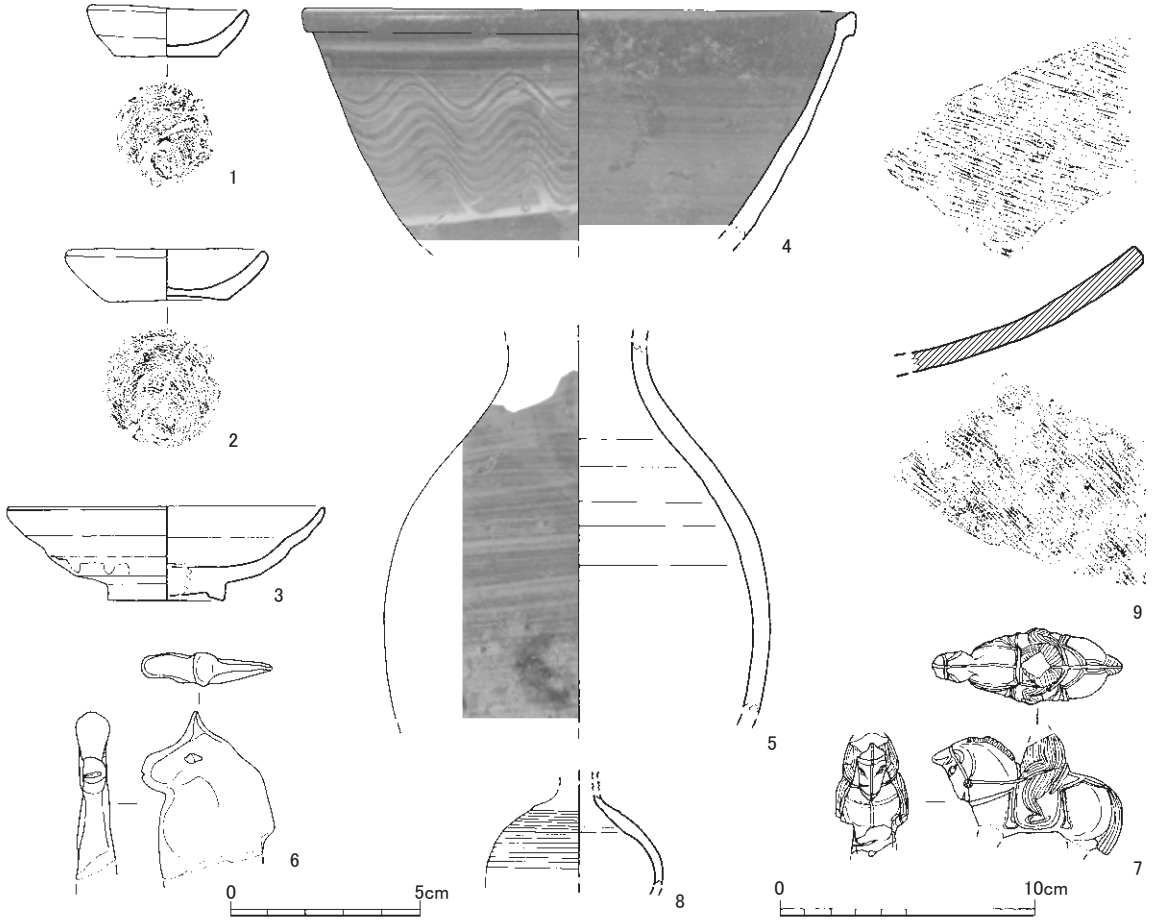
第１遺構面から検出された建物跡で、１号溝状遺構の北に位置する。規模の等しい礎石２基から復元したので、確実性は低いが、礎石が失われているとも考えうる。N‐87° 40′‐Wを主軸とし4.5m以上を測る。主軸方向が異なるものの３号礎石建物跡の西に位置しているので、連結する１つの建物だった可能性が高い。図化できる出土遺物はない。

１号掘立柱建物跡（第10図）

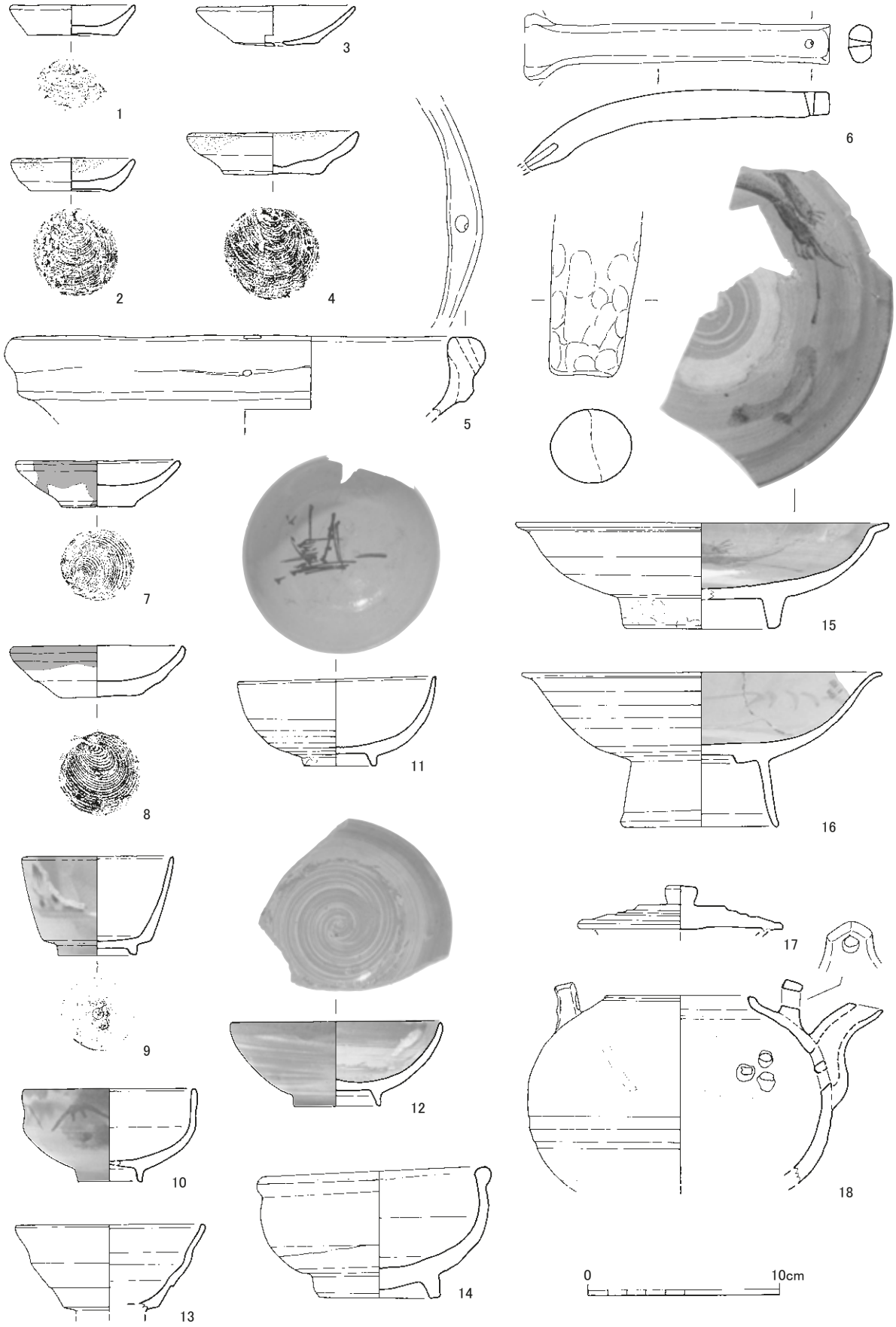
第２遺構面から検出された建物跡で、N‐87° 40′‐Wを主軸とし、幅4.0ｍで、調査区外に延びるので７ｍ以上を測る。１×２間以上だが、短辺側は柱間が広いので、東側調査区外に中間の柱穴があり、短い２間と推定できる。南東の柱穴が２号掘立柱建物跡の柱穴に切られる。図化できる出土遺物はない。

２号掘立柱建物跡（第10図）

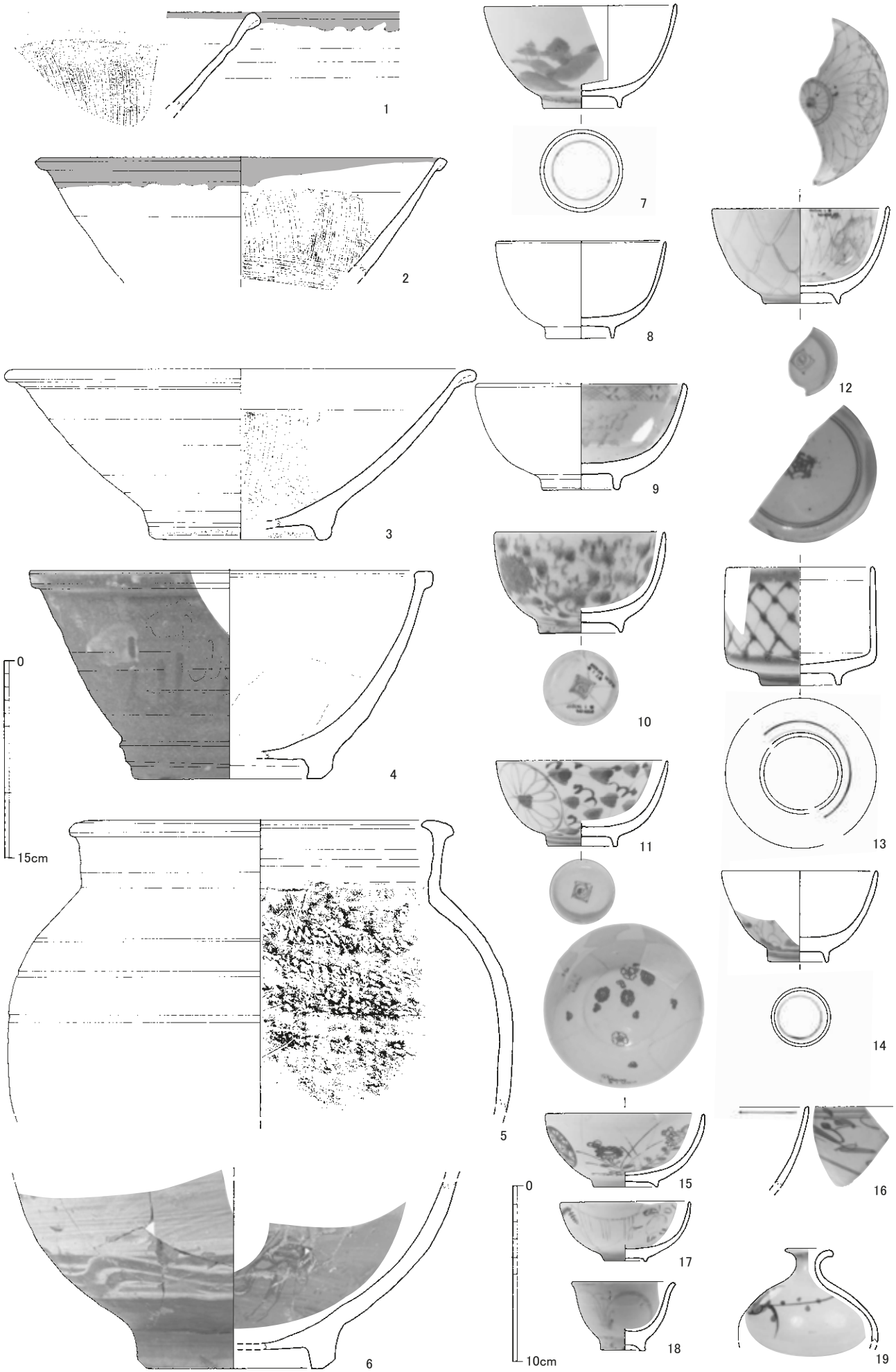
第２遺構面から検出された建物跡で、３号溝状遺構を切る。N‐87° 40′‐Wを主軸とし、幅4.45ｍで、調査区外に延びるので6.3ｍ以上を測る。１×２間以上だが、短辺側は柱間が広いので、東側調査区外に中間の柱穴があり、短い２間と推定できる。1号掘立柱建物跡の柱穴と３号溝状遺構を切り、南辺の柱穴には柱根が残っている。図化できる出土遺物はない。



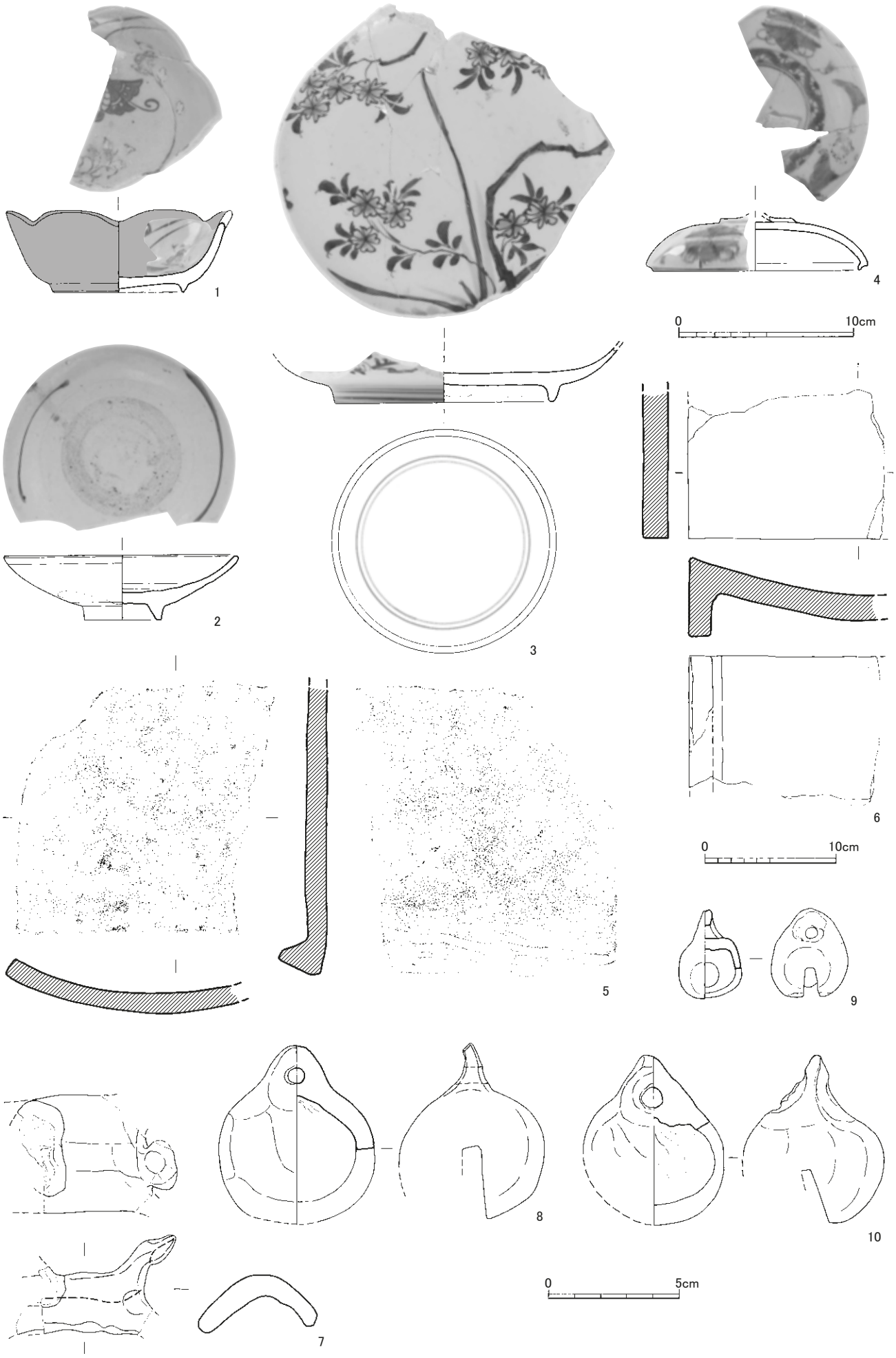
第13図　1次調査1号溝状遺構上面出土遺物実測図（6～8は1/2、他は1/3）



第 14 図　1次調査1号溝状遺構出土遺物実測図1（1/3）



第15図　1次調査1号溝状遺構出土遺物実測図2（2・3・5・6は1/4、他は1/3）



第16図　1次調査1号溝状遺構出土遺物実測図3（5・6は1/4、7～10は1/2、他は1/3）

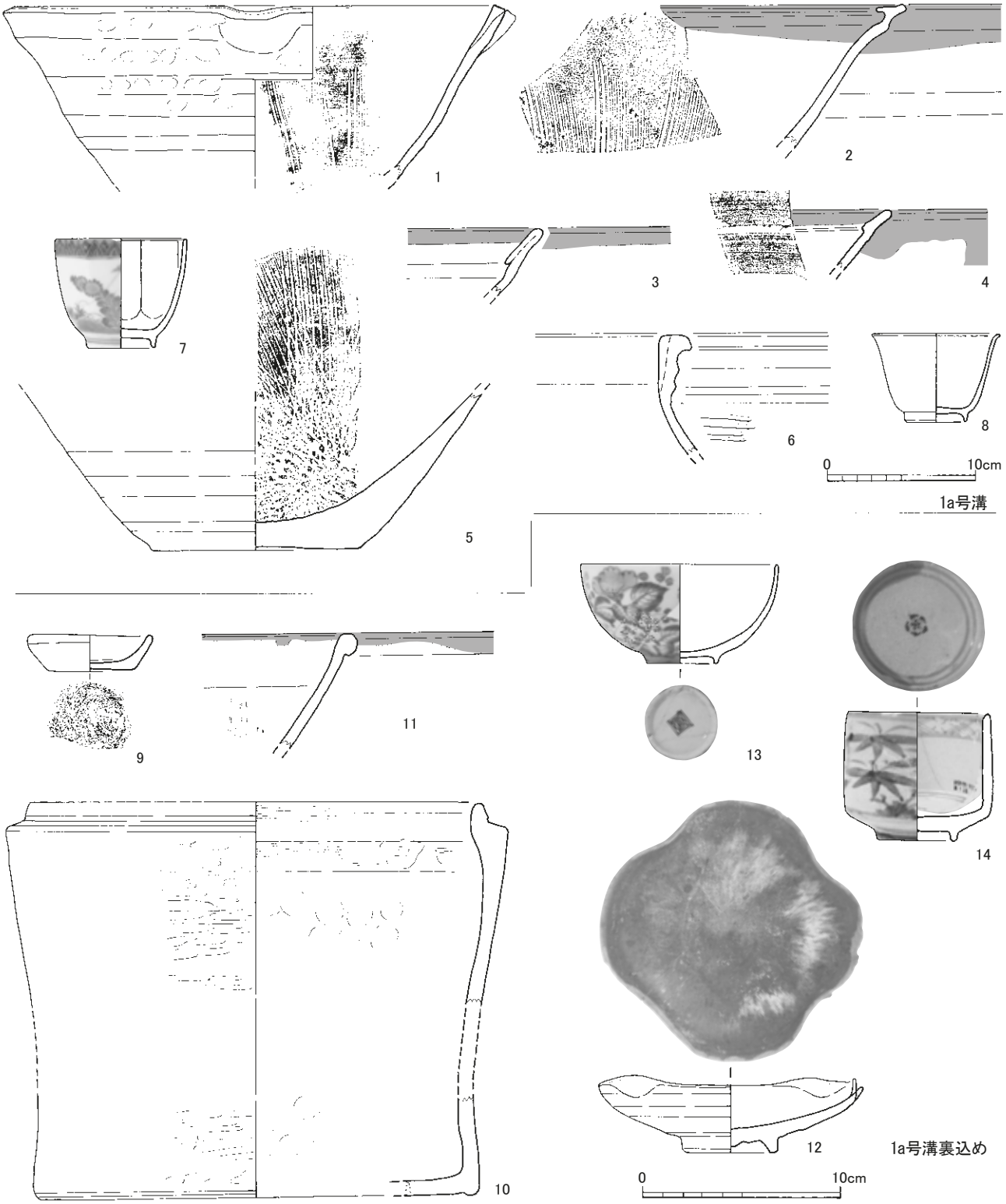
１号土坑（図版２、第 11 図）

第１面から検出された略方形プランで、明瞭に検出された。N - 81° 0′ - Wを主軸とし、長軸 1.9 m、短軸 9.0 mで、深さは 15cmほどしかない。床面はほぼ平坦であった。

陶器摺鉢と染付碗から 18 世紀第２四半期に属する遺構だろう。

出土遺物（図版３・４、第 12・30 図）

第 12 図１は土師器の鉢で、外底に剥離痕が３つあり、３点で支える五徳にかけて火にかけて使用するもの。第 30 図２・３の寛永通宝は模鋳銭の可能性がある。



第 17 図　1次調査 1a 号溝状遺構・裏込め出土遺物実測図（1は 1/4、他は 1/3）

２号土坑（図版２、第 11 図）

第　面から検出された略方形プランだが、北西部が不明瞭で、西辺は掘りすぎた。N ‐ 85° 30′ ‐ Wを主軸とし、長軸約２m、短軸 1.6 mで、深さは 25cmほどしかない。床面はほぼ平坦であった。床面から銅銭が出土しているが、意図的なものかは不明。陶器摺鉢から 18 世紀第３四半期以降に属する遺構だろう。

出土遺物（図版４、第 12・～、第 30 図）

洪武通宝と寛永通宝が多数出土したがこのうち、第 30 図 6・7・9 の洪武通宝は模鋳銭の可能性がある。

３号土坑（図版２、第 11 図）

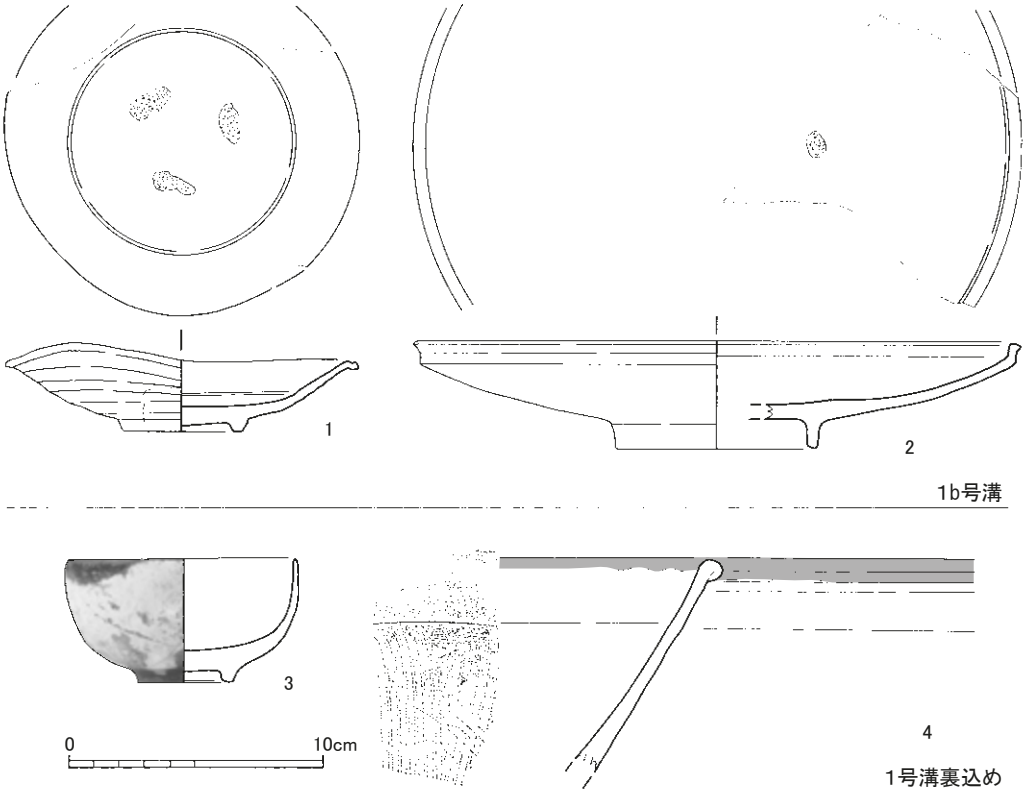
第４面から検出され、壁面が不確実なため検出ラインは不明瞭であり、西壁に褐色土が広がっており、これを埋土と考えたため掘りすぎた可能性もある。N ‐ 87° 0′ ‐ Wを主軸とし、長軸約 3.5 m、短軸 1.7 mで、深さは最深部で 70cmほどある。井戸のようでもあるが、井戸枠らしいものも湧水もない。出土した陶器皿から 17 世紀後半に属するだろう。

出土遺物（図版４、第 12 図）

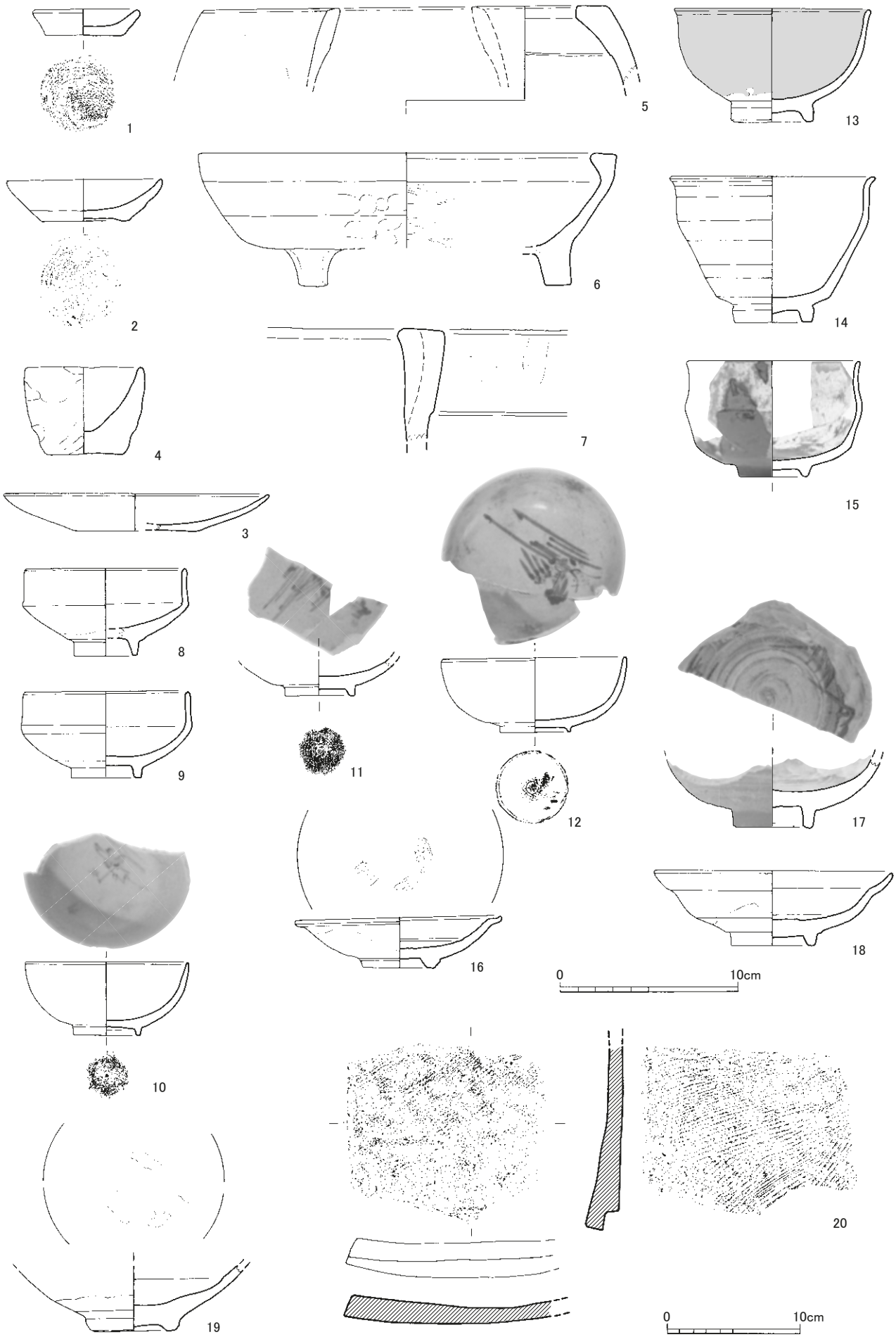
第 12 図８は湯釜で、内面側口唇部の欠損が著しいのは、口縁部に土瓶をかけた痕跡である。

１号溝状遺構（図版２・3、第８・11 図）

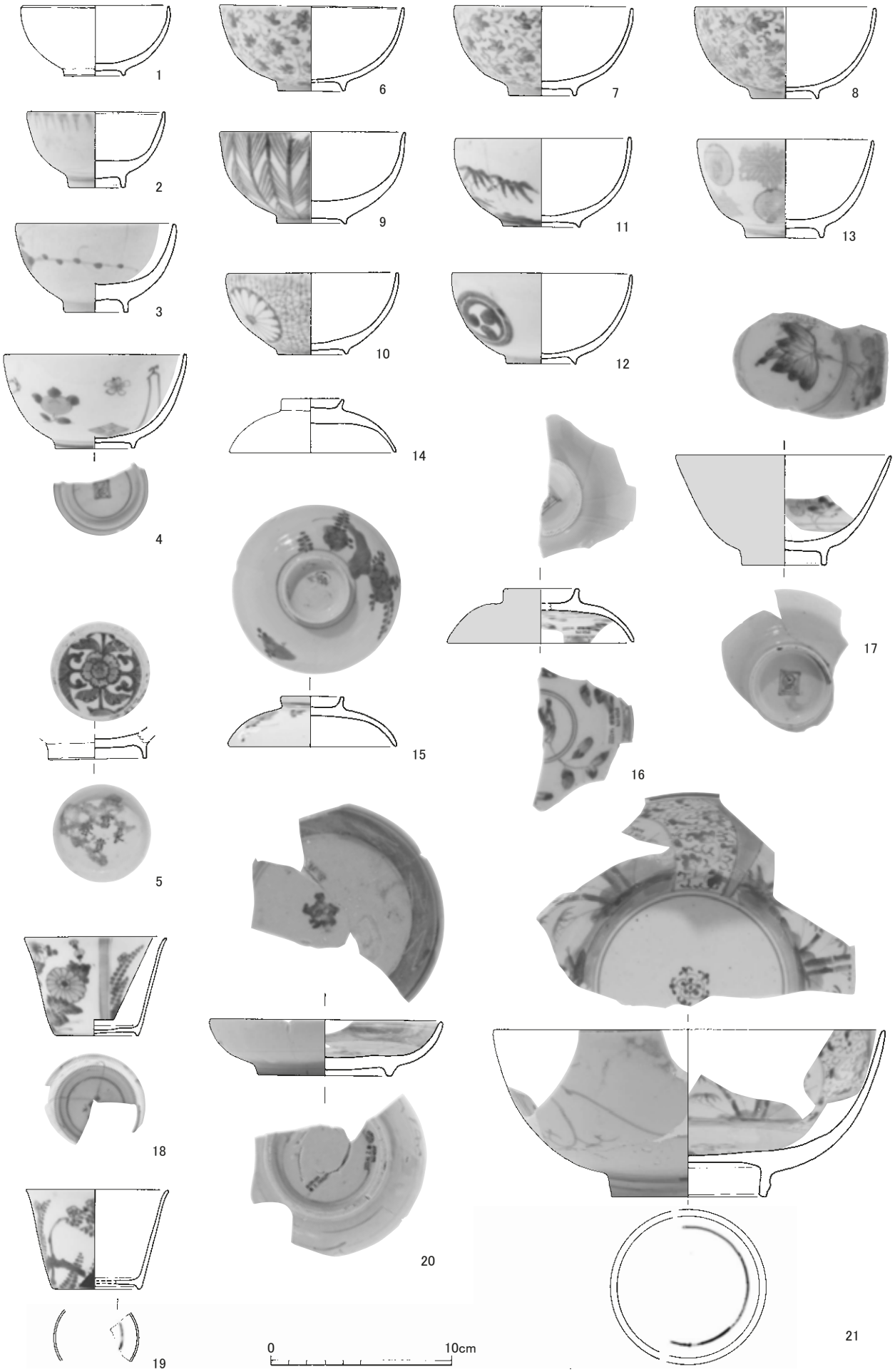
第２面から検出された長辺の両側面に石積のある溝で、貝殻を含む黒色土層を剥がしたところで検出された。幅約 30cmを測り、2 号溝状遺構と対をなす。その間に 1･4 号礎石建物跡が存在するので、これらの建物の北側溝だったと考えられる。主軸方位は N ‐ 86° 0′ ‐ Wである。石積の北辺は崩落したところが多かったものの、西側の狭くなっているところは床面も深くなっているので、幅が



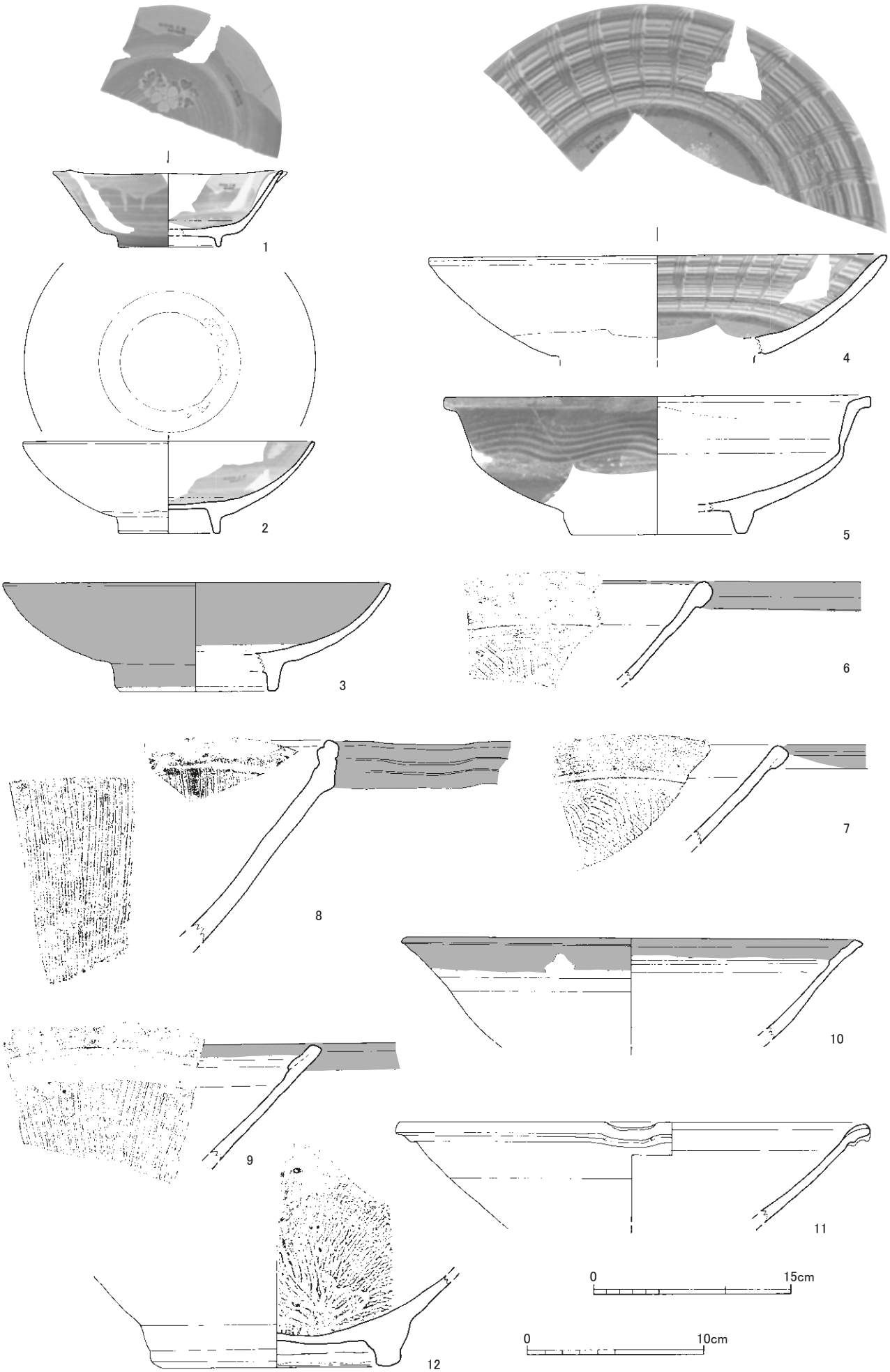
第 18 図　1次調査 1b 号溝状遺構・1 号溝状裏込め出土遺物実測図（1/3）



第 19 図　1次調査2号溝状遺構出土遺物実測図1（20 は 1/4、他は 1/3）

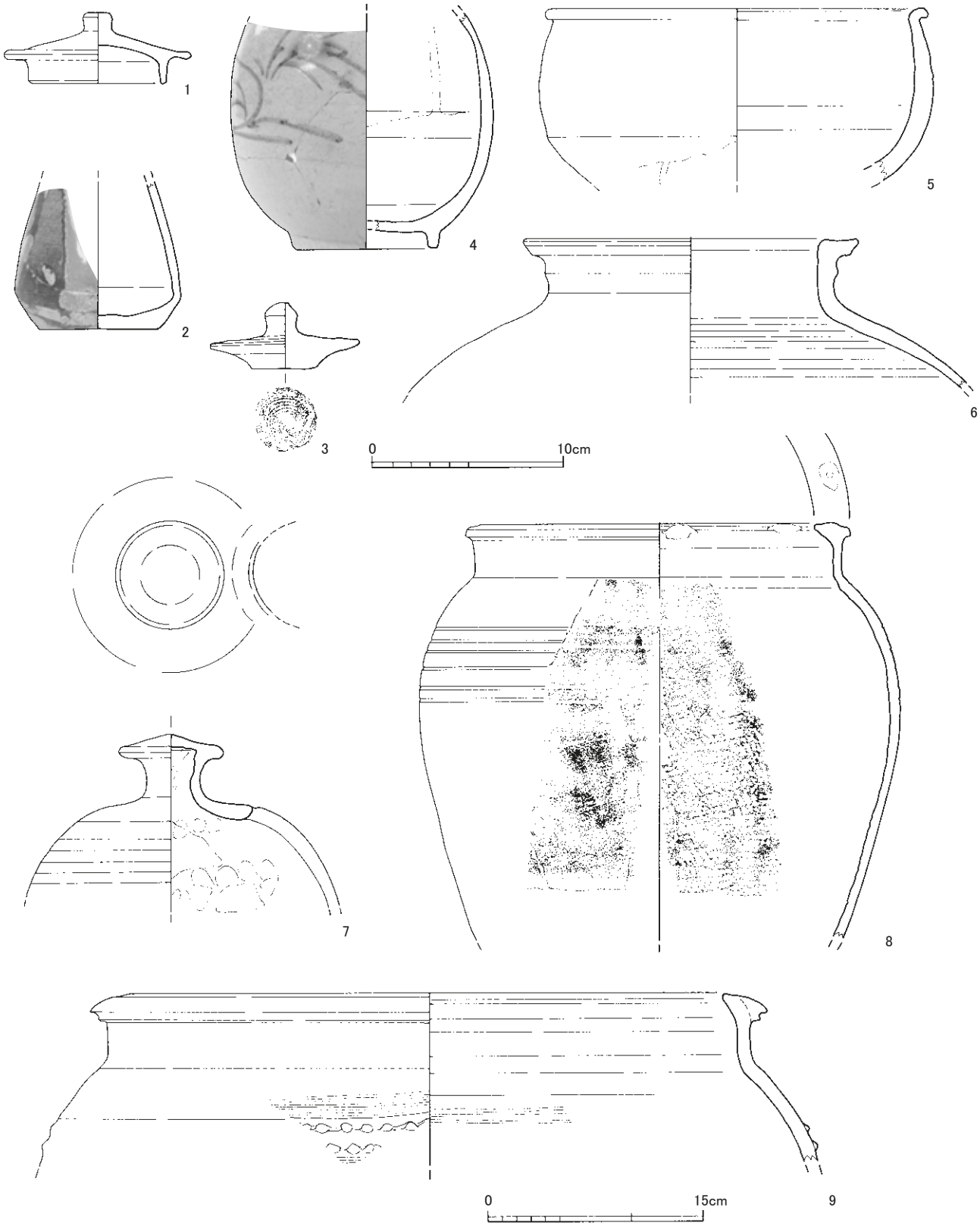


第 20 図　1次調査2号溝状遺構出土遺物実測図2（1/3）

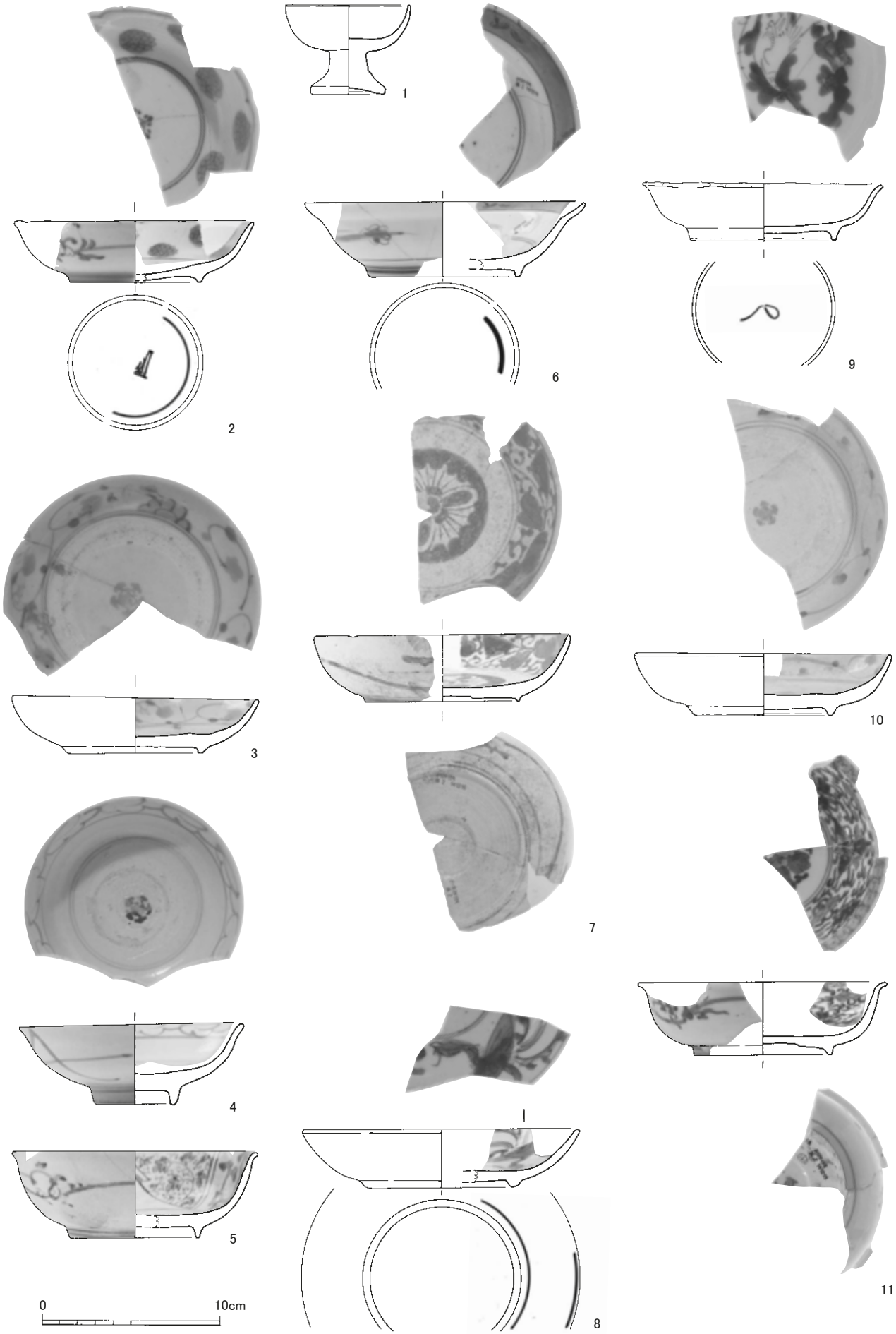


第 21 図　1次調査2号溝状遺構出土遺物実測図3（10・11 は 1/4、他は 1/3）

狭く短い溝を作り直したと考えられ、古い溝を 1b 号溝状遺構とした。1b 号溝は床面が低いことから石積は３段ほどあるが、１a 号溝状遺構は２段しか積んでいない部分が多い。東端は不明瞭だったが当時の幹線道路まで達していないことは間違いない。長軸 30 ～ 40cm規模の比較的大きな川原石を使っている。南岸掘り方が１号埋甕に切られている。瓦片が石積の間に埋め込まれており、埋土内からも多量に出土した . 上位からは土壁の破片が出土しているが多くはない。1a 号溝状遺構に

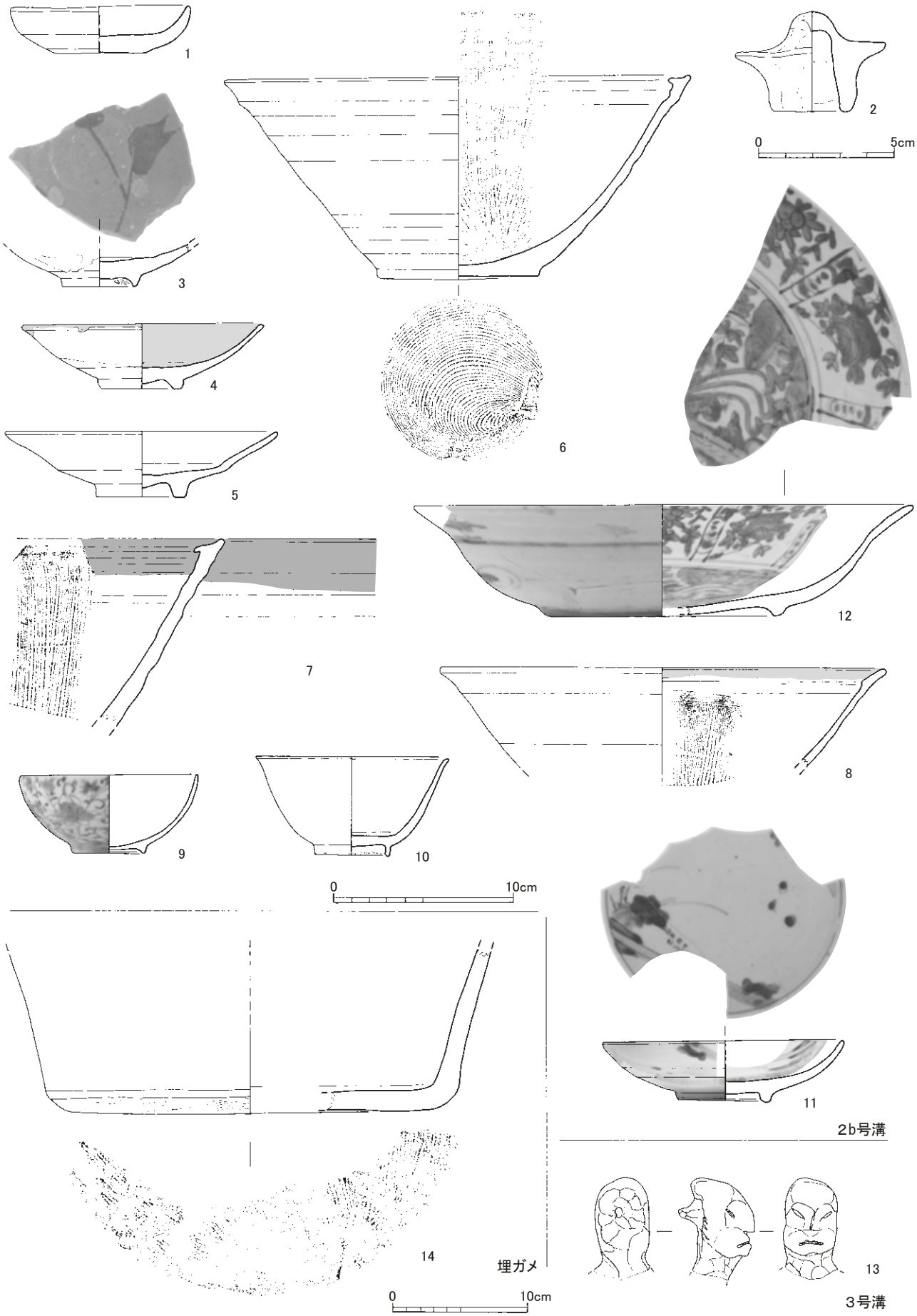


第 22 図　1次調査2号溝状遺構出土遺物実測図 4（8・9 は 1/4、他は 1/3）

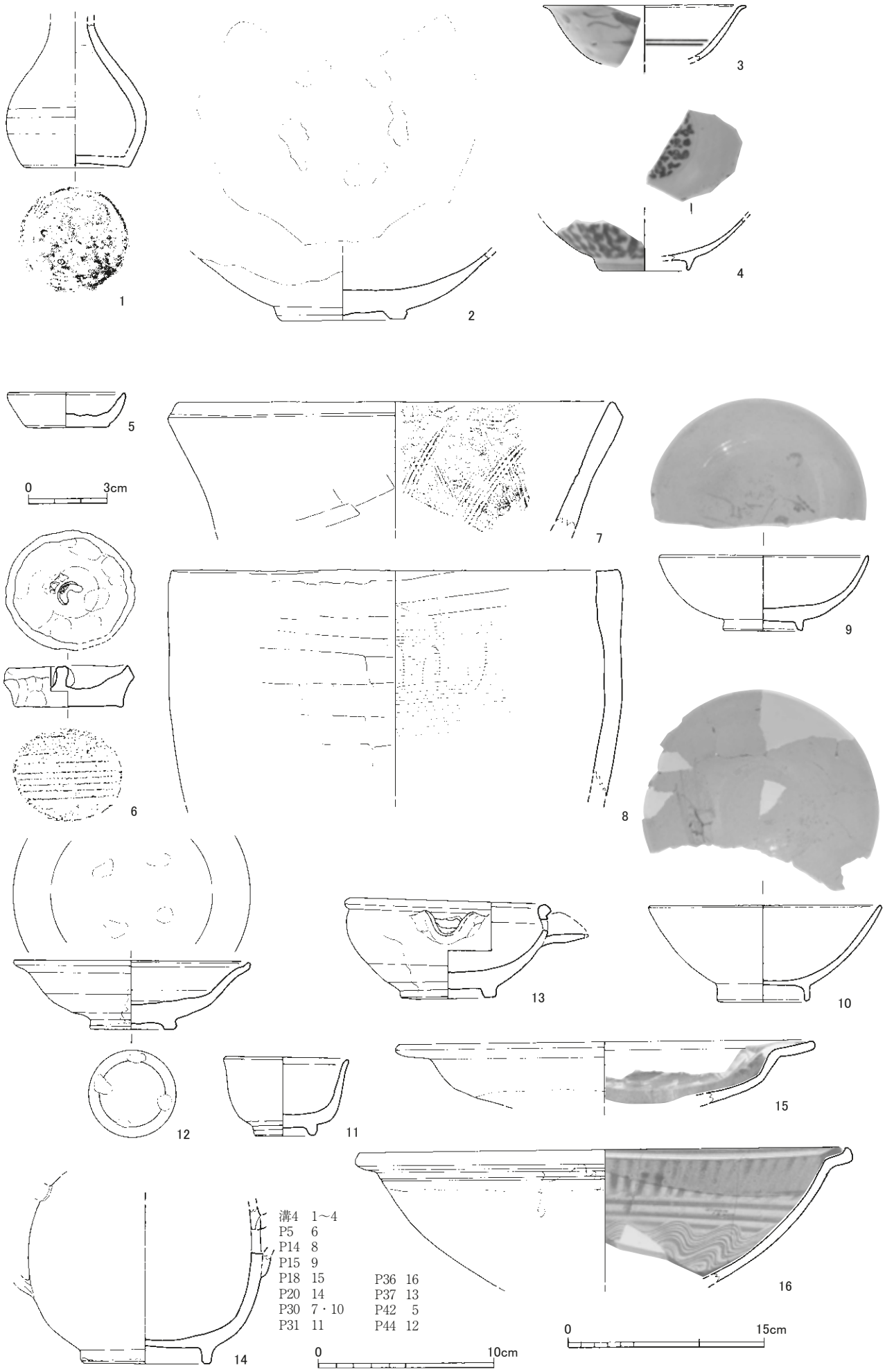


第 23 図　1次調査2号溝状遺構出土遺物実測図5（1/3）

第 24 図　1次調査2号溝状遺構出土遺物実測図6（11 ～ 15 は 1/2、16 ～ 19 は 1/4、他は 1/3）



第 25 図　1次調査 2b・3号溝状遺構出土遺物実測図（6・8・12 は 1/4、2・13 は 1/2、他は 1/3）



第 26 図　1次調査4号溝状遺構・ピット出土遺物実測図（15・16 は 1/4、他は 1/3）

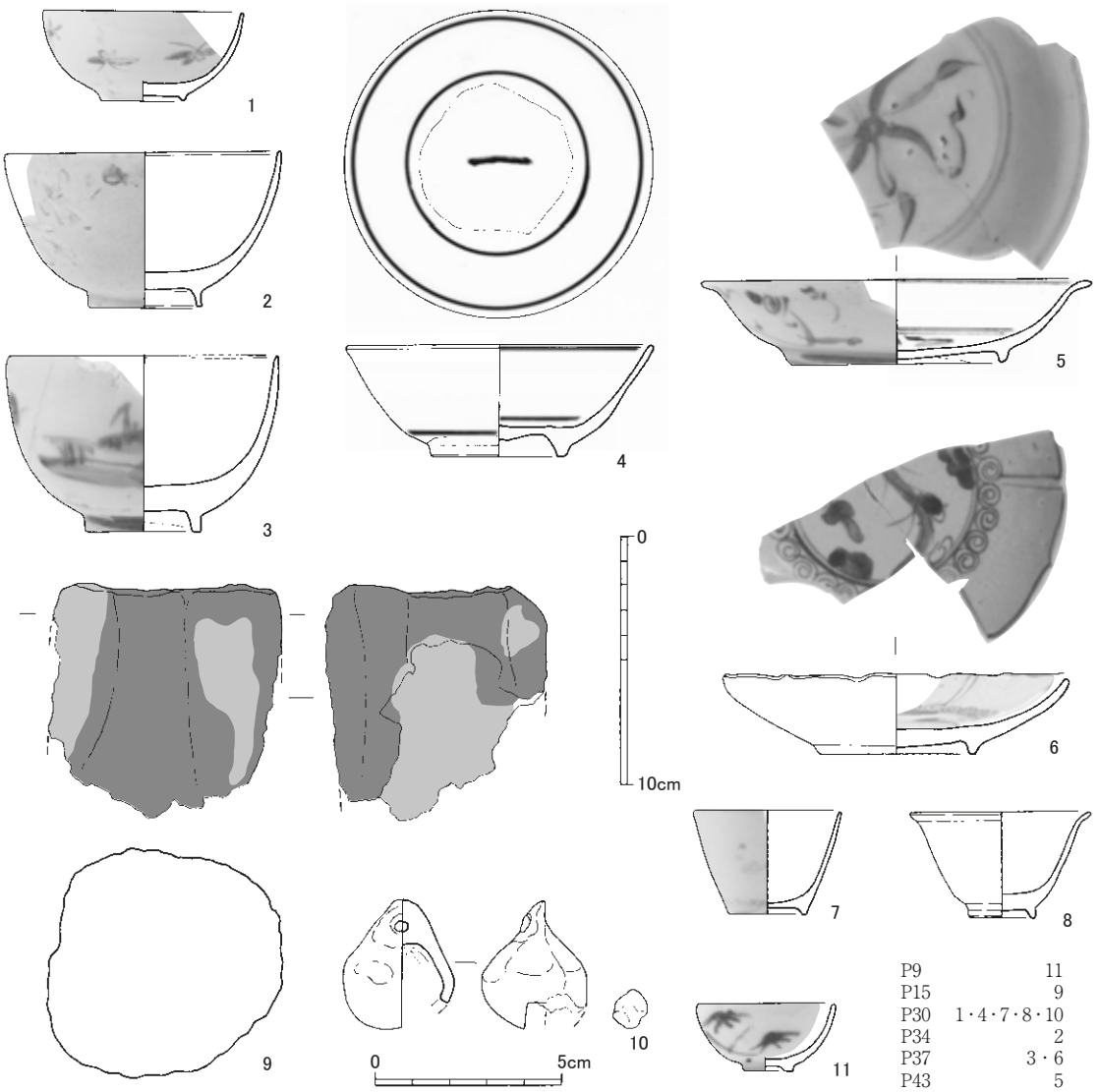
は、口縁部に鉄釉が掛かる陶器摺鉢と見込みに五弁花文が入る染付皿があるので、18 世紀中葉のものだろう。1b 号溝状遺構には見込みに胎土目跡が付く陶器皿が出土しているので、18 世紀前葉だろう。このほかネズミザメ科の椎骨とマグロ属の尾骨が出土している。

出土遺物（図版 3 ～ 5、第 13 ～ 18・30・31）

第 13 図 3 は陶器の皿で、内底の灰釉は重ね焼きのため発色不良である。第 13 図 5 は肥前陶器の瓶で、胴部に鉄絵で「□□原町□」とあるので貧乏徳利だが、柳川城内にそれらしい町名はない。第 13 図 7 は土人形で、胎土や作りの精巧さから博多産だろう。第 14 図 9 は棒状土製品で、表面に被熱が見られないので未使用品か。第 16 図 5 は陶器の半胴甕で、内面に方形のタタキ当て具痕が残る。第 31 図 4 は銅製の手鏡の柄か。19 は棒状の鉄製品で折れ曲がった部分が扁平なので、１つの棒が曲がったものではない。24 は凝灰岩製の槽で、26 は鹿角製の笄である。

２号溝状遺構（図版１・３、第 11 図）

第２面から検出された長辺の南側にのみ石積のある溝で、南側に湾曲している。石積は崩落したところが多かったものの、石列自体が湾曲しているのでプランは間違いない。幅約 50cmを測り、１号溝状遺構と対をなす。その間に 1･4 号礎石建物跡が存在するので、これらの建物の南側溝だっ



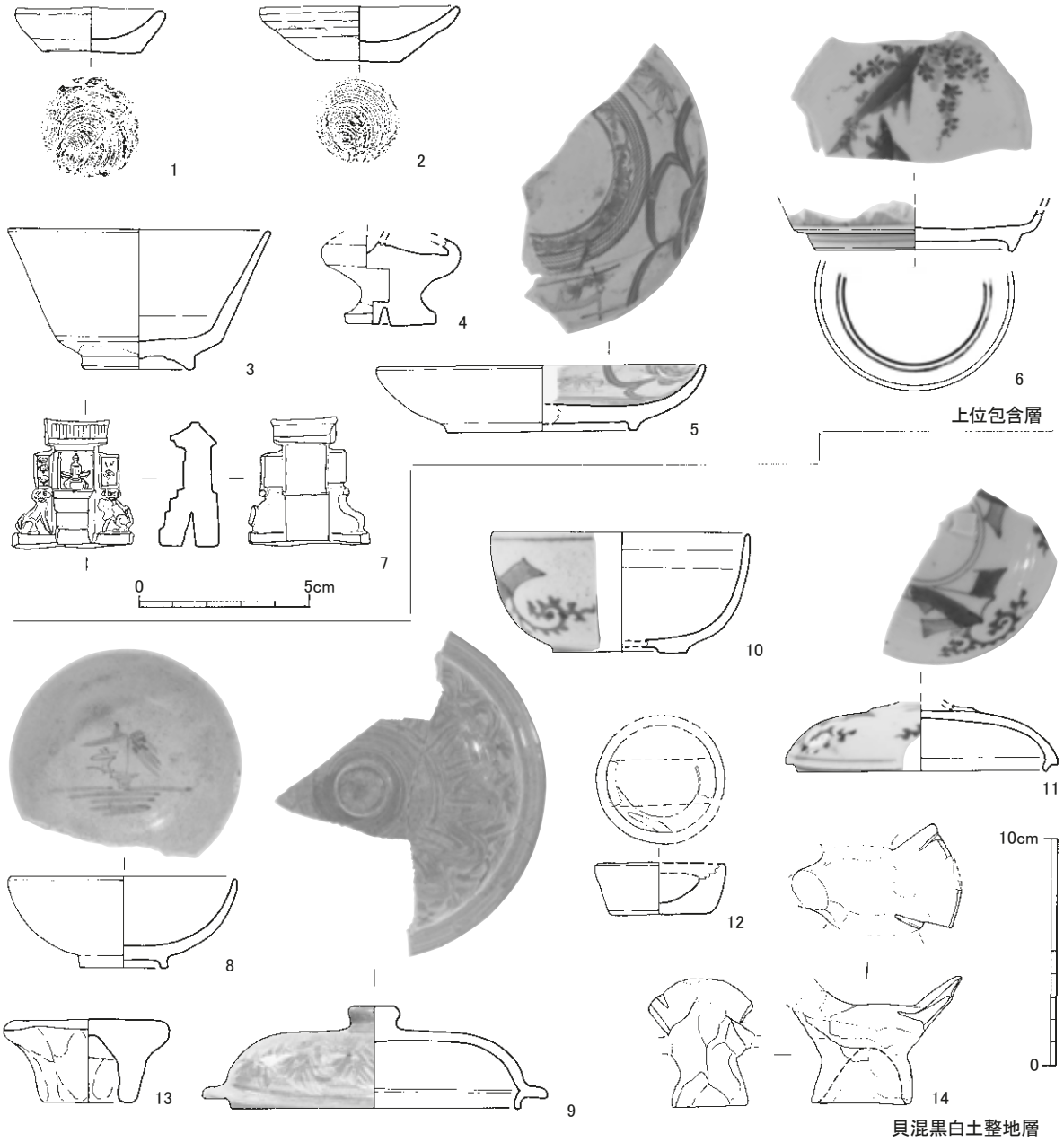
第 27 図　1次調査ピット出土遺物実測図（9 ～ 11 は 1/2、他は 1/3）

たと考えられる。深さについては、第２遺構面の同じ位置に別の溝が存在していたが、これを一緒に掘り下げてしまったため、土層の深さより掘りすぎている。主軸方位はＮ－88°0′－Ｗで、石積は１段の部分が多く、長軸30～40cm規模の比較的大きな川原石を南壁掘り方のテラス部分に乗せている。北壁掘り方にも同様のテラスがあるので、本来両側に石積があったのかもしれない。

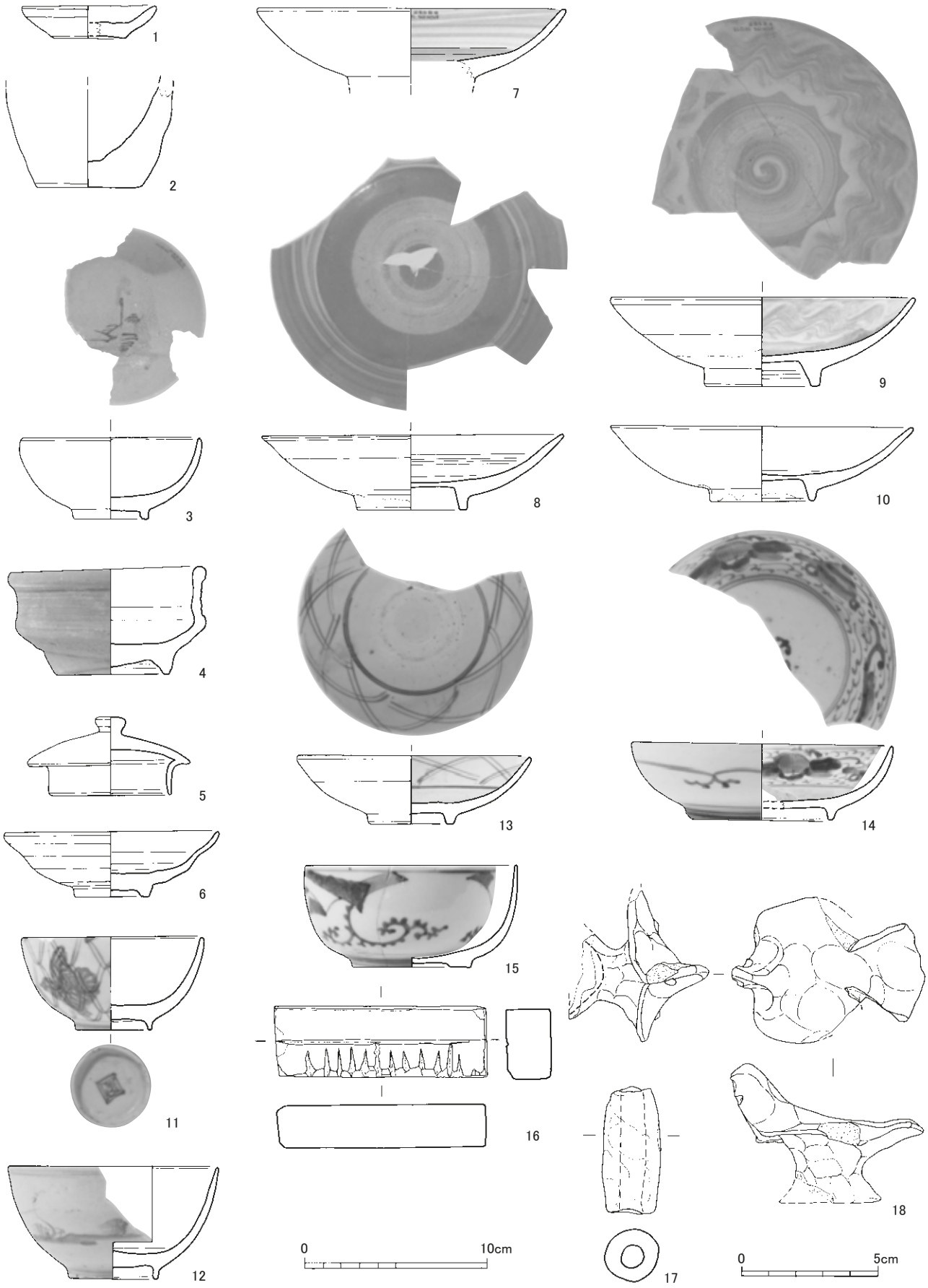
出土遺物の染付から２号溝状遺構一括出土のうち新しいものは18世紀中葉で、2b号溝状遺構は18世紀前葉に属するので、18世紀前葉～中葉に属する。

出土遺物（図版３～６、第19～25・30・31図）

第19図２は土師器の灯明皿で、油煙がべったりつく。第19図５は瓦質土器の釜形土器で口唇部以外が赤変しているのは、内部で火を使ったためである。第19図11・12は京焼風陶器埦で、外底に「清水」「小松吉」の刻印がある。第19図19は陶器の皿で、高台の形態は李朝陶器に近い。釉薬が白くなっているのは２度掛けではなく焼成不良のため。第19図20は土師質瓦で、成型・調整は同じだが、胎土に金雲母が多く入るので搬入品かもしれない。第20図２は染付碗で、透明釉が

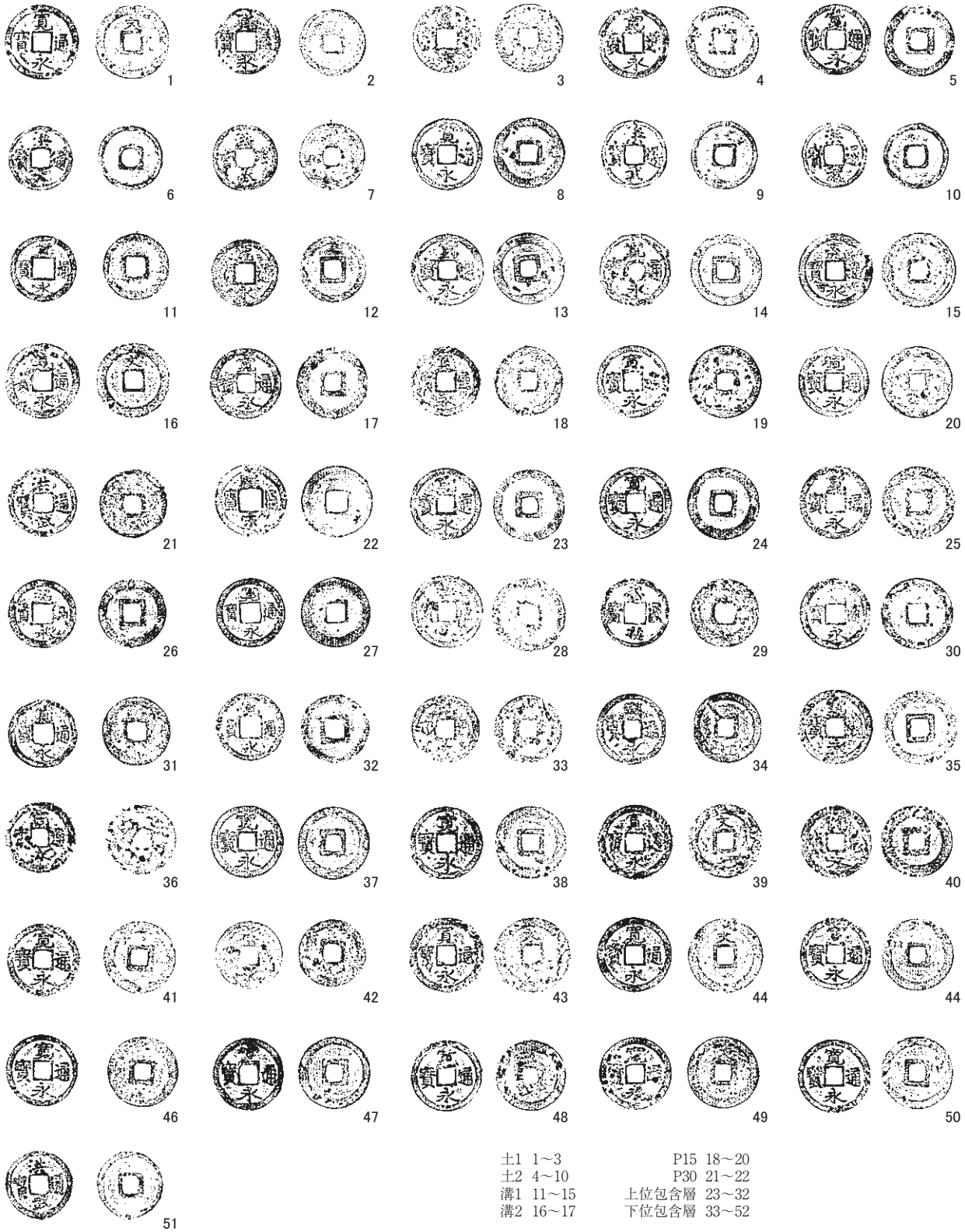


第28図　1次調査上位包含層・貝混黒色土整地層出土遺物実測図（7・12～14は1/2、他は1/3）



第 29 図　1次調査中位包含層出土遺物実測図（17・18 は 1/2、他は 1/3）

厚い。第20図6・7・8は染付碗で、外面花唐草文の揃いである。第20図18・19は染付の蕎麦猪口で、外面菊花文の揃いである。第24図4は染付水注で、墨書らしいものがあるが判読できない。第31図23は硯で、表面には格子目文が線刻され、裏面には「夫」を2行の中心に置き、右側に「喜八うみ」左側に「橋□□松五」と書かれている。側面には「六月廿四□□」とあり、硯の所有者の名前かもしれないが、表面の格子目は呪術的なものだとすれば、そのまじないに関わる人物と日付が書かれているのかもしれない。



土1　1～3　　P15　18～20
土2　4～10　　P30　21～22
溝1　11～15　　上位包含層　23～32
溝2　16～17　　下位包含層　33～52

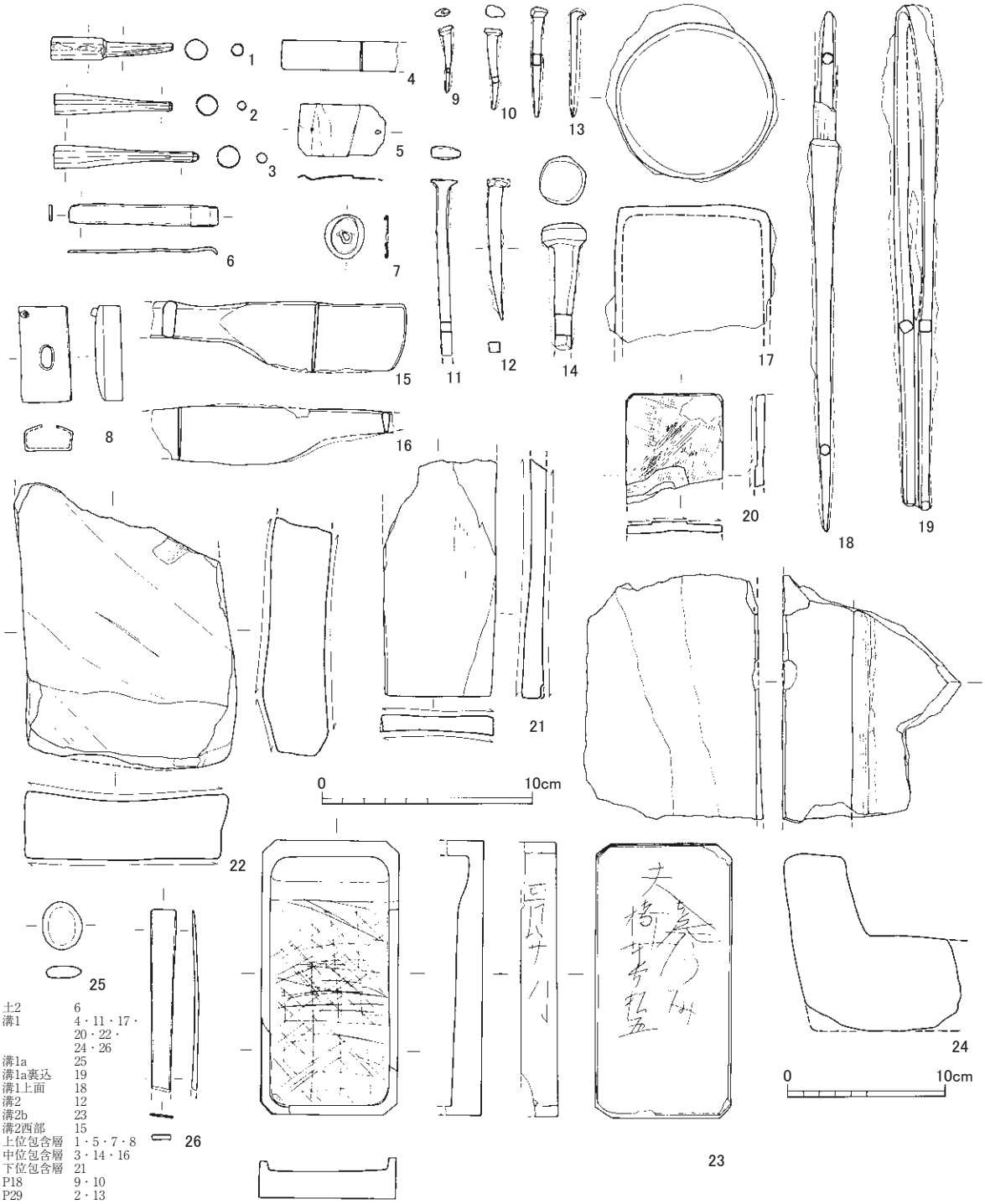
第30図　1次調査出土銅銭（1/2）

３号溝状遺構（第５図）

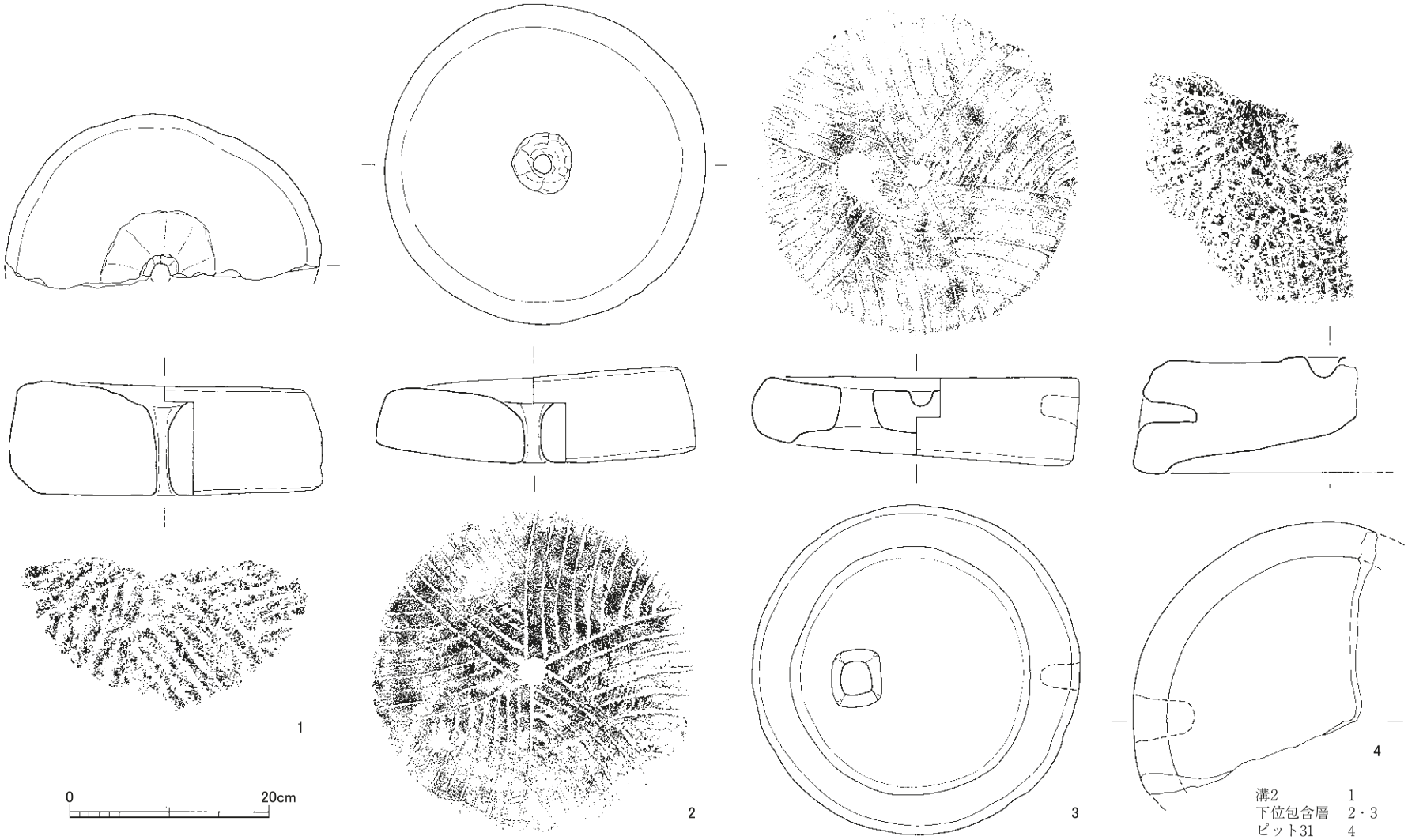
調査区南端の第２遺構面から検出された主軸方位Ｎ－82°0′－Ｗの浅い溝で、直線的ではなく、南壁中位で途切れている。出土遺物はほとんどなく時期を特定できないが、1・2号掘立柱建物跡の柱穴に切られているので、それ以前の時期だろう。

出土遺物（図版４、第25図）

13は土人形の頭部で、後ろ髪を結った表現をしている。



第31図　1次調査出土金属・石・鹿角製品（19・22・24は1/4、他は1/3）



第 32 図　1 次調査出土石臼実測図（1/6）

４号溝状遺構（第７図）

調査区南端の第３遺構面から検出された溝だが、３号溝状遺構の下位が残った可能性がある。出土遺物はほとんどなく時期を特定できない。

出土遺物（第 26 図）

第 26 図１は小瓶で、外底に貝目跡が残る。

ピット出土遺物（図版４～６、第 26・27・30 ～ 32 図）

第 26 図８はピット 14 出土の土師質土器の焜炉で、土管の可能性もある。第 27 図３はピット 37 出土の染付碗は、透明釉が全面に掛からない珍品である。第 27 図５はピット 43 出土の染付皿で、明青花のモチーフを模倣したものか。

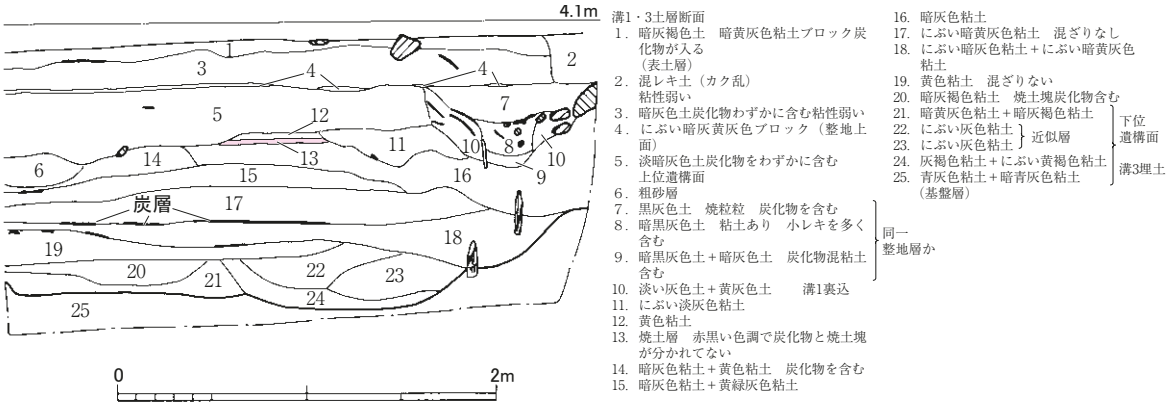
包含層・整地層・その他出土遺物（図版３～６、第 28 ～ 32 図）

第 28 図 9・10 は貝混黒色土整地層出土で、９は陶器の蓋で、返りが低いので壺蓋だろう。10 と 11 は染付鉢の蓋と身のセットで、第 29 図 15 は中位包含層出土で、第 28 図 10 とは別個体の揃いである。第 29 図１は土師器小皿で、内底が赤変しているので、焼き塩の蓋か。第 29 図 16 は瓦質の物差で、目盛りの裏面は焼成時の表面にあたり、灰黒色を呈する。図は掲載できなかったが、図版４－１・２は下位包含層出土で、１は陶器皿で同様の皿が多く出土している。このほか陶器質の胎なので中国漳州窯と見られる白磁の輪花小皿もある。２は染付杯で、これらの遺物から下位包含層の時期がわかる。図版５－１は出土地不明の施釉陶器の土人形の兎に乗った大黒像で、緑灰色の灰釉が全面にかかる。図版５－２は下位包含層出土の土師器小皿の完形品である。

小結

１次調査では、共通する４つの遺構面のうち、最上面が失われており、第２面からしか残っていなかった。第１遺構面に５棟の礎石建物があり、石組溝で区画された２つの屋敷地で建て替えが行われている。これらの建物は、調査区の東側に２つの火床があることから入り口側にカマドを持つ土間があったことが想定される。また、方形プランの土坑や径の大きいピットも東側に集中しており、土坑は土間を掘り込んだ施設で、大きいピットは埋甕の抜き取り穴であった可能性がある。

第２遺構面からは柱穴内に敷石をもつ掘立柱建物跡２棟と土坑１基・溝１条が検出された。江戸時代の街道沿いに側溝があることを想定して、東壁側にトレンチを入れて整地面を基盤層まで掘り下げたが、基盤層の堆積の差異があるのみで側溝は確認できず、存在しないものと判断した。



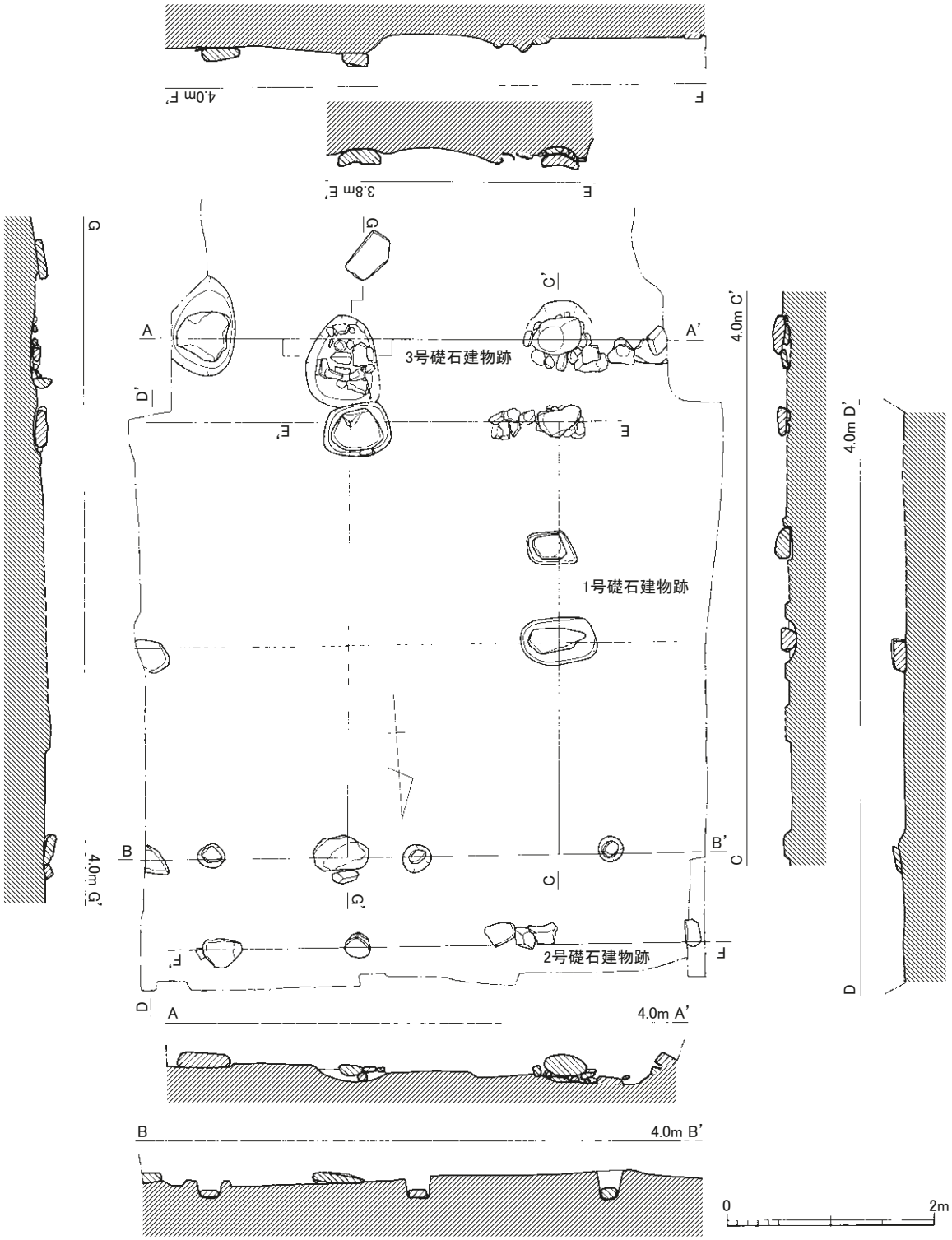
第 33 図　２次調査１区西壁土層断面実測図（1/40）

３　２次調査１～５区の遺構と遺物

２次調査は用地が取得でき、地権者・土木事務所の工事工程の調整が終了した区画から調査に着手した。そのため、現道の東西を跨いで調査区番号が入り組んでいる。

1 区

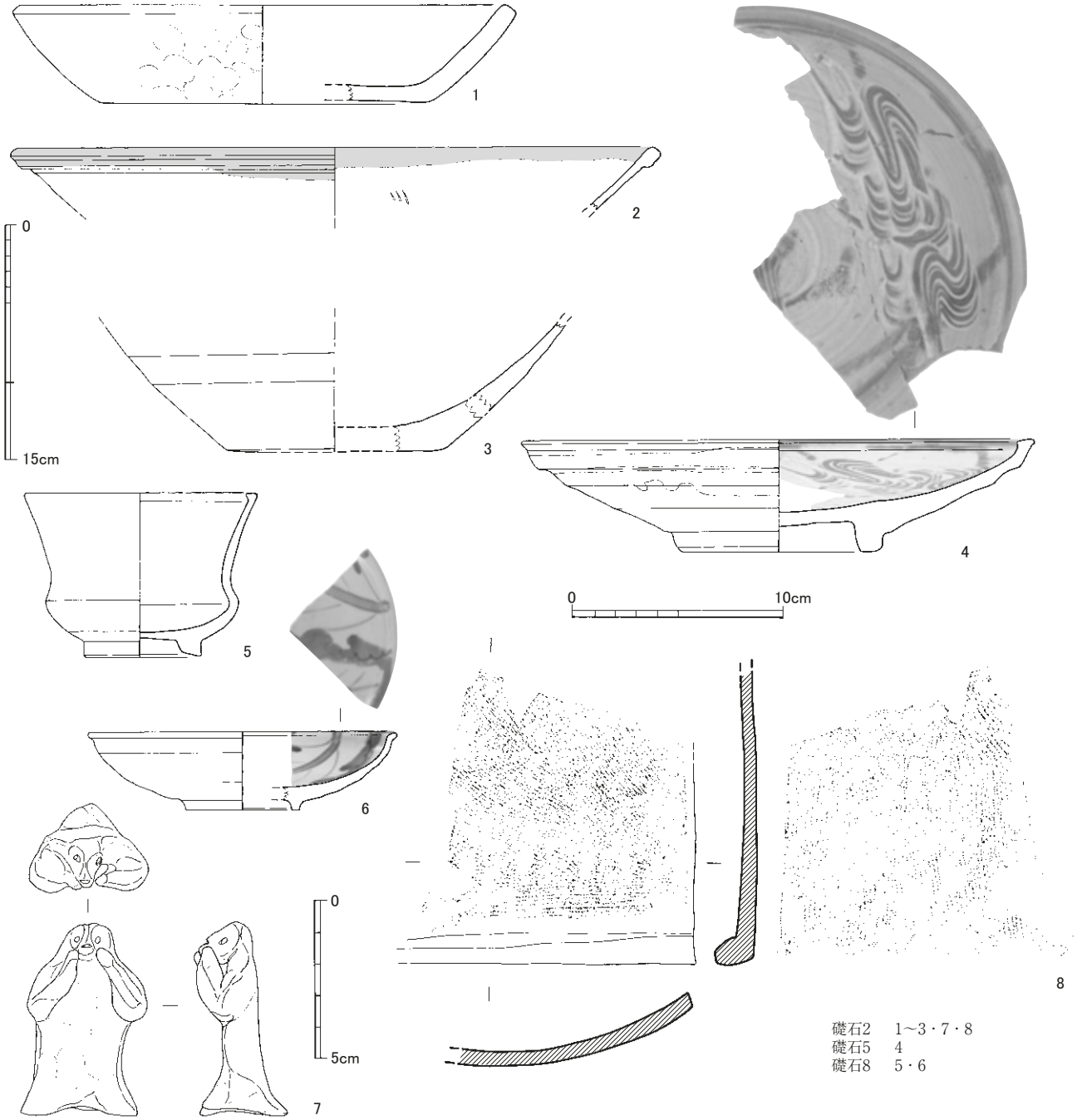
１区は西側の中央部にあり、保加町 62 番地で、既存の家屋が用地にかかっていなかったことか



第 34 図　2次調査1区１～３号礎石建物跡実測図（1/60）

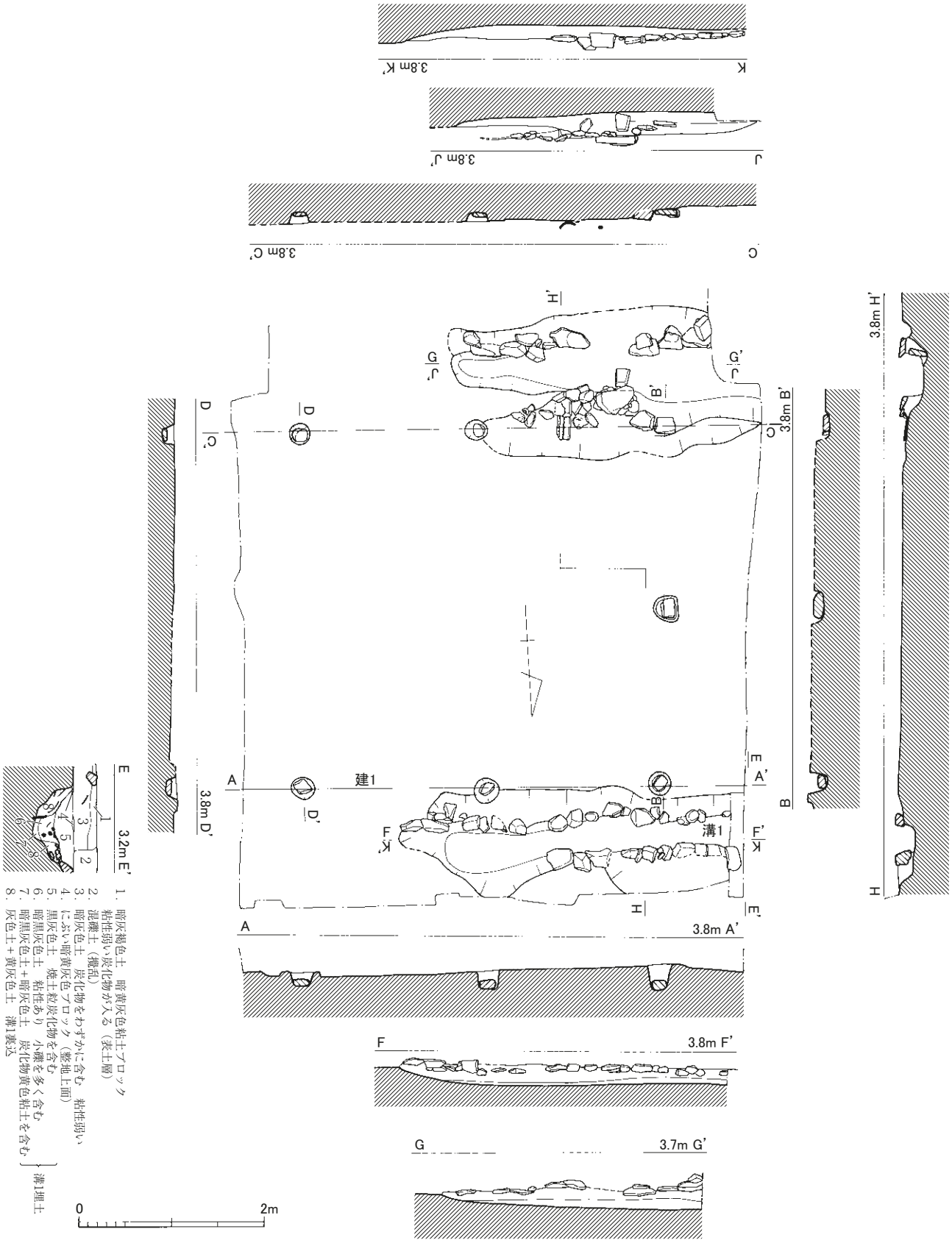
ら最も早く調査着手となった。平成27年4月30日に重機を入れて表土剥ぎ開始、5月7日に機材を搬入した。5月27日には第２遺構面の調査に着手し、6月4日に終了した。

この調査区は地表面が北側の隣接地から30㎝程段高いが、第１遺構面は西壁で標高3.7ｍである。黄色粘土の遺構面があったが、やや安定していなかったので、この面を掘り下げるとすぐ下に礎石を見ることができた。この面の東部に茶色に硬化した部分があり、上層とは明瞭に剥がれたのでこれを第１遺構面とした。遺構面は多様な土壌で整地されていたため土坑と誤認した部分もあった。これは落ち込みとして出土遺物（第38・44・45図）のみ掲載する。掘り下げると共通第１面と第２面がほぼ同一面に存在することがわかった。共通第２面で検出した１号土坑は、異なる客土で整地されたものとみられ、整理段階で遺構から除外し第１遺構面・客土とした。第１遺構面の下には礎石が見られた面があったが、礎石が小さく遺構面としてはほとんど残っていなかったことから、共通３面となるこの面を掘削し、その下の基盤層上の遺構面を第２遺構面とした。南側に塩化ビニー



第35図　2次調査1区礎石出土遺物実測図（7は1/2、2・3・8は1/4、他は1/3）

ルパイプがあるので、中央部だけを掘削した。第２遺構面検出のピットは木質が腐食した軟質粘土が埋土となったものが多く、炭化物の入る包含層の埋土が入るものは浅い。共通第３面は標高3.5ｍ、第４面は標高 2.8 ｍである。



第 36 図　2次調査1区1号掘立柱建物跡、1・2 号溝状遺構実測図（1/60）

１号礎石建物跡（図版７、第 34 図）

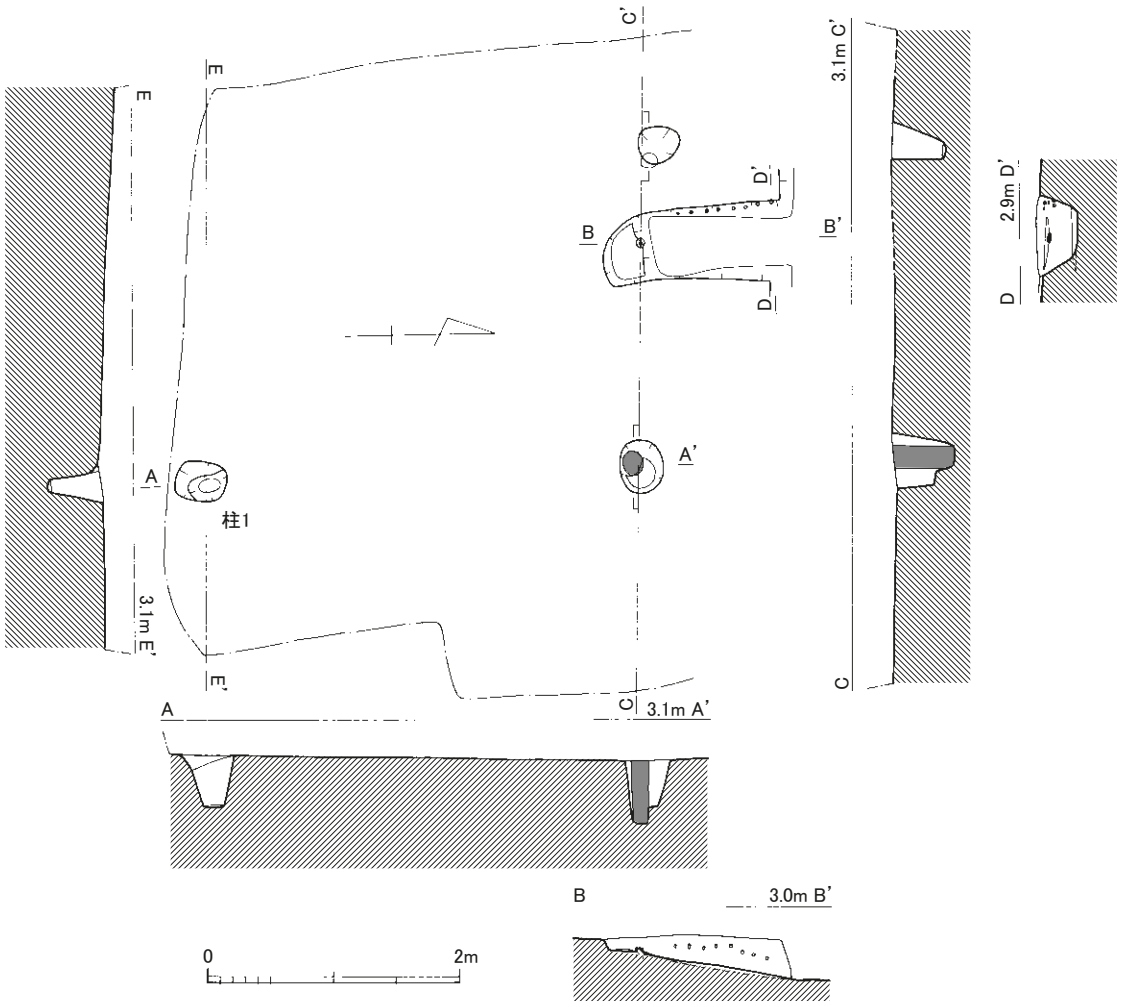
第２面から検出された建物跡で、１・２号溝状遺構の間に位置する。N － 84° 0′ － Wを主軸とする２間×３間以上で、礎石１・７・８が残る。中央の礎石は後世の掘り込みで失われている可能性が高い。西辺は柱間が多いので、床柱が含まれる可能性がある。短軸は 4.0 ｍで、長軸は 5.5 ｍ以上を測る。この建物とほぼ同じ位置に１号掘立柱建物跡があり、柱穴の切り合いはないものの、検出面の差から１号掘立柱建物跡の建て替えと考えられる。礎石は１・２号溝状遺構の石積の上にあるが、単に壊しているのではなく、礎石根石として利用したものと考えられる。東端部に硬化面があり、土間の可能性が高い

出土遺物（第 35 図）

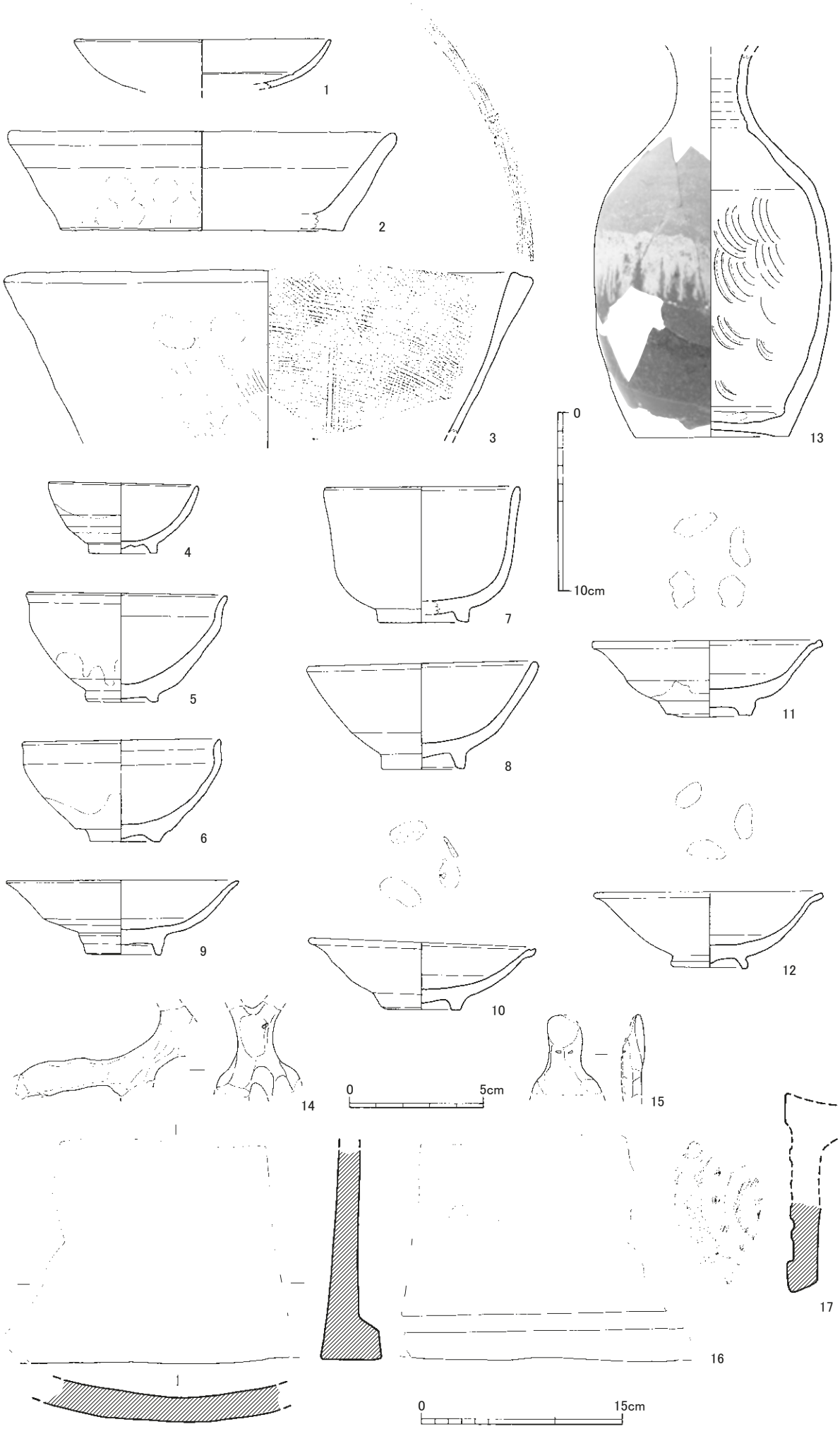
第 35 図５は礎石８出土の肥前陶器の香炉で、口縁部内面が欠損しているのは灰吹きとして使用したものだろう。

２号礎石建物跡（図版７、第 34 図）

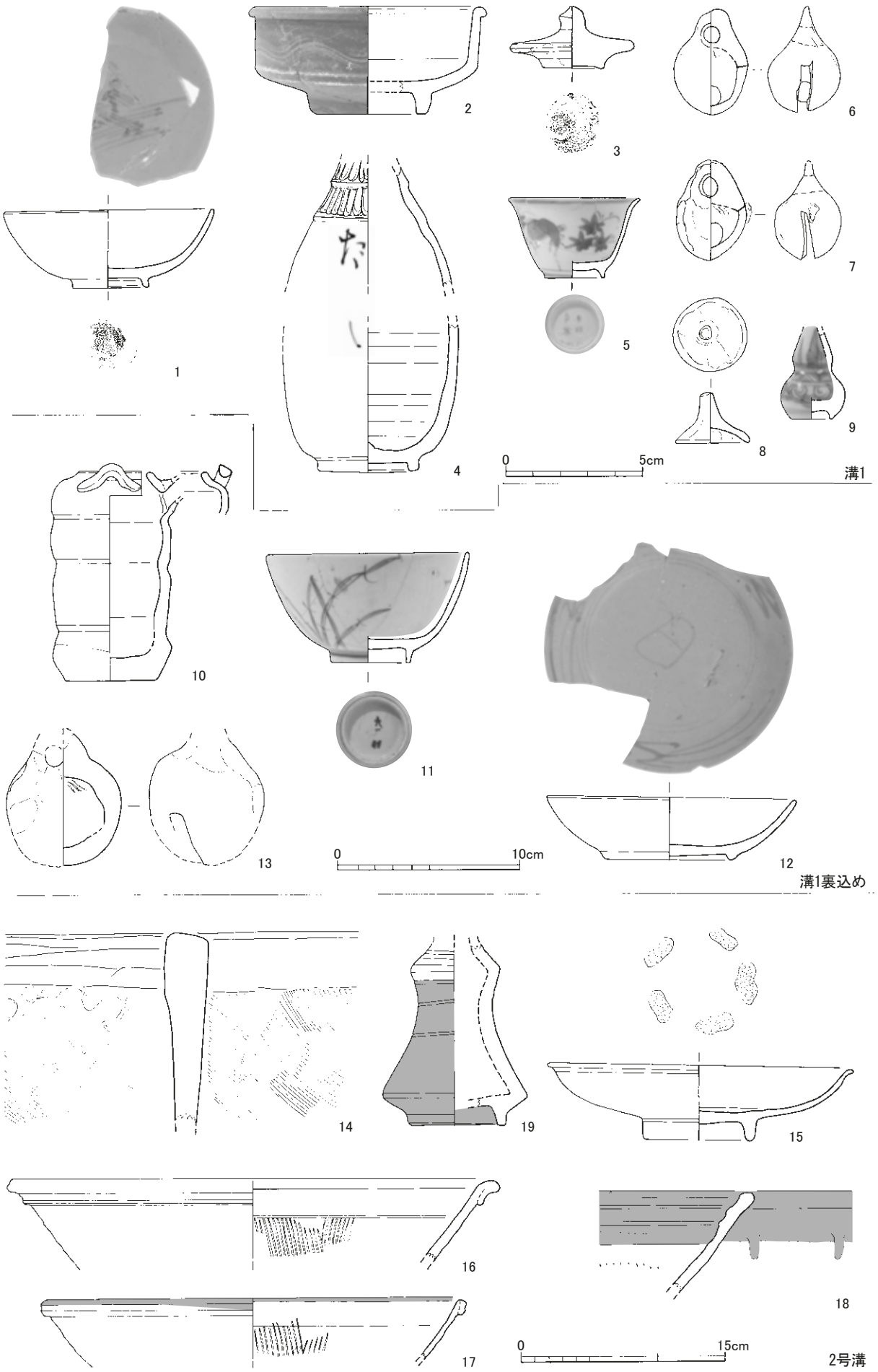
第２面から検出された建物跡で、１号溝状遺構の北側に位置する。建物の南辺が検出されたのみで３間以上であろう。長軸は 5.4 ｍ以上を測る。西端の礎石は１号溝状遺構の石積を利用しており、同時併存と見てよい。したがって、N － 84° 0′ － Wを主軸とし、１号礎石建物跡とも併存し、１号溝状遺構を側溝として共用していたとすれば、非常に短い屋根が隣接していたことになる。図化できる出土遺物がなく、時期を特定できない。



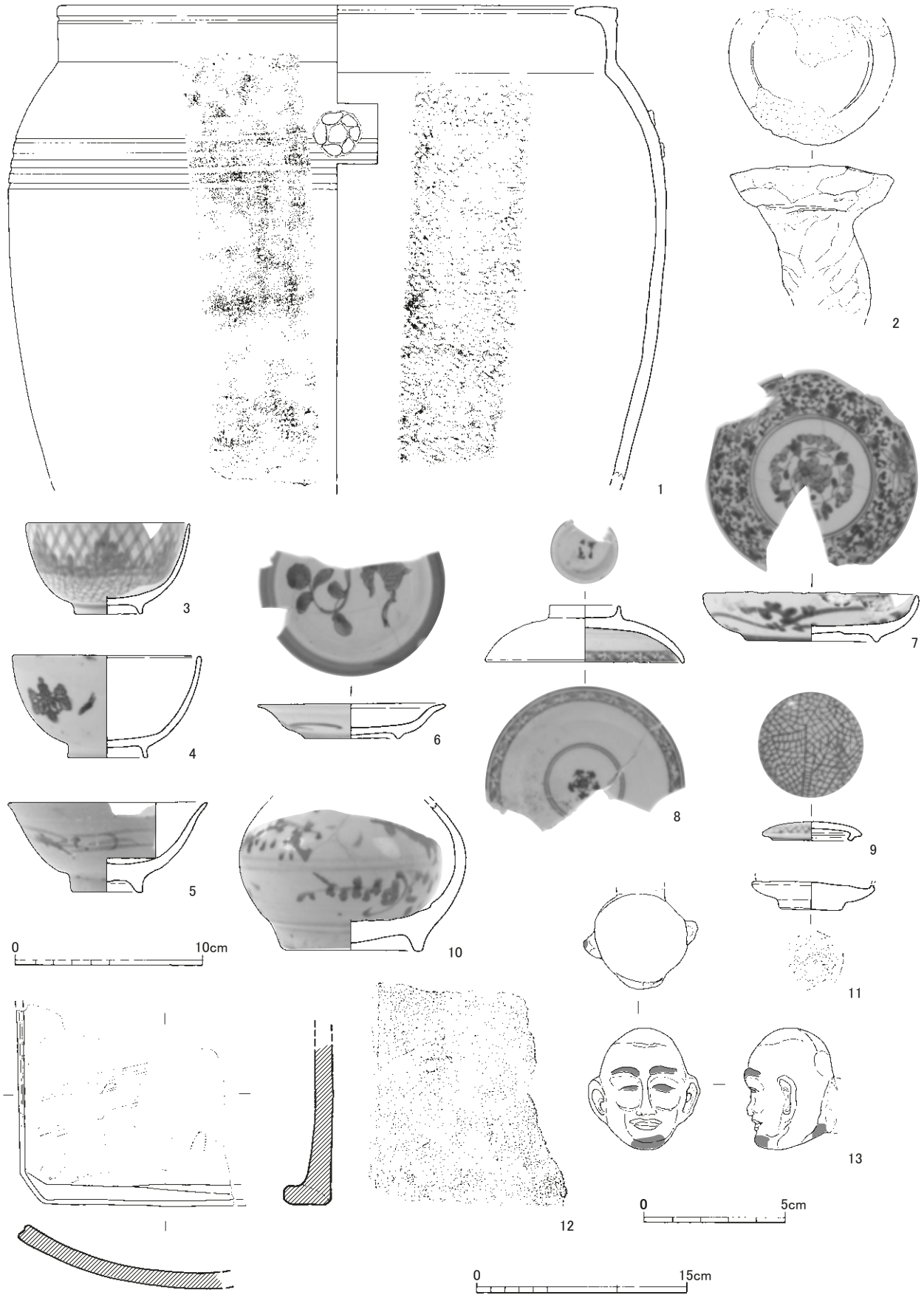
第 37 図　２次調査1区２号掘立柱建物跡実測図（1/60）



第 38 図　2次調査1区落ち込み出土遺物実測図（14・15 は 1/2、16・17 は 1/4、他は 1/3）



第 39 図　2次調査1区 1・2 号溝状遺構出土遺物実測図（6 ～ 9・13 は 1/2、14・16・17 は 1/4、他は 1/3）



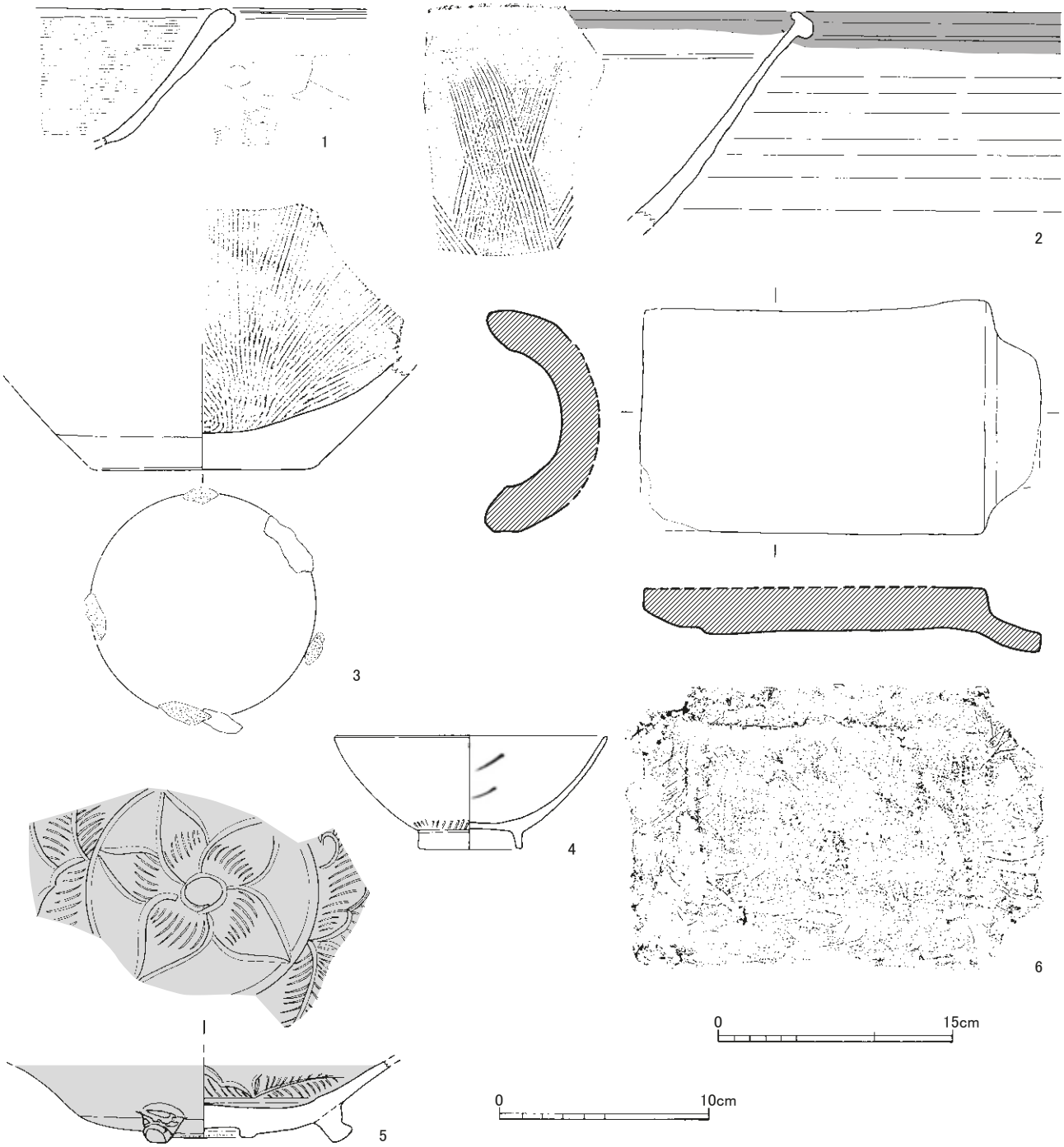
第 40 図　2次調査1区2号溝状遺構出土遺物実測図（1・2 は 1/4、13 は 1/2、他は 1/3）

３号礎石建物跡（図版７、第 34 図）

第２面から検出された大型の礎石で構成される建物跡で、礎石２・３・６が残る。２号溝状遺構の南側に位置し、建物の北辺が検出されたのみで、長軸は 4.75 m以上を測る。西端の礎石は２号溝状遺構の石積を利用しており、同時併存と見てよい。したがって、N － 84° 0′ － Wを主軸とすると考えられる。１号礎石建物跡とも併存し、２号溝状遺構を側溝として共用していたとすれば、短い屋根が隣接していたことになる。

出土遺物（第 35 図）

第 35 図７は礎石２出土の土人形の騎人である。



第 41 図　２次調査1区２号溝状遺構出土遺物実測図（6 は 1/4、他は 1/3）

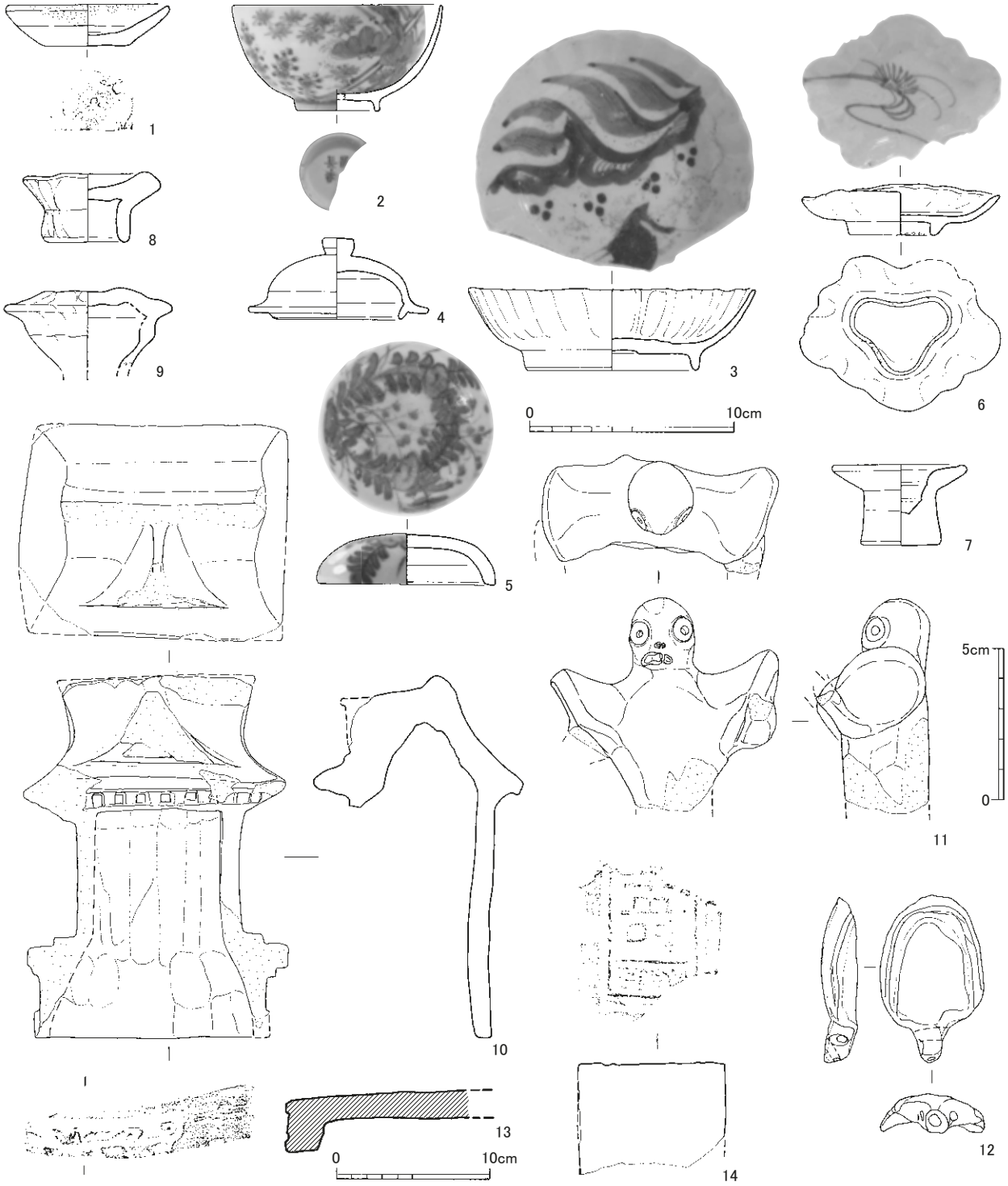
１号掘立柱建物跡（図版７、第 36 図）

第２面から検出された建物跡で、柱穴の底面に敷石した小型の柱穴で構成されるもので、1・2号溝状遺構の間に位置する。N － 80° 40′ － Wを主軸とする２×３間以上で、中央の柱穴は後世の掘り込みで失われている可能性が高い。短軸は 3.9 ｍで、長軸は 4.8 ｍ以上を測る。この建物とほぼ同じ位置に１号礎石建物跡があり、柱穴の切り合いはないものの、検出面の差から１号礎石建物跡を建て替えたものと考えられる。

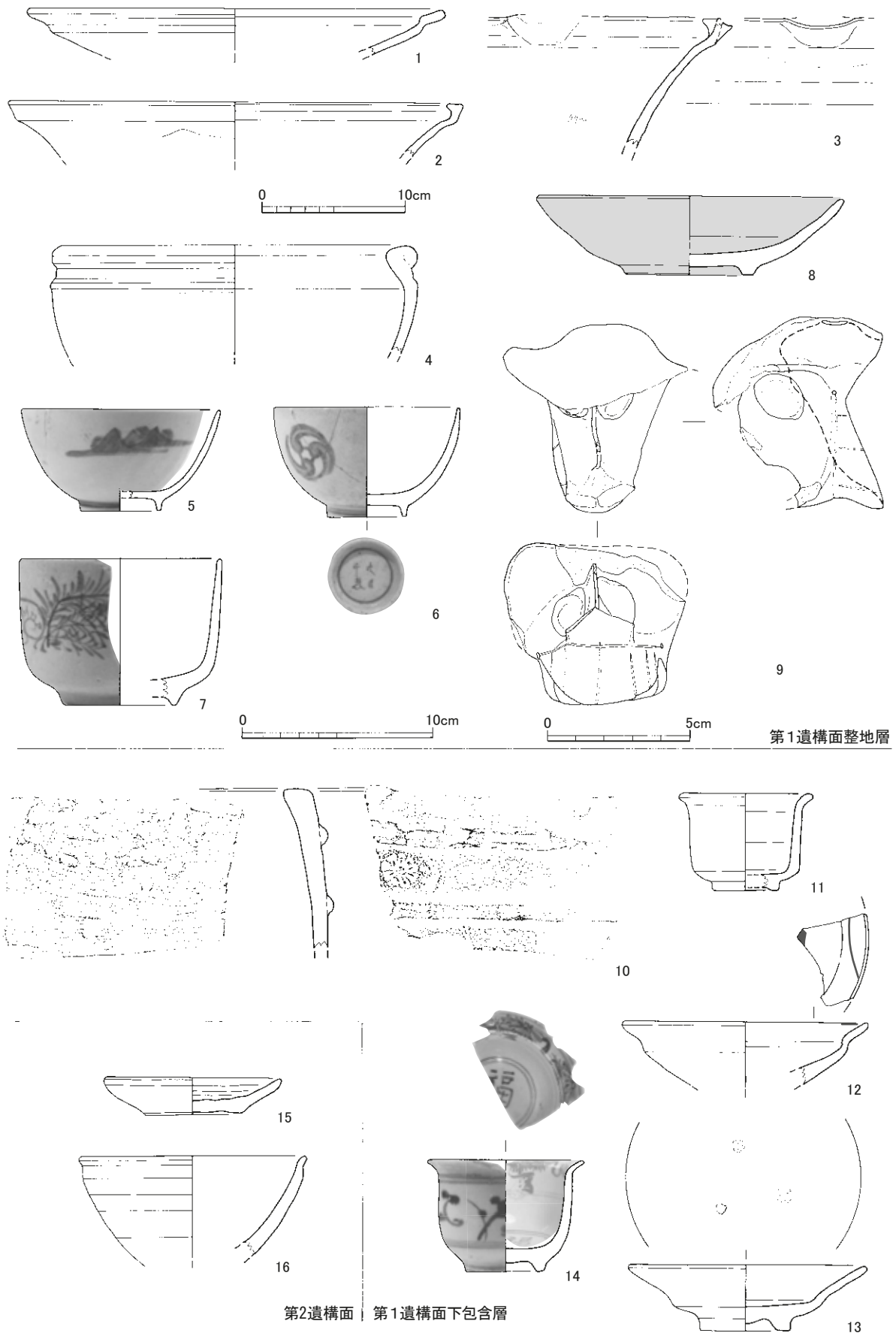
図化できる出土遺物がなく、時期を特定できない。

出土遺物（第 46 図）

柱１に第 46 図の柱が残っていた。６面が面取りされ、下端面は丸く削られている。



第 42 図　2次調査1区上位包含層出土遺物実測図（5 ～ 12 は 1/2、13 は 1/4、他は 1/3）



第 43 図　2次調査1区第１遺構面整地層・第１遺構面下包含層・第2遺構面出土遺物実測図（9は 1/2、2は 1/4、他は 1/3）

２号掘立柱建物跡（図版８、第 37 図）

第４面から検出された柱穴のうち、深いピットから復元した建物跡で、確証に欠ける。N － 80° 30′ － Wを主軸とする１×１間以上で、短軸は 3.43 m、長軸は５m以上を測る。１号溝状遺構に伴うものと見られ、溝から突出する部分は建物からの排水になるか。壁は竹で護岸されていた。

図化できる出土遺物がなく、時期を特定できない。

１号溝状遺構（図版８、第５・36 図）

第２面から検出された長辺の両側面に石積のある溝で、幅約 30cmを測り、２号溝状遺構と対をなす。その間に１号礎石建物跡と１号掘立柱建物跡が存在するので、N － 80° 40′ － Wを主軸とするこれらの建物の北側溝だったと考えられる。

石積は上位が失われているものと見られ、ほぼ最下段のみだが部分的に２段残っていた。床面は東から西に傾斜しており、東端は当時の幹線道路まで達していない。

出土遺物（図版９・10、第 39・44・45 図）

第 39 図２は陶器の鉢で、外底は重ね焼きのため橙色化している。第 39 図 10 は裏込め出土で、陶器の水注で、形態から茶道具の水指を模倣したものだろう。

２号溝状遺構（図版７・８・10、第５・36 図）

第２面から検出された長辺の両側面に石積のある溝で、N － 80° 40′ － Wを主軸とする幅約 40 cmを測る。１号溝状遺構と対をなし、その間に１号礎石建物跡と４号掘立柱建物跡が存在するので、これらの建物の南側溝だったと考えられる。石積は上位が失われているものと見られ、ほぼ最下段のみだが部分的に２段残っていた。１号礎石建物跡の柱が石積の上にあるが、単に壊しているのではなく、礎石の根石として利用したものと考えられる。床面は東から西に傾斜しており、東端は当時の幹線道路まで達していない。裏込内に丸瓦が凹面を上にして入っていたが、樋に転用したものではない。溝内からも瓦が出土している。

出土遺物（図版　、第 39・40・44・45 図）

第 39 図 15 は陶器の小皿で、外面胴下位に砂目付着し、重ね焼きのためやや赤みがある。第 40 図 13 は土人形で、首が後頭部側についているので、首を突き出したか上を向いた姿勢のようだ。

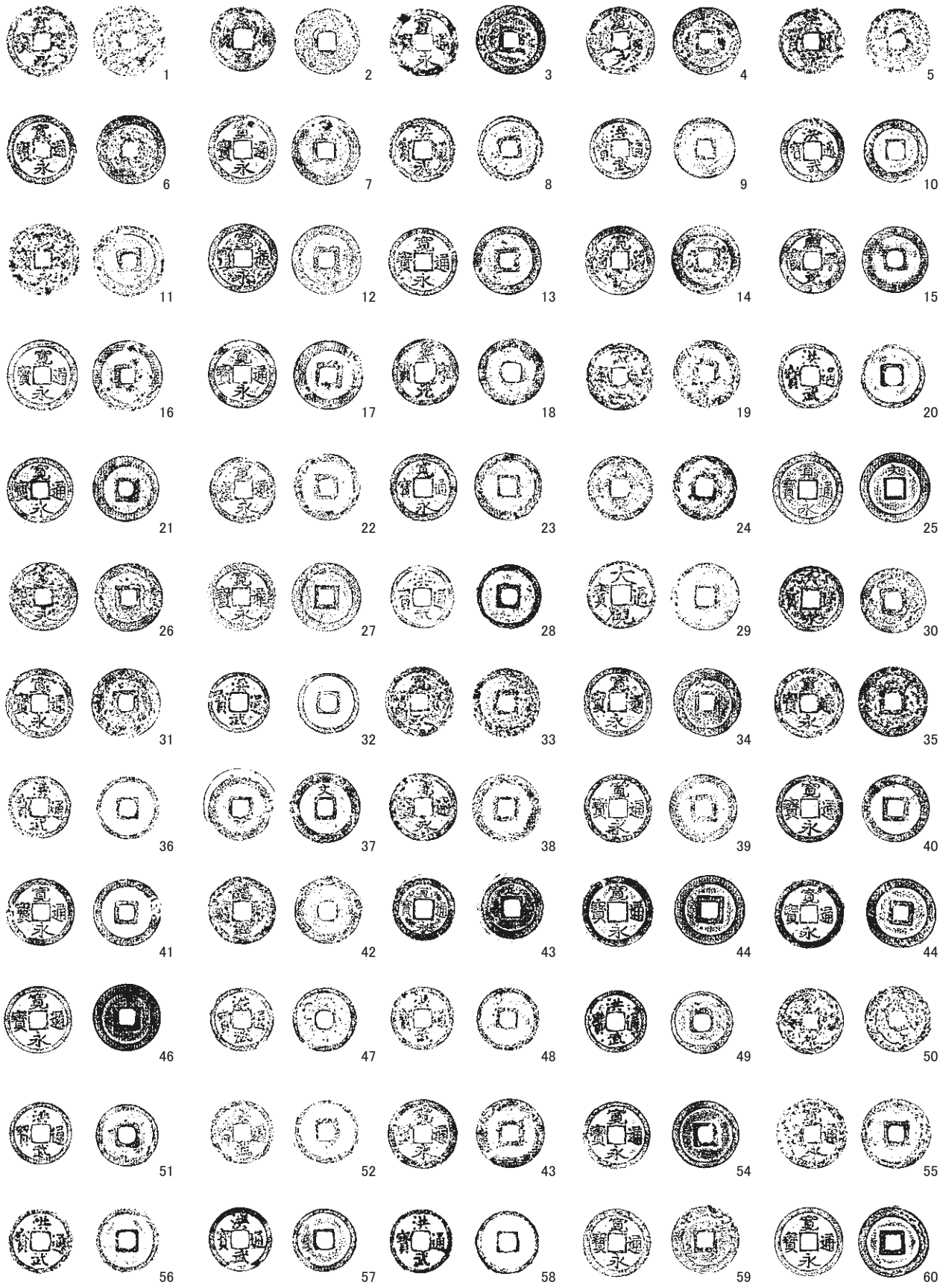
このほか、頂部が打ち掻かれた２枚貝の貝殻やウマの臼歯が出土している。

３号溝状遺構（図版８、第７・33 図）

第４面から検出された素掘りの溝で、南側に突出部を持つ。N － 87° 20′ － Wを主軸とする幅約 140cm、深さ約 30cmを測る。突出部の西壁には１号柵跡があり、２号掘立柱建物跡と関連しているものと見られるので、本遺構も２号掘立柱建物跡に伴う可能性が高い。

その他の出土遺物（図版９・10、第 42 ～ 45 図）

第 42 図１はピット１から出土した土師質土器の炮烙で、変色していないので火にかけてない。第 38 図は第１遺構面検出の落ち込み遺構出土遺物で、11 は陶器の小皿で、外面胴下位に砂目付着し、重ね焼きのためやや赤みがある。13 は陶器の瓶で、図上接合である。図化していないがピッ

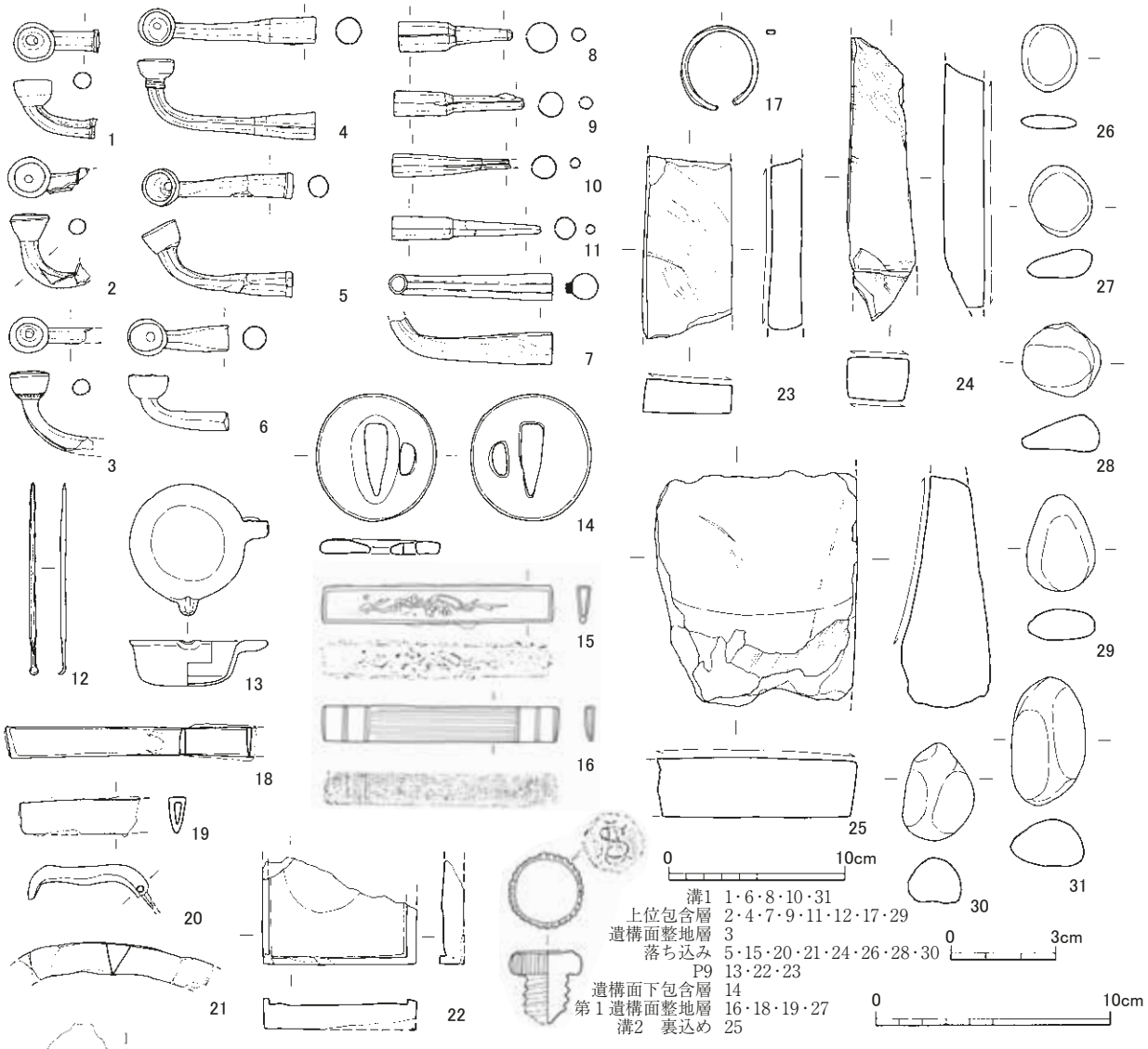


礎石3　1
礎石4　2
礎石10　3
礎石11　4
落ち込み　5～20

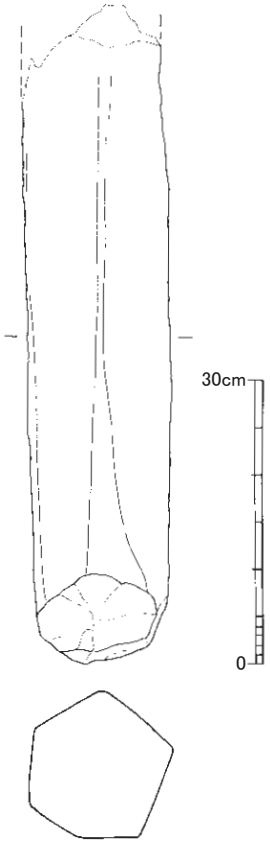
溝1　21～25
溝2　26
ピット8　27
ピット9　28

上位包含層　29～45
第1遺構面　48～60
出土地不明　61

第 44 図　2次調査1区出土銅銭拓影（1/2）



第45図　2次調査1区出土金属・石・ガラス製品（7・26～31は1/2、他は1/3）



第46図　2次調査1区
出土木製品（1/4）

ト15からは内外黒漆椀が出土している。第42図10・11は上位包含層出土の土人形で、10は天神の祠堂であろう。天神人形は別作りらしく剥離痕跡はない。11は騎人で、鎧の肩の部分が突出している。第43図4は第1遺構面整地層出土の陶器の鉢で、口縁部に施釉しないことから肥前ではないのではないか。第43図9は第1遺構面整地層出土の土人形で、大牟田市の大蛇祭りの大蛇に似ている。耳の先端は薄く、歪みが大きい。第43図13は第1遺構面下包含層出土の陶器小皿で、白磁を模倣したような変わった器形である。第43図15は第2遺構面出土の土師器の小皿で、外底に工具痕がある。第43図16は第2遺構面出土の陶器の天目埦で、瀬戸焼を模倣したものか。

小結

１区では、１面は２条の石組溝の間に礎石建物が建て替えられ、１次調査区と同様に石組溝は現道まで達していないかった。道路に面した部分の屋根はこの溝を雨落ち溝にしているので、道路面側と石組部分では屋根構造が異なっていたと考えられる。2・３面は掘立柱建物跡が１面の礎石建物跡とほぼ同じ位置に検出されたので、大きな区画の変動がなかったことがわかった。

遺物としては小束と碁石が多く見られた。小束は細かい細工をするための工具なので、細物屋の家屋だったのかもしれない。

２区

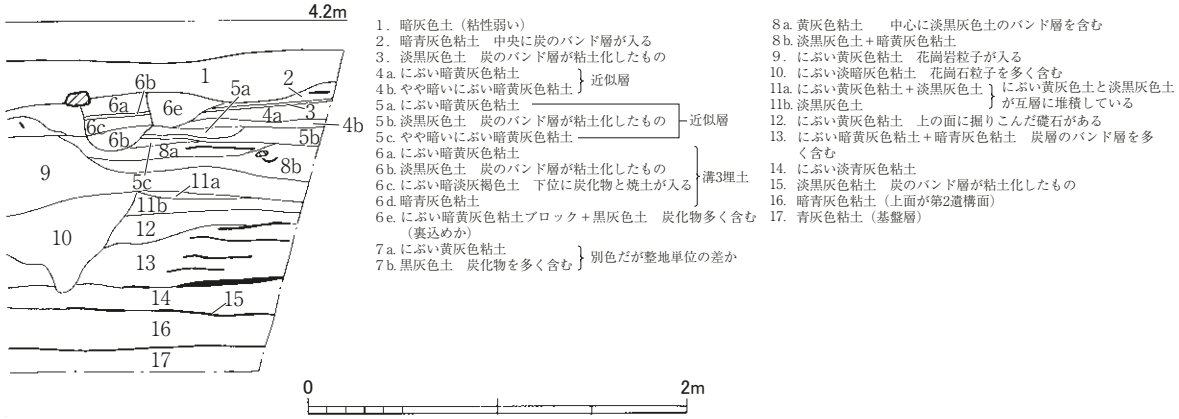
２区は保加町 63 番地で、東側中央部に位置しており、調査区北側のヤクルト営業所の駐車場の移転地の調整がつくまで、南側のアスファルト通路の付け替えができないため、その間を調査した。

平成 27 年６月８日に重機を入れて表土剥ぎ開始した。第２遺構面を６月 29 日に空撮し、さらに掘り下げ、第３遺構面を調査した後、７月 21 日に写真撮影、24 日に撤収した。

この調査区では３つの遺構面があったが、第１遺構面は標高 3.8 ｍで、表土直下で大型廃棄土坑と方形切り石の礎石と石組溝があった。その下は共通２面にあたり、標高 3.7 ｍである。大型土坑２基と、北半には多くの礎石が見られ、建物跡が確認された。共通第２面の下を掘り下げると、部分的な焼土面があったが、遺構や礎石が確認できなかったので、これを掘り下げて、基盤層の上の整地面まで掘り下げた。この第２遺構面を共通４面とした。共通第３面は標高 3.4 ｍ、第４面は標高 2.8 ｍである。

１号礎石建物跡（図版 11・12、第 48 図）

第２面から検出された建物跡で、調査区北半に位置する。柱間が短く、掘り方の大きさに差があるものとみて、２つの礎石建物が切り合っているとも考えたが、別の建物とする積極的な根拠がなく、柱筋が通っているので１つの建物として報告する。また、北側の礎石列は別の建物跡ではなく、張り出し部と考えた。これは、この礎石列に対応する礎石列が南側にないためである。N - 87° 50′ - W を主軸とする６間以上で、梁が検出されていないので、梁行の間数はわからない。北側の礎石列に礎石２が、南側に礎石 1･7 ～ 9 がある。中央に石臼が正置されており、床柱だった可能性を残すが、柱筋が通らない。梁行は 4.8 ｍで、桁行は 6.2 ｍ以上を測る。北辺の礎石遺構の石敷に組み込まれ



第 47 図　２次調査2区西壁土層断面実測図（1/40）

ているので、敷石遺構は本建物に付随する施設であろう。

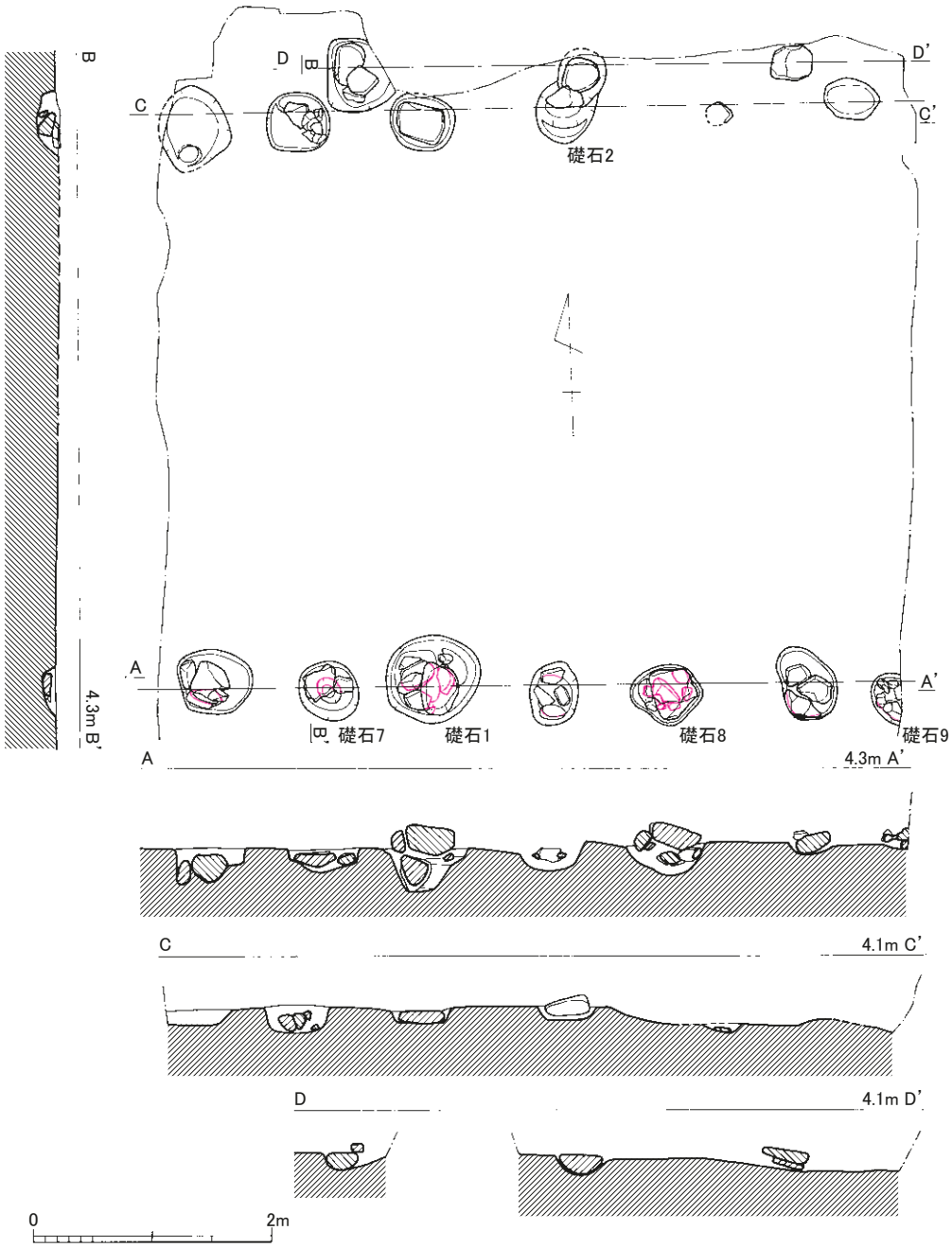
礎石１・２出土の染付から 18 世紀前葉に属するだろう。

出土遺物（図版 14・16 、第 52・59・62）

第 62 図 6 は礎石 4 に転用された石臼で、上臼の完形品である。

２号礎石建物跡（図版 11、第 49 図）

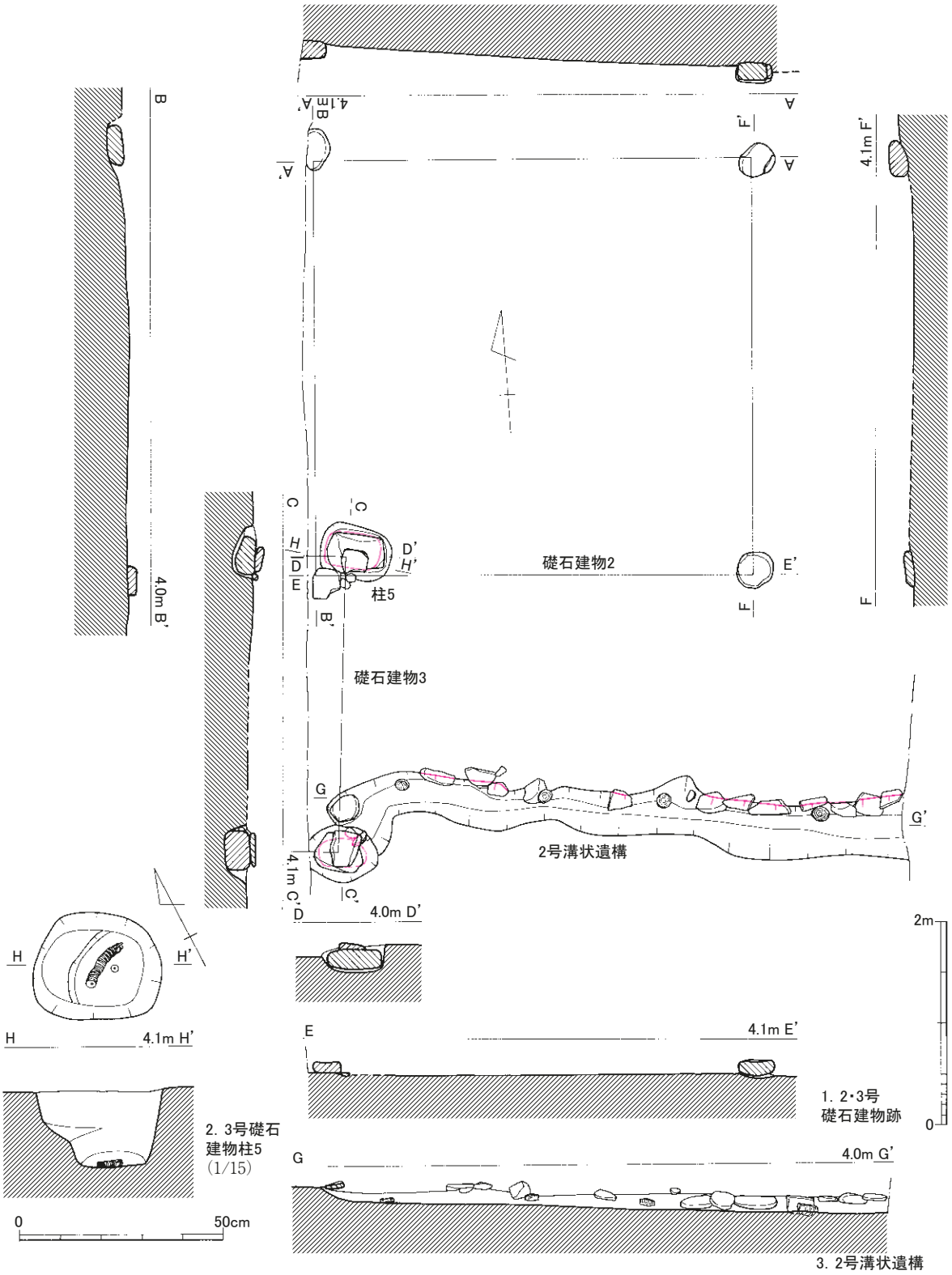
第１面から検出された建物跡で、1・2 号溝状遺構の間に位置する。N － 85° 30′ － Wを主軸とする１×１間以上だが、柱間が広いので本来は２間だが中央の礎石は後世の掘り込みで失われてい



第 48 図　2次調査2区１号礎石建物跡実測図（1/60）

る可能性がある。他の礎石建物と異なり根石がないので、特殊な性格の建物かもしれない。長軸は不明だが短軸は4.2 mを測る。北辺は1号溝の石積の上にあるが、単に壊しているのではなく、礎石の根石として利用したものと考えられるので、同時併存していたと考えられる。

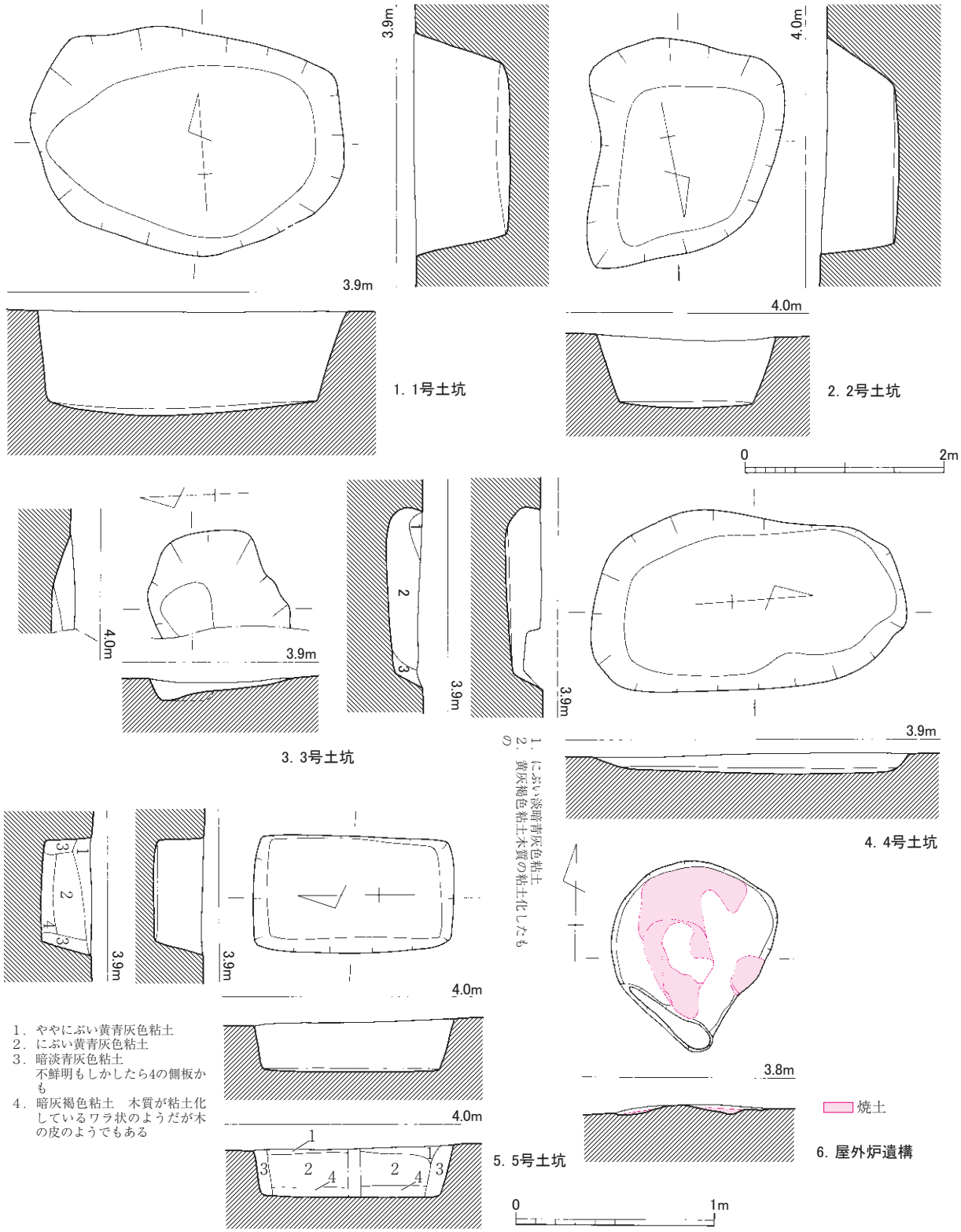
図化できる出土遺物がなく時期を特定できない。



第49図　2次調査2区2・3号礎石建物跡、2号溝状遺構実測図（1/60）
3号礎石建物柱5（1/15）

３号礎石建物跡（図版 11、第 49 図）

第２面から検出された建物跡で、調査区中央部に位置する。東辺の礎石２基から復元した建物のため、建物規模はわからないが、N － 4°20′ － E 方向で調査区外の西に延びる建物である。２号礎石建物跡に礎石１の掘り方が切られるので、それより古い時期のものである。調査区西に展開するとすれば、旧街道にかかることになることから門跡かもしれない。礎石１の根締石を取り除いた下に整地面があり、その下 10cmほどから銅銭がさし銭状態で埋納されていた。１枚のみ遊離しており、何かに収められていた痕跡は確認できなかった。銅銭は洪武通宝のみ約 40 枚で、本礎石建



第 50 図　２次調査2区検出遺構実測図1（4～6は 1/30、他は 1/60）

物を建てる時の地鎮祭祀だったのではないだろうか。

礎石５出土遺物（図版 14・15、第 59・60）

礎石の下から洪武通宝約 40 枚がさし銭状態で出土した。石の直下ではなく、10cmほど下から出土した。

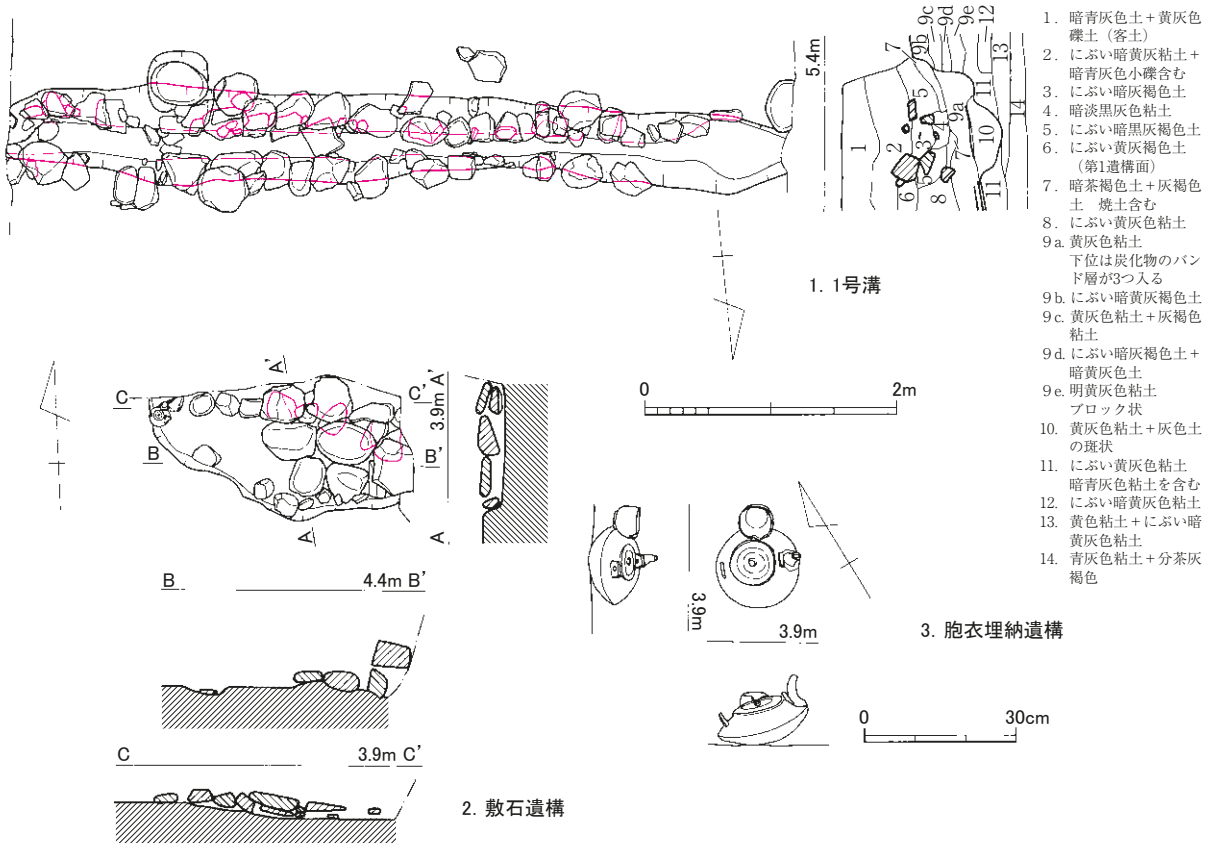
礎石６出土遺物（第 52 図・第 61 図）

出土遺物がほとんどなく時期を特定できない。第 61 図 26 は石筆で、柱部が整形されていないので未製品かもしれない。明治以降であることは間違いない。

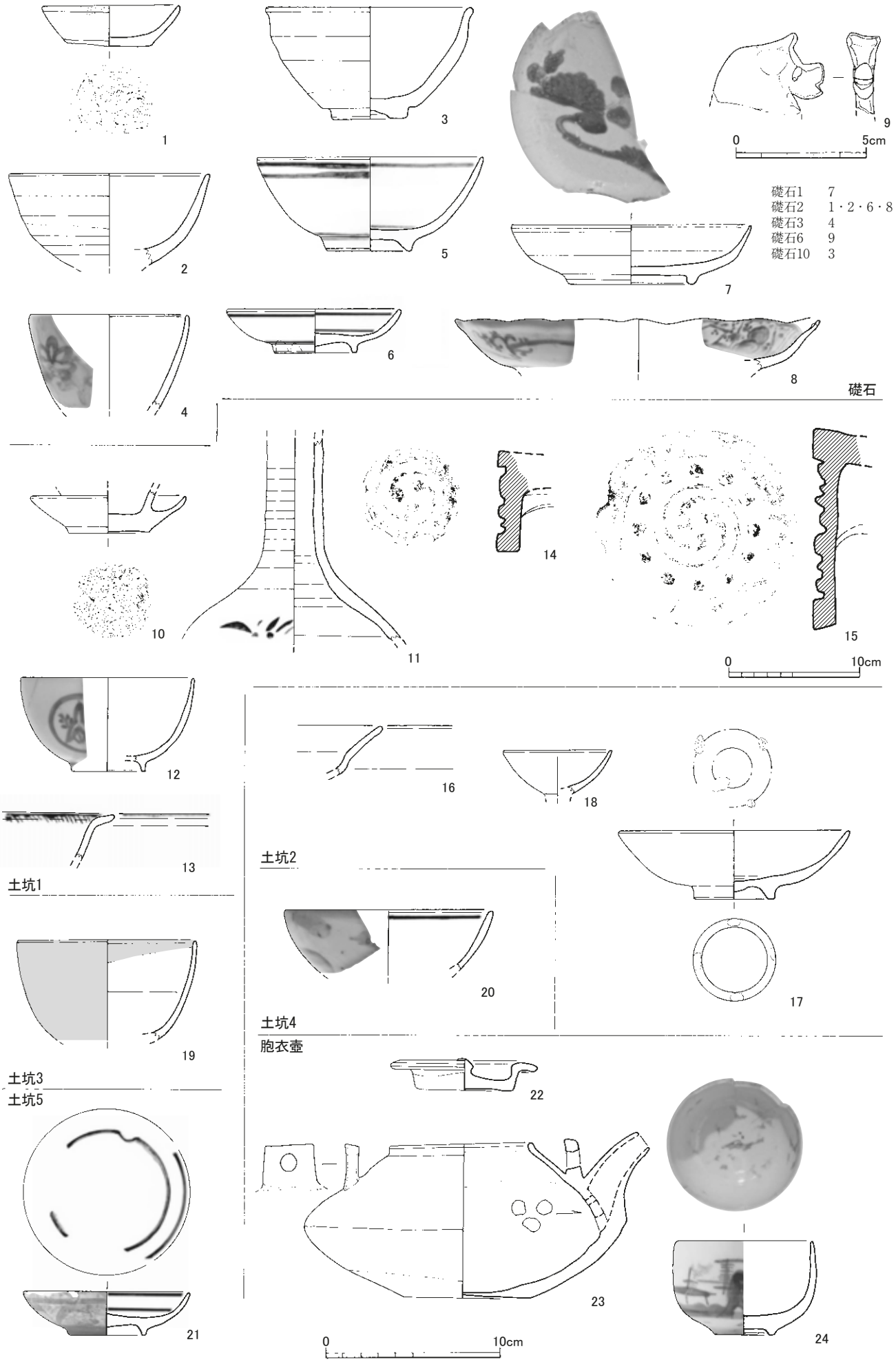
１号土坑（図版 11 、第 50 図）

第 1 面から検出され、略方形プランで、焼土と瓦が大量に廃棄されていたので明瞭に検出された。N ‐ 85° 30′ ‐ Wを主軸とし、長軸 3.1 m、短軸 2.3 m、深さは約 100cmという大型の土坑で、火事の片付用の廃棄土坑である。瓦を大量に含んでいたことから、人力で掘削するのは困難だったため重機で主要部分を掘り下げた。瓦は近代の桟瓦のみだったので、出土遺物としては回収しなかったが、パンコン 20 箱ほど入っていた。火事の片付けにしては他の土器・陶磁器や炭化木材をまったく含んでいなかったので、家屋ではなく瓦屋根を持つ土塀を片付けたのだろう。

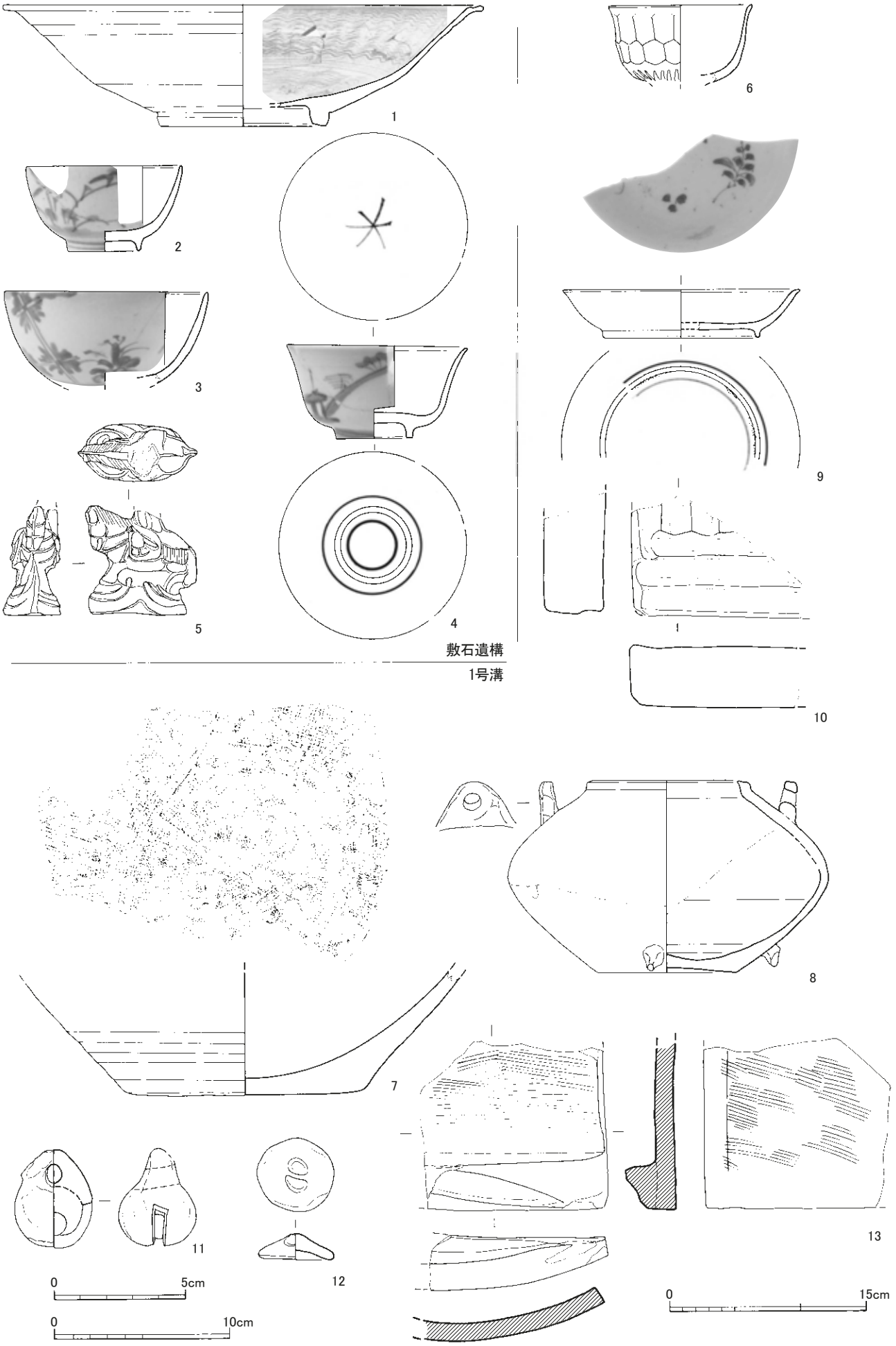
第 52 図 11 は染付文内面口縁に雷文帯があるので、19 世紀前半であろう。



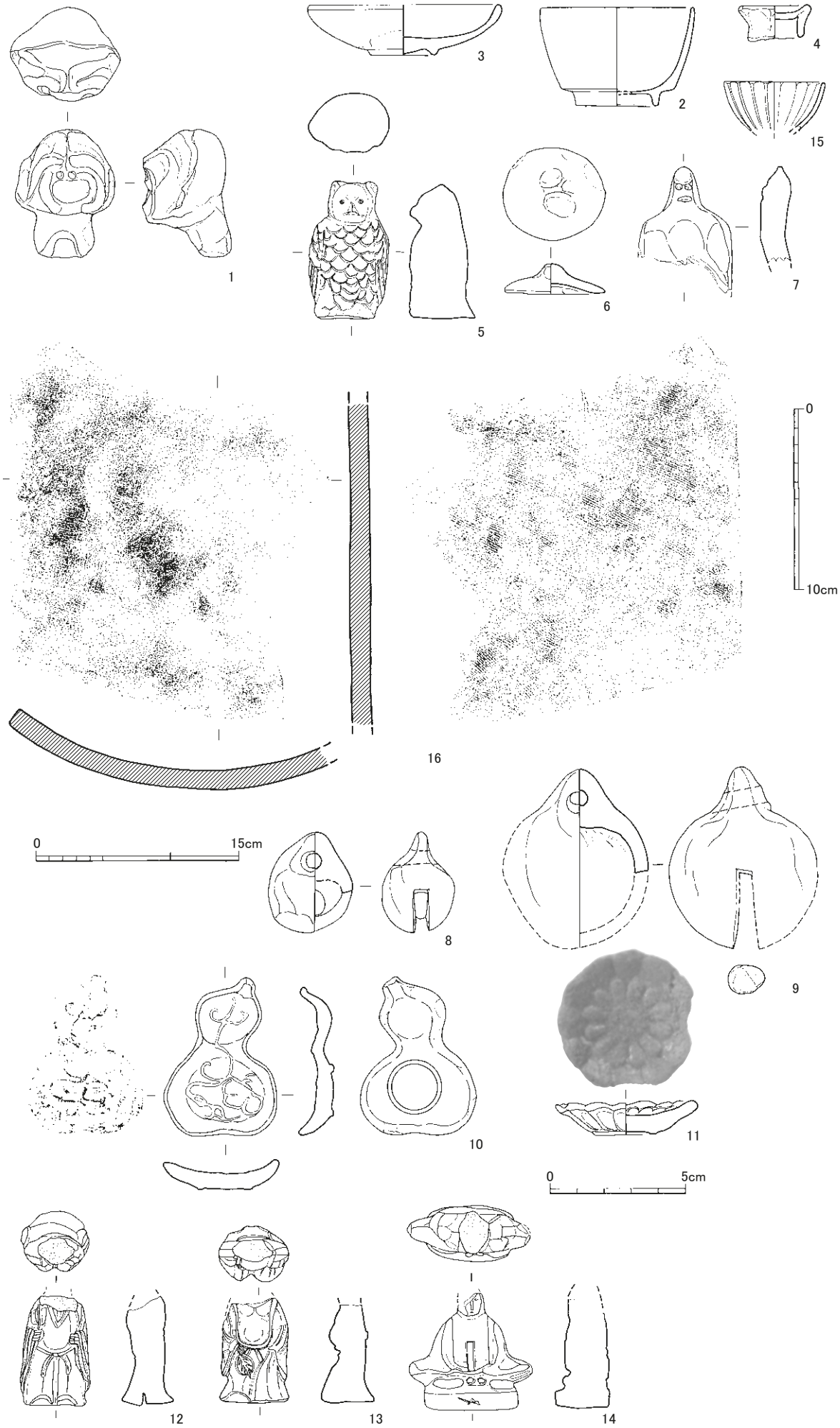
第 51 図　２次調査2区検出遺構実測図2（3は 1/15、他は 1/60）



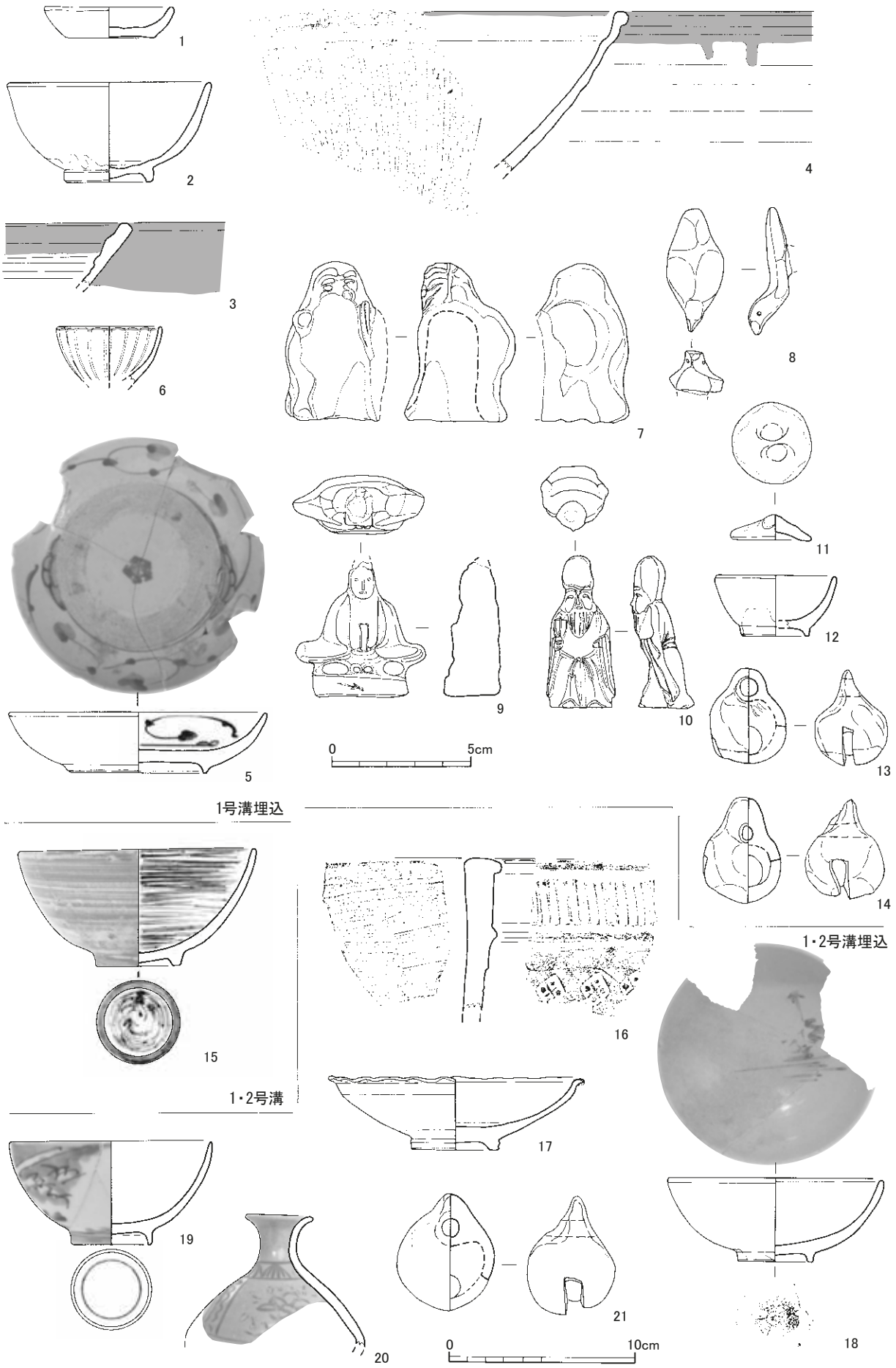
第 52 図　2次調査2区礎石・土坑・胞衣壺出土遺物実測図（9は 1/2、14・15 は 1/4、他は 1/3）



第 53 図　2次調査2区敷石遺構・1号溝状遺構出土遺物実測図（5・11・12 は 1/2、1・13 は 1/4、他は 1/3）



第 54 図　2次調査2区1号溝状遺構出土遺物実測図（2 ～ 4・15 は 1/3、16 は 1/4、他は 1/2）



第 55 図　2次調査2区1号溝状遺構裏込め、1・2 号溝状遺構出土遺物実測図
(7 ～ 14・21 は 1/2、他は 1/3)

出土遺物（第 52 図）

第 52 図 14 は軒桟瓦で、焼成不良のため黄灰色を呈する。

２号土坑（図版 11 、第 50 図）

第 1 面から検出され、不整形プランで、焼土と瓦が大量に廃棄されていたので明瞭に検出された。N － 11° 30′ － E を主軸とし、長軸 21 m、短軸 1.8 m、深さは約 70㎝という大型の土坑で、火事の片付用の廃棄土坑である。瓦を大量に含んでいたことから、人力で掘削するのは困難だったため重機で主要部分を掘り下げた。瓦は桟瓦で、火事の片付けにしては他の土器・陶磁器や炭化木材をまったく含んでいなかったので、家屋ではなく瓦屋根を持つ土塀を片付けたのだろう。

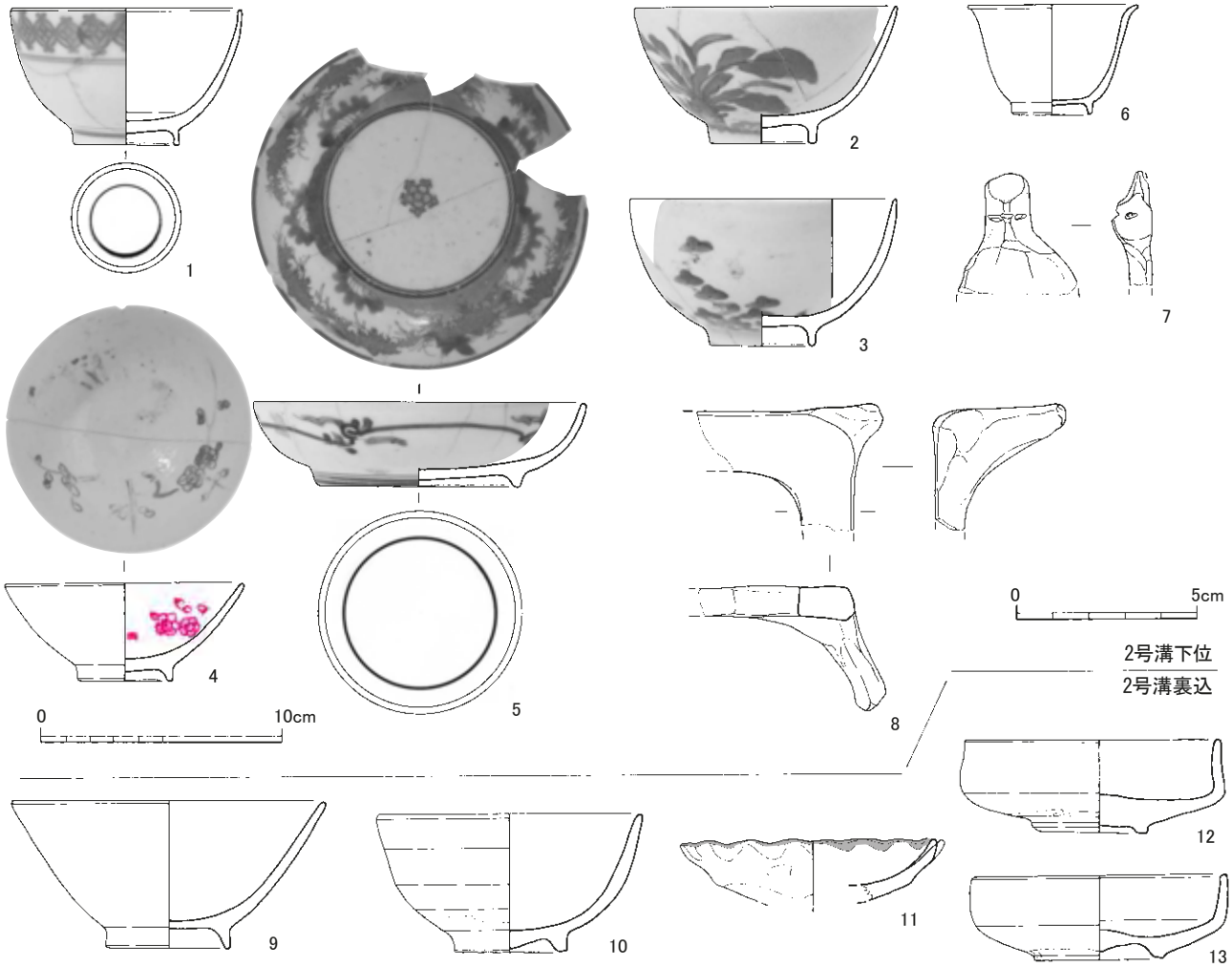
見込みに円形の胎土目跡があるので、18 世紀初頭から前葉か。

出土遺物（第 52 図）

第 52 図 18 は磁器の杯なのに口錆がある。

３号土坑（図版 11、第 50 図）

第 1 面の調査区北西から検出された。西辺が調査区外に延びるためプランは確認できないが、不整形プランだろう。長軸約 1.8 m、短軸 9.5 m以上で、深さは 30㎝ほどしかない。



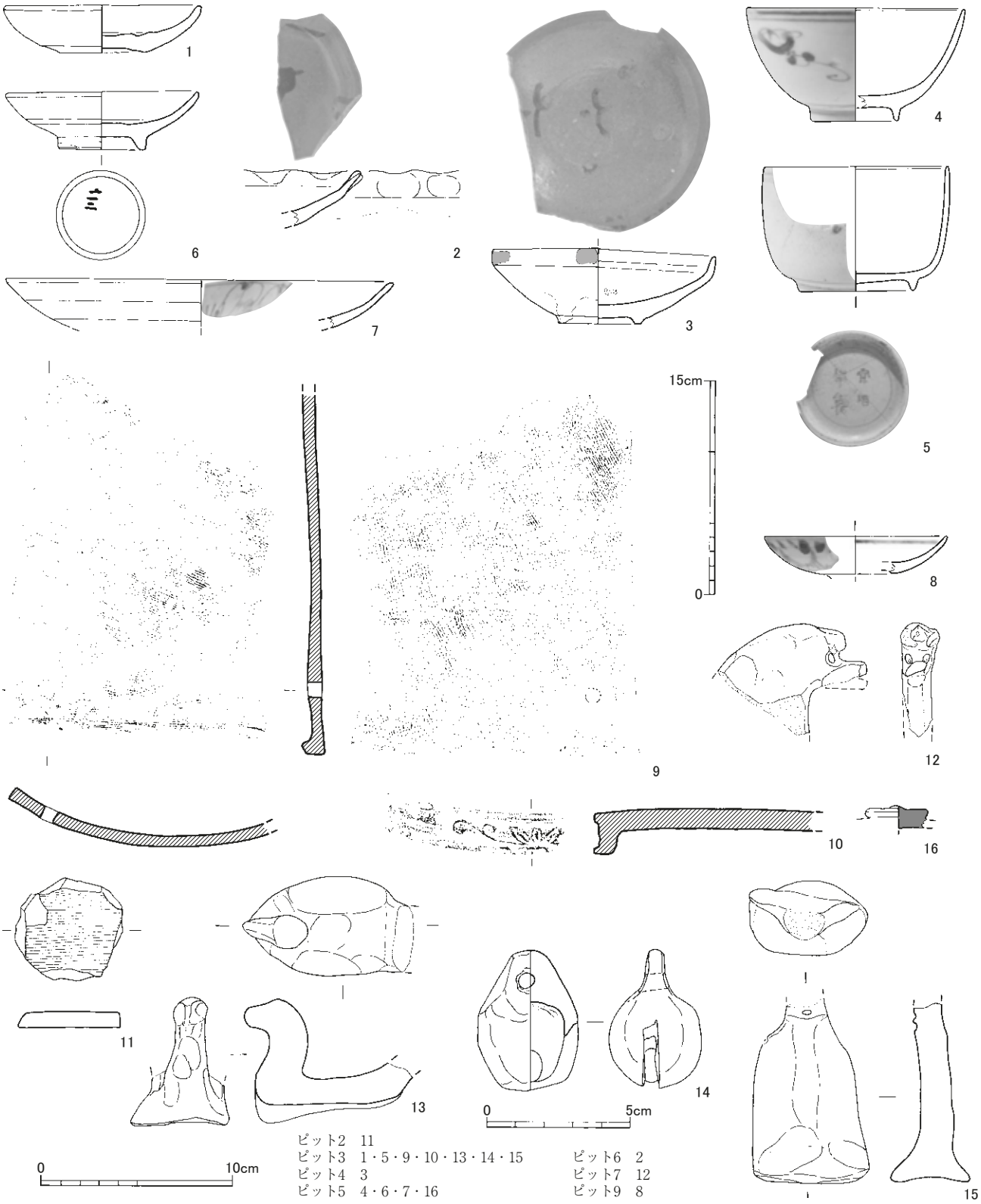
第 56 図　２次調査２区２号溝状遺構出土遺物実測図（7・8 は 1/2、他は 1/3）

出土遺物（第 52・60 図）

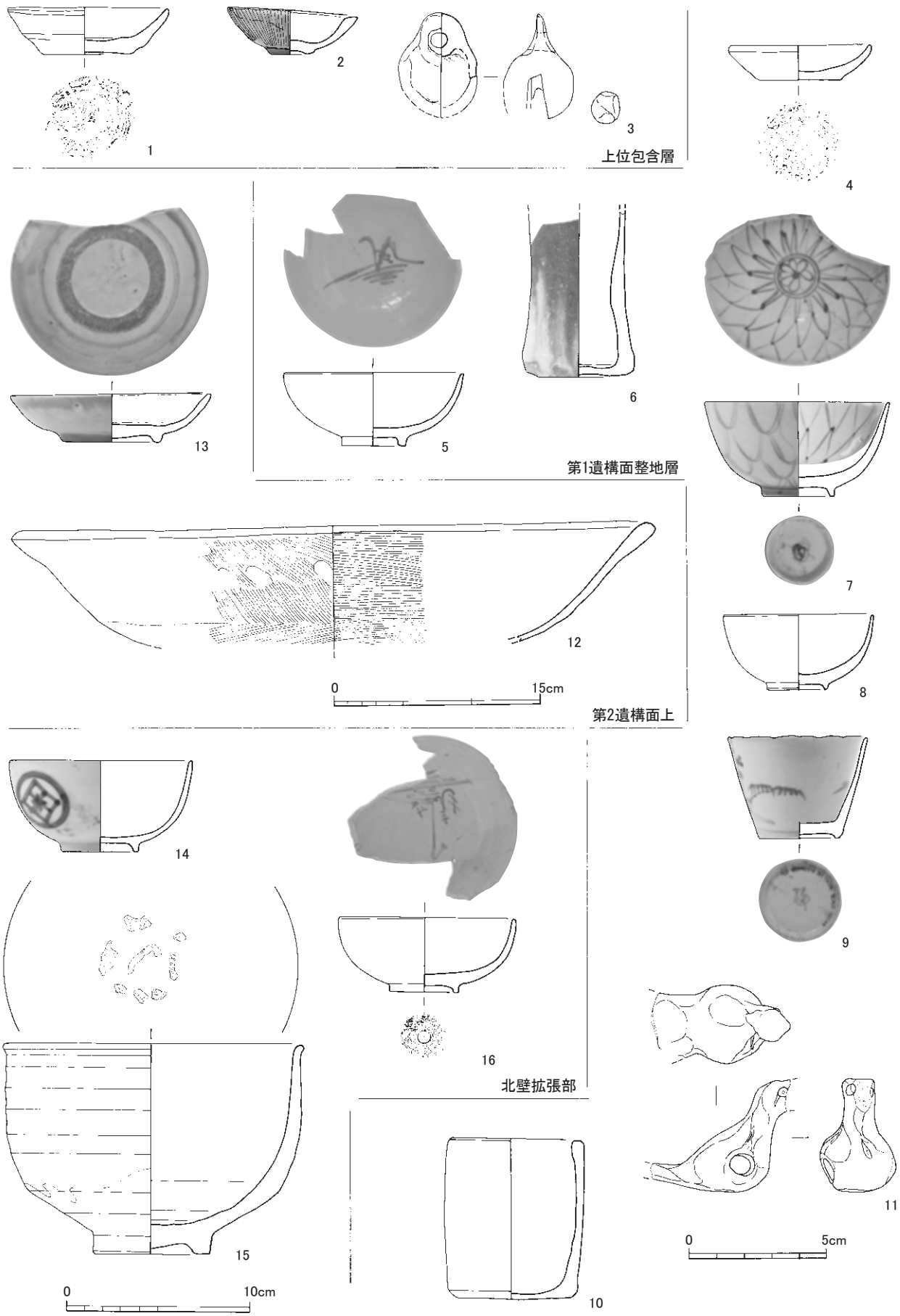
第 52 図 19 は陶器の椀で、緑色の灰釉と透明度の高い灰釉の 2 度掛けである。

４号土坑（第 50 図）

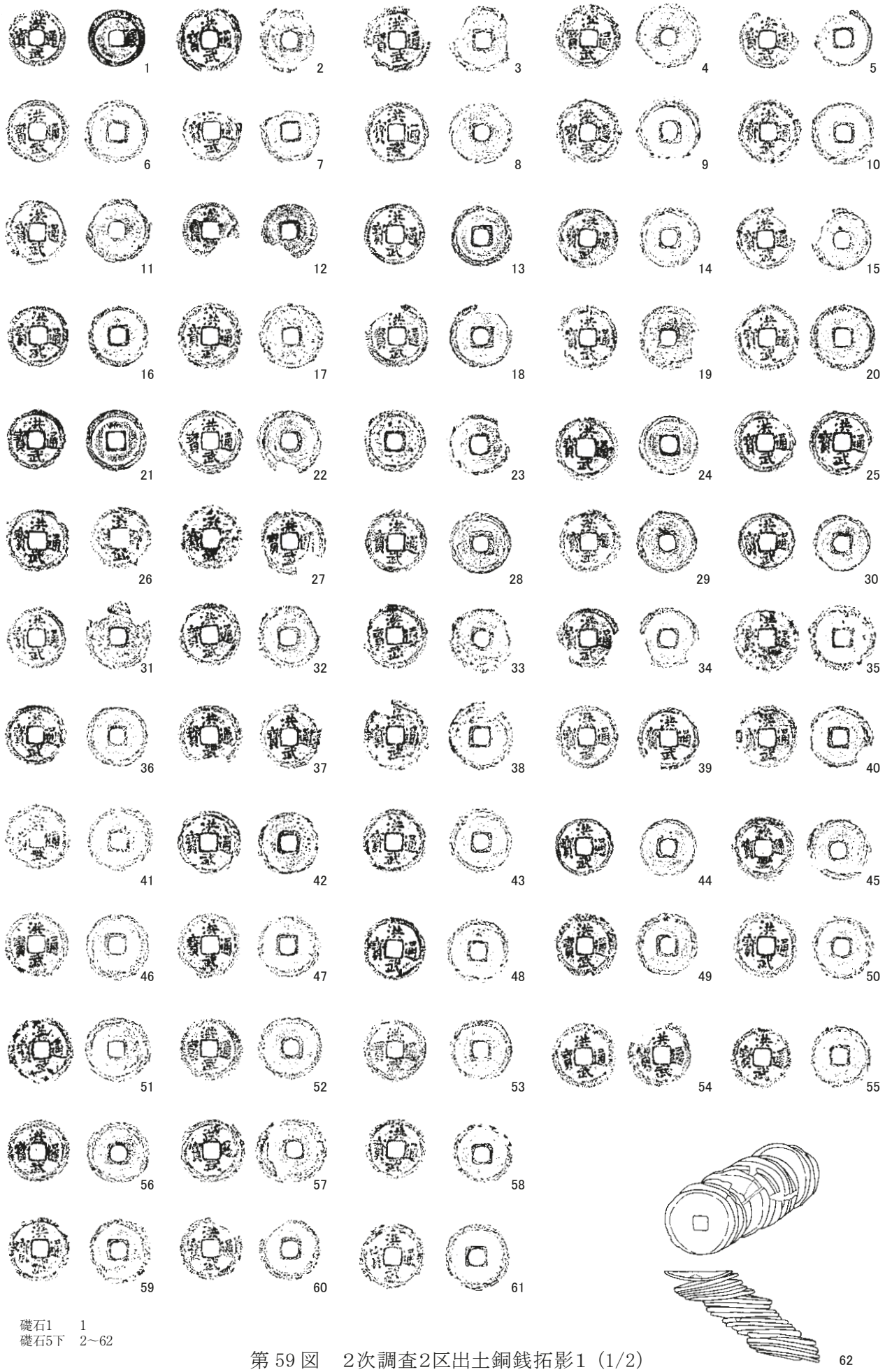
第 4 面の調査区北東から検出された。隅円方形プランで長軸約 158cm、短軸 90cmで、深さは 10



第 57 図　２次調査2区ピット出土遺物実測図（9・10 は 1/4、12 ～ 15 は 1/2、他は 1/3）



第 58 図　2次調査2区上位包含層・第1遺構面整地層・第2遺構面上・北壁拡張部出土遺物実測図（2・3・11 は 1/2、12 は 1/4、他は 1/3）



礎石1　1
礎石5下　2～62

第 59 図　2次調査2区出土銅銭拓影1（1/2）

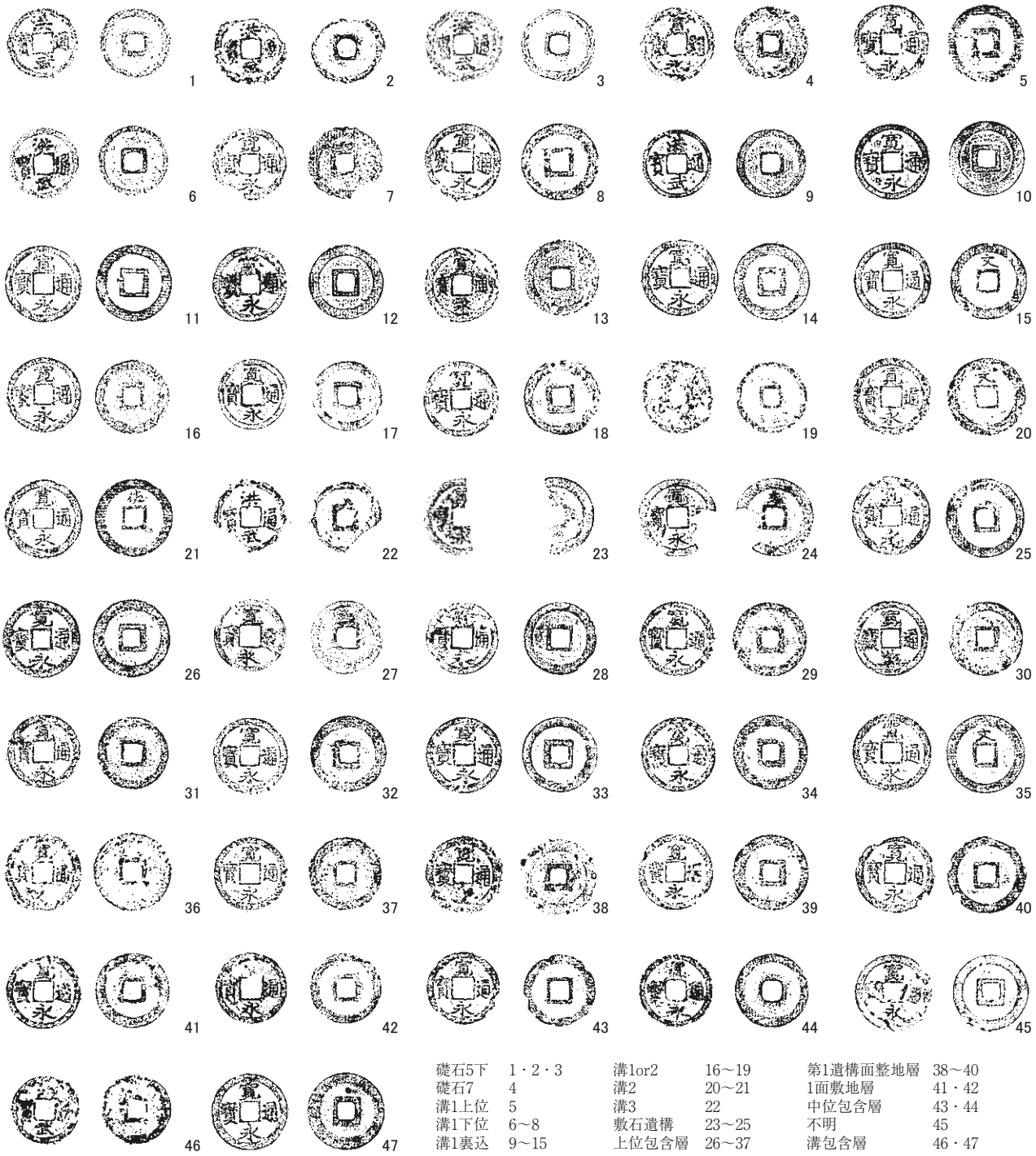
cmほどしかない。規模も位置も５号土坑に近いながら、プランも掘り方も異なっているので性格を異にする遺構だろう。主軸方位はＮ－３°30′－Ｅ。

出土遺物（図版 14・15、第 52 図）

第 52 図 20 は染付碗で、小片のため外面のモチーフはわからない。

５号土坑（第 50 図）

第４面の調査区北東から検出された。主軸を真北にもつ、明確な角をもつ方形プランで、長軸約 100cm、短軸 60cmで、深さは 23cmほどしかない。壁と床に板を貼った痕跡があるので、地下倉のようなものだっただろうか。



礎石5下	1・2・3	溝1or2	16～19	第1遺構面整地層	38～40
礎石7	4	溝2	20～21	1面敷地層	41・42
溝1上位	5	溝3	22	中位包含層	43・44
溝1下位	6～8	敷石遺構	23～25	不明	45
溝1裏込	9～15	上位包含層	26～37	溝包含層	46・47

第 60 図　２次調査２区出土銅銭拓影２（1/2）

出土遺物（第 52 図）

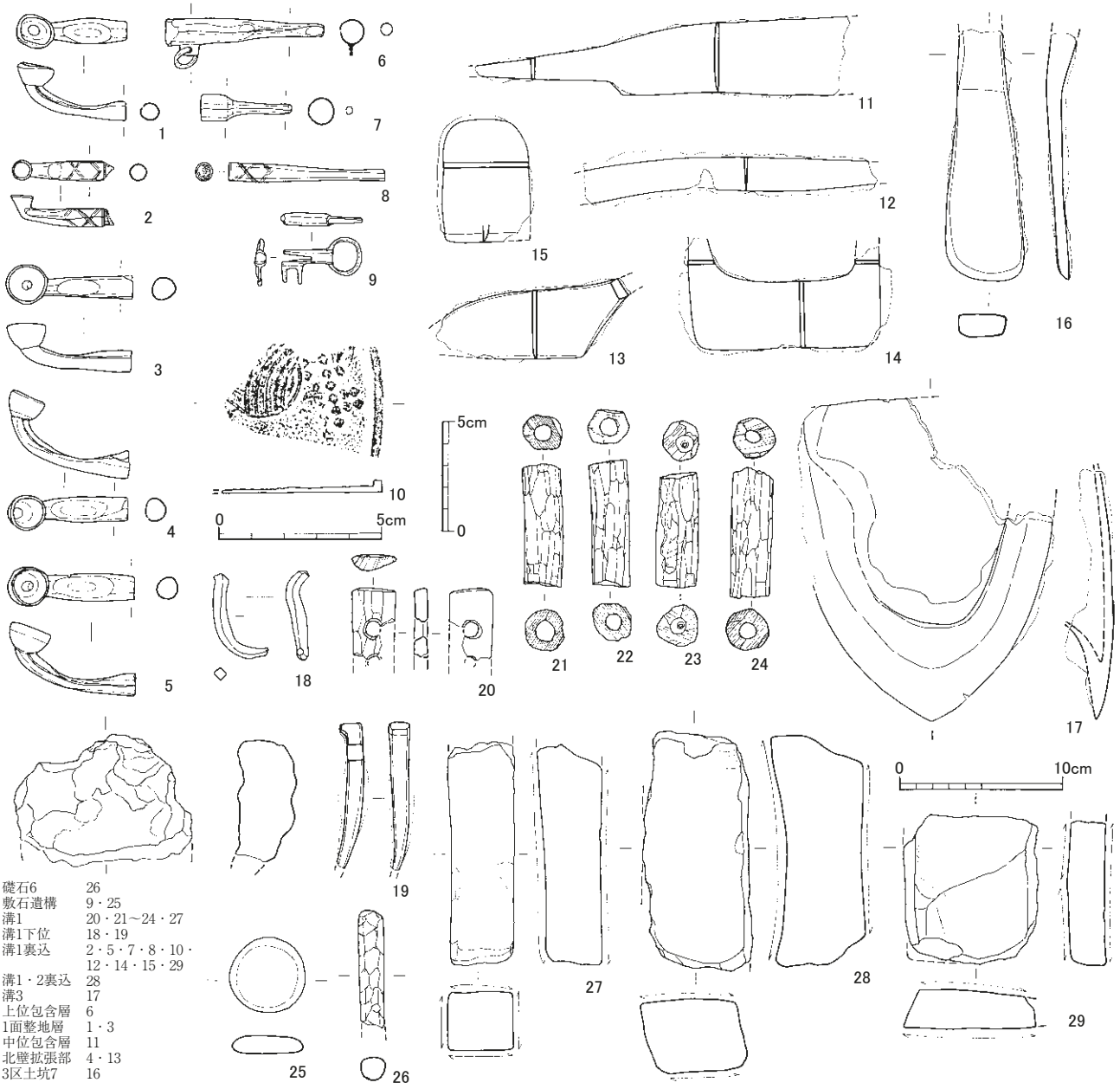
第52図21は床面から出土した青花の小皿で、透明釉を高台部分にだけ掛けるので、安南産だろう。

屋外炉遺構（第 50 図）

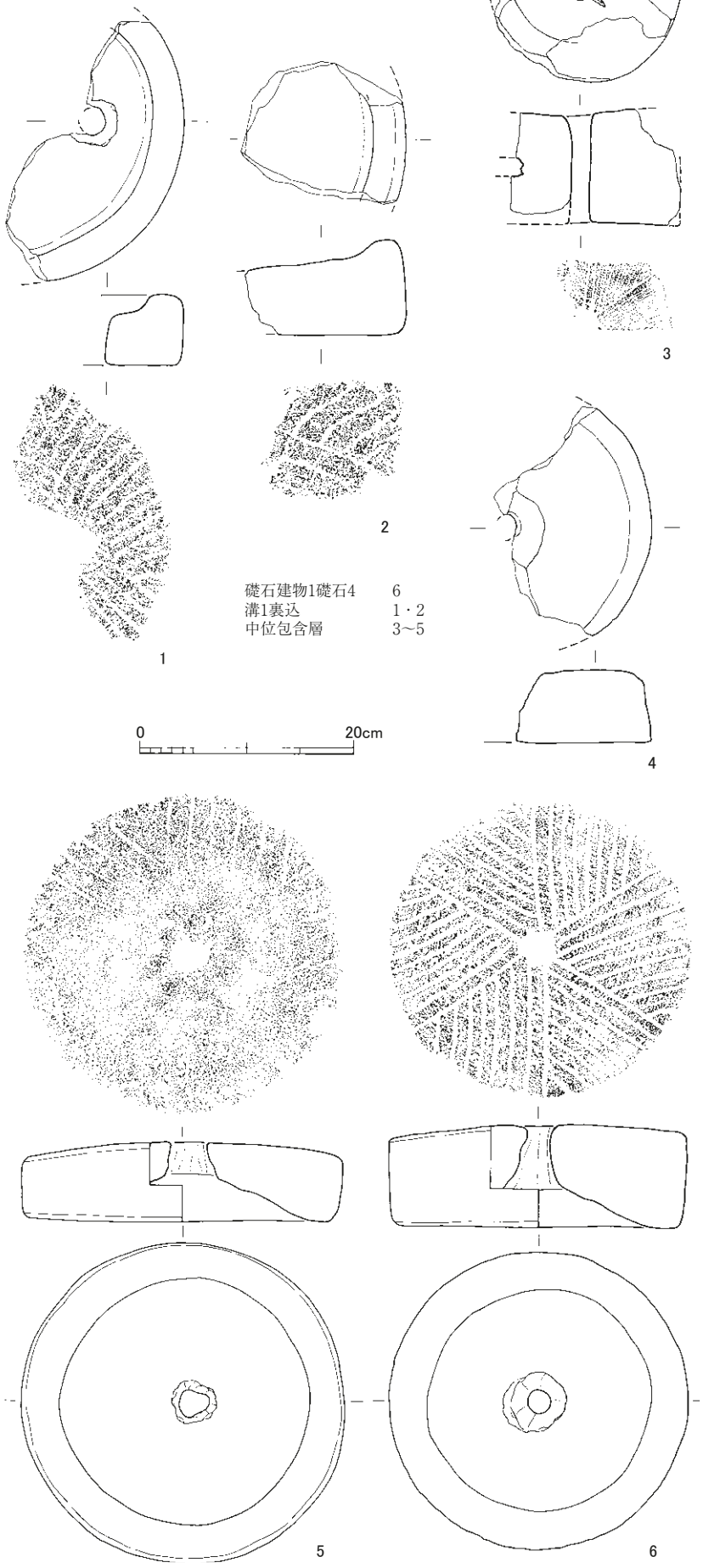
第２面の調査区南東から検出された。主軸を真北にもつ、不整形プランで、長軸 96cm、短軸 83cmで、焼土が検出された範囲でしか確認できなかった。側面に浅い掘り込みがあるので壁体があったのかもしれない。カマドの火床の可能性があるが、周囲に建物跡が存在せず、屋外炉の可能性を指摘するに留めたい。図化できる出土遺物はなく、時期を特定できない。

１号溝状遺構（図版 12、第５図）

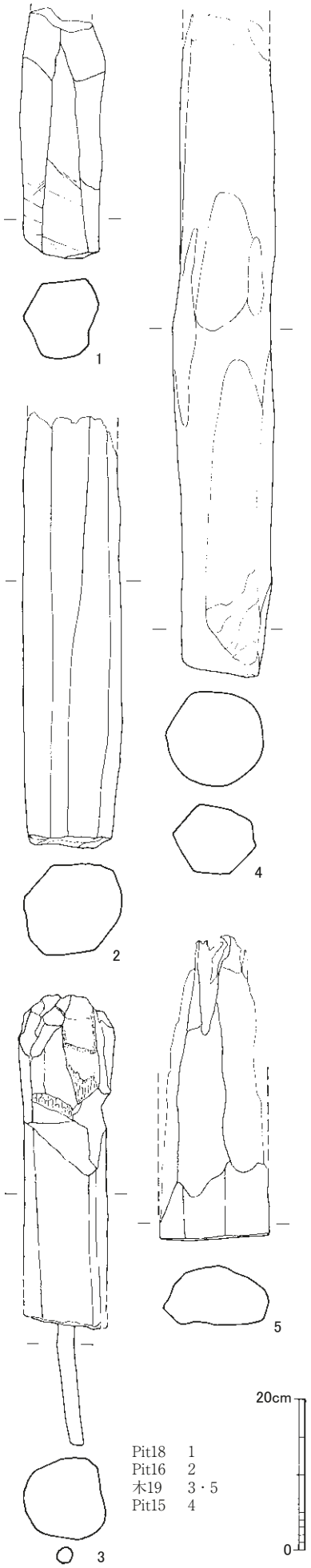
第２面から検出された長辺の両側面に石積のある溝で、幅約 25cmを測る。N － 84° 50′ － Wを



第 61 図　２次調査２区出土金属・石製品実測図（13・14・17・27 は 1/4、10・25・26 は 1/2、他は 1/3）



第 62 図　2次調査2区出土石臼実測図（1/6）



第 63 図　2次調査2区出土木製実測図（1/8）

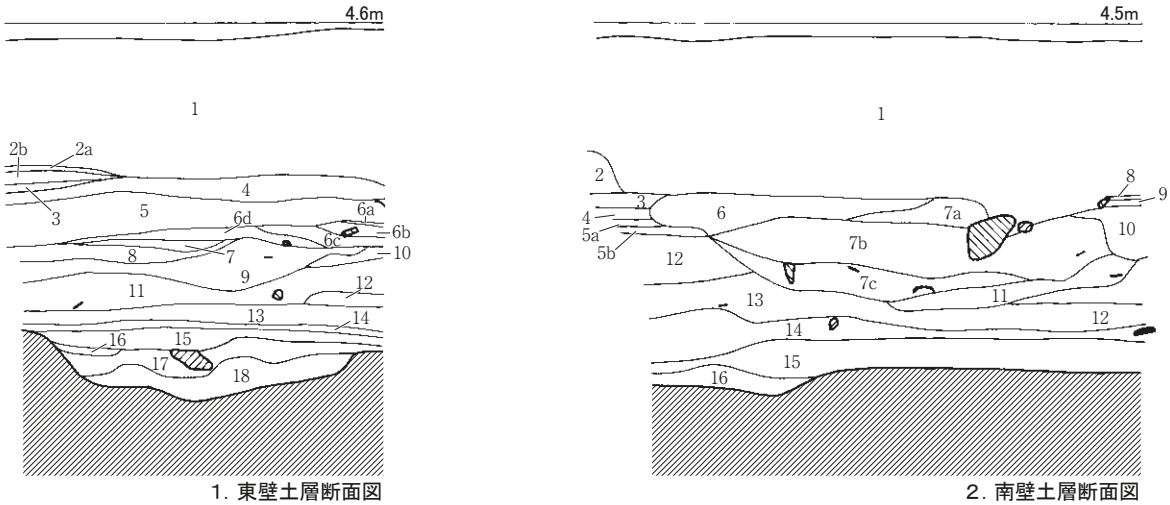
主軸とし、その石積を利用して主軸方向を同じくする１号礎石建物跡が存在するので、共存していたと考えられる。石積は上位が失われているものと見られ、２段が残っていた。床面は西から東に傾斜しており、東端は狭まり石積がないので、当時の幹線道路まで達していなかっただろう。下位に京焼風陶器があるので 18 世紀前葉であろう。

出土遺物（図版 10・13 ～ 16、第 53 ～ 55・60 ～ 62 図）

第 53 図 7 は陶器の摺鉢で、外底が摩滅している。第 53 図 10 は土師質の土製品で、塼か道具瓦だろう。第 53 図 13 は土師質瓦で、接合部が残る。第 54 図 1 は下位出土の土人形で、頸下面は欠損していないので棒を挿して使用したものだろう。第 55 図 2 は裏込め出土の陶器埦で、李朝陶器と見られ、釉がゴワゴワしている。第 55 図 10 は土人形の寿老人で、同じ遺構出土に恵比寿もある。掲載していないが下位にも１点寿老人片があり、１号溝状遺構裏込めに大黒もあるので、七福神を信仰する屋敷だったようだ。第 61 図 14･15 は裏込め出土で、14 はコの字形の火打ち金で、木質は残っていない。15 は鉋の刃で、U 字形を呈する。第 61 図 20 から 24 は鹿角製品で、20 は穿孔まで終わった製品だが、21 ～ 24 は未製品である。

２号溝状遺構（図版 11、第５図）

第２面から検出された南壁に石列のある溝で、N － 83° 10′ － Wを方向に走る。裏込めまで含めると幅約 140cmを測り、石積をもつ１号溝状遺構とは性格を異にする。石列は扁平な石が並んでお



1. 東壁土層断面図　　2. 南壁土層断面図

1. 客土層　レンガ塀の掘り込み内をレキ混土で埋めている
2a. 黒灰色粘土　硬化している（明治第1遺構面）
2b. にぶい淡青灰色粘土　砂質を混じる硬化している
3. にぶい赤色砂質土　炭化物を含む　焼土層
4. 黒灰色粘土＋にぶい淡青灰色粘土　硬化している
5. にぶい暗黄灰色粘土　粘性強い
6a. 黒灰色粘土　硬化している（第2遺構面）
6b. にぶい暗黄灰色粘土　レキを含む
6c. 黒灰色粘土
6b. にぶい暗灰色粘土
7. 黒灰色粘土＋黄灰色粘土
8. 黒灰色粘土＋にぶい暗灰褐色粘土　炭化物がわずかに混じる
9. にぶい黄灰色粘土　炭化物がわずかに混じる
10. にぶい黄灰色粘土＋暗黄灰色粘土
11. にぶい暗灰褐色粘土
12. 暗灰褐色粘土＋花崗岩破砕粒子（4地点の第1遺構面）
13. にぶい暗黄灰色粘土
14. 暗灰色粘土（第3遺構面）
15. にぶい暗黄灰色粘土
16. にぶい暗灰褐色粘土
17. 暗灰色粘土（溝1埋土）
18. 黄灰色粘土＋暗灰色粘土（黄灰色粘土ブロック）

1. 客土　レンガを含む
2. にぶい暗黄灰色粘土　硬化面の下の粘土
3. 暗黄灰褐色粘土 } 間に黒灰色ハンド層が入る
4. にぶい黄色粘土 }
5a. にぶい黄灰色粘土　粘土整地層
5b. にぶい黄灰色粘土＋灰褐色粘土
6. 暗黄灰色土　上面は硬化　その下に焼土塊　中位以下は貝殻を含む石
7a. にぶい暗褐色土　炭化物焼土塊を含む
7b. にぶい暗黄褐色粘土
7c. にぶい暗灰色粘土　炭化物焼土塊を上位に多く含む
8. 暗灰色土　硬化面
9. 黄灰色粘土
10. 黒灰色混貝粘土　下位ほど貝が多い　少し木を含む
11. 暗黒灰色混貝粘土　粘性強い
12. にぶい暗黄灰色粘土　粘性強い
13. にぶい淡黄緑灰色粘土
14. 暗淡黄黒灰色粘土　炭化物を多く含む
15. 泥暗黄灰色粘土　粘性強い
16. にぶい淡青灰色粘土　粘性強い（ピット埋土）

0　2m

第 64 図　２次調査3区土層断面実測図（1/40）

り石は溝の下場側に傾いているが、本来は平坦面を水平にしていたものと思われ、溝の南側に列を成していたが、杭を打つ際に多くは撤去されたようだ。杭は新しいものだが、石列の位置に重なっていることから、石列の上に柱材を敷いて柵を建てていたものと考えられる。

溝の西端は３号礎石建物跡の礎石２に接する部分で屈曲していることから、３号礎石建物跡と一連の遺構だった可能性がある。第 56 図 1 はコンニャク印判の染付碗なので 18 世紀前葉だろう。

出土遺物（図版 15、第 56・60 図）

第 56 図 11 は陶器の小皿で、見込みに胎土目があるはずだが残っていない。第 56 図 12・13 は京焼風陶器の腰折れ埦で、粗雑な模倣か。第 60 図 21 は寛永通宝の佐渡銭である。

３号溝状遺構（図版 11、第 5・47 図）

第 2 面から検出されたＮ － 88° 30′ － Ｗを方向に走る溝で、幅約 35cmを測る。浅く、不整形で

第 65 図　２次調査3区１号礎石建物跡実測図（1/60）

建物には伴わないので、意図的なものではないかもしれない。

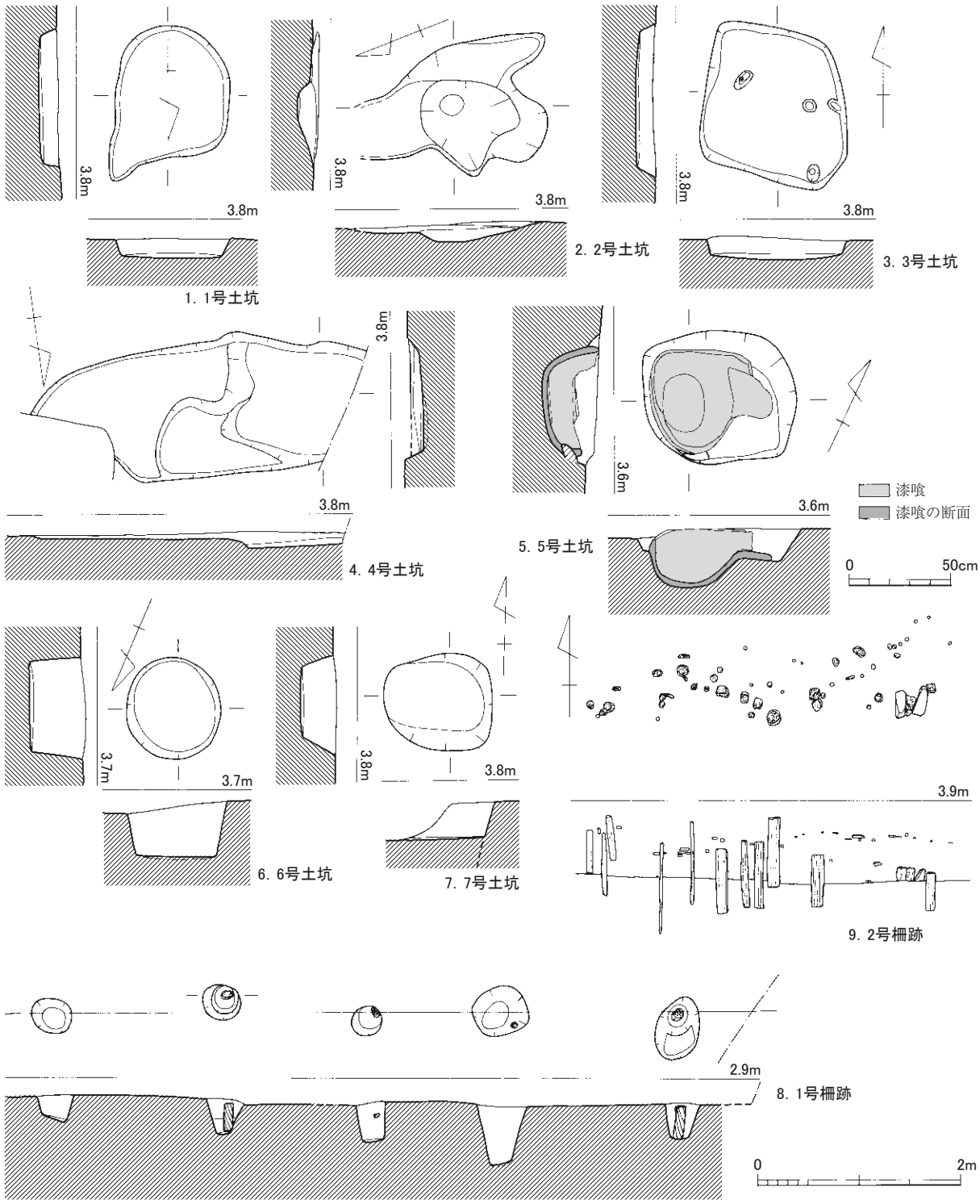
図化できる出土遺物はなく、時期を特定できない。

出土遺物（図版 15、第 61 図）

第 61 図 17 は鉄製鋤先で、鋳造のため残りが悪い。

胞衣埋納遺構（第 51 図）

調査区北東端の敷石遺構西部の先端部分上から検出された。敷石遺構の踏み石のない部分から検



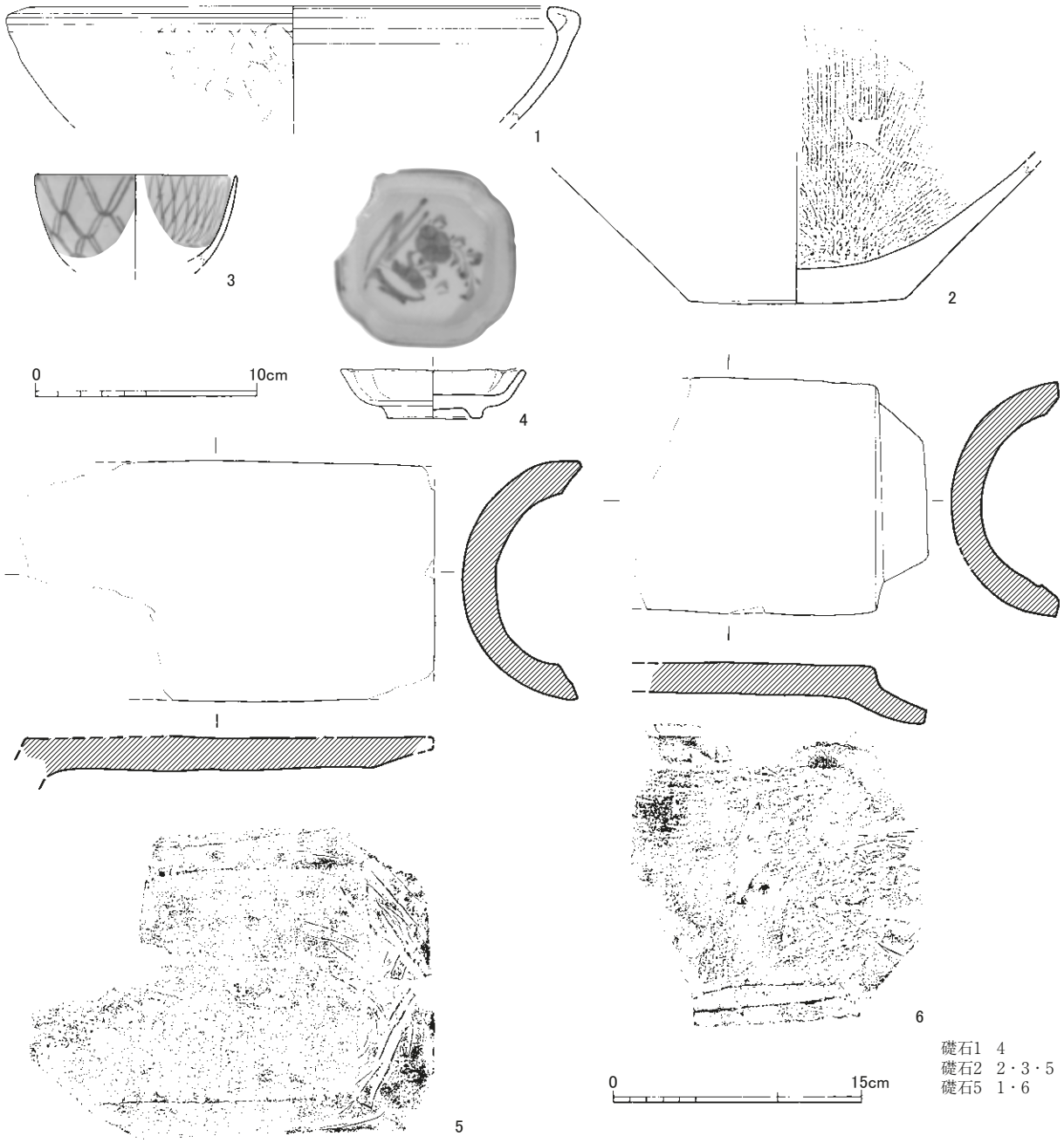
第 66 図　2次調査3区検出遺構実測図（5は 1/15、他は 1/60）

出されたことから、敷石遺構は階段状に高くなっており、その階段の下に胞衣壺を埋めたのではないだろうか。埋納遺構としての掘り方は検出できず、完形の土瓶が正置状態で出土したことで埋納遺構とわかった。土瓶は敷石の上に位置し、土瓶の側から完形の染付碗が出土しており、胞衣埋納であれば、染付碗を伴うことは考えにくい。埋葬遺構とすれば、副葬品として染付碗を供えたと考えられる。しかし、土瓶内からは火葬骨は見つかっていない。したがって、ここでは多く見られる胞衣埋納として報告する。

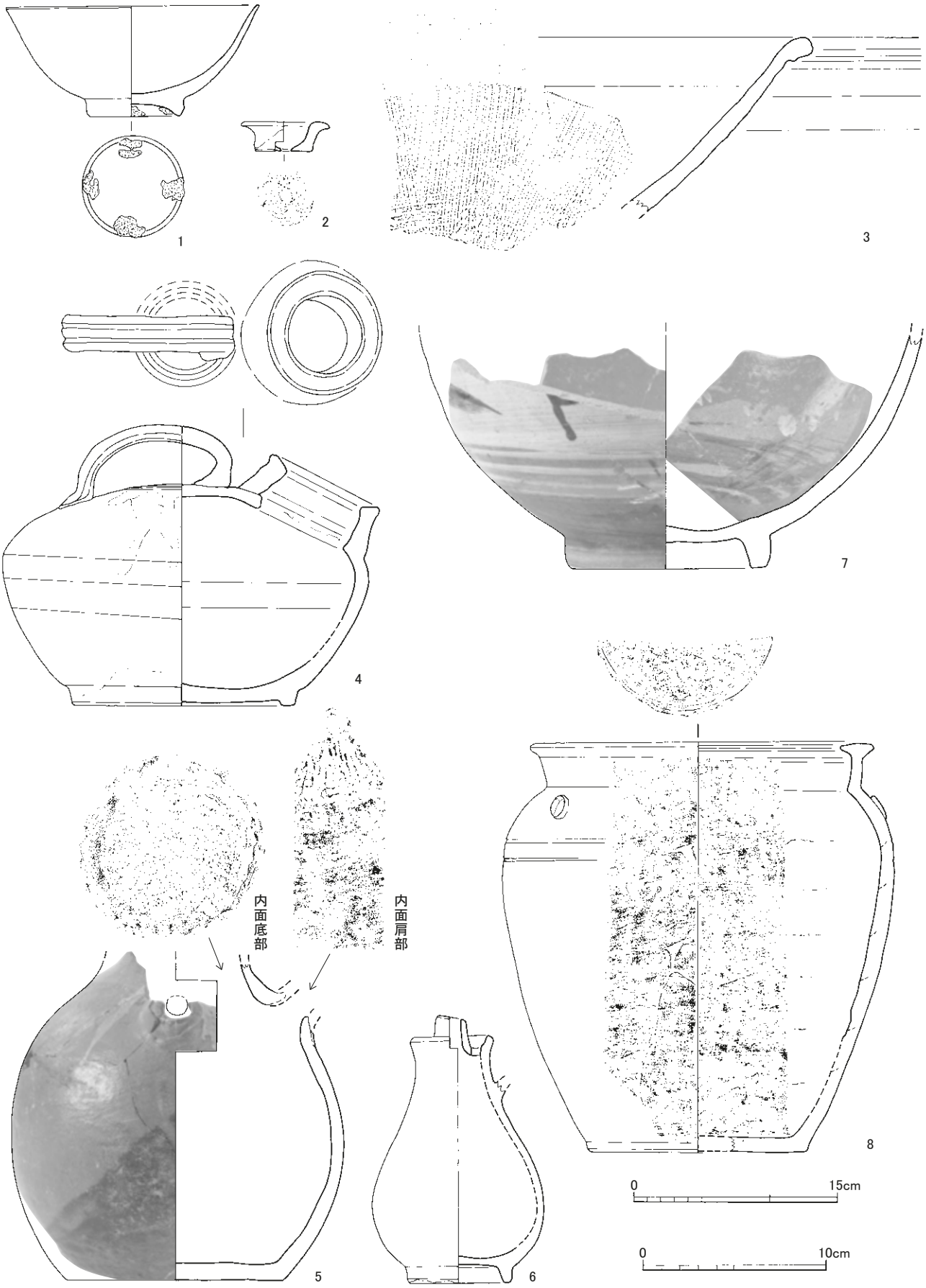
染付の見込み文が波濤文なので、19 世紀前～中葉だろう。

出土遺物（図版 13、第 52 図）

第 52 図 22・23 の土瓶の蓋身は釉薬が異なるので、セットではない。23 は胎土が精良なのが特徴である。



第 67 図　2次調査3区礎石出土遺物実測図1（1・5・6 は 1/4、他は 1/3）



第68図　2次調査3区1号土坑出土遺物実測図1（7・8は1/4、他は1/3）

敷石遺構（図版 11、第 51 図）

調査区北東端から検出された石列で、３条の石列が並列に敷かれている。掘り方は不整形で、掘り方の先端部分と周縁部は石が小さく、幅の広い部分に人頭大の扁平な川原石が敷かれていたことから、小さい石は根締石で通路とする石を押さえていたのだろう。西部の先端部分には大きな石がないのは抜き取られたものと見られる。そこから胞衣埋納遺構が検出されたことから敷石は階段状に高くなっており、その階段の下に胞衣壺を埋めたのではないだろうか。

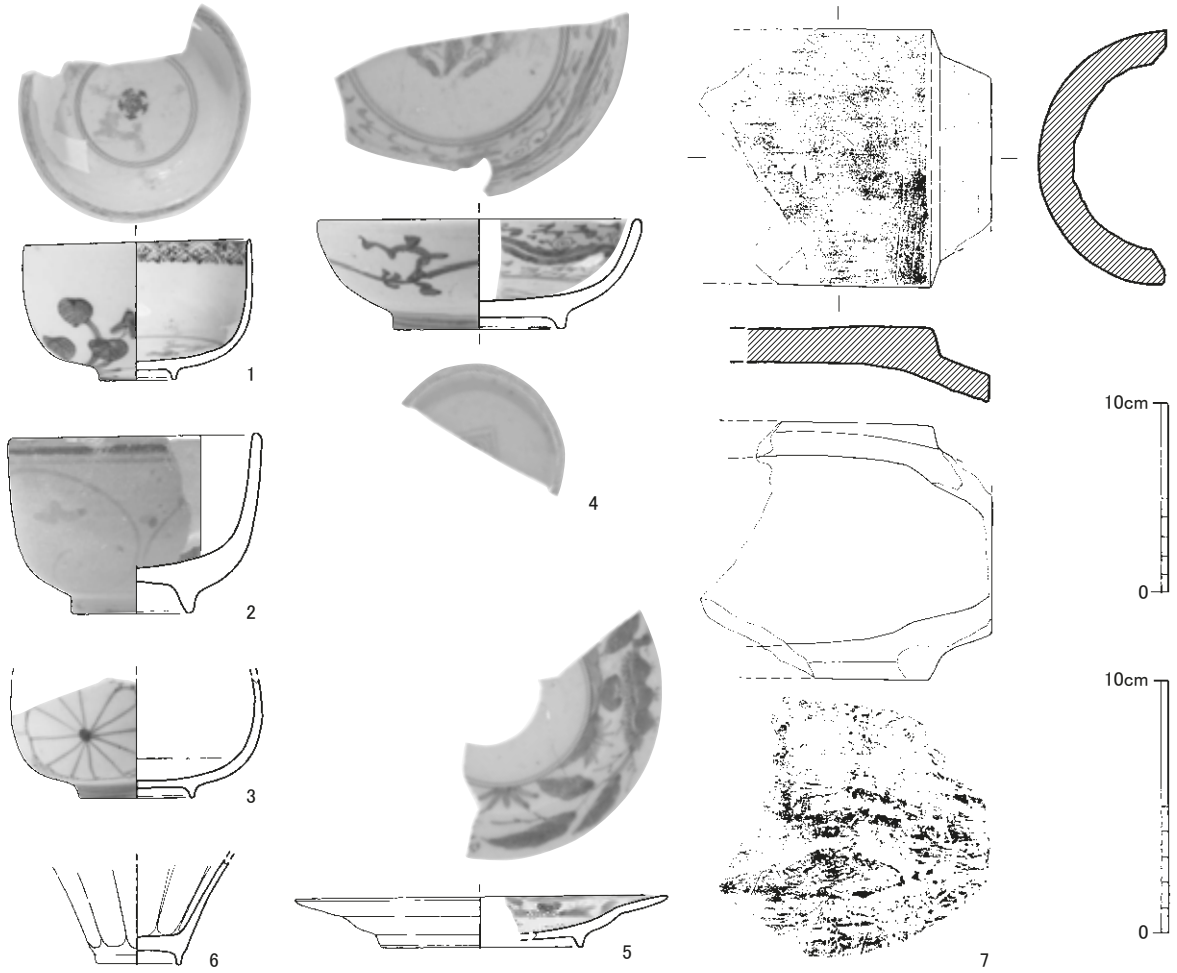
端反碗が出土しているので 19 世紀前葉から中葉だろう。

出土遺物（図版 16、第 53・60・61）

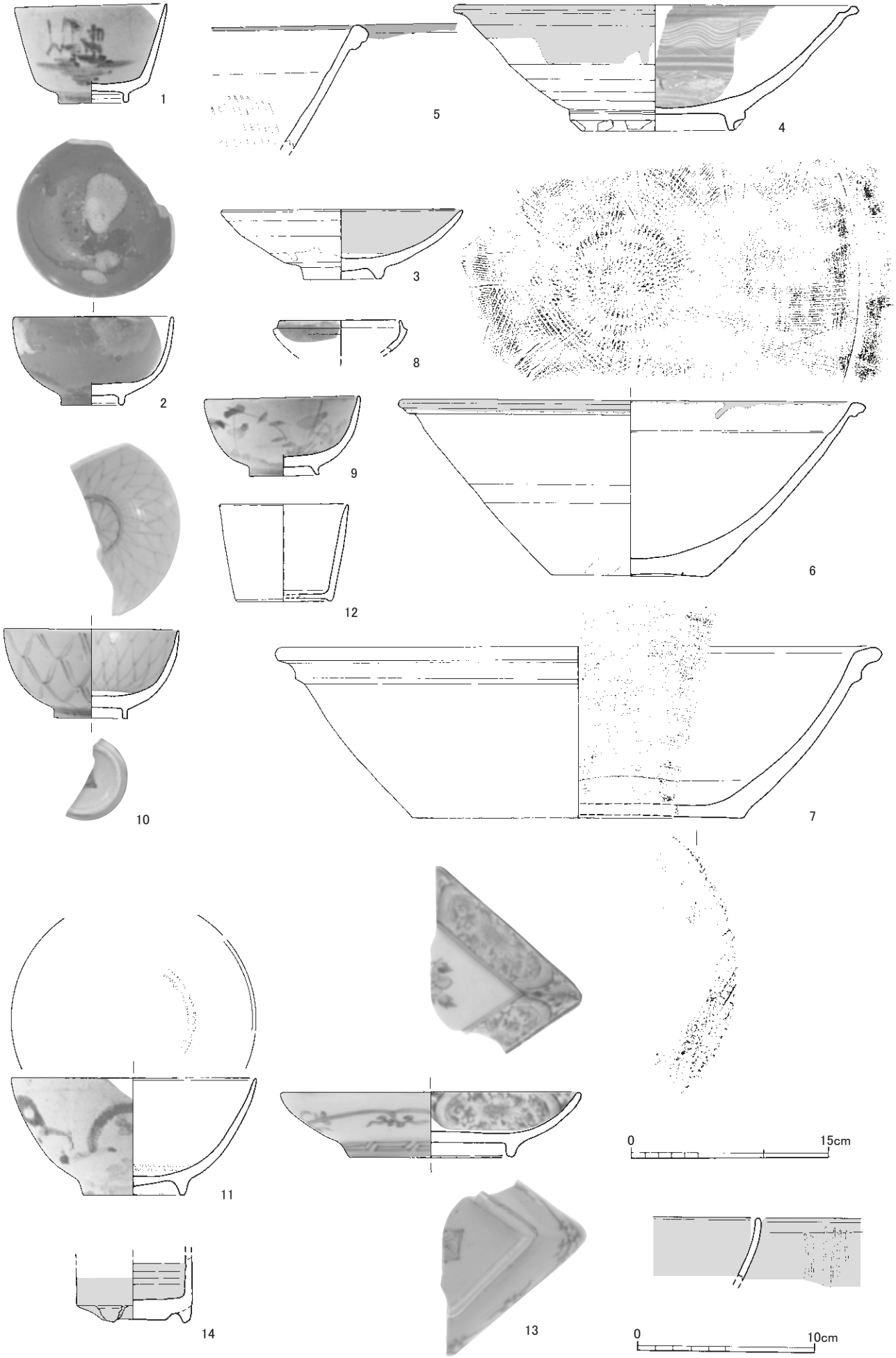
第 61 図９は鋳造の洋風の鉤である。

その他の出土遺物（図版 13 ～ 16、第 57・58・60 ～ 63）

第 57 図６はピット５出土の白磁小皿で外底に「二二」の墨書が入る。第 57 図８はピット９出土の染付小皿で、モチーフは青花の模倣だろうか。第 57 図 16 はピット５出土の須恵器の埦蓋で、あまり摩滅していない。混入品だろう。第 58 図 16 は北側拡張部出土の京焼風陶器で､外底に「清水」の刻印がある。図を掲載できなかったが中位包含層から長さ 3.7㎝、最大径 0.8㎝前後の細長い管状土錘が４点出土した。図版 13 － １ ～ ４も中位包含層出土で、１・２は肥前陶器の皿で中位包含層からはこのタイプがまとまって出土し、同じ層位に李朝白磁や景徳鎮系染付碗もあった。３は瀬戸焼の皿で、４は肥前陶器の瓶蓋、５・６は土鈴である。



第 69 図　２次調査3区1号土坑出土遺物実測図2（7は 1/4、他は 1/3）

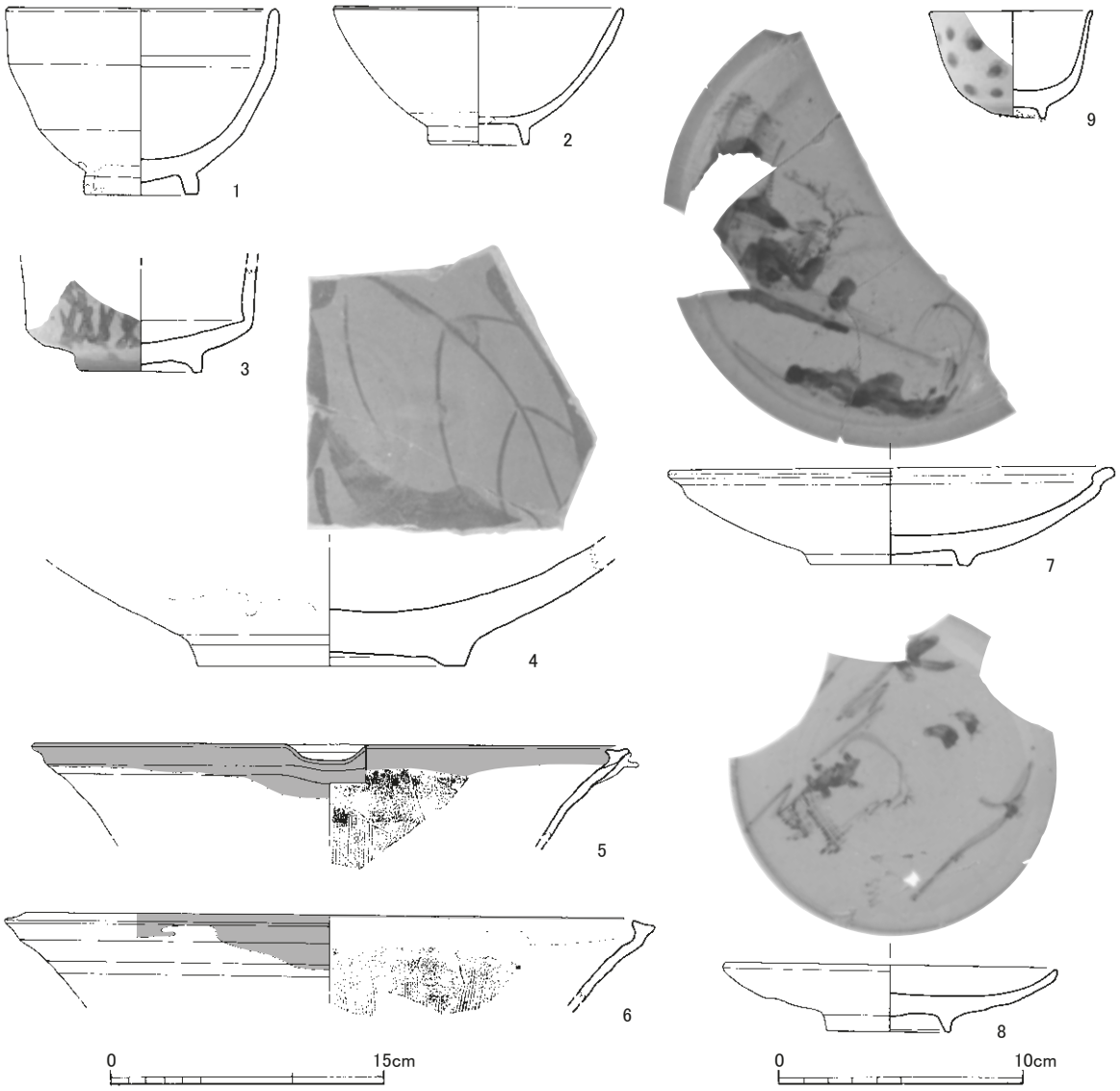


第 70 図　2次調査3区2号土坑出土遺物実測図（4・6・7は1/4、他は1/3）

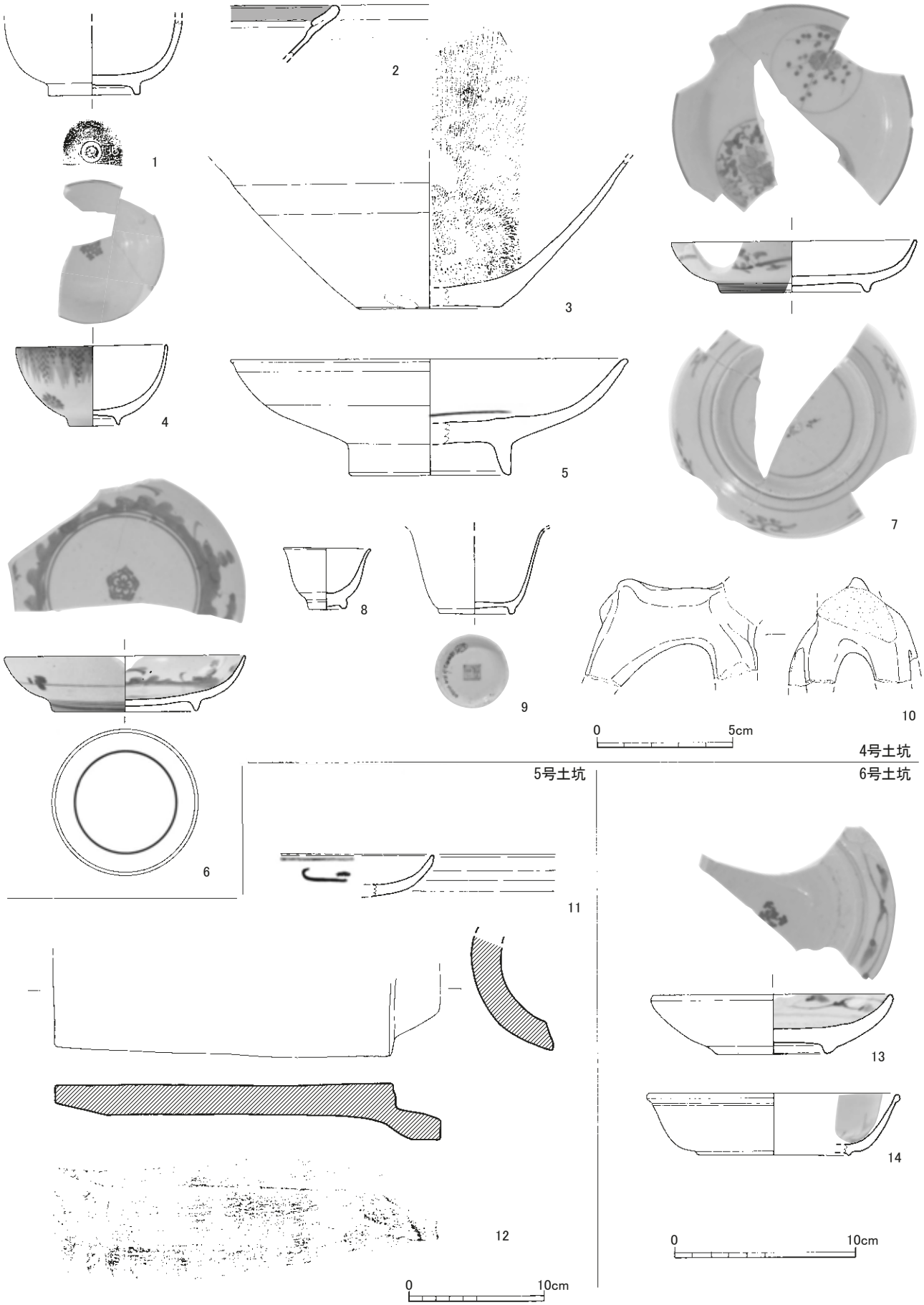
外面は粗割削りの面取りが残っており、両端の面は切断面のままである。このほか、第１遺構面整地層からは、ハクジラ亜目の椎骨が、第２遺構面整地層からは半円形の刳り込みの入る部材と、茶と赤漆を塗った折敷が出土している。

小結

２区は上位から掘り込まれた、火災で被災した家屋を片付けた大型土坑１・２があり、３次調査でも同様に瓦の廃棄土坑があるので、明治後期から昭和初期にかけて火事に見舞われた瓦葺建物があったことがわかる。１面の北側の礎石建物は、礎石の間隔が狭いが、建て替えのためではなく、柱材を礎石列の上に横に置いて、その上に柱を立てるタイプの家屋だったと考えられ、敷石遺構部分を備えたほかの地区にはない構造の建物だったとわかった。礎石の下に銅銭をさし銭で埋納するのも異例で、蔵につける錠もあったことから、保加町でも富裕な人物の家屋だったと考えられる。



第 71 図　２次調査3区3号土坑出土遺物実測図（5・6 は 1/4、他は 1/3）



第 72 図　2次調査3区 4 ～ 6 号土坑出土遺物実測図（10 は 1/2、3・12 は 1/4、他は 1/3）

３区

３区は西側最南端に位置しており、保加町 67－1 番地である。用地取得に伴って調査に着手し、平成 27 年 7 月 27 日に重機を入れて表土剥ぎを開始した。8 月 4 日に全景写真を撮って、さらに重機で掘削し、第 2 遺構面の調査に入った。8 月 11 日に全景写真を撮って、第 3 面遺構まで重機掘削した。8 月 27 日に全体写真をとって、9 月 1 日に完掘してユニットを移設した。

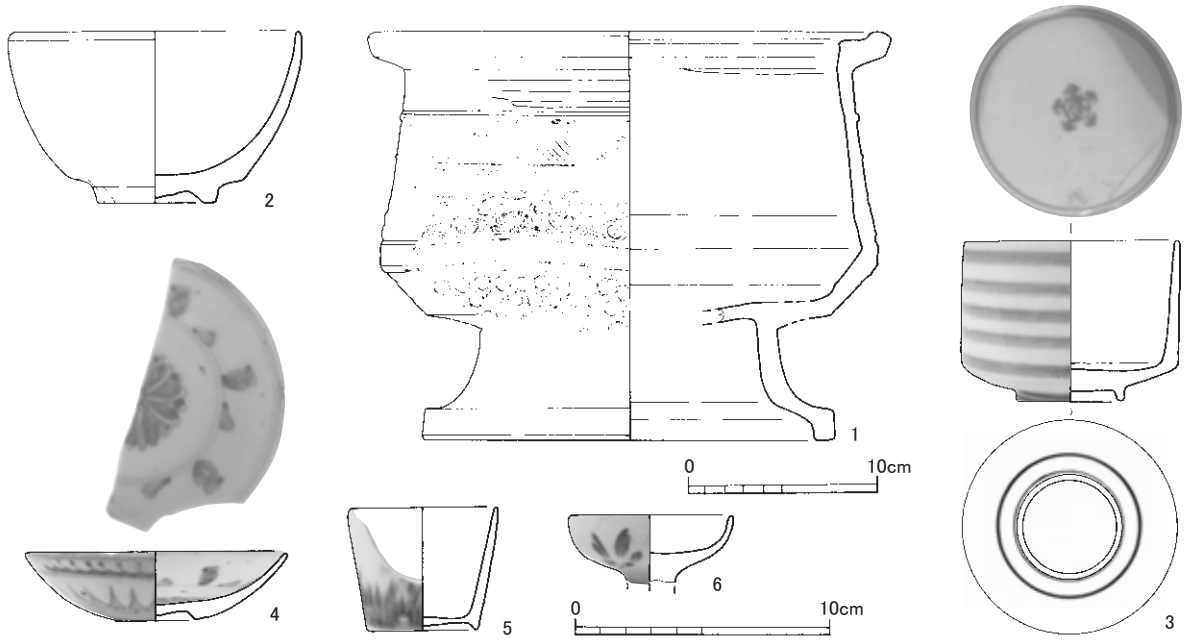
この調査区は堤防上面への擦りつけのため地表面が標高 4.4 m と高いが、その擦り付けは最上層のレンガを含む客土で行われたものだった。この客土の下に硬化面があったことから近世の路面の可能性があったため、これを第 1 遺構面とした。この面の硬化面は南半のみで、同一面に切石の礎石があり、北半には砂岩石柱を 10 本ほど敷き詰めて床面をつくった屋敷跡があり、近代の面であることがわかり、共通第 1 面とした。標高は 3.7 m でほかの区と比べてもそれほど高くないので、堤防への擦り付けは見られない。

この面を掘削すると礎石が検出される面があったので、そこを第 2 遺構面とした。標高 3.4 m で、南に向かって高くなっており、南側には硬化面も残っていた。この面を掘り下げると、近世陶磁器を大量に含む土坑群が検出される面があったことから、そこを第 3 遺構面とした。標高は 2.9 m である。第 3 遺構面を掘り下げて基盤層に掘り込まれた面を第 4 遺構面とした。標高 2.7 m であった。

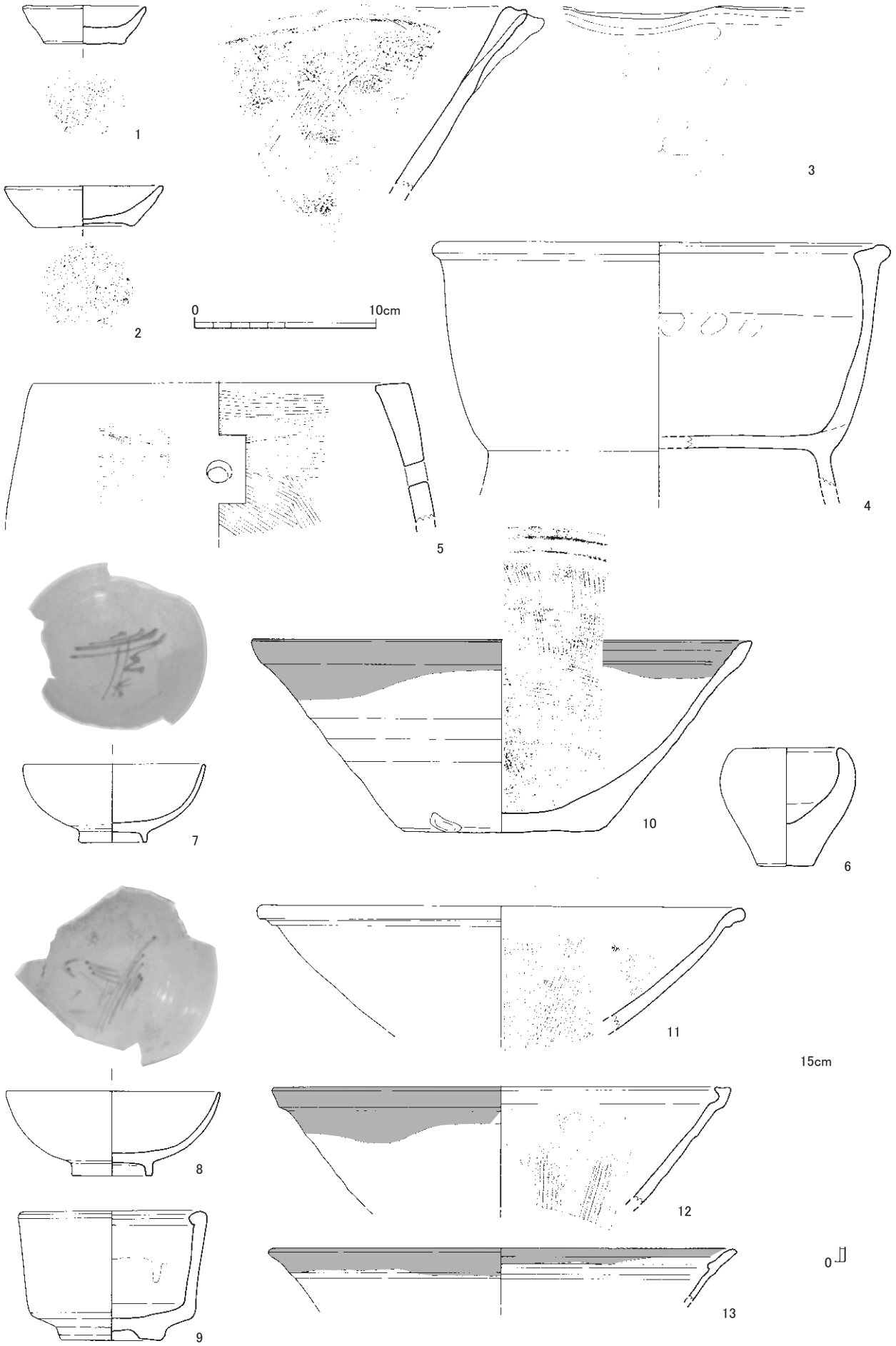
1 号礎石建物跡（図版 17、第 65 図）

第 1 遺構面から検出された建物跡で、大型の礎石と柱筋上に位置する小型の礎石で構成される。第 1 遺構面を検出面とすることと、礎石が切石であることから近代の礎石建物跡と判断できる。近代の礎石建物の柱間の間隔は等間隔でないことから、掘り方の礎石配置から張り出し部を多く持つ建物跡を復元したが確実性に欠ける。N － 3° 30′ － E を主軸とする 1 × 4 間以上で、東と南側に硬化面が広がるので、2 面を土間としていた可能性が高い。

図化できる出土遺物はなく、時期を特定できない。



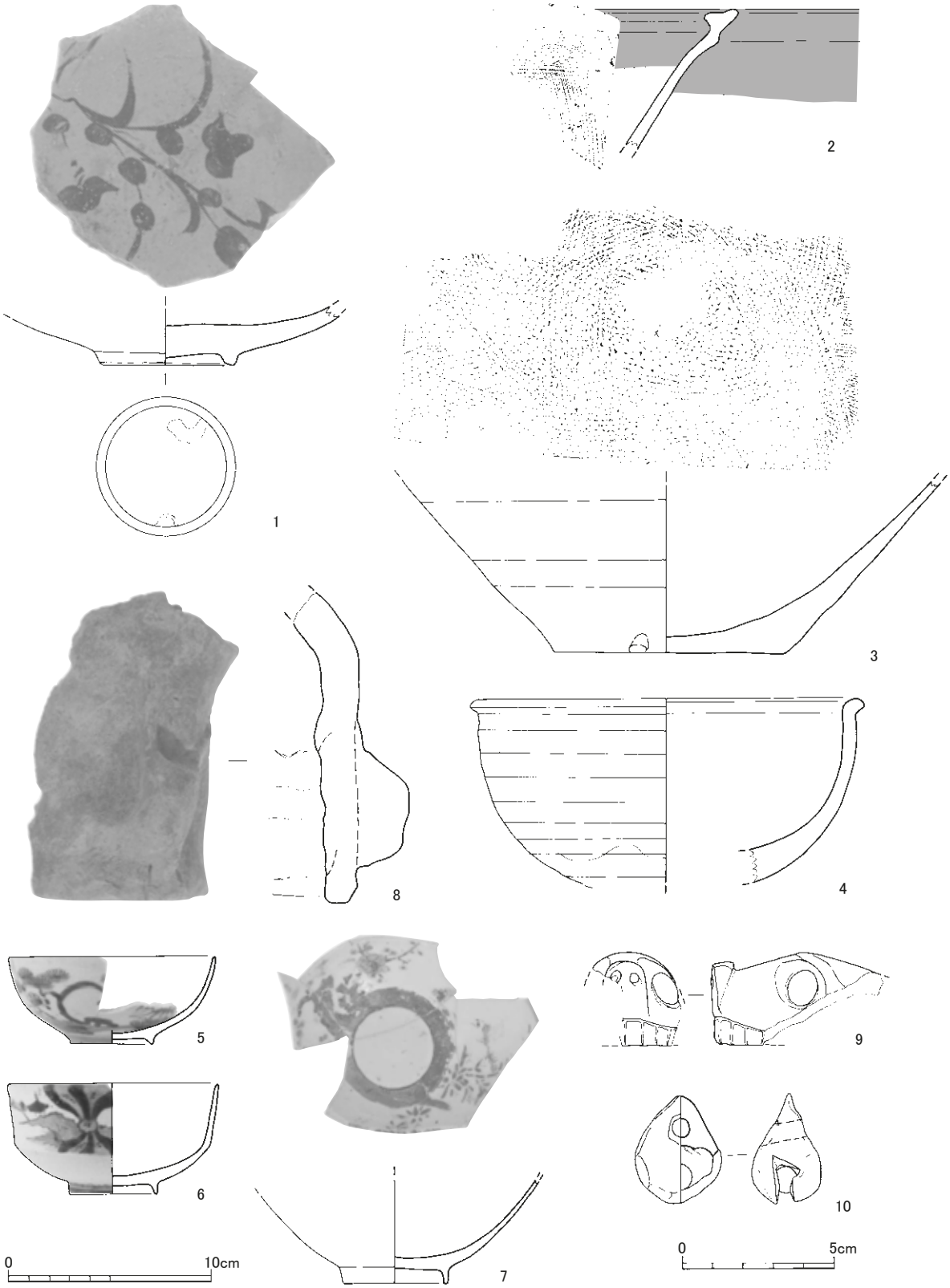
第 73 図　2次調査3区7号土坑出土遺物実測図（1 は 1/4、他は 1/3）



第 74 図　2次調査3区1号溝状遺構出土遺物実測図1（4・5・10 ～ 13 は 1/4、他は 1/3）

礎石出土遺物（図版 17・20・21、第 67・80・81 図）

礎石１は第１遺構面検出で、１号礎石建物跡の北に位置する。調査区外に展開するため１号礎石建物跡との関係はわからない。第 67 図４の染付の手塩皿が出土しており、19 世紀中葉に属する。礎石２は第２遺構面検出で、３号土坑の南側に位置している。1・2・4 号土坑の主軸上に位置しているので、1・2・4 号土坑は礎石を抜き取った土坑で、本来この位置に礎石建物があったと推定される。第 67 図３の染付が出土しており、その文様から 18 世紀前葉に属する。礎石３・4 は第２遺



第 75 図　２次調査3区1号溝状遺構出土遺物実測図2（9・10 は 1/2、他は 1/3）

構面検出で、６号土坑の南に位置する。平面方形プランの掘り方に方形の板石が入っており、礎石３からは第 80 図１、礎石４からは第 80 図２の銅銭が出土している。第 81 図 20 は礎石３・４から出土した完形の硯で、輝緑凝灰岩製の携帯用である。礎石５は第３遺構面検出で、原位置ではないことからどの礎石と組み合うのかわからないため、建物を復元できない。第 67 図１の瓦質土器のこね鉢、第 67 図６の丸瓦も出土しているが時期は特定できない。第 81 図９の刀子が出土している。

１号土坑（図版 17、第 66 図）

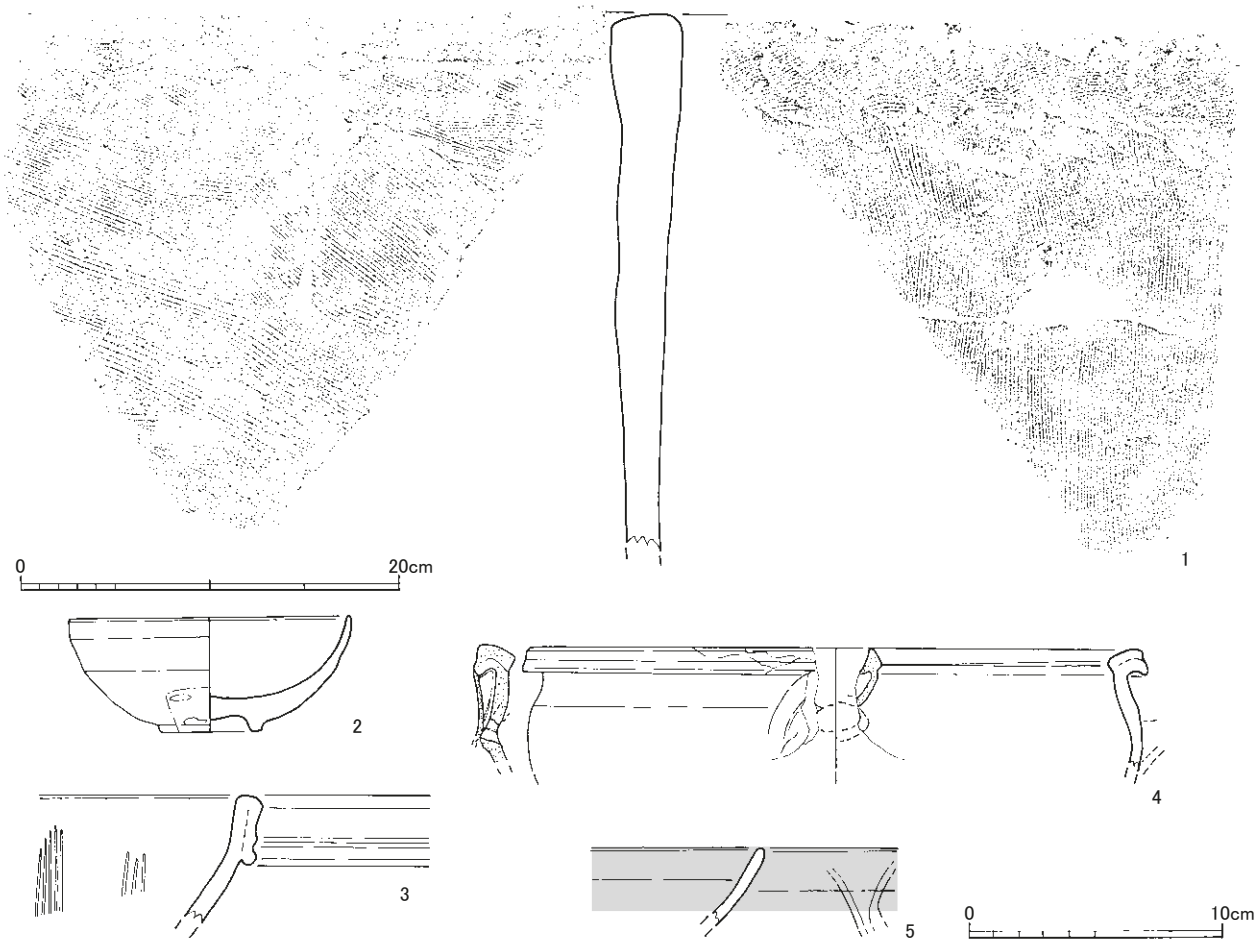
第２面から検出された不整形の浅い土坑で、長軸 150cm以上、短軸 120cmで、深さ 15cmほどである。しＮ－ 33° 40′ － Ｅを主軸とする。染付の文様から、18 世紀後葉に属する。

出土遺物（図版　、第 68・69 図）

第 68 図５は底面が広いので船徳利であろう。

２号土坑（図版 18、第 66 図）

第２面から検出された不整形の浅い土坑で、西端が調査区壁に入るため、全長はわからない。長軸 190cm以上、短軸約 130cmで、深さ 15cmほどである。Ｎ－ 30° － Ｅを主軸としているが、２つの遺構が切り合った結果の形態かもしれないが、遺物の入り方や時期に差異はないので１つの遺構として報告する。検出時には４号土坑を切っているように見えたが、出土遺物からは所属時期の新古が逆なので、４号土坑を切るものと見られる。



第 76 図　２次調査３区２号溝状遺構出土遺物実測図（1は 1/4、他は 1/3）

出土遺物（図版 21、第 70・81）

第 70 図５は陶器摺鉢で外底は摩滅している。

３号土坑（図版 18、第 66 図）

第２面から検出された１辺約 150cmの略正方形プランで、深さ 28cmほどで床面はほぼ平坦である。４号土坑を切る。第２遺構面からの出土だが、第 50 図９の端反碗があることから 19 世紀中葉であり、４号土坑を切ることから本来第１面からの掘り込みだっただろう。

出土遺物（図版 20、第 71・80）

第 71 図２は京焼風陶器の埦である。9 は染付碗で畳付して砂目が多く付着する。

４号土坑（図版 18、第 66 図）

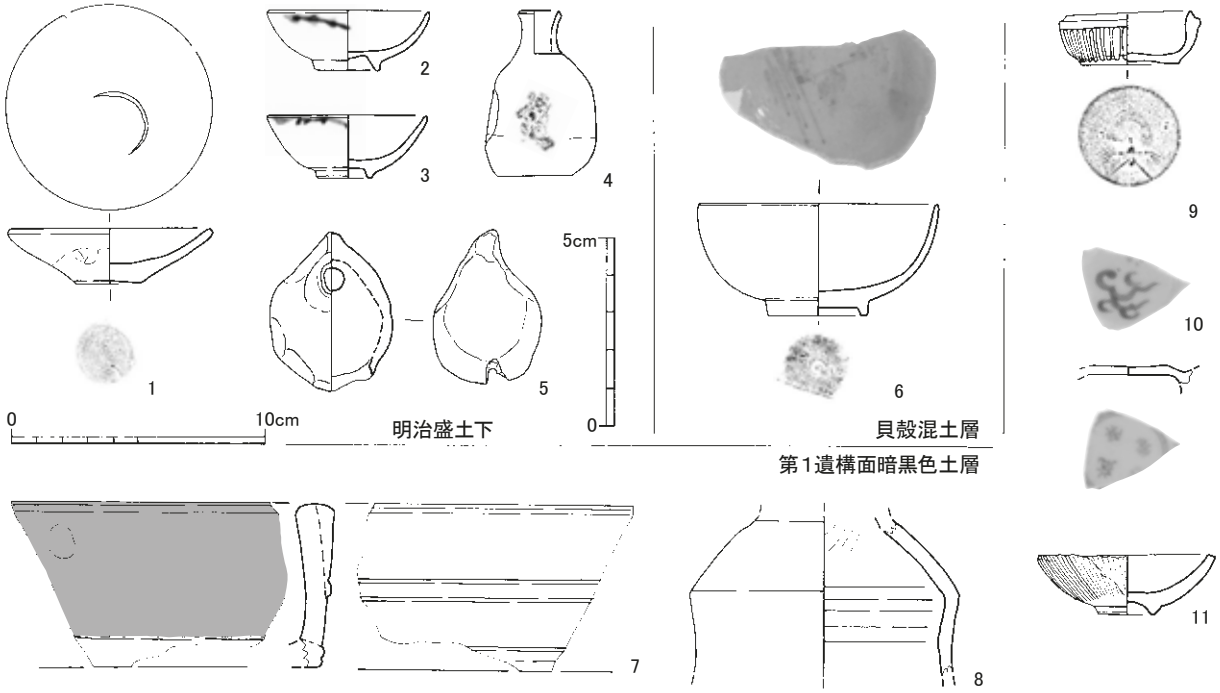
第３面から検出された不整形の浅い土坑で、西端が調査区壁に入るため、全長はわからない。長軸 350cm以上、短軸約 150cmで、深さ 18cmほどである。N － 82° 30′ － W を主軸とし、３号土坑に切られる。陶磁器が多く出土しているので廃棄土坑だろう。検出時には２号土坑に切られるように見えたが、出土遺物からは所属時期の新古が逆なので、２号土坑を切るものと見られる。

出土遺物（図版 20・21、第 72・81・82 図）

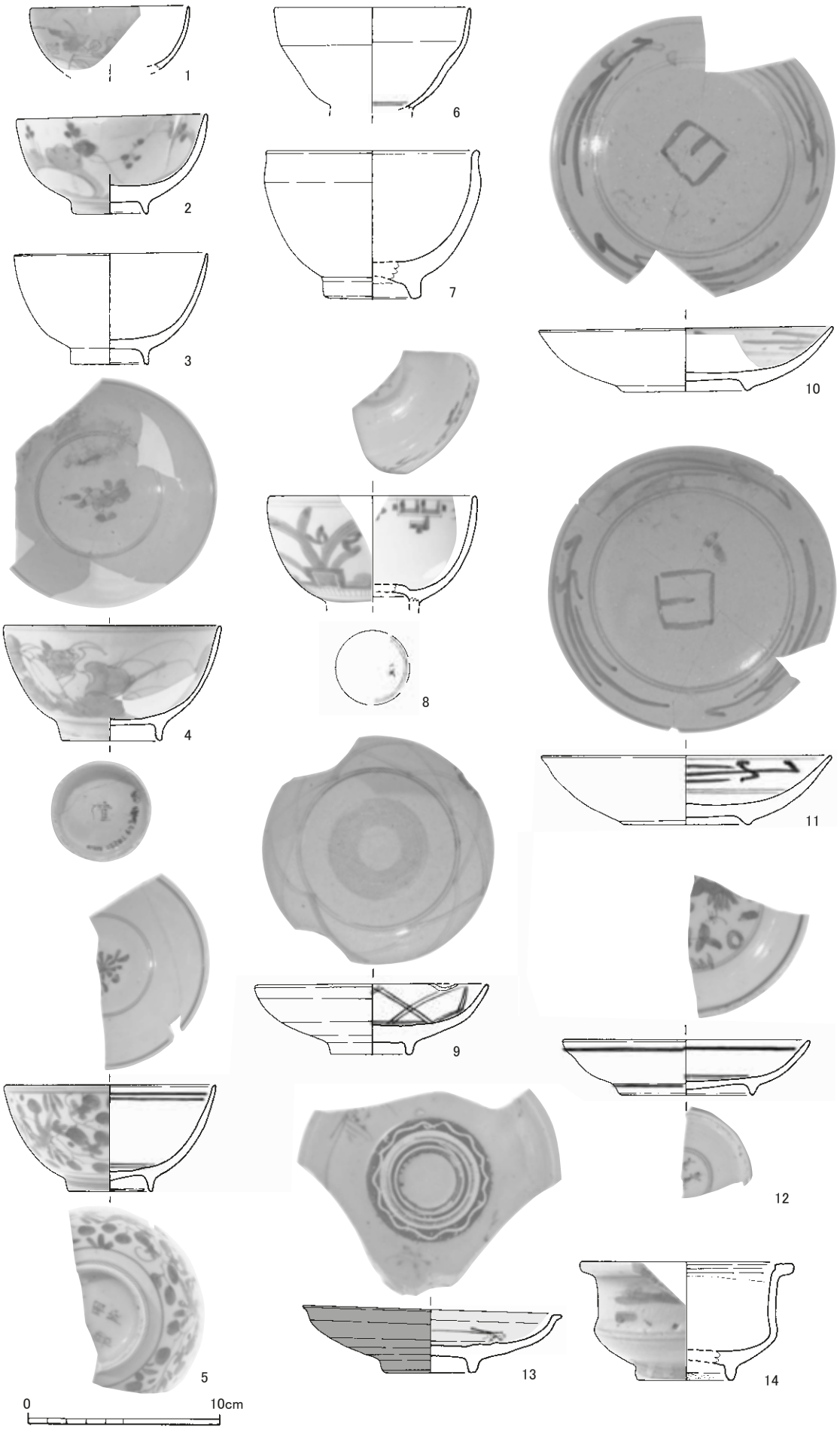
第 66 図 6・7 は一対の真鍮製火箸である。上端の孔には金環でまとめられていただろう。第 81 図 26 は片岩系石材の碁石である。

５号土坑（図版 18、第 66 図）

第２面から検出された略方形の浅い土坑で、東にテラスをもっており、全面に漆喰が貼られていた。長軸 150cm以上、短軸約 135cmで、深さ 15cmほどで、漆喰の面は丸みをもっている。埋甕を設置していたような剥離痕はなく、漆喰は掘り方をコーティングすることを目的としたもののようで、機能がわからない。



第 77 図　２次調査3区第1遺構面トレンチ暗黒色粘土層出土遺物実測図（5は 1/2、他は 1/3）



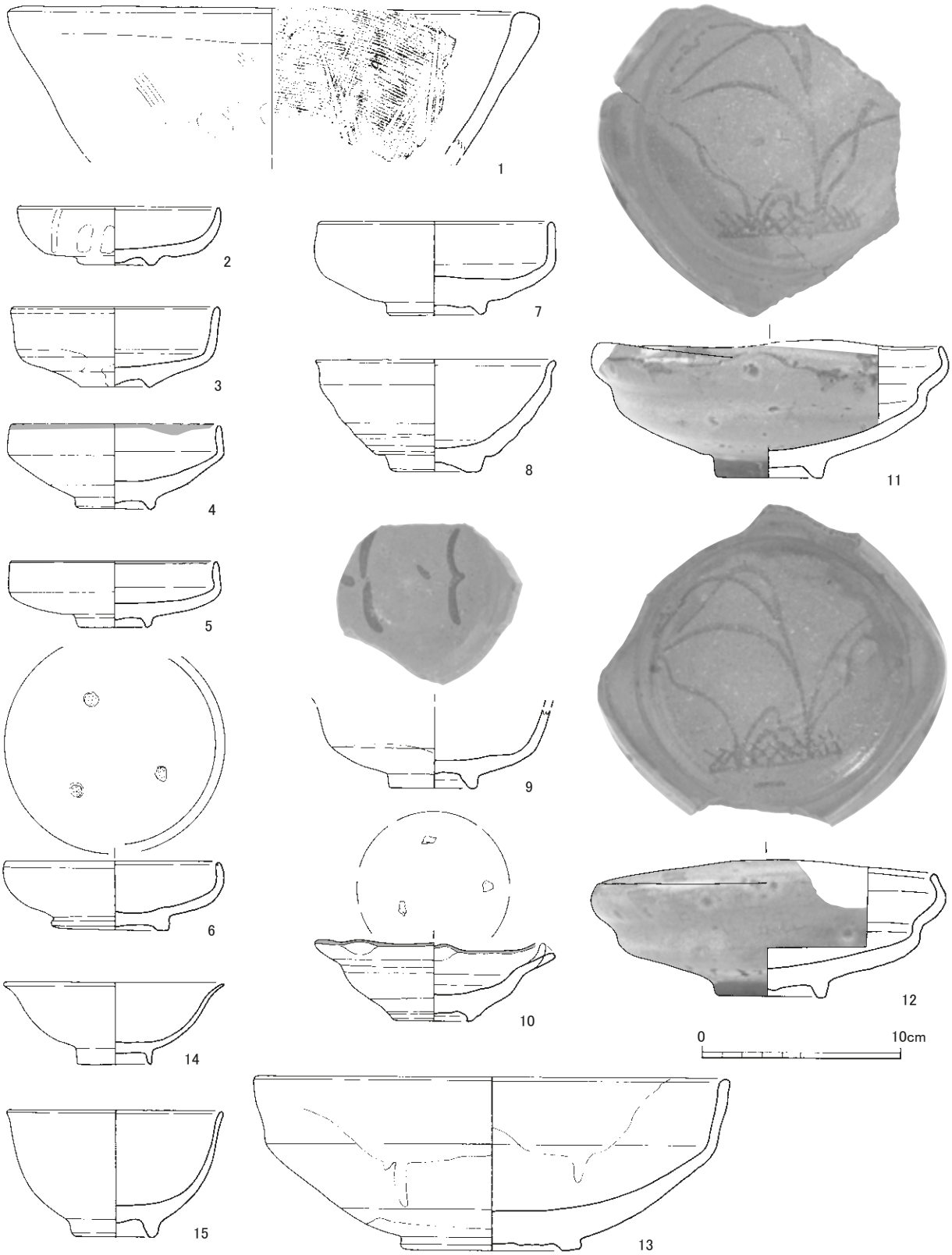
第 78 図　2次調査3区下位包含層出土遺物実測図3（1/3）

出土遺物（図版 20、第 72・80 図）

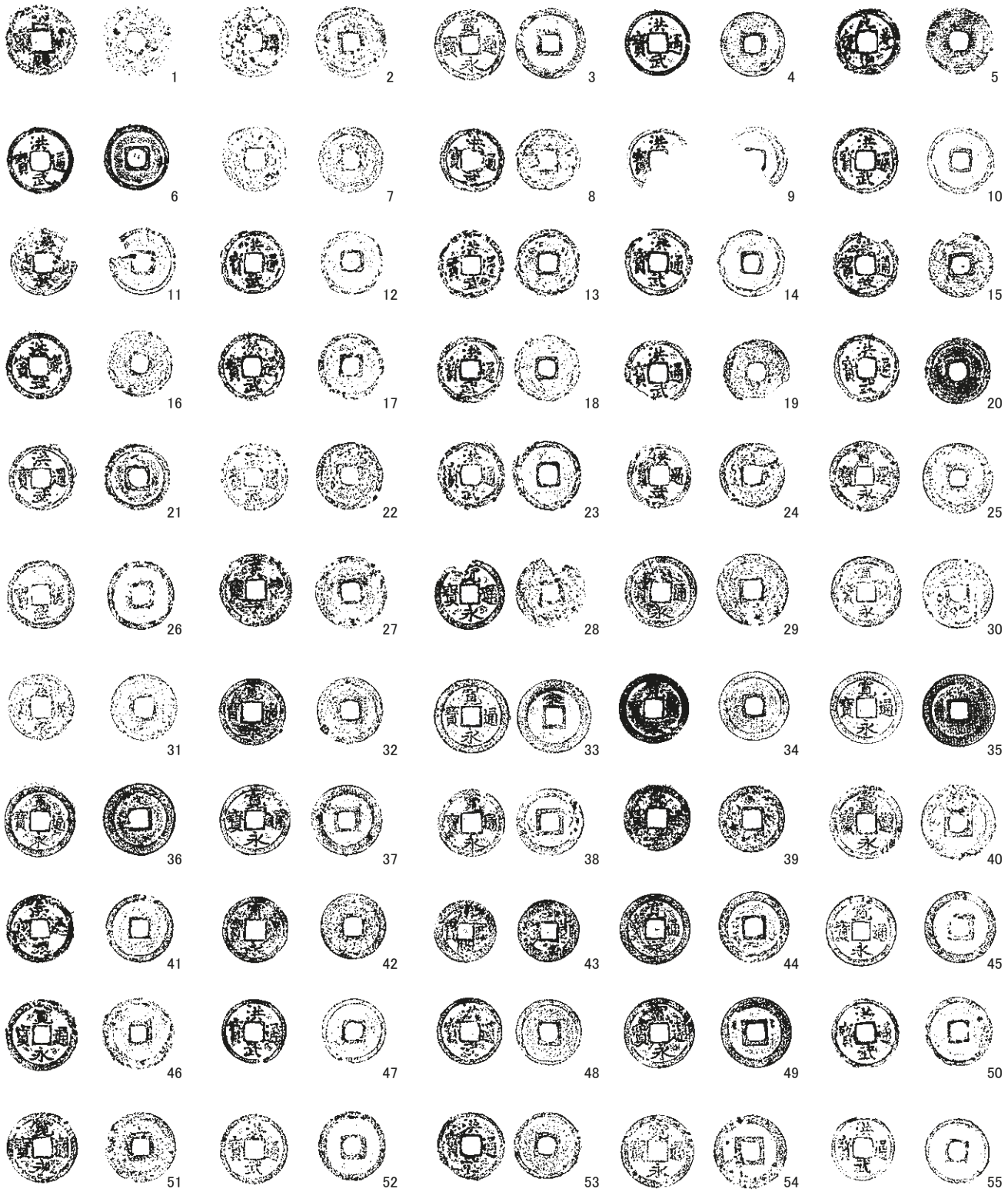
第 80 図 7～23 は洪武通宝で、本遺構出土の銅銭に寛永通宝はない。

６号土坑（図版 18、第 66 図）

第 2 面から検出された径 100cmの円形の土坑で、深さ約 60cmである。内部を上位面から掘り込ま



第 79 図　２次調査3区下位黄色粘土層出土遺物実測図1（1/3）



礎石3	1
礎石4	2
礎石5	3
土坑3	4～6
土坑5	7～23
P6	24
溝1	25・26
上位包含層	27～30
明治盛土下	31～36
第1遺構面下包含層	37～45
第1遺構面トレンチ	
暗黒灰色粘土	46
下位包含層	47～53

第 80 図　2次調査3区出土銅銭拓影（1/2）

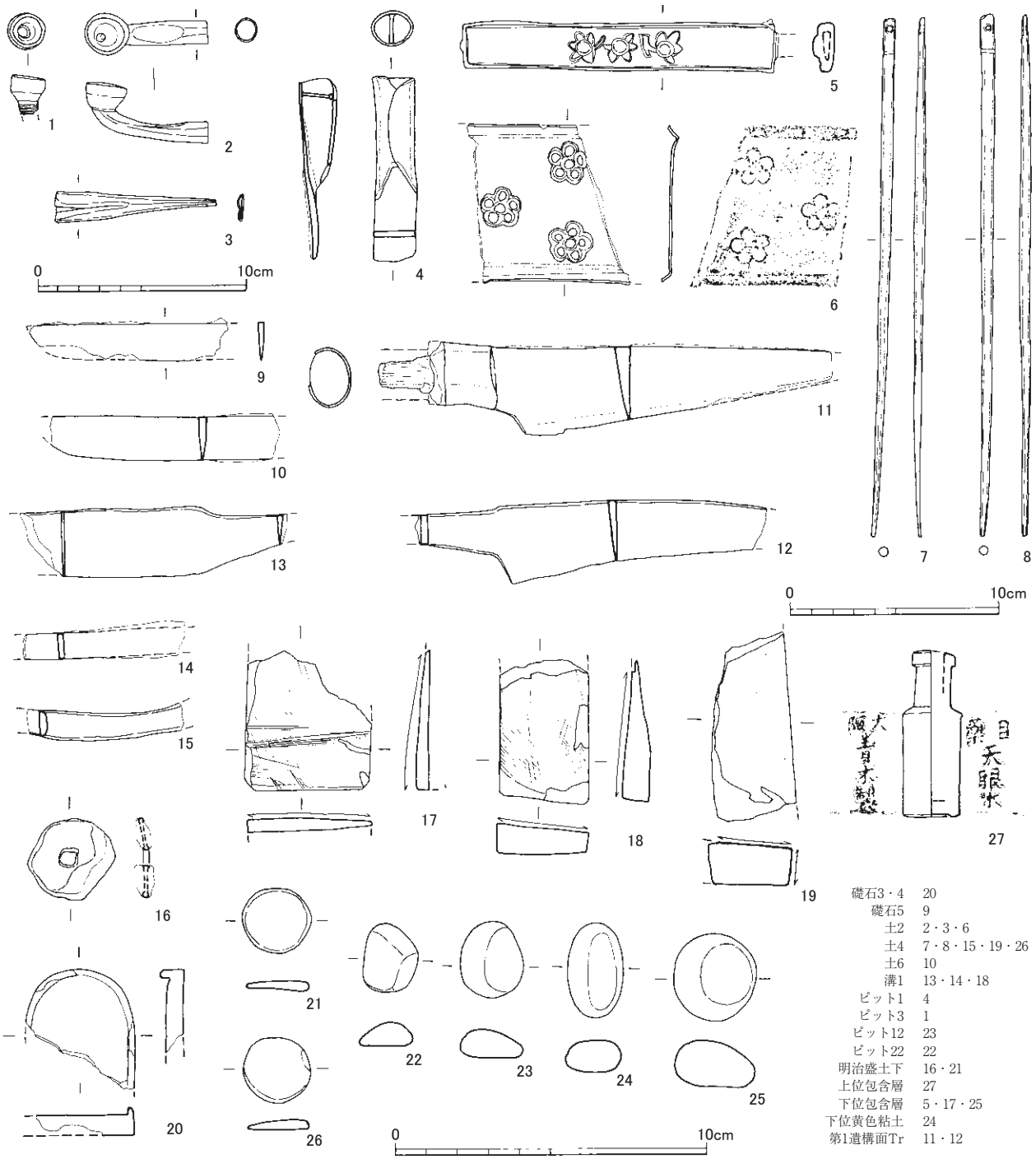
れた敷石柱穴に切られる。染付から18世紀後半だろう。

出土遺物（図版21、第72・81図）

第66図9は刀子で、小束にしては大きいので庖丁かもしれない。

７号土坑（図版18、第66図）

第１面から検出された隅丸方形の土坑で、深さ約40cmである。西側は検出時に掘削しすぎて失われている。上位は黄色の軟質粘土で客土されており、上位に木質の集中層があった。この層は埋没後に、木質の廃棄土坑として利用されたもので、その下には木枠の中に竹が立っていたことから井戸と考えられる。中位まで掘り下げたところでガラス製の瓶の蓋が出土し、近代の遺構と判明したので最下層までは掘り下げなかった 。



第81図　２次調査3区出土金属・石・ガラス製品（17・18・24～29・30は1/2、他は1/3）

出土遺物（図版 16、61・73 図）

第 61 図 16 は手斧である。第 73 図 1 は瓦質土器の火鉢で、型押しによる文様が付けられている。下駄とお櫃の漆蓋も出土している。このほか、ウマの基節骨や下駄・箱材が出土している。

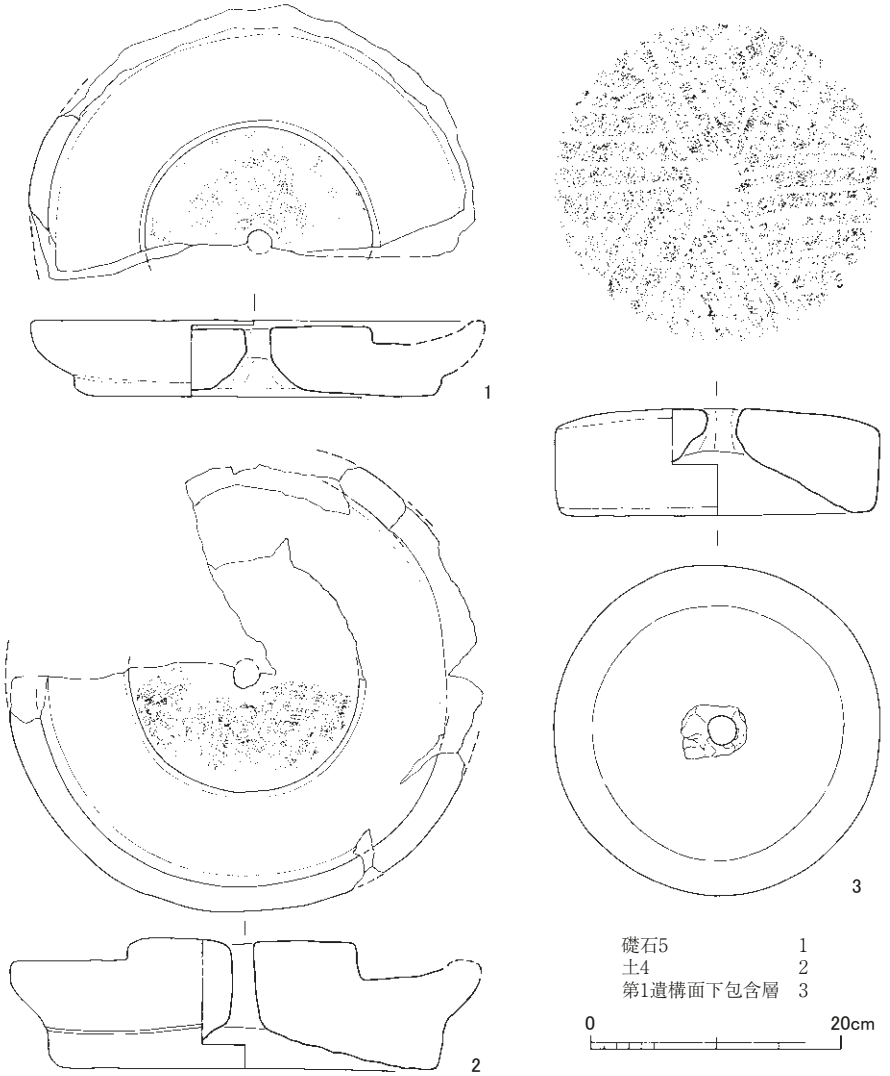
柵跡（図版 17・19、第 66 図）

第 4 面から検出された。調査区北壁沿いにあり、直径 1cmほどの細い竹がランダムな間隔で差し込まれており、その下位には直径 10 ～ 20cmの杭が差し込まれていた。角杭の列と丸杭の列が存在するようにも見える。竹列と杭列が一連のものなのかはわからないが、ここでは 1 つの遺構として報告する。この柵跡の周りにも同様の木杭や竹が多数存在しており、繰り返し建て替えられたものと考えられるが、杭が非常に多いので何度建て替えられたかわからない。

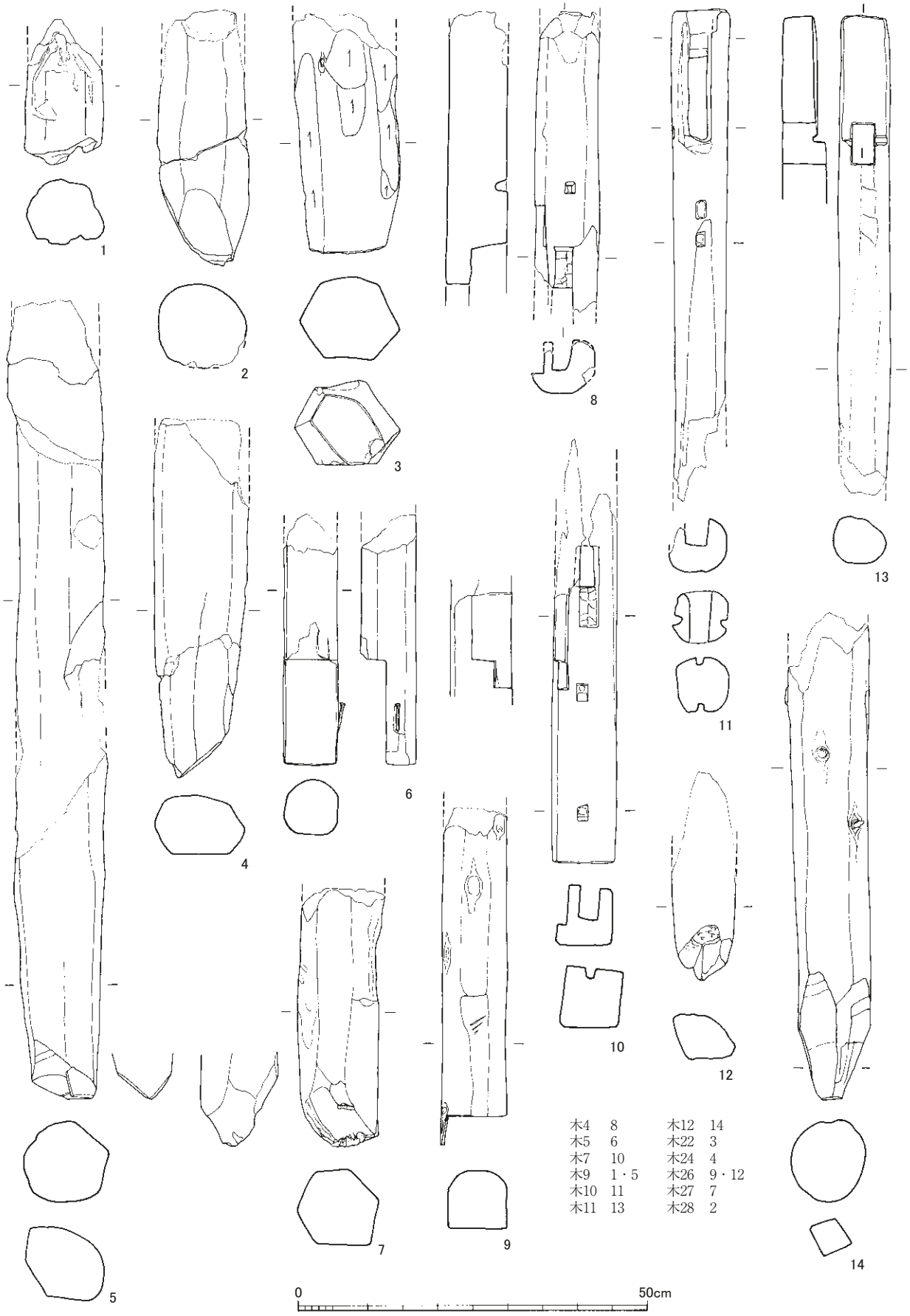
図化できる出土遺物はなく、時期を特定できない。

出土遺物（第 83・84）

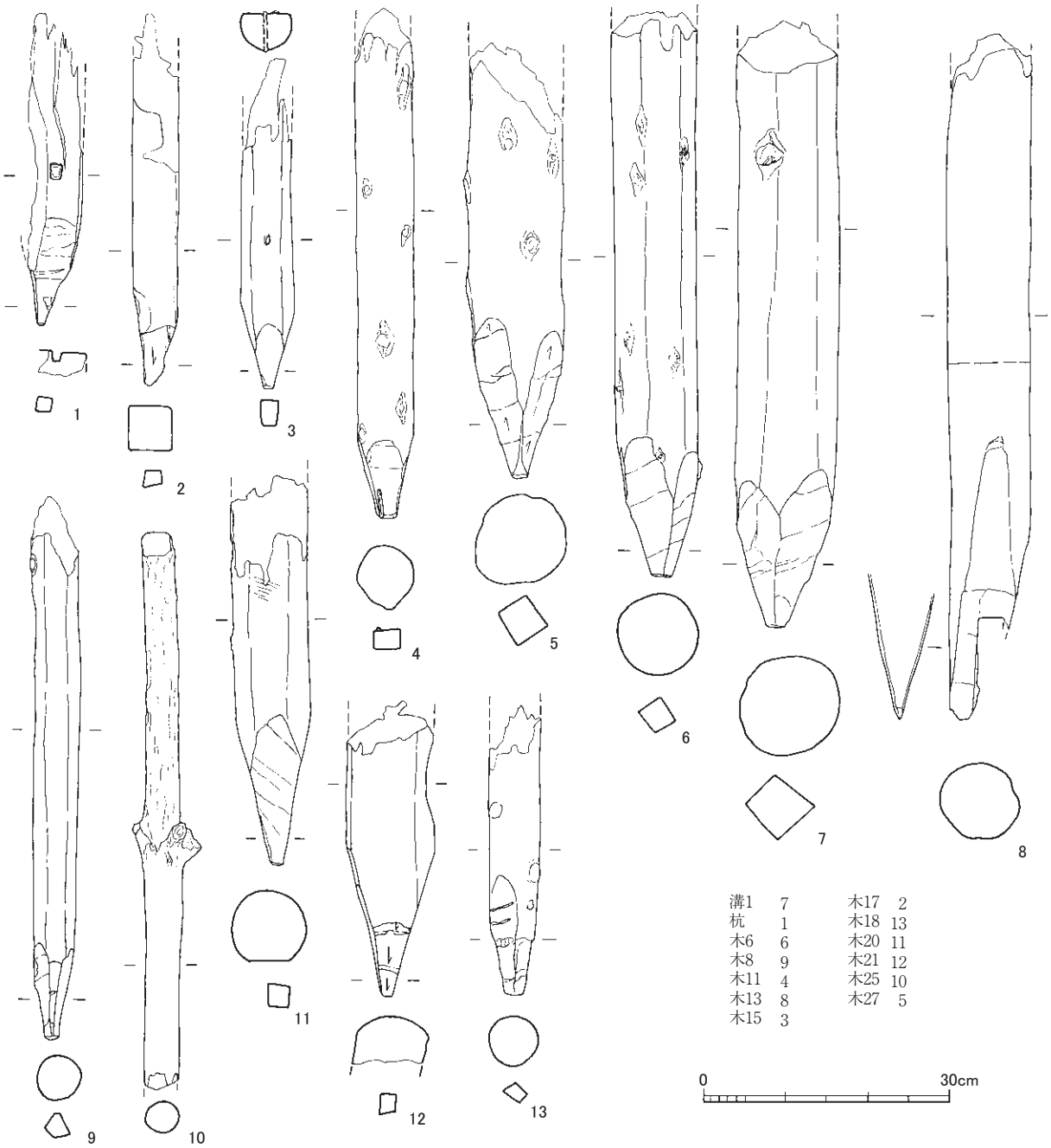
第 83・84 図は柵跡出土の柱材で、大きく杭と、建築材を転用したものに分けられる。建築材を転用したものは、端部を尖らせたものと、ほとんど加工しないものがある。軟弱土壌であることから加工しなくても打ち込めば刺さったのだろう。建築材は貫が複雑なものが多く、家屋に使用されていたものと考えられる。



第 82 図　2次調査3区出土石臼実測図（1/6）



第 83 図　2次調査3区木製品実測図1（1/8）



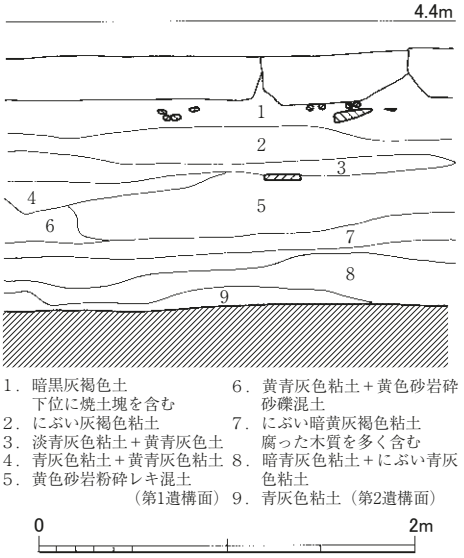
第 84 図　2次調査3区木製品実測図2（1/8）

1号溝状遺構（図版 19、第 5・64 図）

第２遺構面の西端を南北に走る溝で、調査区外に西壁側が出るので、幅 80cm以上、深さ約 20cmの規模であることだけがわかっている。南側隅は貝殻層が露出していたため、埋土と間違えて掘りすぎた。沖端川の川沿いに立ち並ぶ町屋の西隣の家屋との境界になる溝だろう。

出土遺物（図版 20・21、第 74・75・80・81）

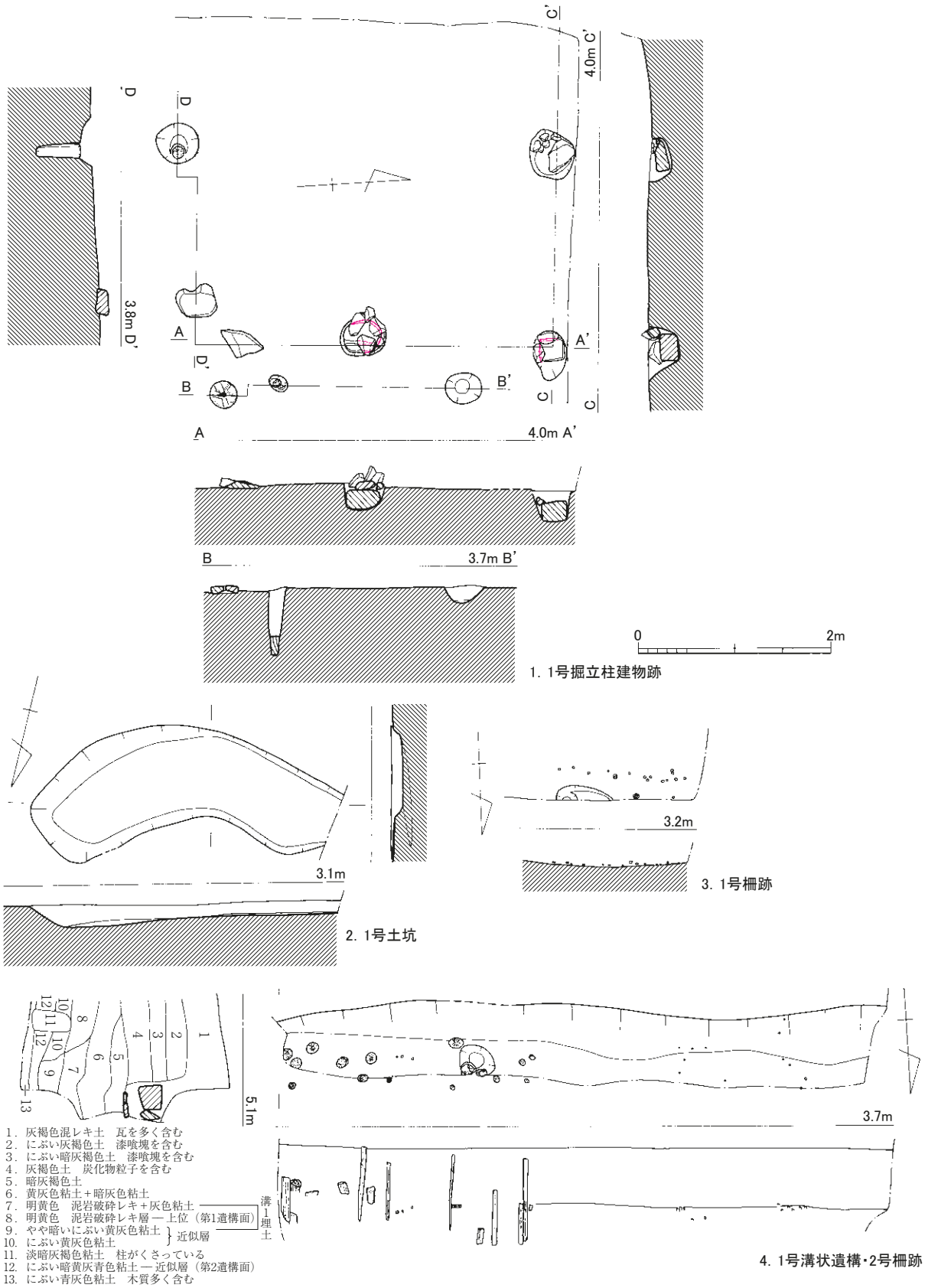
第 74 図４は瓦質土器の摺鉢で、口唇部の摩滅が著しい。柳川の胎土ではないので、搬入品ではない。第 75 図６は染付碗で、京焼風陶器椀と形態が同じで、模倣したものかもしれない。第 75 図９は土人形の頭部で、大牟田市の大



第 85 図　2次調査4区北壁土層断面実測図（1/40）

蛇祭りの大蛇を模したものだろう。第81図14は方形の不明板状鉄製品で、未製品の可能性もある。

このほか、魚・獣骨が多く出土しており、ハタ科・マダイ・マグロ属の複数の部位やアカニシなどの貝殻、アワビの蓋、ウマの臼骨が見られるので、食糧残滓も廃棄していたのだろう。このほかわずかながら銅滓もあった。



第86図　2次調査4区検出遺構実測図（1/60）

２号溝状遺構（図版 19、第 7 図）

第２遺構面の西端を南北に走る溝で、蛇行するので区画溝ではない。調査区外に西壁側が出るので、幅 150㎝、深さ約 20㎝の規模であることだけがわかっている。流路の痕跡かもしれない。

出土遺物（第 76 図）

第 76 図 1 は瓦質土器で井戸枠片だろう。7 号土坑は井戸だったが、完掘していないので下位に井戸枠が残っている可能性はある。

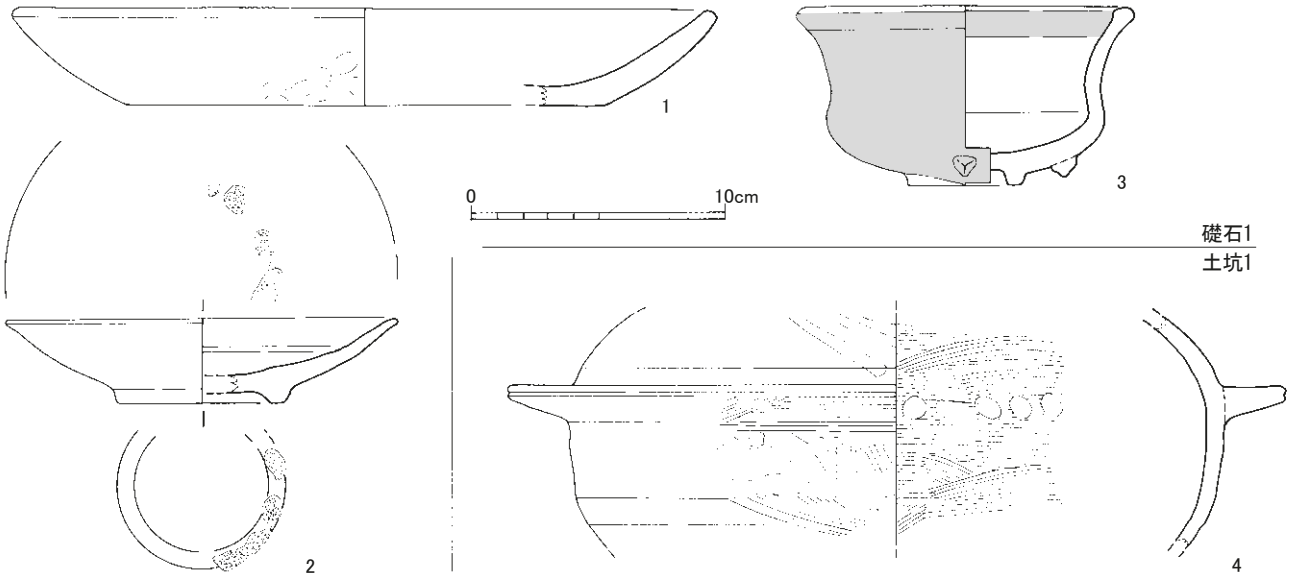
その他の出土遺物（図版 20・21、第 77 ～ 82）

第 77 図 8 は暗黒色土層出土の高取系陶器の徳利で、第 77 図 10 は暗黒色土層出土の景徳鎮系染付碗で上げ底。図を掲載できなかったがピット 22 から陶器の腰折埦や李朝白磁皿や漆椀が、下位包含層から景徳鎮系の染付碗や皿が出土している。第 78 図 5 は下位包含層出土の端反形染付碗で、裏銘は「寿」である。図版 20 － 2 の陶器皿と同時期のものだろう。図版 20 － 1 は第 1 遺構面下包含層出土の磁器製水注の完形品で、３は第 2 遺構面整地層出土の土師器製灯明皿、図版 20 － 4・5 は下位包含層出土の陶器皿である。図版 22 － 1 は下位包含層出土の白磁杯である。図版 20 － 7・8 は下位包含層出土の土師質土器の土製品である。第 78 図 12 は染付皿で、珍しい裏銘である。このほか柱材が多く出土しているがスギ材が最も多く、スダジイがこれに次いでいる。

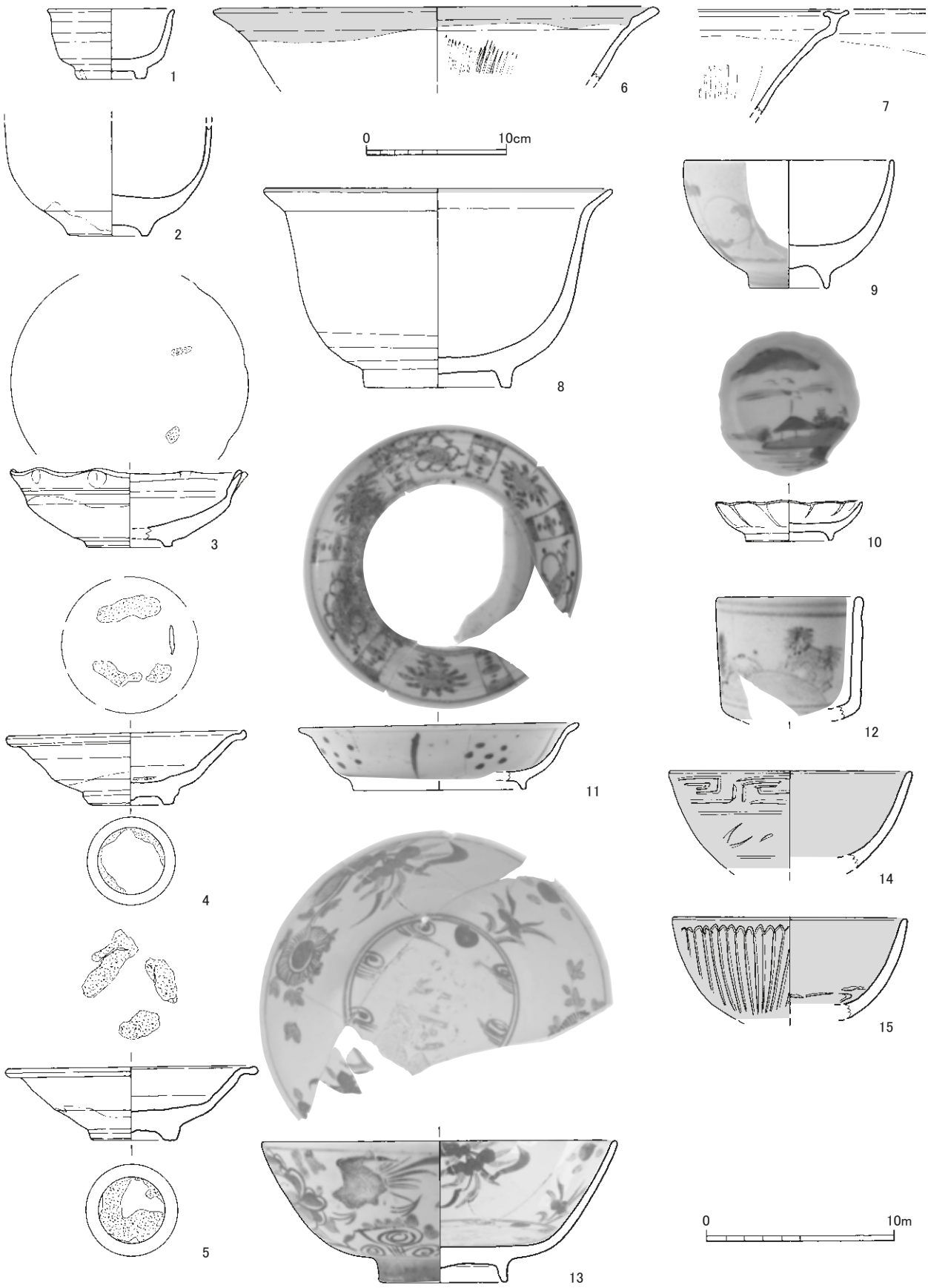
第 81 図 5 は真鍮製の小束の中空の柄で、表面には花文様を鋳出している。第 81 図 4 はピット 1 出土の真鍮製の小型の鑿で、袋部を折り返して木柄とはピンで固定している。第 81 図 21 は明治盛土下出土の白碁石で、貝殻を加工したものである。27 は上位包含層出土のガラス製目薬瓶で、片面に「目薬」「天眼」、反対面に「大阪」「青木製」というエンボスがある。

小結

３区は西側の最南端で、古地図に見られる沖端川沿いの道路が検出される可能性があった。しかし、調査区際まで礎石が発見されたことから、江戸時代の道路は現在の川沿いの道路よりさらに川側にあったことがわかった。この調査区の特徴は北壁沿いに柵があることで、井手橋を越えて保加町に入ったところに柵があったことがわかる。おそらく、町の出入りを制限した自衛のための施設だろう。



第 87 図　２次調査４区礎石・土坑出土遺物実測図（1/3）



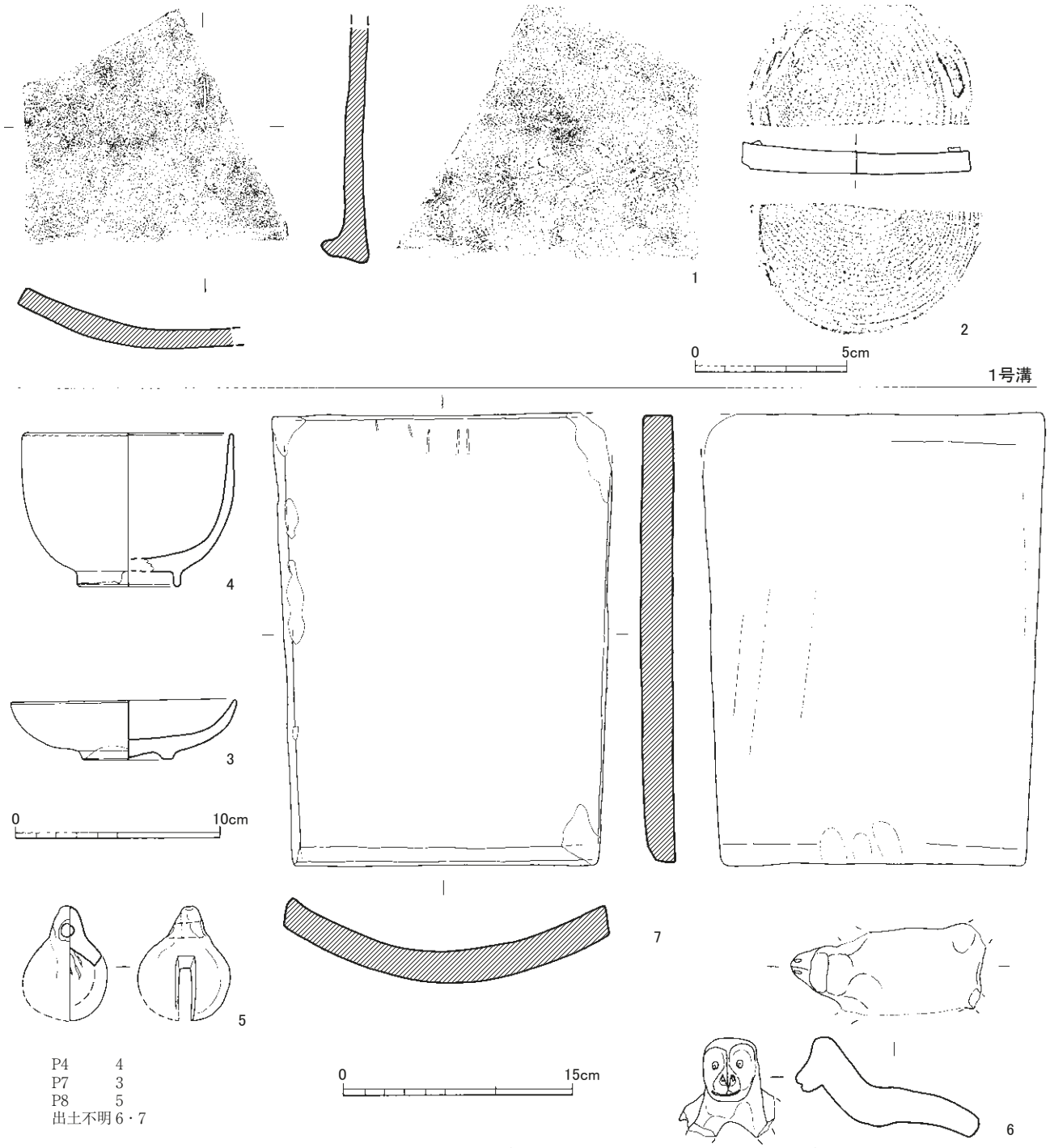
第 88 図　2次調査4区1号溝状遺構出土遺物実測図（6は 1/4、他は 1/3）

３区にはほかの調査区にはない井戸が見られた。川が近いからかもしれないが、角に位置する家屋であることから、細長い屋敷地とは施設の配置が異なるのかもしれない。

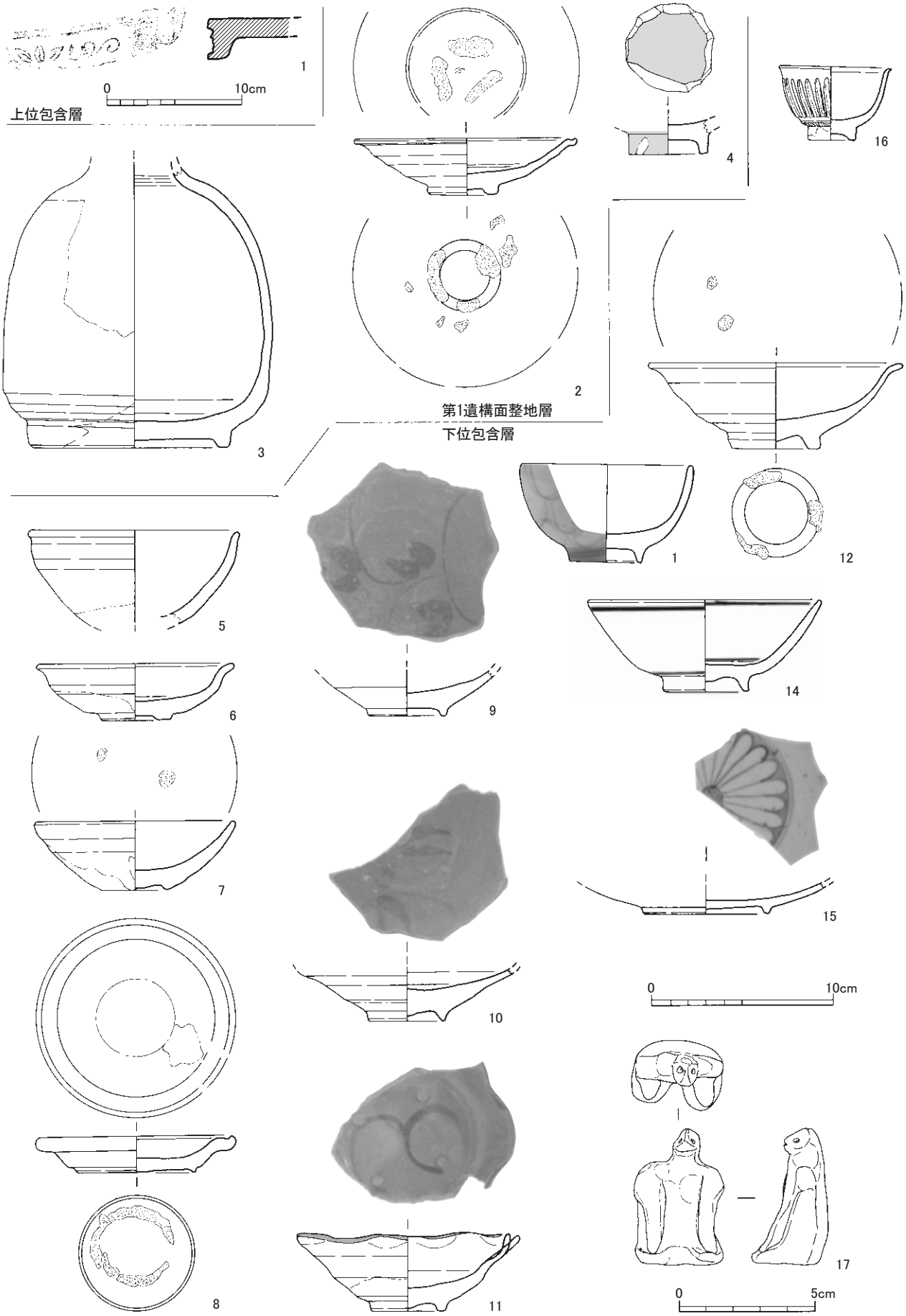
４区

平成 27 年９月８日に重機を入れて表土剥ぎを開始、９月 11 日に全景写真を撮り、９月 15 日に２面目まで掘り下げた。５区の遺構検出と併行して作業を進め､29 日に写真撮影した。杭が大量にあったが、小さな杭は残し、大きな杭のみ抜いて持ち帰り、撤収した。

４区は保加町 64 番地の南半で、３区の北に隣接しており、上位は近代以降の厚い整地層が見られ、



第 89 図　２次調査４区１号溝状遺構・ピット出土・出土地不明遺物
実測図（2・5・6 は 1/2、1・7 は 1/4、他は 1/3）



第 90 図　2 次調査 4 区 1 号溝状遺構出土遺物実測図（1 は 1/4、17 は 1/2、他は 1/3)

3区の硬化面は残っていなかった。第1遺構面は標高3.4ｍで、南端に溝が確認できたが石組はなかった。この面は礎石が検出されたことと、他の区との遺構の様相の比較から共通第3面とし、共通1・2面は失われているものと判断した。この面を掘削すると基盤層上の整地面に達し、そこを第2遺構面とした。標高は3.0ｍで、他の共通4面よりやや高い。

1号掘立柱建物跡（図版23、第86図）

第1遺構面から検出された建物跡で、柱穴底に大型の根石を敷き、その上面に立つ柱の周囲を小礫で根締めする柱穴で構成されるが、明瞭に復元できず不確実な建物である。N－85°40′－Wを主軸とする2×2間以上で、東と南面に杭による小さな張り出しがつく。

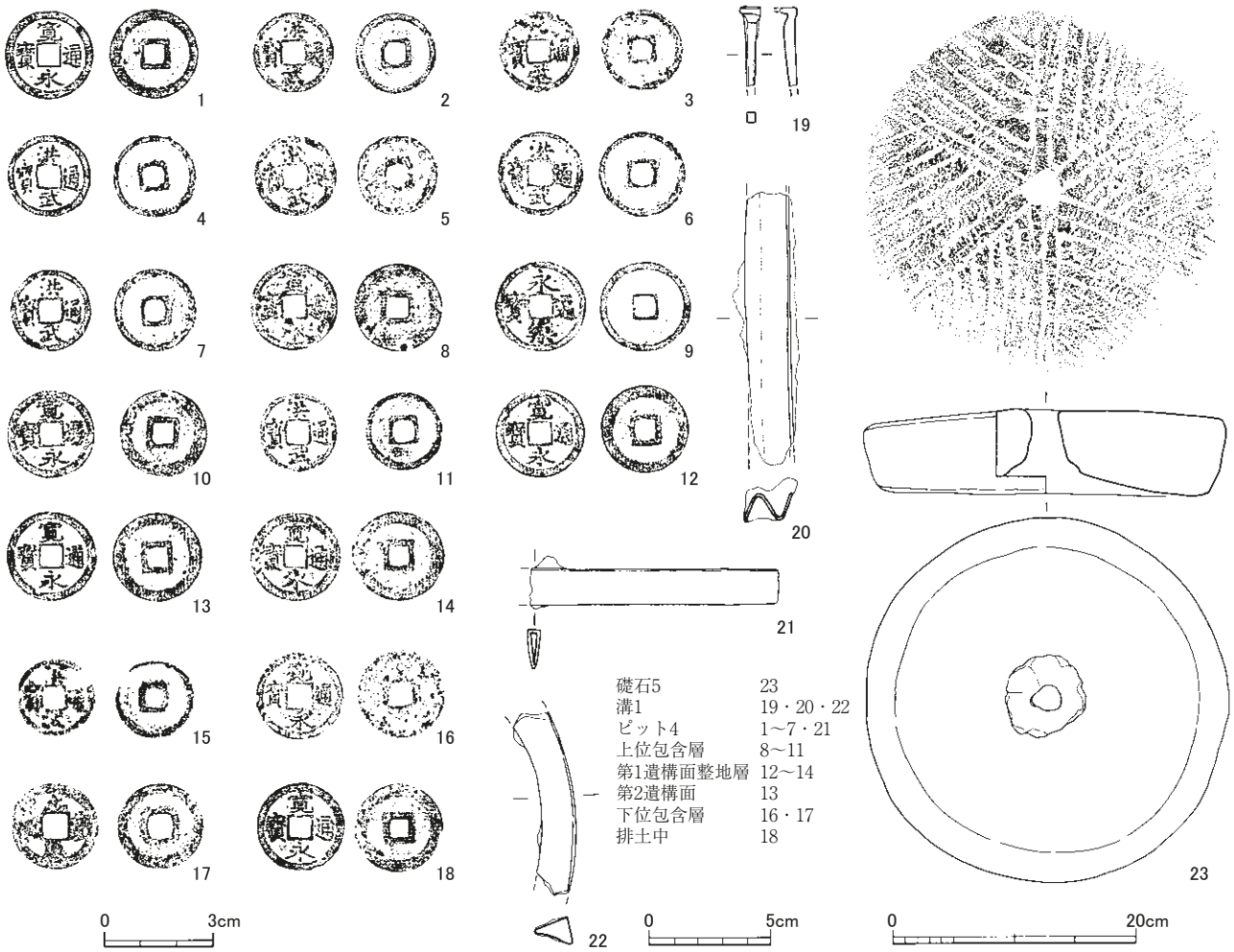
北側の柱穴は礎石1・2で、礫で根締めしており、出土遺物から共通第3面に対応する時期の遺構であろう。

出土遺物（第87・91図）

第87図2は白磁皿で、見込みに胎土目跡がある。第91図23は礎石5の下臼で、完存している。

1号土坑（図版24、第86図）

第4面から検出された不整形の浅い土坑で、西端が調査区壁に入るため、全長はわからない。長軸330cm以上、短軸90cmで、深さ23cmほどである。N－77°－Eを主軸とし、床面はほぼ平坦で、何か機能をもったものではなく整地面の1つかもしれない。



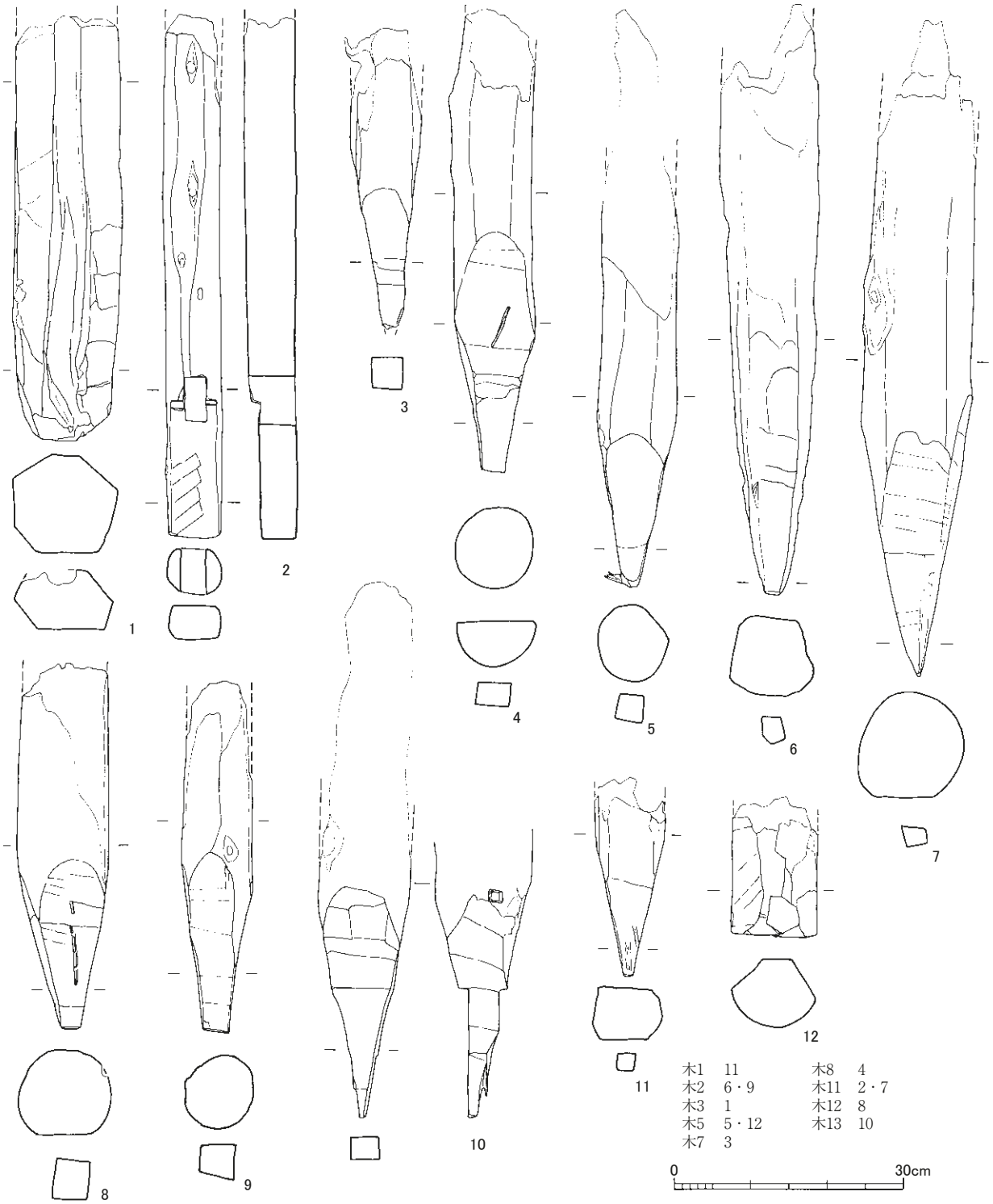
第91図　2次調査4区出土金属・石製品実測図（19～22は1/3、23は1/6、その他は1/2）

１号柵跡（図版 23、第 86 図）

第４面から検出された。調査区北西隅にあり、その西壁に直径 1cmほどの細い竹が約 10cm間隔に直線的に 133cmにわたって差し込まれていた。直線的な列を捉えるのは困難であることから、格子状に組まれていたものかもしれない。土中の深さは確認していない。１区の３号溝状遺構突出部の壁に見られたものに似る。

２号柵跡（図版 23、第 86 図）

第３面から検出された調査区北端の１号溝状遺構南壁沿いにあり、その南壁の西側には直径 1cm



第 92 図　２次調査４区２号柵跡出土木製品実測図（1/8）

ほどの細い竹がランダムな間隔で差し込まれており、東側は直径10～20cmの杭が差し込まれていた。直線的な配列も見受けられ、3つの杭列が杭間を埋めるように配置されているようにも見える。杭は建築材の先端を加工したものと見られる。竹列と杭列が一連のものなのかはわからないが、ここでは1つの遺構として報告する。

出土遺物（第92図）

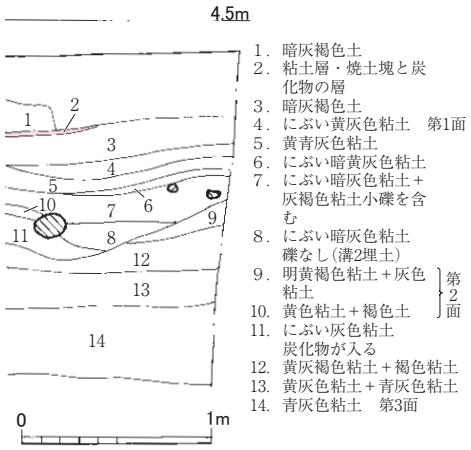
第92図は杭で、丸太を加工したものと建築材を転用したものとがある。建築材には、先端を尖らせないものもあり、軟質土壌なのでそのままでも打ち込むことができたのだろう。10は先端が凸形になっているのは、方形臍孔のある部分を尖らせるように加工したためである。

1号溝状遺構（図版23、第86図）

第1遺構面の調査区南端から検出された溝で、南岸は調査区外に出ているが、3区では検出できなかったので、調査区境にあるといえる。幅は約80cmと見られ、深さは60cmほどであった。西壁に杭が集中していたが、大きく2つのグループからなっており、柵の建て替えだろうか。

出土遺物（図版25、第84・89・91）

第95図3は白磁陶器小皿で、見込みに胎土目跡がある。見込みに胎土目2つあるが位置関係から5つあっただろう。第84図14・15は龍泉窯系青磁碗で、15世紀前葉の混入だろう。第89図1は土師器の平瓦で、同心円タタキ当て具痕は珍しい。第91図20は断面波形の鉄板で、鋳造品だろう。

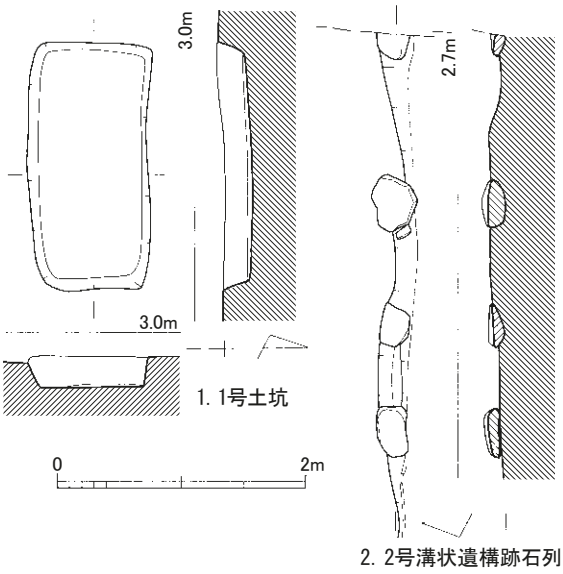


第93図　2次調査5区東壁土層断面実測図（1/40）

その他の出土遺物（図版25、第89～92）

第90図2は第1遺構面整地層出土の陶器の小皿で、見込みに胎土目が3つあり、外面胴下位にも胎土目が見られる。第90図11は下位包含層出土の陶器小皿で、見込みの胎土目は小さな円形なのでハリ目に近い。第90図17は下位包含層出土の土人形だが、人物と思われるが底面に剥離痕がないので騎人ではない。第91図2～7はピット4出土の洪武通宝で、さし銭ではないが集中的に出土している。下位包含層からは盤形の折敷らしい漆板が出土している。

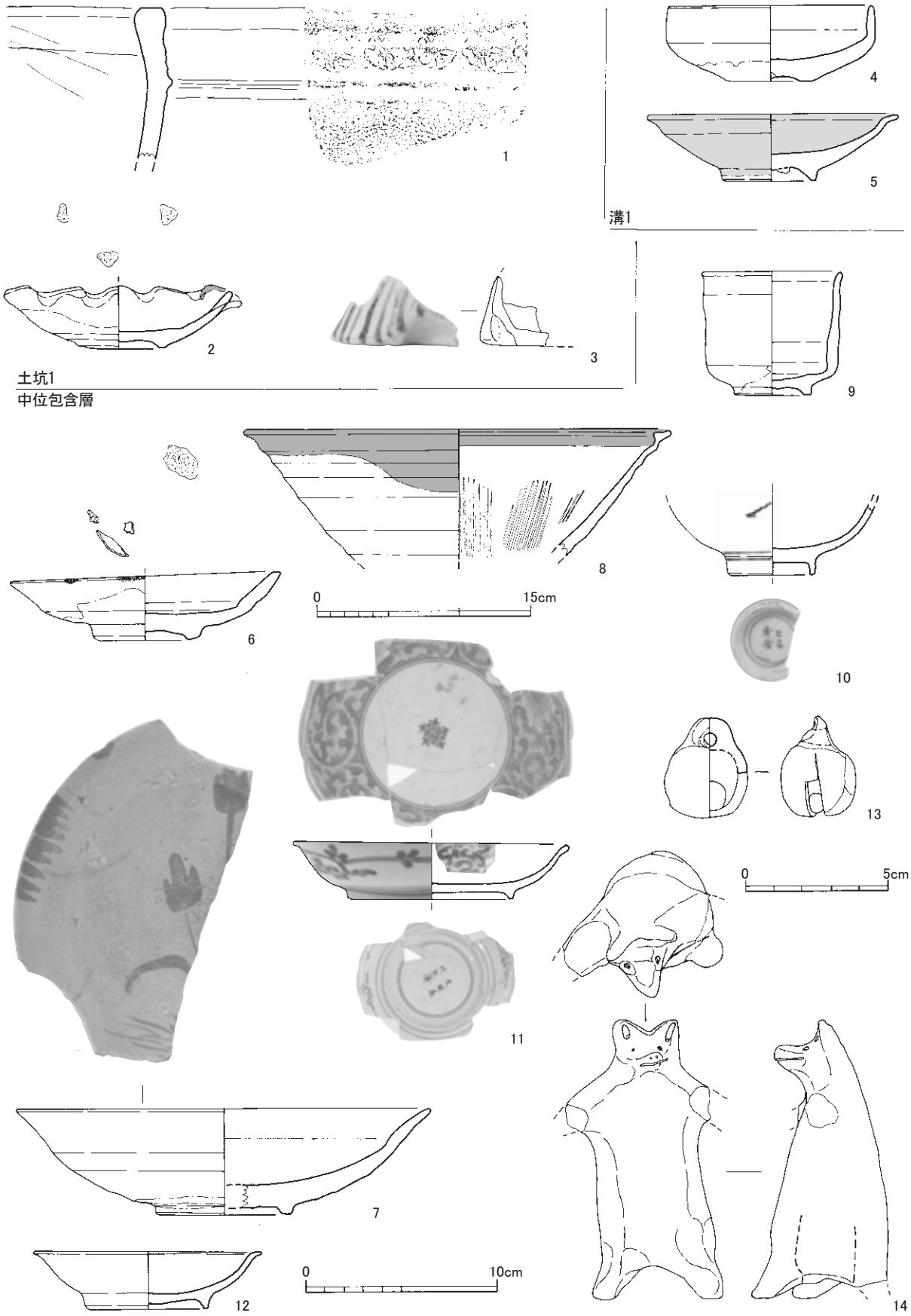
このほか、第1遺構面からイルカ類の椎骨が出土している。杭が多く出土しているが、スギ材が最も多い。



第94図　2次調査5区検出遺構実測図（1/60）

小結

調査区が狭いが、3区に隣接していることから、連続した状況を確認できた。特に、南端の柵跡は、3区と対をなすことから、町の木戸と考えられる。



第 95 図　２次調査５区出土遺物実測図１（3・13・14 は 1/2、8 は 1/4、他は 1/3)

５区

平成27年９月15日に重機を入れて表土剥ぎ開始、４区と併行しながら作業し、９月25日に全体写真を撮影し実測を終了し、29日の午後から重機掘削したところもう１面発見された。10月６日に２面を終了し、10月７日には最後の第３面まで重機を入れて掘削し、第３面の調査は１日で終了した。

５区は保加町64番地で、表土下に焼土面があるが、最上層に切られてほとんど失われていたことから、その下の礎石が検出される面を第１遺構面とした。焼土面は共通１面で標高3.9ｍ、第１遺構面は標高3.7ｍである。第１遺構面を掘り下げて溝が確認された面を第２遺構面とし、これを共通３面とする。さらに掘り下げた基盤層上面を第３遺構面とし、共通４面とする。共通３面は標高3.5ｍ、共通４面は3.0ｍである。

１号土坑（図版27、第94図）

第２面から検出された方形プランの土坑で、長軸200㎝以上、短軸100㎝で、深さ23㎝ほどである。床面はほぼ平坦で、墓のようにも見えるが、出土遺物から特定することはできなかった。Ｎ－89°50′－Ｅを主軸とし、１号溝状遺構を切る。胎土目をもつ陶器小皿があることから18世紀前葉か

出土遺物（図版27、第95･97）

第95図２は陶器の小皿で、見込みに胎土目は平面三角形なのでハリ目に近い。第95図３は磁器の色絵人形で、女性だろう。

１号溝状遺構（図版26、第96図）

第２面の南端から検出された浅い溝で、幅70㎝以上で、深さは15㎝ほどしかない。１号土坑に切られる。胎土目と腰折埦の存在から18世紀第２四半期に属するだろう。

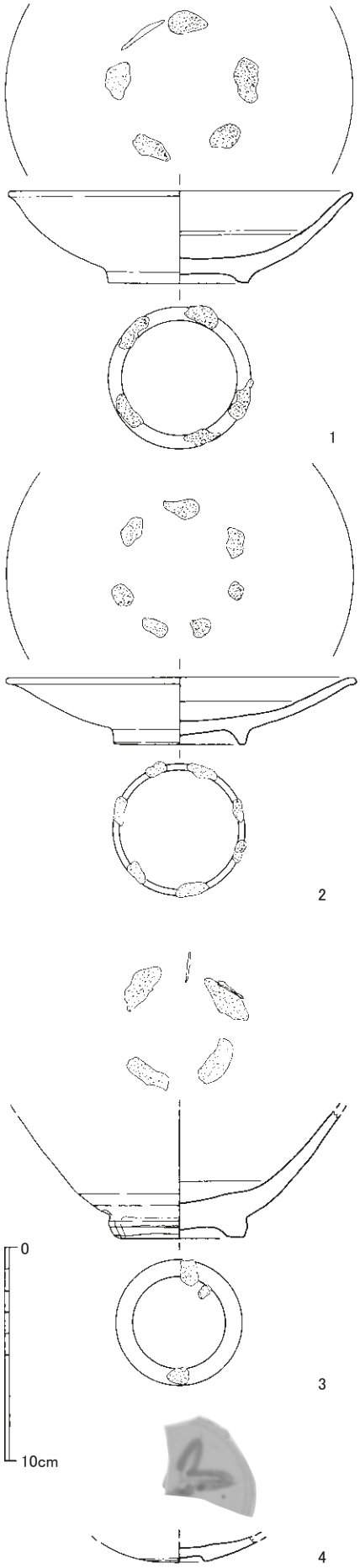
出土遺物（図版27、第95・97）

第95図４は陶器の腰折埦で、京焼風陶器の粗雑な模倣品か。

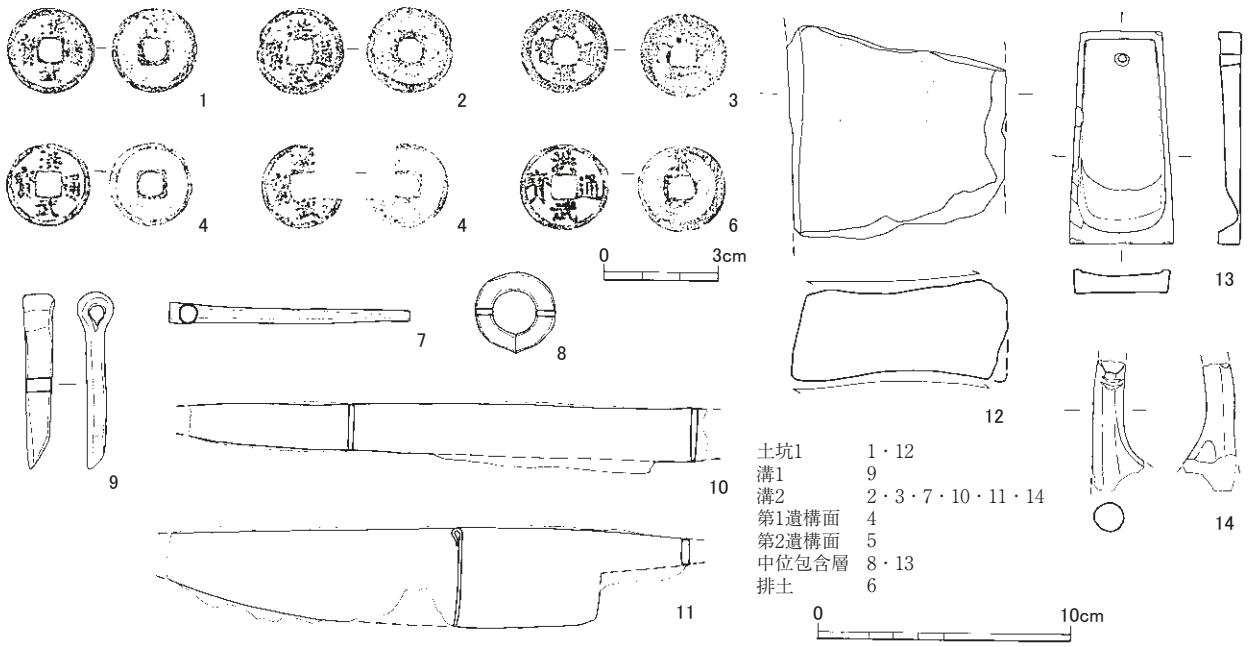
２号溝状遺構（図版26・27、第94図）

第３遺構面の北部から検出された浅い溝で、扁平な川原石が約90㎝間隔に置かれていた。幅65㎝で、深さは15㎝ほどしかない。扁平な礫は溝側に傾斜したものが多く、本来は水平に置かれたものが落ち込んでいたと考えられる。

図化できる出土遺物が少なく、時期を特定できない。



第96図　２次調査５区出土遺物実測図２（1/3）



第 97 図　2 次調査 5 区出土金属・石・鹿角製品実測図（7・26 ～ 31 は 1/2、他は 1/3）

出土遺物（図版 27、第 97 図）

第 97 図 14 は鹿角で、切断時の切り傷が残っているので、未製品であろう。このほか、イルカ類の椎骨が出土している。

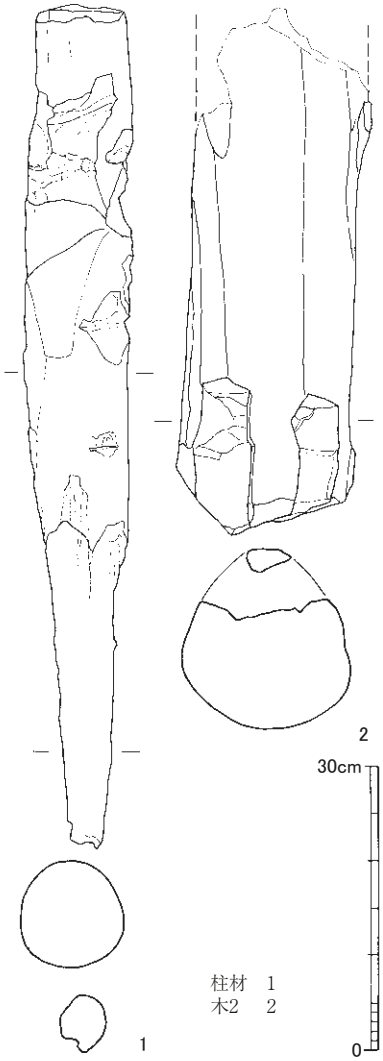
その他の出土遺物（図版 27、第 95 ～ 97）

第 95 図 6 は陶器の小皿で、胎土目の配置が乱れているので、焼成時に重ね焼きが崩れて、口縁部に壁土痕が融着したのだろう。

第 95 図 10 は中位包含層出土の染付とあり、裏銘は「上品佳器」で、景徳鎮製か。第 95 図 12 は漳州窯系白磁小皿。第 95 図 14 は下位包含層出土の土人形の動物で、2 本足で立っているのでクマか。第 96 図 2・3 は下位包含層出土の白磁で、胎土に黒色粒子が目立つ。

小結

5 区は狭小な調査区だったが、礎石をもつ建物や東西方向に走る溝を確認できた。特に 2 号溝状遺構の片側に貼られた礎石は、2 区の 2 号溝状遺構でも見られたもので、残りが悪いのではなく、本来こうした構造の遺構が存在したことが明らかになった。



第 98 図　2 次調査 5 区出土木製品実測図（1/4）

４　２次調査６～10区の遺構と遺物

１　調査の概要

保加町遺跡２次調査６～10区では、久留米柳川線を挟んだ西側の保加町64、65-１、72-４、東側５-2・3、6-1、７、11-1、20-2、21-1、22-1、23、24-1が調査対象地である。調査面積は820㎡であるが、遺構面を３～４面確認したので実質約2500㎡以上になる。

調査は江戸時代から続く町割の区画に沿って現在も住宅が建てられており、各区画にそって調査区を設定している。まず東側の側道北側に位置する６区から、バックホーにより表土剥ぎを行い、平成27年10月１日から調査を開始した。各区の調査は工事の進捗に合わせて、西側の７区、６区南側の８区、６区北側の９区の順に調査した。６・７・９区については一度に表土剥ぎができず、６区は２区分、７区は４区分、９区は３区分に分割して調査を行っている。

10区に関しては、仮設橋の建設に伴い、調査可能な長さ約27ｍ、幅約３ｍの範囲を半分に分けた調査となった。なお10区東側の残りの範囲については、仮設橋撤去後に３次調査として報告している。６～10区の調査については平成28年２月３日には終了した。

各調査区は礎石や遺構の検出状況から標高3.6ｍ前後・3.2ｍ前後・2.8ｍ前後・2.6ｍ以下の３・４面を遺構面として設定した。遺構は建物跡・柵列跡11軒、土坑17基、溝14条、ピット200基以下を検出し、近世陶磁器を中心にパンケース70箱以上が出土した。

２　建物跡および柵列跡

建物跡は６～10区の１～４面で７軒検出している。ただ現状からは対になるピット列が確認できないものは柵列として報告する。なお柵列には杭列も含まれている。

１号建物跡（図版31、第99図）

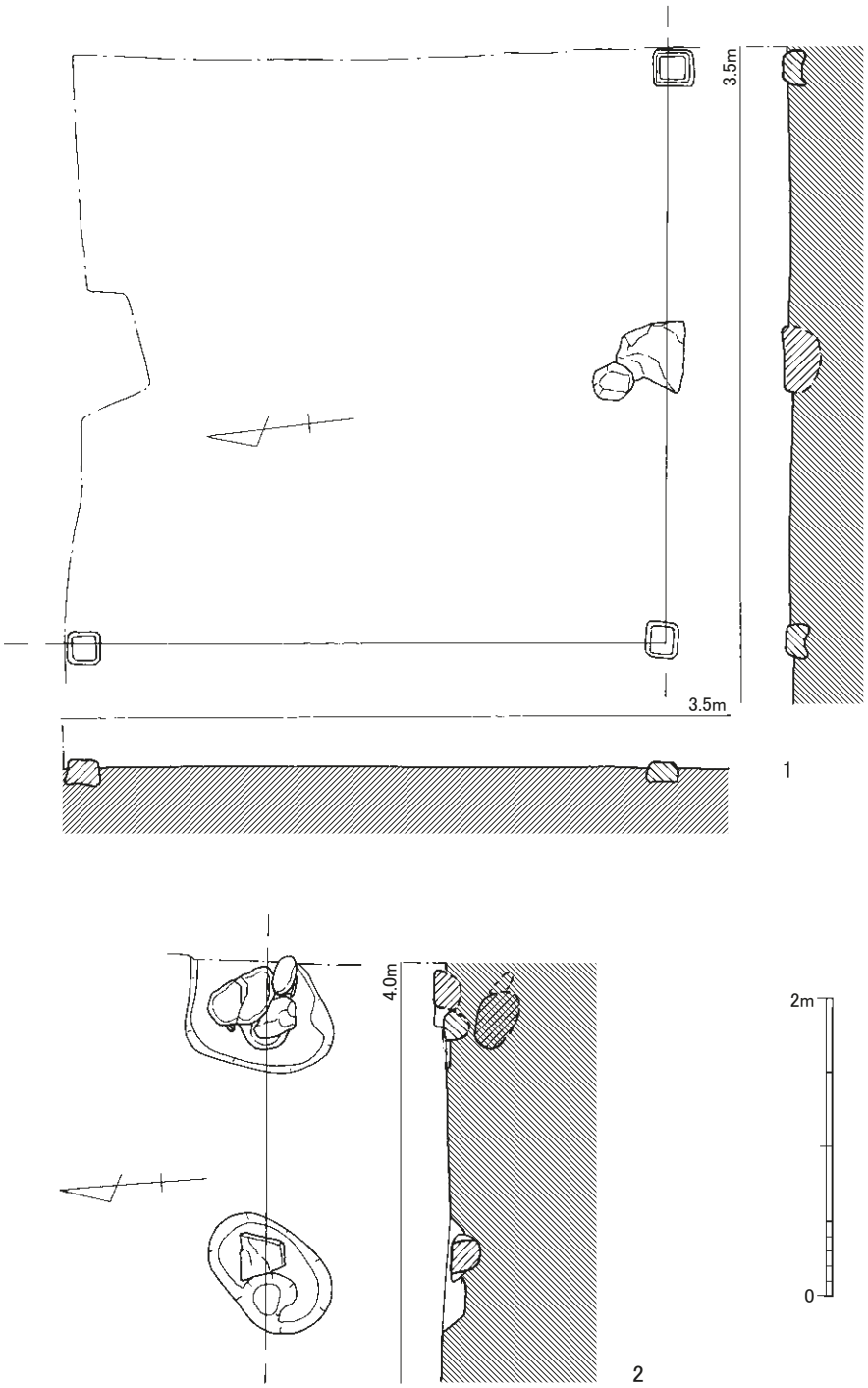
７区２面に位置し、南側と西側にかけての礎石を検出したことから建物跡と判断した。現状からはほぼ南北方向の２×２間以上の建物跡で、柱間は約1.5ｍを測り、使用された礎石は１石を除いて約0.3ｍの宝篋印塔の基礎部分を直置きする。

２号建物跡（図版33、第99図）

８区１面に位置し、0.6～0.8ｍのピットで構成される建物跡である。現状では１間だが、調査区外へとピット列が延びる可能性がある。柱間は約1.5ｍで、ピット内には約0.4ｍ以下の平石を直置きする。

３～５号建物跡（図版37、第100図）

９区に南側位置する複数の建物跡である。３号建物跡は南側に位置し、標高3.7ｍ以下に礎石を直置きする。柱間は約1.5～1.7ｍを測り、0.4ｍ以下の平石を利用する。４号建物跡は標高3.5ｍに礎石を直置きする。柱間は約1.2～1.7ｍを測り、0.4ｍ以下の石を利用する。他の建物跡と比べて建物方向は東寄りに傾く。５号建物跡は唯一、Ｌ字状に礎石が残存する。標高3.7ｍ以下に礎石を直置きし、礎石は約0.4ｍ前後の平石を使用する。南側列にのみピット状の浅い窪みに石を据え

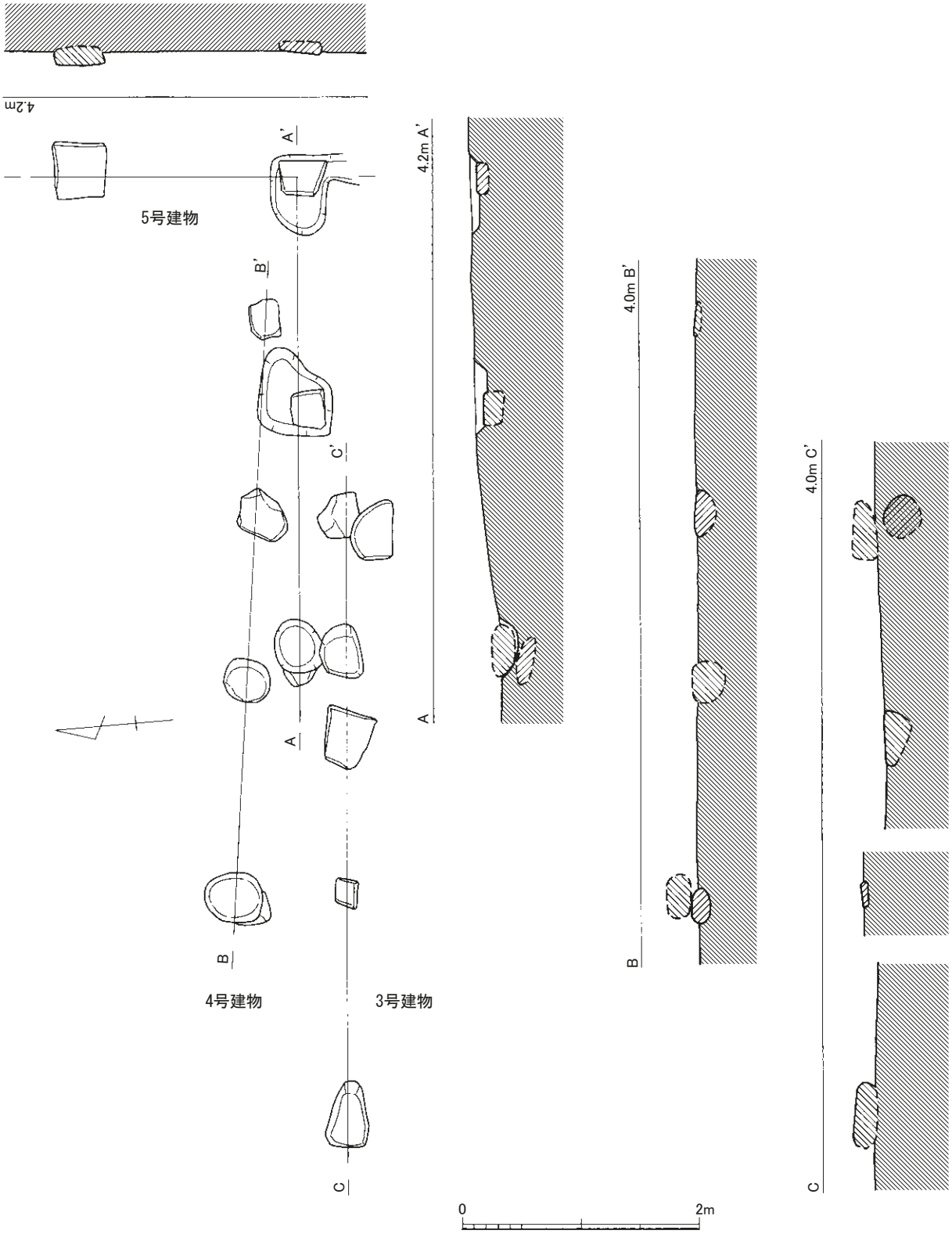


第 99 図　2 次調査7区1号建物跡・8区2号建物跡実測図（1/50）

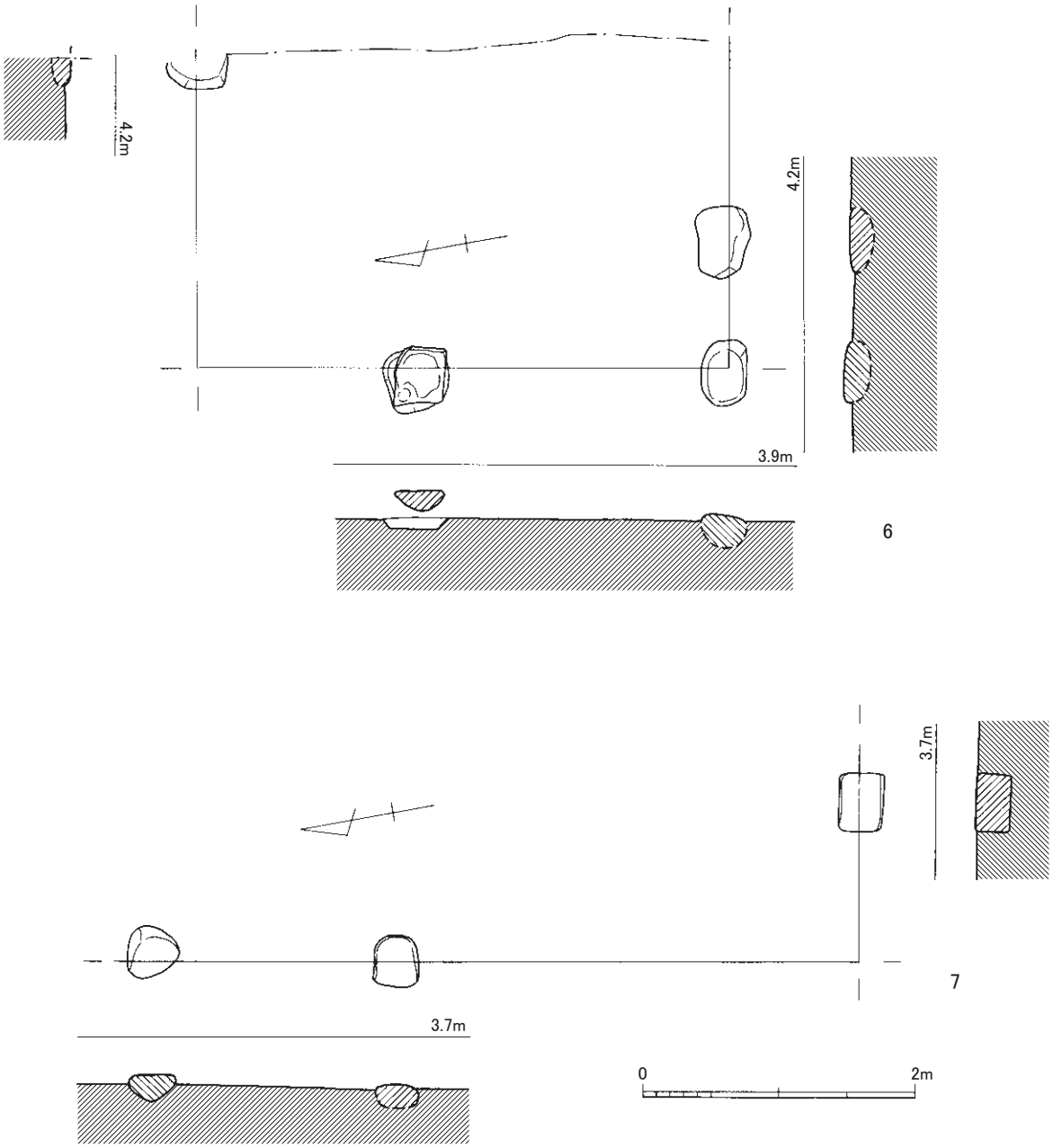
置く。検出された礎石は標高約 3.5 ～ 3.7 mに位置し、0.2 mのレベル差があるので、下層面の建物痕跡かもしれない。

６号建物跡（図版 39、第 101 図）

10 区 2 面北側に位置し、1 間以上の建物跡を検出する。柱間は西側で約 1.8 m、南側 0.8 mを測る。礎石は0.4 m程を平石を据え置く。調査区際で検出したため、東側にピット列が伸びる可能性がある。７号建物跡と同方向に建てられる。



第100図　2次調査9区3～5号建物跡実測図（1/50）



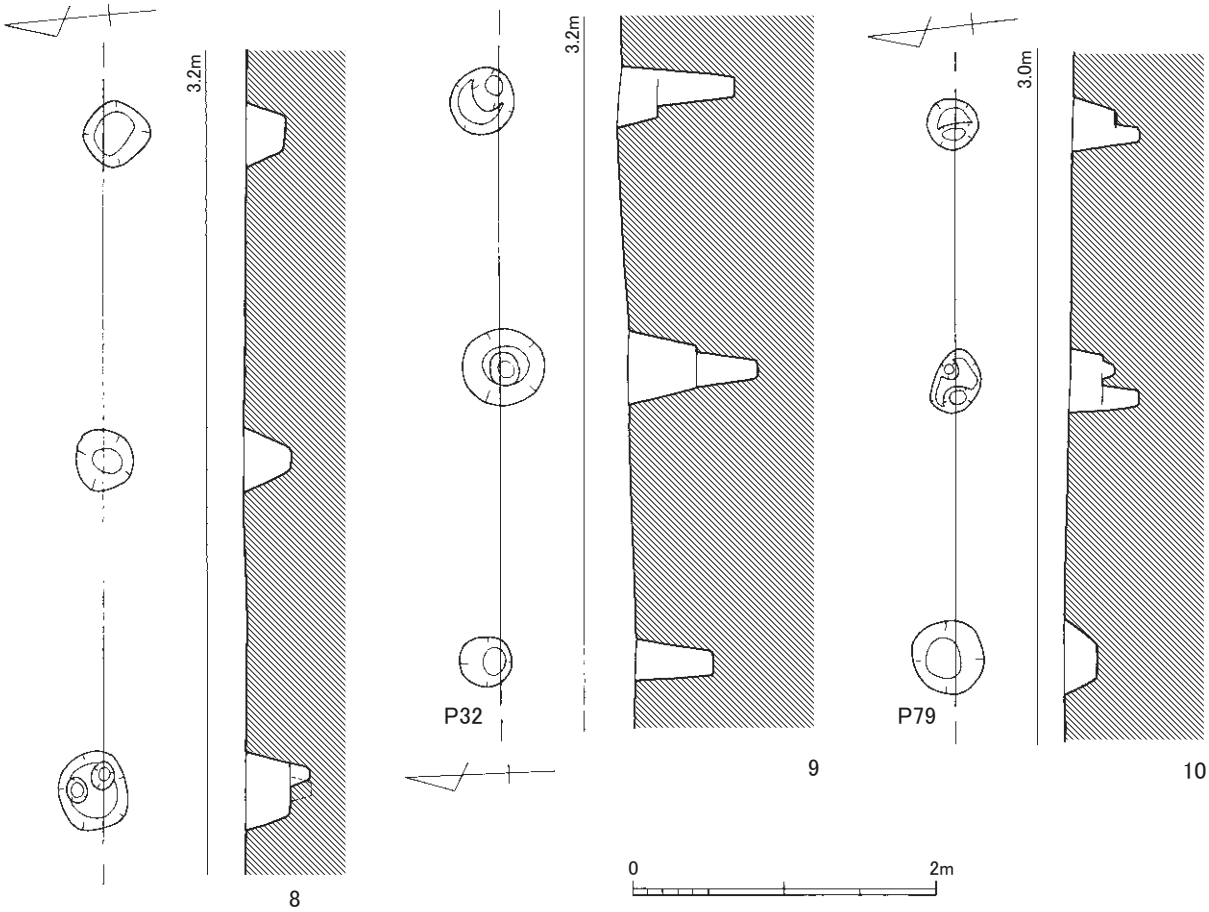
第 101 図　2 次調査 10 区6・7号建物跡実測図（1/50）

７号建物跡（図版 40、第 101 図）

10 区２面の南側に位置し、１間以上の建物跡を検出する。これも６号建物跡同様に調査区外に東西方向に延び、西側の２石で柱間約 1.8 mを測ることから建物跡としている。南側では１辺 0.3 ～ 0.4 mの長方形の礎石を検出する。

８号柵列跡（図版 41、第 102・103 図）

７区３面の北側に位置し、最下面で検出した柵列跡である。調査区外に東西方向に延びており、２間以上になるか。柱間は約 1.7 mで、ピットは径 0.4 m以下、深さ 0.4 mを測る。西側で一部、杭の痕跡らしき約 0.1 mの掘り込みが残る。南北方向に伴うピットが検出されなかったため、柵列としている。



第 102 図　2 次調査7区8号柵列跡・6区9・10 号柵列跡実測図（1/50）

なお、8 号柵列跡南側にも柵列と思われるピット列があるので、ここにその遺物を報告する。103 図２・３は陶器皿と鉢で、２はＰ 42 見込みに砂目が４ヶ所と畳付に砂が付着する。唐津産で、16 世紀末～ 17 世紀初め頃のものか。３は内面に白化粧土の上から松を描く。武雄産である。

９号柵列跡（図版 41、第 102・103 図）

６区３面南側に位置し、東西方向に建てられる。柱間は約 1.5 ｍで、２間検出する。ピットの掘り方は 0.4 ｍ以下で、深さ 0.4 ～ 0.7 ｍを測る。これも南北方向に伴うピットは検出されなかった。

103 図１はＰ 32 出土の漳州窯産の青花碗である。外面は高台との境目に圏線１条と見込みに圏線２条を描く。外面の圏線下には赤絵で模様を描かれる。

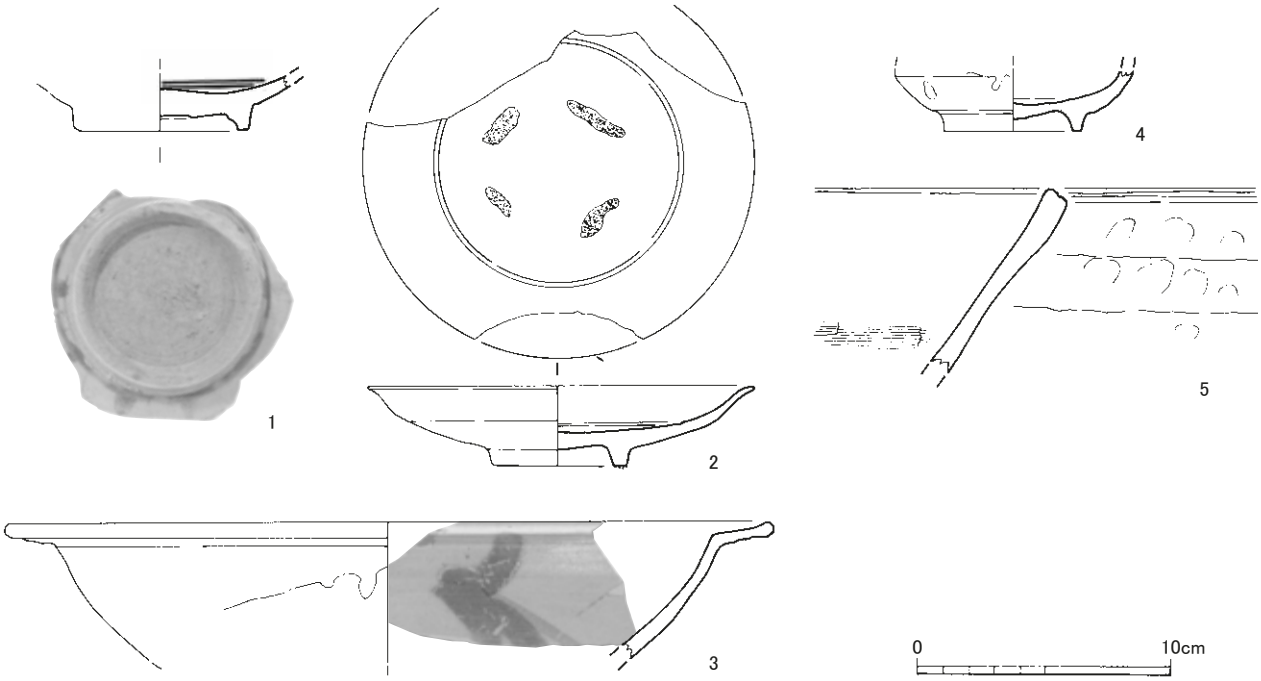
10 号柵列跡（図版 41、第 102 図）

６区３面北側に位置し、東西方向に建てられる。柱間は約 1.5 ｍで、２間検出する。ピットの掘り方は 0.4 ｍ以下で、深さ 0.4 ｍを測る。これも南北方向に伴うピットは検出されなかった。

103 図４・５はＰ 79 出土で、４は陶器の火入れ、５は瓦質の鉢片である。

11 号柵列跡・１～３号石列・９・13・14 号溝（図版 34・36・37・46、第 104・105 図）

１号石列跡は、. ８区の中央付近の標高 3.5 ～ 3.8 ｍの高さに位置し、約３ｍ分検出する。石列の石材は 0.2 ～ 0.4 ｍの大きさの平坦な石を直置きする。14 号溝は標高 2.95 ｍ付近で、１号石列の同



第 103 図　2 次調査 6 ～ 10 区建物跡・P42 出土遺物実測図（1/ 3）

位置の３面で検出した溝である。14 号溝は長さ 4.1 m、幅 0.7 m、深さ 0.15 mを測る。１号石列と 14 号溝は共に東西方向で一直線上なることから区画を目的としたものと思われる。

２号石列跡は、９区の中央付近の標高 3.6 ～ 3.8 mの高さに位置し、約４m分検出する。石列の石材は 0.5 m以下の大きさの平坦な石を直置きする。この石列を添え置くために、溝状に掘り込まれている。13 号溝は長さ 3.55 m、幅 0.4 ～ 0.5 m、深さ 0.1 mを測る。

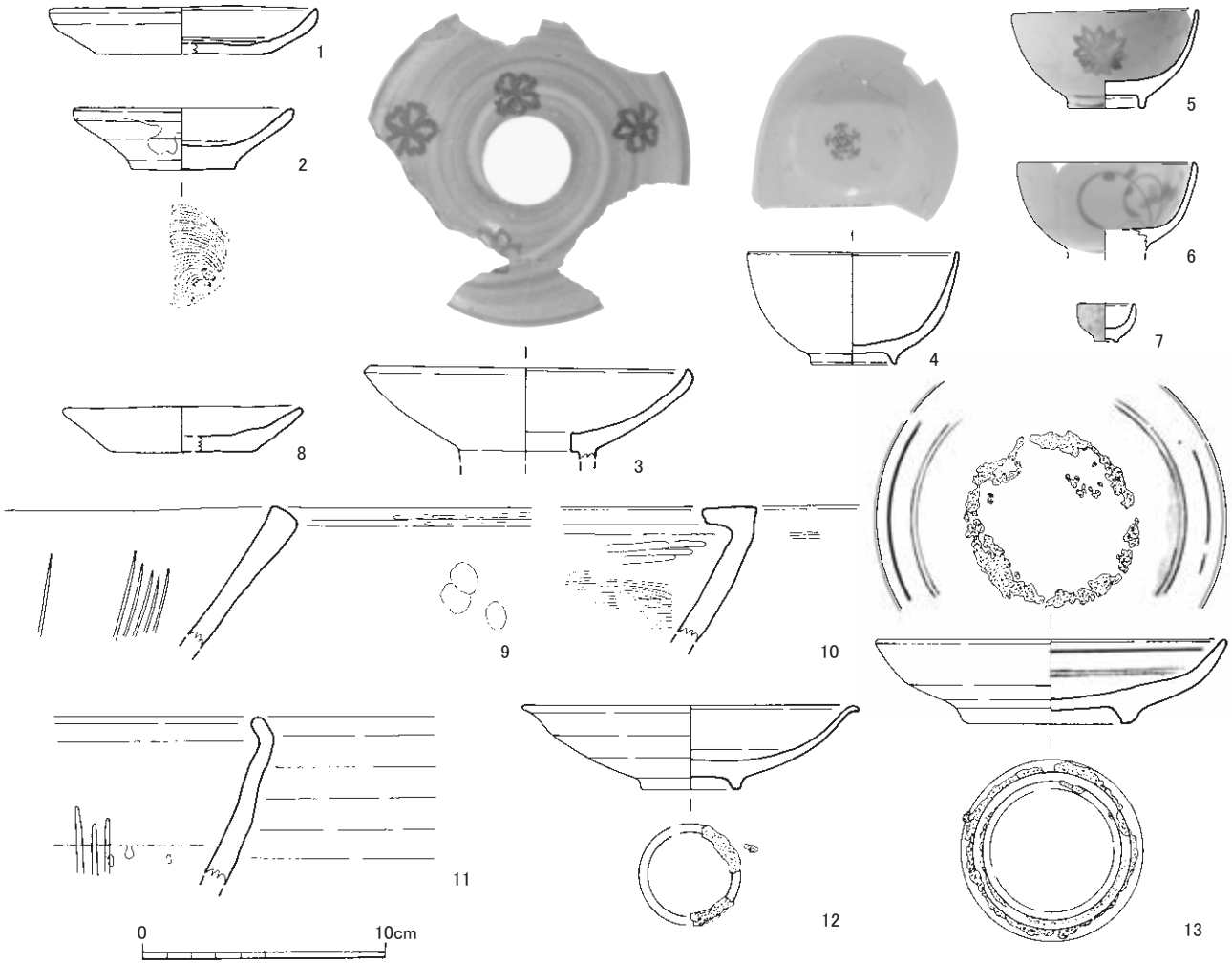
３号石列跡は、２号石列の南にずれた標高 3.4 ～ 3.55 mの高さに位置し、約 7.3 m分検出する。石列の石材は 0.5 m以下の大きさの平坦な石を直置きするが、溝状の掘り込みは検出されなかった。9 号溝は標高 3.1 m付近で、３号石列の同位置の３面で検出した溝である。溝は長さ６m、幅１m、深さ 0.6 mを測り、西側に向って、途中でさらに１段約 0.1 mほど掘り下がる。これらの石列と溝は共に東西方向で一直線上なることから、これも区画を目的としたものと思われる。

なお、11 号建物跡は西側壁で検出し、南北方向に一列に並んでいる。柱間は 1.25 ～ 1.5 mで、３間検出する。石材は 0.3 ～ 0.4 mの平石を直置きする。標高 3.8 ～ 3.9 mの位置で検出し、一直線上に並ぶことから建物の可能性がある。

105 図１～７は２号石列下砂利層から出土した遺物である。１は土師器皿で、外底は丁寧なヘラケズリである。２・３は陶器皿で唐津や武雄産である。２は内外面横ナデで、外底は糸切りである。３の内面は五弁花文が４ヶ所刻まれる。内底は穿孔され、高台は打ち欠いている。４は青磁碗で、見込みに五弁花文を描く。５～７は染付碗で、５の外面は菊花のコンニャク印判、６は草花文を描く。７はミニュチアで、外面は氷裂文を描く。いずれも有田産である。

８～ 13 は３号石列出土した遺物である。８は土師器で、油煙の痕跡から灯明皿である。９は瓦質擂鉢で、内面の煤から火鉢などとして使用か。10 は瓦質火鉢片で、内面にミガキの痕跡が残る。11 は陶器鉢で、口縁～体部上位にかけて施釉する。12 は陶器皿で、畳付に砂目が付着する。11・12 は唐津産である。13 は染付皿で、見込みと畳付に砂目が付着し、内面には圏線３条が巡る。伊

第104図　2次調査9区11号建物跡、8区1号・9区2・3号石列、9区9・13号・8区14号溝実測図（1/50）



第 105 図　2 次調査 6 ～ 10 区石列下出土遺物実測図（1/ 3）

万里産で、17 世紀前半頃のものか。

3　土坑

土坑は 16 基検出した。1 面では 1・6・7・9 ～ 11･13 土坑、2 面では 2 ～ 5・8・14 ～ 16 号土坑、3 面の遺構は検出していない。4 面では 17 号土坑のみを検出した。。なお 12 号は撹乱であることから除外した。

1 号土坑（図版 42、第 106 図）

7 区 1 面の西壁際で検出した土坑である。長軸 2 m、短軸 1.6 mでやや崩れた隅丸長方形状で、深さ 0.1 mと浅い。遺構内には 0.3 m程の礫石を 1 石のみ確認した。

2 号土坑（図版 42、第 106 図）

6 区 2 面の東側で検出した土坑である。隅丸方形状で長軸 1 m、短軸 0.9 m、深さ 0.3 mを測り、断面は逆台形状になる。

3 号土坑（図版 42・44、第 106・108 図）

6 区 2 面の 2 号土坑の南西側で検出した土坑である。長円形状で径 0.9 m、深さ 0.2 m以下を測

るり、これも断面は逆台形状になる。

108 図１は現川産の陶器碗で、内外面は無文で外面は白化粧土を横引きする。

４号土坑（図版 42、第 106・108 図）

７区２面で１号土坑の北側に位置し、調査区の北壁際で検出する。北側１／３は検出していないが、円形で径 1.2 m、深さ 0.5 m以下を測る。２段掘りで、中央には径 0.65 mのピット状の円形の掘り込みがある。

108 図２は唐津産の陶器碗で、内面に胎土目痕が付着する。16 世紀末～ 17 世紀前半頃か。

５号土坑（図版 44、第 106・108 図）

６区２面の中央で検出した土坑である。長方形で長軸 1.2 m、短軸 0.9 m、深さ 0.3 mを測る。１面では長方形状で、長軸約２m、短軸 0.9 m以下、深さ 0.1 mを測る掘り方を検出したが、埋土やゴミなどを検出したため土坑とはせず、撹乱と判断した。しかし、下層の２面で、さらに掘り込みを検出したので土坑と判断した。

108 図３も唐津産の陶器碗で、外面体部下半は露胎する。４は白磁の小碗で、内面には鉄銹が付着する。有田産である。

６号土坑（図版 44、第 106・108 図）

７地点西壁際で検出した土坑である。長軸 1.7 m、短軸 1.4 m、深さ 0.2 mを測る。形状は隅丸長方形状で、断面は逆台形状である。

108 図５は染付碗で、外面は型紙刷りである。外面の圏線間には牡丹唐草と鳥を描く。高台内銘款は圏線１条と「千」「年？」などの文字を描くか。有田産である。

７号土坑（図版 42、第 107 図）

６号土坑の東側で検出した土坑である。長楕円形状で、長軸 1.65 m、短軸 0.9 m、深さ約 0.2 mで、断面は逆台形状になる。

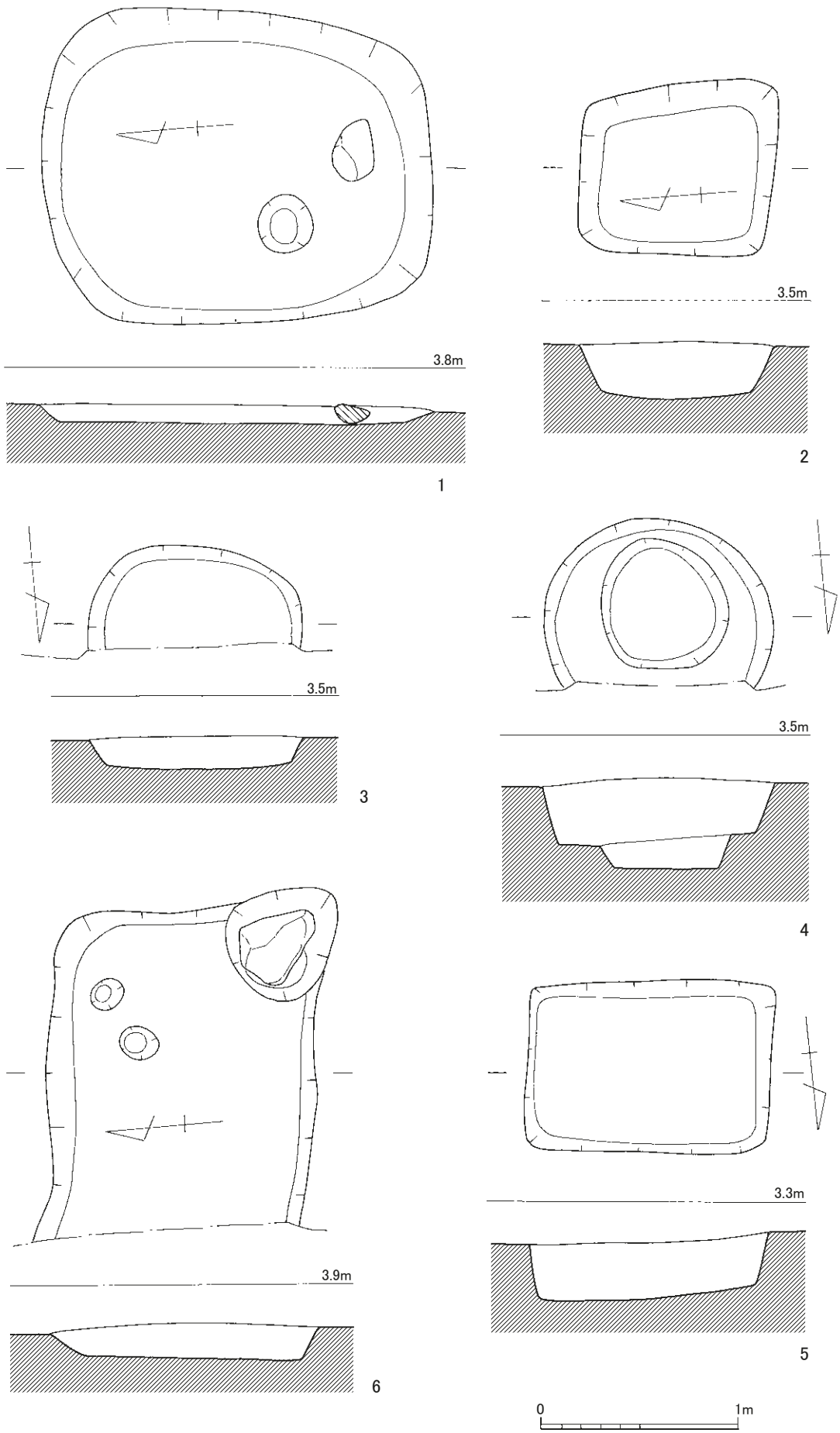
８号土坑（図版 42、第 107 図）

６地点の南西の西壁際で検出した土坑で、長円形状になるので溝の可能性もある。長軸 1.7 m、短軸 0.6 m以下で、中央は一段方形状に掘り下がるが、深さ 0.1 m測る。遺構内から 0.2 m程の礫石を２石検出したので別の遺構の可能性もある。

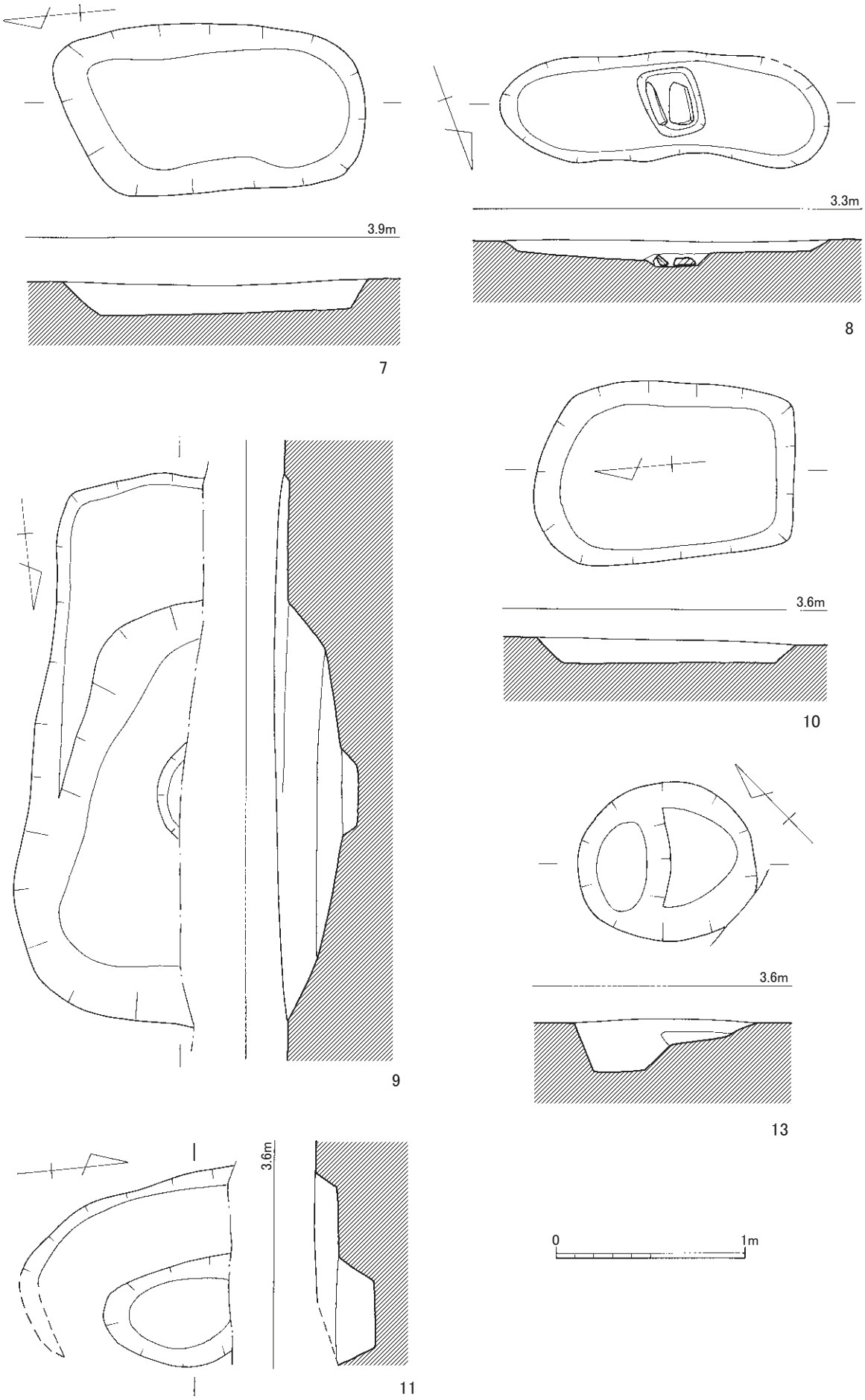
９号土坑（図版 42、第 107・108 図）

９区１面の西壁際で検出した不整形状の大型の土坑である。西壁際で検出したため、半分以上は未検出である。長軸約 2.9 m、短軸 0.9 m以上、深さ 0.5 m以下を測る。掘り方は上面は浅く、中央に向かって窄まっていき、さらに 0.5m 程の円形ピットになる。

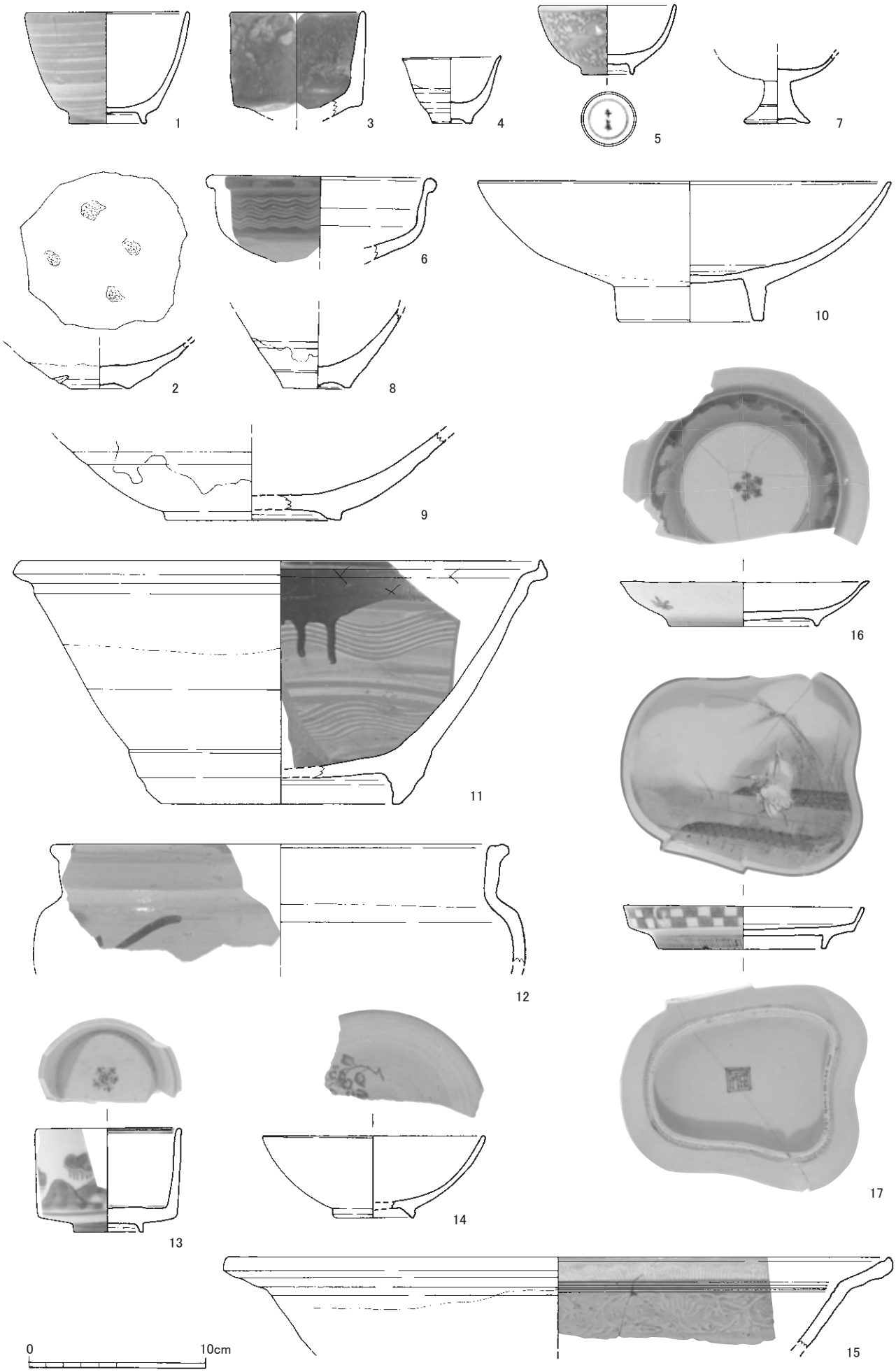
108 図６は磁器の仏飯器である。内外面は無文である。７は陶器の火入れで、外面は刷毛目模様である。６は有田産、７は唐津産である。



第 106 図　2 次調査 6 ～ 10 区1～6号土坑実測図（1/30）



第 107 図　2 次調査 6 ～ 10 区7～ 11・13 号土坑実測図（1/30）



第108図　2次調査6～10区3～6･9～12号土坑出土遺物実測図　(1/3)

10 号土坑（図版 42、第 107・108 図）

９区の東側に位置した土坑である。北側は弧状になり広がるが、隅丸長方形状になる。長軸 1.4 m以下、短軸 1.0 m、深さ 0.2 m以下を測る。

108 図８・９は陶器の碗・皿で、唐津産である。８の高台内は兜巾になる。９の見込みは胎土目痕と鉄絵で草花を描く。16 世紀末～ 17 世紀前か。

11 号土坑（図版 42、第 107・108 図）

10 号土坑の北東側に位置する。やや崩れた円形状と思われるが、検出時に上面を掘りすぎたため、東側は消滅している。長軸約 1.1 m以上、深さ 0.3 mを測る。中央部分はさらに一段ピット状に深掘りする。中央のピット状部分は径 0.6. mになる。

108 図 10 は陶器皿で、内面は蛇の目釉剥ぎを施す。11・12 武雄産の陶器鉢である。11 の内外面の口縁に鉄釉を施釉し、内面体部は白化粧土で刷毛目模様を呈す。12 は外面に松を描く。内面口縁以下は露胎する。13 は染付の筒形碗で、内外面の圏線以外に、見込みに五弁花文、外面は雲や山を描く。有田産である。

12 号土坑出土遺物（図版 44、第 108 図）

108 図 14 は現川産の陶器碗で、見込みに花卉を描く。15・16 は染付で、15 の皿は内外面の圏線以外に、外面に銀杏と見込みに波と五弁花文を描く。16 のは変形皿で、口縁は口銹、外面は市松模様、高台に連弁、見込みに 2 羽の鶴と風景を描く。17 は三島手の陶器鉢で、内面の象嵌模様の表面に白化粧土、外面口縁い透明釉を施釉する。

13 号土坑（図版 43・44、第 107・110 図）

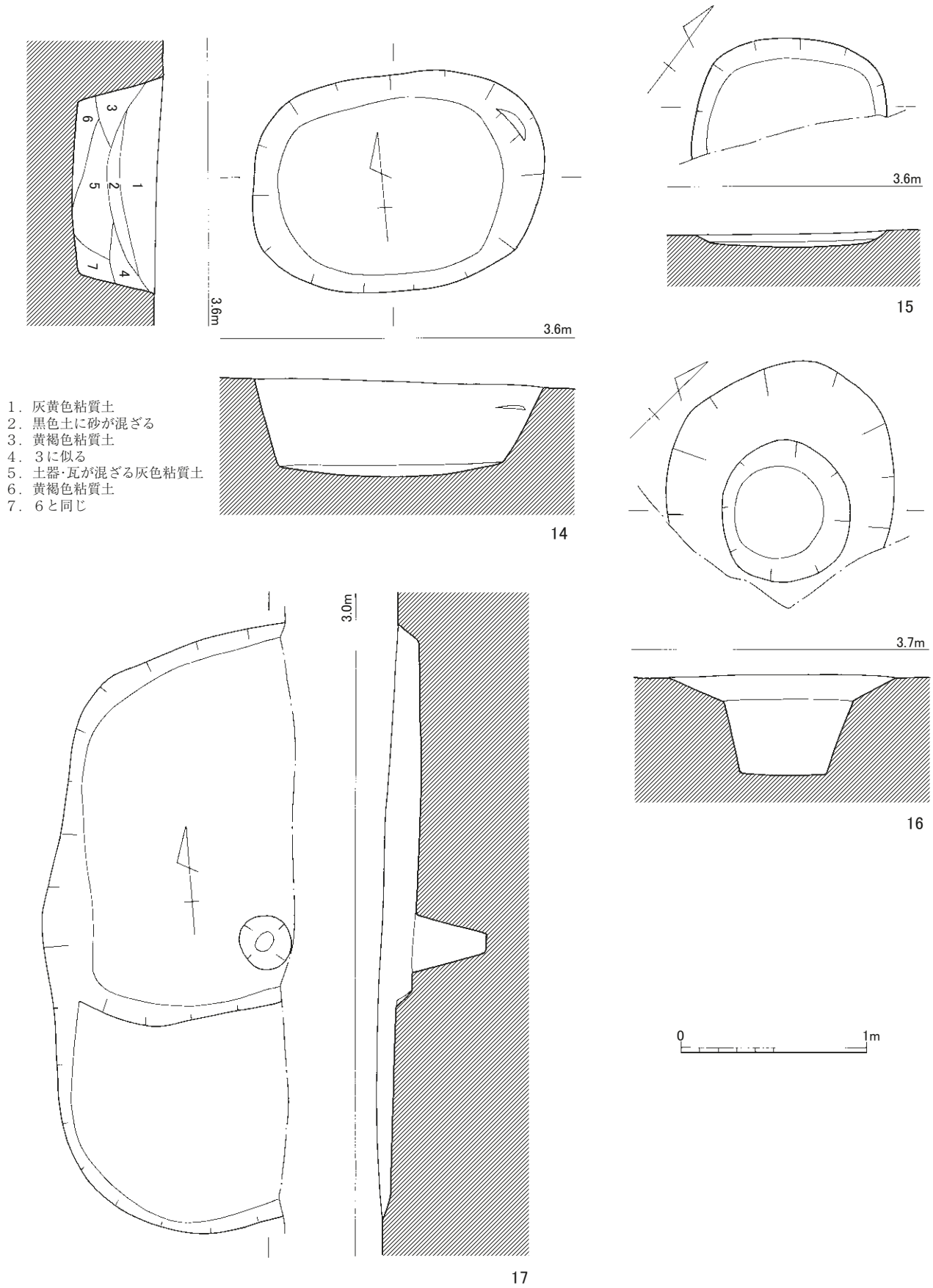
11 号土坑の東側３mで検出した土坑である。長円形状で、東側に段状になり、西に窄まっていく。長軸 0.95 m、短軸 0.85 m、深さ 0.3 m以下を測る。

110 図 18 は陶器の灯明皿で、口縁付近に白化粧土を施した痕跡がある。外面体部以下は露胎する。19 は陶器片口鉢で、外面口縁～体部中位に白化粧土を刷毛目模様にする。20･21 は染付の筒形碗で、内面は口縁に四方襷、底部との境に圏線 1 条を描く。19 の見込みは五弁花文だが、1 弁のみ欠ける。外面は 20 に水仙又は蓮、21 岩や山を描く。体部下位にも文様を描く。22 は染付皿で、内外面に圏線と内面に半菊、外面に唐草を描く。いずれも有田産である。23 は白磁碗で、口縁端部に向かって外へ開く。見込みは蛇の目釉剥ぎを施す。畳付に砂目が付着する。

14 号土坑（図版 43・44、第 109・110 図）

13 号土坑の南側に位置する。形状は長円形状で、長軸 1.6 m以下、短軸 1.2 m、深さ 0.5 mを測る。東側に僅かに段をもつ。上層は灰黄色粘質土、下層は陶磁器や瓦片を含む灰色粘質土が堆積する。

110 図 24 は京焼風の陶器碗で、鉄釉の上にさらに施釉する。25 は外面は草花、圏線３条を描く。高台内銘款に「大明年製」である。26 は陶器小壺で、外面口縁付近に銅緑釉を施釉する。27 は染付皿で、内面に砂が付着する。28 ～ 31 は染付の筒形碗で、28・29・31 の見込みは五弁花文である。30 の外面は雪持笹である。32･33 は染付皿で、内面に花卉や菊花を描き、高台内銘款は渦「福」と「大



第 109 図　2 次調査 6 ～ 10 区 14 ～ 17 号土坑実測図（1/30）

明年製」である。34 は陶器皿で、口縁は輪花である。27 ～ 34 は有田産である。35 は白磁の仏飯器で、外面脚部は露胎する。18 ～ 19 世紀のものか。

15 号土坑（図版 43、第 109 図）

14 号土坑の南側で、東壁際に位置する。半分以上は未検出になり、形状は円形状になるか。長軸約 1 m、深さ 0.2 m以下を測る。断面はなだらかな逆台形状で、周辺のピットと比較して浅いが、やや規模が大きいことから土坑とした。図化できる遺物はなく掲載していない。

16 号土坑（図版 43、第 109・110 図）

10 地点南側の東壁際で検出した土坑である。壁際で検出したため、１/ ３は検出できでいない。円形状で、径 1.2 m以上、深さ 0.6 m以下を測る。上面は逆ハの字状に大きく開き、底面に向かって窄まる。

110 図 35 は白磁の碗で、内外面は施釉する。37 は染付蓋で、外面は網目状･石垣状の文様を描く。38 と 39 は有田産の染付皿と段重で、38 の内面は網目、見込みに二重圏線、39 は外面に蛸唐草を描く。

17 号土坑（図版 43、第 109 図）

10 地点北側３面の東壁際で検出した土坑である。壁際で検出したため、１/ ３は検出できでいない。長円形状で、長軸３m、短軸 1.4 m、深さ 0.2 mを測る。中央には径 0.3 m以下のピット１基があり、深さ 0.4 mを測る。底面は 0.1 m程と窄まっている。

110 図 40 は有田産の染付皿である。内外面は圏線２条、見込みに雨龍を描く。畳付は砂目が付着する。

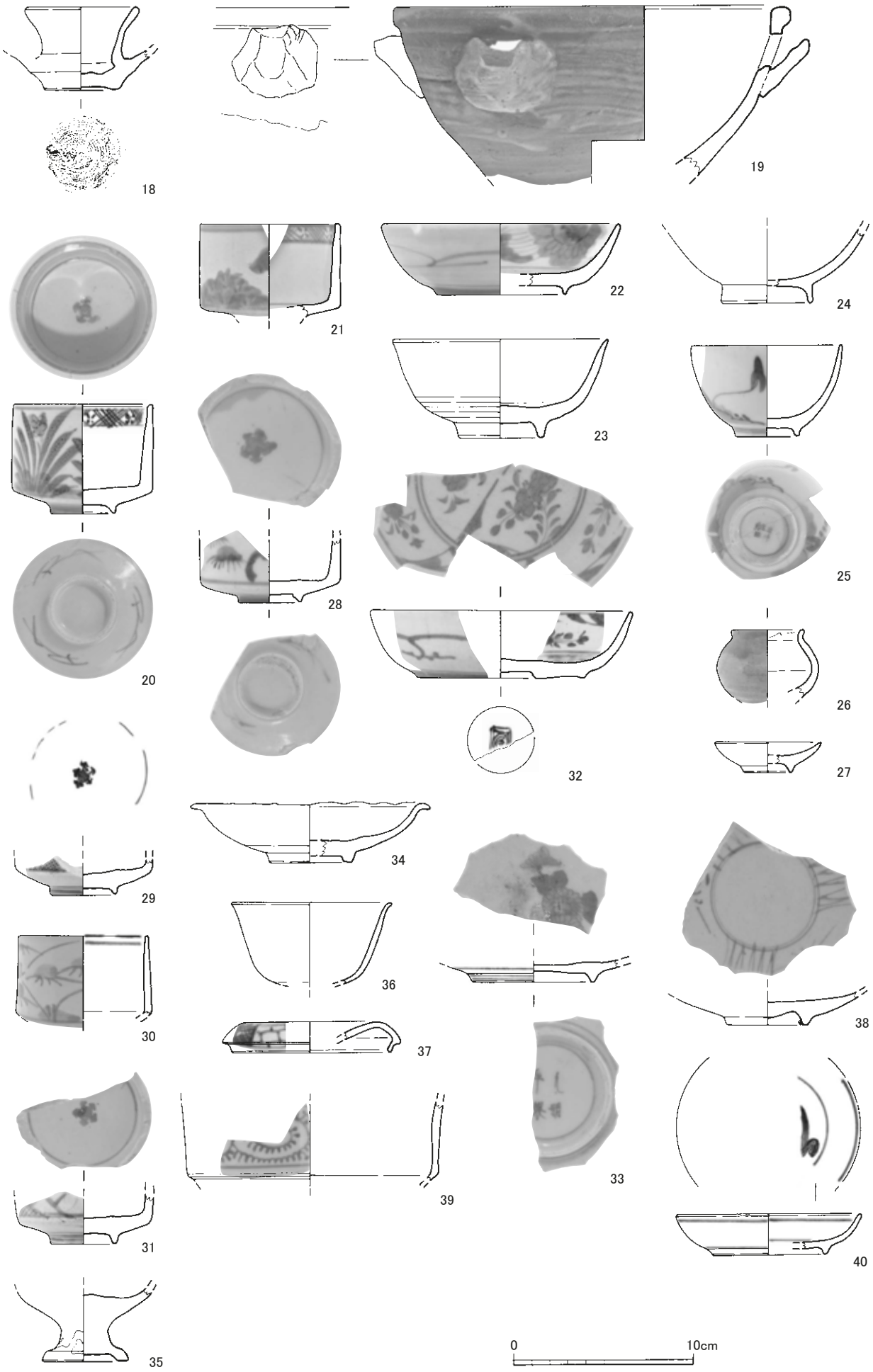
４　溝

溝は 12 基検出した。各地点の１面で検出した溝は１～４、６～８・11 号溝、２面は９・12 号溝、３面は 10・13 号溝である。

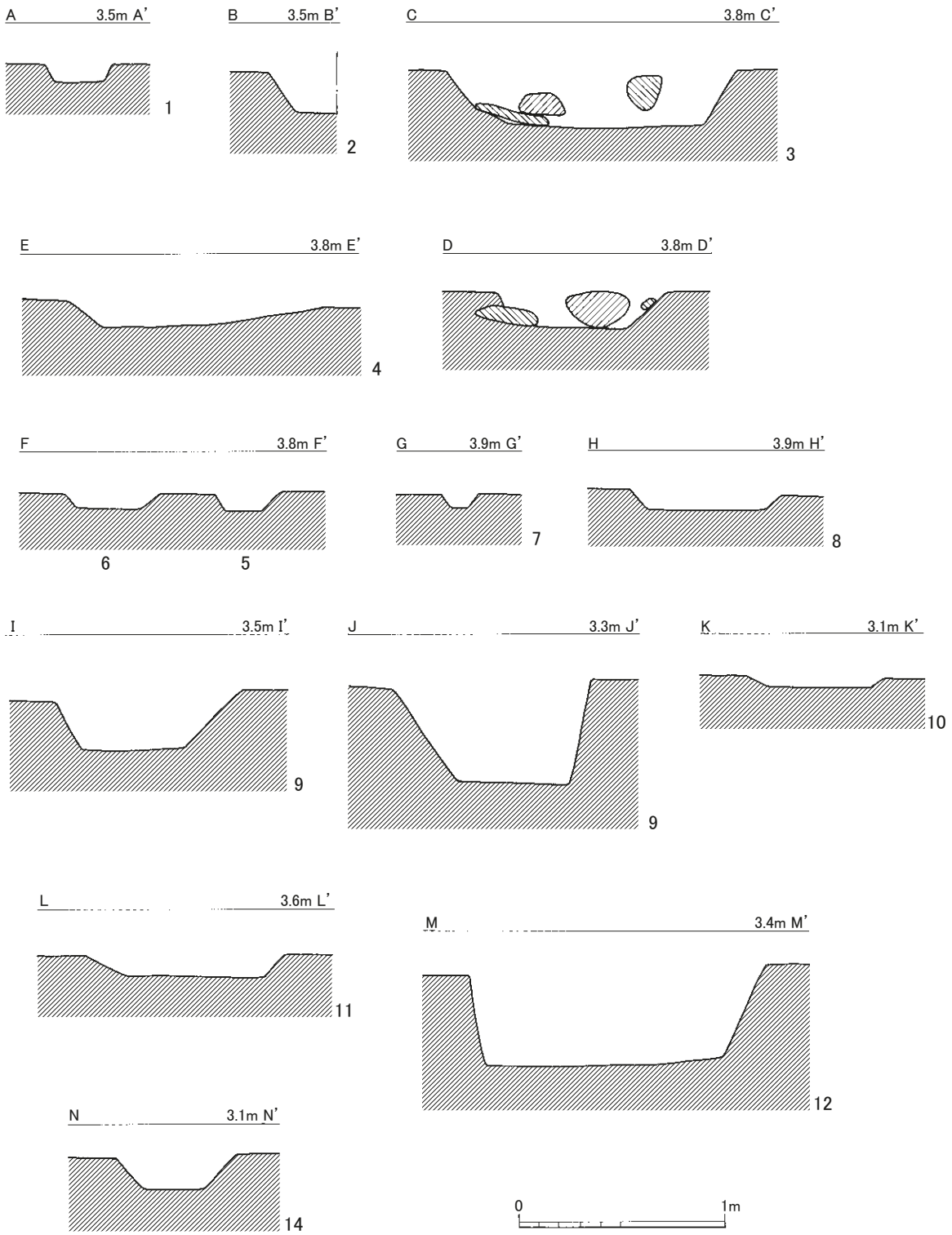
１号溝（図版 44、第 111 ～ 113 図）

6 区南側中央で検出した南北方向に直線上に延びる溝である。北側は 0.3 mのピットに切られているが、長さ 1.9 m、幅 0.4 m以下、深さ 0.1 mを測る。

112 図１～４は土師器である。１は丸底の皿である。２は蓋、３・４は壺又は甕で、内外面はナデを施す。５～ 13 は陶器である。５・７は京焼風の碗と大皿で、５の見込みには弧を描くような模様がある。６は内面に銅緑釉で施釉し、見込みは５と同様に蛇の目釉剥ぎである。８は擂鉢で、内外面の口縁のみ施釉し、内面には摺り目がある。９は瓶の口縁～頸部片で、内外面に施釉する。10 は備前焼の徳利で、外面にはカキ目と外底は丁寧なヘラケズリを施す。外底には２つの円のスタンプを押す。11 は外面に白化粧土で刷毛目模様をする武雄産の壺片か。12・13 は甕で、12 は内面に格子目状のタタキ、外面はタタキの後にカキ目を施す。唐津産である。13 は外面口縁上部に貝目が付着する。外面には多数の沈線が巡る。

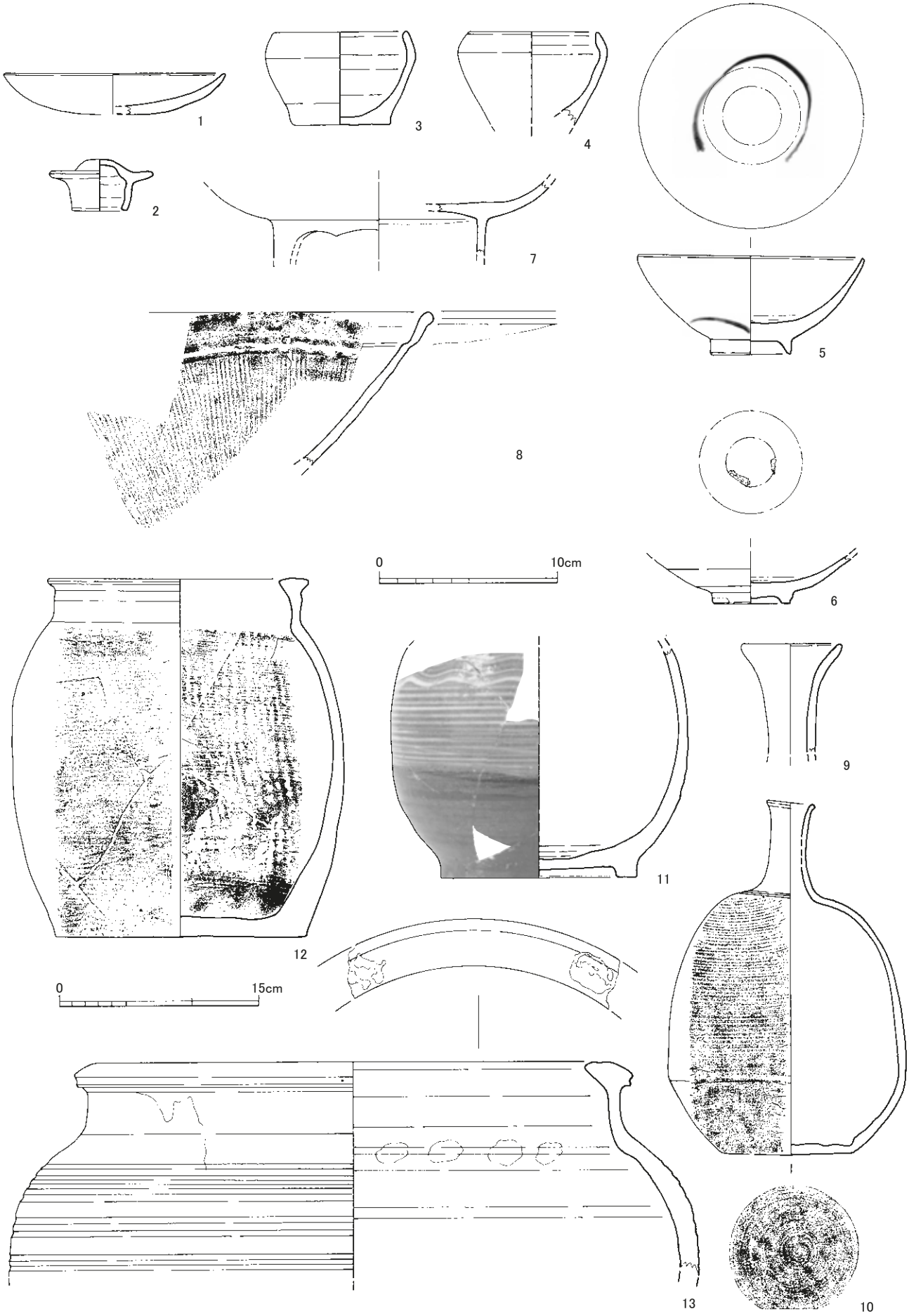


第 110 図　2 次調査 6 ～ 10 区 13･14･16･17 号土坑出土遺物実測図（1/ 3）



第 111 図　2 次調査 6 ～ 10 区1～4・6～ 12・14 号溝断面実測図（1/30）

113 図 14・15 は染付碗である。14 は口銹で、外面は青磁色を呈す。高台内銘款に「大明年製」、見込みに圏線 2 条と五弁花文を描く。15 の外面は圏線より太い、横線 6 条を巡らす。16 ～ 22 は染付碗で、18 は丸文とコンニャク印判の菊花、19 の外面は藤のコンニャク印判、20・21 は外面に草花文と鳥など、21 のみ高台内銘款に「大明年製」を描く。23 ～ 26 は染付皿で、見込みに 24 は風景や家屋、25 は五弁花文、26 は中央に鹿、山、銀杏を描く。23 のみ内面に蛇の目釉剥ぎを施す。



第 112 図　2 次調査 6 ～ 10 区1号溝出土遺物実測図（1/ 3・1/ 4）

いずれも有田産である。27・28 は瓦質の鉢と湯釜片で、28 の外面に指圧痕、内面に刷毛目が残る。

２号溝（第 111 図）

8 区南壁で検出した東西方向に延びる溝である。半分以上は調査区外にあるため、長さ・幅は不明だが、残存長 1.4 m、残存幅 0.3 m、深さ 0.2 mを測る。

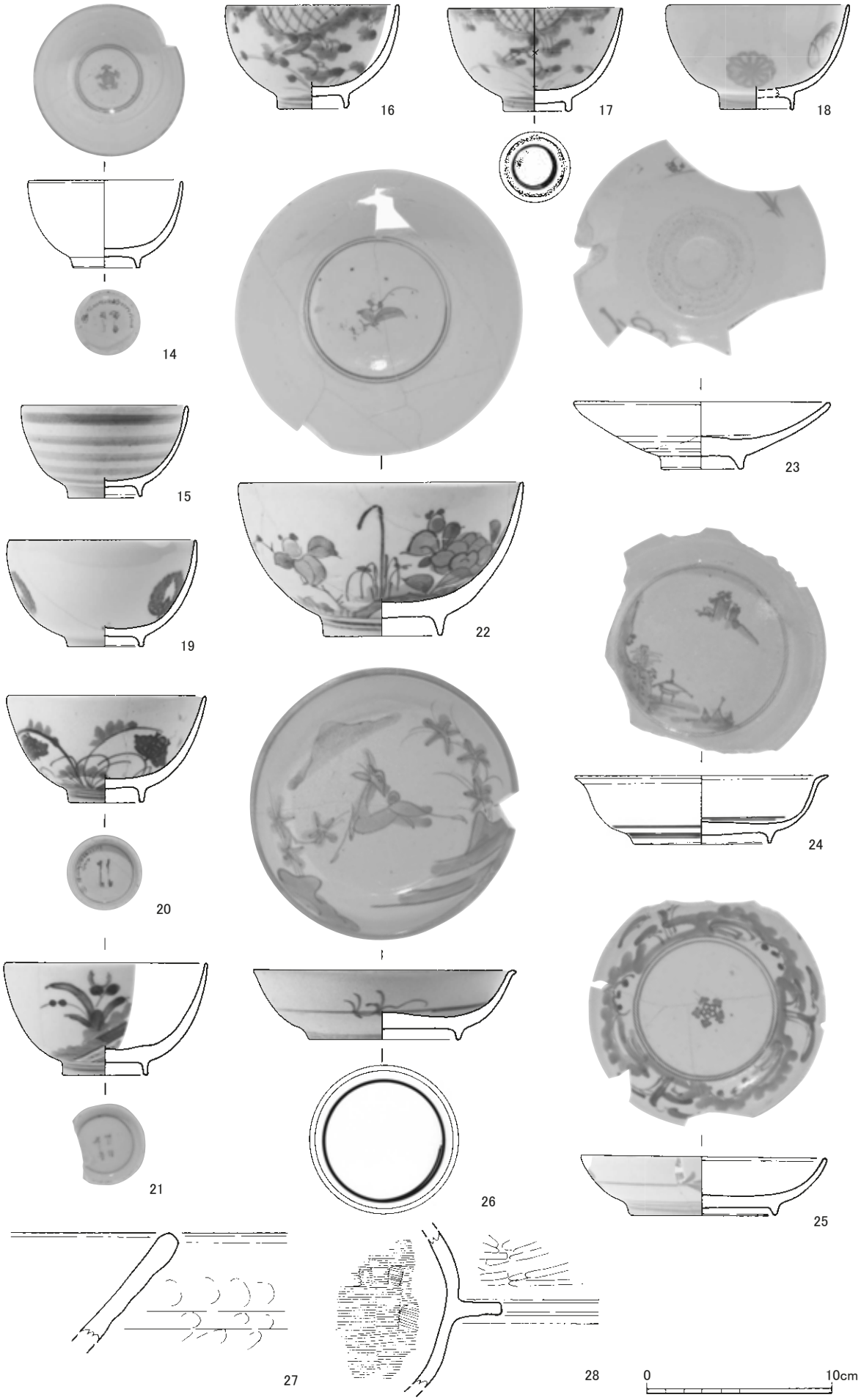
３号溝（図版 29・45、第 111・114 ～ 116 図）

6 区南側で東西方向に直線上に延びる溝である。３号溝は調査区際まで延び、残存長６mを測る。幅は 0.6 ～ 1.4 mとばらつきがあるが、深さは 0.2 ～ 0.3 mとあまり差はない。断面は逆台形状で、東西の壁際で 0.4 m以下の礫石がまとまって出土した。これらの礫石は検出時に判断できなかったが、上面から掘り込まれた建物の礎石の可能性がある。

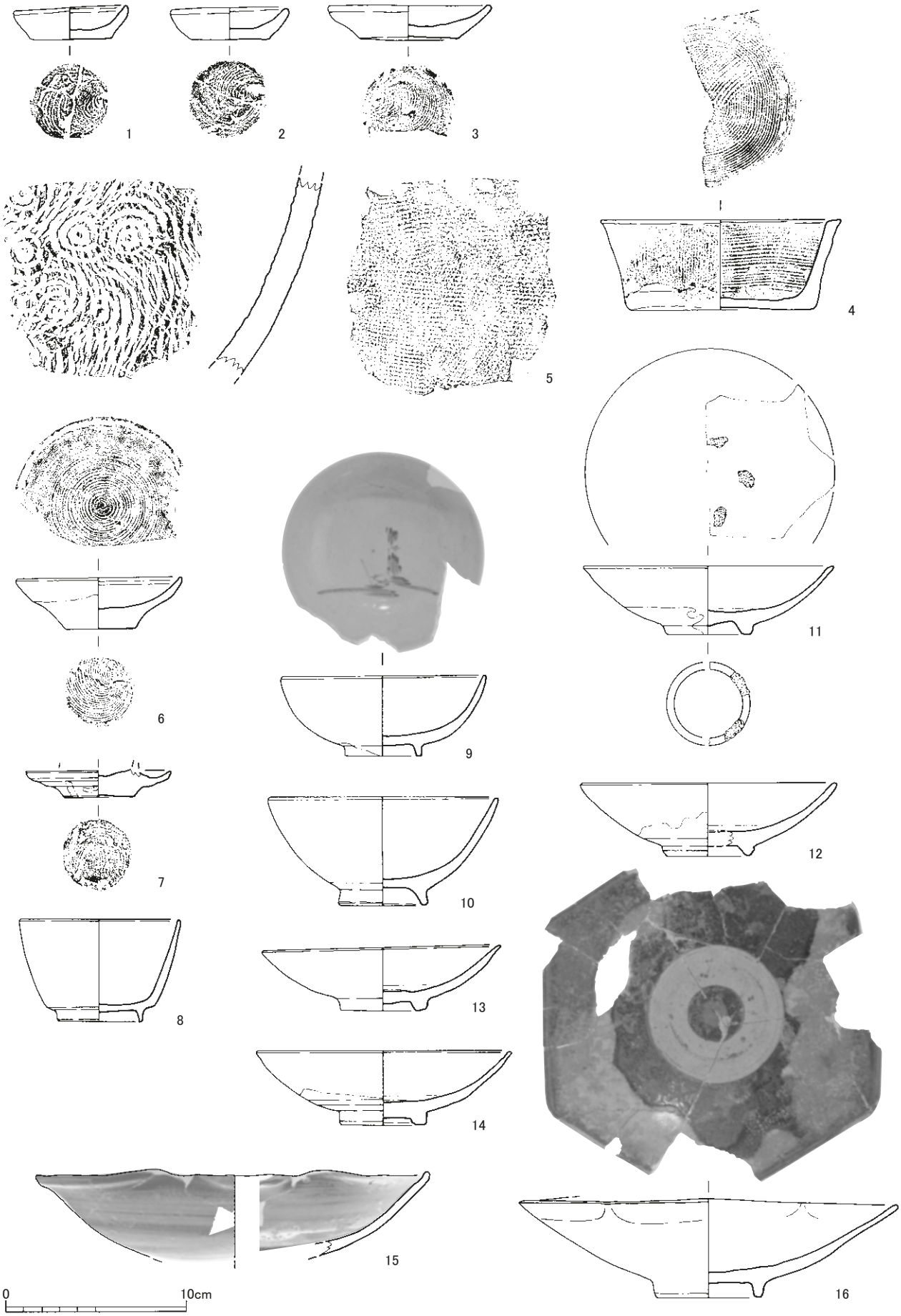
114 図１～３は土師器皿である。内外面は横ナデで、外底は糸切りである。２のみ油煙が内外面に付着することから灯明皿として使用する。４は瓦質火鉢片で、外面は縦、内面は横と内底は渦状に刷毛目を施す。外底は板ナデである。内外面に煤が付着する。５は須恵器甕体部片で、外面は格子目、内面は同心円文叩きである。内面は２次焼成を受け、黒色を呈する。６は陶器皿、７は灯明皿で、共に外面体部下位は露胎する。８～ 10 は京焼風の陶器碗である。９のみ見込みに山水文を描くことから 17 世紀後半頃のものか。11・12 は陶器皿で、11 は見込みと畳付に砂目が付着する。12 の口縁端部は僅かに口銹状で、高台は鉄銹を施釉する。13 と 14 は上野焼の陶器皿で、内面は蛇の目釉剥ぎを施す。15 は現川焼の陶器皿で、口縁は輪花状に歪んでいる。16 は六角形状になる変形皿で、焼成から高取焼か。115 図 17 ～ 19 は陶器の火入れである。17 は外面口縁～体部中位まで施釉し、白化粧土で刷毛目模様を施す。18 は焼成・胎土から 17 と同じ器形か。19 は緑色の釉で、内面は露胎する。20・21 は陶器鉢で、20 の見込みは白化粧土で刷毛目模様にする。砂目は５ヶ所付着する。22 は陶器甕である。23 は瓦質火鉢片で内底は黒色を呈し、４隅に脚をもつ。116 図 24 ～ 29 は染付碗である。24・26 は外面には二重網目文、内面にも網目文で、見込みに菊花を描く。18 世紀前半頃か。他の外面の文様は 25 は雪持笹、27 は牡丹唐草である。28 の外面には区画と網目文、内面は唐草を描くか。29 の外面は花と扇を描き、見込みに砂が付着する。高台内銘款には、26・27 は渦「福、」28 は「田」である。30 ～ 33 は染付皿である。30 は全体的にひしゃげているが、内面に松と見込みに草を描かれる。31 の外面は輪花で、唐草と内面は見込みに菊花、鳥、渦を描くか。高台内銘款は判読不能の文字である。32 の外面は輪花で圏線３条と花、内面は区画内に牡丹唐草、見込みに花卉を描く。高台内にハリ跡が３つある。畳付はいずれも釉剥ぎされている。33・34 は青磁である。33 は「く」の字に屈曲する皿で、赤絵で内面に青海波と葉？、外面にも草花を描く鍋島焼か。34 は青磁火入れで、内面は釉垂れし、部分的に露胎する。外面は沈線３条、底部には脚付で、連弁状の文様がある。

４号溝（図版 29・45、第 111・117 図）

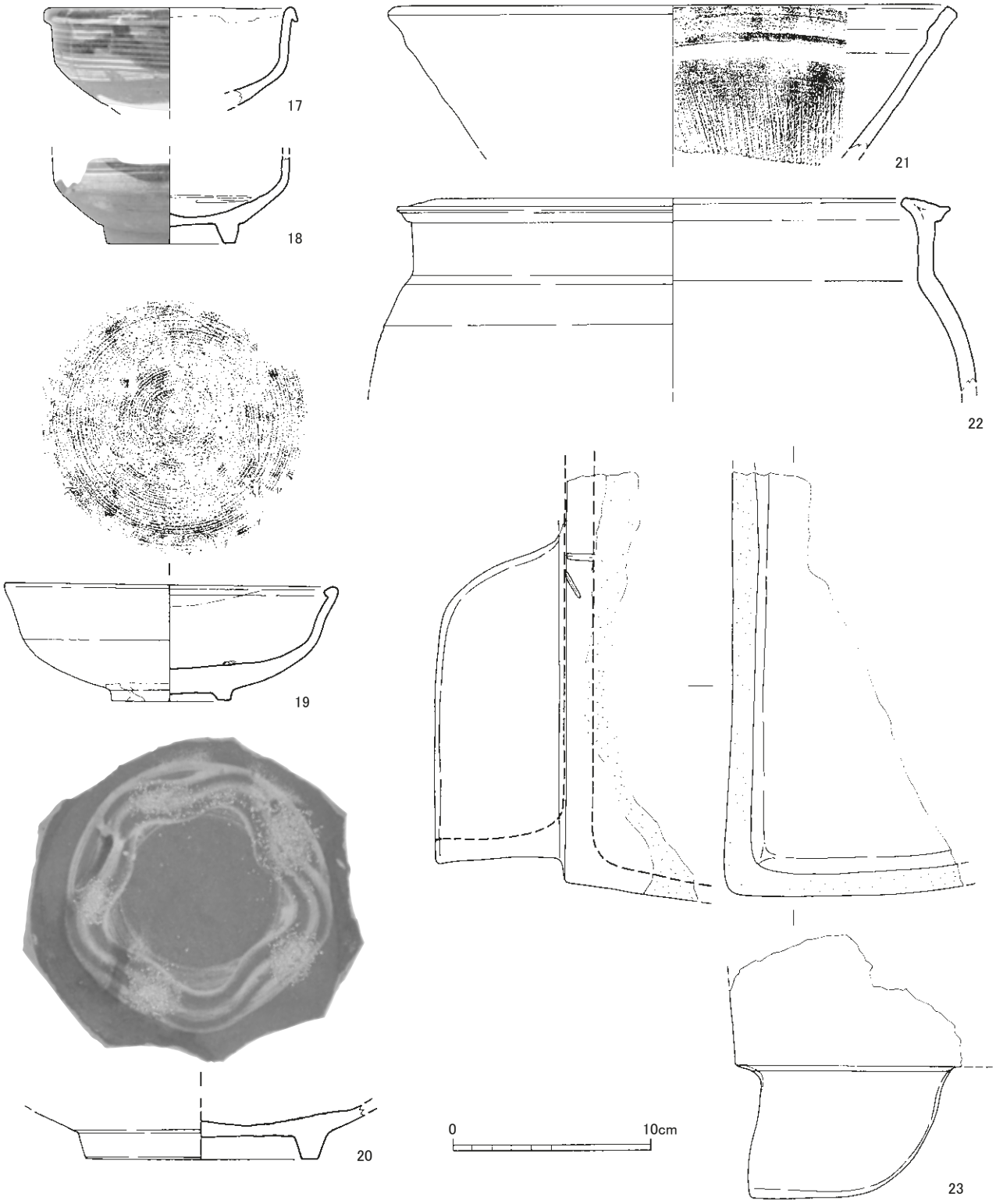
３号溝北側で北側調査区外まで南北方向に直線上に延びる溝である。溝の全長を検出してはいないが、長さ２m、幅１m以下、深さ 0.2 m以下を測る。断面は逆台形状になるが、東側の立ち上がりはなだらかになる。



第 113 図　2 次調査 6 ～ 10 区1・2号溝出土遺物実測図（1/ 3）

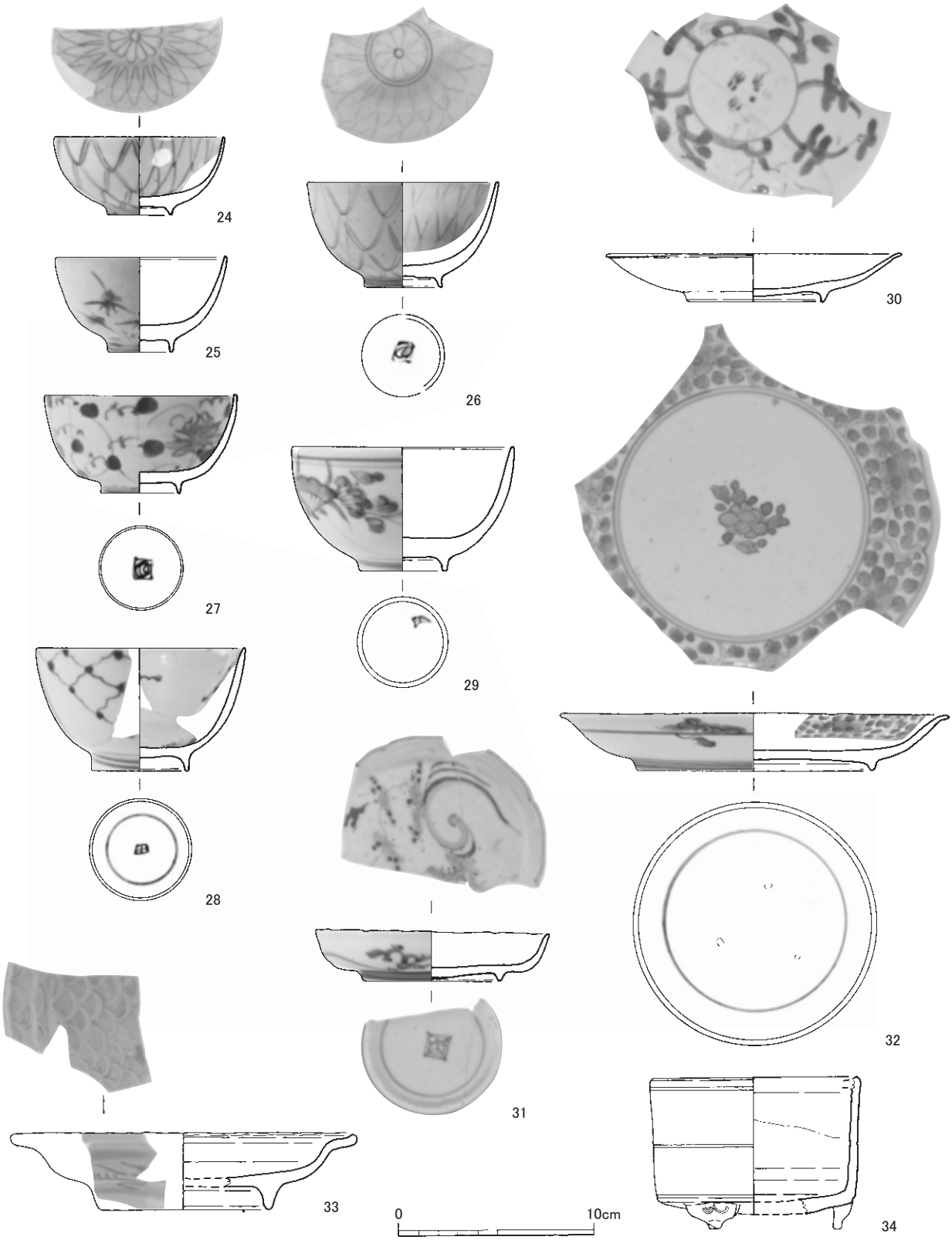


第 114 図　2 次調査 6 ～ 10 区3号溝出土遺物実測図1（1/ 3）



第 115 図　2 次調査 6 ～ 10 区3号溝出土遺物実測図2（1/ 3）

117 図 1 は土師器皿で、外底は糸切りである。2 は瓦質土器火鉢片で、外面は煤が付着する。3 は 17 世紀後半頃の京焼風の陶器碗で、見込み山水文を描く。4 は陶器擂鉢片で、口縁部のみ施釉し、端部で屈曲する。5 は陶器壺の底部片である。6 ～ 11 は有田産の染付碗・皿である。外面に 6 は圏線や横線、7 は山や舟、8 は草花文と見込みに葉などを描く。9 は内面に圏線や横線を描く。10 の口縁は輪花で、内外面は圏線である。11 は外面に唐草や内面に捻などを描く。12 は菱形状の器形の白磁皿である。13 は薄い緑白釉の青磁皿か。内面に四方襷を描く。煤が付着していることか

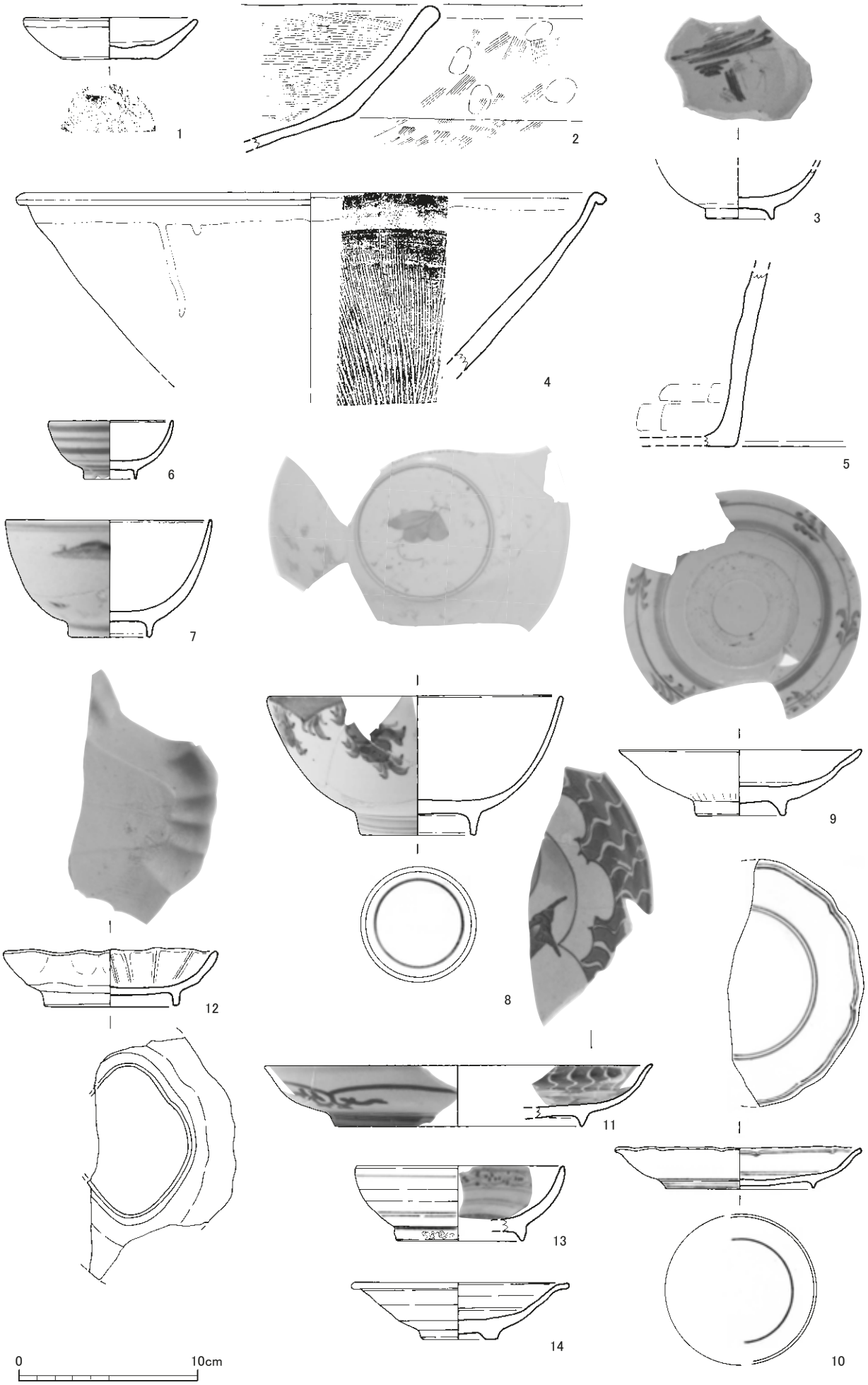


第 116 図　2 次調査 6 ～ 10 区3号溝出土遺物実測図3（1/ 3）

ら２次焼成を受けたものか。14 は中国系の白磁皿で、内面体部中位で段がつく。

５号溝（図版 31、第 111 図）

7 区北側で調査区外まで東西方向に直線上に延びる溝である。長さ 2.5 m以上、幅 0.3 m、深さ 0.1 m以下を測る。溝の全長を検出してはいないが、断面は逆台形状になる。



第 117 図　2 次調査 6 ～ 10 区 4・5 号溝出土遺物実測図（1/ 3）

６号溝（図版 31、第 111 図）

５号溝と併行して調査区外まで東西方向に直線上に延びる溝である。残存長 1.6 m以上、幅 0.5 m以下、深さ 0.1 m以下を測る。大部分を攪乱で切られている。

７号溝（図版 33・45、第 111 図）

8 区の北側で検出した南北方向に延びる溝である。調査区外まで延びるため、残存長 1.9 m以上、幅 0.3 m以下、深さ 0.2 m以下を測る。断面は逆台形状である。

８号溝（図版 33・45、第 111・118 図）

8 区の中央で検出した東西方向に延びる溝である。調査区外に延びているため、残存長 3.1 m以上、幅 0.5 ～ 0.8 m、深さ 0.1 m以下を測る。底面に杭列と思われる径 0.1 m以下の小ピット状の痕跡が一直線状に並んでいる。西側はピットで切られている。

118 図 1 は陶器の灯明皿で、重ね焼きの影響により内外面口縁は器面が剥離する。２は陶器の鉢で、内面見込みに砂目が付着する。白化粧土で外面は刷毛目状の文様を施す。18 世紀前半～中頃か。３～８は染付蓋・碗である。３は方形の撮みをもつ蓋で、外面は赤絵で描かれる。４は碗で、外面は唐草か。５～７は筒形碗である。外面は５にクラゲのような文様、６は雪輪、７は菊花、６・７の内面口縁に四方襷、５・７は見込みに五弁花文を描く。７のみ高台内銘款があるが、文字は不明である。８・９も染付である。８は碗で、見込みは花卉を描く。９は仏飯器で、外面の圏線間に連弁を描く。

９号溝（図版 36・37・45、第 111・118 図）

9 区で検出した東西方向に延びる溝である。長さ 6.1 m、幅 1.1 m以下、深さ 0.3 ～ 0.5 mを測る。断面形状は逆台形状で、他の溝と同じであるが、西側に向かってさらに 1 段下がっている。下記の遺物の他に瓦も出土する。

118 図 10 は瓦質火鉢片で、外面の口縁には菊花のスタンプを巡らす。11 は陶器碗で、見込みに砂が付着する。16 世紀後半～ 17 世紀前半頃か。12 は漳州窯産の青花皿か。見込みに文字のような文様あり。内外面に圏線 1 条体部下位に巡らす。

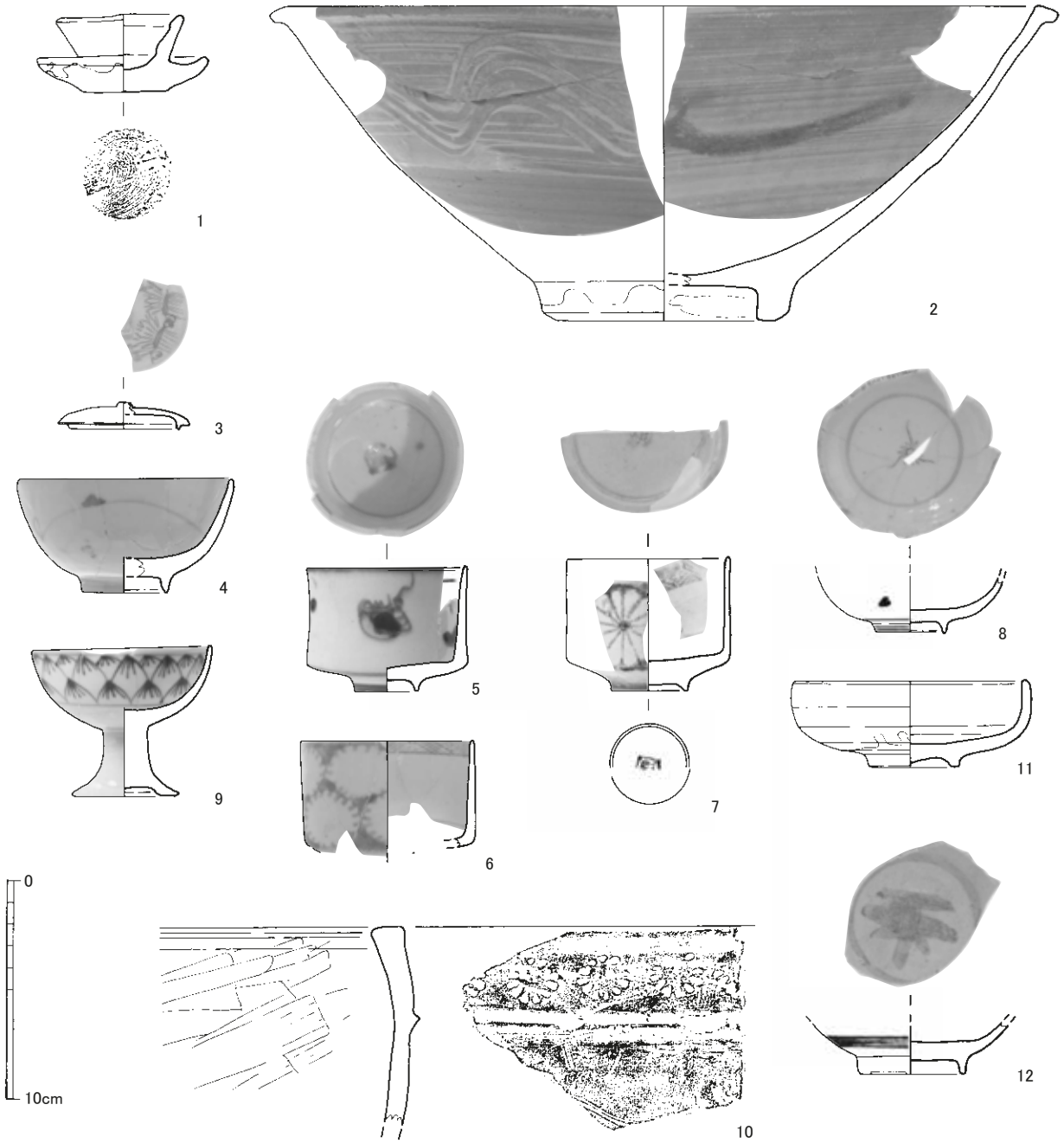
10 号溝（図版 37、第 111 図）

9 区の北東側で検出した東西方向に延びる溝である。溝の中央で屈曲するが、長さ 3.4 m、幅 0.25 ～ 0.75 m、深さ 0.1 m以下を測る。断面形状は逆台形状である。

11 号溝（図版 38、第 111 図）

10 号溝の北側で検出した東西方向に延びる溝である。調査区外に延びているため、残存長 1.9 m、幅 1.5 m以下、深さ 0.5 m以下を測る。断面形状は逆台形状である。

119 図 1 は有田産の染付皿片で、内面は蛇の目釉剥ぎし、井桁や圏線 2 条を描く。見込みと畳付に砂が付着する。



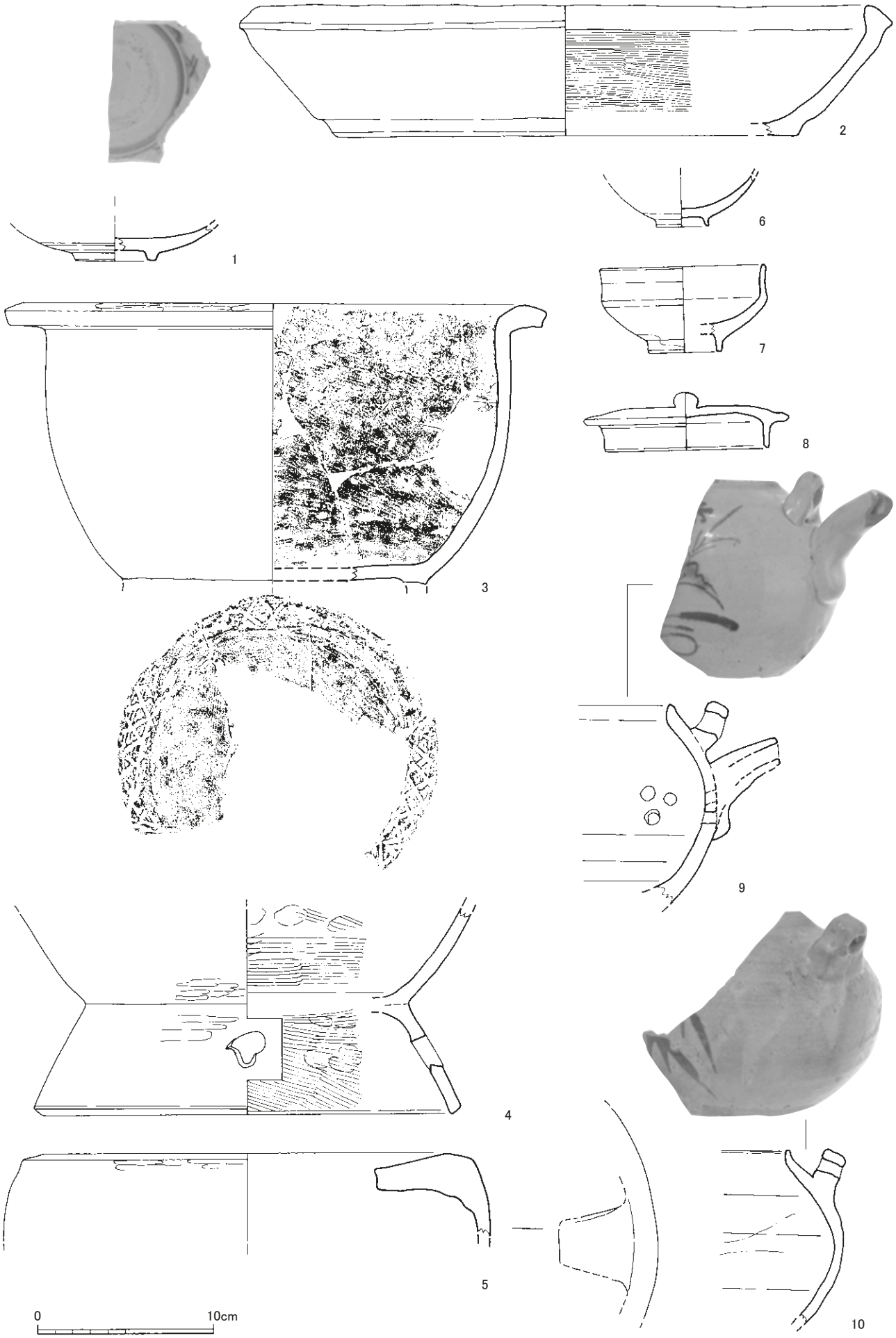
第 118 図　2 次調査 6 ～ 10 区８・９号溝出土遺物実測図（1/ 3）

12 号溝（図版 38・45・46、第 111 図）

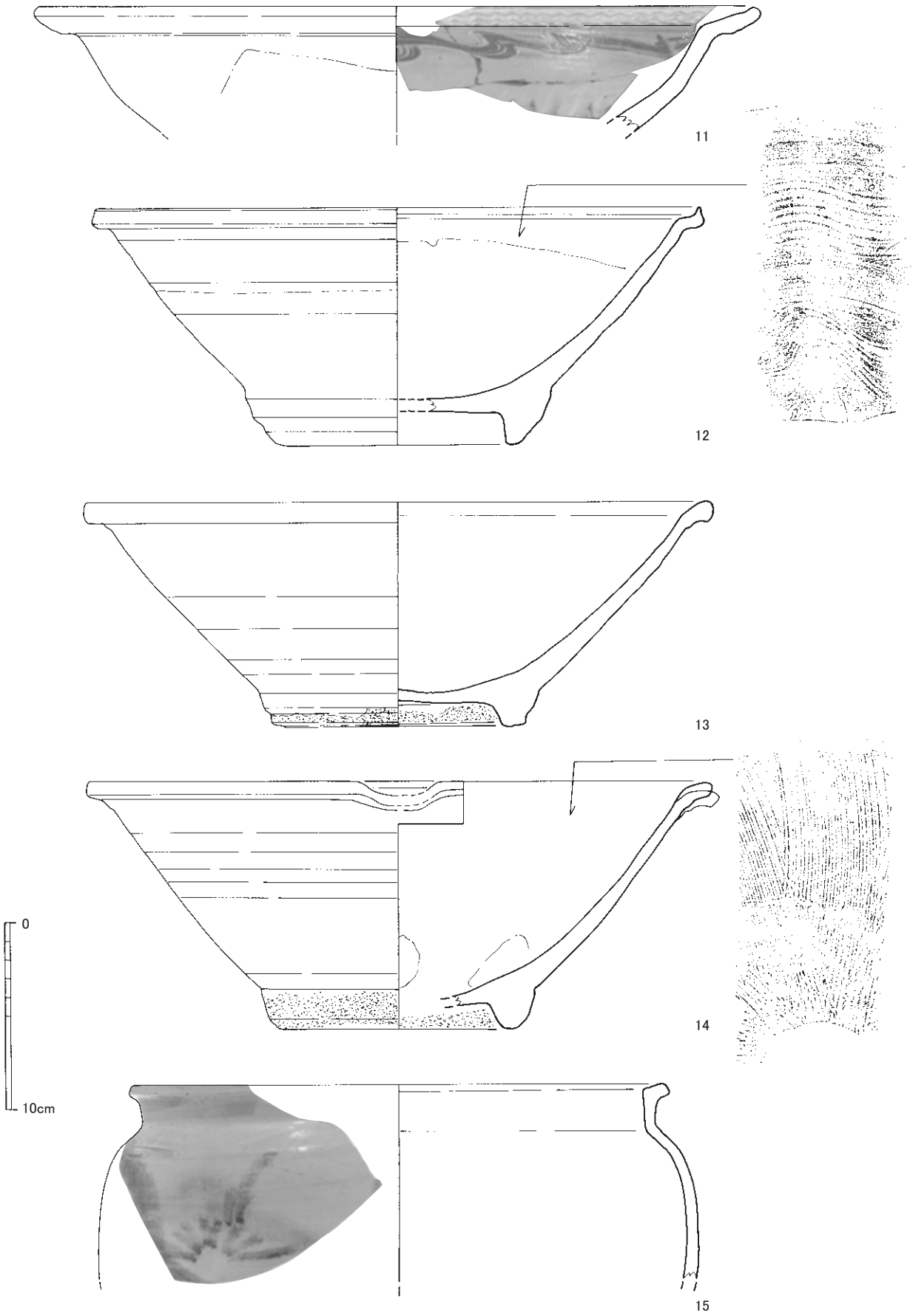
9区南側で検出した東西方向に延びる溝である。長さ3.8 m、幅は調査区外に延びているが0.9～0.4 mへと狭まる。南北方向は長さ 4.5 m、幅 0.9 m、深さは共に 0.4 m以下を測る。そのため断面形状は逆台形状だが、傾斜が異なる。

119 図２～５は瓦質の火鉢片である。２・３の調整は内面に刷毛目、外面は横ナデや板ナデである。３は高台との接合部は「×」状に刻んでいる。４の高台には瓢箪形の穿孔がある。５の外面の調整はミガキか。６～ 10 は陶器である。６・７は無文の碗であるが、７のみ京焼風である。８は唐津産の蓋である。９・10 は京焼風の土瓶で、外面に草花文を描くか。

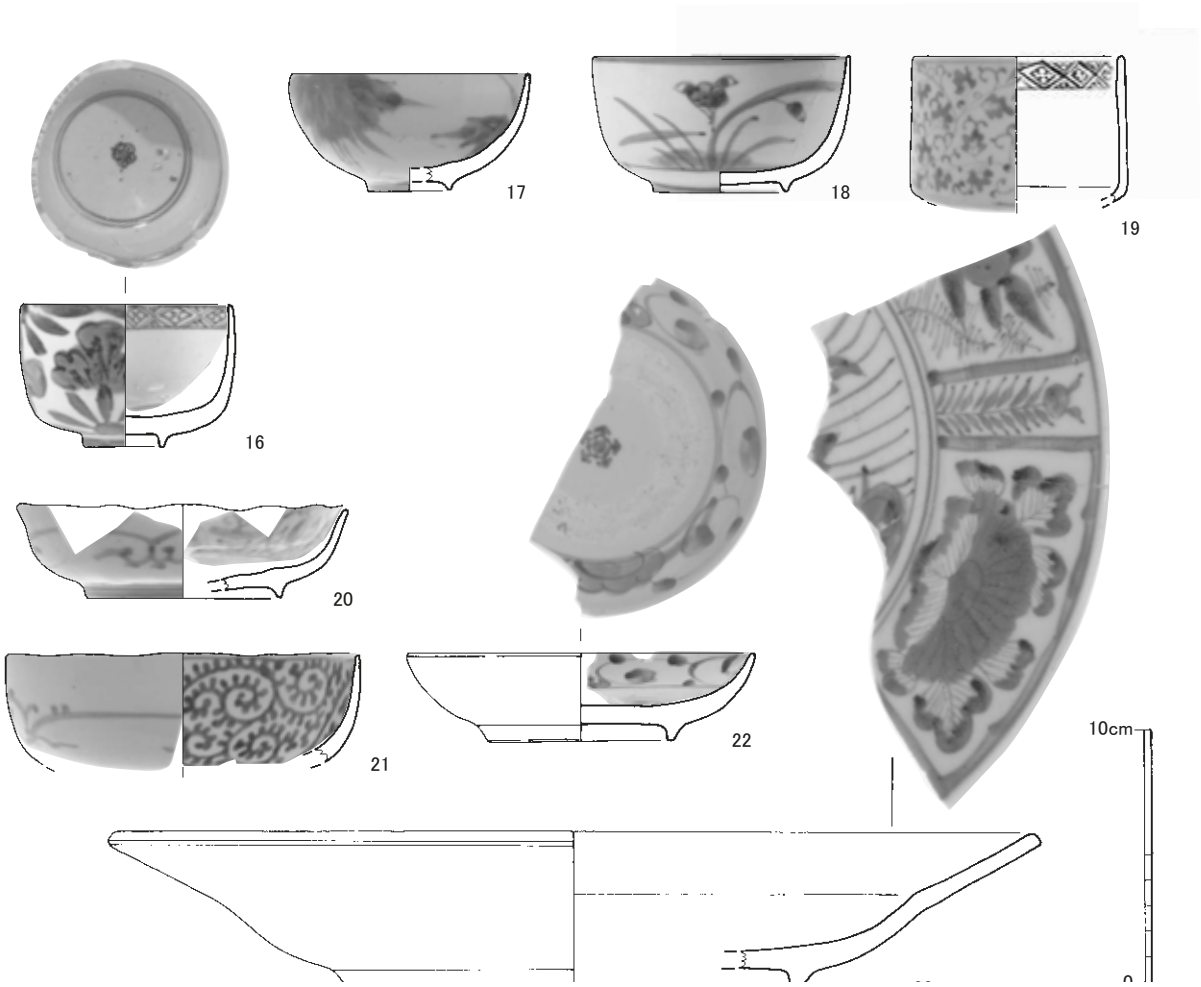
120 図 11 ～ 14 は陶器鉢である。11 は武雄産で、内面は釉の上に、白化粧土で刷毛目模様にする。



第 119 図　2 次調査 6 ～ 10 区 11・12 号溝出土遺物実測図（1/ 3）



第 120 図　2 次調査 6 ～ 10 区 12 号溝出土遺物実測図 2（1/ 3）



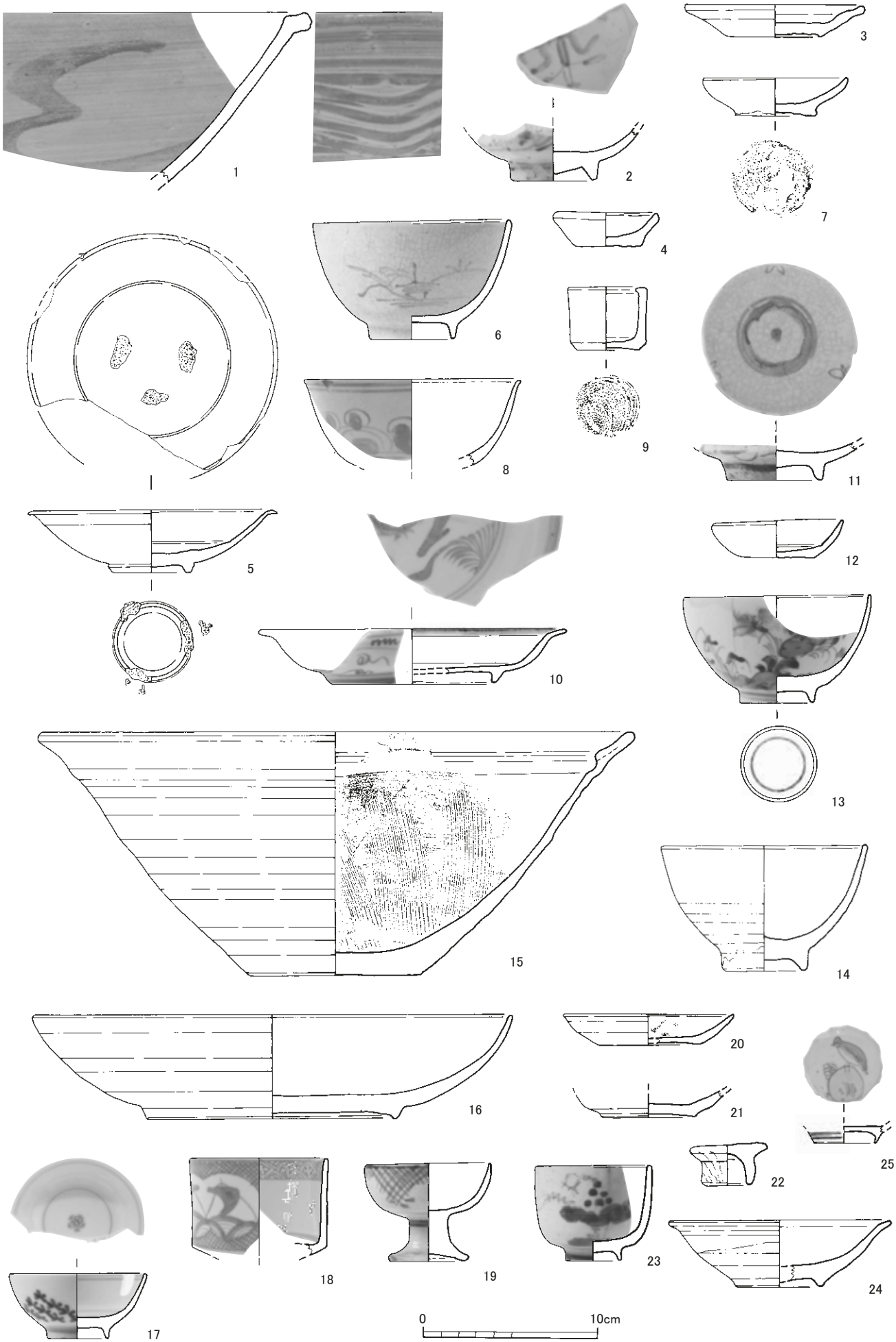
第 121 図　2 次調査 6 ～ 10 区 12 号溝出土遺物実測図3（1/ 3）

12･13 は内外面は２次焼成を受けて､煤が付着する。12 の内面には刷毛目模様を施す。18 世紀頃か。14 は内面に摺り目、高台には砂が付着する。18 世紀中頃か。15 は陶器の甕で内外面に白化粧土を塗り、その上に松を描く。17 世紀中～ 18 世紀前半ものか。

121 図 16 ～ 23 有田産の染付である。16 ～ 18 は碗で、外面にはそれぞれ菊花、竹、草花を描く。16 の内面は四方襷、見込みに五弁花文を描く。19 は筒形碗で、外面は唐草、内面口縁に四方襷を描く。20 ～ 23 は皿で、内外面に唐草・蛸唐草・花唐草を描く。20 のみ口縁の形状が輪花である。23 は芙蓉手大皿で、内面の区画内に菊などの花や葉を描く。

５　ピット（第 122 図、図版 46）

１はＰ４出土の陶器鉢で､内外面は白化粧土を塗り､外面は刷毛目模様､内面はその上に松を描く。２・８・10・11 はＰ 35・64・89・93 出土である青花碗・皿で、外面や見込みに花卉などを描くか。３はＰ 47 出土の陶器皿で、見込みと高台内を釉剥ぎする。形状などから瀬戸産のものか。４・７・12 はＰ 52・56・96 出土の土師器小皿で、12 のみ内面に沈線１条が巡る。5 はＰ 52 出土の陶器皿で、見込みに砂目３ヶ所と高台にも砂が付着する。16 世紀末～ 17 世紀前の唐津産である。６はＰ 52 出土で京焼風の陶器碗で、外面に山水文を描く。９は P74 出土の筒型の小碗で、焼成から陶器製である。外底は糸切りで、露胎する。13 はＰ 113 出土の染付碗で、外面は草花文や山、体部下位以下に圏線４条を描く。14・15 はＰ 123 出土で、14 は陶器碗で内外面は銅緑釉を施釉する。15



第 122 図　2 次調査 6 ～ 10 区ピット出土遺物実測図（1/ 3）

は陶器鉢で、内面は擂り目、内外面の口縁に施釉する。16はＰ58・Ｐ123出土の青磁大皿で、高台は釉剥ぎし、鉄錆を塗り蛇の目状になる。内面は木の葉をヘラ彫りする。17世紀代か。17はＰ137出土の染付小碗で、内外面の圏線と外面体部は花、見込みに五弁花文を描く。18・19はＰ142出土の筒形碗と仏飯器である。18は内面口縁は四方襷、底部との境に圏線２条、外面は籠目文、舟、波を描く。19は外面杯部の圏線間に網干や網目文を描く。20・21はＰ147下層出土の土師器の皿で、20は油煙が付着することから灯明皿として使用する。22はＰ162出土の土師器で、蓋状になる。23はＰ167出土の染付の湯呑碗である。24・25はＰ172出土の染付碗片と陶器皿片である。24は内面に胎土目痕があることから16世紀末頃の唐津産か。25は小碗片で、見込みに圏線と鳥などを描く。

６　遺構検出時出土遺物（第123図、図版43・46・47）

遺構検出遺物については時間の関係上、記載することはできなかった。その中でも大型の遺物のみここで記載する。

１～５はいずれも陶器甕である。１は７区１面出土で、完形品である。内外面は濃い緑釉で、内面に格子目状の叩きを施す。２は９区１面遺構検出出土と３は８区１面出土の甕で内外面に鉄釉で施釉する。４と５は並んで９区２面で出土する。４は体部下手片で、上部と底部を欠損する内面にはカルキが付着する。５は、体部中位以下の甕片である。並んで出土したことから便所として使用したものか。

７　その他の出土遺物

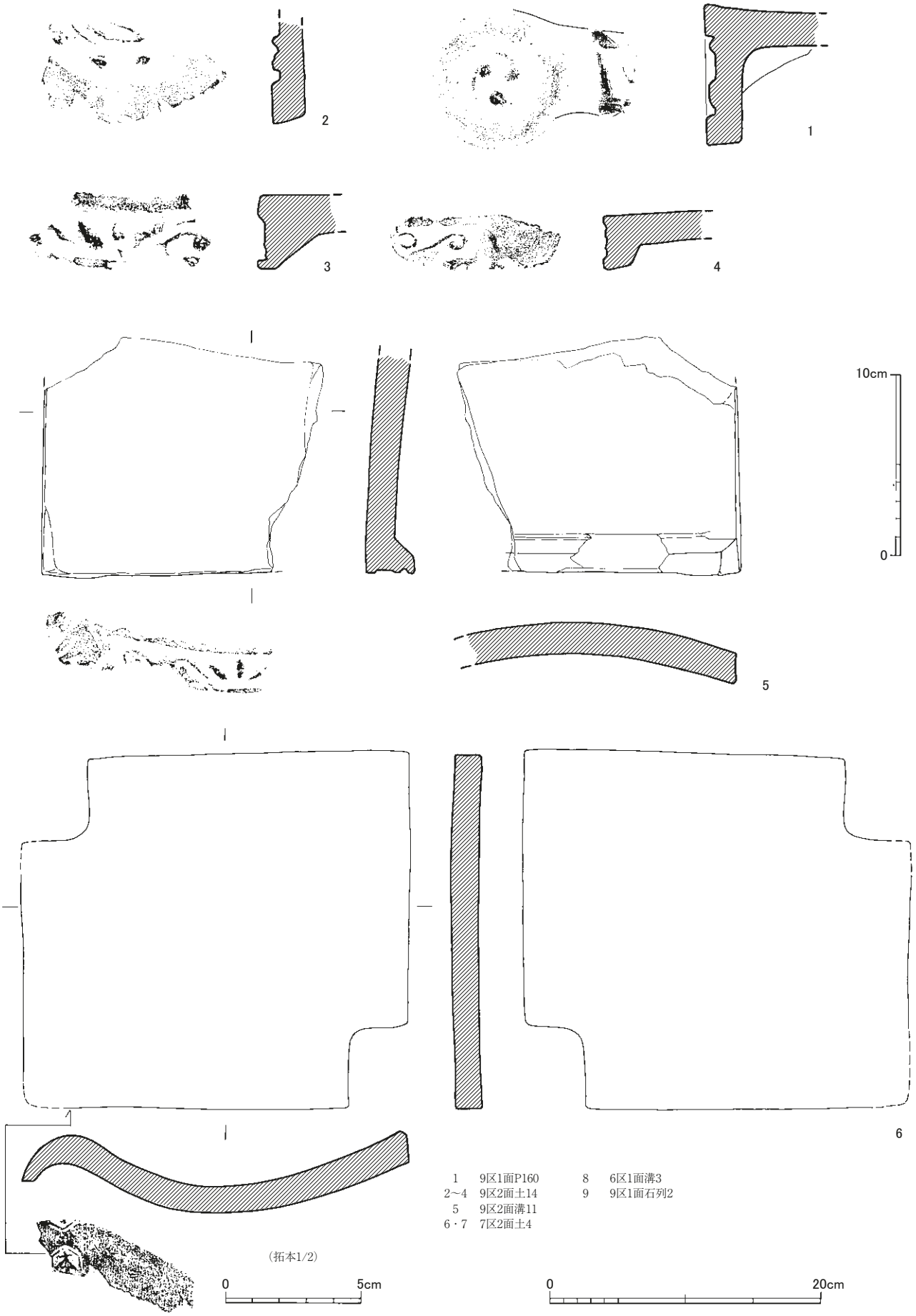
瓦（図版47、第124・125図）

図１は桟瓦片、２は軒丸瓦で共に巴文である。３～５は軒平瓦で、３・５は三葉文である。４も形状から三葉文の可能性がある。６は平瓦で、側面に菱形で「本」のスタンプが押印される。７～９も平瓦である。

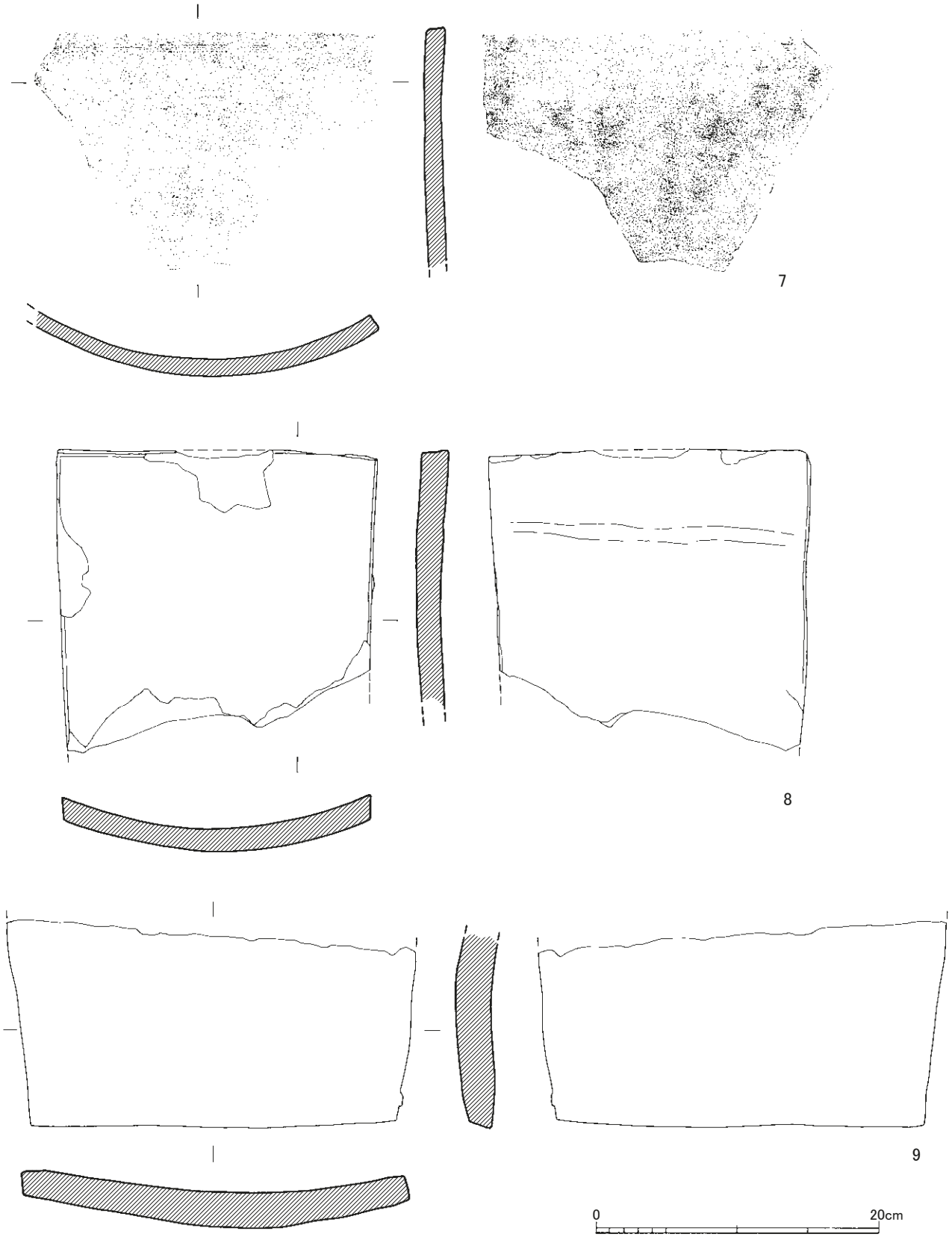
磁器製品・土製品（第126～ 128図、図版47）

126図１～３は磁器製である。１・２は水滴である。１は上部に横たわる人を形どる。２は卵形の形状で、縁際の２本線の間には、列点文が巡る。上面中央の孔には五弁花と左側にも文様を描く。注ぎ口と右下は欠損する。３は底部から背中にかけて孔が穿たれていることから灯芯押である。人物の顔には鉄釉を水をかけている。17世紀中頃。４～６は人形土製品である。６は頭巾を被る形状から大黒天を模したものか。７は大部分を欠損する烏帽子付の猿である。共に中は空洞である。８～12は馬である。８は目や口は表現されていない。９・11は脚と顔を欠損する。10は頸より下を欠損するが、側面の鬣を表現する。12～14は騎馬である。13は尻尾を欠損するほぼ完形品である。12は人を、14は馬部分を欠損する。15は獅子であるが、全体的に摩滅する。そのため、口を大きく開けていることから獅子と判断した。16～18は犬で、16・17は共に脚を欠損する。18は玉をもつ動物で、尻尾がつくられているので犬か。19は鳥で、上部に２ヶ所と側面に１ヶ所に孔を開ける。顔にも２ヶ所小さな孔を開ける。20は中央に円形の孔を開け、欠損するが４本の脚を

第 123 図　2 次調査 6 ～ 10 区遺構検出出土実測図（1・2 は 1/4、3 ～ 5 は 1/6）



第124図　2次調査6～10区瓦実測図1（6は1/4・他は1/3）



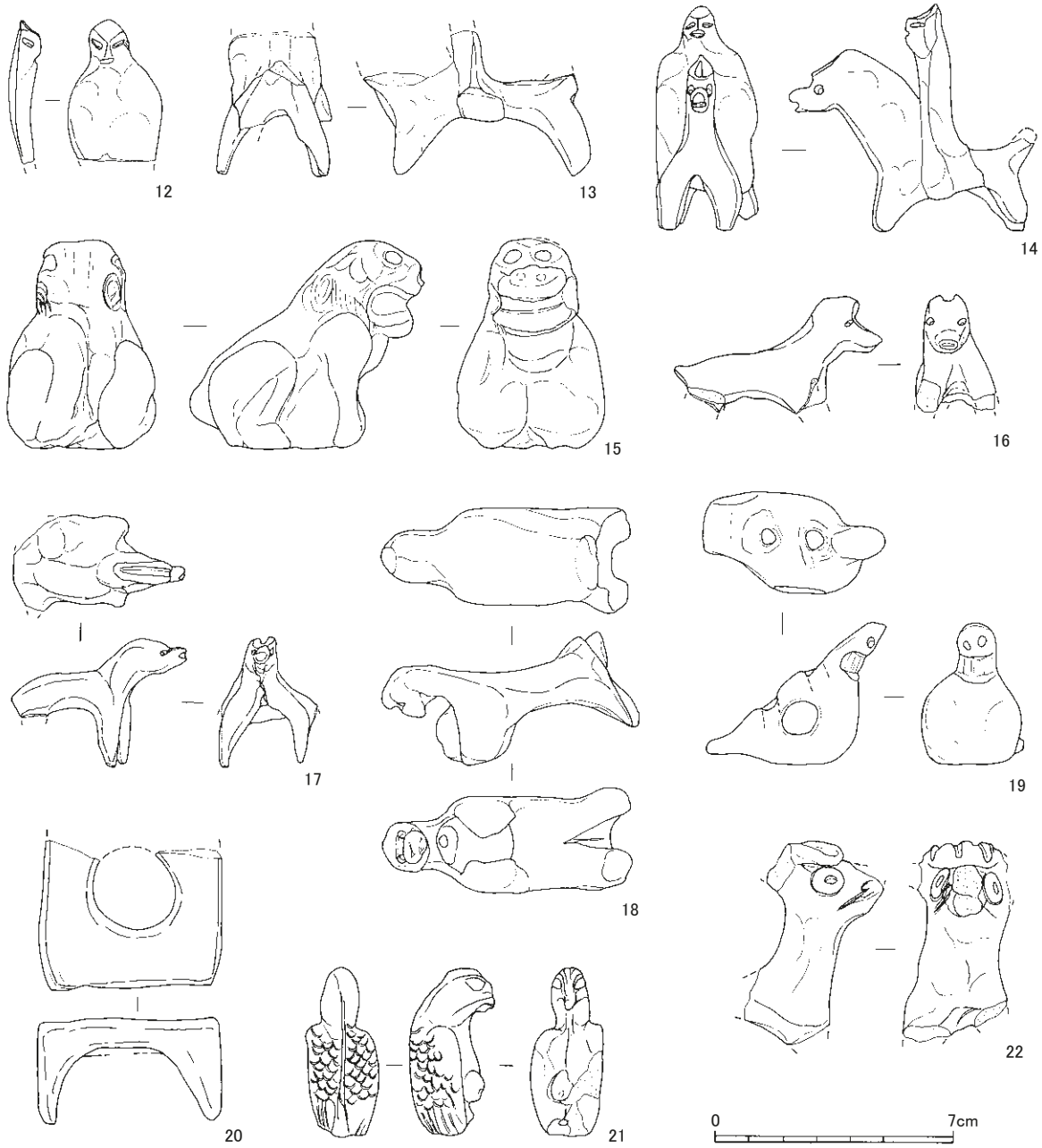
第 125 図　2 次調査 6 ～ 10 区瓦実測図2（1/ 4）

もつ台座か。21 は宿り木に留まる鳥で、背面には羽を描く。22 は鼠や犬などを模したものか。大きな丸い目と頭上には 3 本切り込みを入れている。

128 図 1 ～ 25 は土鈴で、上部を摘み上げて作る。外面上部は両面から穿孔する。側面からみると上部の厚さや形状、穿孔の大きさなどで個々に異なる。形状は卵形を呈し、長さ 3.7 ～ 4.1cmを測る。

9　6区2面遺構検出　　2　10区2面遺構検出
10　8区2面遺構検出　　8　9区2面土14
4・5　9区1面遺構検出　　11　10区3・4面排土
1・6・7　9区2面遺構検出　　3　9区2面石列埋土

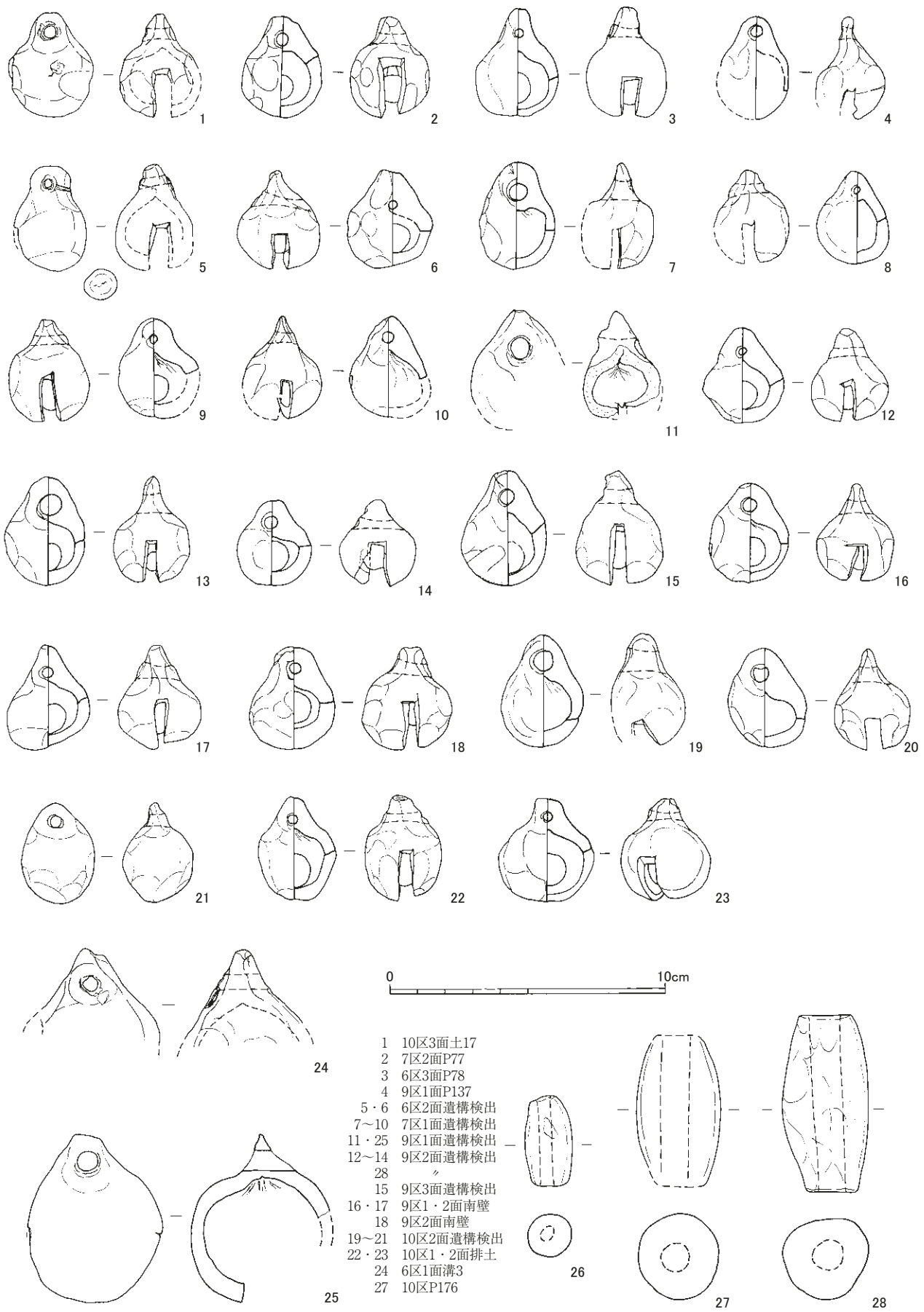
第126図　2次調査6～10区磁器製品・土製品実測図（1/2）



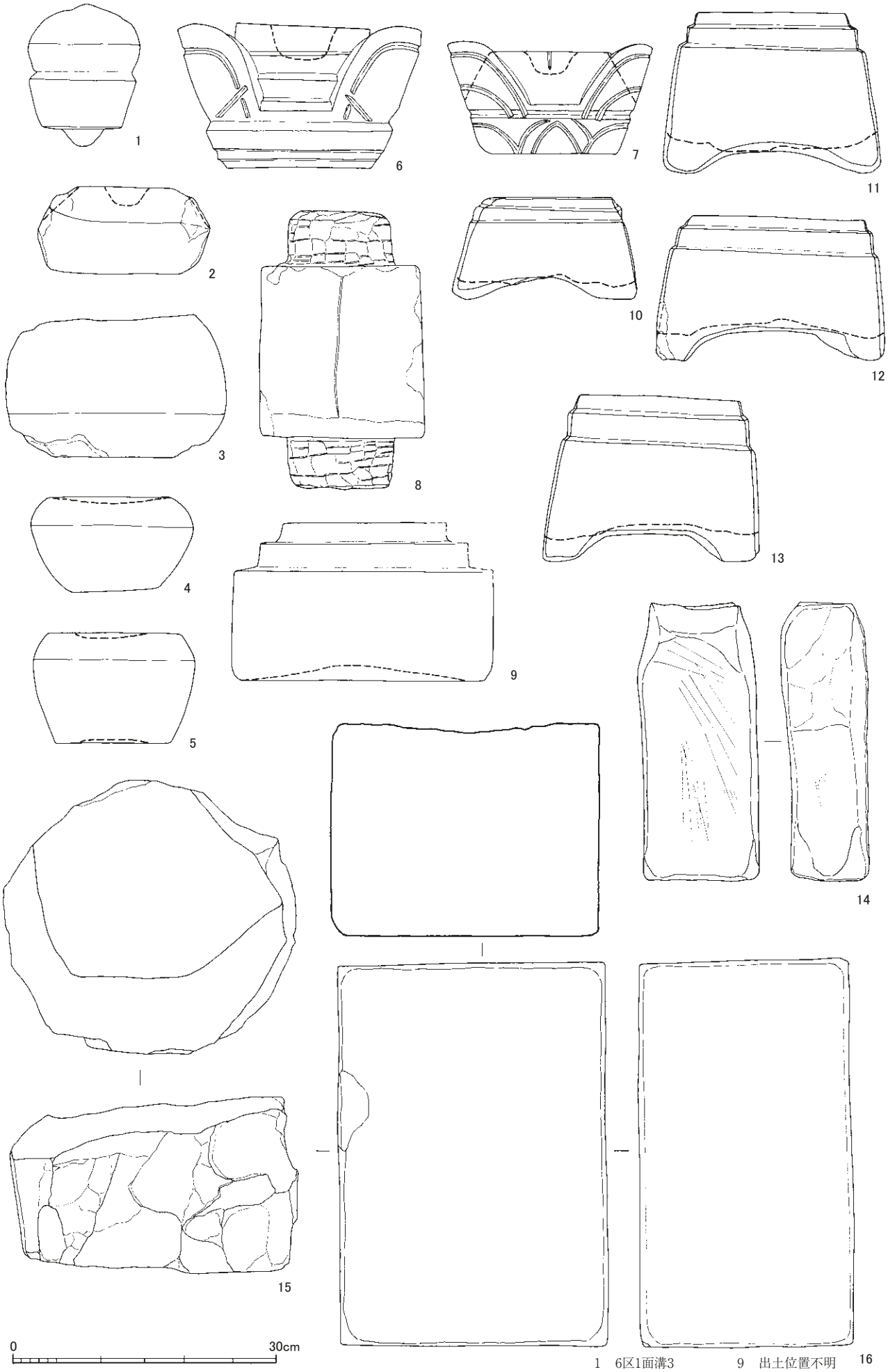
12　6区2面P24　　13　9区1面南壁　　18　10区3・4面排土
19　6区2面遺構検出　　15・20　9区2面遺構検出
22　6区1面溝3　　14　10区2面遺構検出
21　7区1面遺構検出　　16・17　10区3面遺構検出

第127図　2次調査6～10区土製品実測図2（1/2）

２・３・６・13・15・16～18・21～23は完形品である。20は完形品であるが、中の小玉が抜けている。21は両側面から下部にかけての切り込みがないが、小玉は内蔵され、音は鳴る。24・25は残存状況が悪いが、他の土鈴と比べて倍程の大きさ6.1×５cmになる。26～28は土錘で、長さは順に3.3、5.5、6.4cmを測る。

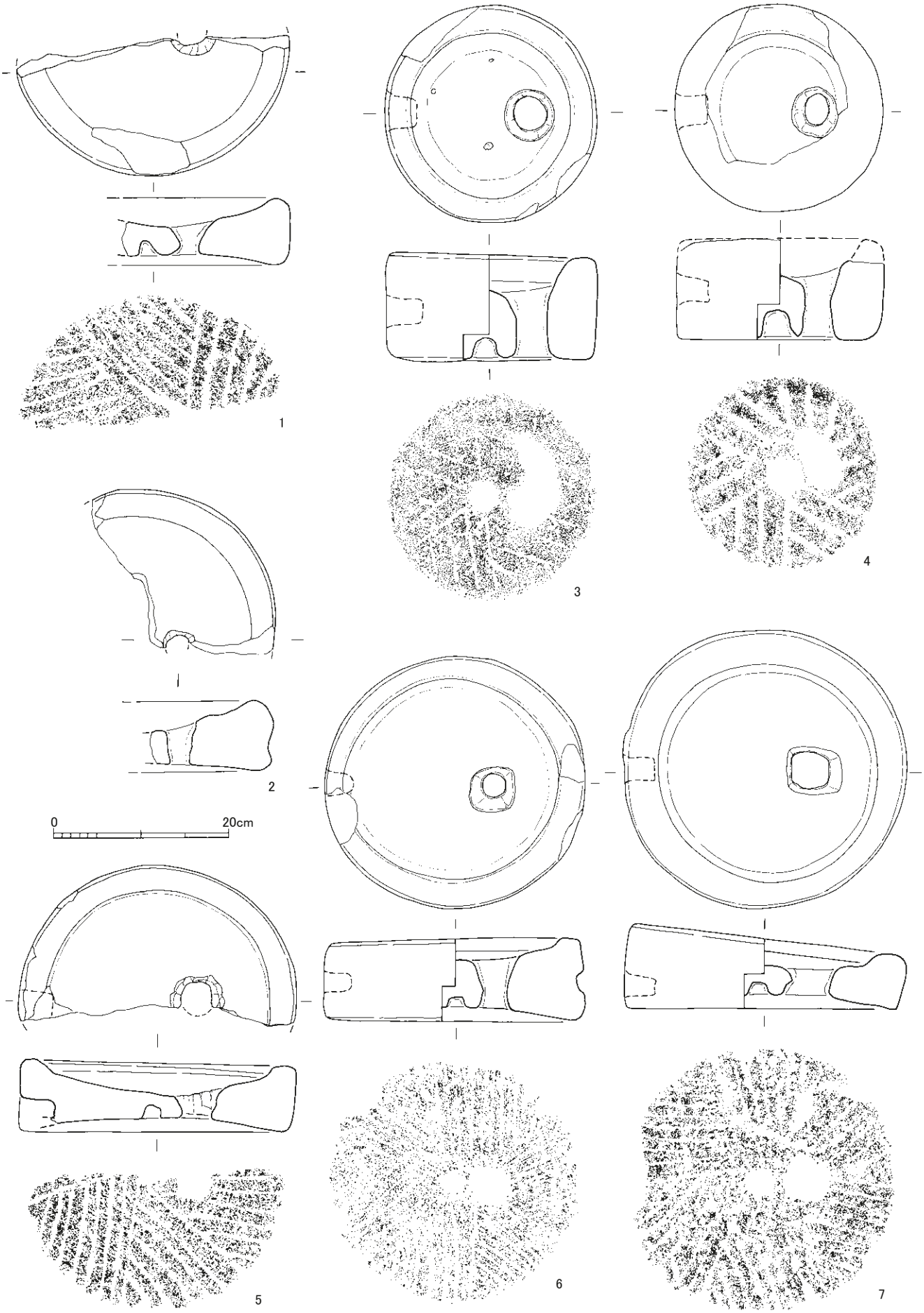


第128図　2次調査6～10区土製品実測図3（1/2）



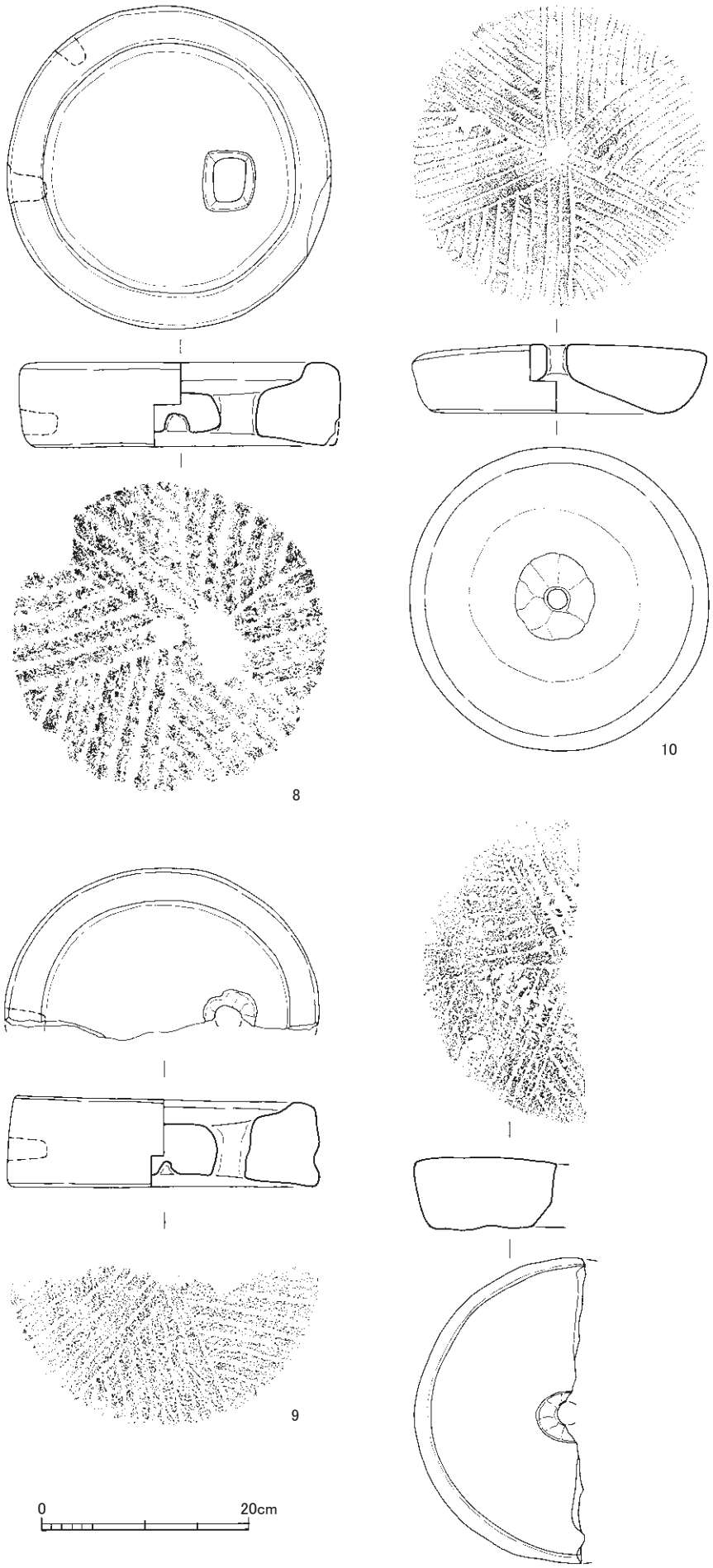
第129図　2次調査6～10区石塔実測図（1/6）

1	6区1面溝3	9	出土位置不明
2～4・15	9区2面遺構検出	10	7区1面
5・8	9区3面遺構検出	14	9区3面
6・11～13	7区2面	16	10区2面
7	9区2面		



1　6区1面溝3
2　6区1面溝4
3・4　10区1面遺構検出
5・7　9区2面遺構検出
6・9　7区2面遺構検出
8　10区2・3面排土
10　10区3面遺構検出
11　8区3面遺構検出

第130図　2次調査6～10区石臼実測図1（1/6）

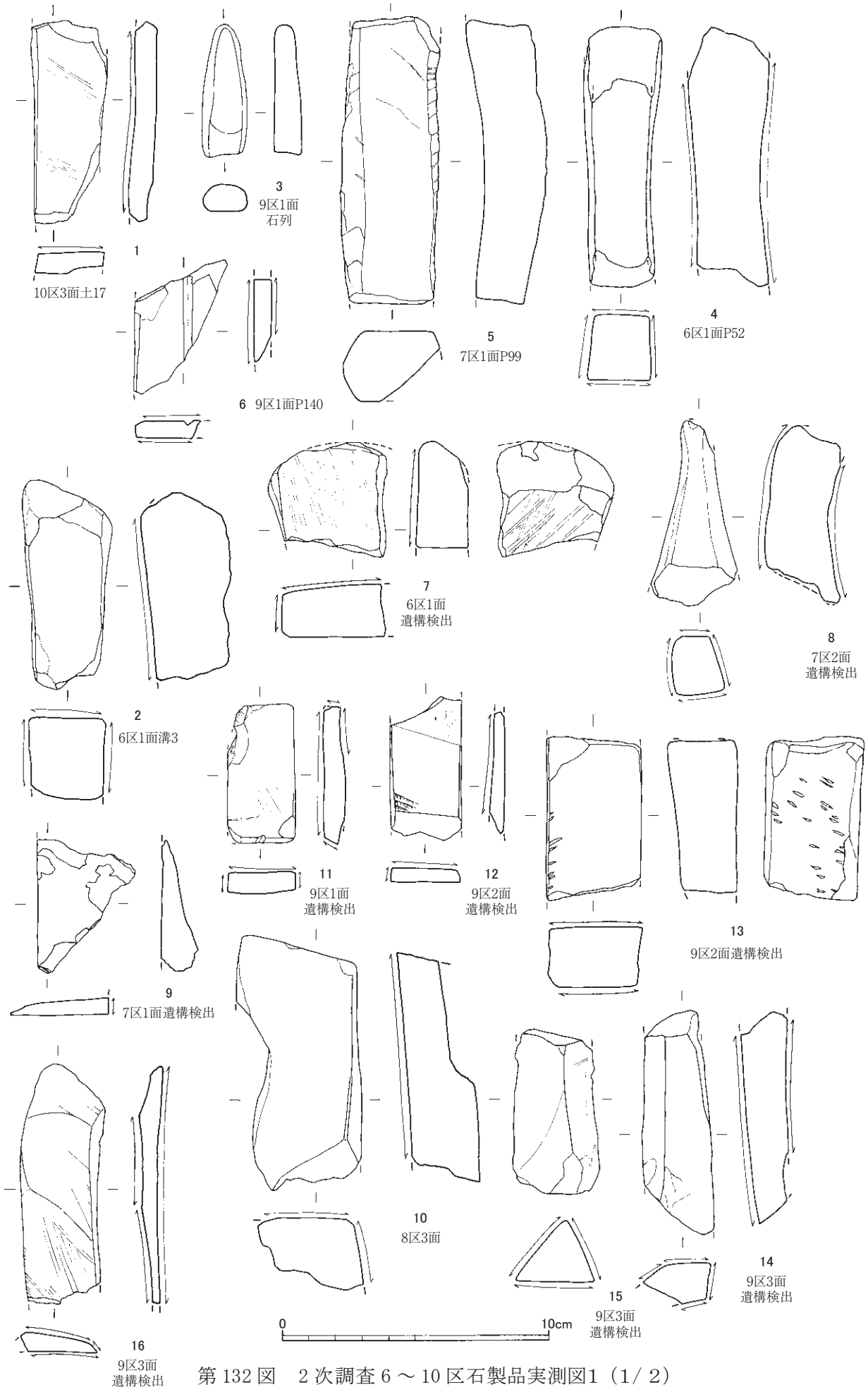


第 131 図　2 次調査 6 ～ 10 区石臼実測図2（1/ 3）

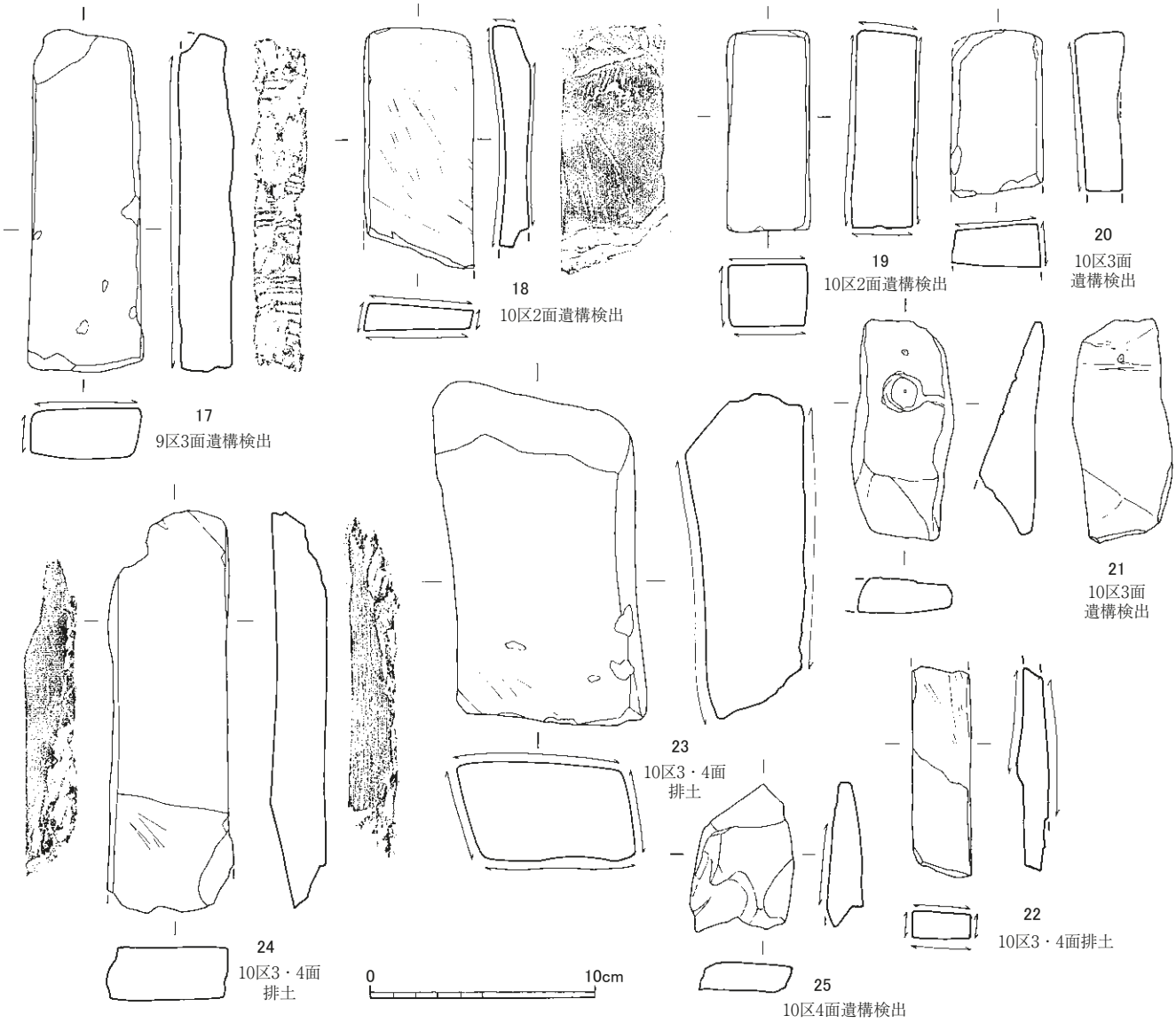
石製品（図版 48・49、第 129 ～ 133 図）

129 図は五輪塔・宝居印塔で、1 ～ 3 面の建物跡などの礎石として使用されている。1 は空風輪片で、完全な形である。2 は火輪片、3 ～ 5 は水輪である。2 の火輪は 4 隅と 3 の水輪は所々欠損する。3 は上下の判別が難しい。6 ～ 12 は宝篋印塔の部材である。6 と 7 は笠である。6 は中央と四隅を、7 も四隅と下部に彫り込みを入れる。8 は塔身で、上下に僅かにホゾを入れた鑿の痕跡がある。側面の中央には縦方向の 1 本線の掘り込みがある。接合部は欠損しているため、上下の判断は難しい。9 ～ 13 は宝篋印塔の基礎で、上部は 3 段構成で、風化などにより所々欠損する。9 のみ下部は平坦で、残り 10 ～ 13 は四脚になる。14 は近世墓の墓石か。片面は研がれているが、反対の面は粗く凹凸状である。墓誌銘の痕跡はない。15 は石塔に使われて部材片か。側面は打ち欠いている。16 も石塔などに使われた部材か。長方形状に作られ、片面は粗く削られている。いずれも凝灰岩製である。

130・131 図は石臼で、いずれも花崗岩である。3 ・ 6 ～ 9 は石臼の上臼の完形品である。10・11 は下臼になる。



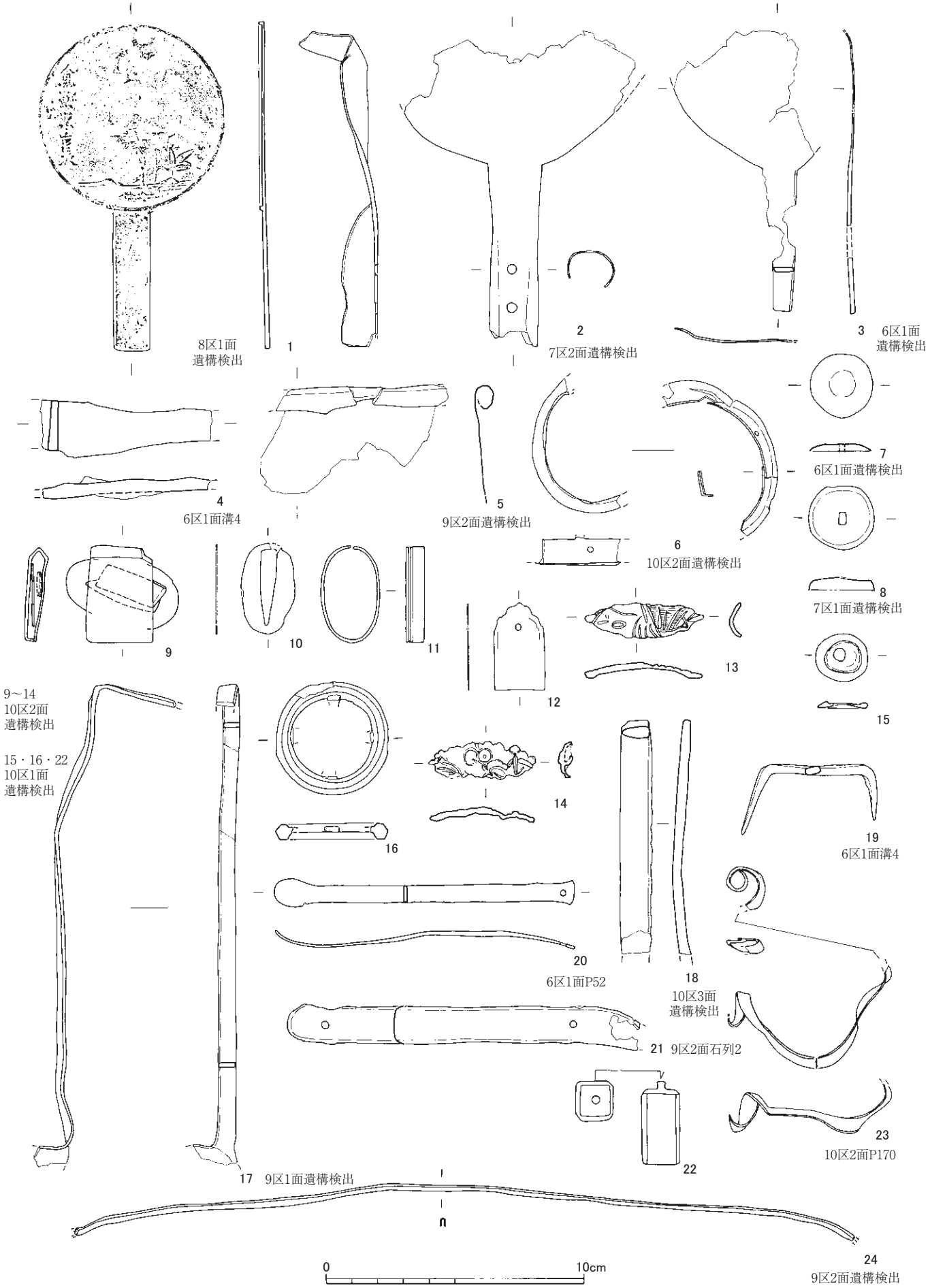
第 132 図　2 次調査 6 ～ 10 区石製品実測図1（1/ 2）



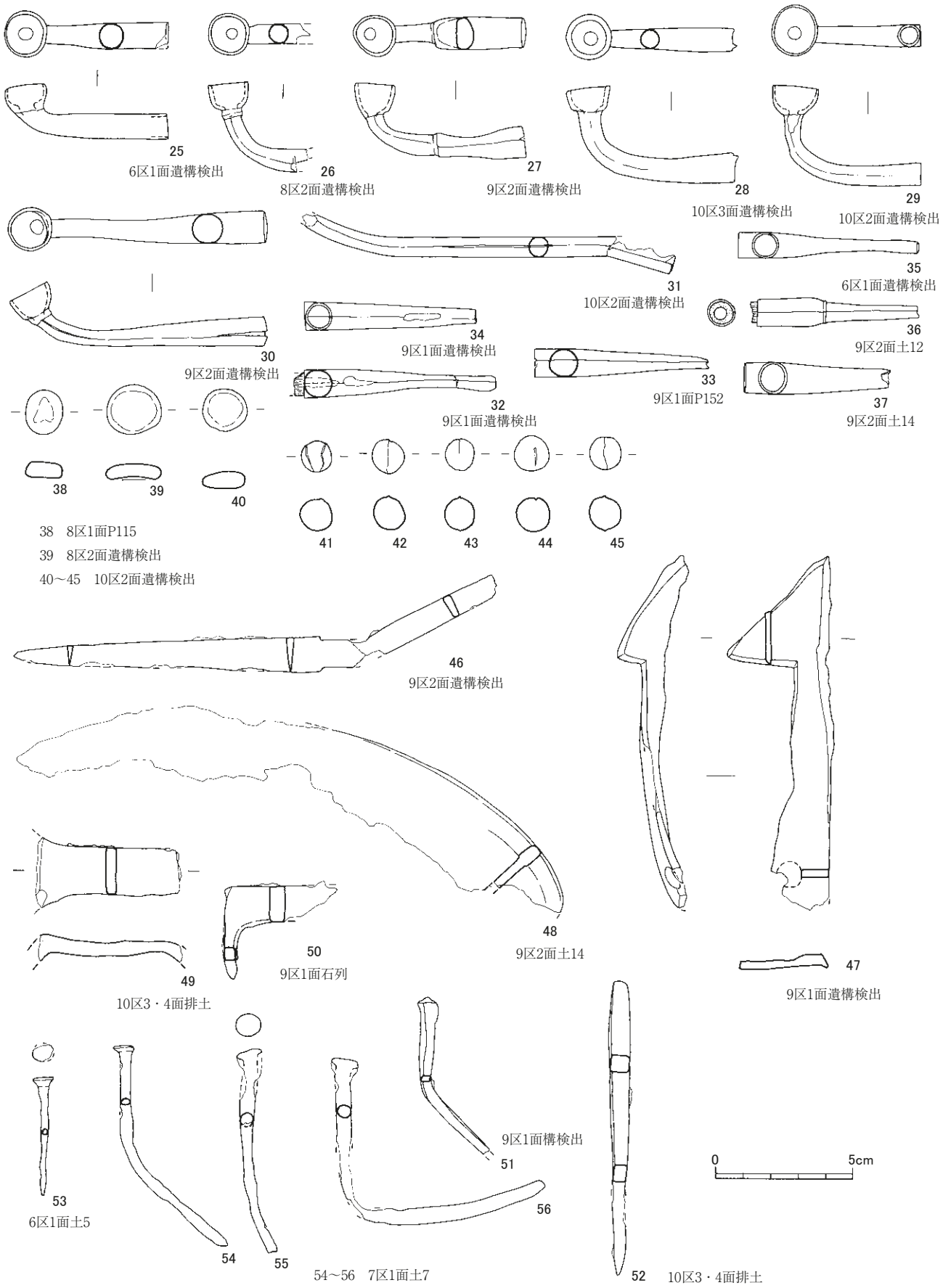
第133図　2次調査6～10区石製品実測図2（1/2）

３・４の供給口は円形、６・８は方形で区画された中に、両側から穿孔されている。また側面の挽手口は長方形状で、3・4で約３×４cm、6・7・8は方形で１辺約2.5cmを測る。上臼下面は１・３・４・６・８は６分画で、10の下臼上面も６分画になる。２・11は摩滅していて不明である。７はかなり使い込まれ、下面がすり減っている。８は被熱を受け、上面に煤が付着する

132・133図は砥石である。１・10・11・14・16・25は泥岩製で、１・25は上面のみ、10は２面使用し、使用後に風化して荒れている。11は背面が剥離、16は右側面が折損するが３面は使用か。２・４・７・８・15・17・20・21・24は石英斑岩製で、共に上部や側面は剥離する。２・７は工具痕があるが、３面使用する。４・８・24は４面使用する。15は断面三角形状で、３面使用する。17は右側面に敲打成形痕がある。20･21も２面使用し、21は円形状に深く刻まれた凹みがある。6・９・12・18・19・23・24は粘板岩製で、６は中央に深い線状に刻まれている。9は左側面、12は上部を使用する。18･19･23･24は４面を使用する。13は砂岩製で、左側面と背面に工具痕がある。



第134図　2次調査6～10区銅製品実測図1（1/2）



第 135 図　2 次調査 6 ～ 10 区銅製品2・鉄製品実測図（1/ 2）

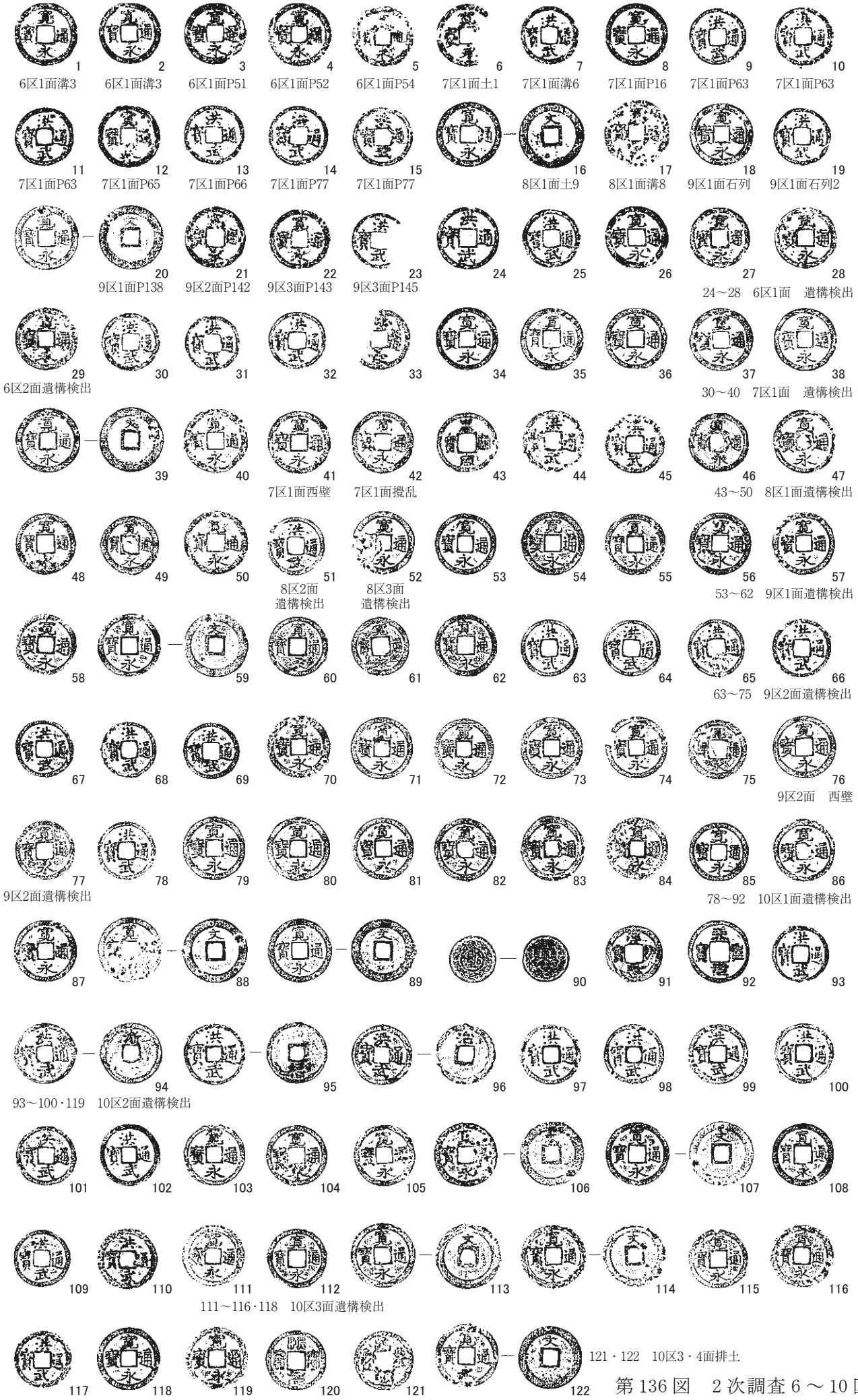
金属製品（第 134 ～ 136 図、図版 49 ～ 51）

134・135 図は銅製品である。１は鏡で、背面の模様の中には左縁に「人見」「重永」の文字と下部には鳥や笹が描かれる。２は木柄の挿仕込み口には円形の穴（径 4㎜）が２ヶ所開く。３は匙状銅製品で薄い板で浅い皿状になる。４は不整形で刃部はなく、銅地金か。５は上部に向かって折り込む容器片か。内面に煤状のものが付着する。６は筒型容器の同一個体片で、側面に孔が開く。７は鋲で、内面中央に釘の痕跡がある。８は１㎜以下の薄いボタン状の釘隠しか。９は刀装具（切羽、鎺、縁金具）の３点が重なったもので、右側が切先になる。10 は切羽、11 は縁金具で１㎜以下に狭く低い段をもつ。12 は飾り金具で、縁に沿うように沈線があり、中央には２㎜孔がある。金メッキを施した可能性がある。13 と 14 は目貫である。13 はエビの甲羅など、14 は橘を模したものか。15 は鋲が潰れたものか。16 は４方向に突起をもつ円形の輪で、黒色に変色していることから銅製ではない可能性がある。17 は上下で折れ曲がっているが、本来は直線で下端はスプーン状になる。18 は板状で、下部は鉄錆が付着する。19 は鋏である。20 は匙で、左側は浅いスプーン状で、右端に孔が開く。21 は、薄い板に別の金属を貼り付けたものか。22 は権で、上部に紐をもつ。重量 49.6 ｇを測る。23 は螺旋状なる銅板である。24 は薄い銅板を巻いた銅線である。25 ～ 31 は煙管雁首、32 ～ 37 は煙管吸い口である。26 は火皿と雁首が段になる。全体的に緑青であるが、27・34・36 は部分的に金色である。32・36 は木片が残る。31 は他とは比べて長いパイプ状である。37 ～ 39 は長円形、円形状の銅塊で重量 6.4、9.5、７ｇを測る。40 ～ 44 は銅弾で、径 1.1 ～ 1.3㎝、重さ 5.1 ～ 6.6 ｇを測る。45 ～ 56 は鉄製品である。45 は「く」の字形に錆びついた小刀である。錆膨れはないが、目釘穴はない。46 は銛で、先端は三角形であるが全体的に曲がっている。47 は鎌の刃部片であるが、状態が悪く刃は残っていない。48 は板状鉄鎌で、左側に幅広になる。49 は鋏で、片側は欠損する。50・51 は角釘で、51 は未使用か。52 ～ 55 は丸釘である。

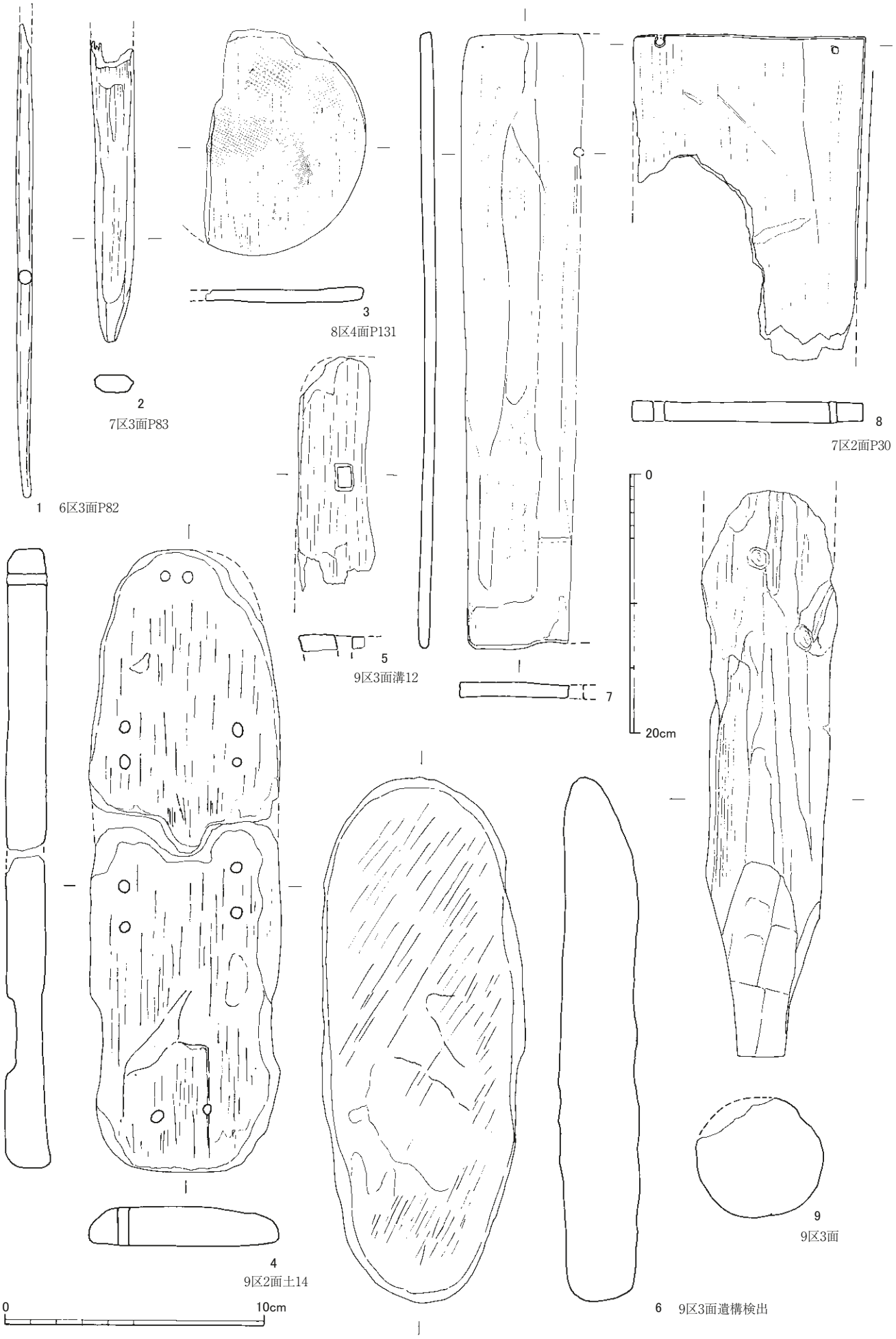
136 図は銅銭である。銅銭は全部で 236 枚出土するが、その中で残りが良い 122 枚を拓本している。銅銭は寛永通宝が最も多く、次に洪武通宝が出土する。１・２・５・16・17・39・40・42・49・50・60 ～ 62・75・77・108・115・116 は新寛永である。59・88・89・106・107・113・114・122 は文銭である。３・４・６・８・12・18・21・22・26 ～ 29・34 ～ 38・41・46 ～ 48・52 ～ 58・70 ～ 74・76・79 ～ 87・103 ～ 105・111・112・118・119 は古寛永である。７・９～ 11・13 ～ 15・19・23 ～ 25・30 ～ 32・44・45・51・63 ～ 69・78・96 ～ 102・109・110・117 は洪武通宝である。33 は慶長通寶である。43 は篆書体の皇宋通寶（北宋 1038 年初鋳）、44・106・146 は元豊通寶である。90 は大正５年発行の一銭である。91 は篆書体の祥符元豊（北宋 1039 年初鋳）で、92 は天聖元寶（北宋 1023 年初鋳）である。洪武通寶は大部分が無背であるが、94 は「浙」、95 は「福」、96 は「治」が背にある。120 は篆書体の熙寧元豊（北宋 1068 年初鋳）で、121 は行書体の元豊通寶（北宋 1078 年初鋳）である。

木製品（第 137 図、図版 52）

１は持ち手部分は欠損する箸か。先端部に向かって窄まっている。２は不明木製品で、先端を尖らせる。３・７は桶材か。３は表面に漆の痕跡が付着する。７は桶の横板で、目釘穴が僅かに残る。４～６下駄で、４は中央で２つに分かれ、目釘が６ヶ所ある。５は下駄片で、側面が僅かに残る。６は下駄の未製品か。８は板材で、目釘２ヶ所残る。９は杭材で、先端を尖らせている。10 は柱材で、



第136図　2次調査6～10区銅銭
実測図（1/2）



第137図　木製品実測図（9は1/ 4、他は1/ 3）

上部は腐れて折れているが、底面は平坦である。11 ～ 14 は柱材か。11 は２つに折れるが、先端から 40cm 程を整えている。8 区 4 面出土である。12 ～ 14 は 9 区①４面出土の柱材で、12・13 は 8 角形状で、先端から 20cm 前後を整えている。14 は６角形状で、先端から 40cm 程を削っている。

動物遺体

６～ 10 区ではではパレオ・ラボによる獣骨同定を行っている。１面では６区３号溝で哺乳綱、ハクジら亜目、ハタ科（大型）、Ｐ 57 では硬骨魚綱の骨片が出土する。２面では６区８号土坑で硬骨魚綱、７区Ｐ 31 でマグロ属、９区遺構検出でマグロ属、ニワトリ、トビ、マグロ属、10 区で硬骨魚綱が出土する。３面では９区遺構検出で鳥綱？が出土する。詳細についてはＰ 187 を参照して頂きたい。

おわりに

今回の保加町２次調査６～ 10 区については、遺構に伴う遺物を中心に掲載になっている。本来ならば、遺構検出時の遺物も掲載しなければならなかったが、諸条件によりそれがかなわなかった。しかし、昨年度報告の上町遺跡、1・3 次の保加町遺跡を参考にしていただければ、周辺の遺跡の内容はおおむね理解されると思われる。今後、柳川市内では開発が予定されており、新発見が出てくると思われる。不掲載の遺物については、別の機会に報告したい。

参考文献

大橋康二 1989『考古学ライブラリー 55　肥前陶磁』ニューサイエンス社

大橋康二 1994『古伊万里の文様』理工学社

九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年ー九州近世陶磁学会 10 周年記念ー』

櫻木晋一 2016『考古学調査ハンドブック 15　貨幣考古学の世界』ニューサイエンス社

現在の井出橋付近

5　３次調査の遺構と遺物

３次調査区は調査対象範囲の東側の最南東部で、保加町５－３、６－１・７・９番地である。橋梁工事に伴う仮設道路範囲に入っていたため、仮設道路が撤去される平成29年度を待って調査した。10月６日に重機を入れて、隣接する歩道設置工事と併行しながら調査を開始し、２次調査の調査成果から３～４枚の遺構面があることが想定された。着手するとすぐに北側に瓦溜まりが見つかり、同一面に柱状礎石が等間隔に検出されたが、裏込め出土遺物から昭和のものとわかったので、最上面は撤去することにし、次の面を第１遺構面とした。第１遺構面には北側に多くの礎石があったが、大型の廃棄土坑である１号土坑に廃棄されたものが多く、残った礎石のみで建物を復元することはできなかった。第２遺構面は第１遺構面から20㎝ほど下で検出されたが、調査期間が短いため重機で掘削することにした。この面からは多くの銅銭が出土している。また、南東壁側には南東落ち込みがあったが、これは大型の土坑である11号土坑の上位が窪んでいたものと考えられ、埋土は最上面の整地層であろう。第３遺構面は第２遺構面の下にカマド遺構が確認できた部分だけを重点的に調査し、そのほかは重機で第４遺構面を検出する際に礎石を残すにとどめたので、第２遺構面下層として図化している。第４遺構面は遺構面ではなく基盤層を出しながら調査した。多くのピットと杭が検出されたが、建物を復元できなかった。しかし、礎板を敷いたピット28や柱根が残るピット29があることから、掘立柱建物跡が存在していた可能性が高いが、調査区の幅が狭いため確認できなかった。南端に段落ちがあるが、これは沖端川に至る傾斜の始まりであり、自然地形の残りと考えられ、木質が多く残っていた。

隣接する工事の関係で中断する期間もあり、11月末の調査終了予定が12月６日の終了となった。調査面積は第１～３遺構面は約70㎡だが、第４遺構面は安全勾配を付ける必要から、さらに狭まり約50㎡となった。結果、調査面積は計約190㎡である。

遺構と遺物

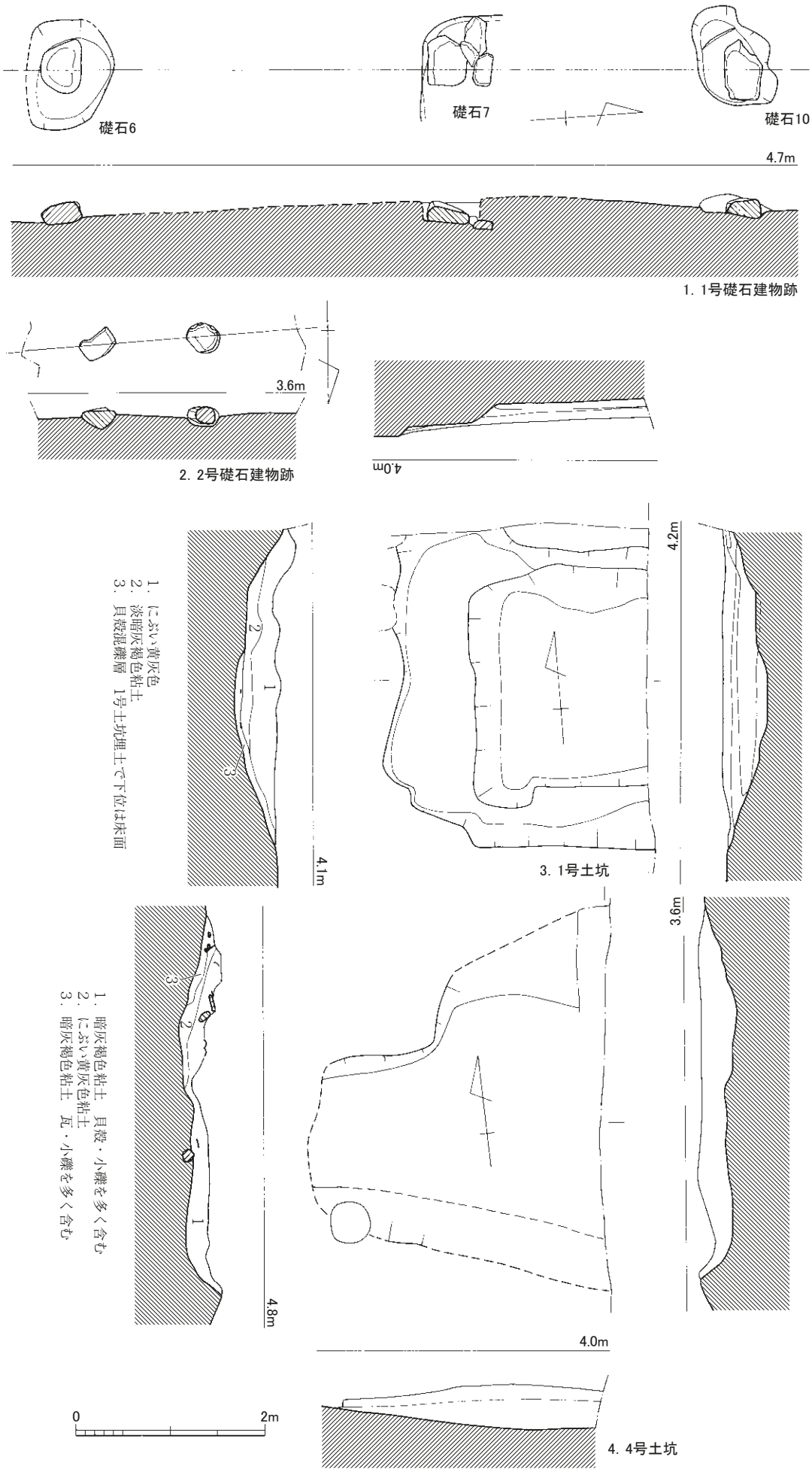
礎石建物跡

調査面積が狭いものの、礎石建物跡は２棟復元できた。礎石には番号を付けたので、建物を復元できない礎石出土の遺物も参考に掲載したのでここで報告する。

１号礎石建物跡（図版54、第138図）

標高4.3ｍの第２遺構面で検出された礎石建物跡で、礎石３つが検出されている。Ｎ－４′－Ｗを主軸とする２間の建物で、柱間が390cm・309㎝と不均一だが、東西に長軸方向を持つ60㎝前後の大型礎石はほかにないことから、復元可能である。東西両壁に対応する礎石が存在する可能性が高い。

中央の礎石６は９号土坑に隣接しており同時に施工された可能性が高い。９号土坑の石列は礎石６の根締石にしては片側のみなので、何か別の機能を有していたのだろう。この建物に伴う瓦の廃棄土坑は見つかっていないが、柱間が広いので瓦葺きではなかったかもしれない。



第138図　3次調査1・2号礎石建物跡、1・4号土坑実測図（1/60）

２号礎石建物跡（図版 54、第 138 図）

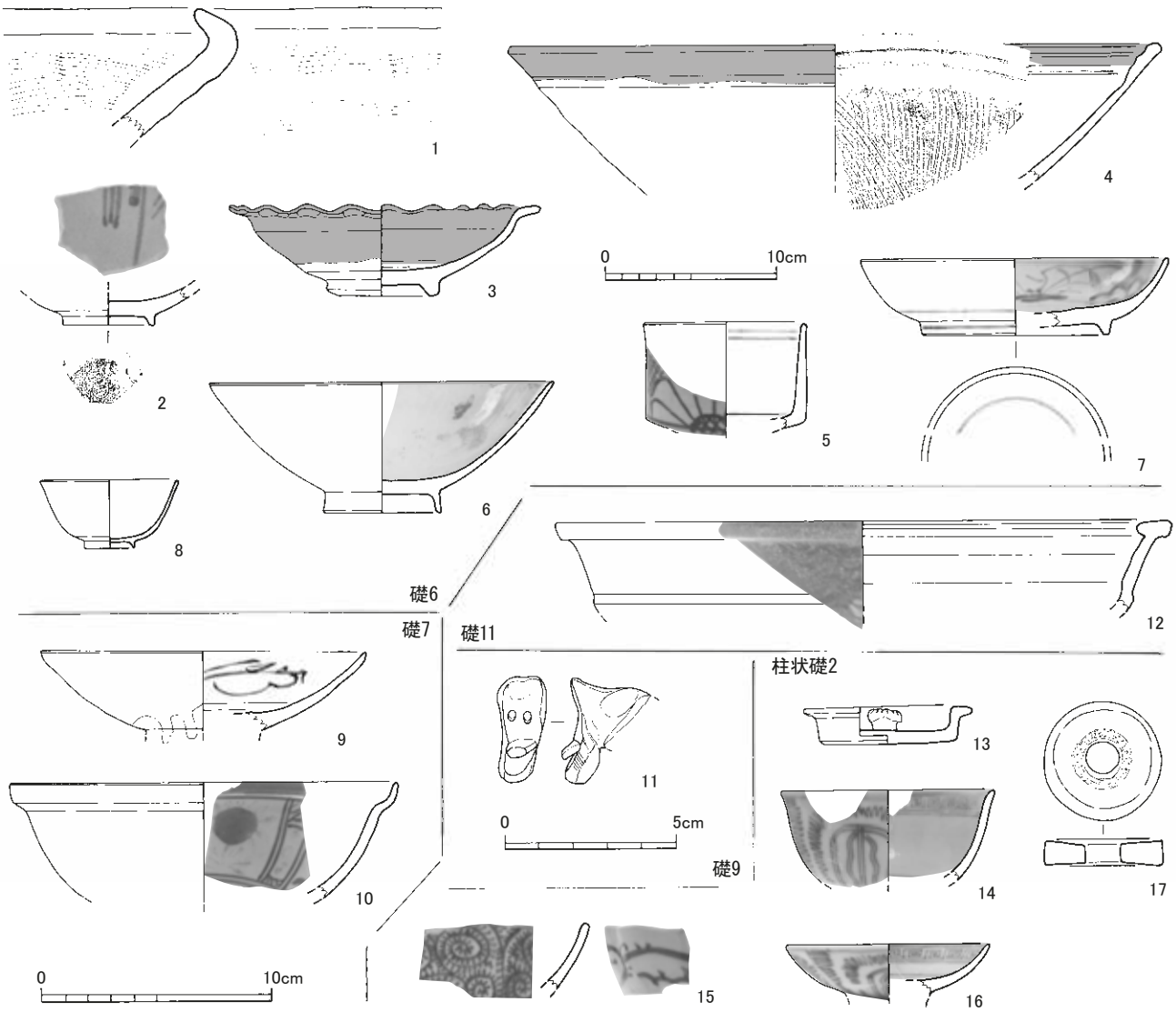
２号溝状遺構の石列の最下位に 40cmほどの平坦な石を礎石としており、２つの礎石だけが検出されている。N － 4° － Wを主軸とする２間以上の建物で、東西壁の外に延びるものと見られる。対応する礎石列も発見できなかったが、残っている礎石は掘り方も根締石も検出できず、４号土坑上位に埋め込まれているので、本来は存在しているが、掘り方を検出できなかったのかもしれない。礎石間は 110cmで狭い。図化できる遺物は出土していない。

礎石５出土遺物（第 160 図）

銅銭が３枚出土している。

礎石６出土遺物（図版 54、第 55 図）

第２遺構面の中央部から検出されたもので、ピットの中に扁平な石があったので、礎石というより掘立柱建物跡の敷石というべきだろう。敷石を撤去した下に土瓶が蓋をした状態で埋納されていたので、これを２号胞衣壺とした。蓋石とも考えられたが、ピット内から出土する遺物が豊富であることと、胞衣壺に蓋石をする事例がないこと、ピットの掘り方から胞衣壺の掘り方がずれている



第 139 図　３次調査礎石出土遺物実測図（4は 1/4、他は 1/3）

ことなどを考え合わせると、礎石の下に胞衣壺を埋納したもので、柱が腐食したところに遺物が入り込んだと考えるべきだろう。掘り方は長軸 37cm、短軸 35cm、深さ 28cmで、礎石は 1 辺 20cmほどの扁平な板材である。胞衣壺については別項で報告する。

出土遺物（図版 63、第 139 図）

第 139 図 2 は京焼風肥前陶器で、外底に円の刻印が入る。

柱状礎石２

柱状礎石は砂岩製の断面方形の石柱で、複数の礎石の上に架けるのではなく、遺構面に埋めるもので、軟質土壌での沈み込み防止を目的とした工法である。ほかの柱状礎石は掘り方が浅く砂礫が入っており、遺物もほとんど入っていなかったが、本遺構の掘り方には多くの出土遺物があった。このうち、大正 11 年銘の一銭銅貨があるので、大正 11 年以降の建設だろう。

出土遺物（図版 62、第 139 図）

第 139 図 14・16 は掘り方出土の肥前産染付碗と蓋のセットである。

土坑

２号土坑は検出を続けた結果、溝状遺構とするべき広がりをもったので、2 号溝状遺構として欠番にした。３号土坑は包含層だったので、欠番とした。8 号土坑は調査区北西隅から検出されたが、土層の観察から整地層の 1 つと判断されたので、整理段階で包含層にし、欠番とした。

１号土坑（図版 55、第 138 図）

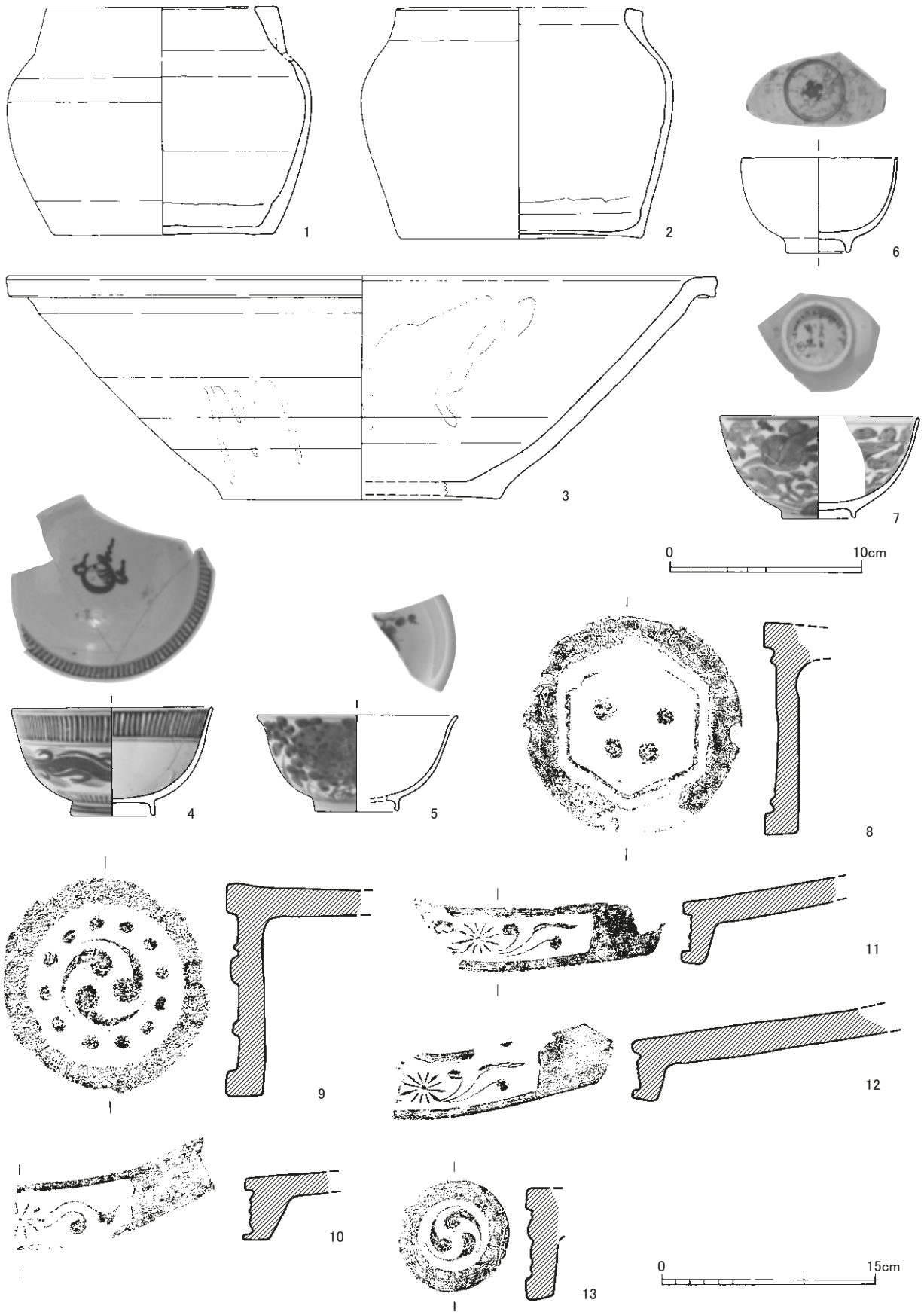
第 1 遺構面の北端で検出された不整形プランの土坑である。長軸 340cm以上、短軸 282cm以上で、深さ 80cmほどで、壁は緩やかな傾斜である。約半分が東壁から調査区外に入っているので、主軸方位や規模が分からない。廃棄土坑のようだが、出土遺物は少なく、床面には貝殻と小礫でザラザラした薄い層が堆積している。完全に埋没した後に瓦溜まりに上位を切られる。出土遺物からは時期を特定できないが、最上位の遺構面の礎石掘り方を切ることから大正から昭和初期のものであろう。

出土遺物（図版 60・61・63、第 140・141・160・163 図）

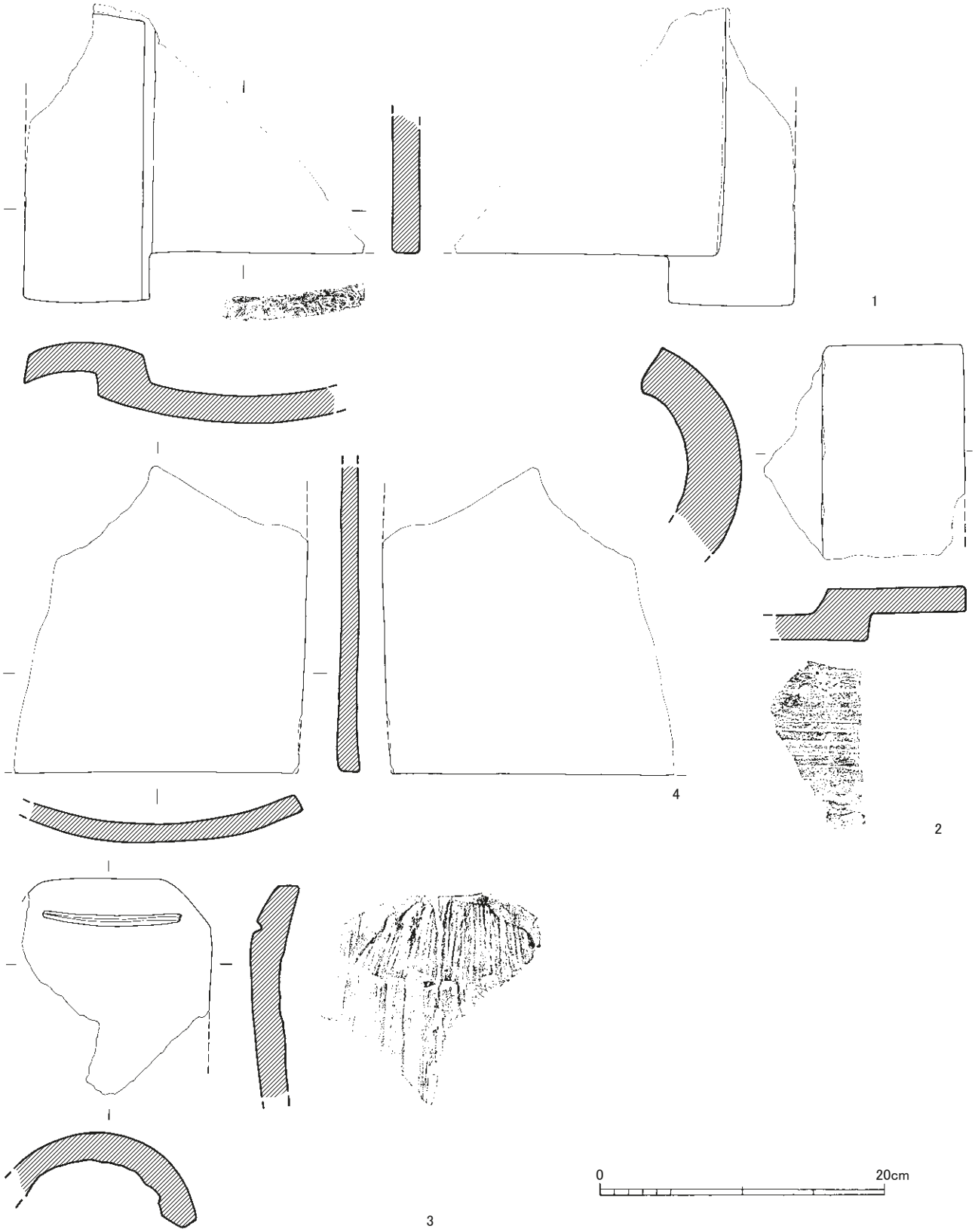
第 140 図 1・2 は土師質土器の鉢で同じ形のものである、火消壺に多い形態だが使用痕がないので火消壺としては使用してない。胎土に金雲母が目立つ。第 140 図 8 の軒丸瓦の文様は柳川地区の調査事例では見られないので、近代のものだろう。軒平瓦も近代に多い星文を主文としている。

４号土坑（図版 55、第 138 図）

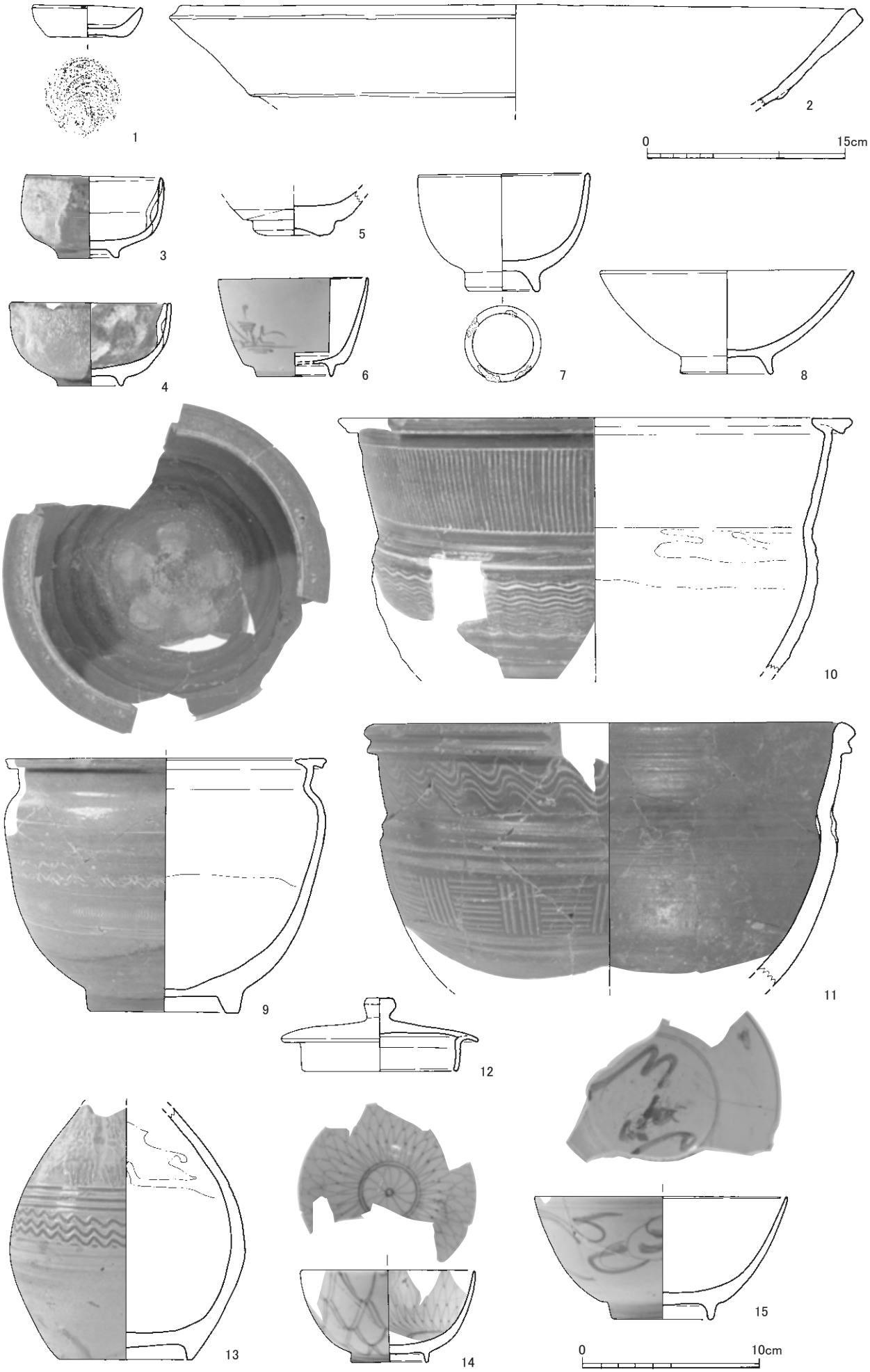
第 2 遺構面の北端で検出された不整形プランの土坑である。長軸 290cm以上、短軸 396cmで、深さ 44cmを測る。床面はほぼ平坦で、北側の壁は立ち上がりが緩やかで、プランは不鮮明である。約半分が東壁から調査区外に入っているので、主軸方向は分からない。出土遺物が多いことから廃棄土坑と見られ、上位を 1 号溝状遺構に切られている。出土遺物から 18 世紀中葉である。第 163 図 16 の金銅製スプーンは近代のものではないか。



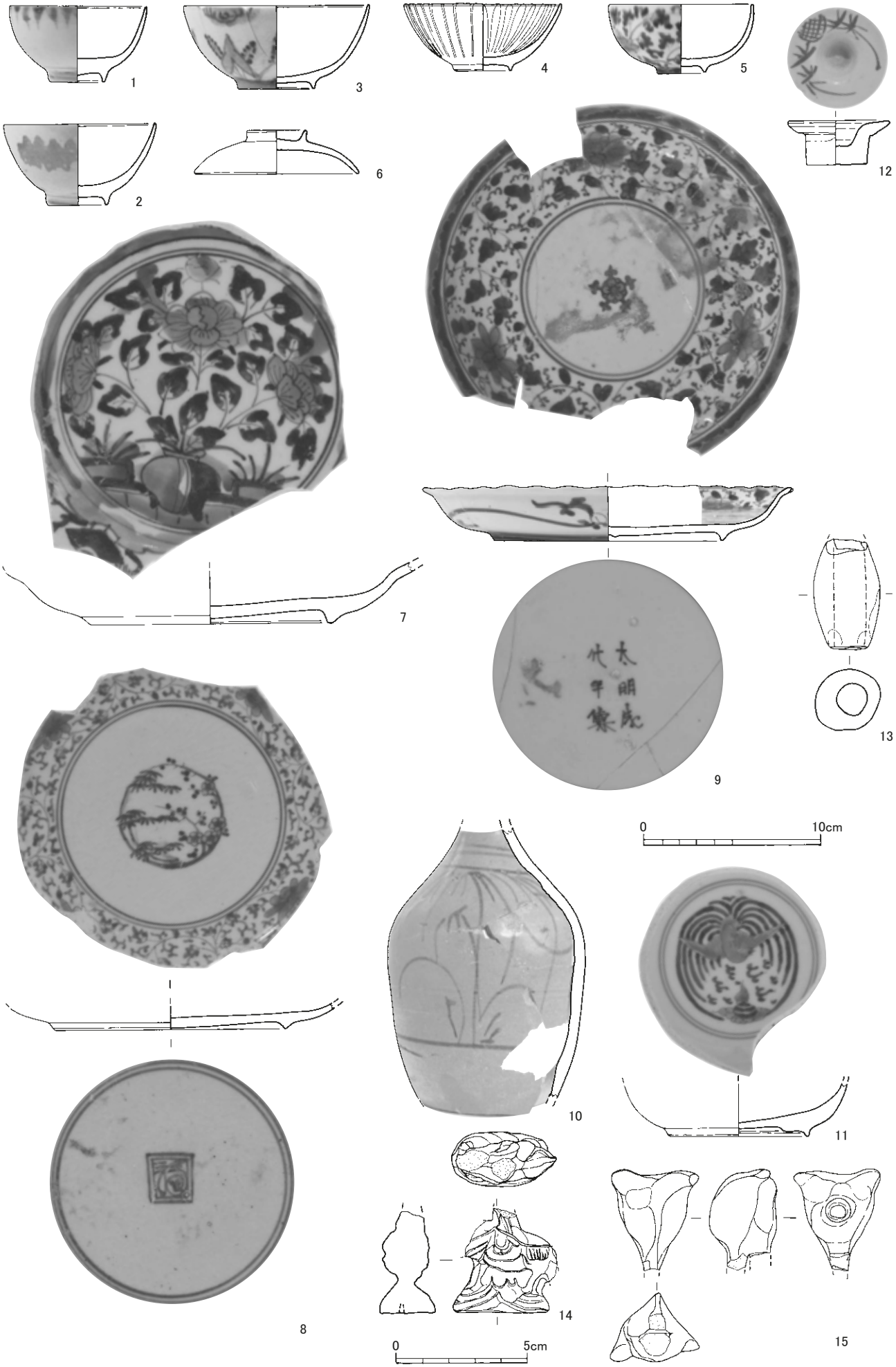
第 140 図　3次調査1号土坑出土遺物実測図1（3・8 ～ 13 は 1/4、他は 1/3）



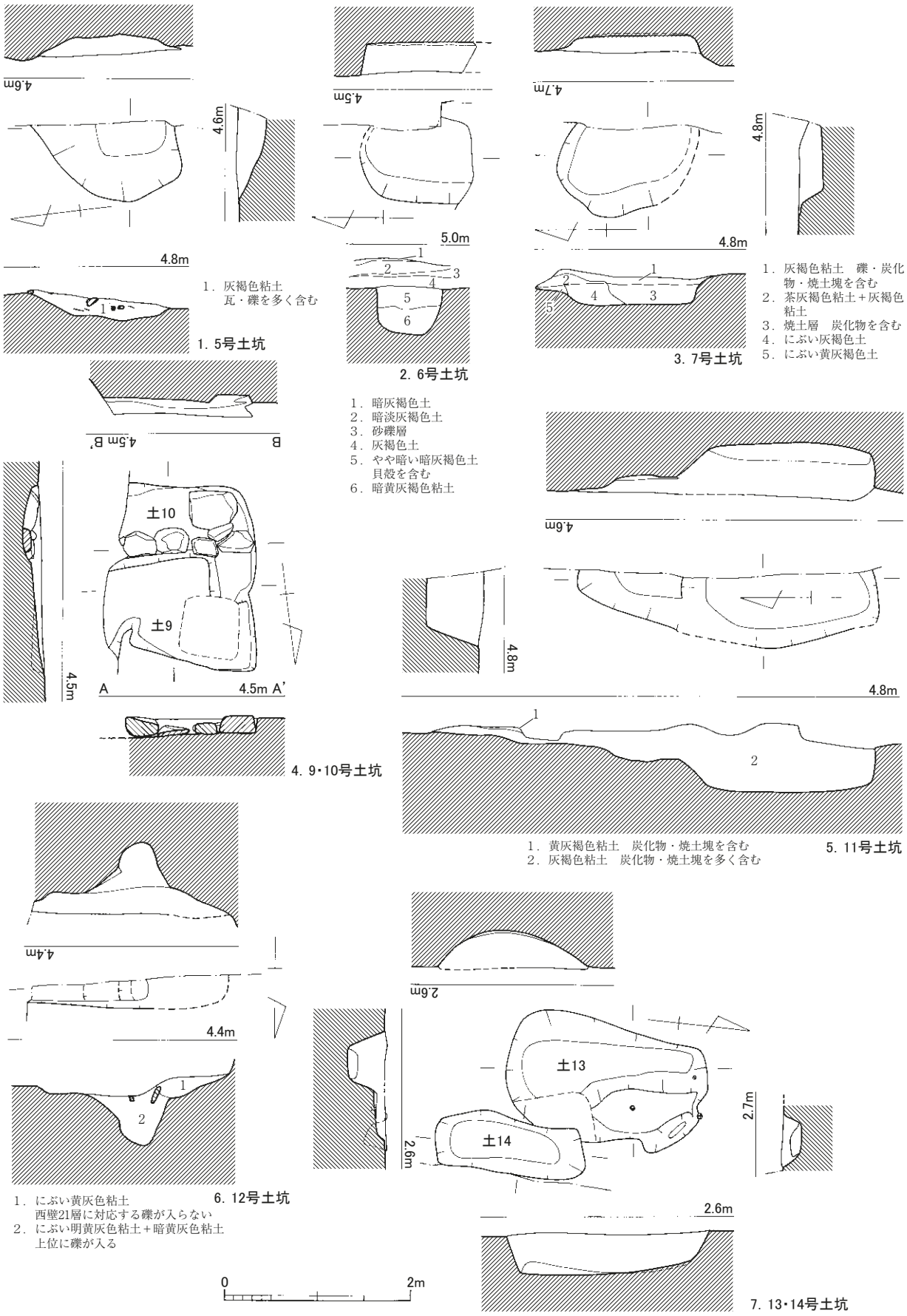
第 141 図　3次調査1号土坑出土遺物実測図2（1/4）



第142図　3次調査4号土坑出土遺物実測図1（2・9・10は1/4、他は1/3）



第143図　3次調査4号土坑出土遺物実測図2（12～15は1/2、他は1/3）



第144図　3次調査土坑実測図（1/60）

出土遺物（図版 60 ～ 62、第 142・143・161・163 図）

第 142 図２は土師質土器の焙烙で、外面は煤が付着するが口唇部は煤付着がない。木蓋を使用するためか。第 142 図５は陶器の天目埦で、瀬戸焼を模倣したもののようだが、肥前陶器にしては器壁が厚い。第 143 図 15 は土人形の動物の頭部で、下面の穿孔は焼成のためだろう。

５号土坑（図版 56、第 144 図）

第１遺構面の北側から検出された不整形プランの土坑で、上位は整地層が被っているので掘り込み面は標高 4.5　ち上がりが緩やかだが、西壁は床面まで達していない。半分以上が東壁から調査区外に入っているので、主軸方向は分からない。出土遺物が多いことから廃棄土坑と見られる。広東碗や湯飲み、輪花五寸皿が含まれることから、19 世紀前葉であろう。

出土遺物（図版 61・63・64、第 145・160・163 図）

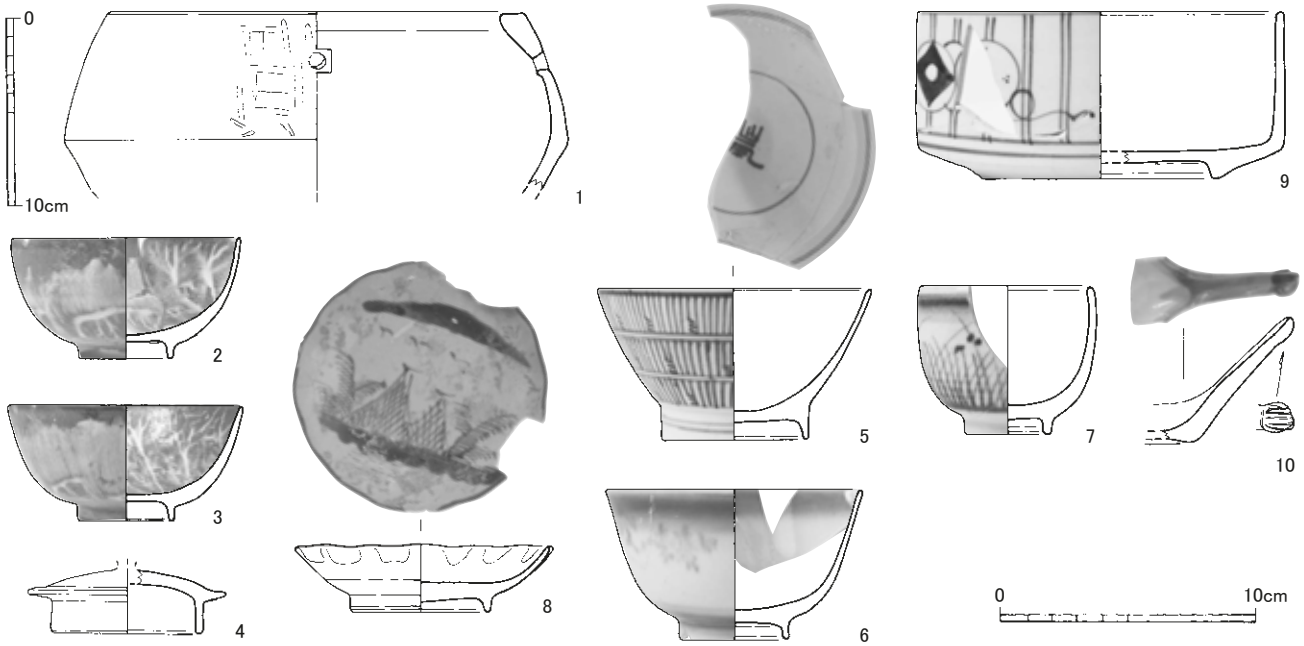
第 145 図２・３は三川内焼の埦の揃いである。第 145 図６は染付碗で１面整地層出土の蓋とセットである。第 163 図 22 は刃がない板状の鉄製品で、インゴットだろうか。

６号土坑（第 144 図）

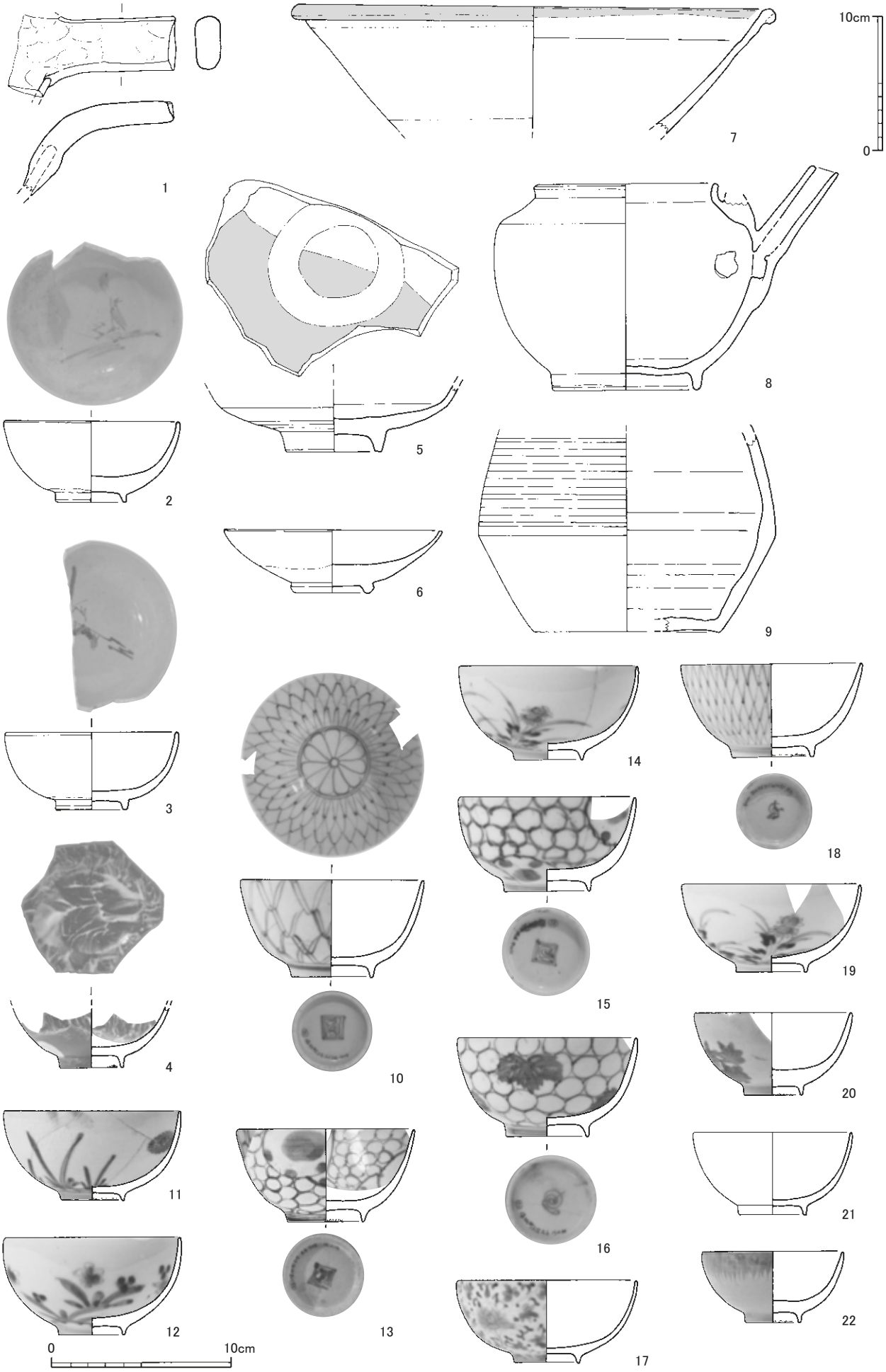
第２遺構面の北側から検出された平面略方形プランの土坑で、西壁際で検出された。規模は長軸 128㎝、短軸 99㎝と小さいことが、深さ 52㎝で、壁の立ち上がりが急である。主軸方向はほぼ真北で、小型ながら出土遺物が多く、予想に反して底面付近まで遺物が多く入っていたので、便宜上下位出土を別に取り上げたが、一括廃棄とみてよい。小型の廃棄土坑といえる。出土遺物から、18 世紀前～中葉に属する。

出土遺物（図版 61・64、第 146・147・163 図）

第 146 図９は陶器の壺で、釉薬が発色していないので釉の種類は不明。第 147 図７は坩堝で、内面に銅滓が付着している。第 163 図 21 は錠前で、蔵に使うものだろうか。対応する鍵は発見されていない。



第 145 図　３次調査５号土坑出土遺物実測図（1 は 1/4、他は 1/3）



第146図　3次調査6号土坑出土遺物実測図（7は1/4、他は1/3）

７号土坑（第 144 図）

第２遺構面の中央部から検出された平面不整プランの土坑で、東壁際で検出された。南側の壁が不鮮明だったので掘りすぎてしまったが、土層から見ると規模は長軸 158cm、短軸 110cmと小さいことが、深さ 25cmで、壁の立ち上がりが急である。主軸方向はＮ－ 15′ 30′ －Ｗで、下位層に炭化物と焼土層が厚く堆積しており、焼けた陶磁器は出土せずに坩堝があるので、鋳造に使用した焼土や炭化物を廃棄したものだろう。

遺物が少なく時期が特定しにくいが、18 世紀前葉から中葉だろう。

出土遺物（図版 61・64、第 147・160・162 図）

第 162 図 1 は天草石の大型砥石で、全面赤化しているので火を受けている。第 163 図 21 は錠前で、蔵に使うものだろうか。対応する鍵は発見されていない。

このほか、カキ類の大きな貝殻が出ている。

９号土坑（第 144 図）

第２遺構面の中央部から検出された平面略方形プランの土坑で、10 号土坑を切る。東側は 11 号土坑に切られているので、全容はわからないが、規模は長軸 176cm以上、短軸 132cmを測る。深さは 18cmしかないが、壁の立ち上がりが急である。主軸方向はＮ－ 84° 20′ －Ｗで、出土遺物に銅緑釉陶器埦があるので 18 世紀前葉なので、第２遺構面の最古段階のものだろう。

出土遺物（第 148 図）

第 148 図 2 は肥前陶器で、外面は銅緑釉、内面は灰白色の灰釉がかかる。

10 号土坑（第 144 図）

第２遺構面の中央部から検出された平面略方形プランの土坑で、９号土坑に切られる。東側は 11 号土坑に切られているので、全容はわからないが、規模は長軸 145cm以上、短軸 106cm以上を測る。深さは 20cmしかないが、壁の立ち上がりが急である。2 側面が失われているので主軸方位はわからない。埋土や出土遺物に特徴は見られなかった。

４つの扁平な石が並ぶ石列が中央に配置されており、その石に接して 1 号礎石建物跡の礎石７があるが、切り合いがないので、同時に設置したものと見られる。石列は高さ 20cm、幅 28cmほどで、上面の高さは揃っていないので石場立ての建物の基礎の一部ではない。

出土遺物が少なく時期を特定しにくいが、見込みに胎土目のある皿があることから、第 2 遺構面の最古段階の 18 世紀前葉のもので、洪武通宝が出土している。1 号礎石建物跡と併存したものだろう。

出土遺物（図版 61、第 148・160 図）

第 160 図 13・14 は洪武通宝である。13 は摩耗した小型品。

11 号土坑（図版 56、第 144 図）

第２遺構面の中央部東壁沿いで検出された平面略方形プランだが、土層から見ると第 1 遺構面から掘り込まれて検出段階で長軸 330cmだが、土層上では 400cmを測る。大型の土坑だったため床面が大きく落ち込む段階でしか検出できなかった。東側が東壁から出るため、全容はわからないが、

短軸は79cm以上を測る。深さも土層からは72cmあり、南の壁の立ち上がりは急であった。検出された幅が狭いので主軸方位はわからない。埋土に炭化物や焼土が多く含まれ、一挙に埋められているので短期間に利用された廃棄土坑だろう。

４つの扁平な石が並ぶ石列が中央に配置されており、その石に接して１号礎石建物跡の礎出土遺物から18世紀初頭から前葉のもので、１号礎石建物跡と併存したものだろう。

出土遺物（図版64、第148・162・163図）

第162図３は天草石の手持ち砥石である。第163図25はせっぱ釘で、板壁に使われたものだろうか。

12号土坑（図版57、第144図）

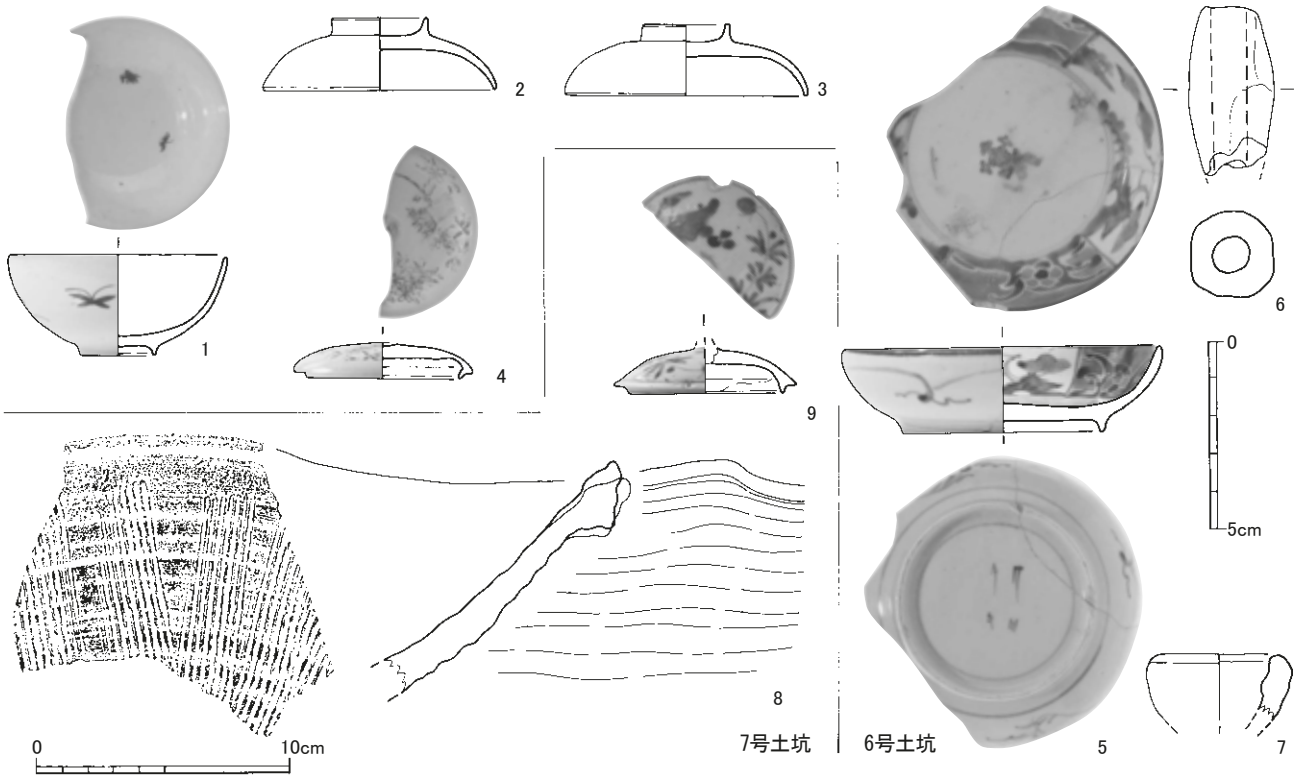
第２遺構面の南東隅で検出された平面略方形プランと見られる土坑だが、土層から見ると中央が窪む摺鉢状の遺構で、径94cm、深さ50cmで、上位に小礫が多く含まれた。埋土は西から流れ込むように堆積しているので、橋梁へスロープ建設時に埋められたものだろう。出土遺物が少なく、時期を特定できない。

出土遺物（第148図）

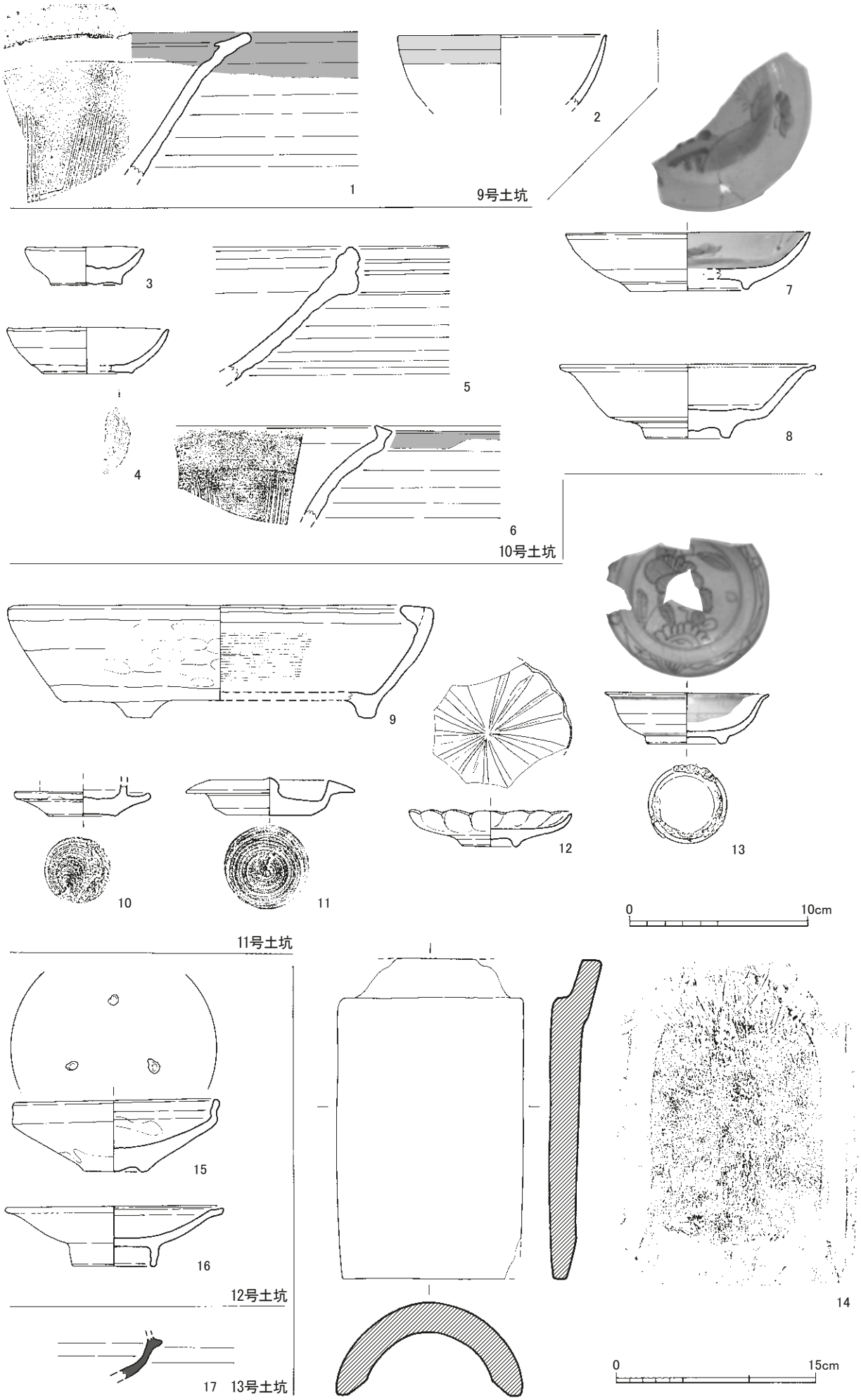
第148図15・16は陶器の小皿で、15は見込みにはひっつきがつく。

13号土坑（図版57、第144図）

第４遺構面の北側で検出された平面略長方形プランの土坑で、14号土坑に切られる。主軸方向はほぼ真北である。長軸216cm、短軸132cm、南西側が深く、深さ44cmを測る。北側には小杭が入っていたが、本遺構に伴うものかわからない。埋土は粘土で、グライ化しているので、ほぼ青灰色だった。出土遺物が少なく、時期を特定できない。



第147図　３次調査６・７号土坑出土遺物実測図（6は1/2、他は1/3）



第 148 図　3次調査 9 ～ 13 号土坑出土遺物実測図（9・14 は 1/4、他は 1/3）

出土遺物（第 148 図）

第 148 図 17 は須恵器の杯片で、6 世紀後葉のものの混入だろう。

14 号土坑（図版 57、第 144 図）

第 4 遺構面の北側で検出された平面略長方形プランの土坑で、13 号土坑を切る。主軸方向はほぼ真北である。長軸 133㎝、短軸 65㎝の長方形で、床面はほぼ平坦で、壁の立ち上がりの急なので土壙墓のような形状である。深さ 42㎝を測り、埋土は粘土で、グライ化しているので、ほぼ青灰色だった。出土遺物がなく、時期を特定できない。

カマド・窯跡遺構

当初はすべてカマドとしていたが､掘り進めるとカマドとは異なる構造をしたものがあったため、カマドと判明した 1･4 ～ 7 の番号を残し、カマド２は１号窯跡に、カマド３は２号窯跡に変更した。

１号カマド（図版 59 、第 150 図）

第３遺構面から検出されたカマドで、赤く焼けた範囲が広いことから炉跡としていたが、掘り進めると、東西壁に側石が立つカマドであることがわかった。南壁に比べて北壁の立ち上がりが緩やかなので、南壁が奥壁、北側が焚口とわかる。側石は立った状態で残っており、その下位は火床面よりやや下程度であり、掘り方の中に据えているのではなく、粘土で固められていた。長軸 192㎝、短軸 158㎝で、深さ 38㎝でほぼ完存していると見られる。火床は良く焼けており、奥壁の下位は焼けていない。西側は壁が焼けているが側石が赤化していないのは石材の種類によるかもしれない。本遺構の下から 6・7 号カマドが検出されたが、主軸方位が同じく真北の 7 号カマドは 1 号カマドの造り替えで、4 号カマドとは２連カマドを構成していただろう。

遺物は少ないが、京焼風陶器埦が出土しているので 18 世紀中葉だろう。

出土遺物（第 149 図）

5 は京焼風陶器埦で、鉄絵は見られない。

４号カマド（第 150 図）

第３遺構面から検出されたカマドで、11 号土坑の壁面に焼土が見つかったことから検出できた。11 号土坑に東半分と北辺を大きく削られているが、西側の側石は立った状態で残っていた。焚口は残っていないため、長軸 120㎝以上、短軸 120㎝以上で、深さ 36㎝以上の規模ということしかいえない。火床は良く焼けており、奥壁の下位は焼けていない。西側は壁が焼けているが側石が赤化していないのは石材の種類によるかもしれない。側石の下位は火床よりも高いので、掘り方は残っていない。粘土で固定したのだろう。本遺構の下から５号カマドが検出された。1 号カマドとは掘り込み面が同一面と見られ、主軸方位が真北と等しいので２連カマドであろう。

第 149 図 7･9 の染付の文様は 17 世紀的な様相なので､17 世紀後葉から 18 世紀初頭のものだろう。

出土遺物（第 149 図）

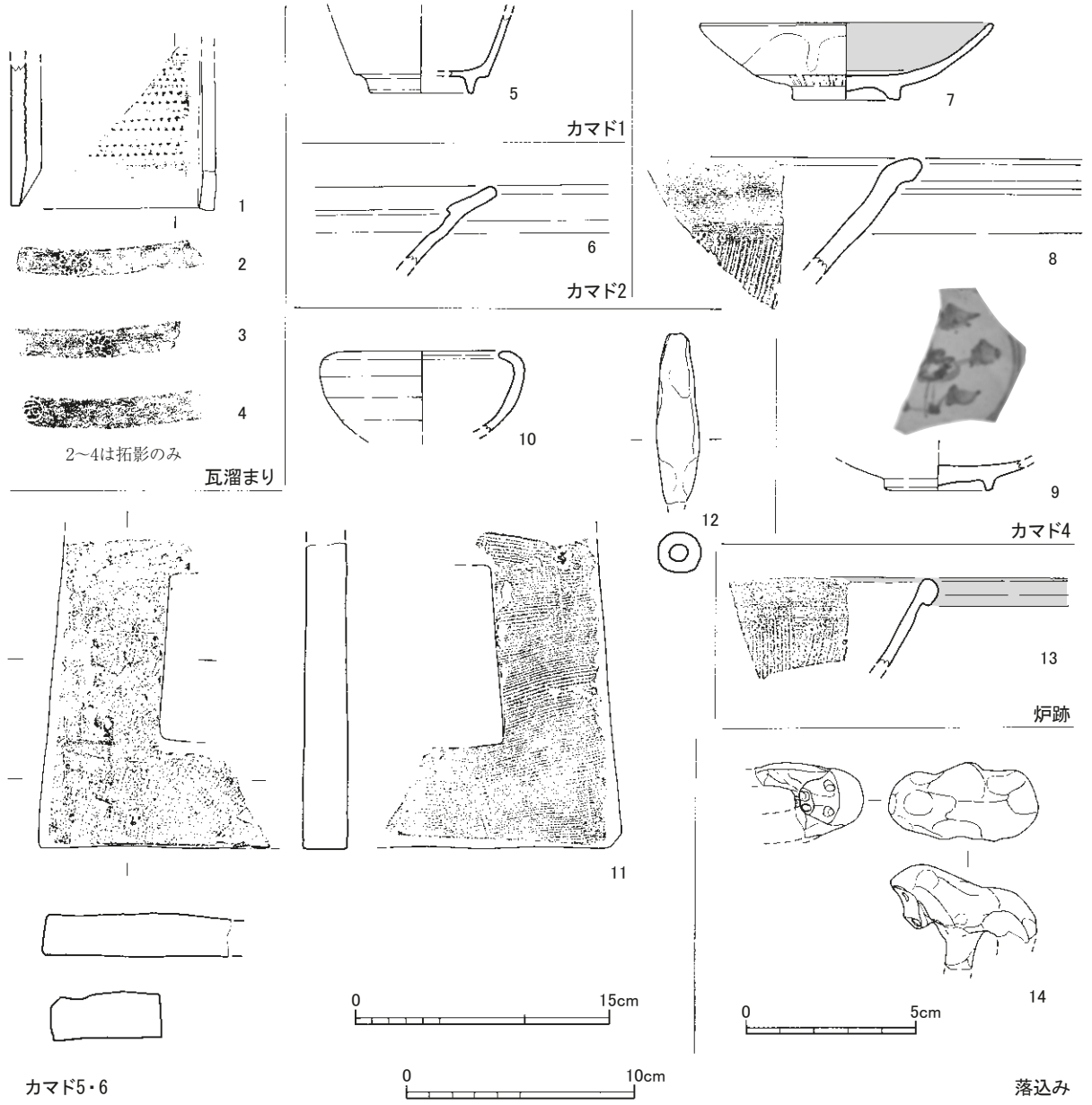
第 149 図 7 の染付碗の畳み付けには胎土目が付着する。

５号カマド（図版 59 、第 150 図）

第３遺構面から検出されたカマドで、４号カマドの下から検出された。４号カマドの建て替え時に側石は抜き取られたと見られ、東西辺が突出している。長軸 180cm、短軸 147cmで、火床面まで 62cmを測る。そのため、長軸 120cm以上、短軸 120cm以上で、深さ 36cm以上の規模ということしかいえない。火床は良く焼けており、黒く硬化している。焚口部分は被熱を受けてないため掘りすぎている。奥壁の下位は被熱が弱いが、それ以外は赤黒く焼けており、火を強く受けたことがわかる。西側は側石の抜き取り穴には破砕礫が入っていたが、据えるための根締石かもしれない。5・6 号カマドと同一面で検出されており、主軸方向はＮ － 1°30′ － Ｗで、６号カマドとは主軸方位も同じなので、２連カマドの１つだったのだろう。

６号カマド（図版 59、第 150 図）

第３遺構面から検出されたカマドで、１号カマドの下から検出され、7 号カマドを切っている。長軸 214cm、短軸 127cmで、火床面まで 73cmを測る。８号カマドの建て替え時に側石は抜き取られ



第 149 図　3次調査瓦溜まり・カマド・窯跡・落ち込み出土遺物
実測図（2 ～ 4・11 は 1/4、12・14 は 1/2、他は 1/3）

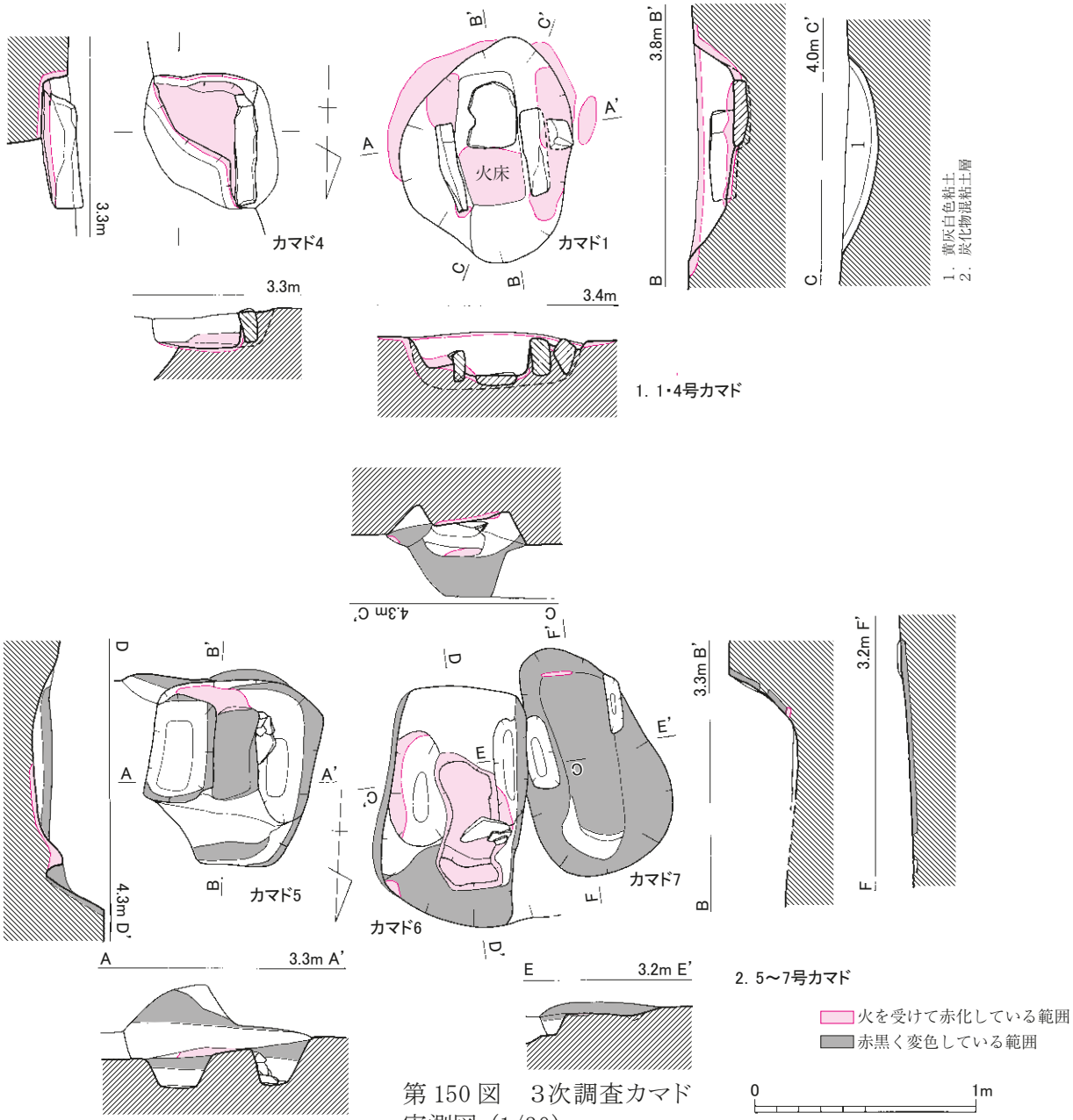
たと見られ、残っておらず、火床の西辺が掘り崩されている。西壁に板石が残っていたが、抜き取り時に割れた破片かもしれない。火床は焼けており、南壁を除いて黒く変色している。南壁は緩やかに立ち上がることから火熱を受けた部分は失われたものと見られる。焚口は被熱を受けてないため掘りすぎている。奥壁の下位は被熱が弱いが、それ以外は赤黒く焼けており、火を強く受けたことがわかる。５号カマドと同一面で検出されており、主軸方向はＮ－１°30′－Ｗで６号カマドとは主軸方位も同じなので、２連カマドの１つだったのだろう。

出土遺物（図版 63、第 149 図）

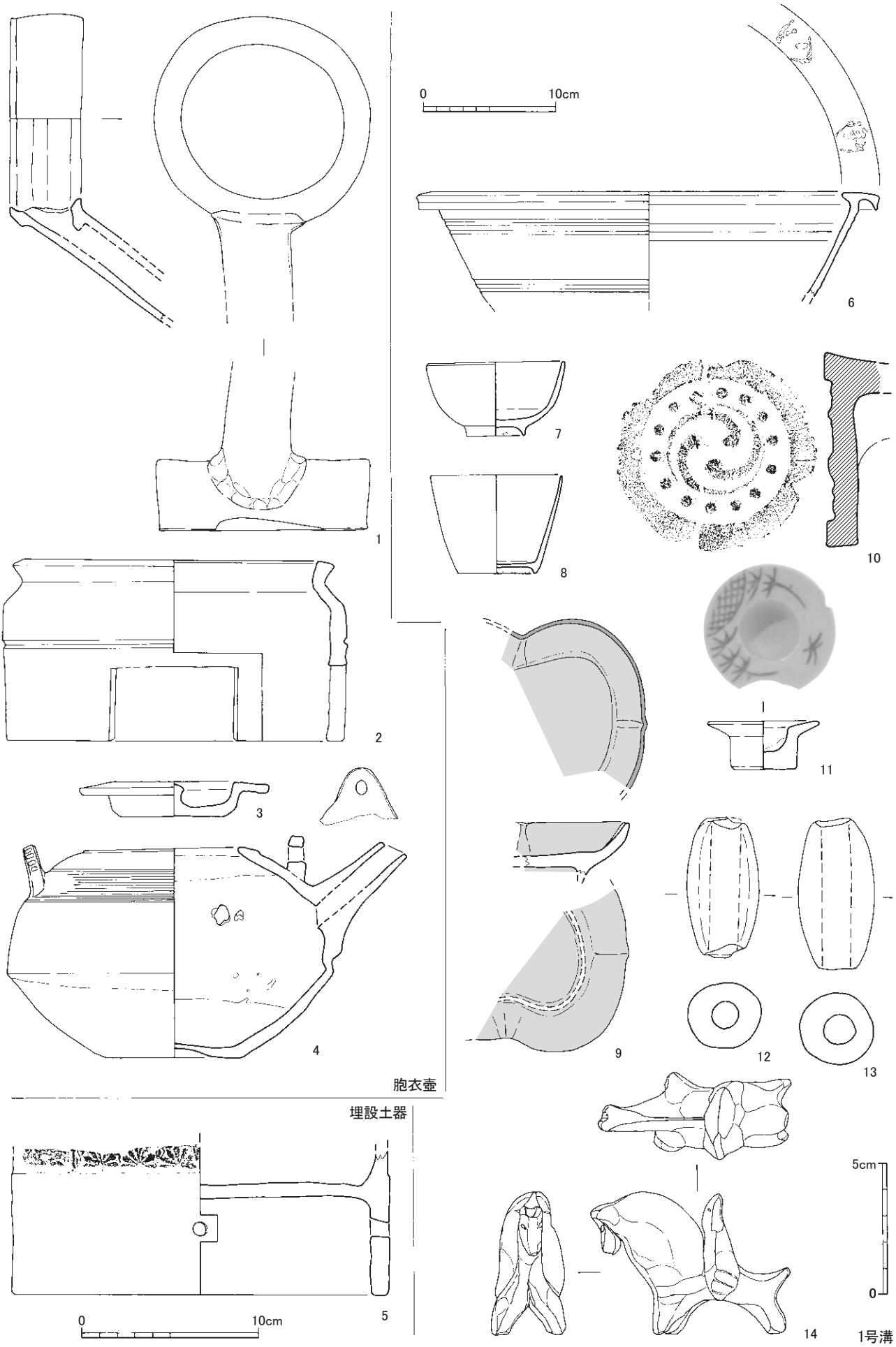
第 149 図 11 は土師質の方形の板の中央に孔があるもので、箱型のものとセットになる蓋だろうか。やや反っているのは焼成時のものだろう。

７号カマド（図版 59、第 150 図）

第３遺構面から検出されたカマドで、１号カマドの下から検出され、６号カマドに切られている。長軸 208cm、短軸 130cmで、火床面まで８cmしか残っていない。８号カマドの建て替え時に側石は



第 150 図　３次調査カマド実測図（1/30）



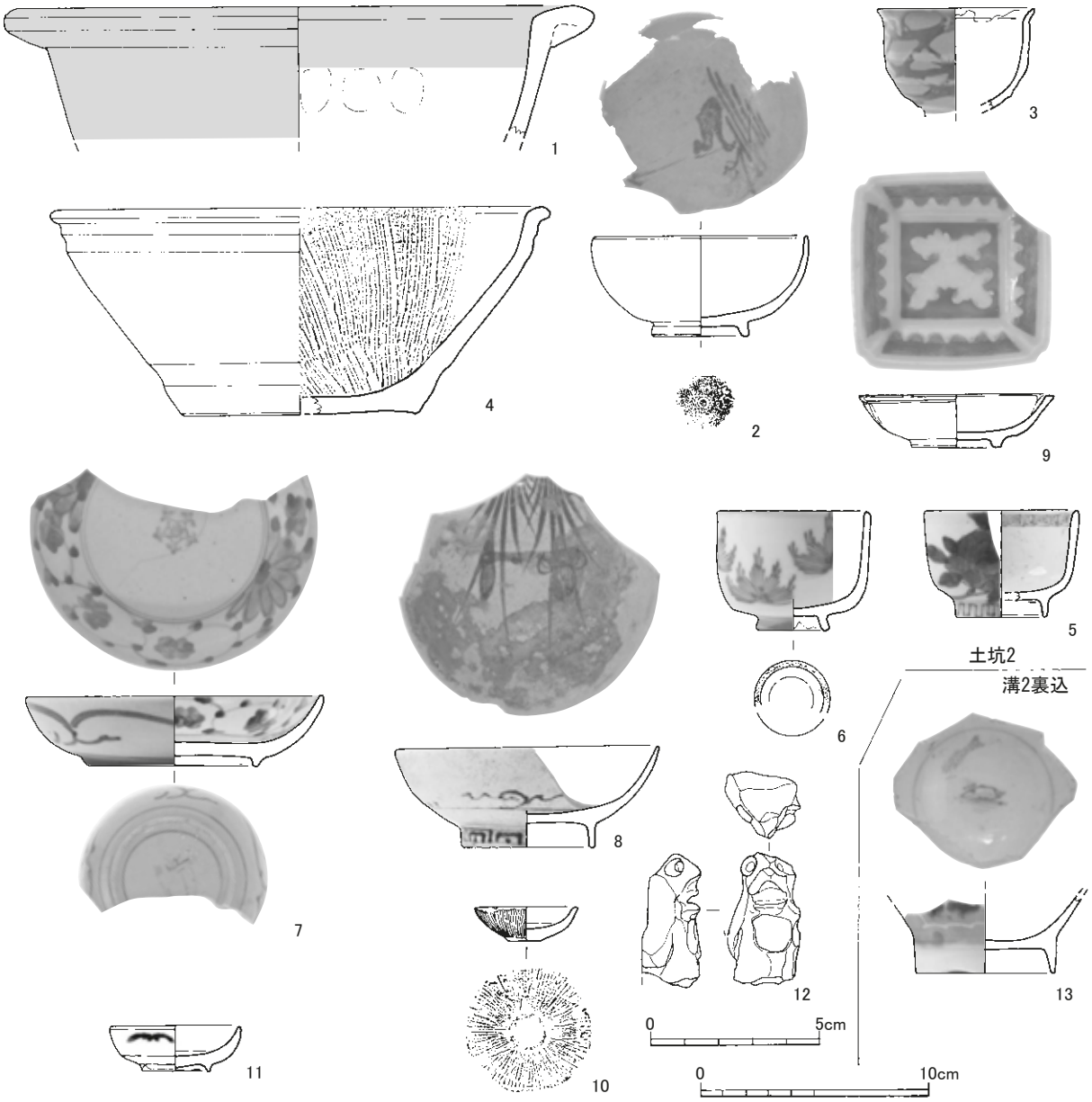
第151図　3次調査胞衣壺・埋設土器・1号溝状遺構出土遺物
実測図（6・10は1/4、11～14は1/2、他は1/3）

抜き取られたと見られ、残っておらず、掘り方が東西辺から突出しているので掘り崩されているとわかる。北側の一部を除きよく焼けており、赤黒く変色している。掘り込みは８号カマドと同一面だったと見られ、主軸方位が真北で、１号カマドと同じなので１号カマドは７号カマドの造り替えだろう。

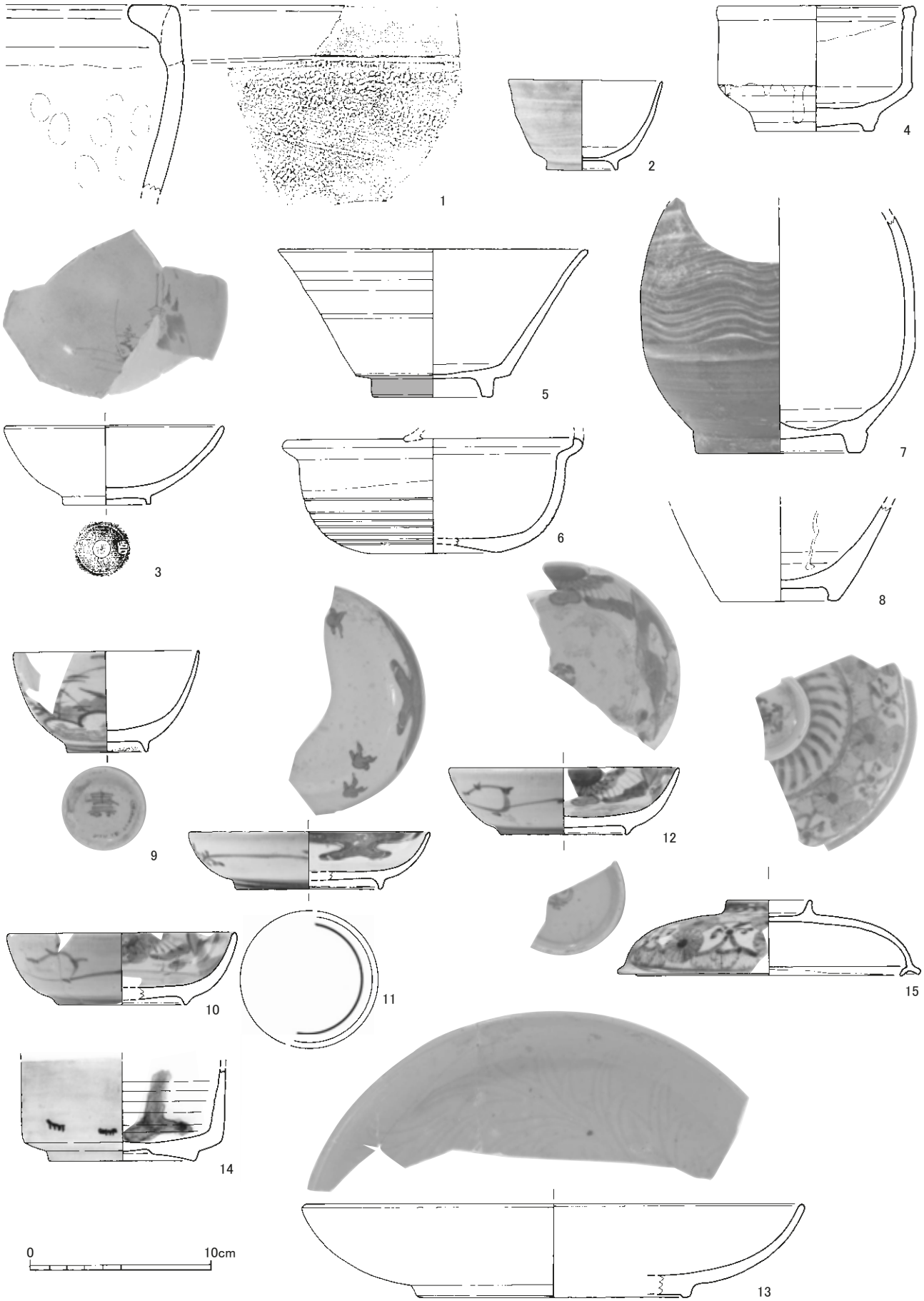
図化できる出土遺物はない。

１号窯跡（図版 59、第 155 図）

第２遺構面に環状の焼土が検出され、内部に２つの石があったことから側石が倒れた状態のカマドと見て、２号カマドとしたが、掘り進めると石材は側石にする板石ではなく、直方体の厚い片岩系石材で、この石の下に厚い炭層が堆積していた。壁面は焼けているが壁の下位は焼けておらず、床面も焼けておらず硬化したのみだった。壁もオーバーハングしており、断面袋状であったことから、カマドではないことが判明し窯跡とした。上位の環状の焼土が切れている部分が焚口と見られたが、スロープ状の立ち上がりが見つからず、掘りすぎた可能性が高い。



第 152 図　３次調査２号溝状遺構出土遺物実測図（12 は 1/2、他は 1/3）



第 153 図　3次調査3号溝状遺構出土遺物実測図1（1/3）

石材の上位が壁の焼けた範囲の下位と一致することから考えて、石の下面に厚い炭層を敷いて焼成したため、床面は火を受けなかったと考えられる。床面は除湿のために敲き締めたのだろう。したがって、石を焼台とする縦型の半地下式窯であろう。

上位で長軸 65cm、床面で 80cmで、短軸は焚口の壁が不鮮明だったため不確実だが約 70cmである。床面まで 35cmで、主軸方向はＮ－75°－Ｗである。２号窯とは１ｍほどしか離れていないが、共存していた可能性が高い。金属滓は残っていないので、金属の融解炉ではなく、土人形の焼成窯と見るべきだろう。

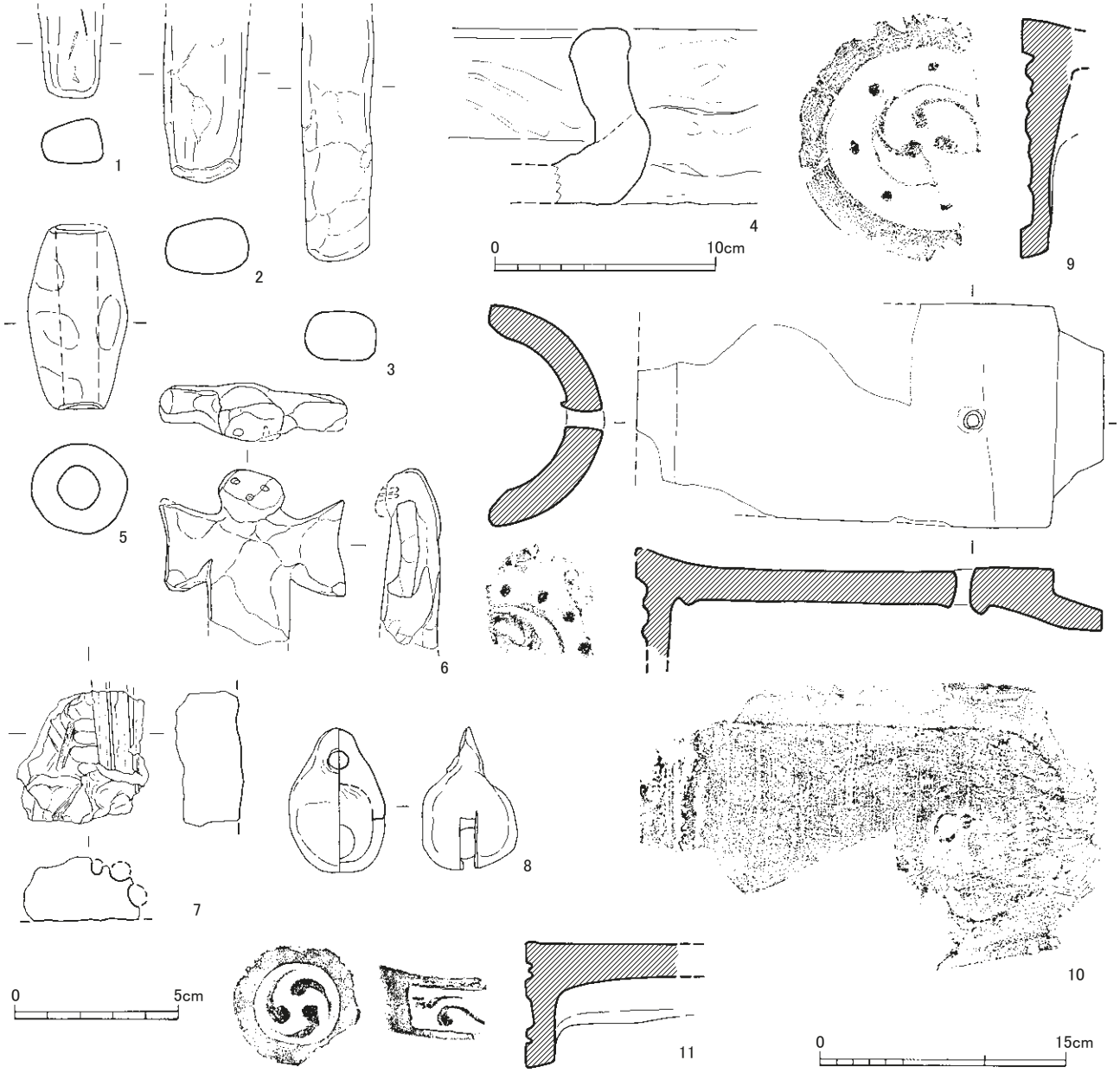
出土遺物が少なく時期を特定しづらいが、摺鉢から 18 世紀中葉だろう。

出土遺物（第 149 図６）

６は陶器の摺鉢で、小片のため摺り目のある部分まで残っていない。

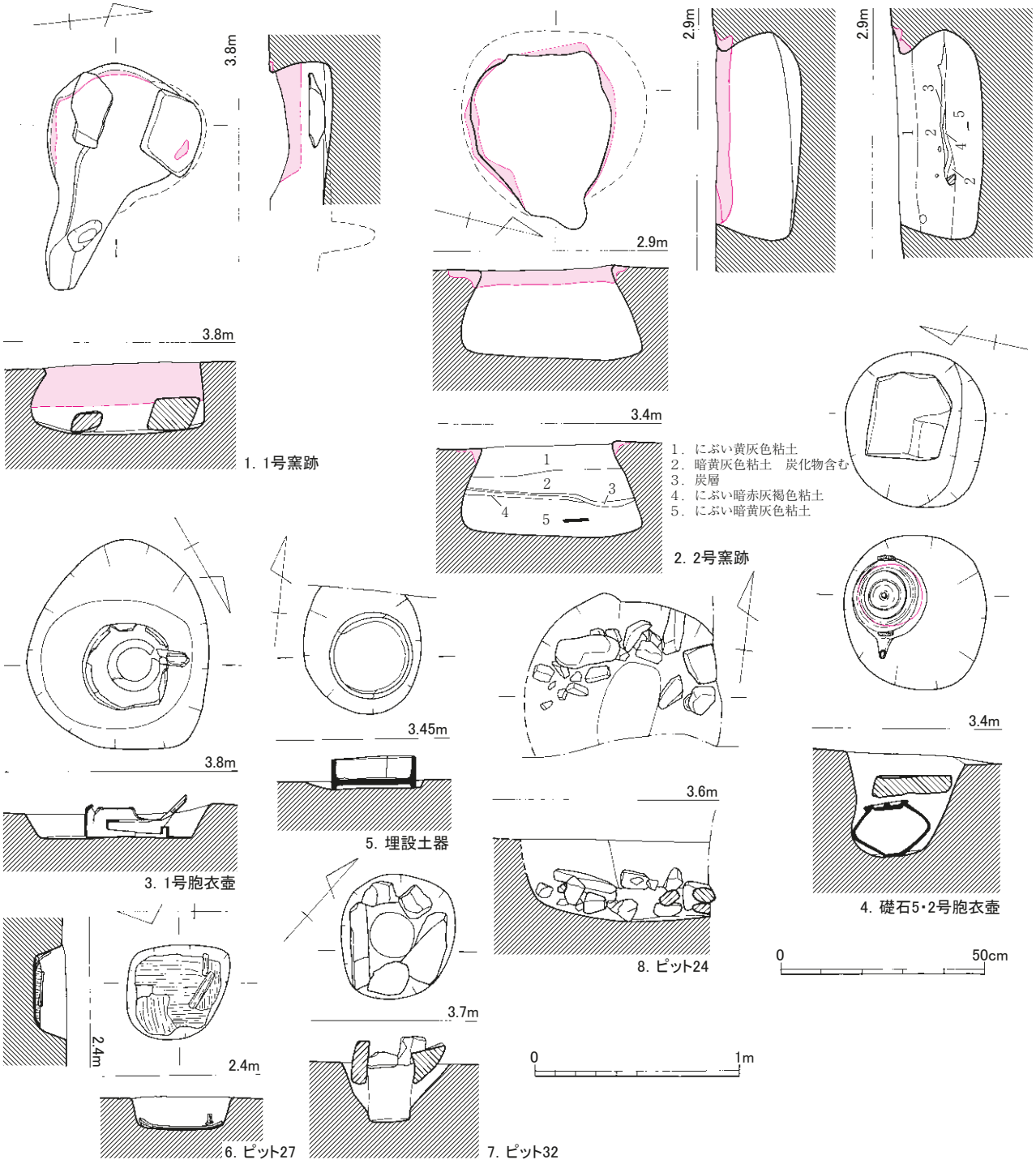
２号窯跡（図版 59、第 155 図）

第２遺構面に環状の焼土が検出され、当初３号カマドとしたが、２号カマドが窯跡と判断された

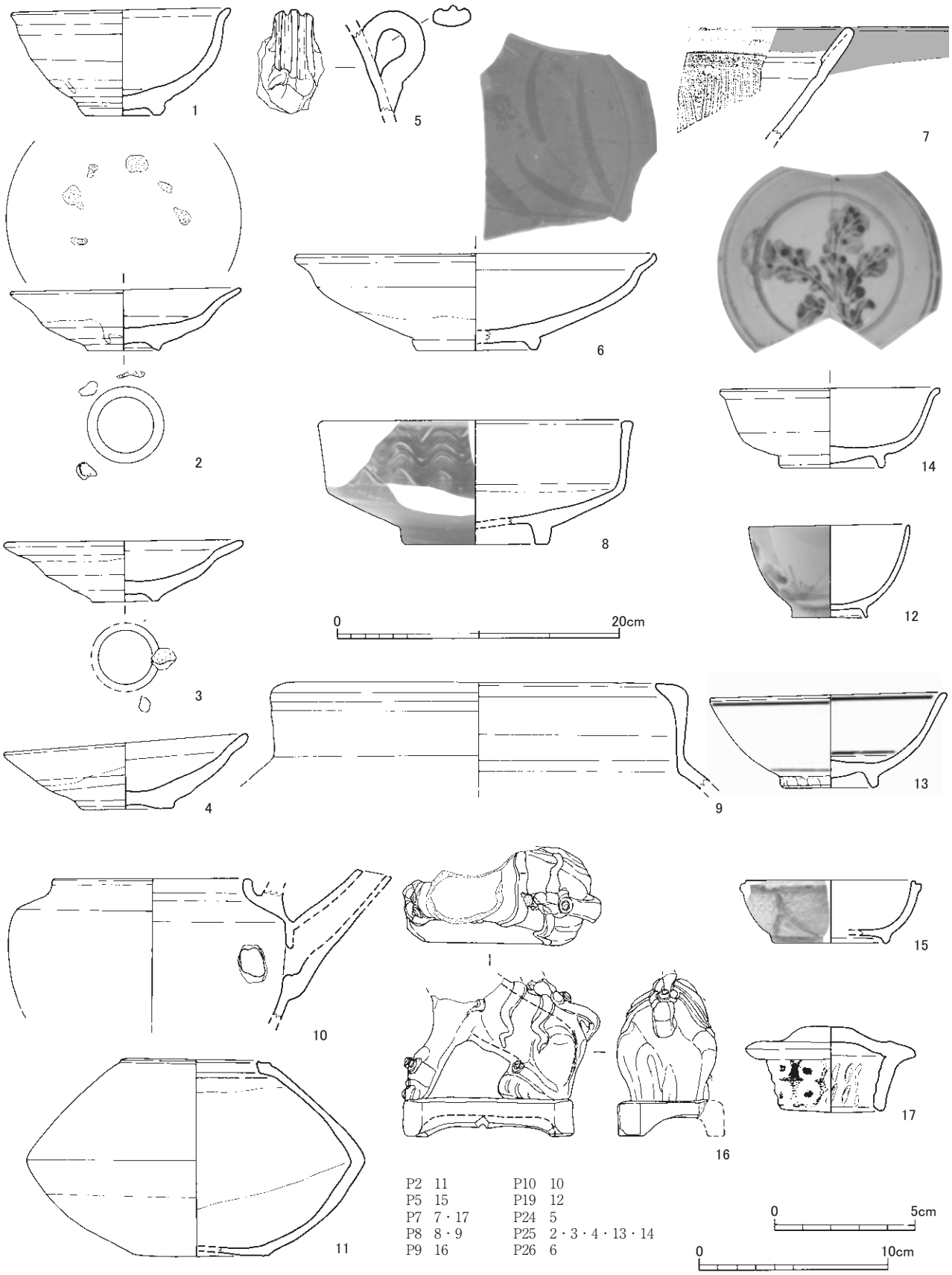


第 154 図　３次調査３号溝状遺構出土遺物実測図２（5・6・8 は 1/2、9 ～ 11 は 1/4、他は 1/3）

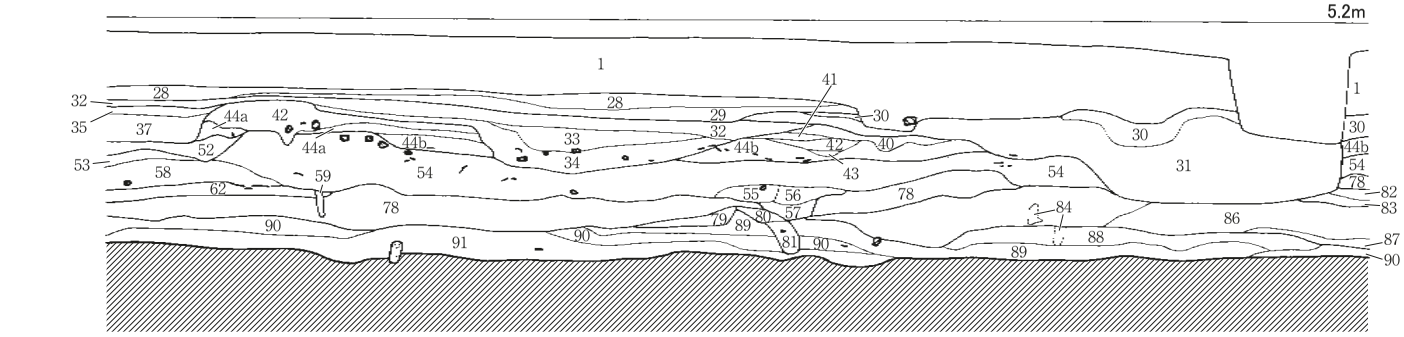
ことから、本遺構も同様の構造であることから窯跡とした。壁面上位のみが焼けており、下位は焼けておらず、床面は硬化がしていたので掘りすぎではなく、断面が袋状であることは間違いない。内部に１号窯跡のような石材は見られず、炭層も薄かった。上位の環状の焼土が切れている部分が焚口と見られたが、スロープ状の立ち上がりも見られなかった。長軸 85cm、短軸 77cm、床面で 84 cmである。主軸方向はＮ－ 80°－ Ｗで、１号窯跡とほぼ同じである。１号窯とは１ｍほどしか離れていないので、共存していた可能性が高い。金属滓は残っていないので、金属の融解炉ではなく、埋土に焼土塊が見られたことから土人形の焼成窯と見るべきだろう。図化できる出土遺物はない。



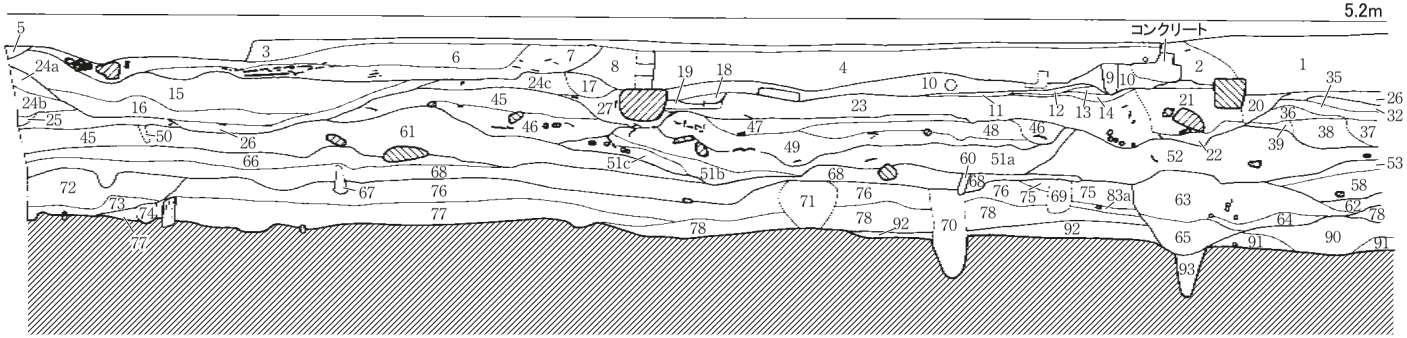
第 155 図　３次調査その他の遺構実測図（3・4・5 は 1/15、その他は 1/30）



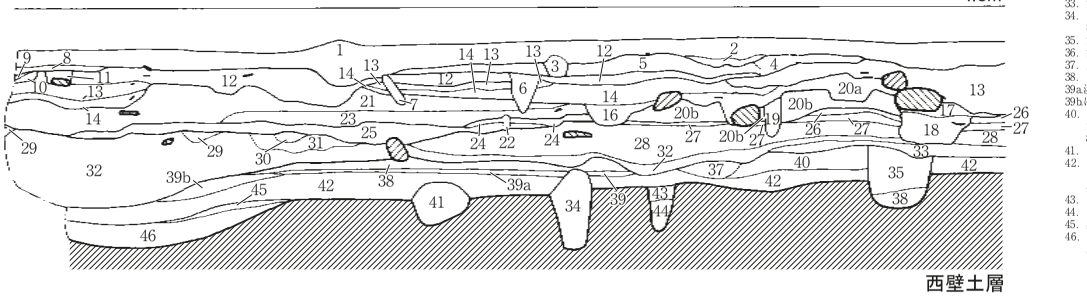
第156図　3次調査ピット出土遺物実測図1（8・9は1/4、15～17は1/2、他は1/3）



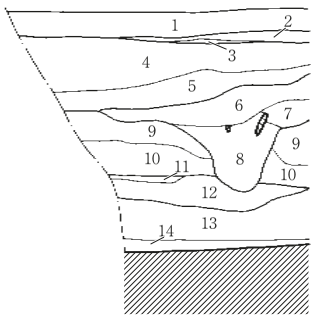
東壁土層
1. 山砂層　家屋解体時の客土
2. コンクリート層の基礎の掘り方埋土
3. アスファルト道路下砕石
4. 家屋解体時の埋土
5. 砂礫混土
6. やや暗い黄灰褐色土　炭化物塊あり } 瓦溜まり埋土
7. 黄灰色粘土　瓦を多く含む
8. 砂礫層　煉瓦層に接する
9. 塩化ビニール管理設溝
10. 黒灰褐色土　ゴムボールや一升瓶・ビニールが入る
11. 貝殻層
12. 焼土層
13. 黒褐色
14. にぶい黒褐色粘土
15. にぶい黄灰色粘土 } 1号土坑埋土
16. 淡暗灰色粘土
17. 円礫層
18. 暗灰褐色粘土　漆喰塊を含む
19. 漆喰層　煉瓦層に接する
20. 砂礫層
21. 灰褐色土 } 1号溝埋土
22. 灰褐色土＋砂礫層
23. 暗灰褐色粘土　小礫を含む
24a. にぶい灰褐色粘土
24b. にぶい暗灰褐色粘土
24c. 3つの層が互層に入る整地層　上位は灰褐色粘土、中位は黄色粘土、下位はやや暗い黄色粘土
25. 焼土層
26. 貝殻混礫層　1号土坑埋土で下位は床面
27. 灰褐色土　貝殻・礫を多く含む
28. 黄灰色粘土 } 最上面整地層
29. 黄色粘土
30. 黄灰褐色粘土　炭化物・焼土塊を含む } 11号土坑埋土
31. 灰褐色粘土　炭化物・焼土塊を多く含む
32. 灰褐色粘土
33. 黄灰褐色粘土　黄色粘土ブロックを含む } 3号溝埋土
34. 灰褐色土　貝殻・礫・瓦片を含む
35. 灰褐色土　礫・炭化物・焼土塊を含む } 7号土坑埋土
36. 茶灰褐色粘土＋灰褐色粘土
37. 焼土層　炭化物を含む
38. にぶい灰褐色粘土
39. にぶい黄灰色粘土
40. 灰色粘土　粘土粒多い
41. 焼土層　炭化物多い
42. 灰褐色粘土
43. 焼土層
44a. にぶい黄灰色粘土
44b. 黄灰色粘土　瓦・炭化物を含む
45. 暗灰褐色粘土
46. 灰褐色粘土　瓦・礫を多く含む　上位は第2遺構面　5号土坑埋土
47. 暗灰褐色土　貝殻・小礫を多く含む層 } 2号溝埋土
48. にぶい黄灰色粘土
49. 暗灰褐色粘土　瓦・小礫を多く含む
50. 淡灰褐色粘土　杭が土壌化したもの
51a. 緑がかった黄灰色粘土　炭化物・瓦片をわずかに含む } 4号溝埋土
51b. にぶい黄灰色粘土　4号土坑埋土
51c. にぶい黄灰色粘土　瓦・小礫を多く含む
52. 黄灰色粘土＋淡灰色粘土
53. にぶい黄灰色粘土　明黄色ブロックを含む
54. やや明るい黄灰色粘土
55. にぶい灰褐色粘土＋暗褐色粘土
56. にぶい黄灰色粘土＋黄色粘土
57. にぶい灰褐色粘土　炭化物を含む
58. 黄灰色粘土と灰色粘土の互層　斑状に入る
59. にぶい灰褐色粘土　杭が土壌化したもの
60. にぶい灰褐色粘土　杭が土壌化したもの
61. にぶい黄灰色粘土
62. 黄灰色粘土と灰色粘土の互層　斑状に入る混ざりの多い層　上位は第3遺構面
63. 暗黒灰色粘土 } 溝埋土の可能性あり
64. 明灰色粘土
65. 黒灰色粘土
66. 緑がかった暗黄灰色粘土
67. にぶい灰褐色粘土　杭が土壌化したもの
68. 緑がかった黄灰色粘土
69. やや暗い淡灰色粘土　ピット埋土
70. にぶい黄灰色粘土＋青灰色粘土　ピット埋土
71. にぶい暗青灰色粘土　炭化物を含む
72. 黄灰色粘土と灰色粘土の互層　斑状に入る混ざりの多い層　木質が残る　上位は第3遺構面
73. 黄灰色粘土と灰色粘土の互層　斑状に入る混ざりの多い層　木質が多く残る
74. にぶい青灰色粘土＋灰色粘土　ピット埋土
75. 黄灰色粘土と灰色粘土の互層　斑状に入る混ざりの多い層　上位は第3遺構面
76. 黄灰色粘土と灰色粘土の互層　斑状に入る混ざりの多い層　木質が残る　上位は第3遺構面
77. 黒灰色粘土
78. やや暗い明黄色粘土　上位は第3遺構面
79. 灰褐色粘土　砂礫を含む
80. にぶい黄灰褐色粘土 } ピット埋土
81. 暗青灰色粘土
82. やや暗い明黄色粘土
83. やや明るい明黄色粘土　灰色のラミナが入る
84. にぶい灰褐色粘土　杭が土壌化したもの
85. 黄灰色粘土
86. 明黄灰色粘土
87. 明灰色粘土
88. 明黄灰色粘土
89. 灰色粘土
90. やや暗い灰色粘土　上位は第4遺構面
91. 淡灰色粘土
92. 黒灰色粘土　木質を多く含む
93. 暗灰色粘土　ピット埋土



西壁土層
1. 黄灰褐色土　東壁4層
2. 黄灰色粘土と灰色粘土の互層　斑状にも入る混ざりの多い層
3. にぶい灰褐色粘土　ピット埋土
4. 黄灰色粘土
5. 暗黄色粘土を互層につき固めたのが褶曲している　通路の整地層
6. にぶい灰褐色粘土　杭が土壌化したもの
7. にぶい灰褐色粘土　杭が土壌化したもの
8. やや明るい黄灰色粘土　東壁54層・南9層に対応
9. にぶい淡黄灰褐色土　炭化物・焼土粒子・混岩破砕礫を含む　東壁44b層・南壁5層に対応
10. にぶい淡茶褐色
11. 灰色粘土　敷石柱穴の埋土
12. 暗黄色粘土を互層につき固めたものが褶曲している　通路の整地層で上位は最上面南9層に対応する
13. 黄色粘土　上位は第1遺構面
14. 黒色土　南壁10層に対応する
15. 黒灰色粘土
16. 黒灰色粘土
17. 黄灰褐色土
18. にぶい青灰色粘土
19. 灰褐色土　杭が土壌化したもの
20a. やや明るい明黄色粘土
20b. やや暗い黄色粘土　混入物少ない
21. 黄色粘土　南関東7層に対応する
22. 灰褐色土　杭が土壌化したもの
23. 黄色粘土と灰褐色粘土の互層
24. 砂層　意図的に敷いたものか
25. 泥岩破砕礫混入灰褐色粘土層 } 第2遺構面整地層　上位は第2遺構面
26. やや明るい明黄色粘土
27. やや明るい明黄色粘土
28. 淡灰色粘土＋暗黄灰色粘土
29. 淡灰褐色粘土　杭が土壌化したもの
30. 淡灰褐色粘土　杭が土壌化したもの
31. にぶい淡灰色粘土
32. やや明るい黄灰色粘土　東壁54層・南壁10層対応
33. 黄灰色粘土
34. にぶい灰色粘土＋暗黄灰色粘土　杭が土壌化したもの
35. 黄灰色粘土 } ピット埋土
36. 黄青灰色粘土
37. 炭化物層
38. にぶい黄灰色粘土
39a. 淡青灰色粘土
39b. にぶい黄灰色粘土
40. 明黄灰色粘土　下位はグライ化する　上位はグライ化する東壁88層・南壁12層対応
41. にぶい淡青灰色粘土
42. にぶい黄灰色粘土　下位はグライ化する　上位は第4遺構面で東壁91層・南壁13層対応
43. にぶい黄灰色粘土 } ピット埋土
44. にぶい灰色粘土
45. 黒色土＋青黄灰色粘土
46. 青灰色粘土　木質混入　南壁14層に対応



南壁土層断面
1. にぶい黄灰褐色土
2. にぶい灰褐色土　整地層　上位は最上位整地面で火を受けて黒灰色を呈する
3. 焼土
4. 黄灰褐色粘土　炭化物・焼土を含む　上位は第1面遺構面で東壁28層・西壁1層に対応
5. にぶい淡黄褐色土　炭化物・焼粒子・混岩破砕礫を含む　東壁44b層・西壁9層に対応
6. にぶい黄灰色粘土＋暗黄灰褐色粘土　斑状に入る　西壁13層に対応　斜路客土
7. にぶい黄灰色粘土　西壁21層に対応するが礫が入らない
8. にぶい明黄灰色粘土＋暗黄灰色粘土　上位に礫が入る
9. やや明るい黄灰色粘土　上位は第2遺構面で東壁54層・西壁12層に対応
10. 明黄灰色粘土　混入物少ない　東壁85層・西壁32層に対応
11. 明灰色粘土　東壁87層に対応
12. 明黄灰色粘土　下位はグライ化する　東壁88層・西壁40層対応
13. にぶい黄灰色粘土　下位はグライ化する　上位は第4遺構面で東壁90層・西壁42層対応
14. 青灰色粘土　木質混入　西壁46層に対応



第157図　3次調査東・西・南壁土層実測図（1/60）

１号胞衣壺（図版 58、第 155 図）

第２遺構面の北西部から検出されたもので、土師質土器が正置状態で出土したことから胞衣壺とした。掘り方は平面不整形で、長軸 104cm、短軸 90cm、深さ 17cmで、土師質土器よりも大きめである。

土器を取り上げてみると、注口のある部位が体部の中に入り込んでおり、組み合わせる部材であることが分かった。また、２つの部材は直接組み合わないので、そのままの形で容器としては機能せず、有機質の容器を間に挟んだものが腐食したと考えられる。出土した２つの部材を繋ぐ部材が別に存在し、最下段の壺形のものと蓋があるはずなので、化粧水を作る「欄引」の可能性が高い。変色や被熱を受けた痕跡がないので未使用品かもしれない。

出土遺物（図版 161、第 151 図）

第 151 図１・２は土師質土器で、直接組み合わないが、１セットになる。変色がなく使用していないかもしれない。

２号胞衣壺（図版 58、第 155 図）

第２遺構面の中央部から検出されたもので、ピットの中に扁平な蓋石があり、その下に土瓶が蓋をした状態で埋納されていたが、これは礎石６の下に胞衣壺を埋納したと考えるべきだろう。土瓶は完形で、中からは何も出土しなかった。重機で掘削するときに取り上げてしまったが、東側のピットにも土瓶が入っていたのでこれも胞衣壺だったと考えられる。

出土遺物（第 151 図）

第 151 図３・４はセットになる土瓶と蓋で、完形品である。

埋設土器（図版 58、第 155）

第２遺構面の北端から検出されたもので、土器が検出されたことで確認できた、高台付き火鉢を倒立させたもので、蓋は残っていなかった。掘り方は長軸 62cm以上、短軸 58cm、深さ 17cmで、法量から胞衣壺の可能性があるが、蓋がないので、埋設土器とした。中からは何も出土せず、機能は不明である。

出土遺物（第 151 図５）

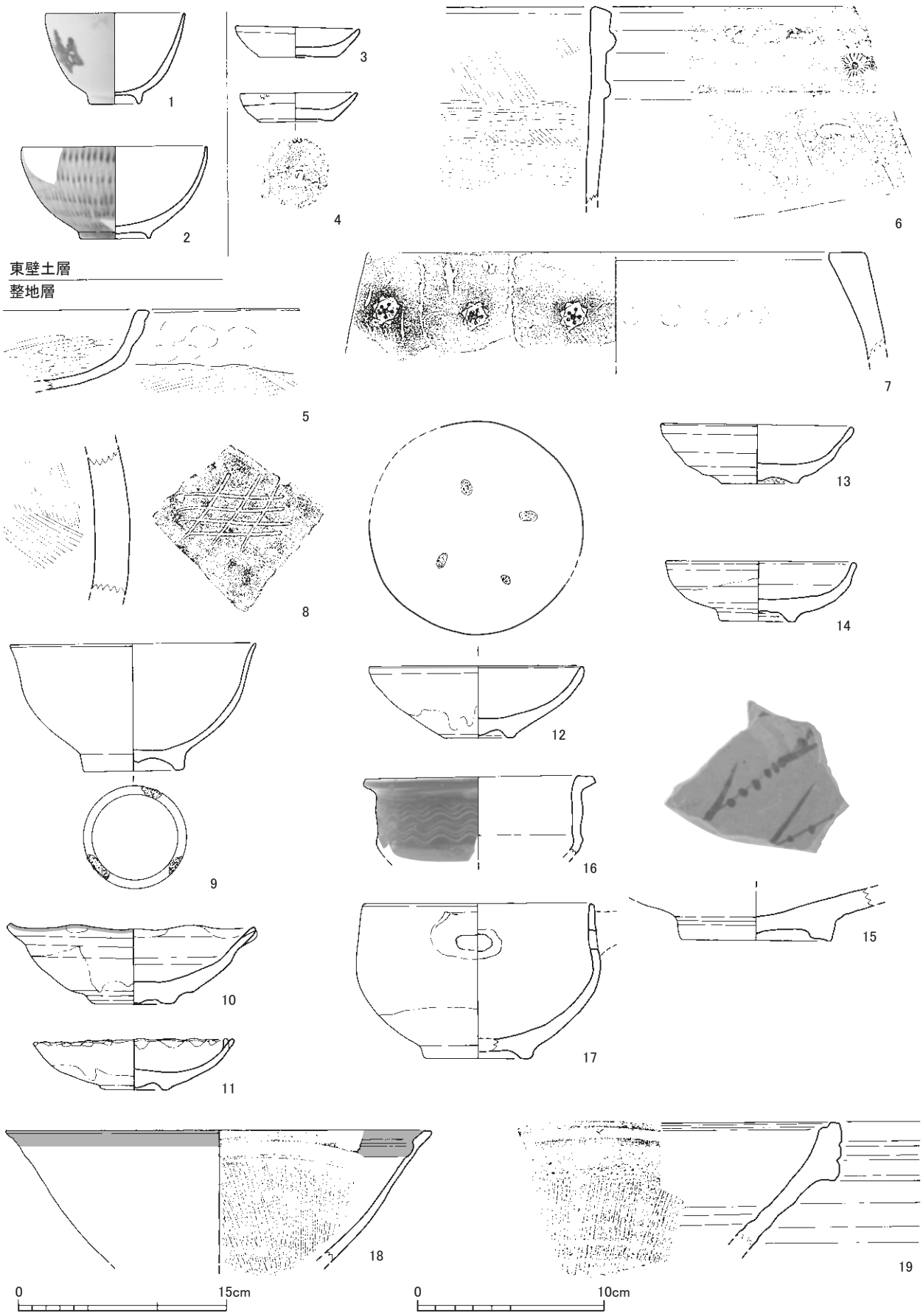
第 151 図５は瓦質土器の火鉢で、高い高台が付く。胴下位にスタンプで文様がつくことも、器形も珍しい。

溝状遺構

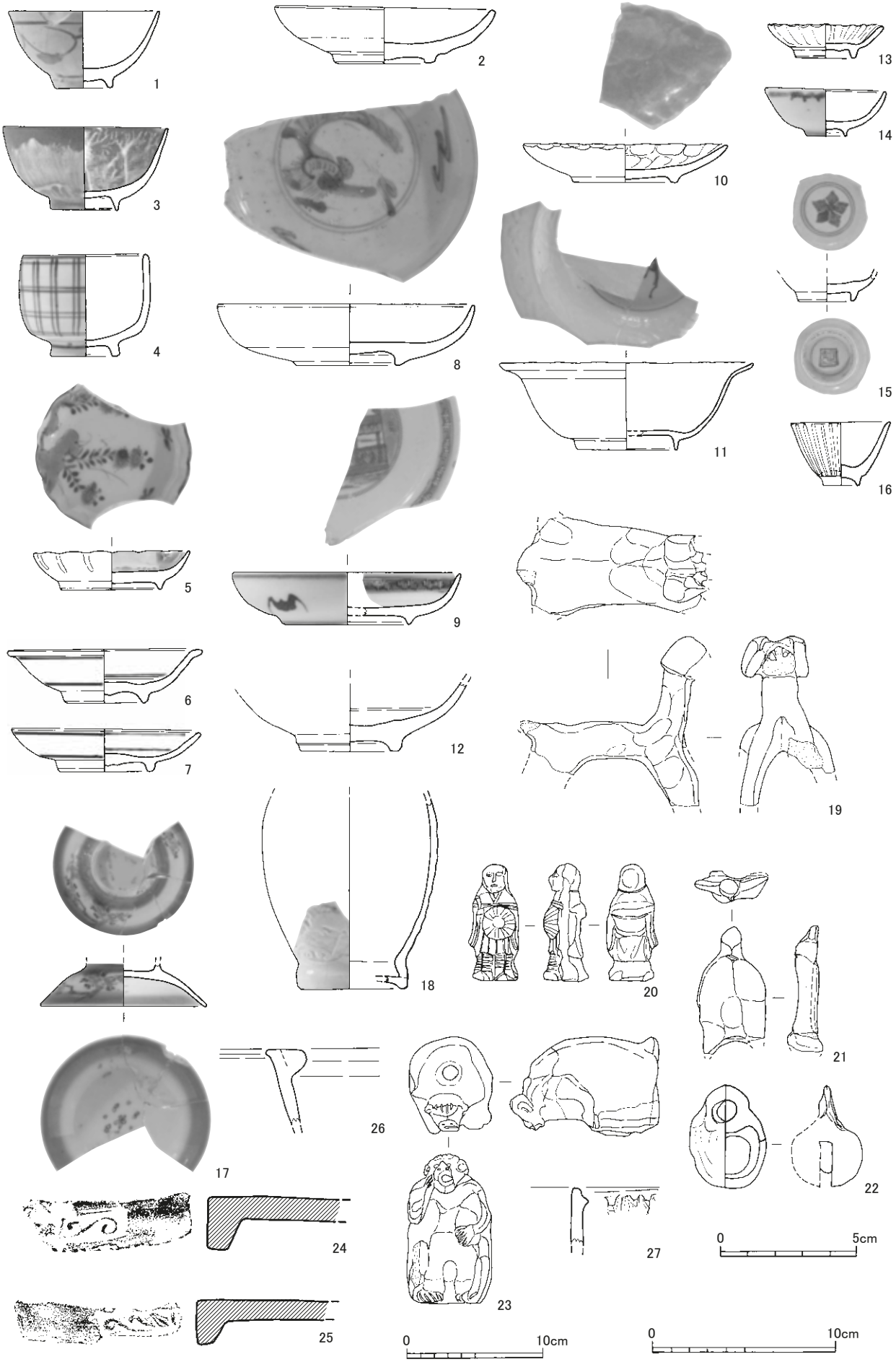
３条の溝状遺構が検出された。いずれも東西方向に走り、雨落ち溝と同時に屋敷地を区画する意味があるようだ。石積の護岸は見られない。

１号溝状遺構（第 154・157 図）

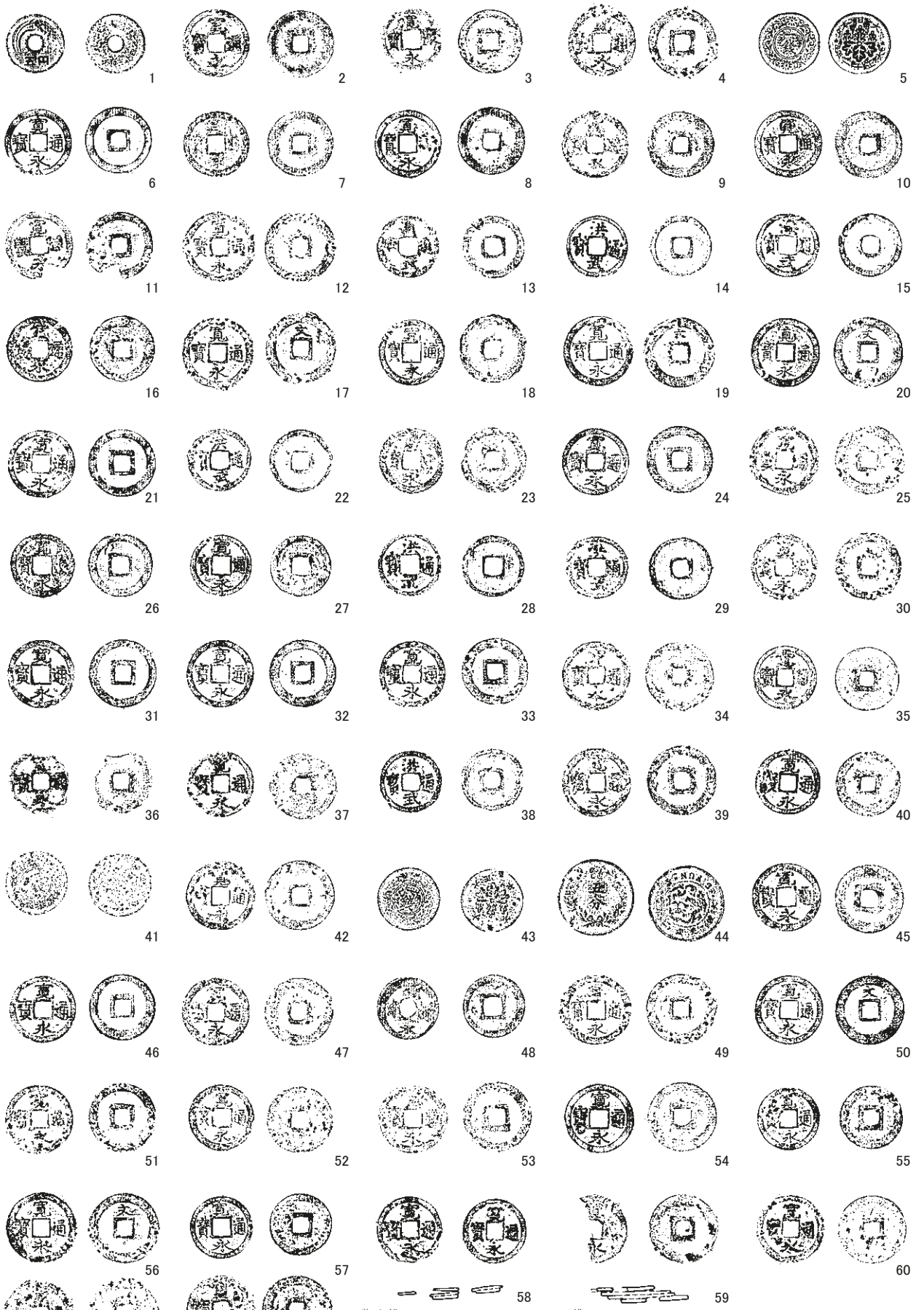
第１遺構面の中央部で検出された東西に走る溝で、当初３号柱状礎石の掘り方と思われたが、46cmと深く、出土遺物に近代のものがないので溝状遺構とした。しかし、断面を精査してみると、３号柱状礎石の裏込めというべきで、出土遺物は包含層を掘削した時のものだろう。幅は約 100cmで、砂礫を多く含む。出土遺物が少ないため時期を特定しづらいが、蕎麦猪口の底部形状や染付碗の雨



第 158 図　3次調査東壁土層・整地層出土遺物実測図（7・17・18 は 1/4、他は 1/3）



第 159 図　3次調査整地層出土遺物実測図（24・25 は 1/4、19 ～ 23 は 1/2、他は 1/3）



礎石1横　1
礎石5　2～4
柱状礎石2堀方　5
1号土坑　6
1号土坑床面　7
5号土坑　9～11
7号土坑　12
10号土坑　13・14
溝1　15～17
溝2　8
溝3　18～29
溝4　30
南東落ち込み31～35
P4　36
P10　37
P14　38
P19　39・40
3号土坑を切る小ピット　41
第1遺構直上整地層　42～44
土層1～6層　45・46
第1遺構面整地層　47～62

第160図　3次調査出土銅銭拓影1（1/2）

降文から18世紀中葉か。

出土遺物（図版60・61・63、第163図）

第163図19は無文銭と見られるが、厚いので中世の無文銭とは異なる。

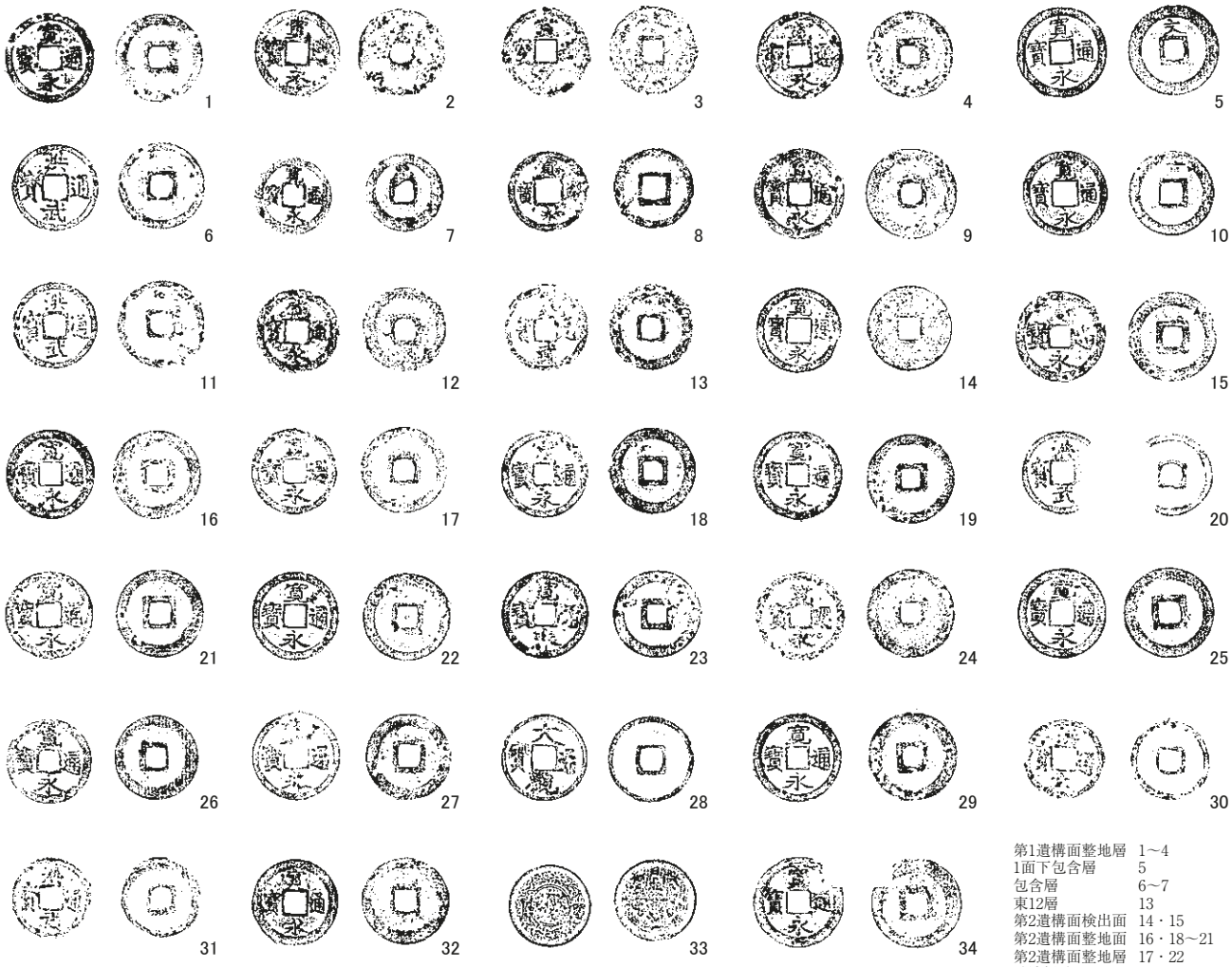
２号溝状遺構（図版58、第5図）

第1遺構面の北側で検出された東西に走る溝で、北壁に石列がある。この石列の礫は小さく、積まれていない。断面で見ると、裏込めもなく、床面に貼り付いているのみである。石積の最下段にしては上面が揃っておらず石が小さいので護岸施設ではない。石列の下に２号礎石建物跡の礎石があることから、２号礎石建物跡の化粧基壇だったのかもしれない。床面は東に向かって下がっており、東側ほど残りが良く、幅は約300cmで、深さは35cmと浅い。

裏込めから出土した第152図13が広東碗であることから、19世紀初頭には掘削されており、金銅製ボタンが出土しているので最終埋没は明治後期から大正時代だろう。

出土遺物（図版60・61、第152・160・163図）

第152図２は京焼風陶器埦で外底に「大」の刻印がある。４は陶器の摺鉢で、胎土の特徴から肥前産ではないだろう。第163図18は金銅製の桜花が陽刻されたボタンで、伝習館高校内の本町遺跡から出土したものと同じなので中学伝習館の制服用ボタンであろう。このほか、マグロ類の魚骨やオニニシ・アカニシの貝殻が出土している。



第1遺構面整地層	1～4
1面下包含層	5
包含層	6～7
東12層	13
第2遺構面検出面	14・15
第2遺構面整地面	16・18～21
第2遺構面整地層	17・22
壁清掃時	29～31
攪乱	32・33
表採	34
土4	8～12
土8	13
土8a	23

第161図　３次調査出土銅銭拓影２（1/2）

３号溝状遺構（図版 58、第５図）

第２遺構面の中央部で検出され、２号礎石建物跡の礎石の下にかかる。床面は東に向かって下がっており、東側ほど残りが良く、幅は約 200cmで、深さは 32cmと浅い。

出土遺物（図版 61 ～ 64、第 153・154・160・163）

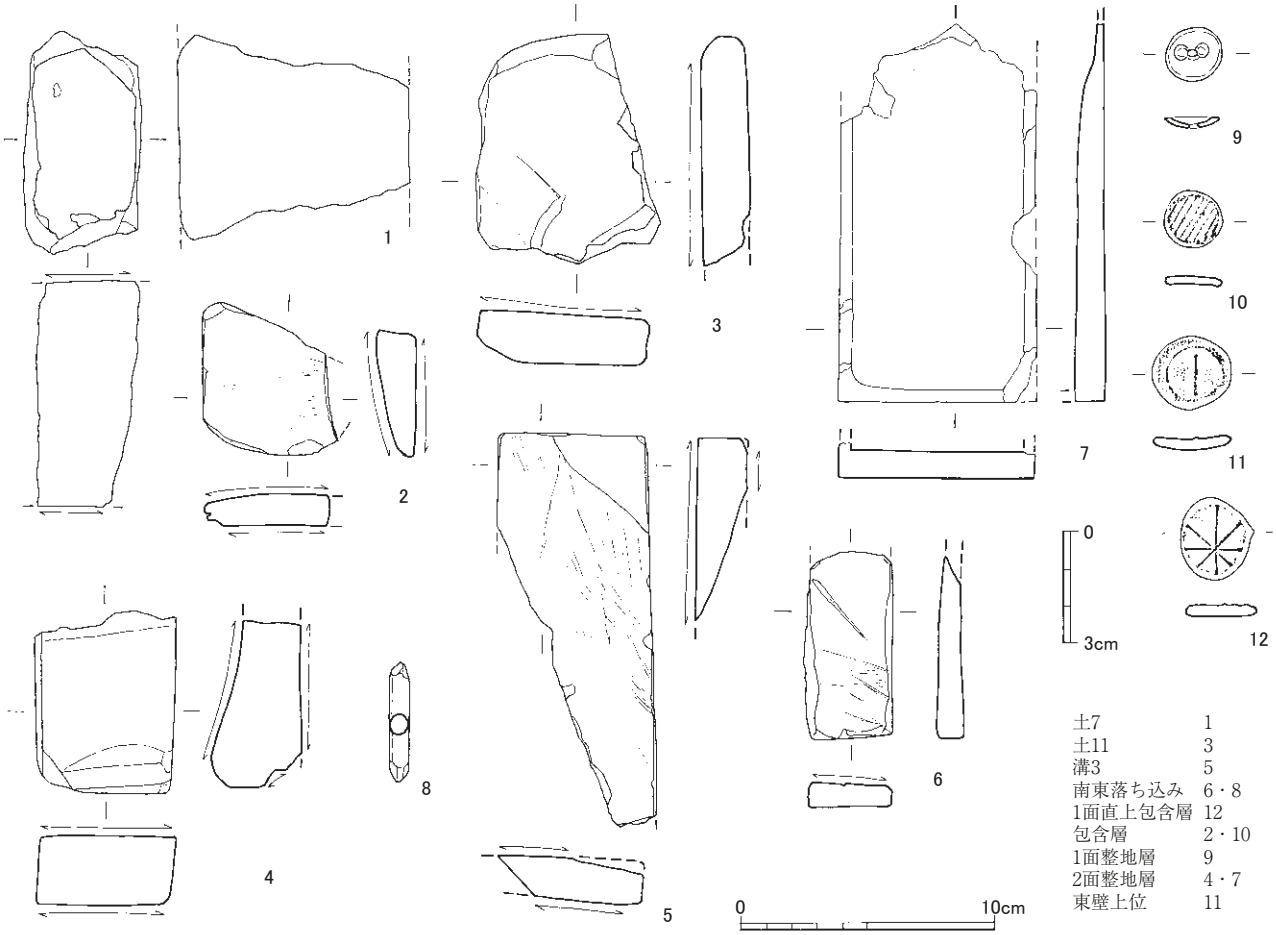
第 153 図１は瓦質土器の火鉢で、外面は型押しでコタタキ状の地文が施されている。第 154 図１～４は窯道具で、まとまって出土しているので、第２遺構面のどこかで使用したものを廃棄したものである。9・10 は軒丸瓦で、９の珠文数は位置関係から７個、10 は 12 個であろう。火熱を受けて暗赤紫色を呈するが、外面は火を受けていない。第 163 図 23 はさっぱ釘で板壁に打ったものだろう。このほか、マダイの骨が出土している。

ピット

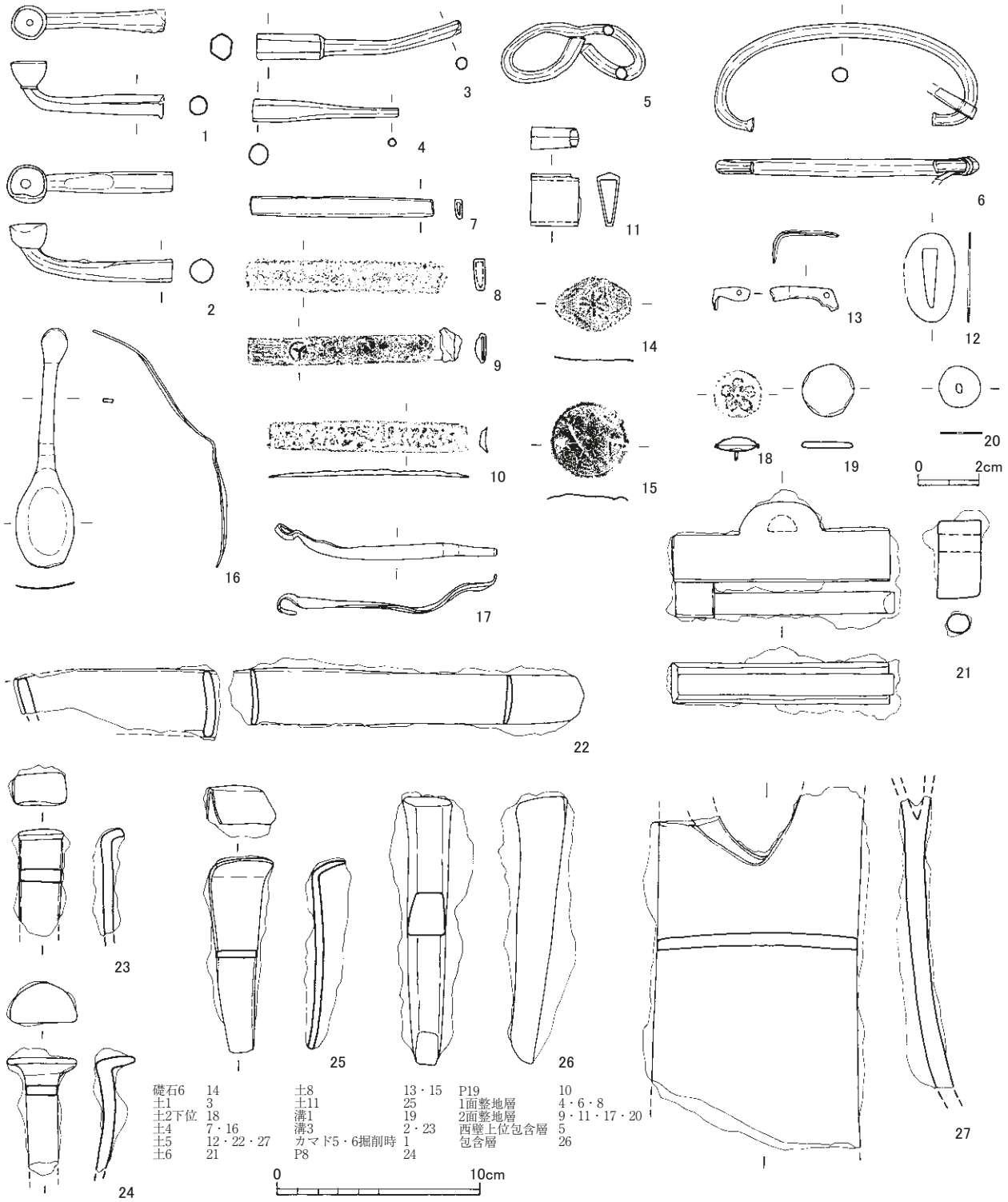
ピット 24（図版 60、第 155 図）

第４遺構面の南西隅から検出された根締石のように礫が壁沿いに充填されたピットで、礫が密に入っている部分と散乱している部分があるので、根締めした柱が抜き取られたものだろう。礫の中には１号礎石建物跡の南側通路の整地に使った破砕礫が含まれており、１号礎石建物跡建設時に建てた木柱であった可能性が高い。プランが南西２面の調査区外に延びているので規模は不明で、深さは 40cmを測る。

図化可能な遺物は出土しておらず、時期不明である。



第 162 図　３次調査出土石・鹿角・ガラス製品実測図（7・26 ～ 31 は 1/2、他は 1/3）



礎石6	14	土8	13・15	P19	10
土1	3	土11	25	1面整地層	4・6・8
土2下位	18	溝1	19	2面整地層	9・11・17・20
土4	7・16	溝3	2・23	西壁上位包含層	5
土5	12・22・27	カマド5・6掘削時	1	包含層	26
土6	21	P8	24		

第163図　3次調査出土金属製品実測図（7・26～31は1/2、他は1/3）

ピット27（図版60、第155図）

第４遺構面の南東部から検出された平面方形のピットで、底面に木質が残っていた。木の皮らしく壁にはかかっていないので、底面に敷いたものと見られ、弥生から古墳時代の掘立柱建物跡に見られる礎板に似ている。長軸49cm、短軸46cm、深さ17cmを測る。弥生から古墳時代に属する可能性もあるが、当該期の土器がないことから近世のものと考えるべきだろう。

ピット32（第155図）

第２遺構面の北西端から検出された根締石の入るピットで、柱は抜き取られていない。径31cm、深さ21cmを測る。礫は床面から浮いて柱を巡っていた。埋土はにぶい暗灰褐色土で、焼土と炭化物を含む。木質は残っていなかったが、掘立柱建物跡の柱穴であろう。対応する同様のピットが存在せず、建物を復元できない。

図化可能な遺物は出土しておらず、時期不明である。

ピット出土遺物（図版61～64、第156・160・163図）

第156図２はピット25出土の陶器の皿で、外面胴下位に胎土目跡がある。５はピット24出土の陶器の壺で、瀬戸焼のようだが胎から見ると肥前陶器なので、模倣したものか。13は染付碗で、胎土の黒色粒子が多く見られるので波佐見焼の可能性がある。

その他の出土遺物（図版60～64、第158~163図）

第158図５は第２遺構面出土の焙烙で、調整方法が珍しいので搬入品だろう。第158図13は第２遺構面整地層出土の陶器の小皿で、見込みは重ね焼きのため発色不良である。第159図２は李朝白磁の皿で、11は鉢だろう。第159図20の施釉陶器の西行人形は同型のものが博多の西新町遺跡から出土している。第２遺構面からは洪武通宝が多く出土する。

このほか、第１遺構面整地層からハマグリとオオコシダカガンガラの貝殻が出土している。

小結

３次調査では、遺構面を４面確認した。第１遺構面は最上面と近接していたので同一面での調査となった。標高4.6ｍ前後の最上面は柱状礎石のある面で、柱状礎石より下位の標高4.4ｍ前後から発見された礎石のある面を第１遺構面とした。ただし、礎石１のように昭和34年銘の５円黄銅貨を伴う礎石もあるので、柱状礎石と礎石を共用した建物もあるようだ。２号柱状礎石の掘り方から大正11(1922)年銘の１銭銅貨が出土しており、第１遺構面直上で大正10(1921)年銘の１銭銅貨と、光武10（1906）年銘の朝鮮５分銅貨が出土しているので、最上面は大正・昭和初期であろう。瓦溜まりは最上面の建物の解体時の廃棄土坑と考えられる。

第１遺構面が埋没したのはこの前段階なので明治後期～大正時代で、整地層にガラス製おはじきを含む部分もあることから、整地されたのは幕末から明治初頭であろう。

最上面の礎石が残っていることもあって、第１遺構面の礎石の間隔や並びが不均一だった。しかし、1・4号土坑を掘り下げると、礎石の床面は１・４号土坑内にあるものが多く、土坑に廃棄されたものと判断できた。これらを除くと残った礎石は少なく、第１面は１・４号土坑に掘り崩され

て建物を復元することはできなかった。しかし、北側の礎石の多い部分には礎石建物があったと考えてよく、1号胞衣壺はこれに付随するものだろう。1号溝状遺構の南側には根締石が残る礎石5と根締石が掘り崩されたらしい礫の広がりが東壁側に見られたのでこれらを礎石とする建物が存在していたと考えられる。これらの北部・中央部の2棟の屋敷区画、後の柱状礎石の区画に踏襲されている。最上面の柱状礎石1南側には西壁12層の互層につき固めた整地層が広がっており、褶曲しているので建物南側に通路があったと考えられる。沖端川の北側土手の道路と考えたい。

第2遺構面では2つの礎石建物跡が確認できた。南側に位置する1号礎石建物跡は大型の礎石の桁行2間の建物で、建物の西側には24層の砂層と25層の破砕礫混み層があり、建物外の通路であったものと思われる。前述の沖端川北側土手の通路はこの通路を踏襲しているものと考えられる。9号土坑の石列は主軸方向が、1号石建物跡と直交しており、礎石7と同時に施工しているので、この建物に付随する施設であっただろう。また、礎石6は1号礎石建物跡内に位置するので建物の一部であろうが、その下に2号胞衣壺が埋納されている。建物を建設する際に偶然出産が重なった珍しい事例であろう。建物の北側には3号溝状遺構があるので、これを1号礎石建物跡の北側雨落ち溝と考えたい。3号溝状遺構からは瓦が多く出土するのもそのためだろう。しかし、3号溝状遺構からは瓦が出土しているので、礎石建物もあるはずである。

北側に位置する2号礎石建物跡は礎石の上に2号溝状遺構の石列が乗っていることから、溝状遺構は2号礎石建物跡に付随する可能性が高い。南側の雨落ち溝だったのかもしれない。南壁6層は西に向かって上がっているので、これが井出橋に繋がるスロープであろう。

1・2号窯跡は2号溝状遺構の南岸にあり、町屋なので隣家は近接していると考えられることから、1・2号礎石建物跡の間にも屋敷地があったと考えるべきだろう。3号溝状遺構から窯道具がまとまって出土しているので、1・2号窯で使用したものかもしれない。

6・7号土坑は1・2号礎石建物跡の間に位置する廃棄土坑で、6号土坑からは錠前が出土し、7号土坑からは坩堝が出土しているので鋳物師の屋敷があったのかもしれない。

第2遺構面の時期は、整地層出土遺物や土坑から、最も古いものは18世紀前葉で、最も新しいものは明治後期であろう。土層にも数枚の整地があるので1つの面としているが、厳密には数枚の面があるのだろう。この時期は柳川城下町で大火が起こった時期だが、焼土面もなく、焼け歪んだ遺物もないので、被災しなかったようだ。2号溝状遺構から近代に属するボタンが出土しているが、これは第2遺構面の最終時期を示すものだろう。

第3遺構面にはカマド群が所属する屋敷地があるはずだが、建物を復元することはできなかった。この面から掘り込まれているピットや杭が多く見られ、この段階では掘立柱建物跡が主体であったのかもしれない。遺構面下の包含層が17世紀後葉のものなので、整地面はそのあとである。

第4遺構面も杭や柱穴は多かったものの、調査区の幅が狭く、ピットはあるものの掘立柱建物跡を確認することはできなかった。

Ⅳ　自然科学の分析

1　上町遺跡と保加町遺跡から出土した動物遺体

中村賢太郎（パレオ・ラボ）

1. はじめに

上町遺跡と保加町遺跡は福岡県柳川市に所在し、江戸時代における柳川城下町の町屋にあたり、沖端川に掛かる井出橋の南に上町遺跡、北に保加町遺跡が位置する。ここでは、17 ～ 18 世紀の動物遺体の同定結果を報告する。

2. 試料と方法

試料は、発掘調査時に肉眼で確認され、取り上げられた動物遺体である。1 つの試料袋に 1 ～ 5 点の動物遺体片が含まれていた。

上町遺跡の試料は、2 次調査で採取された 17 世紀～ 18 世紀の動物遺体 19 点（番号 1 ～ 19：表 1）である。

保加町遺跡の試料は、1 次調査と 2 次調査で採取された 17 世紀後半～ 18 世紀後半の動物遺体 40 点（番号 20 ～ 59：表 2）である。

観察は肉眼および実体顕微鏡下で行い、同定は現生標本との比較により行った。同定にあたっては、吉永亜紀子氏に多大なるご協力を賜った。分析後の試料は、九州歴史資料館に保管されている。

3. 結果と考察

3. 1. 上町遺跡

上町遺跡では、二枚貝綱 1 分類群、軟骨魚綱 2 分類群、硬骨魚綱 3 分類群、哺乳綱 6 分類群、鳥綱 1 分類群、計 13 分類群が同定された。

二枚貝綱　Bivalvia
　サルボウ　*Scapharca kagoshimensis*
軟骨魚綱　Chondrichthyes
　サメ類　Elasmobranchii ord., fam., gen. et sp. Indet.
　ネズミザメ科　Lamnidae gen. et sp. Indet.
硬骨魚綱　Osteichthyes
　硬骨魚綱の一種　Osteichthyes ord., fam., gen. et sp. Indet.
　クロダイ属　*Acanthopagrus sp.*
　マグロ属　Thunnus sp.
哺乳綱　Mammalia
　ヒト　*Homo sapiens*
　イヌ　*Canis lupus familiaris*
　シカ　*Cervus nippon*
　ウシ　*Bos taurus*

ハクジラ亜目　Odontoceti fam., gen. et sp. Indet.

ウマ　*Equus caballus*

鳥綱　Aves

キジ科　Phasianidae gen. et sp. Indet.

時期ごとに同定された分類群を記すと、17 世紀（4 面）の土坑や溝では、シカとウシが確認された。18 世紀前半（3 面）の土坑などでは、ネズミザメ科と硬骨魚綱が確認された。18 世紀中頃（2 面）の土坑などでは、サメ類、クロダイ属、イヌ、シカ、ハクジラ亜目が確認された。18 世紀後半（1 面）の土坑や埋甕などでは、サルボウ、硬骨魚綱、マグロ属、ヒト、イヌ、ウマ、キジ科（ヤマドリに近似）が確認された。

ヒト（18 世紀後半）は遊離した歯 1 点のみの出土であり、抜けた歯が放棄された可能性が考えられる。

ウシ（17 世紀）は、基節骨 1 点のみの出土であり、由来を考えるのが難しいが、荷物の運搬用にウシが使役されていた可能性が考えられる。

ウマ（18 世紀後半）も、歯 1 点のみの出土であるが、荷物の運搬用にウマが使役されていた可能性が考えられる。なお、ウマの年齢は歯冠高から 11 才以上と推定される。

イヌ（18 世紀中頃、18 世紀後半）は、愛玩用の可能性が考えられる。

食用と考えられる動物としては、貝類ではサルボウ、魚類ではサメ類、ネズミザメ科、クロダイ属、マグロ属、哺乳類ではシカ、ハクジラ亜目、鳥類ではキジ科（ヤマドリに近似）などが挙げられる。これらのうち、キジ科（ヤマドリに近似）上腕骨骨幹には齧歯類によると思われる咬痕が見られ、骨だけになった後にネズミなどに齧られた可能性が考えられる。

シカは食用にならない角（18 世紀中頃）も出土しており、角製品の存在や角製品の加工が行われた可能性も考えられる。

表1　上町遺跡から出土した動物遺体

番号	遺跡名	地区名	遺構名	時期	分類群	部位	左右	数量
1	上町2次	1区	1面土坑2	18世紀後半	マグロ属	尾椎	—	1
2	上町2次	1区	1面土坑9	18世紀後半	キジ科	上腕骨	右	1
3	上町2次	1区	1面土坑14	18世紀後半	イヌ	下顎骨	左	1
4	上町2次	1区	1面P13	18世紀後半	ウマ	下顎第2あるいは第3前臼歯	右	1
5	上町2次	1区	遺構検出	18世紀後半	マグロ属	尾椎	—	1
6	上町2次	1区	4面P93	17世紀	哺乳綱？	不明	不明	1
7	上町2次	2区北	2面遺構検出	18世紀中頃	ハクジラ亜目	歯	不明	1
8	上町2次	3区北	1面埋甕1	18世紀後半	サルボウ	殻	右	1
9	上町2次	3区	1面P156	18世紀後半	硬骨魚綱	不明	不明	1
10	上町2次	3区	3面遺構検出	18世紀前半	ネズミザメ科	椎骨	—	1
11	上町2次	3区	4面溝5	17世紀	シカ	末節骨	不明	1
12	上町2次	3区	4面溝5	17世紀	シカ	上腕骨	右	1
13	上町2次	3区	4面溝5	17世紀	ウシ	基節骨	不明	1
14	上町2次	4区北	2面P400	18世紀中頃	イヌ	橈骨	左	1
15	上町2次	4区北	2面遺構検出	18世紀中頃	サメ類	椎骨	—	1
16	上町2次	4区北	3面P431	18世紀前半	硬骨魚綱	不明	不明	1
17	上町2次	4区南	1面遺構検出①	18世紀後半	ヒト	上顎第2切歯	右	1
18	上町2次	4区南	2面土坑29	18世紀中頃	シカ	角	不明	1
19	上町2次	4区南	2面遺構検出	18世紀中頃	クロダイ属	歯骨	右	1

3. 2. 保加町遺跡

上町遺跡では、二枚貝綱 1 分類群、軟骨魚綱 1 分類群、硬骨魚綱 7 分類群、哺乳綱 5 分類群、鳥

綱 2 分類群、計 16 分類群が同定された。

二枚貝綱　Bivalvia

アカニシ　*Rapana venosa*

軟骨魚綱　Chondrichthyes

ネズミザメ科　Lamnidae gen. et sp. Indet.

硬骨魚綱　Osteichthyes

硬骨魚綱の一種　Osteichthyes ord., fam., gen. et sp. Indet.

ハタ科　Serranidae gen. et sp. Indet.

タイ科　Sparidae gen. et sp. Indet.

マダイ亜科　Pagrinae gen et sp. Indet.

マダイ　*Pagrus major*

マグロ属　Thunnus sp.

ヒラメ科　Paralichthyidae gen. et sp. Indet.

哺乳綱　Mammalia

哺乳綱の一種　Mammalia ord., fam., gen. et sp. Indet.

ヒト　*Homo sapiens*

ウシ　*Bos taurus*

ハクジラ亜目　Odontoceti fam., gen. et sp. Indet.

ウマ　*Equus caballus*

鳥綱　Aves

トビ　*Milvus migrans*

キジ科　Phasianidae gen. et sp. Indet.

時期ごとに同定された分類群を記すと、17 世紀後半の下位包含層では、ハタ科（大型）、マグロ属、キジ科（ニワトリの可能性）が確認された。18 世紀前半の溝などでは、ネズミザメ科、硬骨魚綱、マダイ亜科、マグロ属が確認された。18 世紀中頃の溝や土坑などでは、アカニシ、哺乳綱、ウシ、ウマ、硬骨魚綱、ハタ科（大型）、タイ科、マダイ、マグロ属、ヒラメ科、トビ、キジ科（ニワトリの可能性）が確認された。18 世紀後半の溝、土坑、敷石遺構、整地層などでは、硬骨魚綱、ハタ科（大型）、哺乳綱、ヒト、ハクジラ亜目（イルカ類）、ウマ、キジ科（ニワトリの可能性）が確認された。

ヒト（18 世紀後半）は遊離した歯 1 点のみの出土であり、抜けた歯が放棄された可能性がある。ウシ（18 世紀中頃）は、下顎骨 1 点のみの出土であり、由来を考えるのが難しいが、荷物の運搬用にウシが使役されていた可能性がある。

ウマ（18 世紀中頃、18 世紀後半）は、18 世紀中頃の溝から歯 2 点が出土しており、荷物の運搬用にウマが使役されていた可能性がある。なお、ウマの年齢は歯冠高から 6 ～ 7 才頃と 8 歳頃と推定される。また、18 世紀後半の土坑から出土しているウマの基節骨 1 点には、切創（カットマーク）の可能性がある傷が見られ、ウマが解体された可能性も考えられる。

食用と考えられる動物としては、貝類ではアカニシ、魚類ではネズミザメ科、ハタ科（大型）、

タイ科、マダイ亜科、マダイ、マグロ属、ヒラメ科、哺乳類ではハクジラ亜目（イルカ類）、鳥類ではトビ、キジ科（ニワトリの可能性）などが挙げられる。大型のハタ科（17 世紀後半、18 世紀中頃、18 世紀後半）は、クエの現生標本と比較したところ、特徴が完全には一致せず、スジアラなど他の大型のハタ科の可能性もある。現代において、クエやスジアラなど大型のハタ科は、美味で高級魚とされている。ハタ科（大型）やマダイなど上町遺跡では見られなかった魚類が見られ、保加町遺跡の住人は上町遺跡とは魚類に対する嗜好が異なっていた可能性がある。また、マグロ属の尾椎（18 世紀前半）には、椎体を横断する方向の切断痕が見られ、骨ごと身を輪切りにして分割していた可能性がある。キジ科（ニワトリの可能性）とした鳥類骨は、ニワトリ、キジ、ヤマドリなどキジ科現生標本との比較で、形態やサイズからニワトリの可能性があったが、キジ科の同定に留めた。

表2　保加町遺跡から出土した動物遺体

番号	遺跡名	地区名	遺構名	時期	分類群	部位	左右	数量
20	保加町2次	6①区	2面土坑2	18世紀中頃	ウシ	下顎骨	左	1
21	保加町2次	6②区	1面溝3	18世紀後半	哺乳綱	椎骨	—	1
22	保加町2次	6②区	1面溝3	18世紀後半	ハクジラ亜目	椎骨	—	4
23	保加町2次	6②区	1面溝3	18世紀後半	ハタ科(大型)	前上顎骨	左	1
24	保加町2次	6②区	1面P57	18世紀後半	硬骨魚綱	不明	不明	1
25	保加町2次	6②区	2面土坑8	18世紀中頃	硬骨魚綱	尾椎	—	1
26	保加町2次	7①区	2面P31	18世紀中頃	マグロ属	尾椎	—	1
27	保加町2次	9①区	2面遺構検出	18世紀中頃	マグロ属	尾椎	—	1
28	保加町2次	9①区	3面遺構検出	18世紀前半	鳥綱？	四肢骨	不明	1
29	保加町2次	9③区	2面遺構検出	18世紀中頃	キジ科	脛足根骨	左	1
30	保加町2次	9③区	2面遺構検出	18世紀中頃	トビ	手根中手骨	右	1
31	保加町2次	9③区	2面遺構検出	18世紀中頃	マグロ属	尾椎	—	1
32	保加町2次	10区北	2面遺構検出	18世紀中頃	哺乳綱	不明	不明	1
33	保加町1次		溝1a	18世紀前半	ネズミザメ科	椎骨	—	2
34	保加町2次	3地点	土坑2	18世紀中頃	マグロ属	尾椎	—	5
35	保加町2次	3地点	土坑2	18世紀中頃	ヒラメ科	椎骨	—	1
36	保加町2次	3地点	下位包含層	17世紀後半	マグロ属	尾椎	—	1
37	保加町2次	1地点	土坑1	18世紀中頃	マグロ属	椎骨(腹椎？)	—	1
38	保加町2次	3地点	溝1	18世紀中頃	ハタ科(大型)	歯骨	左	1
39	保加町2次	3地点	溝1	18世紀中頃	ハタ科(大型)	前上顎骨	左	1
40	保加町2次	3地点	P1貝殻混層	18世紀後半	硬骨魚綱	不明	不明	2
41	保加町2次	3地点	溝1	18世紀中頃	タイ科	舌額骨	左	1
42	保加町2次	3地点	下位包含層	17世紀後半	ハタ科(大型)	舌額骨	右	1
43	保加町1次		SX2	18世紀前半	硬骨魚綱	不明	不明	1
44	保加町2次	3地点	溝1	18世紀中頃	硬骨魚綱	主鰓蓋骨	右	1
45	保加町1次		SX2	18世紀前半	マダイ亜科	主上顎骨	右	1
46	保加町2次	3地点	溝1	18世紀中頃	硬骨魚綱	不明	不明	1
47	保加町2次	3地点	溝1	18世紀中頃	マダイ	前頭骨	—	1
48	保加町2次	3地点	溝1	18世紀中頃	マダイ	上後頭骨、外後頭骨、基後頭骨	—	1
49	保加町2次	3地点	溝1	18世紀中頃	硬骨魚綱	肋骨	不明	1
50	保加町2次	3地点	土坑7	18世紀後半	ウマ	基節骨	不明	1
51	保加町2次	1地点	溝2	18世紀中頃	ウマ	下顎第3あるいは第4前臼歯	右	1
52	保加町2次	3地点	溝1	18世紀中頃	ウマ	上顎第3前臼歯	右	1
53	保加町2次	2地点	敷石遺構	18世紀後半	ヒト	上顎第1あるいは第2後臼歯	左	1
54	保加町2次	3地点	溝1	18世紀中頃	ハタ科(大型)	主上顎骨	左	1
55	保加町2次	3地点	下位包含層	17世紀後半	キジ科	脛足根骨	左	1
56	保加町1次		溝1a	18世紀前半	マグロ属	尾椎	—	1
57	保加町2次	3地点	第1遺構面整地層	18世紀後半	キジ科	脛足根骨	右	1
58	保加町2次	2地点	第1遺構面整地層	18世紀後半	ハクジラ亜目	椎骨	—	1
59	保加町2次	3地点	溝1	18世紀中頃	アカニシ	殻	—	1

参考文献

松井章（2008）動物考古学．312p，京都大学学術出版会.

図版1　上町遺跡から出土した動物遺体

1. サルボウ右殻(番号8)　2. サメ類椎骨(15)
3. ネズミザメ科椎骨(10)　4. クロダイ属右歯骨(19)
5. マグロ属尾椎(1)　6. ヒト上顎右第2切歯(17)　7. イヌ左下顎骨(3)
8. イヌ左橈骨(14)　9. シカ角(18)　10. シカ右上腕骨(12)
11. シカ末節骨(11)　12. ウシ基節骨(13)　13. ハクジラ亜目歯(7)
14. ウマ下顎右第2あるいは第3前臼歯(4)　15. キジ科右上腕骨(2)

図版2　保加町遺跡から出土した動物遺体　※矢印は切創や切断痕

1. アカニシ殻(番号59)　2. ネズミザメ科椎骨(33)　3. ハタ科(大型)左前上顎骨(23)
4. ハタ科(大型)左前上顎骨(39)　5. ハタ科(大型)左主上顎骨(54)　6. ハタ科(大型)左歯骨(38)
7. ハタ科(大型)右舌顎骨(42)　8. マダイ亜科右主上顎骨(45)　9. マダイ前頭骨(47)
10. マダイ上後頭骨・外後頭骨・基後頭骨(48)　11. マグロ属尾椎(34)　12. マグロ属尾椎(56)
13. ヒラメ科椎骨(35)　14. ヒト上顎左第1あるいは第2後臼歯(53)　15. 哺乳綱部位不明破片(32)
16. ウシ左下顎骨(20)　17. ハクジラ亜目(イルカ類)椎骨(22)　18. ウマ上顎右第3前臼歯(52)
19. ウマ下顎右第3あるいは第4前臼歯(51)　20. ウマ基節骨(50)　21. トビ右手根中手骨(30)
22. キジ科(ニワトリ？)左脛足根骨(55)

2　保加町遺跡出土の骨・貝類

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

保加町遺跡 (福岡県柳川市保加町に所在) は、柳川城下町の北入口である井出橋の向かい側に位置する町屋跡で、安永 9 年 (1780 年) の火災痕跡よりも下層から検出され、18 世紀前葉～中葉のものとされている。

本報告では、2 次調査および 3 次調査の遺構や聖地層などから出土した骨貝類について、その種類を明らかにするため骨・貝同定を実施した。

1. 試料

試料は、土坑・溝などの遺構内、および聖地層などから出土した骨貝類 19 試料 (No.1 ～ 19) である。既にクリーニングされた状態である。なお、試料の詳細は、結果とともに表示する。

2. 分析方法

試料を肉眼および実体顕微鏡下で観察し、形態的特徴から種・部位を同定する。なお、貝類の生態等については、奥谷ほか (2000)、奥谷編著 (2004) などを参考とする。

3. 結果

検出された種類は、腹足綱 3 種類 (オオコシダカガンガラ・アカニシ・オニニシ)、二枚貝綱 2 種類 (カキ類・ハマグリ)、硬骨魚綱 3 種類 (クロダイ属・マダイ・マグロ類)、哺乳綱 2 種類 (ヒト・イルカ類) である (表 1)。同定結果を表 2 に示す。以下、試料ごとに記す。

・No.1(3 次土坑 2)
　マグロ類の尾椎である。椎体長 33.88mm を計る。

・No.2(3 次土坑 2)
　魚類の腹椎である。椎体長 12.52mm を計る。

・No.3(2 次 4 地点第 1 遺構面)
　イルカ類の椎骨の、未化骨で外れた椎体板である。椎体径 72.59mm を計る。

・No.4(2 次 5 地点溝 2)
　イルカ類の椎骨の可能性がある破片である。

・No.5(2 次 4 地点第 1 遺構面)
　哺乳類の部位不明破片である。

・No.6(3 次溝 3)
　マダイの上後頭骨である。

・No.7(3 次 2 面整地層)
　魚類の椎骨である。

表1. 検出分類群一覧

軟体動物門 Phylum Mollusca
　腹足綱 Class Gastropoda
　　前鰓亜綱 Subclass Prosobranchia
　　古腹足目 Order Vetigastropoda
　　ニシキウズガイ科 Family Trochidae
　　オオコシダカガンガラ *Omphalius pfeifferi carpenteri*
　　新腹足目 Order Neogastropoda
　　アッキガイ科 Family Muricidae
　　レイシガイ亜科 Subfamily Rapaninae
　　アカニシ *Rapana venosa*
　　テングニシ科 Family Melongenidae
　　オニニシ *Hemifusus crassicaudus*
　二枚貝綱 Class Bivalvia
　　翼形亜綱 Subclass Pteriomophia
　　カキ目 Order Ostreoida
　　カキ亜目 Suborder Ostreina
　　イタボガキ科 Family Ostreidae
　　カキ類 *Crassostrea* sp.
　　異歯亜綱 Subclass Heterodonta
　　マルスダレガイ目 Order Veneroida
　　マルスダレガイ科 Family Veneridae
　　ハマグリ *Meretrix lusoria*
脊椎動物門 Phylum Vertebrata
　硬骨魚綱 Class Osteichthyse
　　条鰭亜綱 Subclass Actinopterygii
　　スズキ目 Order Perciformes
　　スズキ亜目 Suborder Percoidei
　　タイ科 Family Sparidae
　　ヘダイ亜科 Subfamily Sparinae
　　クロダイ属 *Acanthopagrus* sp.
　　マダイ亜科 Subfamily Pagrinae
　　マダイ *Pagrus major*
　　サバ亜目 Suborder Scombroidei
　　サバ科 Family Scombridae
　　マグロ類 *Thunnus* sp.
　哺乳綱 Class Mammalia
　　サル目(霊長目) Order Primates
　　ヒト科 Family Hominidae
　　ヒト *Homo sapiens*
　　クジラ目 Order Cetacea
　　ハクジラ亜目 Suborder Odontoceti
　　マイルカ科 Family Delphinidae
　　イルカ類 Gen. et. sp. indet.

表2. 骨・貝類同定結果

番号	調査次	地点等	種類	部位	左 右	状態等	数量	備考
1	3次	土坑2	マグロ類	尾椎		破片	1	椎体長33.88mm
2	3次	土坑2	魚類	腹椎		破片	1	椎体長12.52mm
3	2次	4地点第1遺構面	イルカ類	椎骨		椎体板	1	椎体径72.59mm
4	2次	5地点溝2	イルカ類?	椎骨?		破片	1 +	
5	2次	4地点第1遺構面	不明	不明		破片	1	
6	3次	溝3	マダイ	上後頭骨		破片	1	
7	3次	2面整地層	魚類	椎骨		破片	1	破片
8	3次	土坑8	マダイ	歯骨	右	略完	1	全長38.73mm
9	3次	土坑8	クロダイ属	主上顎骨	右	略完	1	全長39.14mm
10	3次	土坑4	マグロ類	主上顎骨	左	破片	1	
11	2次	溝2裏込め	木片			破片	1	
12	3次	土坑5	マダイ	歯骨	右	略完	1	全長53.14mm
13	3次	1面整地層	オオコシダカガンガラ	殻		略完	1	殻長30.66mm
14	2次	2地点土坑4	ヒト	頭蓋		前頭骨	1	壮年以下,女性?
15	3次	土坑2	オニニシ	殻		破片	1	殻長135mm±
16	3次	土坑2	アカニシ	殻		略完	1	殻長100mm±
17	3次	土坑2	アカニシ	殻		略完	1	殻長157.93mm
18	3次	土坑7	カキ類	殻		破片	1	殻高140mm以上
19	3次	1面整地層	ハマグリ	殻	右	略完	1	殻長90.02mm、殻高72.74mm

・No.8(3 次土坑 8)

マダイの右歯骨である。ほぼ完存する。全長 38.73mm を計る。

・No.9(3 次土坑 8)

クロダイ属の右主上顎骨である。ほぼ完存する。全長 39.14mm を計る。

・No.10(3 次土坑 4)

マグロ類の左主上顎骨の破片である。

・No.11(2 次溝 2 裏込め)

骨ではなく、木片である。

・No.12(3 次土坑 5)

マダイの右歯骨である。ほぼ完存する。全長 53.14mm を計る。

・No.13(3 次 1 面整地層)

オオコシダカガンガラである。殻長 30.66mm を計る。

・No.14(2 次 2 地点土坑 4)

ヒトの頭蓋骨で、前頭骨である。冠状縫合が確認され、内側、外側とも閉じてない。

・No.15(3 次土坑 2)

オニニシである。殻長 135mm 前後を計る。

・No.16(3 次土坑 2)

アカニシである。殻長 100mm 前後を計る。

・No.17(3 次土坑 2)

アカニシである。殻長 157.93mm を計る。

・No.18(3 次土坑 7)

カキ類である。スミノエガキに近いが、保存状態が著しく悪く、表面も溶けており、殻頂部も欠損するため詳細不明である。現状で殻高 140mm 以上を計る。

・No.19(3 次 1 面整地層)

ハマグリの右殻である。殻長 90.02mm、殻高 72.74mm を計る。

4. 考察

今回検出された中でヒト以外は、食料資源として利用されていたとみられる。オオコシダカガンガラが岩礁域、アカニシ・オニニシが浅海の砂底域、カキ類が湾内、ハマグリが潮間帯下部～水深20m の内湾の砂泥底から採取され、流通していたものと思われる。

類では、内湾域でクロダイ属、沖合でマダイ・マグロ類が捕獲されたのであろう。マダイは、歯骨、上後頭骨がみられたが、No.12 の右歯骨は比較的大型の個体であったとみられる。なお、No.2(3 次土坑２) で検出された魚類の腹椎も比較的大型の個体に由来する可能性がある。

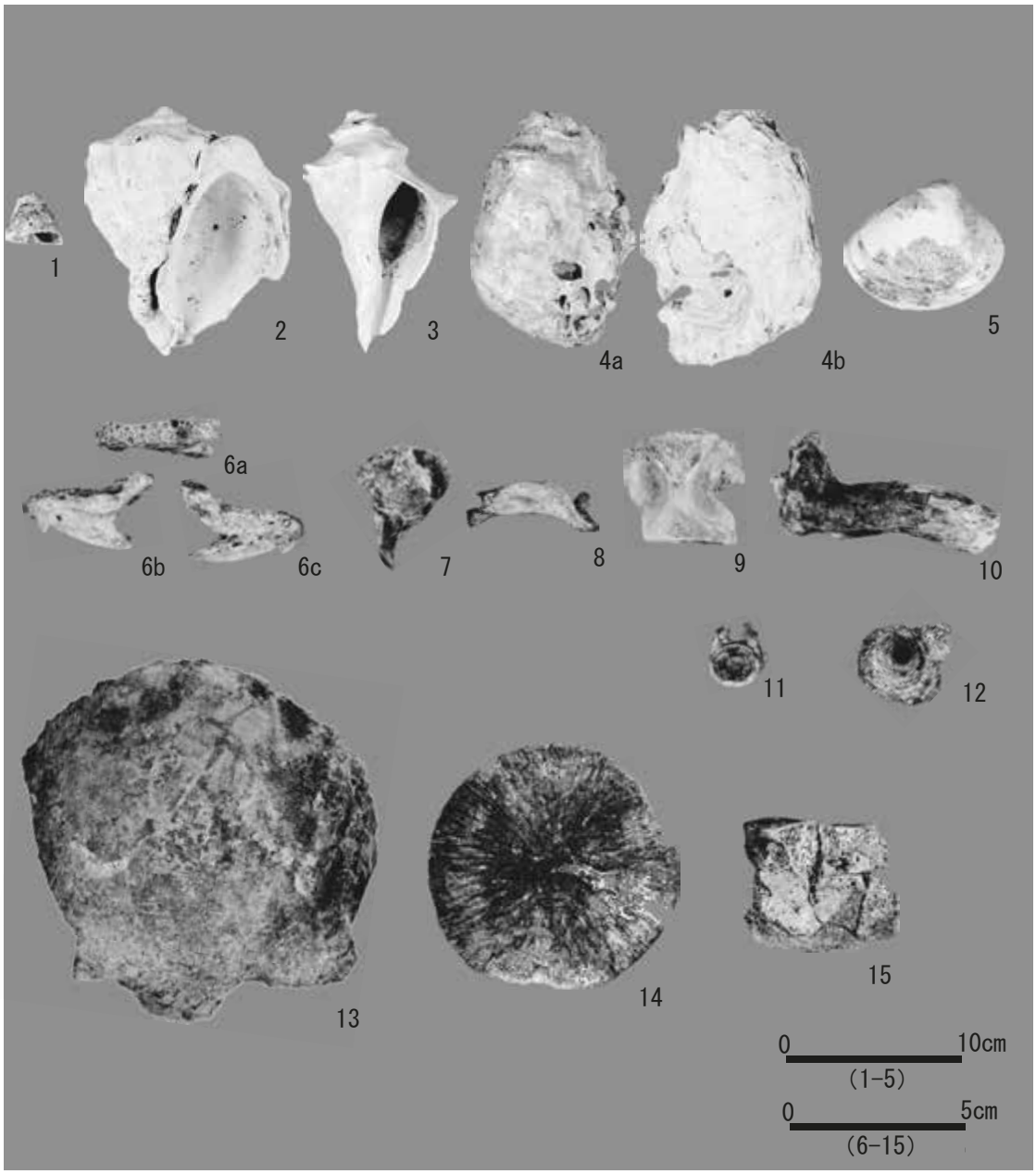
海域に棲息するイルカ類は、椎骨がみられた。漁法などは不明であるが、幼体のイルカ類が捕獲されていたことから、当然成体も捕獲されていたとみられる。椎骨が検出される点をみると、解体された肉として流通していたのではなく、水揚げされたものが近隣で解体されていた可能性もある。ヒトは、２次２地点土坑４で、前頭骨が検出されている。眉上隆起が発達せず、前頭骨の形状から女性の可能性がある。本人骨は、冠状縫合の内側が閉じてないことから、壮年 (20 ～ 30 歳代) 以下とみられる。

引用文献

奥谷喬司編著 ,2004, 改訂新版　世界文化生物大図鑑　貝類 . 株式会社世界文化社 .399p.

奥谷喬司・窪寺恒己・黒住耐二・斎藤　寛・佐々木猛智・土田英治・土屋光太郎・長谷川和範・濱谷　巌・速水　格・堀　成夫・松隈明彦 ,2000, 日本近海産貝類図鑑 . 奥谷喬司編 , 東海大学出版会 ,1173p.

図版１　出土骨・貝類



1. オオコシダカカンダラ殻（3次面整地層：13）
2. アカニシ殻（3次土坑２：17）
3. オニニシ殻（3次土坑２：15）
4. カキ類殻（3次土坑７：18）
5. ハマグリ右殻（3次1面整地層：19）
6. マダイ上後頭骨（3次溝3：6）
7. マダイ右歯骨（3次土坑8：8）
8. クロダイ属右主上顎骨（3次土坑8：9）
9. マグロ尾椎（3次土坑2：1）
10. マグロ類左主上顎骨（3次土坑4：10）
11. 魚類腹椎骨（3次土坑2：2）
12. 魚類椎骨（3次2面整地層：7）
13. ヒト前頭骨（2次2地点土坑4：14）
14. イルカ類椎体板（2次4地点第１遺構面：3）
15. イルカ類?椎骨?（2次5地点溝２：4）

３　上町・保加町遺跡出土木製品樹種同定報告

株式会社古環境研究所

１．はじめに

木製品の材料となる木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、木材構造の特徴から概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であるが、木製品では樹種による利用状況や流通を探る手がかりにもなる。

本報告では、上町・保加町遺跡より出土した木製品について樹種同定を行い、当時の木材利用ならびに植生を検討する。

２．試料

試料は、保加町遺跡２次より出土した№1～59の柱材、杭下端、建築材、下駄、杭材など59点、上町遺跡２次より出土した№60～75の柱材、大型柱材、杭材、下駄片など16点の木製品計75点である。試料の詳細は結果とともに表１に記す。なお、時代はいずれも17～18世紀代である。

３．方法

樹種同定は、次の方法で行った。試料からカミソリを用いて新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって40～1000倍で観察した。同定は、木材構造の特徴および現生標本との対比によって行った。

４．結果

表１に結果を示し、各分類群の基本三断面の顕微鏡写真を写真図版に示す。以下に同定根拠となった木材構造の特徴を記す。

１）モミ属　Abies　マツ科　　写真１

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は比較的緩やかである。放射柔細胞の分野壁孔は小型のスギ型で１分野に１～４個存在する。放射柔細胞の壁は厚く、数珠状末端壁が見られる。放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の特徴からモミ属に同定される。日本に自生するモミ属は５種であり、モミ以外は亜寒帯種であるため温帯性のモミであると考えられる。常緑高木で高さ45ｍ、径1.5ｍに達する。材は軽軟で保存性が低いが、現在では多用される。

２）マツ属複維管束亜属　Pinus subgen. Diploxylon　マツ科　　写真２

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管、垂直・水平樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は急である。放射柔細胞の分野壁孔は窓状で、放射仮道管の内壁には鋸歯状肥厚が存在する。放射組織は単列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。

以上の特徴からマツ属複維管束亜属に同定される。マツ属複維管束亜属には二次林を形成するアカマツと海岸林を形成するクロマツがあり、いずれも北海道南部、本州、四国、九州に分布する常

緑高木である。材は水湿によく耐え、広く用いられる。

３）スギ　Cryptomeria japonica D.Don　スギ科　　写真３

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、１分野に２個存在するものがほとんどである。放射組織は単列の同性放射組織型で、１～14 細胞高である。

以上の特徴からスギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する日本特産の常緑高木で高さ 40 m、径２mに達する。材は軽軟であるが強靭で、広く用いられる。

４）スダジイ　Castanopsis sieboldii Hatusima　ブナ科　　写真４

年輪のはじめに中型から大型の道管がやや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる単列の同性放射組織型である。

以上の特徴からスダジイに同定される。スダジイは本州（福島県、新潟県佐渡以南）、四国、九州に分布する常緑高木で、高さ 20 m、径 1.5 mに達する。材は耐朽性･保存性がやや低いが、建築、器具などに用いられる。

５）コナラ属コナラ節　Quercus sect. Prinus　ブナ科　　写真５

年輪のはじめに大型の道管が１～数列配列する環孔材である。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少し､晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する。道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の特徴からコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがある。北海道、本州、四国、九州に分布する落葉高木で、高さ 15 m、径 0.6 mぐらいに達する。材は重硬かつ強靭で弾力に富み、建築材などに用いられる。

６）コナラ属アカガシ亜属　Quercus subgen. Cyclobalanopsis　ブナ科　　写真６

中型から大型の道管が１～数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の特徴からコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがある。本州、四国、九州に分布する常緑高木で、高さ 30 m、径 1.5 m以上に達する。材は堅硬かつ強靭で耐湿性も高く、特に農耕具に用いられる。

７）シキミ　Illicium religiosum Sieb. et Zucc.　モクレン科　　写真７

小型で角張った道管がほぼ単独で密に分布する散孔材である。早材部の年輪界付近において、道管がやや並ぶ傾向を示す。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で､階段の数は 50 以上である。放射組織は平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる異性放射組織型で、１～３細胞幅である。放射組織の直立細胞は大きく目立つ。

以上の特徴からシキミに同定される。シキミは本州（関東以西）、四国、九州、沖縄に分布する常緑小高木で、高さ 10 m、径 0.3 mに達する。材はやや重硬で粘りがあり、旋作、器具、薪などに用いられる。

８）クスノキ　Cinnamomum camphora Presl　クスノキ科　　写真８

中型から大型の道管が単独および２～数個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の周囲を鞘状に軸方向柔細胞が取り囲んでいる。道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁にらせん肥厚が存在する。放射組織は異性放射組織型で１～２細胞幅である。上下の縁辺部の直立細胞の中には、しばしば大きく膨れ上がったものが存在する。

以上の特徴からクスノキに同定される。クスノキは本州（関東以西）、四国、九州、沖縄に分布する常緑高木で、通常高さ 25 m、径 0.8 mぐらいであるが、高さ 50 m、径５mに達するものもある。材は堅硬で耐朽性・保存性が高く芳香があり、建築、器具、楽器、船、彫刻、ろくろ細工などに用いられる。

９）クスノキ科 Lauraceae　　写真９

中型から小型の道管が単独および２～数個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の周囲を鞘状に軸方向柔細胞が取り囲んでいる。道管の穿孔は単穿孔のものが存在する。放射組織は上下縁辺部のみ直立細胞からなる異性放射組織型で１～３細胞幅である。

以上の特徴からクスノキ科に同定される。クスノキ科にはクスノキ、ヤブニッケイ、タブノキ、カゴノキ、シロダモ属などがある。なお、本試料は道管径の大きさから、クスノキ以外のクスノキ科の樹種である。

10）イスノキ　Distylium racemosum Sieb. et Zucc.　マンサク科　　写真 10

小型でやや角張った道管がほぼ単独に散在する散孔材である。軸方向柔細胞が接線方向に黒い線状に並んで見られ、ほぼ一定の間隔で規則的に配列する。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は比較的少なく 15 前後のものが多い。放射組織は異性放射組織型で、ほとんどが１～２細胞幅である。

以上の特徴からイスノキに同定される。イスノキは本州（関東以西）、四国、九州、沖縄に分布する常緑高木で、高さ 20 m、径１mに達する。材は重硬で耐朽性・保存性が高く、建築、器具、楽器、ろくろ細工、櫛、薪炭などに用いられる。

11）サクラ属　Prunus　バラ科　　写真 11

丸い道管が単独あるいは２～３個放射方向および斜め方向に複合して散在する散孔材である。道管の径は早材部から晩材部にかけて緩やかに減少する。道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は同性に近い異性放射組織型である。

以上の特徴からサクラ属に同定される。サクラ属にはヤマザクラ、ウワミズザクラ、シウリザクラ、ウメ、モモなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する落葉の高木または低木である。材は概して重硬で粘りがあり、耐朽性・保存性が高く、建築材、器具材などに用いられる。

12）サカキ　Cleyera japonica Thunb.　ツバキ科　　写真 12

小型の道管が単独ないし２個複合して密に散在する散孔材である。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は 60 を越えるものも観察される。放射組織は平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる異性放射組織型で単列である。

以上の特徴からサカキに同定される。サカキは本州（関東以西）、四国、九州、沖縄に分布する常緑高木で、通常高さ８～ 10 m、径 0.2 ～ 0.3 mである。材は重硬かつ強靭で、建築、器具などに用いられる。

13）ナツツバキ属　Stewartia　ツバキ科　　写真 13

小型で丸い道管がほぼ単独で散在する散孔材である。早材部から晩材部にかけて道管の径は緩やかに減少する。晩材部において軸方向柔細胞は短接線状に配列する。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は 20 ～ 30 本ぐらいである。放射組織は上下端の１～４細胞ほどが直立細胞からなる異性放射組織型で、１～３細胞幅である。

以上の特徴からナツツバキ属に同定される。ナツツバキ属にはナツツバキ、ヒメシャラなどがあり、本州（福島県、新潟県以西）、四国、九州に分布する落葉高木で、高さ 15 m、径 0.6 mまでになる。材は重硬かつ強靱で、現在では建築（特に皮付床柱）、器具、彫刻、旋作、薪炭などに用いられる。

14）モッコク　Ternstroemia gymnanthera Beddome　ツバキ科　　写真 14

小型の道管がほぼ単独、ときに２～４個複合して散在する散孔材である。軸方向柔細胞は散在状ないし短接線状に配列する。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は 20 ～ 40 本ぐらいである。道管放射組織間壁孔は小型のふるい状でやや多い。放射組織は上下端の１～４細胞ほどが大型の直立細胞からなる異性放射組織型で、１～４細胞幅である。

以上の特徴からモッコクに同定される。モッコクは本州（千葉県以西）、四国、九州、沖縄に分布する常緑高木で、高さ 10 m、径 0.8 mまでになる。材は重硬かつ強靱なうえ肌目が緻密で耐朽性・保存性が高く、建築、器具、彫刻、旋作、薪炭などに用いられる。

15）タケ亜科　Bambusoideae　イネ科　　写真 15

基本組織である柔細胞の中に並立維管束が不規則に分布する。並立維管束は木部と師部からなり、その周囲に維管束鞘が存在する。

以上の特徴からタケ亜科に同定される。タケ亜科にはマダケ属、メダケ属、ササ属などがある。なお、本試料は径が５cm 以上で、節の部分が２段であるためマダケの可能性が考えられる。マダケは本州、四国、九州、沖縄に分布し、高さ 20 m、径５㎝以上になる。材は伸縮性が小さく、物差し、尺八、提灯や傘の骨、熊手などに用いられ、燃料材としても有用である。

５．考察

同定の結果、保加町遺跡２次より出土した木製品は、スギ 28 点、マツ属複維管束亜属 13 点、モミ属１点、スダジイ７点、コナラ属アカガシ亜属２点、コナラ属コナラ節１点、イスノキ１点、クスノキ１点、サクラ属１点、サカキ１点、ナツツバキ属１点、モッコク１点、タケ亜科１点であった。最も多いスギは柱材、柱材下端、建築材、丸太材、杭下端、小型杭、半裁材、不明に使われている。スギは木理通直で加工工作が容易なうえ、大きな材がとれる良材で、建築材はもとより板材や小さな器具類に至るまで幅広く用いられる。次いで多いマツ属複維管束亜属は柱材、大型柱材、大型角材、建築材、丸太材、木杭、下駄、箱状木製品に使われている。マツ属複維管束亜属は重硬で水湿に良く耐え腐りにくい材で、建築材や土木材などに適している。九州北部では、スギやマツ属複維管束亜属は弥生時代から建築材や土木材としてよく使われ、近世においても多く利用される。モミ属は下駄に使われている。モミ属は耐朽性・保存性が低いが、軽軟なため加工工作が容易な材で、様々な用途に利用される。なお、福岡県における下駄の同定例としては、小倉城跡（戦国時代から江戸時代）のマツ属複維管束亜属やモミ属、宗玄寺跡（戦国時代から江戸時代後半）のスギなどの例がある。スダジイは柱材、小型柱材、角材、丸太材、半裁材、箱材に使われている。スダジイはやや重硬で耐朽性・保存性が低い材であるが、九州では古くからスダジイを含むシイ属を多く利用する

傾向があり、土木材や建築材など広く利用される。コナラ属アカガシ亜属、イスノキ、サカキ、ナツツバキ属、モッコクはいずれも柱材（柱材下端を含む）に使われている。これらの樹種は重硬かつ強靭な材で、特にコナラ属アカガシ亜属、イスノキ、モッコクは概して耐朽性・保存性が高い材である。西南日本では、コナラ属アカガシ亜属は弥生時代以降、農耕土木具に多用される傾向があるが、建築材にも使われ、サカキも柱材、垂木などの建築材として多く利用される。一方、イスノキ、ナツツバキ属、モッコクが建築材として用いられることは少ないが、福岡県では波多江遺跡（戦国時代から江戸時代初頭）からイスノキやナツツバキ属の柱材が出土し、宇留津川角遺跡（古墳時代中期から後期）などからモッコクの桁が出土している。用途不明ではあるが、コナラ属コナラ節は重硬かつ強靭な材で、九州では古くから建築材、土木材、薪炭材などに利用される。クスノキは漆皿に使われている。クスノキは重硬で耐朽性･保存性が高い材で、九州では弥生時代以降、槽、盤、皿などの容器類によく利用される。サクラ属は杭材に使われている。サクラ属は概してやや重硬なうえ粘りがある材で、九州では杭などの土木材や工具柄としての出土例が多い。タケ亜科は建築材に使われている。タケ亜科は乾燥が十分なされると硬さと柔軟さを備え割烈性に富み、また細工が容易な材であり、様々な素材として利用される。また、繊維が強く丈夫であり、他の材木と同様に建材としても利用される。

上町遺跡２次より出土した木製品は、マツ属複維管束亜属９点、スギ１点、コナラ属アカガシ亜属２点、イスノキ１点、クスノキ科１点、シキミ１点、ナツツバキ属１点であった。

マツ属複維管束亜属は柱材、柱材下端、大型柱材、杭材、矢板、スギは下駄片、コナラ属アカガシ亜属は柱材、杭材、イスノキは大型柱材、クスノキ科は柱材、シキミは杭材、ナツツバキ属は柱材下端にそれぞれ使われている。上述のようにマツ属複維管束亜属、コナラ属アカガシ亜属、イスノキ、ナツツバキ属は概して重硬で耐朽性・保存性が高く建築材や土木材に適しており、スギは加工工作が容易で下駄としてもよく利用される。クスノキ科は概して強さ中庸な材で､九州では柱材、垂木、礎板などの建築材として利用される。シキミはやや重硬で粘りがある材で、九州では杭材などの土木材としての出土例が多い。

６．まとめ

保加町遺跡２次、上町遺跡２次で出土した木製品について樹種同定を行った。その結果、保加町遺跡２次より出土した柱材、杭材、丸太材などには、加工が容易なうえ大きな材が得られるスギや重硬で耐朽性・保存性が高いマツ属複維管束亜属が多く使われ、上町遺跡２次より出土した柱材、杭材、矢板などにはマツ属複維管束亜属が多用されている。また、両遺跡とも数は少ないが、柱材、杭材、箱材、半裁材、丸太材、漆皿などには広葉樹が利用され、スダジイ、コナラ属アカガシ亜属、イスノキ、ナツツバキ属、サカキ、モッコク、コナラ属コナラ節、シキミ、サクラ属、クスノキなどの概して重硬かつ強靭な樹種が使われている。保加町遺跡２次、上町遺跡２次の両遺跡で同定されたモミ属、マツ属複維管束亜属、スギ、コナラ属コナラ節、サクラ属、タケ亜科は温帯に広く分布し、スダジイ、コナラ属アカガシ亜属、シキミ、クスノキ、クスノキ科、イスノキ、サカキ、ナツツバキ属、モッコクは温帯下部の暖温帯に分布する樹種である。特にスダジイ、クスノキ、モッコクは暖地の海岸沿いに多く生育する｡いずれの樹種も当時の遺跡周辺からか､地域的な流通によってもたらされたものと考えられる。

参考文献

伊東隆夫・山田昌久（2012）木の考古学．出土木製品用材データベース．海青社，449p.

北原龍士・雉古谷佳男・横山昌代（2001）宇留津・川角遺跡から出土した木材・木製品の樹種．日奈古・宇留津周辺の遺跡と岩丸・福間の遺跡　福岡県築上群築城町所在の遺跡，椎田町文化財調査報告書第 11 集，椎田町教育委員会，p.166 － 223.

佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.20-48.

佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.49-100.

島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，296p.

林弘也・松本昺（1982）波多江遺跡から出土した木製遺物の樹種同定．今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第６集上巻，福岡県教育委員会，p.95-97.

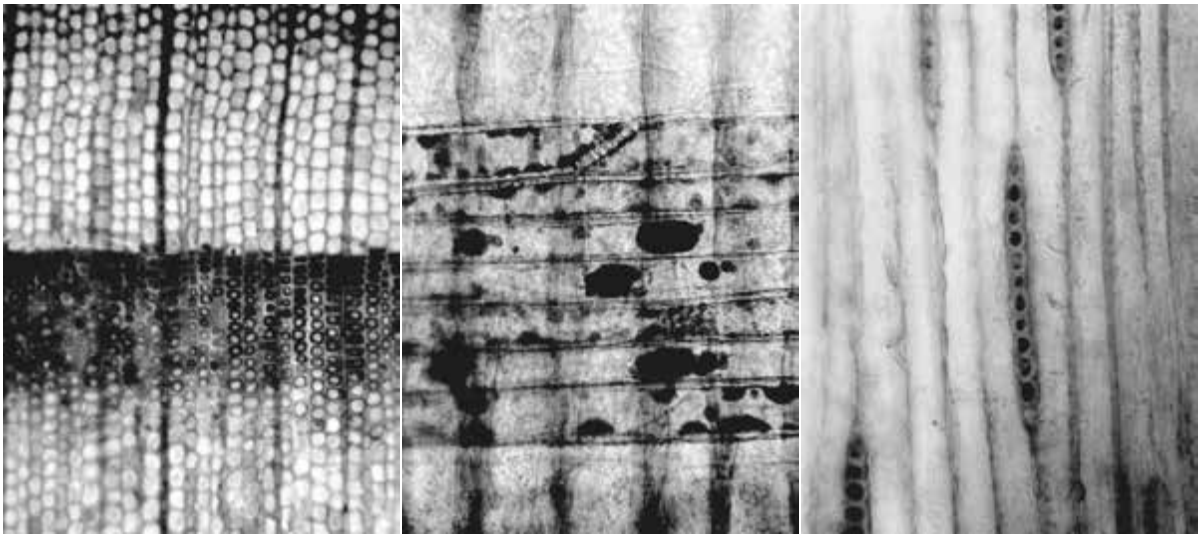
パリノ・サーヴェイ（1995）宗玄寺跡出土木材の樹種．宗玄寺跡，北九州市埋蔵文化財調査報告書第 172 集，財団法人北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室，p.496-501.

山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成－用材から見た人間・植物関係史．植生史研究特別第１号．植生史研究会，242p.

吉田生物研究所（1997）木製品．小倉城跡２　勝山公園地下駐車場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告２（第３分冊　遺物編），北九州市埋蔵文化財調査報告書第 196 集，（財）北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室，p.162 － 192.

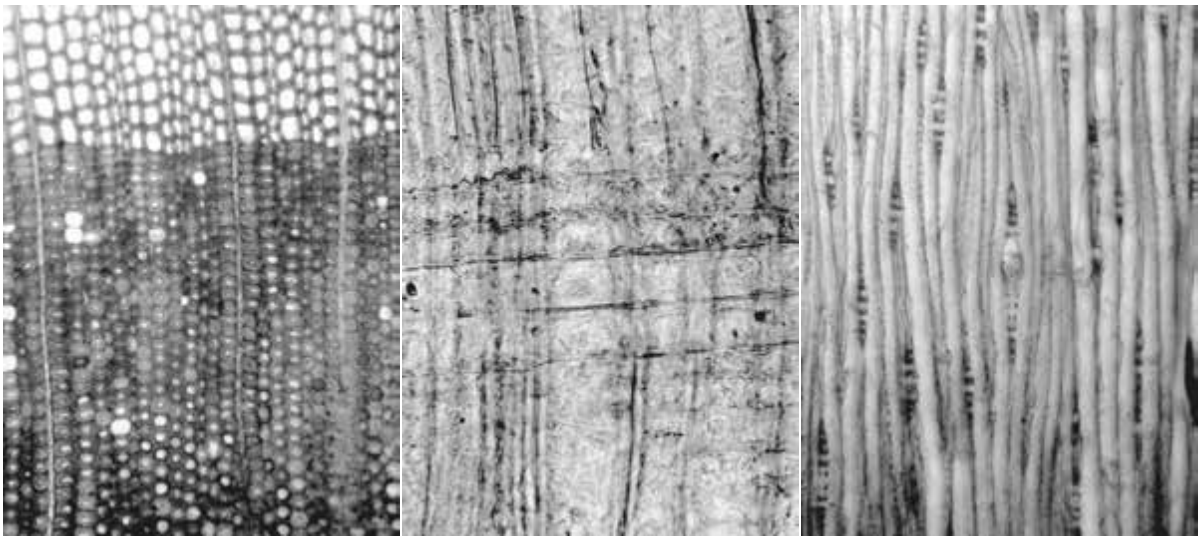
表１　上町・保加町遺跡における樹種同定結果

№	木製品名	遺跡名	地点	遺構面	遺構名	取上番号	結果（学名／和名）	
1	柱材		2		ピット18		*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属
2	柱材		4			木5	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ
3	柱材		4			木13	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ
4	大型柱材		5			木2	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属
5	杭下端		4			木2	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ
6	杭下端		3			木2	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ
7	不明		3			木4	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ
8	不明		4			木7	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ
9	不明		2		P16		*Quercus* sect. *Prinus*	コナラ属コナラ節
10	半裁材		2		ピット19		*Castanopsis sieboldii* Hatusima	スダジイ
11	柱材		3			木5	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ
12	柱材		3			木7	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ
13	柱材		3			木11	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ
14	小型杭		3			木15	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ
15	建築材		3			木17	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ
16	半裁材		3			木21	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ
17	柱材		3			木22	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属
18	丸太材		3			溝1	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ
19	柱材		5			木1	*Castanopsis sieboldii* Hatusima	スダジイ
20	柱材		3			木10	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ
21	柱材		3			木12	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ
22	丸太材		3			木15	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ
23	柱材		3？			木25	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属
24	丸太材		3		ピット19		*Castanopsis sieboldii* Hatusima	スダジイ
25	小型柱材		2		ピット20		*Castanopsis sieboldii* Hatusima	スダジイ
26	柱材		2		P15		*Cleyera japonica* Thunb.	サカキ
27	大型柱材		1		P17		*Pinus* subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属
28	角材		4			木2	*Castanopsis sieboldii* Hatusima	スダジイ
29	小型杭		3			木8	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ
30	柱材	保加町遺跡2次	3			木9	*Castanopsis sieboldii* Hatusima	スダジイ
31	丸太材		4			木11	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ
32	柱材下端		3			木27	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ
33	柱材下端		3			木1	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ
34	柱材		3			木3	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ
35	丸太材		3			木6	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ
36	柱材		3			木15？	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属
37	柱材		3			木18	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ
38	丸太材		3			木20	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ
39	柱材		3			木24	*Distylium racemosum* Sieb. et Zucc.	イスノキ
40	柱材		3			木28	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属
41	柱材下端		4			木1	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ
42	杭材		4			木1	*Prunus*	サクラ属
43	柱材		4			木3	*Ternstroemia gymnanthera* Beddome	モッコク
44	柱材下端		4			木6	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ
45	丸太材		4			木8	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ
46	丸太材		4			木12	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属
47	下駄		3		土7		*Abies*	モミ属
48	箱材		3		土7		*Castanopsis sieboldii* Hatusima	スダジイ
49	漆皿		1	P15			*Cinnamomum camphora* Presl	クスノキ
50	大型角材			ラベルなし	ラベルなし	ラベルなし	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属
51	柱材か		9	①		4番	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ
52	柱材下端		9	②	西壁土層断面		*Stewartia*	ナツツバキ属
53	下駄		9	③-2面	土坑14		*Pinus* subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属
54	木杭		9	②-3面		木杭	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属
55	柱材		8	④面	ピット		*Pinus* subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属
56	箱状木製品		仮1南	3面		P124	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属
57	建築材		仮3	4面	井戸1		*Pinus* subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属
58	建築材		4区南	4面		溝14	Bambusoideae	タケ亜科
59	柱材		2		P17		*Pinus* subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属
60	大型柱材			ラベルなし	ラベルなし	ラベルなし	*Distylium racemosum* Sieb. et Zucc.	イスノキ
61	柱材		1	③		杭-1	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属
62	杭材		1	④	P77		*Illicium religiosum* Sieb. et Zucc.	シキミ
63	柱材下端		1	③	遺構検出面		*Stewartia*	ナツツバキ属
64	柱材		1	③	遺構検出面		*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属
65	下駄片		1	③	遺構検出面		*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ
66	柱材		1	④	P81		*Pinus* subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属
67	柱材	上町遺跡2次	1	④	P102		Lauraceae	クスノキ科
68	柱材下端		1	③	P75		*Pinus* subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属
69	柱材		1	③		杭-1	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属
70	大型柱材		1	④	P81		*Pinus* subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属
71	大型柱材		1	③	遺構検出面		*Pinus* subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属
72	矢板		1	③	遺構検出面		*Pinus* subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属
73	杭材		1	④	P105		*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属
74	柱材		④	南4面			*Pinus* subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属
75	杭材		1	③		杭2	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属



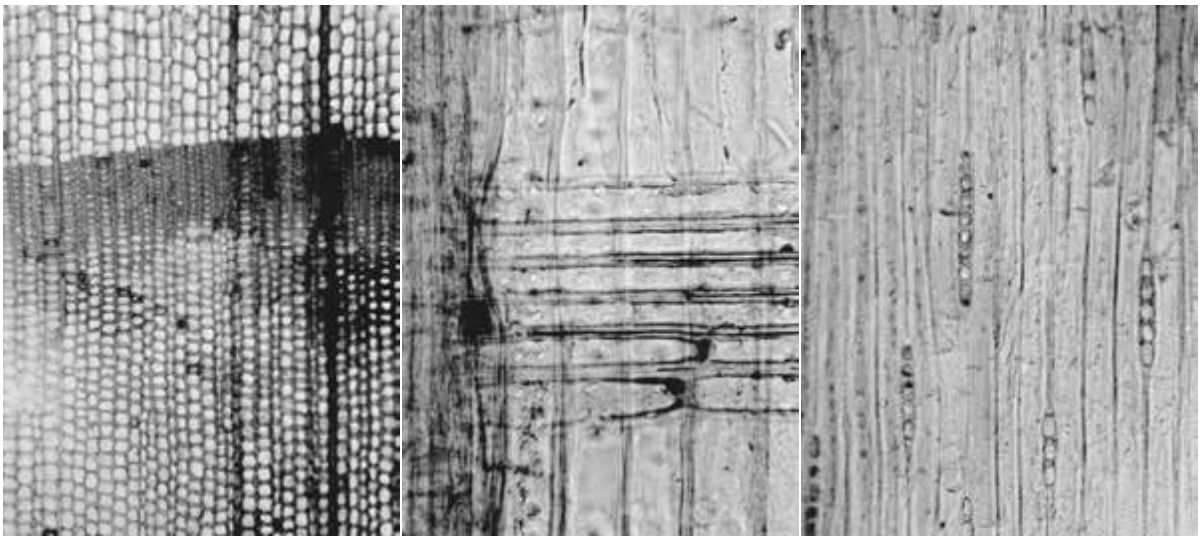
横断面 ━━ 0.1mm 放射断面 ━━ 0.1mm 接線断面 ━━ 0.1mm

１．モミ属　№47 木製品名下駄 保加町遺跡2次 地点3 遺構名土7



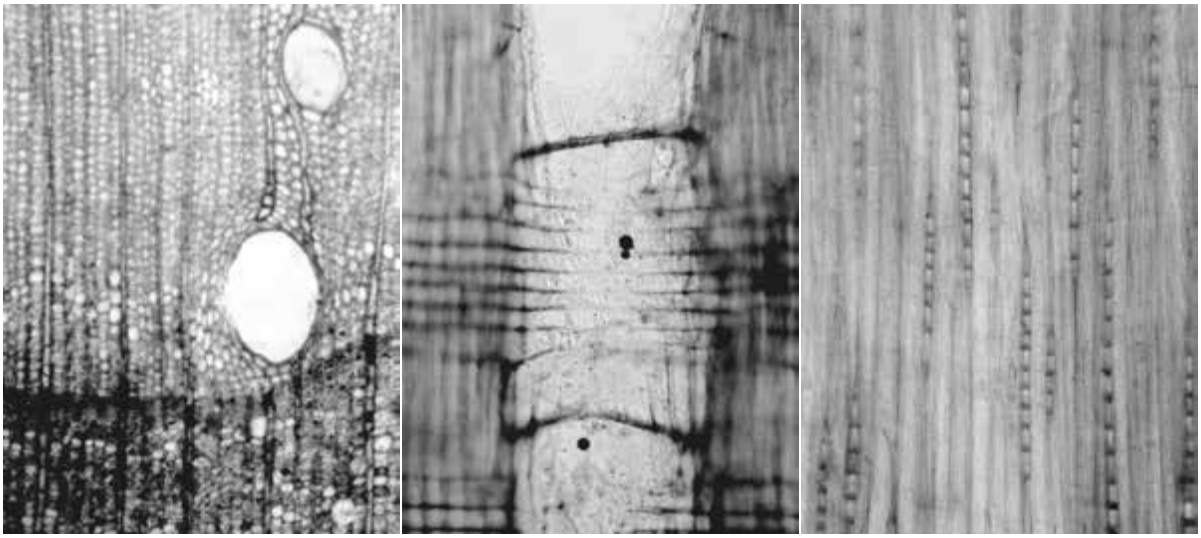
横断面 ━━ 0.1mm 放射断面 ━━ 0.1mm 接線断面 ━━ 0.1mm

２．マツ属複維管束亜属　№75 木製品名杭材 上町遺跡2次 地点1 取上番号杭2



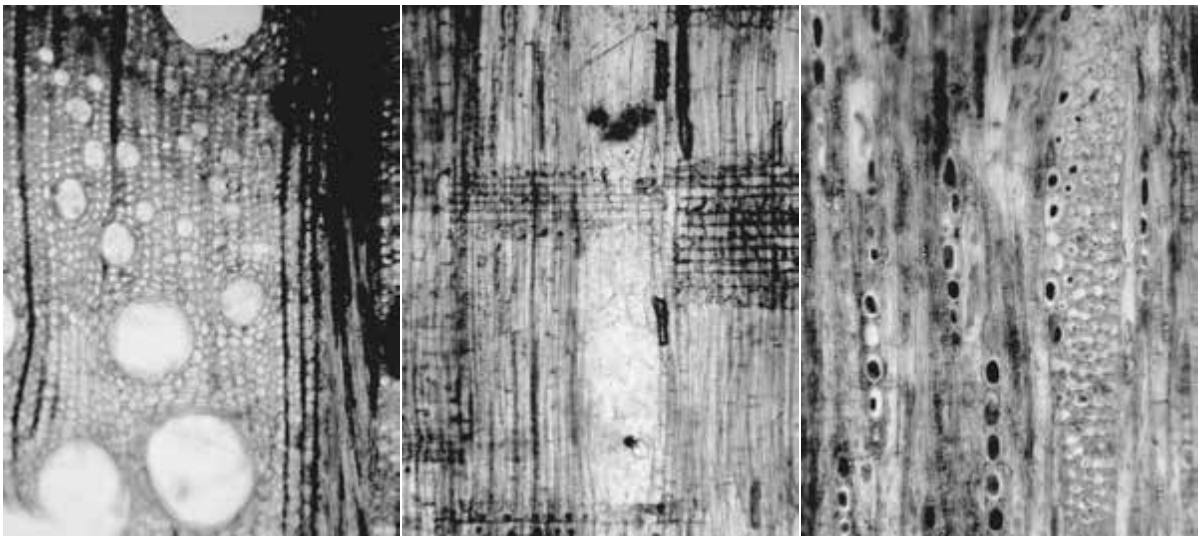
横断面 ━━ 0.1mm 放射断面 ━━ 0.1mm 接線断面 ━━ 0.1mm

３．スギ　№18 木製品名丸太材 保加町遺跡2次 地点3 取上番号溝1



横断面 ━━ 0.1mm 放射断面 ━━ 0.1mm 接線断面 ━━ 0.1mm

４．スダジイ　№28 木製品名角材 保加町遺跡2次 地点4 取上番号木2

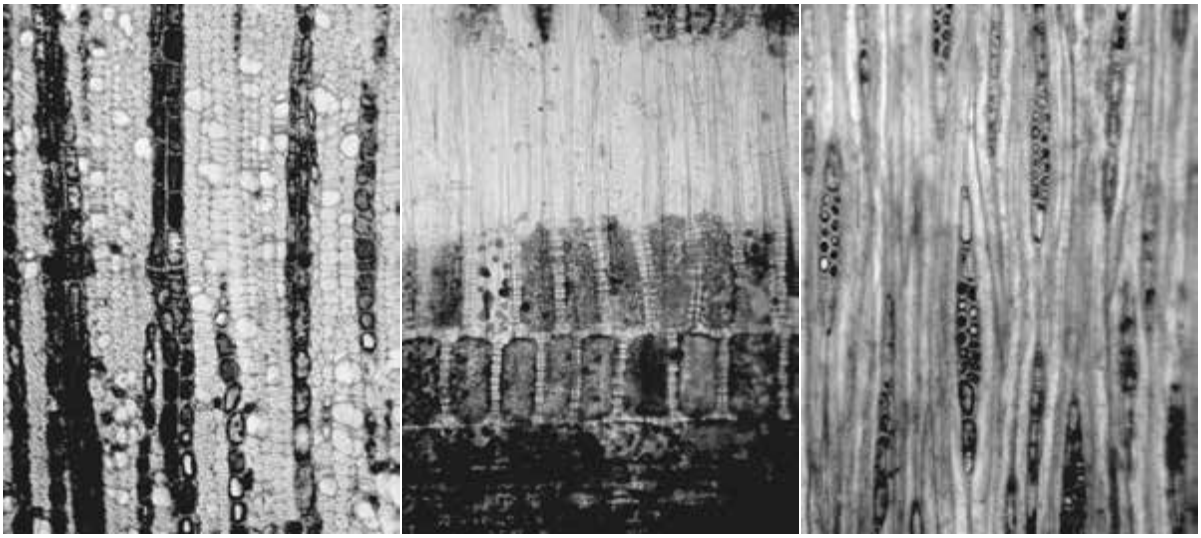


横断面 ━━ 0.1mm 放射断面 ━━ 0.1mm 接線断面 ━━ 0.1mm

５．コナラ属コナラ節　№9 木製品名不明 保加町遺跡2次 地点2 遺構名P16

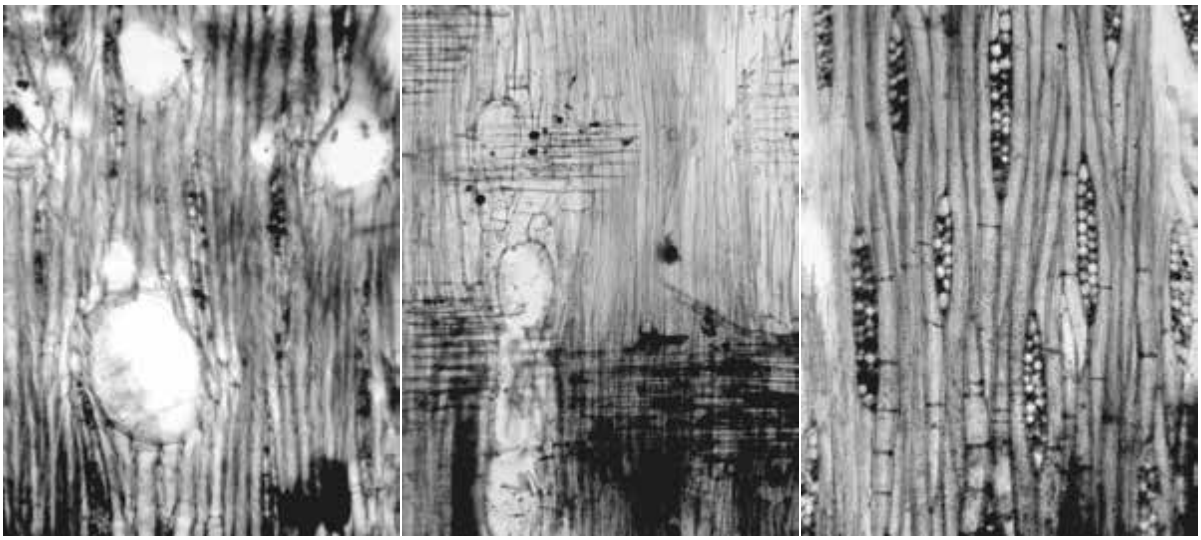
横断面 ━━ 0.1mm 放射断面 ━━ 0.1mm 接線断面 ━━ 0.1mm

６．コナラ属アカガシ亜属　№40 木製品名柱材 保加町遺跡2次 地点3 取上番号木28



横断面 ━━ 0.1mm 放射断面 ━━ 0.1mm 接線断面 ━━ 0.1mm

７．シキミ　№62 木製品名杭材 上町遺跡2次 地点1 遺構名P77

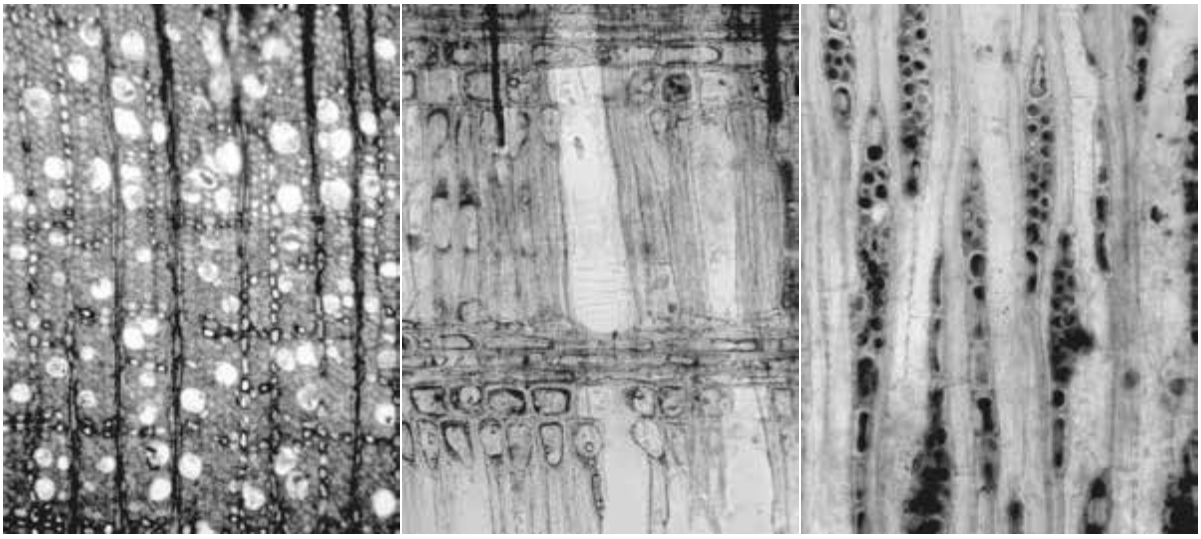


横断面 ━━ 0.1mm 放射断面 ━━ 0.1mm 接線断面 ━━ 0.1mm

８．クスノキ　№49 木製品名漆皿 保加町遺跡2次 地点1 遺構面P15

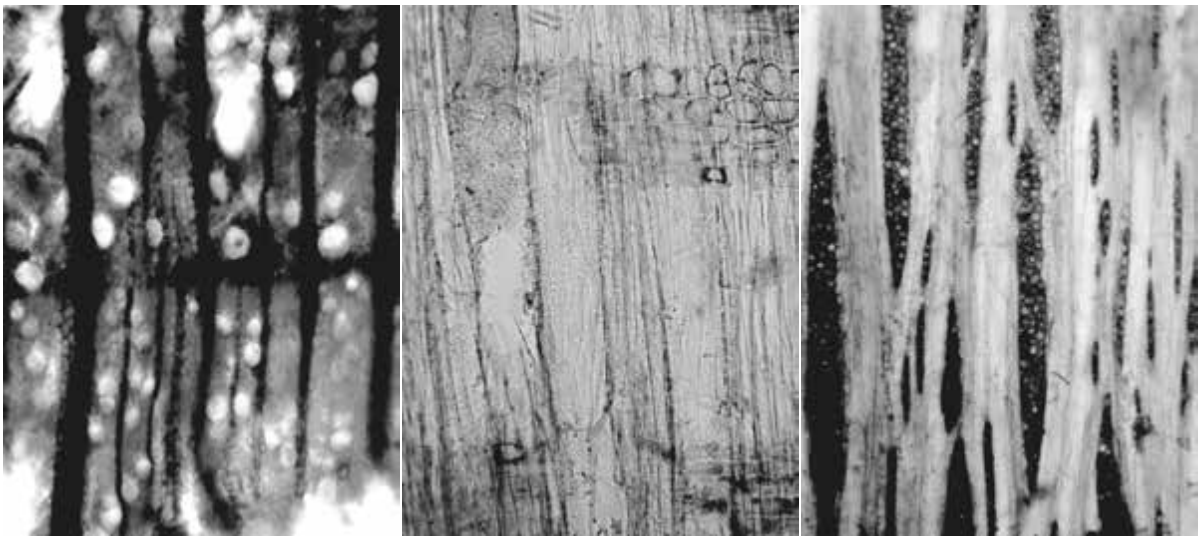
横断面 ━━ 0.1mm 放射断面 ━━ 0.1mm 接線断面 ━━ 0.1mm

９．クスノキ科　№67 木製品名柱材 上町遺跡2次 地点1 遺構面④ 遺構名P102



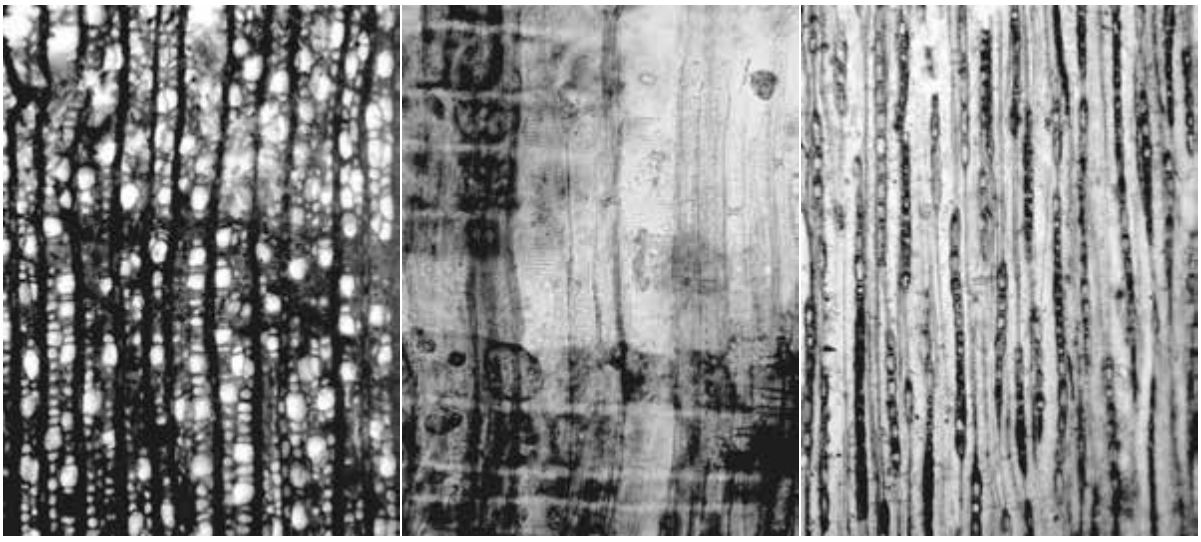
横断面 ━━ 0.1mm 放射断面 ━━ 0.1mm 接線断面 ━━ 0.1mm

10. イスノキ №39 木製品名柱材 保加町遺跡2次 地点3 取上番号木24



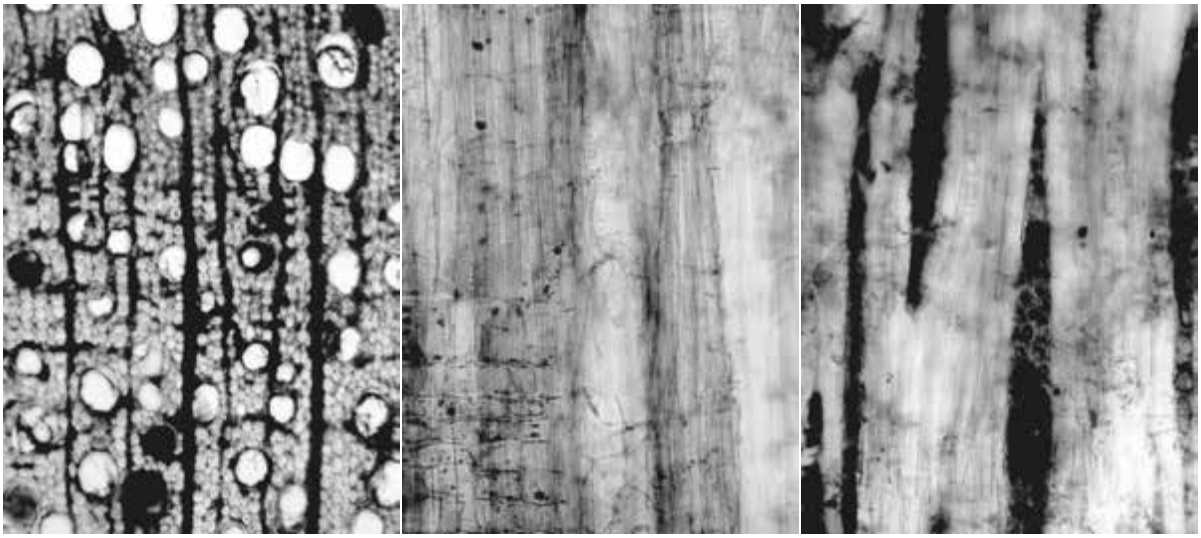
横断面 ━━ 0.1mm 放射断面 ━━ 0.1mm 接線断面 ━━ 0.1mm

11. サクラ属 №42 木製品名杭材 保加町遺跡2次 地点4 取上番号木1



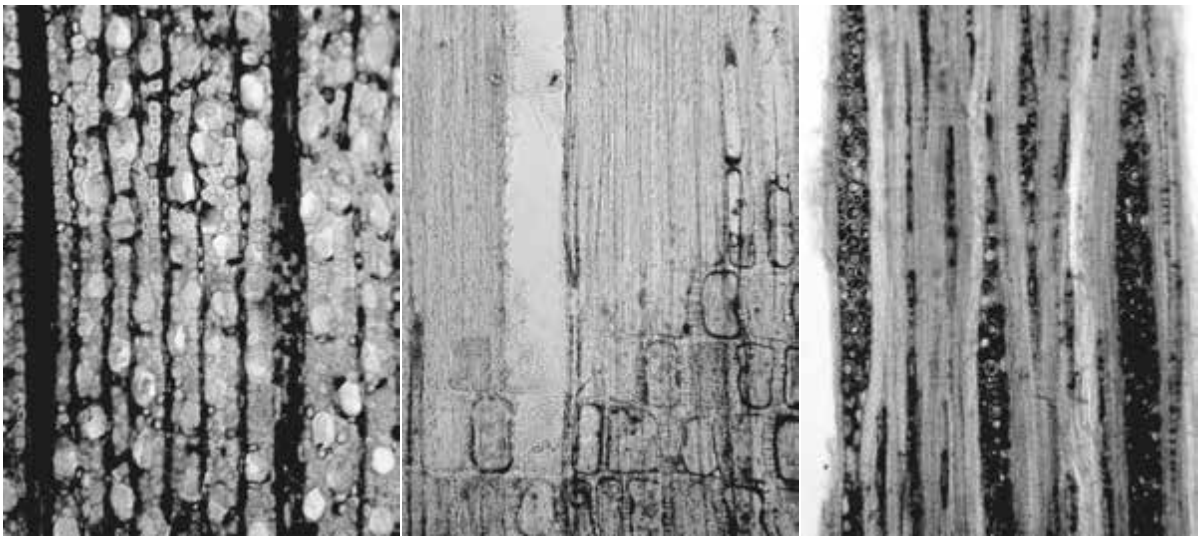
横断面 ━━ 0.1mm 放射断面 ━━ 0.1mm 接線断面 ━━ 0.1mm

12. サカキ №26 木製品名柱材 保加町遺跡2次 地点4 取上番号木1



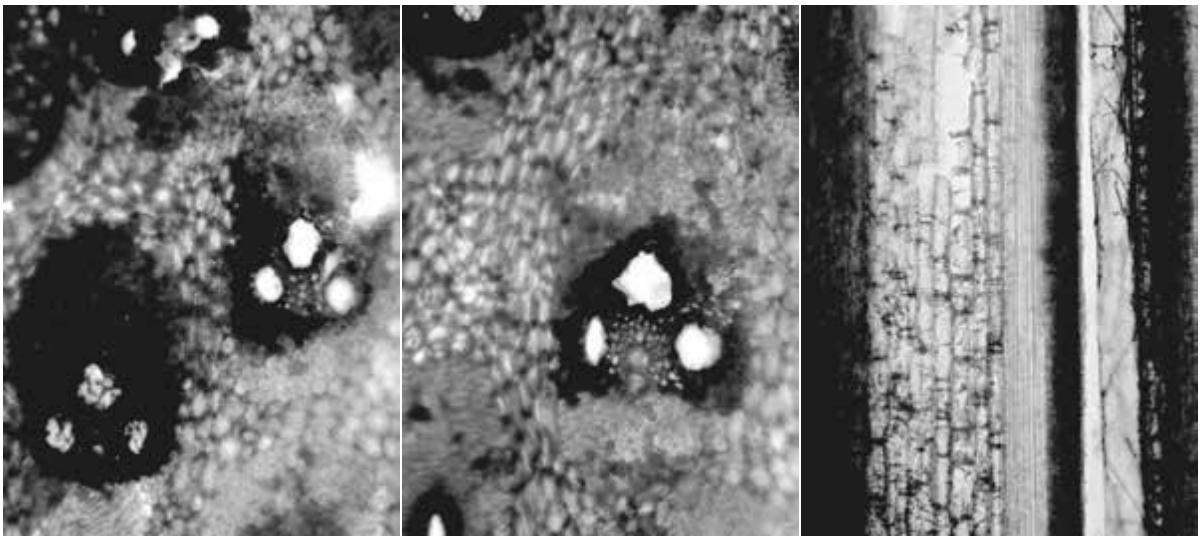
横断面 ━━ 0.1mm 放射断面 ━━ 0.1mm 接線断面 ━━ 0.1mm

13. ナツツバキ属 №52 木製品名柱材下端 保加町遺跡2次 地点9 遺構名西壁土層断面



横断面 ━━ 0.1mm 放射断面 ━━ 0.1mm 接線断面 ━━ 0.1mm

14. モッコク №43 木製品名柱材 保加町遺跡2次 地点4 取上番号木3



横断面 ━━ 0.1mm 放射断面 ━━ 0.1mm 接線断面 ━━ 0.1mm

15. タケ亜科 №58 木製品名建築材 保加町遺跡2次 地点4区南 遺構面4面 取上番号溝14

4　保加町遺跡から出土した大型植物遺体

佐々木由香・バンダリ スダルシャン（パレオ・ラボ）

1. はじめに

福岡県柳川市保加町に所在する保加町遺跡は、柳川城下町の北の入口、井出橋の向かい側に位置する江戸時代の町屋跡である。ここでは、18 世紀代の大型植物遺体の同定結果を報告し、食用などとして利用された植物や、遺跡周辺における栽培状況について検討する。

2. 試料と方法

試料は、肉眼で確認され、取り上げられた 2 試料である。試料は、1 次調査で検出された土坑 3 と 2 次調査の 3 地点で検出された P12 から採取された。遺構の時期は、土坑 3 が 18 世紀前半、P12 が 18 世紀中葉と推定されている。

同定・計数は、肉眼および実体顕微鏡下で行った。試料は、九州歴史資料館に保管されている。

3. 結果

同定した結果、木本植物で広葉樹のモモ核と草本植物のトウガン種子の 2 分類群が見いだされた（表 1）。

以下、産出した種実について遺構別に記載する。

1 次の土坑 3：トウガン種子が 1 点得られた。

2 次 3 地点の P12：モモ核が 1 点得られた。

次に、得られた分類群の記載を行い、図版に写真を示して同定の根拠とする。なお、分類群の学名は米倉・梶田（2003-）に準拠し、APG Ⅲリストの順とした。

表1　保加町遺跡から出土した大型植物遺体

		調査年次	1次	2次
		地区名	－	3地点
		遺構名	土坑3	P12
		時期	18世紀	18世紀
分類群		法	現地取上げ	
モモ	核			1
トウガン	種子		1	

(1) モモ　Amygdalus persica L.　核　バラ科

茶褐色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は楕円形。下端に大きな着点がある。表面に不規則な深い皺がある。片側側面には縫合線に沿って深い溝が入る。縫合面はやや欠けている部分がある。高さ 22.3mm、幅 17.9mm、厚さ 12.9mm。

(2) トウガン　Benincasa hispida (Thunb.) Cogn.　種子　ウリ科

淡褐色で、倒卵形。表面は平滑。基部両側に薄い突出部がある。周囲を縁取る肥厚があり、中央部は窪む。長さ 10.3mm、幅 6.3mm。

4. 考察

18 世紀の遺構から出土した大型植物遺体を同定した結果、栽培植物で食用可能な種実として、モモとトウガンが得られた。

モモは、食用に用いられた後、遺構内に堆積した可能性などが考えられる。山梨県内の遺跡から出土したモモ核の事例を集成した新津（1999）によると、モモの核は時代ごとに大きさや形状が変化しており、弥生時代には比較的大きくかつ丸味が強い核が多いのに対し、平安時代から近世には縦長になる傾向があるという。さらに、奈良・平安時代の核長は 2.36 ～ 2.66cm で、鎌倉期には大

きさの変異幅が大きくなり、江戸時代後期になると大型になって、平均核長 2.69cm、最大で 3.8cm 程度の核がみられるとしている。今回の保加町遺跡の江戸時代 18 世紀中葉のモモ核は高さ 2.23cm で、山梨県で出土している江戸時代のモモ核と比較するとかなり小さい。しかし、今回検討した点数は 1 点のみで、状態もあまり良くないため、追加試料があれば、再検討に期待したい。

トウガンは、食用となる果実を利用するために、不要な種子が捨てられた可能性などが考えられる。福岡県の江戸時代のトウガン種子は、柳川市矢加部町屋敷遺跡で出土例があり、17 世紀中葉から後葉の土坑から約 1/2 個分の果実も出土している（佐々木・バンダリ，2012）。

保加町遺跡から出土した大型植物遺体 2 点は、果樹のモモと畑作作物のトウガンで、いずれも人々の生活に結び付く植物であり、当時の利用植物の一端を示す資料が得られたといえる。今回は肉眼で確認され、回収された大型の種実を検討したが、次は堆積物中の大型植物遺体もあわせて分析できれば、当時の利用植物や栽培状況がより明らかになると考えられる。

引用文献

新津　健（1999）遺跡から出土するモモ核について―山梨県内の事例から―．山梨考古学論集 IV，361-374，山梨県考古学協会．

佐々木由香・バンダリ スダルシャン（2012）矢加部町屋敷遺跡から出土した大型植物遺体．九州歴史資料館編「矢加部町屋敷遺跡Ⅳ・蒲船津西ノ内遺跡・蒲船津水町遺跡―有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第 12 集」：219-224，九州歴史資料館．

米倉浩司・梶田　忠（2003-）BG Plants 和名－学名インデックス（YList），http://ylist.info

スケール 1, 2：5㎜

図版1　保加町遺跡から出土した大型植物遺体

1．モモ核（2次、3地点、P12）、2．トウガン種子（1次、土坑3）

V　まとめ

1　遺構

保加町遺跡では、４つの遺構面が検出された。調査区ごとに屋敷地の建て替え時期によりやや差異があるものの、大規模な整地はほぼ同時期に行われたものと見られる。出土遺物の検討により、第１遺構面は19世紀前葉から明治前期、第２遺構面は18世紀前葉から19世紀初頭、第３遺構面は17世紀後葉から18世紀初頭、第４遺構面は17世紀前葉から17世紀中葉で、それより遡る遺構はない。沖端川を挟んだ対面に位置する上町遺跡では16世紀末から17世紀初頭の遺物が多く出土しているので、上町の成立の方が早かったのではないだろうか。

『柳河明証図絵』と『出橋并二御門図』には、井手橋は現在の位置より西にあり、北側の道路を現道が踏襲しているものと考えられたが、上町側と保加町側は１直線になっておらず、上町側が東側に位置している。したがって、現道を踏襲するとすれば両遺跡のどちらかに道路状遺構が検出されるはずだが、どちらからも確認できなかった。しかし、保加町遺跡では東西両側で建物を区画する石組溝が確認されたので、保加町側の道路はずれていないことがわかった。したがって、上町遺跡２次調査で石組溝や明瞭な礎石建物跡が発見されなかったのは、多くが道路にかかっていたからではないだろうか。

保加町遺跡で検出された建物跡は、溝で区画された屋敷地に作られており、区画の幅はほぼ均等だが、上町遺跡の調査では、区画を跨ぐ建物も存在する。古絵図によると町屋にも下級武士も居住しており、武家は２区画を使用することもあったので、これにあたるのだろう。

第１・２遺構面の建物は礎石建物で、石組の溝や、石列による区画が見られる。第３遺構面は、礎石と柱穴の底に石を敷いた掘立柱建物跡が共存しているが、第４遺構面では掘立柱建物跡のみで、瓦が出土しないので板葺の建物のみだったのだろう。こうした変遷から、町の発展していく様を見て取れる。

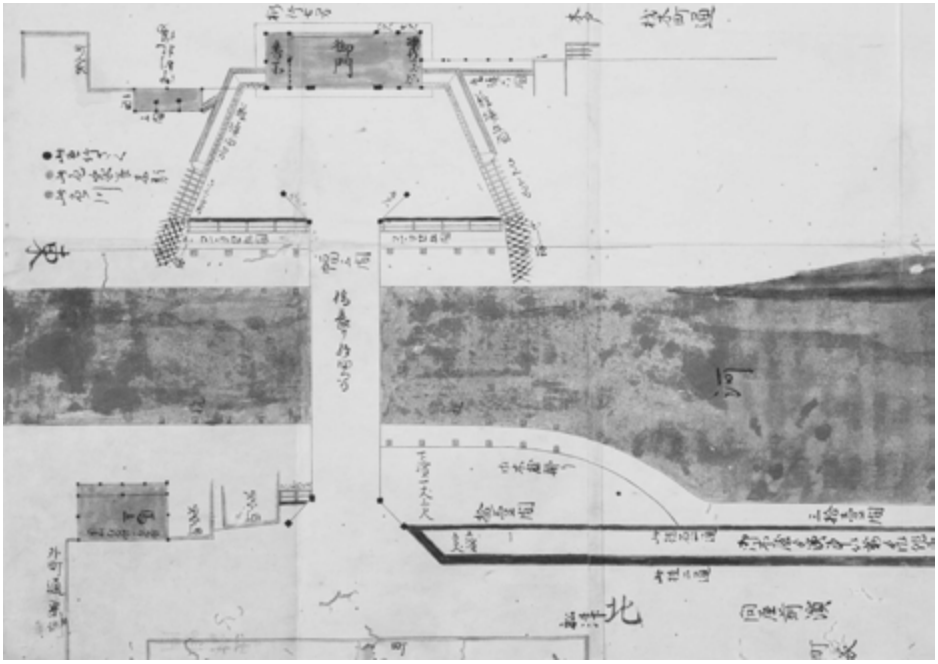
『出橋并二御門図』に描かれた川岸の「馬立」は、保加町の現道が動いてないとすれば、現道下に位置することになるとともに、川幅も広がっていることが予測されるので、残っていないだろう。これに対し、『柳河明証図絵』に描かれた問屋場の馬小屋は、街道の東なので２次調査10区と３次調査の調査範囲にあたり、３次調査１号礎石建物跡あった可能性がある。

礎石建物跡の中には、２次調査９区のように石塔部材を礎石に転用したものが見られる。石材の入手しにくい柳川地区では、礎石を確保するのも難しいらしく、土地区画の再編から墓地が整理されたことにより、不要になった石塔を再利用したものだろうが、同じ事例は上町遺跡にも見られ、石塔も形態が酷似しているので、同じ墓地の石塔を再利用したのだろう。保加町には寺院も墓地もなく、調査区内で集団墓らしいものは上町・保加町遺跡の双方で確認されていない。遠方から持ち込まれた石塔かもしれない。

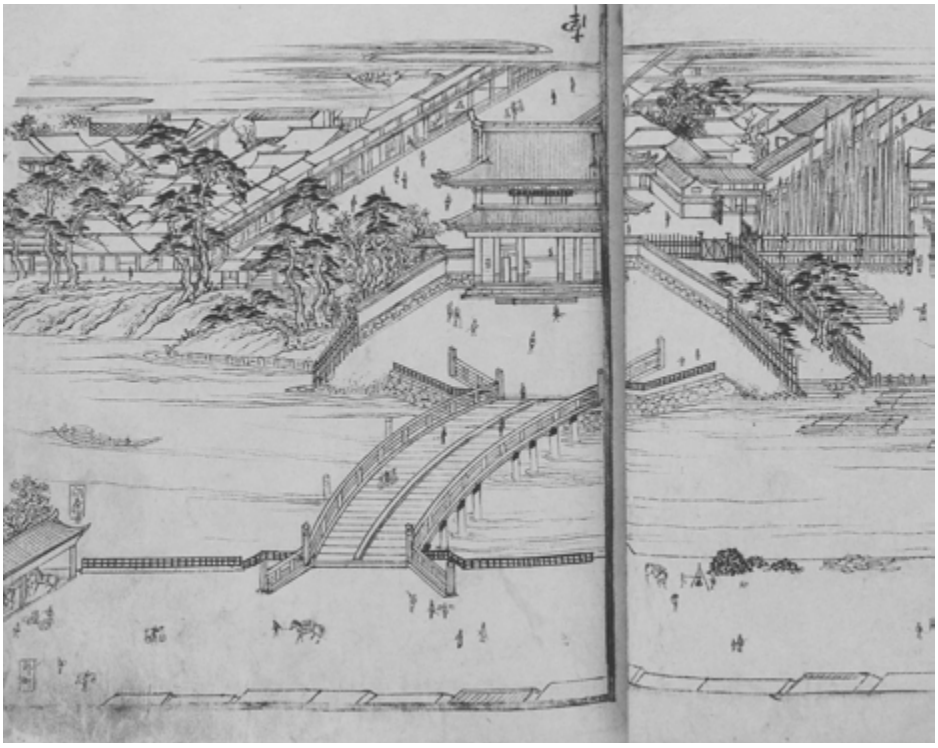
カマドは３次調査でのみ確認されたが、両側面に板石を建てるタイプで、床面の掘り込みが大きいことが特徴的だった。火床らしい焼土のみが確認された調査区もあったので、異なるタイプもあったようだ。

2　窯跡と窯道具

３次調査では窯跡が２基並んで発見された。竪形の窯で、火床は生活面から 30cmほど低く、壁が断面袋状なので生活面より上には窄まるように粘土で天井を作り、煙突を付けたのだろう。棒状土製品や箱形の窯道具が出土しているので、何らかの焼成を行っていたことは間違いない。陶磁器のような陶磁器類を焼ける窯ではなく、瓦質土器や瓦を焼くには小型すきる。構造の簡素さと規模か



旧藩主立花家史料『出橋并ニ御門』井出橋部分



旧藩主立花家史料『柳河明証図絵』井出橋部分

第 164 図　保加町関係古絵図

らみて、土人形を焼いた窯ではないだろうか。坩堝も出土しているので、鋳物師が閑期に焼いていたのかもしれない。

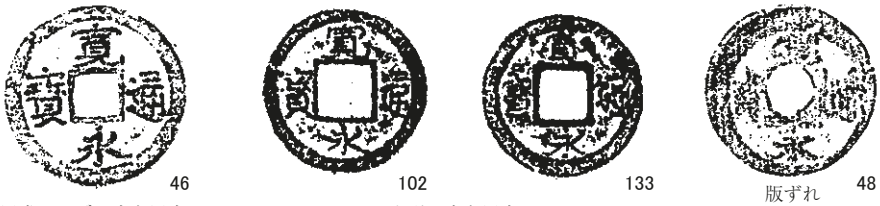
上町遺跡と保加町遺跡は土人形の出土量も多いが、同一工人が作ったと見られるものが数多く見られる。これは、同じ柳川城下町の本町遺跡や、街道沿いの町屋である矢加部町屋敷遺跡と比べても顕著な傾向でおり、製作地が近いことに起因するのではないだろうか。本遺跡の窯跡が土人形を焼いた傍証になりうる状況である。

洪武通宝と寛永通宝の模鋳銭

上町遺跡では多くの漳州窯系と李朝陶磁が出土しており、保加町遺跡でも少ないものの李朝陶磁は見られた。『柳河明証図絵』の「井手橋」に見られるように、保加町の西側は「本船津町」で、沖端川の川津として機能していたことがわかる。漳州窯系と李朝陶磁も有明海を通した海運によってもたらされたものだが、考えうるのは制限貿易を行っている中で唯一開港している長崎を経由した製品だろう。

ここで、上町遺跡と保加町遺跡の特徴である洪武通宝の多さに注目したい。宋銭などほかの銭種も存在するが、寛永通宝と洪武通宝が圧倒的に多く、この２者は掲載していないものも含めて、上町遺跡で、古寛永通宝 178（掲載 35）枚･新寛永通宝 64（掲載 23）枚･洪武通宝 629（掲載 67）枚、保加町遺跡では古寛永通宝 215（掲載 171）枚・新寛永通宝 134（掲載 106）枚・洪武通宝 312（掲載 212）枚である。近世遺跡で出土する銅銭はほとんどが寛永通宝で、わずかに渡来銭が前代の名残のように混ざるのが一般的である。両遺跡の洪武通宝の多さと中国李朝陶磁の多さは無関係ではないだろう。長崎貿易の決済通貨としては､｢長崎貿易銭｣という宋銭が使われたといわれているが、宋銭のみを使う必要はなかったのではないだろうか。古銭収集家の間では「筑前洪武」と呼ばれる摸鋳銭があるが､使用される時代は特定されていなかった。今回の調査で江戸時代でも「筑前洪武」が鋳造されていたとすれば、洪武通宝も長崎貿易に使用されていた可能性がある。

このことの傍証として、摸鋳された寛永通宝を提示する。仙台藩など有力な藩が幕府に願い出て鋳造した寛永通宝は質の良いもので、本遺跡出土のような粗製品はない。おそらく、洪武通宝は中国商人に支払う際の通貨で、中国商人は日本人に支払い際は寛永通宝を使いたいが、制限貿易下では寛永通宝は海外に流出しないので入手できなかったことは想像に難くない。そのため中国で模鋳した寛永通宝を使用していたのではないだろうか。古銭収集家収集家の間では「安南寛永」と呼ばれる寛永通宝がこれに当たるのだろう。



46　通常サイズの寛永通宝

102　133　小型の寛永通宝

版ずれ　48

46・48　保加町遺跡
102・103　上町遺跡

第 165 図　上町遺跡・保加町遺跡出土の模鋳銭の可能性のある寛永通宝

洪武通宝が出土するのは第２遺構面までで、19 世紀に入ると見られなくなる。これは、ヨーロッパ列強の中国進出により、貿易が衰退したためではないだろうか。同時に陶磁器にも中国・李朝陶磁は見られなくなる。

上町遺跡・保加町遺跡のこれらの特殊性は、これまでの柳川城下町での調査知見があればこそ知り得たものであり、今後の調査成果の蓄積によっては新たな見解も生まれるかもしれないが、江戸時代前期の九州北西部の沿岸部では筑前洪武が流通していたのかもしれない。

註

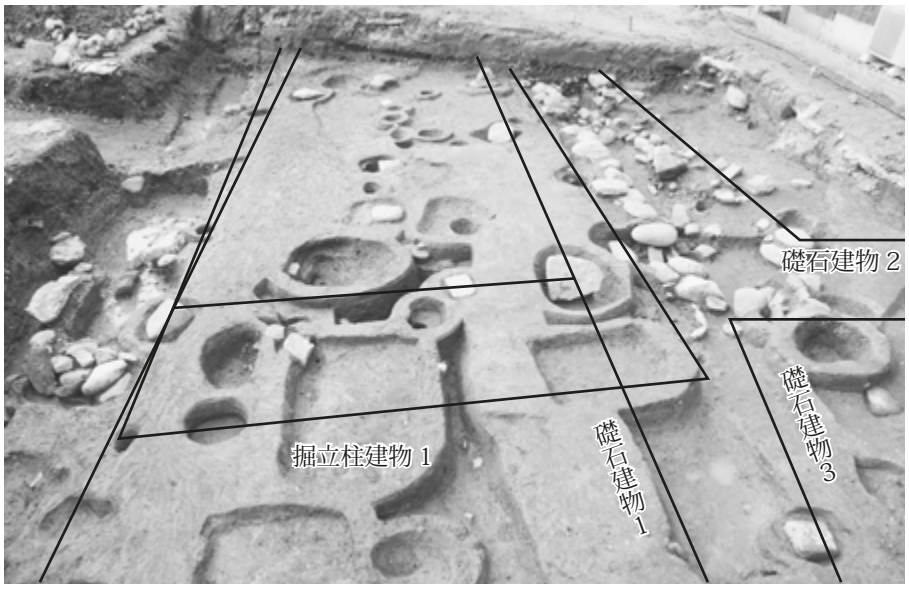
1　九州歴史資料館　2018 『上町遺跡』 福岡県文化財調査報告書第 264 集

2　２次調査２区４号土坑で頭骨が出土するが、骨の残りの良さからみて、墓であるならば他の部位も残っていなければならず、墓とは考えにくい。

図　版

1　保加町全景（南上空から）

2　１次調査第１遺構面全景（南から）



3　同上１～３号礎石建物跡（東から）

図版２

1　１次調査４・５号礎石建物跡（南から）

2　同上１号礎石建物跡礎石１（南から）

4　同上２号土坑（西から）

3　同上１号土坑（北から）

5　同上３号土坑（南から）

6　同上１号溝状遺構（東から）

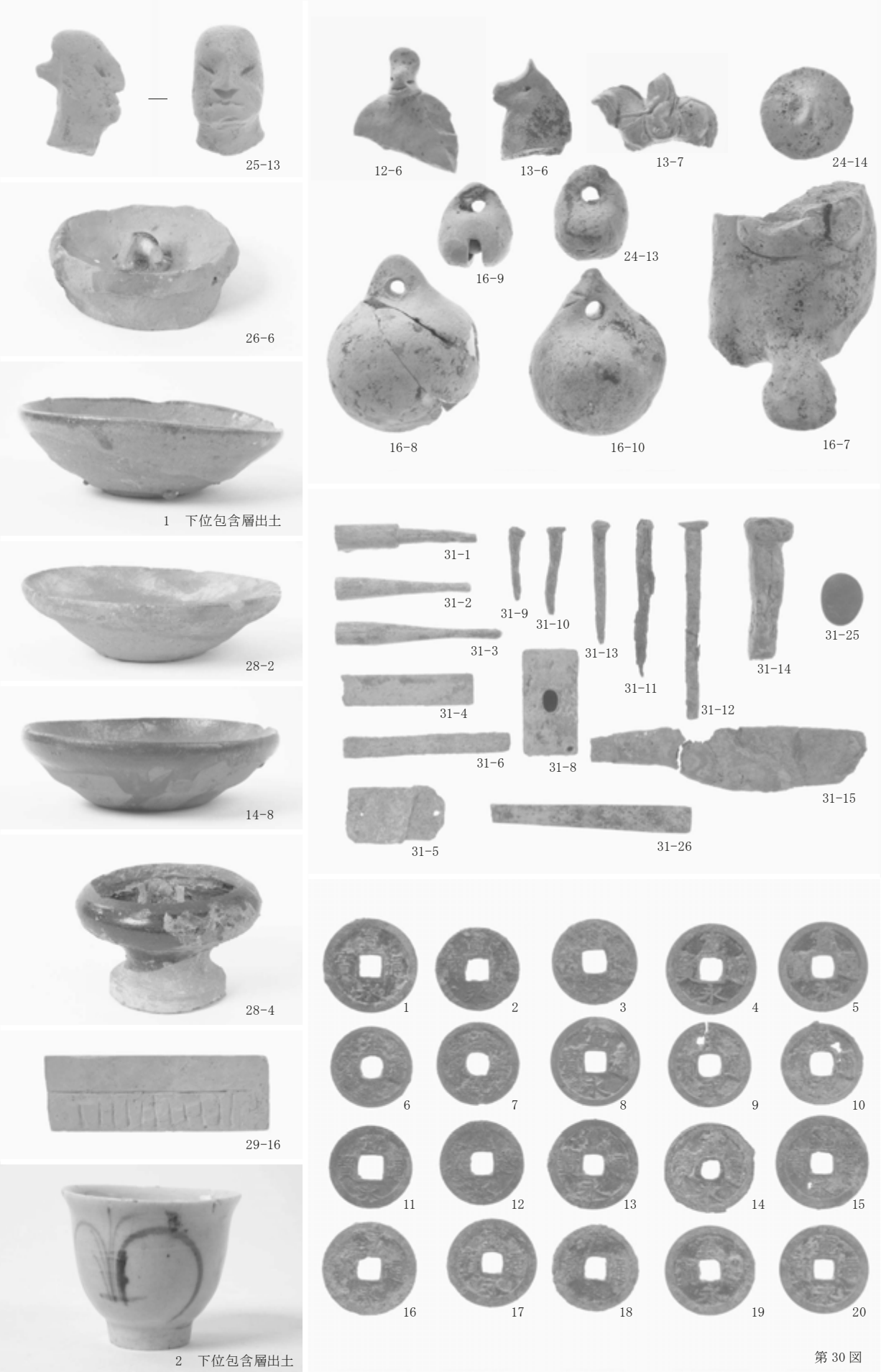
1　１次調査１号溝状遺構西端部（北東から）

2　同上西壁土層（東から）

3　同上２号溝状遺構東壁土層（西から）

4　１次調査１号埋甕（上面から）

5　保加町遺跡１次調査出土遺物１



保加町遺跡 1 次調査出土遺物 2

1　出土地不明

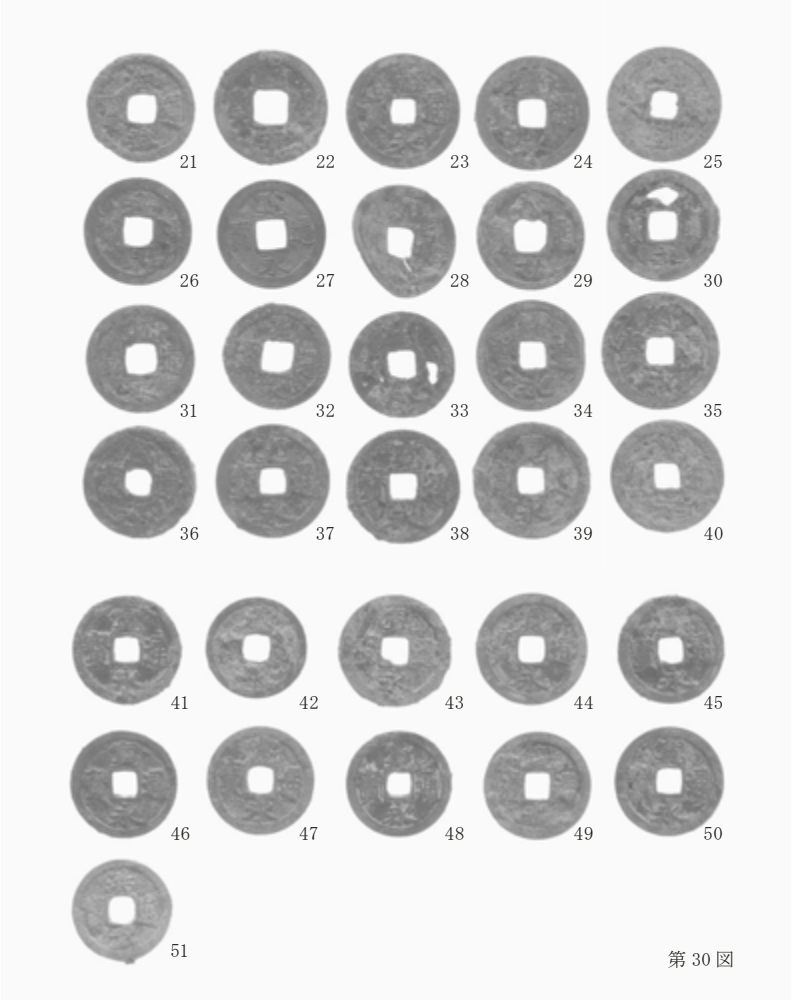
2　包含層出土

28-7

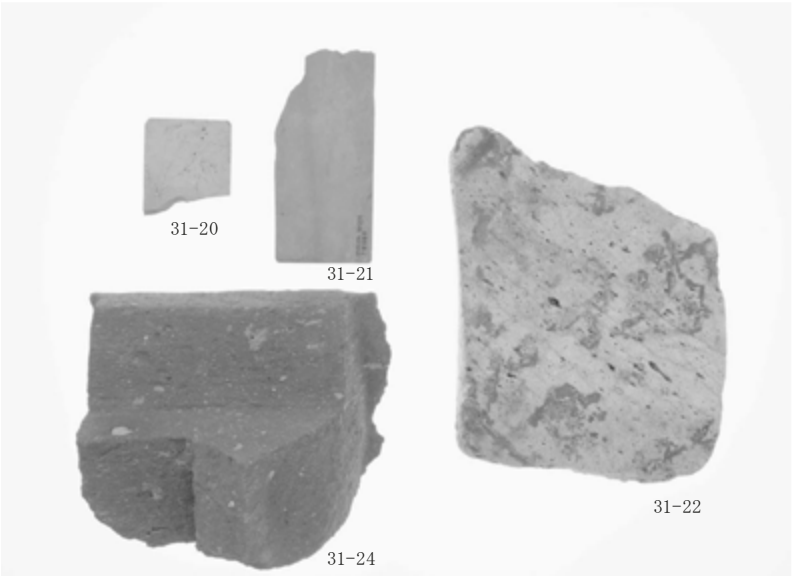
29-5

29-10

29-18

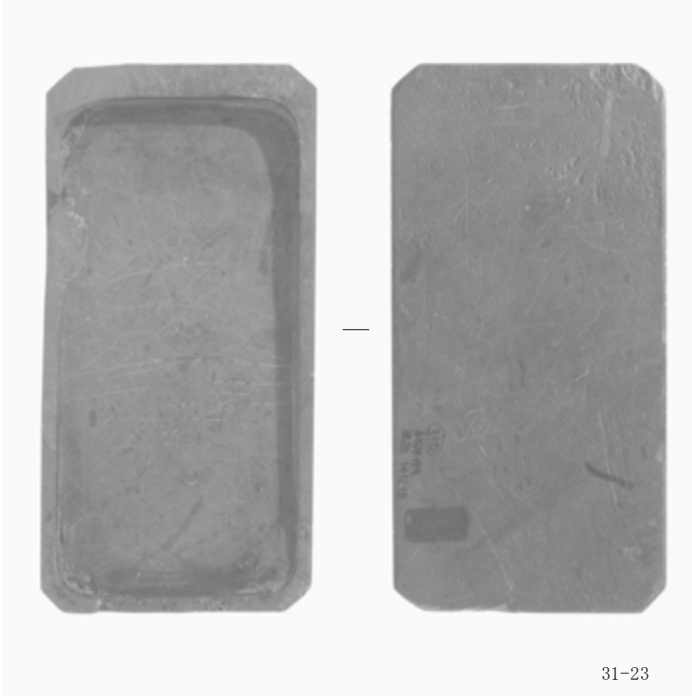


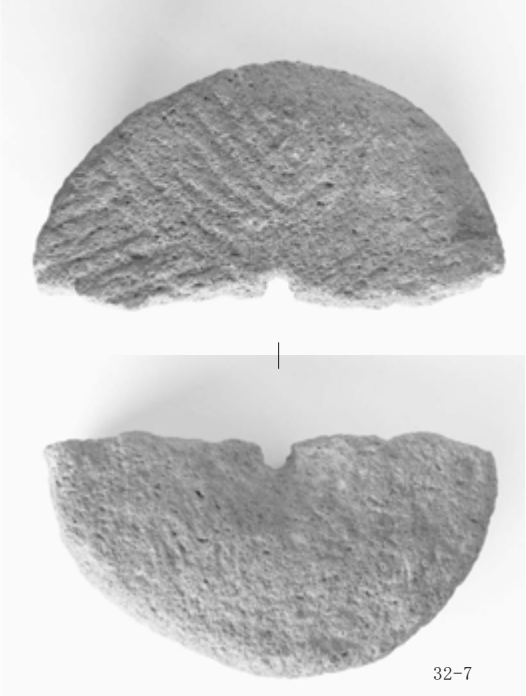
第 30 図

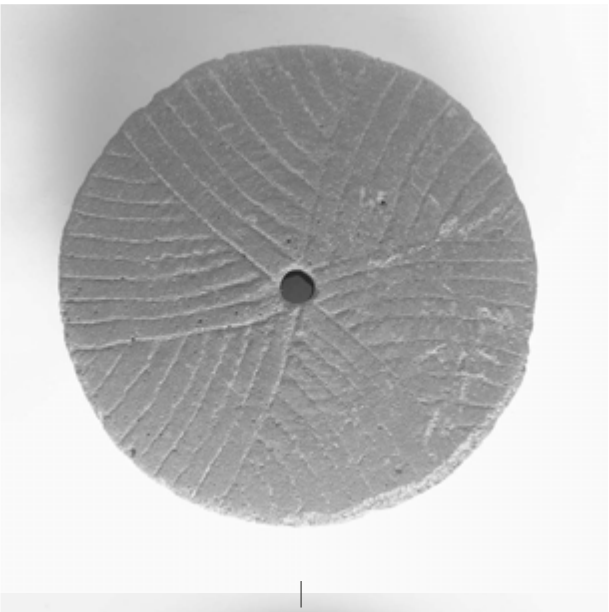


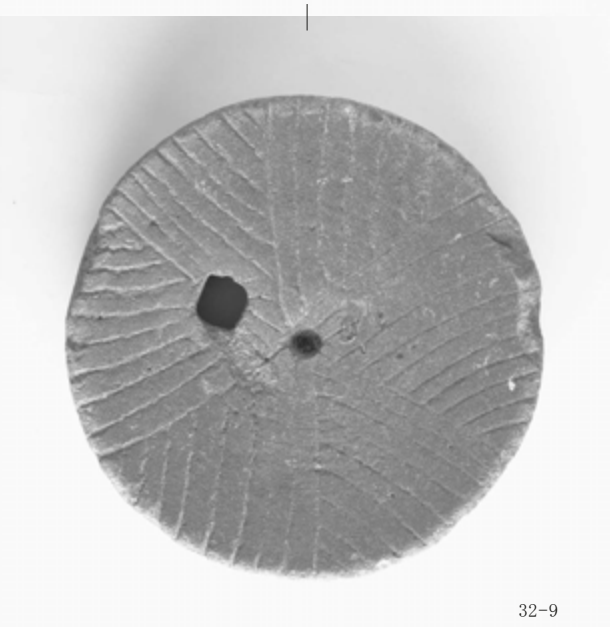
31-17

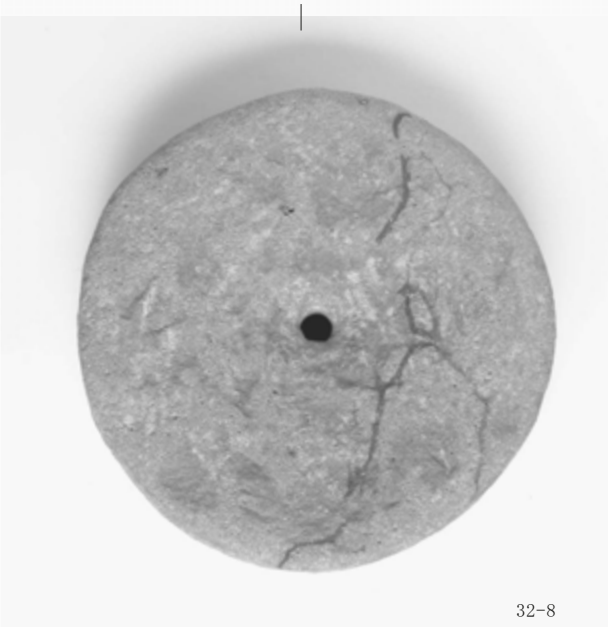
保加町遺跡 1 次調査出土遺物 3


31-23

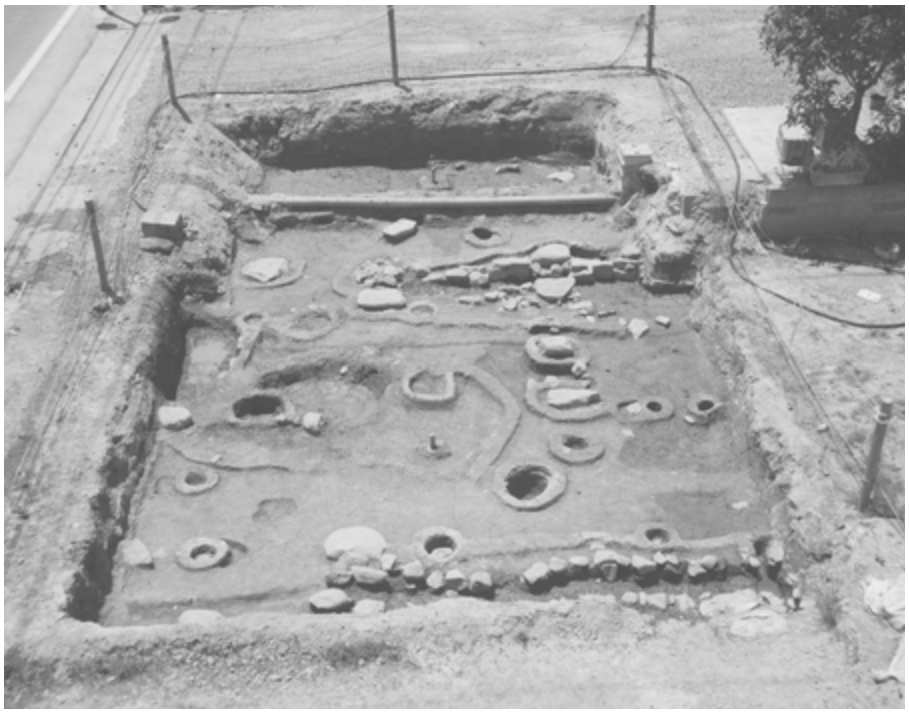

32-7



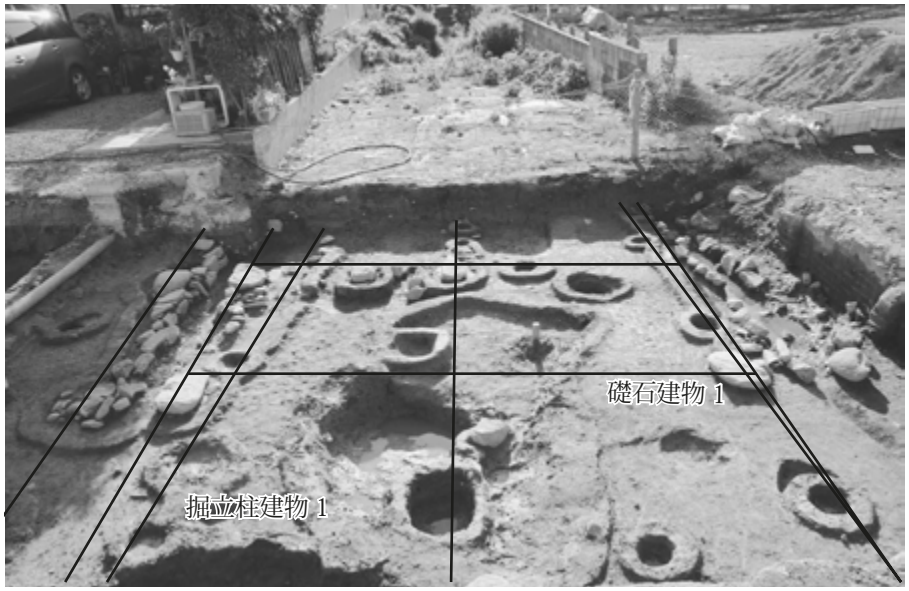

32-9


32-8

保加町遺跡 1 次調査出土遺物 4



1　２次調査１区全景（北から）



2　同上１・３号礎石建物跡、
　　１号掘立柱建物跡（東から）

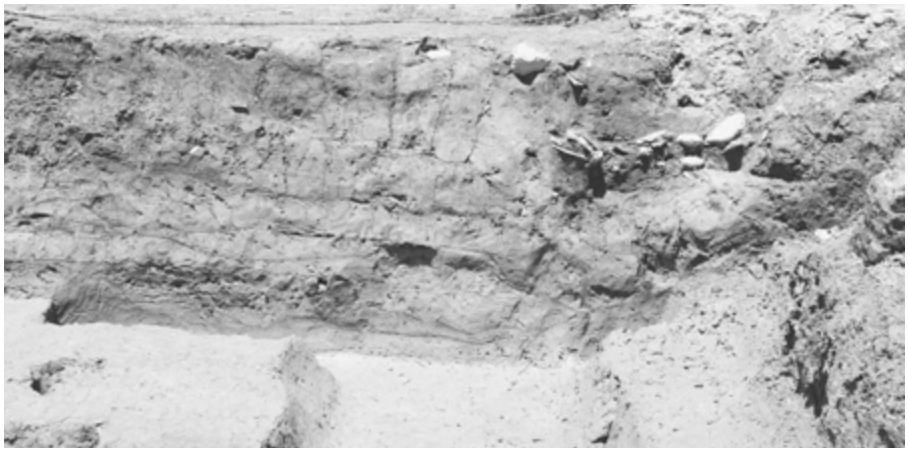
3　同上第２遺構面全景（北から）

図版８

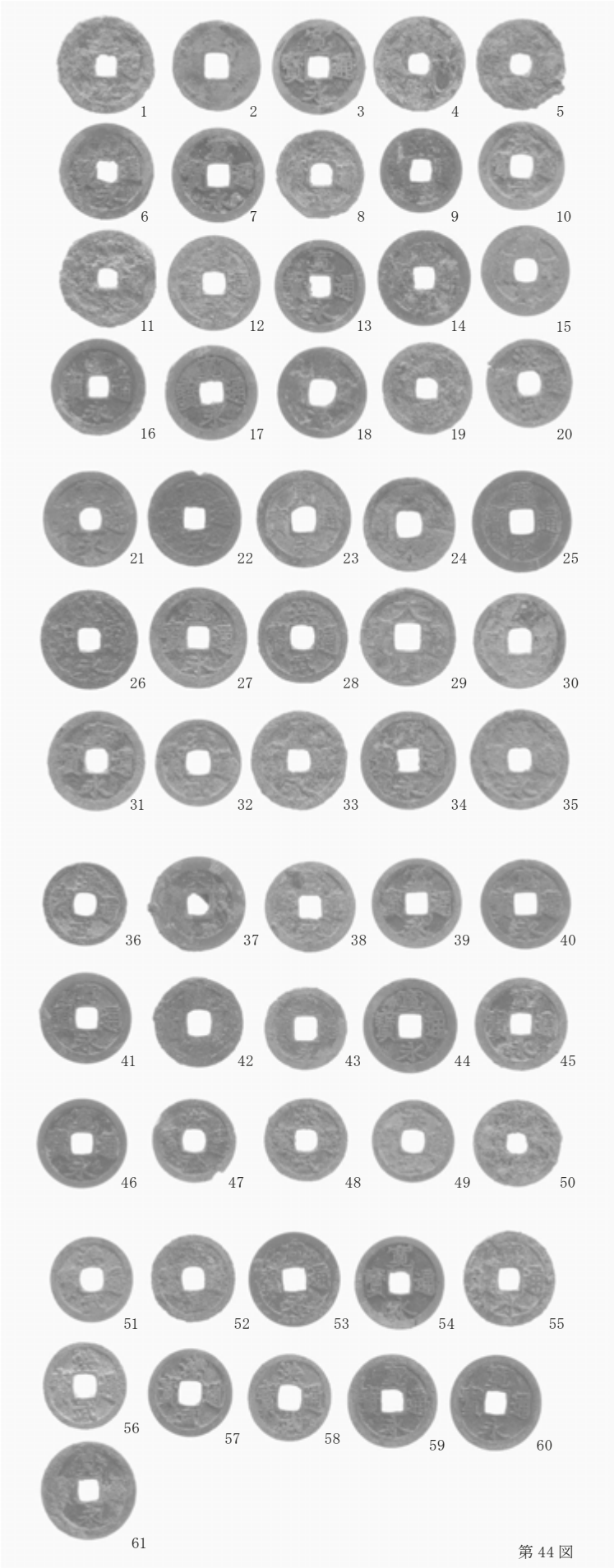
1　２次調査１区１号溝状遺構（東から）

2　同左南端トレンチ（東から）

3　同上２号掘立柱建物跡（東から）



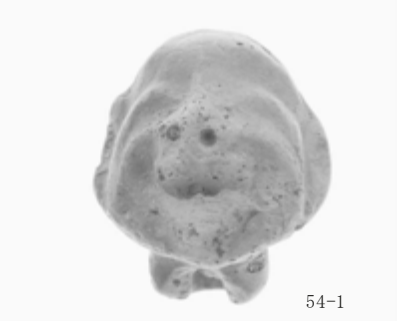
4　同上２・３号溝状遺構土層（東から）

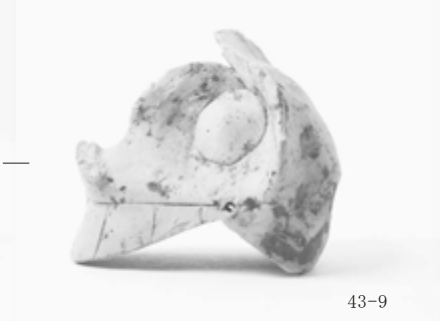


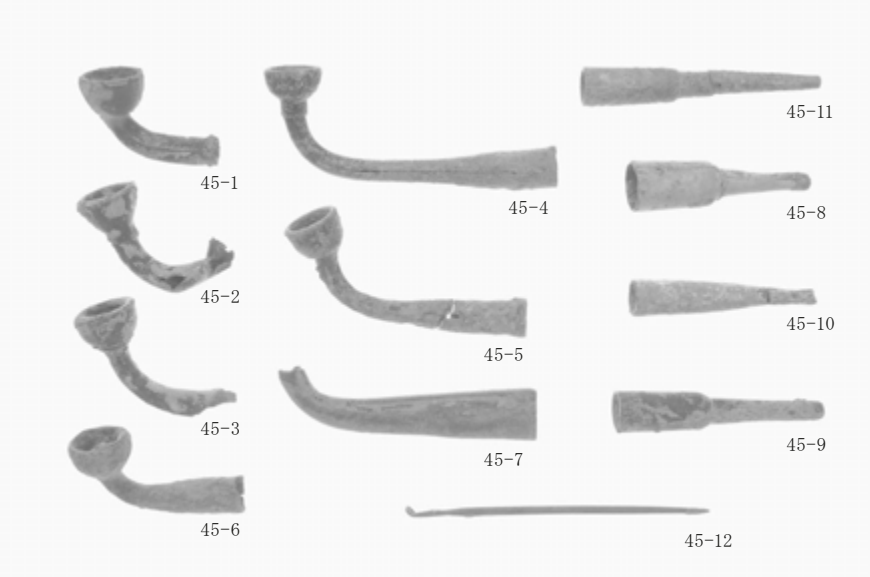
第 44 図

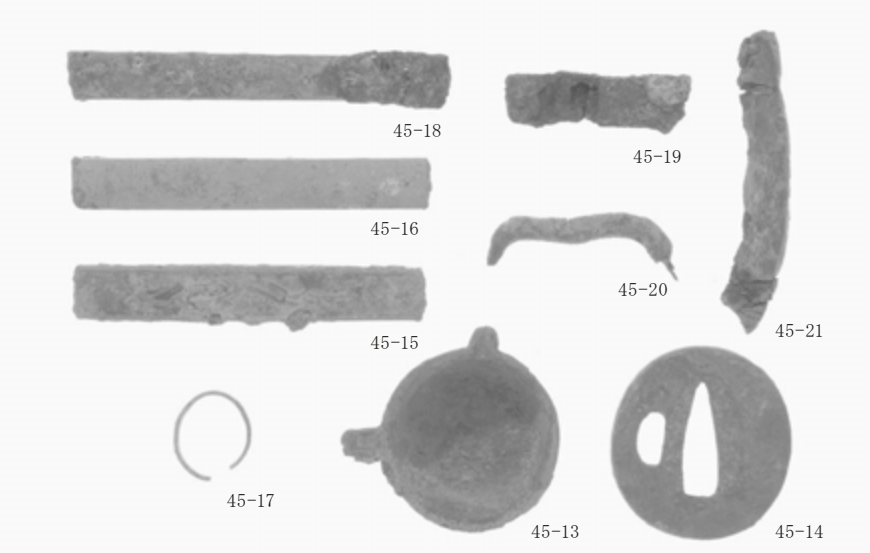
保加町遺跡２次調査１区出土遺物１

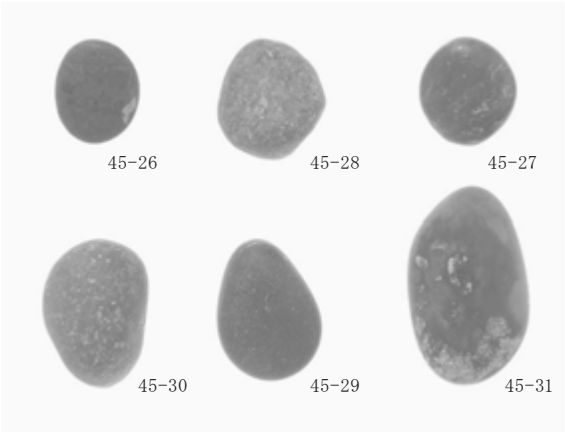
図版 10

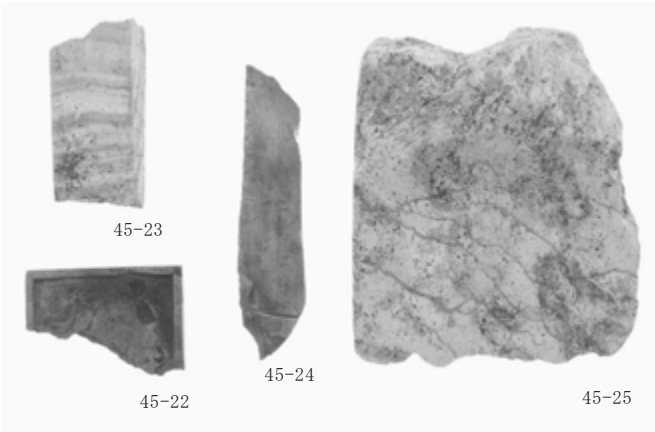






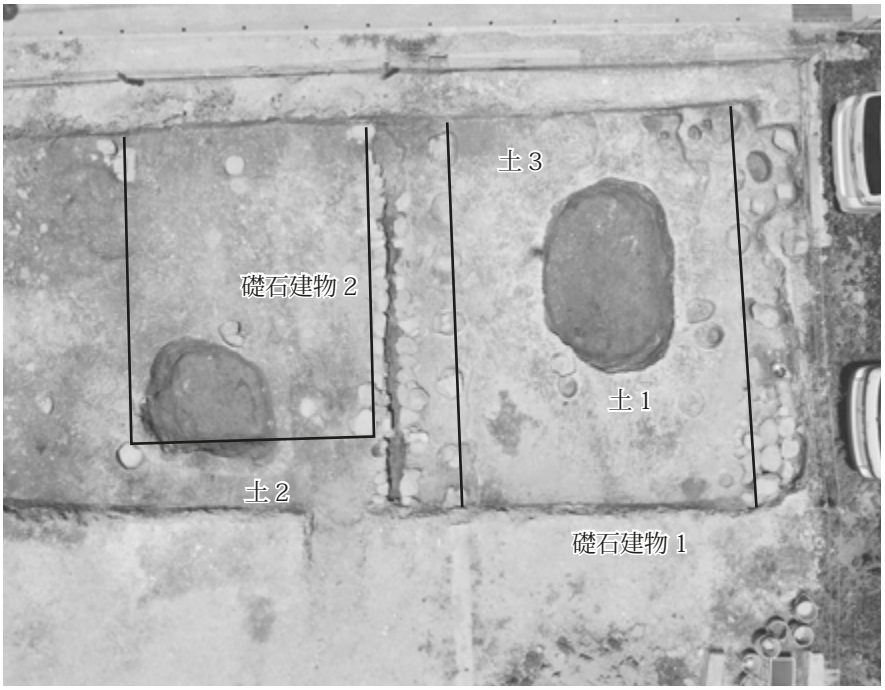






保加町遺跡２次調査１区出土遺物２

1　２次調査２区第１遺構面(上空から)



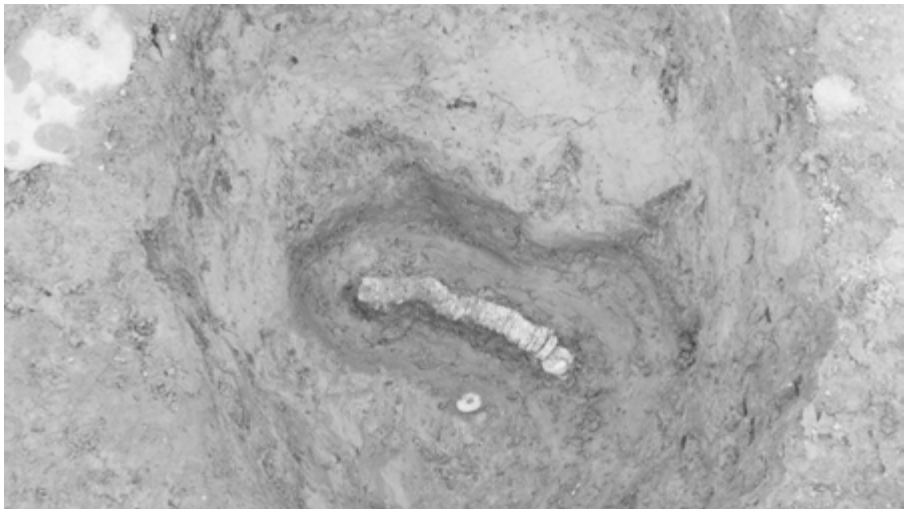
2　同上１・２号礎石建物跡、１～３号土坑（上空から）

3　同上１号礎石建物跡北側・２号溝状遺構・敷石遺構（東から）

図版 12

1　２次調査２区１号溝状遺構
（東から）

3　同上土層断面（東から）



2　同上礎石５下
出土銅銭（上から）